
空に星が輝く様に

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空に星が輝く様に

【Nコード】

N5145N

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

中学の時から陽太郎を想っていた星華。その為に彼が受ける高校にも何とか入学した。しかし陽太郎は高校で出会った少女月美に惹かれていき。高校生の純愛ものです。三角関係と友情がテーマです。

第一話 最初の出会いその一

空に星が輝く様に

第一話 最初の出会い

中学一年の時だった。一緒になったのが全てのはじまりだった。桜が咲き誇る校庭を窓に見ながら。彼女はその彼を見たのだった。少し癖の悪い黒髪に中性的な顔をしている。目は大きく黒目がちである。背は普通位で身体は均整が取れている。その彼が目に入ったのだ。

「ねえ、あいつって」

「あいつって？」

「誰のこと？」

「あの収まりの悪い髪の奴よ」

見ればその収まりの悪い髪の毛は量も多く太く硬い。かなり独特の髪を後ろは短くしていて前は伸ばしている。そうしたかなり独特な髪型である。

「あいつ誰かしら」

「ああ、あれ斉宮よ」

「斉宮？」

「そう、斉宮陽太郎」

彼女と同じ小学校の娘が説明した。

「あいつもこのクラスになったのね」

「知ってたの」

「塾同じだから」

それで知っているというのである。

「それだけねど」

「ふうん、塾同じだったの」

「どうしたのよ星華」

その彼女が逆に彼女に問うてきた。

「それで」

「それでって？」

「何で斉宮のことを聞くのよ」

そのことを問うのであった。

「いきなり」

「あつ、何となくね」

その小学校から同じだった友人に対して答えた。

「目に入ったから。あいつと一年同じクラスなのね」

「そうなるわね」

丁度始業式前である。それで同じクラスにならないということとはなかった。その陽太郎という男と一年同じクラスなのはもう決まっていた。

「それじゃあ」

「で、星華」

クラスメイトはまた彼女に問うてきたのだった。

「あんた中学校ではどうするの？」

「どうするって？」

「だから。部活どうするの？」

いきなり部活の話だった。

「それはどうするのよ」

「バスケかしらね」

首を傾げさせながらの言葉だった。茶色の長めの髪を後ろでポニーテールにしている。顔立ちにはつきりとしたものでまだ幼さが残るが目の光もすっかりとしていて口元も確かである。背は女の子の中では高い方で身体つきも胸はないがしっかりとしている。そうした女の子だ。

「それしよつかなって思ってるけれど」

「小学校の時から同じね」

「そうね。同じね」

星華は彼女の言葉に微笑んで答えた。

「それじゃあ」

「そうよね。同じね」

また微笑んでの言葉だった。

「それだと」

「今度もレギュラーだといいわね」

「それは絶対に手に入れるわよ」

入る前から既に息込んでいる。

「一年の時からね」

「相変わらず元気いいわね」

「女は度胸よ」

今度はにこりと笑つての言葉だった。

「それだからね」

「よし、それなら頑張りなさいよ」

「ええ」

そんな話をしてであった。星華は中学生生活をはじめのだった。そして始業式の後だ。その陽太郎の席の前に来て言うのだった。

第一話 最初の出会いその二

「あのさ」

「んっ？」

「あんた斉宮陽太郎っていうのよね」

「ああ、そうだけれど」

席に座っている陽太郎は自分の前に立って来た星華のその問いに頷いた。

「何で俺の名前知ってた？」

「教室の入り口の名簿に書いてあったじゃない」

笑顔で彼に言ってみせた。

「それで名札にも斉宮って書いてたらね」

「わかったったつてのか」

「そうよ。それで私はね」

「何ていうんだよ」

「佐藤星華よ」

ここではにこりと笑った笑みになった。

「宜しくね」

「佐藤っていうのか」

「佐藤って呼んでね」

「ああ、じゃあ俺は」

「斉宮でいいわよね」

こう言ってきたのだった。

「その呼び方でいいわよね」

「わかったよ。それだったら」

「呼んでみて」

陽太郎を見て笑顔での言葉である。

「実際に」

「えっ、今かよ」

「そうよ、今よ」

言葉も明るいものになっている。

「呼んでみてよ」

「今か」

「いいからさ」

自分の方から急かす。そうせずにはいられなかった。

「名前ね」

「じゃあ。佐藤」

陽太郎もこう呼んでみた。すると星華はそれを聞いて満足した顔で笑うのだった。

「いいわ」

「それでいいのかよ」

「それじゃああらためて宜しくね」

星華はまた陽太郎に対して話したのだった。

「これから一年ね」

「ああ。それじゃあな」

これが二人の出会いだった。そしてそれは一年で終わりではなかった。

二年の時も三年の時も同じクラスだった。そして受験の時だ。

「ねえ斉宮」

星華は何気なくを装って今帰ろうとするよう太郎に声をかけてきた。

「聞きたいことあるんだけど」

「聞きたいことって何だよ」

彼女に顔を向けて問うのだった。

「それで」

「あんた何処受けるの？」

「こう問うたのである。」

「高校何処なのよ」

「八条高校受けるつもりだけれどさ」

「八条高校なの」

「ああ、あそこな」

そこだというのである。

「そこに行きたいんだけどな」

「何でなの？」

「いや、レベルも合ってるしさ」

最初の問題は成績だという。まずはそこからだというのだ。

「それにさ」

「それに？」

「あの学校で設備何でもあつて凄く賑やかじゃないか」

「そうよね。八条高校はね」

星華は何気なくを装ってそれで彼の言葉に頷いた。頷きながら玄関に入っていく。玄関の向こうはもう夕陽が落ちようとしていて世界が赤くなっていた。

「設備が充実していて有名だからね」

「だからさ」

陽太郎は自分の靴箱を開けながら微笑んで星華に話している。

「それでそこにな」

「受けるのね」

「勿論滑り止めも受けるけれどさ」

それも忘れないというのだった。この辺りは常識である。

第一話 最初の出会いその三

「それでだけれど」

「わかったわ」

「それで佐藤」

今度は陽太郎から星華に問うた。

「御前はどうするんだよ」

「私？」

「御前だつて高校受けるだろ？」

こつ彼女に問うのだった。

「やっぱりな」

「ええ、そうだけれど」

その通りだと答える星華だった。彼女にしてもそれは当然のことだ。表情を無職のものにさせてそのうえで答えるのだった。

「それがどうかしたの？」

「それで何処受けるんだ？」

「そうね」

首を少し捻つての返答だった。ただし本音は隠している。

「南海商業にしようかしら」

「南海商業にするのか」

「まだはつきりと決めてないけれどね」

本音は隠したままだ。

「それでもね」

「いいんじゃないのか、それで」

陽太郎は彼女のその言葉を受けて微笑んで応えた。

「あそこ女子バスケ強いしな」

「八条高校もだけれどね」

「だよな。どつちもバスケ強いよな」

「どつちもバスケできるわよね」

つい本音を漏らしてしまっただがそれは陽太郎の気付くものではなかった。そうしてそのうえで星華の言葉を聞いていくのだった。

「それもかなり」

「御前レギュラーだったしな、二年から」

「本当は一年でレギュラーになるつもりだったのよ」

入学式の時に行った言葉そのままだった。

「けれどね。それはね」

「ははは、流石に一年からは無理だろ」

陽太郎は靴を履きながら笑って述べた。上靴はその間に下駄箱に入れていた。

「幾ら何でも」

「それが残念だったわ」

「けれど二年からだっただよな」

「ええ」

それは確かだった。星華は二年でレギュラーになったのである。

「それはね」

「じゃあいいじゃないか。それじゃあな」

「それじゃあ？」

「御前高校でもバスケットするんだな」

彼女のその顔を見て微笑みながらの言葉だった。

「やっぱり」

「そのつもりよ。バスケットはいいわよ」

「そんなにいいの？」

「あんな剣道部だからね」

「ああ。俺はそっちの方がいいからな」

彼も運動部だが部活はそちらだった。それぞれ違う部活だったのである。

「武道の方がな」

「それじゃあ高校でもなのね」

「そのつもりだけれどな」

「いいんじゃない？じゃあね」

「ああ、またな」

陽太郎は微笑んで星華に別れを告げて玄関を後にした。これで二人の話は終わった。しかし星華はだ。彼の言葉を聞いて静かに言うのだった。

「そうなんだ。八条高校なんだ」

そしてであった。家に帰るとだ。早速猛勉強に入るのだった。

それも一日や二日ではない。毎日それこそ夜明け近くまで勉強をした。それを見て家族も驚いていた。

「南海商業ってそんなにレベルの高い高校だったか？」

「いいえ」

星華のい母親が父親に述べた。

「全然よ」

「そうだよな。それで何で星華はあんなに勉強するんだ？」

「何か志望校変えるらしいわよ」

「変えるのか」

「何でもね」

こつ話すのだった。

「そつらしいわよ」

「また何でなんだ？」

「さあ。理由はわからないけれど」

それは母親にもわからないことだった。自分の夫に対して首を傾げながら話すのだった。

第一話 最初の出会いその四

「それで高校はね」

「その高校は何処なんだ？」

「八条高校らしいわ」

「えっ、嘘だろ」

父はそれを聞いて驚きの声を出してしまった。

「あいつは八条高校か」

「そうらしいわ」

「嘘だろ、それ」

それをまた言うのだった。

「あいつの頭で八条高校って」

「信じられないのね」

「当たり前だ」

はつきり言い切っていた。

「あいつの頭なんてな」

「私達似だからね」

「黄華だけあれだけだな」

「あの娘はお姉ちゃんに似たじゃない」

母の言葉である。

「私のね」

「胸もな」

父はにこりともせず述べた。

「姉の方が大きいってのはいいことか？」

「胸の話は止めてよね」

母はその話にはむっとして返した。

「その話はね」

「ああ、そうだったな。悪かったな」

「そうよ。まあとにかくだけれどね」

「あいつが八条受けるのか」

「八条高校には商業科とか工業科とか一杯あるけれどね」

学部も色々ある学校なのである。要するにマンモス校なのだ。

「それである娘が行くのはね」

「商業か？ やっぱり」

「普通科らしいわ」

そこだというのである。

「そこらしいわよ」

「そりやもつと難しいだろ」

父の言葉は懐疑的なままであった。

「あいつが受かるのかよ」

「さあ。無理じゃないの？」

母の言葉も素っ気に

「やっぱりね」

「そうだろ。滑り止めは受けさせるんだろっな」

「当たり前でしょ。それを受けないでどうするっていうのよ」

「よし、それならいいんだけれどな」

妻の今の言葉を聞いてとりあえずは納得した顔で頷く彼だった。

「それでな」

「そうでしょ。とにかくね」

「ああ、八条高校か」

「黄華もそこ受けるって言ってるし」

もう一人女の子の名前が出て来ていた。

「姉妹揃って高校も同じっていうのもいいじゃない」

「そういうものか。まあ話は合格してからだな」

「ふふふ、そうね」

両親はそんな感じだった。受かるとは思っていなかった。だが星華は本気だった。連日連夜ほぼ徹夜で勉強してだ。そうして受験に臨んでいたのだ。

そんな彼女は周囲からも見られていた。周りも日に日にやつれて

いつている彼女を見て気遣わずにはいられなかった。声をかける者も多かった。

「ちよつと、幾ら何でも」

「勉強し過ぎじゃないの？」

「身体壊すわよ」

「大丈夫よ」

しかし彼女は微笑んで言うのだった。

「身体の方はね」

「いや、大丈夫じゃないし」

「だって目の下にクマ出来てるし」

「痩せたし」

「だから大丈夫よ」

しかし彼女はこう言うだけだった。

「全然ね。平気よ」

「平気って大丈夫なの？」

「身体の方は」

「それで受験の時倒れたら」

「何があってもそれはないわ」

星華の言葉は本気だった。そこには明らかに執念すらあった。

第一話 最初の出会いその五

そしてだ。その執念が籠った言葉で言うのであった。

「絶対に受かるからね」

「その志望校になのね」

「受かるつもりなのね」

「ええ、受かるわ」

あくまでそうするとうのだった。

「何があってもね。受かるから」

「わかったわよ。そこまで言うのならいいわ」

「何処受験するのかわからないけれど」

「それは言わないし」

誰にも言わないのだった。絶対に。それは最後の最後まで明かすことはしないと心に決めていたのだ。彼女にも考えあつてだ。

「じゃあ頑張つてね」

「それでその志望校ね」

「受かりなさいよ」

「受かるわよ、いえ」

ここで言葉を訂正させた。そして言うのは。

「受かってみせるわ」

「よし、じゃあね」

「吉報待ってるからね」

「是非ね」

「待つててよ。何があっても」

その気力だけで立っている面持ちで見るとのだった。

そこには彼がいた。しかし星華のその目には気付いていなかった。ただ自分の席で笑っている、それだけであった。しかし彼女は見ていた。

「高校だって。絶対に」

そうして尚も必死に受験勉強を続けるのだった。

休み時間も昼休みもなく家に帰れば食事と風呂以外は全部勉強だった。殆ど寝ない。家族も心配するが彼女は必死であった。

両親もだ。そんな彼女を心配しだしていた。父もちゃぶ台のところで母に言う。

「あいつ、どうなんだよ」

「今日もよ」

「今日もか」

「そうなのよ。自分の部屋に入ったつきりね」

「凄いな」

父はその話を聞いて思わず唖った。

「俺そんなにしなかったぞ」

「つてあんたは別でしょ」

「御前もな」

「高校は何処でもよかったから」

「俺もな」

二人にとってはそういうものだったらしい。

「だから普通に商業高校に入ったんだよ」

「そうそう、私もね」

「まさかそこで御前と会うなんてな」

「ふふふ、奇遇だったわね」

「全くだ」

二人はついついのろけ話もした。

「それでも。あいつは絶対にそこか」

「八条高校ね」

家族だけが知っている話だった。その志望校は。

「とにかく絶対つてね」

「合格するつもりか」

「みたいね」

「本気なんだな」

父はあらためて思ったのだった。

「あいつは」

「それでどうするの?」

「どうするって?」

「だから。星華の為によ」

このことを夫に問うたのだ。

「あんたどうするの?」

「そんなの決まってるだろうがよ」

彼はこう妻に返した。

「子供が頑張ってるって親はな」

「親は?」

「力になる、それだろうが」

「じゃあまず」

「おい、明日からな」

早速妻に対して言う。

「栄養のある食い物どんどん作れ」

「食べ物ね」

「俺は願掛けするからな」

そして彼はそれだというのだ。

第一話 最初の出会いその六

「いいな、毎朝毎晩するからな」

「お百度ね」

「百回でも二百回でもやってやらあ」

彼も本気になった。当然母もだ。娘のその気持ちがわかったからだ。

「それであいつに合格してもらおうからな」

「ええ、それじゃあね」

「決まりだ」

こう話してだった。全ては決まった。とにかく頑張る星華だった。そしてこの頃。八林中学校では。ここでも受験の話になっていた。

「それで御前何処受験するんだ？」

「俺か？まあ八森にしようか」

「御前そこか」

「ああ、そこにな」

こんな話をする中でだ。男連中もあれこれと話していた、

「なあ狭山」

「御前何処受けるんだ？」

「俺か？俺は八条受けるつもりだぜ」

背が高く顔は細長い。瞳孔は小さめだ、紙は薄茶色で立っている。その彼が自分の席に座りながら明るい顔で皆に言っただった。

「そこにな」

「ああ、御前成績いいしな」

「それで八条受けるんだな」

「で、通りそうか？」

「って通ってみせるんだよ」

彼は笑いながら話すのだった。

「っていうか姉ちゃんかな」

「御前の姉ちゃんがかよ」
「何て言ってるんだよ」
「水樹、絶対に八条に行けって煩いんだよ」
「姉のことを話に出すのだった。」
「うちの姉ちゃんも八条だろ？」
「八条大学の大学院か？」
「そこにいるんだよな」
「ああ。それで何か結構詳しいから入れってな」
「そうだというのだ。」
「受験には一切力になれないけれどなって」
「つまり裏口はなしか」
「そうだろうな」
「流石にそれはないのだという。」
「それでも八条いいところだから受けろってな」
「じゃあいいんじゃない？それで」
「八条で」
「今それで俺も勉強勉強でな」
「たまりかねた口調での言葉だった。」
「大変なんだよ」
「それは俺も一緒だよ」
「俺もだよ」
「ってというか全員だな」
「受験生にとつて勉強は避けられない。だからこれも当然だった。」
「やれやれだけれどな」
「まあ御前も頑張れよ」
「そういうことだな」
「ああ、頑張ってるさ」
「彼は明るい声で応えた。」
「あと八条受ける奴は」
「私よ」

茶色の髪の毛を左右でリングにした女子が一人ここで出て来た。目が大きくはつきりとした顔をしている。小柄だがスタイルは中々いい。

「私も受けるわよ」

「げっ、津島青美」

狭山は彼女の名前を言ってぎくりとした顔になった。

「御前も受けるの？」

「そうよ。成績もそのレベルだし」

そのリングの女津島もこう彼に返す。

「よかったじゃない。高校でもあんたと同じよ」

「幼稚園からな」

狭山は少しうんざりとした顔で述べた。

第一話 最初の出会いその七

「つたくよ、また御前とかよ」

「嫌なの？」

「中学なんて三年一緒のクラスだしよ」

「そのおかげで色々いい目見てるじゃない」

津島はこう彼に返した。

「そうでしょ、実際」

「まあお菓子は結構貰ったな」

こう返しはする狭山だった。

「それはな」

「あたしの家ケーキ屋だからね」

「ケーキなあ」

狭山はここで腕を組んで述べた。

「不思議と食い飽きないけれどな」

「飽きさせないわよ」

「そりやどうも」

「高校に入っても私の家のケーキ食べたいでしょ」

「まあな」

このことには異論のない彼だった。

「じゃあ高校もか」

「宜しくね」

「やれやれだな。何かよ」

狭山は津島の言葉を聞いてあらためてぼやいた。

「高校でもこんなのかよ」

「いいじゃねえかよ、幼馴染みの彼女と一緒にでな」

「高校でもな」

「楽しくやれよ」

「ああ、わかったよ」

「ぼやきながらも返す。

「それじゃあな」

「私とあんたは何があっても離れないのよ」

津島はにこにこしながら話していた。

「わかったわね」

「もっと可愛い娘だったらなあ」

「何言ってるのよ、こんな可愛い娘いないわよ」

しかし津島の方が一枚上手だった。

「はつきり言っけれど」

「自分で言ったら世話ねえよ」

「とにかくよ。あんたが今することはね」

「高校に受かることだよな」

「そう、それよ」

まさにそれだというのである。言葉には絶対の響きすらあった。

「わかったわね。合格しなさいよ」

「そういう御前もな」

右手で頬杖をつきながらの言葉だった。

「絶対に受かれよ」

「勿論よ。さて」

にこにこしながら言う津島であった。

「楽しい受験勉強頑張りましょう」

「やれやれだな」

狭山はそんな津島の言葉に呟く。そんな二人だった。

そしてだ。近鉄中学ではだ。椎名愛海が赤瀬炎男と話をしていた。

椎名は小柄だ。身長は一四五程しかない。肩のところ揃えた髪に白い肌、それと落ちて着いた雰囲気目の目をしている。中学生というよりは下手をすれば小学生に見られてしまう、そんな女の子だ。

赤瀬はその彼女とは正反対にだ。一九〇近くある。髪型はスポーツ刈りで顔つきは大人しい雰囲気だ。だがその身体はまさに小山だ。二人がだ。クラスで二人だけで机に向かいながら話しているの

だった。

「そう、赤瀬もなの」

「うん」

赤瀬は椎名の言葉に頷いていた。

「八条高校受ける」

「同じね」

椎名はそれを聞いてこう述べた。

「それなら」

「じゃあ椎名も」

「私も受ける」

椎名は感情がこれと違って見られない口調で答えた。

第一話 最初の出会いその八

「成績は丁度いいから」

「僕も」

こう答えた赤瀬だった。

「成績は丁度そのレベルだから」

「同じなのね」

「同じだね」

今度は二人で同じことを確認していた。

「本当に」

「若しかしたら」

ここで椎名はふと言ったのだった。

「またクラス委員かも」

「そうかも知れないね」

赤瀬もその可能性を否定しなかった。

「受かったらの話だけれど」

「受かるう」

相変わらず感情は見られないがこう述べた椎名だった。

「受けるからには」

「そうだね。受けるからには」

「受からないと駄目だから」

だからだという椎名だった。

「受かりましよう」

「うん」

「それで赤瀬は」

椎名は彼にさらに問うてきた。

「これからも部活するの」

「する」

静かに答える彼だった。

「柔道をする」
「そう、やっぱり」
「柔道は好きだから」
だからするというのがのである。
「これからも続ける」
「いいと思うわ。ただ」
「ただ？」
「怪我には気をつけて」
椎名はこう彼に言うのだった。
「柔道は怪我が多いから」
「それはわかってるから。椎名も」
「私も？」
「塾でも友達いたよね」
椎名の通っている塾の友人についての話だった。
「この前話していた」
「つきぴーのこと？」
「月美ちゃんだったよね」
赤瀬は彼女のその友人の名前を知っていた。だからこそここで出
せたのだ。
「確か」
「ええ、そうよ」
そして椎名もその問いに静かに頷いて答えた。
「西堀月美っていうの」
「どんな娘だったっけ」
「とてもいい娘よ」
あまり具体的ではないが人について話すにあたってはオーソドッ
クスではあった。
「綺麗だし優しいし」
「そうなんだ」
「居合いをやってるって聞いてるわ」

そしてさらにこんなことも話すのだった。

「腕はどうか知らないけれど」

「そう。居合いを」

「八条高校には柔道部も居合部もあるから」

「剣道部だけじゃなくて」

「あの学校は色々な部活があるの」

だからだというのだ。

「だから居合部も」

「成程」

「一緒に受かったら会えるわ」

こう赤瀬に話した。

「つきぴーにね」

「わかったよ。それじゃあ」

「受かりましょう」

ここではまた言った椎名だった。

「是非ね」

「うん、じゃあ」

そんなやり取りをしながらクラスの仕事をしていたのだった。そして椎名はその塾の帰りにだ。夜道で一人の女の子と一緒にだった。

第一話 最初の出会いその九

「ねえ」

「何？」

「つきぴーも受けるのよね」

「こうその隣にいる娘に問うのだった。」

「八条高校」

「ええ」

返事はすぐに返って来た。

「そのつもりだけれど」

「そうなのね」

「確か一緒よね」

彼女の方も椎名に言ってきた。黒い綺麗なロングヘアの小柄な女の子だ。目は垂れ目であるがかなり大きくはつきりとした目である。顔立ちはかなり整っていてまだ幼さが残る。だが表情は弱々しげだ。そして胸がかなり大きい。服の上からでもわかる。その彼女が椎名に言うのだ。

「愛ちゃんも」

「うん、一緒」

その通りだと答える椎名だった。

「つきぴーとね」

「そうだったわよね。それにしても」

「どうしたの？」

「若し同じ八条高校になったら」

彼女の方から言うのだった。

「また一緒に仲良くしようね」

「勿論」

今の質問は椎名にとっては答えは一つしかないものだった。

「つきぴーとはずっと友達だよ」

「有り難う」

「御礼はいいから」

そしてそれはいいというのだ。

「それにしても」

「それにしても？」

「私をつきぴーって言うのは愛ちゃんだけなのよ」

「そうだったの」

「今までね」

こっぴど前置きしてからの言葉だった。

「西堀月美っていうじゃない」

「ええ」

それが彼女の名前だというのだ。そのロングヘアの女の子のだ。見れば眉はかなり細く流麗であるが表情と同じで儂げな感じだ。

「それでいつも西堀って呼ばれるだけだったの」

「名前では？」

「お父さんとお母さんだけ」

両親だけだというのだ。

「名前を呼んでくれるのは」

「そうなの」

「仇名は今までなかったから」

「つきぴーって仇名も？」

「なかったわ」

実際にそうだというのだ。月美は静かに話を続けていく。

「愛ちゃんが最初のの」

「私が最初」

「そしてお友達になってくれたのも」

「私をはじめてなの」

「うん、愛ちゃんが声をかけてくれて嬉しかった」

こっぴど椎名に言うのだ。

「私ずっと」

「そういえばつきぴーも」

今度は椎名からの言葉だった。月美に顔を向ける。見れば月美はその整った顔を少し俯けさせてだ。そのうえで話をしていた。

「私と話す時は」

「お話する時は？」

「敬語じゃない」

このことを言ったのだ。

「私の時だけ敬語じゃないね」

「だって愛ちゃんの方から言ってくれたから」

「敬語じゃなくていいって」

「ええ、だからなの」

「そうだったね」

そう言われてだった。椎名の顔が微かだが笑ったものになった。

第一話 最初の出会いその十

「一年の時に会ってそれから」

「そうだったね。愛ちゃんと」

「だから一緒に合格しよう」

椎名はまた月美に話した。

「一緒にね」

「うん、一緒に」

「それで高校に入ったら」

その八条高校にというのだ。話はここまで進んでいた。

「頑張ったらいいよ」

「勉強のこと？」

「それだけじゃなくて」

「じゃあ部活も」

「ううん、別のことも」

それもだというのだ。

「お友達も増やすといいよ」

「愛ちゃん以外のお友達も」

「つきぴーの性格だと難しいかもしれないけれど」

彼女のその引っ込み思案の性格をわかっての言葉だ。だが引っ込み思案という言葉はあえて出さずにそのうえで話すのだった。

「それでも」

「それでもなの」

「女の子だけじゃなくて男の子のもね」

「男の子って」

「わかるわよね」

また微かに微笑んでいた。

「男の子のお友達」

「恋人……」

「つきぴーならきつといい恋人できるから」

「こつも言つのだつた。」

「だから頑張つて」

「ええ」

月美は椎名のその言葉にこくりと頷いた。

「どうなるかわからないけれど」

「誰だつて最初はわからないから」

「最初は」

「少しづつわかってくるから」

静かに話すのあつた。

「だからね」

「だから」

「少しづつわかってくるから。だから頑張つてね」

「ええ」

「高校になつたらがんばつてね」

こつ話すのだつた。二人でだ。

「いいわね」

「うん、頑張つてみる」

小さくこくりと頷く月美だつた。

「本当に」

「一緒に受かろう」

椎名のこの考えは変わらなかつた。

「八条高校にね」

「ええ。じゃあ」

こんな話をしながら駅まで帰る二人だつた。冬の夜は寒いが二人の心はそうではなかつた。温かいままで帰路についていたのだ。

星華の猛勉強は続いていた。それはこの日もだつた。

彼女が自分の部屋で勉強していると。扉の向こうから声がしてき
た。

「お姉」

中学生位の女の子の声だった。

「お菓子あるわよ」

「お菓子って？」

「ケーキ」

それだというのだ。

「ケーキ食べて一休みしない？」「コーヒーもあるわよ」

「コーヒーもなの」

「うん。目が覚めるし」

こつとも言ってきたのである。

「だからね。どう？」

「有り難う」

星華は礼から述べた。

「それじゃあ」

「食べるのね」

「ちよつと待って」

しかしこつでこつと言つのであった。

第一話 最初の出会いその十一

「今数学の問題やってるから」

「それが終わってからね」

「うん、きりのいいところまでしたいからだからだというのである。」

「ちょっとだけね」

「じゃあちゃぶ台の上に置いておくね」

声はこう言ってきたのだった。

「それじゃあね」

「うん、終わってから行くから」

こんな話をしてだった。まずは目の前のその問題を終わらせた。

そのうえで部屋を出て下に降りてだ。ちゃぶ台の部屋に向かうとそこに中学生と思われる女の子がいた。

顔は星華そっくりであるが表情は彼女よりも明るい。髪の色も同じだがポニーテールではなく左右に黄色いリボンで結んでいる。胸はかなり目立つが彼女より小柄である。その女の子が座っていた。

そしてだ。彼女の方に顔を向けて笑顔で言ってきたのだった。

「お姉待ってたよ」

「有り難う」

星華は自分を姉と呼ぶ彼女に笑顔で応えた。見れば白い皿の上にチョコレートのショートケーキが一個ありそれが二セットである。コーヒーとフォークも置かれている。

そうしたものを用意してだ。星華は彼女に問うのだった。

「ねえ星子」

「何？」

「あんたが買って来てくれたの？」

「こう問うのだった。」

「まさかと思うけれど」

「違うよ。お母さんが買って来てくれたの」

「お母さんがなの」

「そうなの。お姉の為にとって」

だからだというのだ。星華は妹と話をしながら彼女の向かい側に座った。そのうえでそのチョコレートケーキとコーヒーを前に動かすのだった。

そうしてだ。さらに話した。

「私の為って」

「だから。頑張ってるお姉へのね」

にこにこ笑って姉に話してきた。

「差し入れだって」

「そうだったの」

「それで私はずいずいで」

自分のことも話す。話しながらその手にフォークを持っている。

「そういうことなの」

「あんたはついでなのね」

「妹だからね」

言いながらもうケーキを食べていた。

「美味しいから。早く食べなよ」

「うん。このケーキって」

「山月堂のよ」

店の名前も話された。

「そのよ」

「えっ、あそこのって」

「そうよ。お母さんも奮発したのよ」

星子はケーキを食べながらにこにここと姉に話す。

「絶対に合格して欲しいからって」

「お母さん、そんなことまで」

「八条高校よね」

星子は彼女が受けるその学校についても話に出してみせた。

「そこよね」

「ええ、そこよ」

星華もフォークを手に取った。そのうえで答えるのだった。

「八条高校にね」

「あそこっていいよね」

星子は目をきらきらとさせながら姉に話してきた。

「制服も可愛いし」

「まずはそこなの」

「だってさ。幾つもあって選べるし」

その制服がだというのだ。

「それに設備だって凄いじゃない」

「そうね。確かにね」

「それにあれでしょ」

星子はにこにことしたまま姉にまた言うのだった。

第一話 最初の出会いその十二

「お姉が八条高校受けるのって」

「何よ」

「そういうことが理由じゃないわよね」

「こんなことを言ってきたのである。」

「それじゃないわよね」

「何が言いたいのよ」

「だから。先輩でしょ」

屈託のない笑顔である。しかしその笑顔を前にした姉は気まずそうなる顔になってた。そのうえでケーキを食べながら話を聞いていた。

「斉宮先輩でしょ」

「ち、違うわよ」

顔を少し赤くさせてそのことを否定するのだった。

「そんな訳ないじゃない」

「本当に？」

「本当よ」

その赤らめさせた顔での言葉である。

「何で私はそんな理由で」

「あれっ、けれど皆言ってるわよ」

「皆って？」

「だからクラスの皆がよ」

「言っているというのである。」

「お姉が斉宮先輩のこと好きだって」

「それはデマよ」

「けれどあれじゃない」

姉が否定してもであった。妹はそれでも言うのであった。

「お姉いつも先輩見てるじゃない」

「気のせいよ、それは」

「こづは言ってもであつた。コーヒーを持つその手が少しどころか結構動いている。星子はその姉の右手を見てすぐに言ってきた。

「ちよつと待って」

「今度は何よ」

「そのまま飲んだら危ないわよ」

「ここでは日常の言葉だつた。

「零したら。熱いし」

「あつ、これは」

「だからわかるのよ」

星子はまたにこにことしてきた。右手に持つフォークで姉を指し示しながらまた言うのだった。

「お姉のことはね」

「何でわかるのよ」

「ほら、今言つたし」

「言つたしって?」

「わかるって言つたじゃない」

猫の様な顔になつての言葉だつた。

「ちゃんとね」

「嘘よ」

星華は妹のその言葉をすぐに否定した。

「私そんなことは」

「言つたわよ。何でわかるって」

「うつ・・・」

「思い出したじゃない。お姉って昔から嘘とか隠し事とか全然できないから」

「言葉に出るっていうのにな」

「顔にもね」

そちらにもだという。どちらにしてもそうしたことが極めて下手であるのは事実だというのだ。

「出るから」

「それはその」
「いいじゃない、それでも」
しかしここで星子の言葉の調子が変わってきた。
「それでもね。いいじゃない」
「いいってどういうの？」
「先輩のこと好きなのよね」
「ええ」
「だったらそれでいいじゃない」
こう言って姉の言葉も考えも認めてみせたのである。
「それでね。八条高校に受かって通っても」
「いいの」
「私だつて後から追いかけるし」
またにこにことした顔になって姉に話す妹だった。
「だからね。一年先に待っていて」
「ええ。だつたら」
「お姉だつたら絶対に上手くいくから」
「受験のこと？」
「それだけじゃないよ」
受験だけではないというのだ。他のこともあるのだという。
「その他のこともね」
「他のことって」
「学園生活よ」
「それだというのだ。つまり合格してからの話もしてきたのである。」
「そつちも大丈夫だから」
「そう、大丈夫なの」
「お姉バスケ部でもまとめ役だつたし」
部活の話もしてみせるのだった。
「キャプテンじゃなかったけれど皆上手くまとめてたじゃない」
「ええ、まあ」
「仕切りのスキル高いから」

そうした性格でもあるのだ。彼女はクラスの女の子のまとめ役でもあるのだ。それでクラス全体を上手くまとめもってきているのだ。だからね」

「大丈夫なのね」

「じゃあ受験頑張つてね」

満面の笑みで姉に告げた。

「本当に合格してね」

「ええ、じゃあ」

星華も妹の言葉に笑顔で応えた。

「頑張るわ。そして」

「合格してね」

「するわ。絶対にね」

そのことを誓うのだった。彼女は何としても八条高校に受かるつもりだった。そして他の面々もだ。それぞれ必死に受験勉強を行っていた。合格する為にだ。

最初の出会い 完

2010・2・25

第二話 受験の場でその一

第二話 受験の場で

「うわ、凄い数だな」

「そうね」

陽太郎と星華は一緒の電車の中にいた。その中で自分達と同じ年齢の様々な制服の面々に四方八方を完全に囲まれていた。まさに満員電車であった。

「これ全部八条高校受けるんだよな」

「やっぱりね」

「俺大丈夫かな」

陽太郎はあらためて電車の中の彼等を見回して言うのだった。その顔は目に不安の色をありありと浮かび上がらせてしまっていた。

「こんなところに受かるのかな」

「受かるのになって」

「だからさ。こんなに多いんだぜ」

その電車の中を見回しながらの言葉である。

「それでさ。大丈夫かな」

「何言ってるのよ」

しかしであった。星華は笑ってその彼に言うのだった。

「皆そう思ってるわよ」

「皆って?」

「だから。今から八条高校に行く皆がよ」

そう思っているというのである。

「受かるかどうか不安に思ってるわよ」

「そうなんだ」

「受かると思っている人でも受験は意識してるわ」

それはだというのだ。こう彼に話すのだった。

「絶対にね」

「じゃあ同じだっていうんだな」

「そうよ。同じよ」

あえて笑顔を作ったの言葉だった。

「皆同じだから」

「そうか。同じか」

「しつかりしなさいって」

狭いので背中を叩くことはできなかった。しかし叩きたいのは事実だった。そのうえでの言葉である。

「そんなことはね。気の持ちようよ」

「気の。そうか」

「そうよ。受けるからにはね」

わざと明るい言葉も出してみせた。自分の中の不安を隠すのと共に陽太郎のテンションをあげて合格してもらおうと思っていたからである。だからこそ出したのである。

「受かるわよ」

「そうだよな、やっぱり」

「あんた昨日何食べたのよ」

陽太郎をさらにリラックスさせる為に昨日の夕食のことも尋ねるのだった。

「それで何食べたの？」

「ステーキにカツだけれど」

陽太郎は星華の問いに素直に答えた。

「それだけれど」

「敵に勝つね。じゃあいけるわ」

「いけるんだ」

「受かるわよ、勝ちなさいよ」

また笑顔を作って言ってみせたのである。

「私だって昨日は同じもの食べたしね」

「佐藤もか」

「そうよ、私もよ」

その通りだというのである。

「私もね。そうしたから」

「そうか。そうなんだ」

「受かるわよ、いいわね」

「ああ、じゃあ」

「それにしても」

星華はここで言葉を変えてきた。

「四月からこの電車で毎日通うのね」

「そうなるんだな」

「満員電車って慣れてないけれど」

「それは仕方ないかな」

「けれど。楽しみだわ」

こんなことを言うのだった。

「この電車で毎日っていうのもね」

「なあ佐藤」

今度は陽太郎から彼女に言ってきた。

「あかさ」

「何？」

「こつした満員電車もさ」

こつ言ってきたのだ。

「慣れるとやっぱり楽しいのかな」

「そうじゃないかしら」

星華は何気なくを装って彼に返した。

第二話 受験の場でその二

「やっぱり」

「そういうものかな」

「多分ね。ただね」

「ただ？」

「ねえ、斉宮」

陽太郎の名前をあえて呼んだのだった。ただし陽太郎はそれがあえてだということには気付いていない。ただ話を受けているだけである。

「受かったらだけれど」

「受かったら？」

「一緒のクラスだったらいいよね」

こう言ってみせたのである。

「一緒のクラスだったらね」

「ああ、そうだよな」

陽太郎もこのことは微笑んで応えたのだった。

「それじゃあな」

「そうよね。それだとね」

「ああ、それでだけれどな」

今度は陽太郎の方から言ってきた。星華の顔が赤いのは満員電車の熱気のせいだとばかり思っている。他の可能性については考えてもいない。

「御前の受験番号幾つだったっけ」

「私の？」

「ああ。何番だったかな」

彼が尋ねてきたのはそのことだった。

「受験番号。何番だ？」

「〇二五六よ」

自分の受験票を懐から出してである。そのうえで答えたのだった。

「それが私の番号だけれど」

「そうか。〇二五六なんだな」

「斉宮はどうなの？」

「俺は一〇五六だよ」

それが彼の番号だと答えるのだった。

「全然数が違うってことは」

「受験のクラスは別なのね」

「そうだよな。一緒に願書出したのにな」

それでここまで番号が違っているのが不思議だった。彼にしてもである。

「それでも。一緒に合格すれば問題ないか」

「そうよね。それだったらね」

「ああ、頑張ろうな」

「ええ」

お互いににこりと笑って言い合うのだった。二人はそのまま受験会場でもある八条学園高等部に向かう。そうして校舎に入ってスリッパをはいたところで別れるのだった。

「それじゃあな」

「またね」

お互いに手を振り合う。そのうえで別れてそれぞれのクラスに入る。星華はそのまま自分の席に着く。陽太郎はクラスに入ると二人の女の子がそれぞれ話しているのが目に入った。

「あれ、あの娘は」

「一緒のクラスになったわね」

「そうね」

月美と椎名である。しかし彼はまだ二人のことを何も知らない。

「じゃあ愛ちゃん、本当にね」

「一緒に受かるう、つきぴー」

「ええ」

「制服が違うのに」

陽太郎は自分の席の隣で話をする二人を見ながら述べた。二人の制服はそれぞれ全く別のものであったのである。しかしその会話はどう見ても友人同士のものだった。

「一緒ってことは。そうか」

「ここでわかったのだった。」

「塾か何かで知り合いなんだな」

こうしたことには鋭かった。ただしあることには別であったが。

何はともあれ陽太郎は受験の準備に入った。自分の受験票を机の上に出して筆記用具も出した。何時でもテストを受けられる態勢にした。

そしてであった。隣の二人もだ。それぞれ準備に入ろうとしていた。

「じゃあ愛ちゃん」

「もうシャーペンとか出すのね」

「何時はじまってもいいようにね」

席に座っているロングヘアの女の子が小柄な女の子に返す。

「だから」

「気が早いのね、つきぴーは」

「そうしないと落ち着かなくて」

その事情も自分から言う彼女だった。

「それでなの」

「落ち着いていいわ」

だが小柄な女の子は微かに笑ってロングヘアの女の子に告げた。

陽太郎は二人の名前どころか何もかもを全く知らないので認識はこの程度だった。

しかしだ。そのロングヘアの女の子の胸を見てだ。思わず言うのだった。

「凄いな」

その大きさがである。ぽつりと小声で呟いたのである。

「あの大きさは」

「あつ」

そう呟いたその時だった。ロングヘアの女の子の机からあるものが落ちて陽太郎の席の方に転がってきた。見ればそれは消しゴムだった。

彼はそれを迷わずに拾って女の子に差し出した。その間一瞬だった。

「どうぞ」

「有り難う」

女の子はにこりと笑って彼に礼を告げた。

第二話 受験の場でその三

「拾ってくれて」

「ああ、それじゃあね」

「ええ」

この時はこれで終わりだった。だが彼は彼女の雰囲気は頭の中に入れてしまった。その楚々とした雰囲気、黒のロングヘア、垂れ目の綺麗な顔、それに胸が目に入ったからだ。

テストが終わり学園を出ると校門のところに星華が待っていた。

すぐに彼に言ってきたのである。

「ねえ」

「ああ、どうだったか？」

「そうよ。どうだったの？」

こう彼に問うてきたのである。

「調子は」

「俺はいけたと思うよ」

顔と視線を少し上にやっつての言葉であった。

「俺はさ」

「そう。いけたの」

「けれどな。こういうのって自分では思っただけでもな」

「こつも言うのであった。その顔と視線で。」

「実は駄目だったってあるじゃないか」

「テストとかはね」

「だからどうか」

あまり自信のない言葉であった。少なくとも自信を持たないようになっている言葉であるのは間違いなかった。

「実際のところは」

「そつなの」

「佐藤はどうなんだよ」

そして自分からもたずねるのだった。

「そつちはさ」

「私？」

「そうだよ。御前はとうなんだよ」

「あはは、まあね」

まずはバツが悪そうな笑いを出してから答える彼女だった。

「運を天に任せるっていうか」

「何だよ、それなのかよ」

「合格発表の時に全部わかるから」

「こつ言っただけであった。」

「だからね」

「まあそうだけれどな。今わかることじゃないからな」

「だからね。斉宮」

「ああ」

「帰ろう」

また星華から言うのだった。

「今からね」

「そうだな。それじゃあ帰るか」

「ここにこれ以上いても仕方ないしね」

「いて合格するんだつたらな」

「ここでこんなことを冗談で言う陽太郎だった。」

「どれだけでもいるんだけれどな」

「ふふふ、そうね」

彼のその言葉に合わせて笑う星華だった。そうしてだった。

「じゃあ本当にね」

「帰るか」

「そうしましょう」

こつしてであった。彼等はそのまま帰路につくのだった。それは他の面々も同じだった。椎名と月美もだ。二人共帰ろうとしていた。その帰り道を二人で歩きながらだ。それで話をしていた。

「それでつきぴーはどうだったの？」

「どうかしら」

月美は椎名の問いに少し自信なさげに返した。二人は帰り道を横に並んで進んでいる。その中でのやり取りだった。

「正直なところ」

「自信はないの？」

「ちよつと」

「こつ言うのだった。」

「ええと」

「そう。それでもね」

「それでも？」

「つきぴーは大丈夫よ」

椎名の表情はその変化が見えない。無表情であると言ってもいい。しかし今はその口元をほんの微かに綻ばせていた。そのうえでの言葉だった。

「絶対に」

「そかしら」

「私が保障するわ」

「こつまで言うのだった。」

第二話 受験の場でその四

「それはね」

「そう。だったらいいけれど」

「どちらにしてもあと何日かわかるわ」

合格発表があつてからだというのだった。

「それでね」

「そうね。あと数日でね」

「わかるわ」

そうだというのである。

「絶対にね」

「何か緊張するけれど」

月美はそれを言われるとだった。無意識のうちに顔を俯けさせる。

そうしてそのうえで彼女は椎名に対して言うのだった。

「その間」

「緊張することはないわ」

「それはどうしてなの？」

「緊張しても仕方ないから」

だからだというのである。

「だからね」

「そう。それじゃあ」

「静かに待ちましょう」

椎名の言葉はそれだけだった。

「いいわね」

「ええ、じゃあ」

月美は椎名のその言葉に頷いた。そのうえで家に帰るのだった。

月美の家はかなりの豪邸だった。門も屋敷と言つてもいい家も立派である。その家の中に入るとだ。すぐに小学校高学年位の女の子が出迎えてきた。顔は月美のそれを明るくした感じで髪は黒い彼女の

ものそのものの髪を伸ばしてそのうえで左右に小さくテールを作っている。そんな娘だった。

その彼女がだ。玄関に入ってきて来た月美を出迎えて笑顔で言った。

「お帰り、お姉ちゃん」

「只今、心美」

笑顔で応える月美だった。実に優しい包容力すら見られる笑顔である。

「学校はどうだったの？」

「楽しかったよ」

屈託のない笑顔で返す心美だった。

「いつも通りね」

「そう。それはよかったわ」

「それでお姉ちゃん」

心美は明るい顔でまた言ってきた。見れば心美の服はふわふわとした淡い黄色のロングスカートである。その彼女が言ってきたのである。

「どうだったの？受験は」

「そのこと？」

「うん、そのこと」

月美は靴を脱いでそのうえで玄関を出た、その姉への言葉だ。

「どうだったの？」

「どうかしら」

妹に対しても今一つ浮かない返答だった。

「それは」

「わからないの？」

「ええ」

やはり自信なさげであった。

「結果が出ないと」

「そうなの」

「とりあえずこの話はこれで終わりね」

これ以上言っても仕方ないと思ったからだ。だからこの言葉を出したのだ。

そうしてだ。家の廊下を進んでいく。木の廊下もかなり長い。家の中には洋風でやはり立派なものである。その立派な家の中を進みながらの話だった。

「それじゃあ」

「どうするの？それで」

「寝るわ」

そうするといふのだった。

「今はね」

「そうするの」

「ええ、寝るわ」

また言っ月美だった。

「とりあえず今は」

「そうするの」

「晩御飯になったら呼んで」

そしてまた言った。

第二話 受験の場でその五

「晩御飯になったらね」

「うん、わかったよ」

屈託のない笑みで返す妹だった。月美はここで右手にある扉を開いた。丁度そこが彼女の部屋なのだ。広い部屋の中に大きな白い柔らかなベッドがありだ。見事な机にパソコンもある。本棚もかなり立派だ。

「それじゃあ晩御飯にね」

「ええ、御願い」

こんな話をしながら休む月美だった。この日はこれで終わった。しかしであった。

それから数日後であった。その合格発表の日である。陽太郎は学校の校庭にあるその合格発表を見ていた。白い大きなボードのところに黒いアラビア数字の文字が書かれていた。

「ええと」

「どうだったの？」

その彼に星華が横から声をかけてきた。当然彼女も見に来ているのだ。

「あった？」

「ちよつと待ってくれよ」

掲示板を見たまま返した言葉だった。

「そんなすぐには」

「そうなの」

「ええと」

まだ見る。そうするとだった。

その数字を見てだった。陽太郎は笑顔になった。そのうえで星華に顔を向けてすぐに言うのであった。

「あったよ、俺の番号」

「そう。それだったら」

「ああ、合格だよ」

満面の笑顔での言葉だった。

「これでな。八条高校に入学だよ」

「おめでとう」

「佐藤はどうなんだ？」

そのうえで彼女に問うのであった。

「御前はどうなんだよ」

「あつ、今からね」

実は自分のものはまだ見ていなかったのである。

「見に行くわ」

「そうなのか」

「ええと、私のはね」

早速自分の方の掲示板を見る。すると彼女もすぐに笑顔になるのだった。

「あつ……」

「あつたのか!？」

「ええ、あつたわ」

その笑顔での言葉だった。

「私の番号も」

「本当に受かったんだな」

「一緒にね」

あるのがわかってだ。星華も笑顔で言うのであった。

「高校でも一緒ね」

「そうだよな。また一緒だよな」

「また同じクラスになればいいね」

「ああ、本当にな」

そんなことを言い合う二人のすぐ傍ではだ。狭山と津島がそれぞれ言っていた。

「ちっ、御前もかよ」

「そうよ。悪い!？」

津島が顔を見上げて彼に言い返したのだった。

「私も受かったのよ」

「俺が受かったのはいいけれどよ」

「これでまた一緒ね」

「つたくよお、何なんだよ」

狭山は口ではこう言う。しかしであった。

その顔は笑っていた。間違いなくだ。そしてその笑顔でさらに話すのだった。

「まあいいか。なあ」

「何？」

「すぐに学校に戻ろうぜ」

彼等のその中学校にというのである。

「いいな、それでね」

「そうよね。連絡しないとね」

「そうしないと駄目だしな。二人でな」

「高校でも一緒になるってね」

「一緒かよ」

また口ではわざとこう言う狭山だった。そうしてだった。

第二話 受験の場でその六

そのまま二人で学校を出てであった。彼等の学校に戻る。

椎名はまずは赤瀬と一緒にいた。そのうえで彼の話を聞いていた。

「受かったのね」

「うん」

赤瀬はこう答えたのだった。

「僕はね」

「私もね」

そして椎名は自分から言った。

「どうだったか知りたい？」

「それでどうだったの？」

「それはね」

赤瀬の巨体を見上げてであった。そのうえで微笑んで左手を出してみせてだ。そのうえでピースサインをしてみせたのである。次の言葉は。

「これよ」

「合格したんだね」

「また一緒にクラス委員になるかもね」

「そうだね」

赤瀬は笑って彼女の言葉に答えて頷いた。

「こういうのって縁だからね」

「ええ。だから」

「それじゃあその時はね」

また言う赤瀬であった。

「宜しくね」

「うん、じゃあね」

「それとだけねど」

赤瀬の方からの言葉だった。

「ええと。君の塾でのお友達だけねど」

「つきぴーのこと?」

「あの娘はどうだったのかな」

「このことを問うたのである。」

「それで」

「それはね」

椎名はここでその月美を見た。見れば彼女は椎名のすぐ傍に立っている。そしてそのうえでその掲示板を見て確かめていた。

そしてだ。彼女は静かに呟く様に言った。

「あつたわ」

「おめでとう」

「まずは一言だった。」

「つきぴー、おめでとう」

「有り難う、愛ちゃん」

「高校では一緒ね」

「そうね。同じ学校になれたね」

「ええ、これでね」

このことを言い合う二人だった。満面の笑顔になっている。そうしてであった。彼等はそれぞれ話すのであった。

「じゃあ愛ちゃん」

「うん、つきぴー」

「あらためて宜しく」

月美からの言葉だった。

「これからもね」

「つきぴーもね。楽しくやろう」

「愛ちゃんがいてくれたらそれだけで楽しいけれど」

「私だけじゃないから」

しかし椎名はここでこんなことも言うのだった。

「それは」

「愛ちゃんだけじゃないって?」

「これから増えるから」

だからだというのである。

「つきぴーのお友達もね」

「そうなの」

「赤瀬だっているし」

椎名は今度は自分の横にいるその大柄な彼を見上げてみせたのだ。
つた。

「きつと他にも」

「他にも？」

「友達ができる」

こつ月美に話すのである。

「だから安心していい」

「けれど私は」

「いじめる奴がいたら私がいるから」

その引っ込み思案の彼女への言葉だった。

第二話 受験の場でその七

「安心していい」

「僕もいるよ」

赤瀬も上から言ってきた。

「だから安心していいから」

「そうなの。安心していいの」

「不安に思ったら負けだから」

そしてこうしたことも言うのであった。

「つきぴーはきつと幸せになれる」

「わかったわ。それで」

「それで？」

「恋人もできればいい」

次に言ったのは恋人であった。学生生活を華やかにするものをつだった。そうしてそのうえでまた言ってきたのであった。

「つきぴーはお友達じゃなくて彼氏も必要かも」

「けれど」

「けれどは言わない」

今度は少し厳しい言葉だった。

「引っ込み思案が一番よくない」

「そうなの」

「わかったら今から行こう」

「何処になの？」

「ケーキを食べに」

それをだというのである。

「あとは家に帰って二人で」

「二人で？」

「飲もう」

今度言うのはこれだった。

「二人で。合格祝いに」

「お酒なの？」

「お酒は十五歳からだから」

強引にそういうことにしていたがこの八条町は酒に対しては非常に寛容である為にそれでいいのであった。それで椎名も言うのだった。

「だから一緒に」

「飲むのね」

「それじゃあ僕はね」

赤瀬はここで別れるというのだった。手を振って応える。

「これで帰るから」

「そうなの」

「またね」

こう言って実際に足を校門の方にやる。足もまた巨大なものだった。それこそ足一本が小柄な椎名程もあるような圧倒的な質量であった。

そうしてだ。椎名はさらに月美に言ってきたのだった。

「じゃあつきぴー」

「うん、愛ちゃん」

「行こう」

また彼女を誘っていた。

「それじゃあ」

「ええ、じゃあ」

「これで」

こうしてであった。二人は椎名主導で去る。その時だった。

「あっ」

「どうしたの？」

「あの人」

陽太郎に気付いたのである。まだ掲示板を星華と見ている彼にだ。
「あの人も受かったみたい」

「確か」

椎名は彼を見てまた言うのであった。

「隣の席の」

「私の」

「その人だったわね」

「ええ、あの人だったわ」

まさにその彼だというのだった。

「あの人も受かったのね」

「そうみたいね。表情が明るいから」

不合格ならそれで表情は沈みきってしまう。これは簡単にわかることだった。

そうしてだ。さらに言うのであった。

「受かったわね」

「ええ。じゃあ同じ学校になるかも」

「そうかも。それだったらね」

「それだったら？」

「仲良くなれたらいいね」

こつ月美に話す椎名だった。

第二話 受験の場でその八

「いい人だったみたいだし」

「いい人ね」

「うん。じゃあ」

ここまで話してまた言う椎名だった。

「行こう」

「ええ、そうね」

こう話してだった。二人で向かうのだった。そして陽太郎と星華もだ。

星華は俯いていた。そしてかなりもじもじとしてた。そのうえで彼に言った。

「ねえ」

「あれっ、どうしたんだ？」

「これからだけれどね」

こう彼に切り出したのである。

「何処が行かない？」

「何処かって？」

「折角二人受かったんだし」

「だから学校だよな」

何もわかっていない陽太郎は笑顔で返すのだった。

「学校に帰るんだよな」

「あっ……」

そう言われてだった。星華は愕然とした顔になった。そうして今度は観念したような顔になってまた言うのであった。かなり苦しかった。

「ま、まあそうよね」

「ああ、さっきも話してたじゃないか」

「そうだったわね」

戸惑いながらも陽太郎の話しに合わせるのだった。

「それじゃあ」

「行こうか」

「ええ。ねえ」

「あれっ？今度は何だよ」

「あのさ、二人受かったんだし」

「受かったから？」

「あのさ、だからね」

また言う彼女だった。戸惑いながらもそれでも言うのであった。

「ええと、ちよつと」

「帰ろうか」

陽太郎は気付かないまま話す。

「それじゃあ」

「ええ、それじゃあ」

星華は結局何も言えなかった。そうしてだった。

二人も学校に帰った。そして先生に報告して笑顔で迎えられた。

だが星華はその中でも残念さを噛み締めていた。

それは家に帰っても同じだった。喜んではいた。しかしそれと共
にかなり残念そうだった。両親もそれを見て首を傾げさせていぶか
しむのだった。

「何だ、あいつ」

「そうよね」

二人で言い合うのだった。

「受かったんだよな」

「それであんな顔をしてるなんて」

「そうよね。どういふことなのかしら」

「おかしな奴だよ」

「こう言わずにいられなかった。」

「まあいいさ。おい」

「わかってるよ」

ここまでは二人一緒であった。

「それはね」

「酒もいいの出せよ」

父は威勢良く自分の女房に告げる。

「あいつに好きなかだけ飲ませろ」

「そうよね。何といても主役だからね」

「主役が飲まないはどうしようもないだろ」

「その通りだね。それじゃあ」

「ああ、今日は飲んで食つてだ」

そしてまた言う父だった。

「いいな、あいつが第一だからな」

「わかつてるよ、それはね」

母も威勢のいい声で返す。

「それじゃあね。今から買って来るからね」

「おう、そうしろ。しかしな」

父はここであらためて明るい声で言うのだった。

「あいつが八条か」

「しかも普通科にね」

「受かるとは思わなかったな」

「全くだね」

「奇跡つてやつか？」

あまりにも嬉しいのでついついこんなことを言う始末だった。

「これもな」

「そうかもね。とにかくね」

「ああ、とにかくだよな」

「これからだよ」

母はそのことはすっかりと考えていた。学校というものは合格して終わりではなくむしろそこからはじまるというものであることがだ。それがわかっていたのである。

第二話 受験の場でその九

「これからだからね」

「そうだよな。しかしあれだけ頑張ったんだ」

父はかなり楽観的だった。その証拠に普段はコッテ牛の様な顔は思いきり綻んでいた。それが何よりも雄弁な証拠であった。

「きつとな。入ってからもな」

「頑張るっていうんだね」

「俺と御前の子供だぞ」

拳句にはこんなことを言う始末だった。

「頑張らない筈ないだろ」

「それにもう頑張る人間ってのは見たしね」

「ああ、期待して見ていようぜ」

「そうしようね」

二人でそんな話をしてお祝いの御馳走を買いに行くのだった。母は食べ物を買に行き父は酒を買いに行った。何だかんだで彼も行ったのだ。

そしてだった。自分の部屋に戻った星華はだ。半ば放心状態になっていた。その彼女の部屋の扉をノックする音が後ろから聞こえてきた。

彼女はそれに応えて声をかけた。

「誰？」

「お姉、受かったんだって？」

星子だった。彼女の声だった。

「八条高校に」

「そうよ」

「おめでとー」

まずはこう告げる妹だった。

「まずはね」

「有り難う」

「それだけでけれど」

そして一言言ってからだった。こう切り出してきたのである。

「中に入っただいい？」

「中に？」

「そう、部屋の中にね」

そこにだというのだ。

「中に入っただいいかな」

「いいわよ」

星華は特に迷うことなく彼女に答えた。

「どうぞ」

「有り難う。それじゃあ」

こうして中に入る星子だった。そのうえで自分の机に座ったまま背を向けている姉に対してだ。穏やかな口調で切り出してきたのである。

「あのお」

「何よ」

「今少し、いや結構落ち込んでるでしょ」

こう問うてきたのだ。

「それで部屋から出ないんでしょ」

「別にそんなじゃないわよ」

口ではそれを否定する彼女だった。

「別にそんな」

「本当に？」

「本当によ」

自分ではこう答えるのだった。

「何もなかったわよ」

「高校に合格したのにあまり嬉しそうじゃなくても？」

「ちよっと気が抜けてるのよ」

「嘘ばっかり」

「ここで遂にこの言葉を出したのだった。」

「そんな訳ないじゃない」

「何よ、じゃああんたわかるっていつの？」

ここで遂に椅子を回してきて妹に向き合ってきた。そのうえで言葉だった。服は中学の制服のままだ。星子はジーンズとセーターに着替えていた。

「何がわかるっていつのよ」

「お姉が落ち込んでる理由がよ」

それがわかると返す星子だった。

「わかるわよ」

「じゃあ何で落ち込んでるっていつのよ」

「先輩にコケろうと思ってたんでしょ」

「こっ姉に言ったのだった。」

第二話 受験の場でその十

「そうでしょ？」

「それは……」

「隠そうとしたって駄目よ」

その逃げ道はすぐに塞いだ。わかっていたからだ。

「お姉昔から顔にすぐに出るから」

「じゃああんたわかってたの？」

わかっているのなら仕方ないと。居直って妹に問うたのだった。

「前から」

「わかるって。お姉一年の頃からいつも先輩の話私にするんだもん」
だからわかるというのである。

「それでわからない筈ないじゃない」

「だからなの」

「そうよ、だからよ」

まさにその通りだというのである。

「わかるわよ」

「そうだったの」

妹のその言葉を聞いてだった。星華はまずはその溜息を出して。

そのうえでまた言うのであった。

「あんたもわかってたの」

「それでコクろうと場所に誘ったけれど先輩は気付かなかったのね」

「それもわかるの」

「だって齊宮先輩鈍感だから」

陽太郎のことをはっきりと名前を出して話した。

「わかるわよ。あの人私達の間でもかなり有名だしね」

「えっ、有名って!？」

その言葉を聞いて瞬時に青い顔になる星華だった。

「まさか二年や一年もあいつ狙ってるの？」

「狙ってるって言ったなら人聞きが悪いけれど」
それはまずは打ち消したのだった。
「まああれよ。人気はあるわ」
「そうなの」
「けれどね。これがね」
打ち消して仕切りなおしてからの話だった。
「先輩鈍感だから幾らモーションかけて気付かないんだって」
「ライバルが多かったのね」
「だからお姉」
また姉を咎めて言う。
「それは話してるだけだから」
「けれどライバル多いのよね」
「話はちゃんと聞いてね」
目を少しばかり怒らせての言葉だった。
「あのね、とにかく先輩はちょっとやそっとじゃ気付かないのよ」
「ええ」
「お姉にしてもまた誘えばいいから」
「それでいいのね」
「そうよ。一緒の高校になったんじゃない」
それを言っただけを励ますのだった。
「だからね。チャンスは幾らでもあるから」
「チャンスがね」
「まあもつとも」
「ここではわざとふざけてみせた星子であった。」
「お姉は意気地なしだからねえ」
「意気地なしって何なのよ」
「言っただけよ。いつも怖気付いて何もできないじゃない」
「こう言うのだった。」
「いつもいつもね」
「私は別にそんな」

「じゃあ勇気出したら？勇気もないし胸もない」

「胸は余計よ」

星華はむっとした顔になって星子に言い返した。言い返ししながら妹のその豊かな胸を見る。それは中二のものとは思えない程だった。

「何であんただけ胸がそんなに大きいのよ」

「叔母さん似じゃないかしら」

「あの叔母さんにね」

「で、お姉はお母さんにね」

「全く。姉妹で顔が同じなのに胸の大きさは違うなんて」

このことにかなり不公平なものを感じている星華だった。

「何でなのよ」

「気にしない気にしない」

「気にするように言ったのはあんたじゃない」

口を尖らせて抗議する。

「違うの？」

「まあとにかく気を取り直したわね」

「まあね」

それは事実だった。彼女も何とかそうなった。

第二話 受験の場でその十一

そうしてであった。その上向くようになった気持ちでだ。あらためて妹に言うのであった。

「それでだけれど」

「それで？」

「今日パーティーよね」

それを言うのだった。

「確か」

「そうよ。パーティーよ」

「やっぱり私の為によね」

「そうよ。主役はお姉」

まさに彼女がそれだというのだ。

「だからよ。元気出してね」

「元気出してそれでなのね」

「そうよ。お酒もあるし御馳走もある」

「お父さんとお母さんが用意するってことは」

あらためて二人の好みを考えた。そうするとだった。

「和食になるわね」

「お刺身に天麩羅かしら」

とりあえず思いついたのはそうしたものだった。星子も両親の好みはよくわかつている。だからこそ今そうしたメニューが浮かんだのである。

「後は。アンキモの酢の物とかよね」

「そうした感じよね」

「それで日本酒」

酒はそれというのだ。

「お姉日本酒好きよね」

「まあね」

足の裏を合わせた胡坐を組んでその足首を両手で掴みながらの返答だった。

「ワインも好きだけれどお父さん飲まないからね」

「ワインはこの場合白よね」

「そうよね。あんたは赤だっけ」

「ロゼ好きだけれどね」

にこりとして答える星子だった。

「まあお酒なら何でもいいわよ」

「じゃあ楽しくやる？」

星華は機嫌を完全に取り直した。そのうえで妹への言葉だった。

「家族でね」

「そうしようよ。今年は私で」

「来年はあんたね」

「天麩羅何かしらね」

「海老に烏賊に蛸にキスとかでしょうね」

これも両親の好きなものである。二人もかなり好きである。

「あとお刺身は鮪にハマチに鮭でしょうね」

「いい感じね」

「じゃあ楽しくね」

「ええ、合格祝いにね」

星華はその機嫌を完全になおしていた。そのうえで今は家族の祝福を楽しむのだった。そしてその時陽太郎はだ。

家でカレーを食べていた。カツカレーである。それとステーキだった。だが彼は自分の席の前のそれを見ていささか複雑な顔をしていた。

そうしてだ。己の前にいる母親に問うのだった。もう結構いい歳の筈だがまだ若々しい。黒く長く伸ばした髪も瑞々しい。顔立ちも少女の様だ。

その彼女を見ながらだ。その複雑な顔で言うのだった。

「あのさ」

「どうしたの？」

「何でこれなの？」

そのカツカレーとステーキを指し示しながらの言葉だった。

「カツカレーとステーキなんだよ」

「合格したからよ」

母は平然と答えてきた。

「だからよ」

「普通ステーキとかトンカツはあれじゃない。テストを受ける前に食べない？」

「うちじゃ合格祝いにも食べるのも」

「初耳だけれど」

これは完全にであった。今はじめて聞いた言葉であった。

「そんなのって」

「ははは、いいじゃないか」

その母の横にいる父が言ってきた。口髭を生やした恰幅のいい男である。その彼が言ってきたのである。

「それは」

「いいんだ」

「今知ったからそれでいいじゃないか」

だからだというのである。

「そうじゃないか？」

「そうかな」

そう言われてもであった。陽太郎は釈然としなかった。しかし彼の横に座る小さな女の子は朗らかに笑ってはしゃいでいた。

「ステーキにカレー、大好きだよ」

「あのさ、ひよっとして」

その妹を見ながらの今度の言葉だった。

第二話 受験の場でその十二

「それが決まったのってやっぱり」

「そうよ。陽子が好きだからよ」

「我が家はレディーファーストだからな」

「レディーファーストって」

それを聞いてもであった。釈然としない顔のままの彼であった。

「何か変な組み合わせだな」

「サラダもあるけれど」

「しかもカレーの中には野菜がたっぷりだぞ」

これは両親の言う通りである。レタスとトマト、セロリ、それにキウイのサラダもあればカレーの中には細かく刻んだ人参に玉葱がある。ジャガイモもだ。そのまま野菜カレーとして通用する程である。栄養バランスも取れていた。

そうしてだ。それだけではなかった。

「デザートはケーキがあるから」

「食べるといい」

「わあい、ケーキだケーキだ」

ここでまたはしゃぐ妹の陽子だった。満面に笑みを浮かべている。

「美味しいよね、やっぱり」

「美味しいのはいいけれどさ」

まだ釈然としない顔の彼だった。

「カレーがお祝いつて」

「ステーキもあるじゃない」

「輸入肉はいいぞ。アルゼンチンだ」

「オーストラリアじゃないんだ」

もう言う言葉はこれしかなかった。

「まあとにかく。食べるんだよな」

「そうよ。食べなさい」

「御前の合格祝いだからな」

「それは有り難う」

まだ釈然としない返答の陽太郎だった。その声でまた言うのだった。

「たださ」

「うん、今度は何だ？」

「それでどうしたの？」

「いや、お酒はないんだよな」

彼が言うのはこれだった。なおここでは未成年ということとは都合よく忘れられている。なかつたことにされてしまっていると云っていい。

「そっちは」

「ケーキがそれよ」

「陽子が好きだからな」

また陽子であった。

「あんたが一番沢山食べていいから」

「遠慮することはないからな」

「また陽子なのか」

「お兄ちゃん、たっぷり食べようね」

どう見てもかなり甘やかされている妹を見ずにはいられなかった。

「何だかなあ」

「何だかなあじゃなくてよ」

「世の中はそっちの方が上手くいくんだ」

母も父もここでまた彼に言ってきた。

「女の子の方を立てるのがね」

「男同士だったら平等でな」

「男だったら平等で女だったら女の方を立てる！？」

それを聞いてまた首を捻る陽太郎だった。彼にはわからない理屈だった。

「あのさ、そんな理屈あったの？」

「あるぞ」

父が一言で答えてきた。

「それはしつかりとな」

「あつたんだ、そんなの」

「だから。レディーファーストなのよ」

それだと話してきた母だった。

「これってね」

「レディーファーストだったんだ、それも」

「御前が陽子をいじめめる様な男じゃないのもわかっている」

父はここで彼の本質を指摘してきた。実際に彼はそういうことは絶対にしない。それどころか妹をいじめている人間がいれば誰であるかと立ち向かう人間である。そうしたことには強い拒否反応を見せるのである。それが彼なのだ。

「だからだ。いいな」

「まあ陽子のだったらいいけれどさ」

陽太郎もここで遂に頷いたのだった。

「それでお酒はないんだ」

「まさかカレーと一緒にやるのか？」

父はこのことを真面目に問うてきた。

「合わないぞ、カレーにはどんな酒も」

「それどころか気分が悪くなるわよ」

母も話してきた。

「絶対にお勧めできないわよ」

「わかっているさ。じゃあ仕方ないな」

これで観念した陽太郎だった。

「お酒はいいよ」

「明日飲め、いいな」

「ビール用意してあるから」

「ああ、ビールなんだ」

「とにかく今日は我慢してくれ」

「いいわね」

「わかったよ。じゃあ明日ね」

両親のその言葉に頷くのだった。

「それでいいから」

「それじゃあ食べるぞ」

「いいわね」

「いったただつきまあ~~~~~す」

陽子が手を合わせてから明るく言った。

「お兄ちゃんもね、一緒に食べよう」

「ああ、そうだな」

彼も妹の言葉に頷く。そうしてであった。

一家でその祝いのカツカレーとステーキを食べるのだった。誰も
がそれぞれ祝いを受けていた。だがそれは終わりではなかった。は
じまりでしかなかった。

受験の場で

完

2010・3・4

第三話 入学その一

第三話 入学

卒業式が終わりそれぞれの春休みが終わって。陽太郎は八条高校の制服にはじめて袖を通した。中学の制服とはまた違っていた。

「どうなの？」

「何か違うね」

微笑んで母に伝える。八条高校の制服は様々なタイプがあるが彼は青い詰襟にしたのだ。青い七つボタンの丈の長い詰襟の制服だ。丈は膝までである。

「やっぱり」

「あんたって長ラン派だったのね」

母は彼のその青い長い制服を見て言うのだった。見ればカラーも長い。

「それが意外だわ」

「長ランって？」

「丈の長い制服のことよ」

それだというのである。

「今じゃ応援団位しか着ないけれどね」

「そんな制服もあるんだ」

「そうよ。短ランと同じだね」

「ああ、それは知ってるよ」

これは陽太郎も知っていた。学生服のことは誰でも知っている」とだった。

「不良が着るあれだよな」

「あんたそつちの方が似合うと思ったんだけど」

「俺服は長い方が好きだから」

これは彼の好みだった。

「だからこれにしたんだけど」

「超長ランにはしなかったのね」

また陽太郎の知らない言葉を出す母だった。実際に彼は母親の出す単語を聞いてその耳を疑う様な顔になっていた。

「何、今度は」

「だから。長ランより長い制服よ」

それだというのである。

「そのことよ」

「そんなもあるんだ」

「あるわよ。そうなの、あんたそれはいいのね」

「流石にそこまではね」

いいと答える彼だった。

「あまり長過ぎてても面倒だし」

「それでいいわ。大きさは大体メートル十つてところね」

その学生服の丈である。

「今じゃ古いかも知れないけれどまあいいわ」

「いいんだ」

「いいわ。それでだけねどね」

「ああ、それで？」

「頑張つて行つて来なさい」

息子の背中を自分の右手でばん、と押しての言葉だった。

「いいわね、高校三年間ね」

「ああ、わかつてるよ」

「成績は多少悪くてもいいけれどいじめは絶対にしない」

齊宮家の家訓であり教育方針である。

「いいわね、それは」

「それだけは何がってもしないさ」

「いじめを見たら立ち向かう」

それも言う母だった。

「それだけは心に刻み込んでやっていってね」

「わかったよ。じゃあ今からさ」

「行つてらつしやい」

「行つて来ます」

彼は一人でそのまま家を出た。そのうえで八条高校に向かうその電車に乗るのだった。そしてその最寄の駅には彼女がいた。

「あつ、佐藤」

「おはよう、斉宮」

星華だ。少し笑つて挨拶をしてきた。だが陽太郎は彼女の顔が赤らんでいることには気付かない。気付いているのは笑っていることだけだ。

「今日からね」

「そうだよな。今日からだよな」

「あのね」

ここで自分から言つてきた星華だった。

「この制服どうかしら」

自分の制服を見せるのだった。驚く位に短いスカートに黒いハイソックスだ。そしてブレザーの色は黒である。ネクタイはリボンである。

「これにしたけれど」

「いいんじゃないのか？」

思ったことをそのまま告げた陽太郎だった。

「それで」

「そう、いいのね」

「似合つてるよ。つていうか」

「つていうか？」

「きわどくないか？かなり」

特にその短いスカートを見ての言葉である。ハイソックスがそれを余計に目立たせている。それを見ながらそうして語るのだった。

第三話 入学その二

「その制服」

「そうかな」

「ここではとぼけてみせた星華だった。

「私はただいいかなくて思ってた決めたただけだけれど」

「まあデザインはいいよな」

「そうでしょ。それにしても」

「それにしても？」

「斉宮って長ラン派なのね」

星華も彼の母と同じことを言ってきた。

「短いのが好きって思ったけれど」

「おかしいか？この格好」

「ううん、別に」

星華もここでは本音を口にした。

「いいと思うわ。青が綺麗よね」

「そうだよな。だからこれにしたんだよ」

「青の長ランに？」

「そうなんだ。それに」

そのハイカラーと七つボタンも指し示す。袖ボタンは五つであり
まさに長ランだった。

「このボタンもさ」

「七つね」

「何かこれってよくないか？」

「いいわね。海軍みたいね」

星華はその青い制服を見ても言った。それはまさにネイビーブル
ーだった。青といっても色々だが彼の制服の青はその青だったのだ。

「いいじゃない」

「そうか、海軍なんだ」

「私のひいお爺ちゃん海軍だったからね」

「あれっ、そうだったんだ」

「そうなのよ。だから余計によく感じるわ」

頬を赤らめさせながら陽太郎に話す。そのうえでだ。

「それはね」

「海軍かあ」

「丈はもつと短いけれどね。けれど海軍みたいよ」

こう言う星華だった。

「実際にね」

「親父は海軍っていうより空軍っていつてたけれどな」

「空軍？」

「海軍って実際は軍服黒じゃないのか？」

「そうだったかしら」

二人は知らないがそれはその通りであった。海軍、日本では海上自衛隊はその軍服の色は黒なのである。夏には白になるのだ。

「それで空軍みたいだって言うんだよ」

「空軍ねえ」

「そう、空軍な」

そちらだと再び話す。

「そういう青にも見えるからってな」

「まあそれでもいいんじゃないの？」

星華は気を取り直してこうも述べるのだった。

「うちの学校……よね」

「ああ、もうな」

「実際にセーラー服もあるし」

「女の子のやつだろ？」

「それでもあるし」

海軍といえはやはりセーラー服である。ただしそれは兵士のものだ。かつての海軍では予科練等は七つボタンの詰襟だったのだ。「だからね」

「そうか。しかしな」

「しかし？」

「何かこの制服俺は気に入ってるけれど色々言われそうで気になっ
てたんだよな」

「長ランだから？」

「ああ。けれどな」

それでもまだというのである。

「意外と評判よさそうで何よりだよ」

「どういたしまして。まあ斉宮背もそこそこあるしスタイルも均整
取れてるし」

何気なくを装って彼を褒める。

「いい感じになってるじゃない」

「そうか」

「似合ってるわよ」

にこりと笑って彼に話した。

第三話 入学その三

「それにね」

「それに？」

「話変わるけれど」

「こつ前置きしてからの再度の言葉だった。」

「これから。まあ朝練もあるけれど」

「ああ」

「一緒に通学するのね」

「ここにことしながらの言葉だった。」

「毎日この電車で」

「そうなるのか？」

「そうじゃないの？だって同じ高校だし」

「朝練がはじまったらそうはいかないだろ」

「これが彼の意見だった。」

「かなりな」

「そうなの。何か」

陽太郎の今の言葉を聞いてだ。星華は暗い顔になった。そうしてそのうえで肩も落とさせて。残念そうな様子になってそのうえで話した。

「がっかり」

「がっかりって？」

「あつ、何でもないわ」

「ここからはまた隠した彼女だった。」

「別にね」

「そうなんだ」

「何でもないから。まあたまたま一緒になっただらね」

「その時はだよな」

「一緒に行こつ」

何とかにこりとした笑みを作って述べたのだった。

「一緒にね」

「その時はな。じゃあとにかく」

「来たわよ、電車」

話しているその傍からだった。左手から電車が来たのだった。言うまでもなく二人がこれから乗る電車である。

「じゃあね」

「ああ、行くか」

こうして二人はその電車に乗った。扉が中央から左右に開くとその中に入った。電車の中はというと。

「意外と人少ないわね」

「ああ。座れそうだけれどな」

「座るのは別にいいじゃない」

それについては微笑んで返してきた星華だった。

「それはね」

「いいか」

「そう、いいわよ」

いいというのである。

「別にね。どうせすぐだし」

「それもそうか」

「そう思うわ。それじゃあね」

「ああ、ここで立っていようか」

「そうしよっ」

こう話してであった。二人は扉のところ立つことにした。しかしその時だった。陽太郎は自分の左斜め前の席に彼女を見たのだ。

「あれっ、あの娘」

「どうしたの？」

「いやさ」

その彼女を見ながらの言葉である。

「一緒に教室だったんだよ」

「一緒って？」

「だから入試の時だよ」

その時だというのだ。

「その時に一緒に教室だったんだよ」

「そうだったの」

「へえ」

あらためて彼女を見る。今は八条高校の制服だ。青い短いスカ―トに白いハイソックスである。上着も青であるネクタイだけ赤である。

「あの制服なんだ」

「青と青ね」

星華はただ色を見ただけである。

「ただ。向こうの色はね」

「俺のは濃い青だからな」

そのマリンブルーの長ランを見て言う陽太郎だった。

第三話 入学その四

「それに対して向こうはな」

「そうよね。明るい青よね」

「コバルトブルーか。いいよな」

彼女を見ながらの言葉である。

「ああした色もな」

「そう?」

しかしであった。星華はここで不機嫌な顔になるのであった。

「私は別に」

「そうは思わないって?」

「別にね」

その顔での言葉である。

「思わないな」

「また何で?」

「何でもないわよ」

今度は顔を背けさせての言葉であった。

「それはね」

「何か話がわからないんだけど」

「わかるようには言っていないし」

声も不機嫌なものになってきていた。

「別にな」

「あのさ、佐藤」

陽太郎は何が何なのかわからずそれで星華にまた言った。

「とりあえずさ。落ち着かない?」

「私は最初から落ち着いてるけれど?」

「そうじゃなくてさ。何ていうかさ」

彼女に言いながらも陽太郎はその席に座っている少女を見ていた。

そこに静かに座り本を読んでいる。文庫本でそのタイトルは。

「ふうん、坊ちゃんか」

「坊ちゃんって?」

「あつ、何でもないよ」

今度は彼がこう言う番であった。

「何でもないから」

「そうなの」

「たださ」

そしてまた言うのであった。

「何ていうか」

「何ていうか?」

「佐藤って本読んだっけ」

話が自然にその方向にいった。言いながら星華に顔を向けるのだ
つた。

「何か読んでなかったか?」

「漫画なら読んでもるけれど」

これが彼女の返答である。

「ジャンプとかマガジンね」

「小説とかは?」

「まあ携帯小説よね」

この辺りはまさに今時の女の子であった。

「読んでもるけれど」

「そうか、御前携帯派だったんだな」

「そうよ。斉宮も読んでもる?」

「携帯小説か?」

「そうよ。読んでもるの?」

こう彼に問うてきたのである。

「そっちは。どうなの?」

「まあ一応はな」

彼は正直に答えた。

「読んではいるさ」

「そうなの。あんたもなの」

「ただな」

「ただ？」

「あまり読んでないけれどな」

「ここでも正直に述べたのだった。」

「そういうのはな」

「そうなの。あまりなの」

「俺はやっぱりあれなんだよ。文庫で読むのが好きなんだよ」

「言いながらまたちらりと彼女を見るのであった。星華は今はその視線には気付かなかつた。」

「文庫でな」

「それで読むのがなのね」

「ああ、好きだ」

「実際にそうなのだという。」

「佐藤は携帯派なんだな」

「まあ最近じゃ携帯小説も本になったりしてるけれどね」

「そうだよな。随分と変わったよな」

「本当にね」

「まあ本も読んでおかないとな」

「ここでもっともらしい理由を述べる彼だった。」

第三話 入学その五

「それでな」

「それで？今度は？」

「あれだよな。御前高校でも部活は」

「バスケするつもりよ」

もう決まっているという口調で返した星華だった。

「やっぱりね」

「そうか、バスケか」

「私には一番合ってるから」

だからだというのである。

「中学でもそうだったし」

「高校でもか」

「それで斉宮はやっぱり剣道よね」

「ああ、そのつもりだけれどな」

彼もまた決まっているという口調だった。

「それでな」

「いいんじゃない、それで」

星華は彼に微笑んで告げた。

「剣道でね」

「そう思うんだな」

「思うわ。じゃあ」

「ああ」

「お互い頑張ろう」

笑みがにこりとしたものになった。

「お互いにね。頑張ってるよ」

「部活も勉強もな」

「まあ私はあれだけれど」

勉強という言葉が出てた。今度は苦笑いになったのである。

「体力馬鹿だから」

「何言つてんだよ。合格したじゃないか」
「まぐれよ」

謙遜ではなく半分以上そう思っている。

「受かったのは」

「けれど御前かなり勉強したんだよな」

「それはまあ」

それは事実であったので否定できなかった。やはり嘘をつけない彼女だった。

「そうだけれど」

「じゃあ実力だよ」

「実力つて言つてくれるの？」

「言つてくれるじゃなくてそうだろ？」

笑顔で話すのであった。

「勉強して受かったんだからまぐれじゃないよ」

「そうなの」

「だからさ。自信持つて頑張ろうな」

微笑んでまた星華に話したのだった。

「それでいいよな」

「うん、じゃあ」

星華とはいつも通りの話だった。その間彼は時々その隣の席だった彼女をちらちらと見ていた。そして入学式が終わり自分のクラスを見る。陽太郎のクラスはというと。

「三組か」

「私四組だったわ」

陽太郎が三組で星華が四組だった。

「何だよ、離れ離れかよ」

「高校でもって訳にはいかなかったわね」

「まあ仕方ないよな」

陽太郎は苦笑いの中でこの現実を受け入れた。

「それじゃあな」

「そうね。それじゃあ」

「クラスに入るからな」

「私も」

あれこれ言っても仕方なかった。二人はそれぞれの教室に向かうのであった。そして陽太郎が入ったそのクラスでは。男女二人があれこれと話をしていた。

一人は紺のブレザーに灰色系統のスラックスだった。ネクタイは赤だ。こちらが男だ。

女の方は男と同じ配色のブレザーとミニスカート、そしてネクタイであった。二人の色は同じだったがその外見は全く違っていた。男は自分の席でうんざりとした顔で右手で頬杖をついている。女はその前に立っている。そのうえで話をしているのであった。

「何で高校でも御前と同じクラスなんだ？」

「嫌なの？」

「っっていうか飽きた」

飽きたというのである。

第三話 入学その六

「もうよ。御前と一緒にのクラスなのはよ」

「いいじゃない、別に」

「いいのか？それで」

「私はいいわよ」

女の方はにこりと笑って言うのだった。

「それでね」

「そうかよ。じゃあ勝手にそう思っていてくれ」

「何でもないみたいなの返答ね」

「だから飽きたんだよ」

「そうだとするのである。」

「これで何年連続なんだよ」

「さあ」

「さあ？じゃねえよ。何かの呪いかよ」

「呪いでもいい呪いね」

「悪いから呪いなんだよ。本当にどうなってんだよ」

「賑やかな奴等だな」

陽太郎はその二人、狭山と津島を見ながら呟いた。そうして次に見えたのは。

見えたというよりぶつかってしまった。前にいたその大男にだ。

「ぐっ……」

「あっ、御免」

彼より遙かに上から重低音がしてきた。見上げると角刈りの大男がいた。

「うっかりしてたよ」

「うわ、でかいな」

これが彼に対するはじめの言葉だった。とにかく大きかった。

「一年だよな」

「そうだよ。一年三組の赤瀬」

彼は自分から名乗ってきた。

「赤瀬炎男っていうんだ。宜しくね」

「あ、ああ」

起き上がりながらそのうえで応える彼だった。

「宜しくな。俺は斉宮陽太郎」

「斉宮君っていうんだね」

「そうさ。そうか、赤瀬っていうのか」

「うん」

「それにしても本当にでかいな」

また言う彼だった。

「二メートルあるんじゃないか？」

「そこまではないよ」

また上から声が聞こえてきた。

「それはね」

「そうか。ないのか」

「ないから」

今度は下から声がしてきた。

「赤瀬、身長一メートル九十五だからまだ二メートルじゃない」

「成長期だからわからないんじゃないのか？」

「それでもないから」

下からの声は女の子のものだった。

「それは言っておくから」

「そうなんだ。そういえば」

その声の主をみる。彼女は。

覚えている顔だった。入試の時と合格発表の時に見たあの胸の大きな女の子、今朝も見たあの娘と一緒にいた小さな女の子だった。彼女がいたのだ。

そしてその彼女がだ。また彼に言ってきた。

「同じクラスね」

「ああ、そつだよな」

その椎名に応える陽太郎だった。

「一緒のクラスになったんだ」

「私椎名愛海」

彼女から名乗って来た。

「宜しく」

「ああ、椎名さんっていうんだ」

「椎名でいい」

呼び捨てでいいというのだ。

「気軽に呼んでくれていいから」

「じゃあ俺も斉宮でいいから」

椎名のその言葉を受けて彼もこつ返した。

第三話 入学その七

「それでいいよな」

「うん。それでこの赤瀬だけれど」

自分の横にいるその巨大な彼についての話になった。

「一緒の中学校だったんだ」

「その前に同じ学年か！？本当に」

とてつもなく大柄な彼とあまりにも小柄な彼女を見比べての言葉であつた。

「全然思えないんだけどさ」

「個人差だから」

「いや、真面目にそう返されても」

「真面目でも事実だから」

そのあまり感情も抑揚も見られない言葉で応える椎名だった。

「だから」

「そうなんだ」

「椎名さんはいい人だよ」

また上から赤瀬が言ってきた。

「同じクラスでクラス委員同士だったし」

「そうだったんだ。同じクラスでもあつたんだ」

とりあえずその言葉を聞く陽太郎だった。

「成程」

「そうだったの」

「わかつてくれたかな」

椎名と赤瀬がその彼にまた言ってきた。

「このクラスでも二人でやりたいから」

「宜しく」

「わかつたさ。じゃあ俺は」

「何になりたいのかな」

「図書委員がいいな」

微笑んでそれだというのだった。

「俺図書委員中学の間ずっとやってたからな」

「それでなのね」

「ああ、駄目かな」

「いいと思うわ」

静かに答える椎名だった。

「それでね」

「ええ。ただ」

「ただ？」

「真剣に御願ひするわ」

真面目にしてくれというのだ。

「図書委員は戦場だから」

「えっ、そうだったのか!？」

「そうよ。戦場よ」

そうなのだという。これは陽太郎にはかなり意外なことであった。

「だからね」

「何か凄い釈然としないけれどわかったよ」

そういうことにしたと言ってもよかった。

「じゃあさ。俺図書委員な」

「頑張つてね」

そんな話をする三人の後ろでだ。狭山と津島がまだ言い合っていた。

「で、御前何したいんだ？」

「厚生委員」

「じゃあ御前一人でやれよ」

こう津島に返す狭山だった。

「勝手にな。やってるよ」

「そんなの別にいいじゃない」

しかし津島はこう返すのだった。

「あんたは私が推薦してあげるわよ」

「おい、何でそうなるんだよ」

「いいじゃない。はい、決定」

強引にそう決める彼女だった。

「決定したから。覆すことできないわよ」

「じゃあ中学の時と同じじゃねえか」

「そうよ、同じよ」

完全に同じだというのだ。津島はだ。

「わかったらいいわね」

「折角高校に入ったと思ったのによ」

狭山はまたしても不満な顔を作った。作っただけである。

第三話 入学その八

「本当に中学の時と変わらないんだな」

「宜しくね」

「ちえっ、神様ってのは意地が悪いぜ」

「厚生委員決定」

椎名がその二人をすかさず指差した。

「有り難う。最初に書いておくから」

「はい、クラス委員からも言われたから」

「入学初日で決まりかよ、まだクラス会も何もしてねえじゃねえかよ」

しかし決まったことは決まった。そしてだ。

入学式なのでこの日は担任の先生の挨拶があつてそれで解散となった。桜が咲き誇り花びらが舞う中庭ではもう進入部員の勧誘が行われていた。

「映画研究会に入らない？」

「漫画描かない？」

「演劇に興味ない？」

「へえ、文科系の部活も多いんだな」

陽太郎はその数多くの勧誘を見ながら呟いた。花霞の中をしきりに勧誘することが響いている。

「この学校って」

「剣道部に入らないかい？」

「楽しいよ」

「おっ、やっぱりあったな」

目当ての剣道部の勧誘の声を聞いてだ。笑顔になった。

そしてその勧誘のところに行き入部のサインをする。するとその右横にあの赤瀬がいた。彼は柔道部の入部届けにもうサインをしていた。

陽太郎はその彼にだ。笑顔で言うのだ。

「赤瀬だったよな」

「ああ、斉宮君」

また上から言ってきた。

「君は剣道部なんだね」

「ああ、そっちは柔道部なんだな」

「うん、頑張るよ」

優しい雄牛を思わせる声であった。

「部活もね」

「そうか、じゃあお互い頑張ろうな」

「うん、そうだね」

剣道部の左隣は居合部である。そこにいたのは。

「あれっ、また」

「また？」

「ああ、何でもないさ」

赤瀬の上から聞こえる問いにはこう返した。

「何でもないからさ」

「そうなんだ」

「ああ、けれどこの学校居合部もあるんだな」

「剣道部とは別にあるんだね」

赤瀬も今はそのまま応えるのだった。

「居合部も」

「剣道と居合は違うんだよな」

それを彼に話す陽太郎だった。

「実は」

「そうなんだ」

「剣道は竹刀、形だと木刀だけれど居合は実際に真剣も使うから」

「真剣っていったら日本刀だよな」

「そうさ。それを使う場合もあるんだよな」

そのことを話すのだった。

「実際にな」

「凄いね、それって」

「あの娘が居合するのか」

その彼女を見ながらの言葉だった。

「へえ、意外だな」

「斉宮」

そしてここで、だった。椎名の声が下から聞こえてきた。

「部活決まった？」

「ああ、決まったよ」

彼女は赤瀬の隣に来ていた。彼女に対しては見下ろす形になってしまった。

「剣道部な」

「そうなの」

「それで椎名は何処の部活なんだ？」

「天文部」

そこだというのだ。

第三話 入学その九

「そこになつたから」

「天文部もあるのか、この学校」

あらためてこの八条学園の部活の多さを知る彼だった。

「文化系も凄いんだな」

「凄くするのは私達」

ここではこんなことも言う椎名だった。

「けれど部活が一杯あるのはいいこと」

「そうだよな、確かにな」

「それでつきぴー」

「あつ、愛ちゃん」

椎名はその居合部の女の子に声をかけた。すると彼女も椎名を仇名で呼んできたのだった。

「愛ちゃんは何処にしたの？」

「天文学部」

そこにしたと彼女にも言うのだった。

「それでつきぴーは高校も居合部にしたのね」

「そうなの。やっぱり高校でもいいと思って」

「いいと思う」

まさにそうだと話す椎名だった。

「頑張つてね」

「うん、頑張るわ」

「しかし」

二人の間にいる陽太郎は左右を見回しながら戸惑って言うのだった。

「何なんだ？つきぴーに愛ちゃん？」

「この娘の仇名」

椎名は前にいるその彼女を手で指し示して陽太郎に話した。

「西堀月美。だからつきぴー」

「へえ、西堀さんっていうんだ」

陽太郎はここでようやく彼女の名前を知ったのだった。

「西堀さんね」

「はい、そうです」

まさにそうだと。月美も答えてきた。

「それが私の名前です。西堀月美といいます」

「あっ、どうも」

陽太郎もその月美に挨拶をする。

「はじめまして。俺は斉宮陽太郎」

「斉宮君ですか？」

「うん、一年三組」

何処のクラスかも自分から話した。

「この。ええと」

「椎名愛海」

椎名から名乗ってきた。

「早く覚える」

「そうそう、椎名と一緒にクラスなんだ」

その彼女の言葉に応えて言うのだった。

「何か凄い縁だけれど」

「縁は人を結びつけるから」

椎名はまたぽつりと呟いた。

「それでつきぴーはどのクラスなの？」

「四組なの」

「どうやら椎名にだけは普通の口調らしい。それが窺えるやり取りだった。」

「じゃあ隣のクラスね」

「そうね。一緒ね」

「宜しくね、お隣さん同士で」

月美は優雅な笑みを浮かべて椎名に述べた。その表情は確かにそ

うしたものだ。まだ高校生だというのに既に優雅さがあつた。

「これからも」

「こちらこそ。それで」

椎名は月美に応えながら。そのうえで彼女に紹介をはじめた。それ
れは。

「こつちが赤瀬」

「どうも」

赤瀬は椎名の言葉を受けて月美に挨拶をした。

「赤瀬炎男っていうから」

「赤瀬君ですね」

「うん、宜しく」

「はい、宜しく御願ひします」

「大きいけれどとても優しい」

椎名はこう彼を紹介した。

「それに力持ち」

「何か結構凄い説明だな」

「おつちよこちよいの図書委員」

陽太郎が言ったところで彼のこと話した。

「放つておいても害はないから」

「つておい」

陽太郎は今の椎名の説明には口を尖らせた。

第三話 入学その十

「それが説明かよ」

「本当のことだから」

その落ち着いたというよりは感情の見られない言葉で返す椎名だった。

「嘘は言わないから」

「ったくよ、何だっつてんだよ」

「じゃあこれから宜しく」

椎名はまた言った。

「これからも」

「ああ、じゃあな」

陽太郎は今度の椎名の言葉には頷くことができた。そして言うのだった。

「こちらこそな」

「宜しく御願います」

月美もにこりと笑って応えた。

「これからも」

「うん、宜しく」

四人は明るく楽しく出会いの挨拶をした。しかしだ。

星華は女子バスケット部への入部届けを書き終えそのうえで剣道部のところを探した。そこに陽太郎がいると思ったからである。

それでそこに行った。しかしだっただ。

「えっ……」

陽太郎はいた。しかしだ。彼だけではなかったのだ。

そこにあの少女がいたのだ。合格発表の時、それに電車の中にいたあの女の子だ。彼女の姿も認めたのである。

「何であの娘がいるのよ」

その彼女が陽太郎と話しているのを見て呟くのだった。

「どうしてなのよ……」

まだクラスに入ったばかりで誰がいるのかさえもさっぱりわからない。実は自分の机に座っただけで他のことはまだ何もしていないのだ。

「あの女の子もどのクラスにいるのかわからない。しかしだった。」

星華は彼女を見て自分の中に嫌な感覚が起こってくるのを感じた。何かたまたまなくそれでいて歯噛みしたくなる。そうした嫌な感覚だった。

「……何よ」

そして呟くのだった。

「あんなに仲良く」

「こう呟き続ける。」

「はじめて会ったような娘と。どういうことなのよ」

その感情に包まれようとしていた。拳句には見ているのが嫌になつてその場所を離れたのであった。

その足で校門のところに向かう。暫く待っていると陽太郎が来た。

彼は星華の姿を認めると気付いたように声をかけたのであった。

「ああ、佐藤」

「……」

最初は彼の言葉に答えなかった。前を俯いて見たままである。「待っていてくれたんだ」

「まあね」

「有り難う」

何も知らない彼は明るく礼を述べた。

「わざわざな」

「いいわよ」

「いいのかよ」

「ええ」

そしてだった。つい言葉を漏らしてしまった。その言葉は。

「そのことはね」

「そのこと？」

「あっ……」

言ってしまったから気付いた。しかしであった。
すぐに訂正してだ。こう言うのだった。

「何でもないわ」

「そうなのか」

「それよりね」

取り繕ってからの言葉だった。

「もう帰るのよね」

「残っても仕方ないからな」

だからだと返す陽太郎だった。

「部活も一年はまだだしな」

「見学位はできるけれど」

「いや、やっぱり今日はいいよ」

正直なところ入学式と入部届けを書いてそれでほっとしていた。
だからもう家に帰ってすぐに休みたかったのだ。だからこう言った
のだ。

「それで明日は」

「鞆とか教科書とか買わないといけないわよね」

「あと体操服とかな」

「そうよね。ここの体操服ってね」

「体操服がどうかしたのか？」

「夏もジャージなのかしら」

そのことを少し溜息混じりに言うのだった。

第三話 入学その十一

「やっぱり」

「あれっ、普通はそうだろ？」

陽太郎は星華の言葉を聞いてこつ返した。言いながら校門を出る。これでもう学校から出た。後は家に帰るだけであった。

「ジャージだろ？やっぱり」

「男の子はそうだけれど」

星華はここで口を少しだけ尖らせて述べた。

「女の子は違うのよ」

「いや、だからジャージだろ？」

「それは中学じゃない」

「ああ、そうか」

「うちの中学校は夏でも下はジャージだったけれど」

二人の通っている中学校ではそうだったのだ。半ズボンやスパッツというものはなかったのだ。それで星華はこのことを言うのだった。

「暑かったのよね」

「暑かったのか」

「そうよ……ってあんたもそうだったじゃない」

口を尖らせての言葉だった。

「夏もジャージだったでしょ？下は」

「俺剣道の袴で慣れてるから」

だが陽太郎はここで部活のことを話に出した。

「そういうのは別に」

「慣れてるのよ」

「慣れてるよ。それにな」

「ええ。それに？」

「やっぱりあれだろ。佐藤ってバスケットだから」

「そうよ。夏はジャージじゃなくてユニフォームの半ズボンで動いてたから」

ここにそれぞれの部活の違いが出ていた。

「全然平気だったのよ」

「そうだったのか」

「そうよ。それでね」

星華はさらに話した。

「それがどうなのか気になるのよ」

「夏が暑いからか」

「半ズボンかスパッツだったらいいけれど」

「そうか。じゃあな」

「ええ、帰りましょう」

こう言っただけであった。二人で帰路につく。その途中また言う星華だった。

「ところでさ」

「今度はどうしたんだ？」

駅に向かう道は静かで落ち着いたものだ。左右の商店街は賑わっているがそれでもだ。雰囲気は静かで落ち着いた、その中を歩いていた。

「この学校って居合部もあるのよね」

「ああ、そうだよな」

俯き加減になっている星華の言葉に応えた。

「それもあるよな」

「そうよね。やっぱりね」

「やっぱり？」

「その部活って剣道部のすぐ隣でやるのかしら」

「ああ、そうかもな」

陽太郎は何も考えることなく答えた。

「剣道と居合って兄弟みたいなものだからな」

「じゃあ」

それを聞いて星華は自分の中に焦りや苛立ちといった感情が起きているのを感じた。それは何故生じたかわからないが確かに生じていた。

「あれ？」

「あれって？」

「居合部って女の子もいるし」

「いや、剣道部だっているだろ」

陽太郎はここでも星華がどうしてそんなことを言っているのか全くわからなかった。それはどうしてもであった。気付いていなかったと言ってもよかった。

「普通に。居合部だってな」

「男の子もいるわね」

「そうよね」

「いや、何でそんなこと言うんだ？」

陽太郎は星華の言葉の意味がわからなかった。

「また。何でなんだ？」

「何でもないわ」

こう言うだけの彼女だった。

「そうなの」

「何なんだよ、また」

「私はバスケ部だから」

このことも言葉に出した。

「けれど」

「けれど？」

「剣道………できないから」

また俯いていた。そのうえでの言葉だった。

第三話 入学その十二

「できても。何かそれって」

「それって？」

「うん……私やつぱり」

「だからどうしたんだよ」

俯いて呟いている星華の横で首を捻る陽太郎だった。

「またよ」

「何でもないから。そうだ」

「そうだ？」

「ねえ」

話を変えることにしたのだった。陽太郎に顔を向けてそのうえで彼に対して言ってきたのであった。

「それだけけれど」

「それで？またいきなり何なんだよ」

「参考書とかどうしようかしら」

「言ってきたのはこのことだった。」

「参考書ね。それは」

「ああ、それな」

陽太郎も言われて気付いた。実は入学や入部のことばかり考えていてその他のことには殆ど頭がいていなかったのだ。勉強の詳しい中身にもだ。

「それだよな」

「とりあえず教科書見てから考える？」

「そうだよな。けれど」

「けれど？」

「佐藤、御前ちゃんと参考書も使うんだよな」

そのことに驚いた様な言葉だった。

「中学校の時はそんなことは全然なかったのにな」

「変わったのかしら」
首を傾げさせて自分で言ったのだった。
「やっぱり」
「そうかもね。ただ」
「ただ？」
「やっぱり勉強は苦手なのよね」
困った顔になって笑っての言葉だった。
「どうしてもね」
「まあ得意不得意とかもあるしな」
「斉宮は別にそうじゃないわよね」
「いや、俺も別に」
「けれど実際そうじゃない」
自分と比べて遥かに成績のいい彼に対する言葉である。
「斉宮は普通に八条高校に入ったし」
「普通って俺だって毎日真剣に勉強したぞ」
「それでも元々頭よかったじゃない」
「だからな。俺だってな」
「私とは頭の出来が違うのよ」
今度はこんなことを言うのだった。
「違う？それは」
「頭の出来なんて誰だって同じだよ」
「違うわよ。それに」
「ここで言葉を止めてしまった。」
「私は。大体ここに入ったのは」
「んっ、どうしたんだ？」
「必死に勉強して入ったのは」
それを言うのだった。無意識のうちに。
「それは」
「おい佐藤」

事情を知らないまま星華に声をかける陽太郎だった。

「どうしたんだよ、急に」

「あつ、何でもないわ」

星華は彼の言葉に我に返った。そのうえで彼に顔をやった。

「気にしないで」

「だったらいいけれどな」

「それでね」

さらに言うのであった。

「まあ。これからね」

「これから？」

「三年間宜しくね」

今度言うのはこのことだった。

「三年ね。宜しくね」

「三年か。長いよな」

「中学校の三年は短かったわよね」

「いや、結構長くなかったか？」

「そうかしら。私は短かったと思うけれど」

「終わってみればそうかな」

星華に言われてふと思いなおす陽太郎だった。

第三話 入学その十三

「それもな」

「そうでしょ。短かったわよね」

「終わってみればあつという間だな」

「長いにしても短いにしても宜しくね」

「ああ、こちらこそな」

そんな話をしながらその日は帰った。そして次の日だ。学校に入つて二日目だ。始業式のその式の前に自分の教室に入った星華はここであるものを見たのであつた。

そこにいたのはあの少女だつた。昨日見た彼女だつた。

月美が教室の席、丁度クラスの真ん中の席に座つていた。席に座りながらそのうえで一人静かに本を読んでいたのだ。その彼女が目に入ったのだ。

「あいつ、まさか」

星華はそれを見て顔に嫌悪のものを浮かばせた。

「このクラスに？ひよつとして」

「あれっ、あの娘つて」

「えらく可愛いよな」

「そうだよな」

そしてクラスにいる男連中がここで話しているのも耳に入った。

「あんな可愛い娘がいるなんてな」

「ラッキーだよな」

「声かけるか？」

「機会があればな」

男連中はこんなことを楽しそうに話していた。しかし女連中の何人かはだ。そんな彼女を見ながらだ。クラスの端でむっとした顔で話していた。

「何さ、ちよつと可愛いだけで」

「胸が大きいだけだね」

「何だつてのよ」

明らかにやつかみの会話だった。

「あの娘何ていったっけ」

「確か西堀月美っていったわ」

「西堀っていうの？」

「そう、あの席と扉の名簿の番号一緒だから」

それでわかるというのである。

「あいつ西堀っていうのよ」

「ふうん、あの乳お化けね」

「そういう名前なの」

見れば三人組である。その三人でやつかんであれこれ言っていた。星華もそれを聞いてだ。彼女達の方に足をやっていた。そのうえで言うのだった。

「ねえ」

「んっ!？」

「どうしたの？」

「あんた誰なの？」

「佐藤星華っていうのよ」

少し微笑んで三人に答えた。右手を自分の腰に当ててそのうえで首を少し右にやっっている。そのうえで三人に対して言ってみせたのだ。

「このクラスだけれどね」

「ああ、佐藤さんっていうのね」

「宜しくね」

「ええ、宜しく」

こう三人に挨拶をしたのだった。

「これからね」

「ええ。それにしても」

「佐藤さんどう思う? あれ」

「あの女」

「あの女って？」

何も知らないふりをして三人に返すのだった。

「あの女って。誰のこと？」

「ほら、あそこに座って本読んでるあいつよ」

「あの黒のロングヘアで胸がやけに大きい」

「垂れ目のあいつよ」

「ああ、あいつね」

ここで気付いたふうを装った。表情にはそれは出なかった。

「あいつなのね」

「佐藤さんもあいつ好きじゃないの？」

「何かさ。男連中の視線集めてさ」

「むかつかない？」

「そうね。何か媚びてる感じはするわね」

星華は無意識のうちになんなことを言った。そして自分の心の動きがどうなっているのか今はわからなかった。しかしそれでも言うてしまった。

「私ああいう感じの娘って好かないのよね」

「そうよね。むかつくって感じ」

「一人だけインテリぶってね」

「何なのかしらね」

「ああいう娘はね」

自然とグループになっていた。そして星華はその中心になっていた。そのうえで三人に対して言うのだった。

「ちょっとね」

今の星華は自分がどういった感情を持ってしまっているのかも、そしてそれが自分自身をどうするのかをわかっていなかった。だがそれはもう動いていた。止めることは彼女にしかできなかったがその彼女が気付くことはなかった。

入
学

完

2
0
1
0
·
3
·
1
1

第四話 桜の木の下でその一

第四話 桜の木の下で

陽太郎の一年三組ではもうホームルームがはじまっていた。クラスの役員を決めるそのホームルームだ。

担任は顔中髭だらけの大柄で黒く濃い毛を短くかった中年の先生だった。身体つきもがっしりとしていてそれはまるで熊の様であった。

「俺の名は浅見天海だ。数学の教師だ」

「えっ、数学!？」

「嘘っ……」

一年三組の面々はその髭だらけの男が数学の教師と聞いて思わず声をあげた。

「その顔で!？」

「そんな戦国大名みたいな顔で」

「そうだ、数学だ」

しかし先生はその髭だらけの顔をにやりとさせて言うのであった。

「そして美術部の顧問だ」

「嘘みたいってどうか」

「嘘でしょ」

「ねえ」

「その顔で」

「顔は関係ないぞ」

しかしここで先生の方から言ってきた。

「人間顔じゃないぞ」

「まあそれはそうですけど」

「それでも」

それでもなのだった。まさにそれであった。

「柔道部とかじゃなくて」

「美術部ってというのは」
「違和感ありまくりですよ」
「しかも数学の先生ですか」
何処までも意表をついた先生であった。
「何ていうか」
「有り得ないんですけど」
「いや、本当に」
「有り得なくとも現実だ」
先生は見事なまでに言い切る。
「先生は美術部の顧問で数学を教えている」
「ううん、受け入れ難いんですけど」
「昨日はちょっと聞いただけでしたけれど」
「何か」
「あと趣味は酒だ」
今度は自分の趣味についても話してきた。
「それを絵を描くこと、読書に音楽鑑賞だ」
「柔道とかじゃないんですか？」
「あとプロレス鑑賞とかも」
「というか酒以外は」
「やっぱり違和感凄いですけれど」
「絵は油絵で読書はラディゲやスタンダールだ」
その内容についての話にもなる。
「そして音楽はモーツァルトやベルリオーズだ。どうだ？」
「だから本当ですか!？」
「モーツァルト!？」
「その顔で」
「その身体で」
皆実に容赦がない。とにかく違和感に満ちているというのである。
そしてそれは誰も否定できなかった。先生以外はそうであった。
「何ていうか」

「ここまでギャップのある先生なんて」

「お酒以外は全然納得できません」

「酒はカクテルやワインだ」

「えっ!？」

また啞然となったクラスの面々であった。

「ええと、どぶろくとか焼酎じゃなくて」

「カクテルにワインですか!？」

「本当ですか？」

「そうだ。大好きだぞ」

こう言う先生だった。

「これでわかったな。あと嫁さんは一人だ」

「ああ、結婚されてるんですね」

「それはちゃんとしてるんですか」

「子供は男が一人。もう二人は欲しいな」

何気に望みも話してきた。

第四話 桜の木の下でその二

「まあそんなところだ。これから一年宜しくな」

「はい、じゃあ」

「宜しく御願ひします」

「それでは早速だ」

自己紹介が終わってからの言葉であった。

「いいか？」

「はい、それじゃあ」

「今度は何ですか？」

「クラス委員とかを決めるぞ」

それをするというのである。

「いいな、それで」

「クラス委員ですか」

「他にもですか」

「そうだ。まずはクラス委員」

それから決めるのだという。委員を決めるうえで基本である。まずは長から決めるのである。

「それだが。誰がいるか？」

「誰かっていうと」

「それは」

「いないなら先生が指名するぞ」

これもオーソドックスな流れであった。最初のクラス委員は大抵こうして決まるものである。もっとも違うケースも多分にあるが。

「それでいいか？誰かいないか？」

「はい」

「やります」

しかしであった。ここで男女それぞれ一人ずつ手を挙げてきたのであった。見ればとてつもなく大柄な男とかなり小柄な女であった。

先生は二人を見てだ。まずはその名前を問うのであった。

「名前は何ていうんだ？」

「赤瀬です」

「椎名です」

二人はそれぞれ名乗った。

「クラス委員やらせて下さい」

「私も」

「よし、わかった」

志願なら問題ない。先生も満足した顔で頷く。

「じゃあ御前等二人で委員な」

「わかりました」

「それで御願いします」

「よし、クラス委員は決まった」

これで最初に肝心なことが決まったのであった。

「それじゃあ後はだ」

「他の委員ですよね」

「それですよね」

「そうだ。他のも志願を受け付けるぞ」

先生はそれもだというのだった、

「じゃあな。まずは保健委員な」

こうして先生の主導でクラス委員も全て決まった。陽太郎達は昨日椎名に言われた通りそれぞれの委員に立候補した。それで決まりであった。

「図書委員ね」

「ああ、ちゃんと立候補したる？」

「ええ」

そのホームルームの後で教室の後ろで話す椎名と陽太郎であった。他の面々もそこにいる。

「有り難う」

「御礼はいいけれどな」

陽太郎はそれはいいとした。そのうえで椎名に対して言うのであった。

「それよりもな」

「それよりも？」

「まさか本当に自分達から手を挙げるなんてな」

言うのはこのことだった。

「あれには少し驚いたよ」

「だから決めてたから」

「僕もね」

椎名だけでなく赤瀬も言ってきた。声が聞こえてくる位置がそれぞれ違う。

「言ったと思うけれど」

「それはね」

「いや、それでもな」

陽太郎はまだその二人に言うのだった。

「まさか本当に立候補するなんてな」

「言ったことはちゃんとするから」

「だから」

これが二人の反論だった。

第四話 桜の木の下でその三

「そうしただけだよ」

「本当にね」

「凄いな」

陽太郎は腕を組んでそんな彼等を褒めるのだった。

そしてだ。こうも声をかけた。

「それじゃあな」

「どうしたの、今度は」

「頑張ってくれよ」

微笑んでの言葉だった。

「これからな。クラス委員な」

「斉宮も」

椎名がその彼に伝えて言ってきた。

「図書委員頑張ってるね」

「ああ、これは俺の天職だからな」

彼は笑ってこう答えた。

「それはな」

「図書委員が天職なの」

「将来図書館に勤めようと思ってるんだ」

何気に将来の夢も話すのだった。

「あと博物館もいいよな」

「じゃあその資格を取ればいいわ」

まさにそうすればいいという椎名だった。

「その二つをね」

「ああ、大学に入ったら勉強するからな」

「そうするといいわ」

そんな話を三人でしているとここに狭山と津島も来た。そうして彼等の話の輪の中に入って来たのである。

「よお、委員さん達と図書委員かよ」
「元気みたいね」
「来たのね」
椎名はその彼等を見ても言ってきた。
「美化委員ね」
「ああ、それになったからな」
「宜しくね」
「美化委員か」
陽太郎はその彼等を見て言うのだった。
「何か津島はともかくとしてな」
「俺かよ」
「狭山、御前ちゃんときるのか？美化委員なんて」
「おい、俺はな」
その狭山が怒った声を出してみせて応える。
「これでも掃除はちゃんとするんだぞ」
「そうなのか」
「そうだよ。綺麗好きなんだぞ」
少しムキになっての言葉だった。
「俺だってな」
「じゃあいいけれどな」
「これは本当のことよ」
津島もそうだと言ってきた。
「こいつお掃除とかは真面目にするから」
「そうなのか」
「私は職業柄そうだけれど」
ここで津島はこう言ってきたのだった。
「職業っていうかお家の仕事の関係でね」
「お家の仕事？」
「うちケーキ屋なの」
「それだというのだ。」

「喫茶店と一緒にあったね」

「へえ、ケーキ屋だったのか」

話を聞いた陽太郎は意外といった顔になった。

「それで掃除とか念入りにやるんだな」

「お店の中でゴキブリなんか出たら」

津島は食べ物を扱う商売で最悪のケースを例えに出してきた。

「終わりじゃない。お話にならないでしょ」

「だからか」

「そうよ。お掃除は念入りにするの」

まさにそうだというのである。

「だからなのよ」

「それでなのか」

「そういうこと。お掃除は真面目に」

津島は真面目な顔で話す。

第四話 桜の木の下でその四

「だからよ」

「何か適材適所なんだな」

「それ基本だから」

静かに言ってきた椎名だった。

「その意味ではいい顔触れになったわ」

「そうなのか。しかしな」

「しかし。どうしたの」

「いや、まだクラスがはじまったばかりだけれどな」

それでもまだというのだ。

「それでもな」

「それでも。どうしたの」

「いや、息が合ってるよな」

言うのはこのことだった。

「それもかなりな」

「そうね」

椎名もその通りだというのだ。

「それはその通りね」

「上手くやっついていけるか？」

陽太郎はこのことも言うのだった。

「このままな」

「いけるようにするのよ」

その彼にまた言ってきた椎名だった。

「そうするものよ」

「いけるようにするのよ」

「ええ、そうよ」

またそうだというのである。

「努力してね」

「こついうのにも努力が必要なのか」

「人の関係は築いていくものだから」

「抑揚のない言葉だがその通りだった。」

「だから」

「だからか」

「ええ。だからよ」

椎名の言葉は続く。

「努力していくものよ」

「人付き合いって今まで自然になると思っていたけれどな」

陽太郎は実際に今までこつ考えていたのだった。

「馬が合う奴とは自然に友達になるものだと思ってたけれどな」

「ある程度はそうよ」

「ある程度はか」

「けれどそれ以上になつたら」

その場合はというのだ。

「そういうことが必要だから」

「だからなのか。成程な」

「ええ。だから斉宮も」

「俺もか」

「努力する時にはして」

そうしろというのだった。

「必要になつた時は」

「ああ、わかつたよ」

彼も椎名のその言葉に頷いた。

「それじゃあその時にはな」

「絶対にその時は来るから」

その落ち着いた目での言葉である。

「その時は努力して」

「ああ」

椎名の言葉に頷く陽太郎だった。

「その時はな」

「それで斉宮」

椎名の言葉は続く。

「図書委員だけれど」

「ああ、それが」

「頑張れば絶対に役に立つから」

「図書委員なんてそんな大事な仕事か？」

「そもそも思い言葉に出した。」

「受付だけでいけるだろう？」

「そうだけれど何でも頑張れば絶対にいいことがあるから」

「だからか」

「そう。だから」

その感情の見られない声での言葉だった。

第四話 桜の木の下でその五

「頑張つて」

「ああ、じゃあな」

「じゃあ私達もね」

「だからいつも俺を巻き込むな」

口を尖らせて津島に抗議する狭山だった。

「まあよ。なつたからにはな」

「真面目にしようね」

「ああ。それは絶対にやるからな」

「それでだけれど」

また言う津島だった。

「ねえ。椎名だったわよね」

「ええ」

椎名は名前を尋ねられこくりと頷いてから返した。まだ入学して二日目なので名前は完全に覚えきれてはいないのである。

「そうよ」

「そういう訳だから。頑張るからね」

「御願いな」

「ええ。それに」

「それに？」

「一年宜しくね」

「こつも言うのだった。」

「これから一年ね」

「わかつてるわ。じゃあ」

津島もそれに頷く。三組は平和に動いていた。

しかし四組は違った。星華が昨日会った三人と話していた。

「それであんたの名前は」

「州脇っていうの」

「そう。州脇っていうの」

「そう。州脇由香」

こう名乗ったのは髪を肩のところまで切り揃えた少し垂れ目の少女だった。

「宜しくね」

「州脇っていうのね」

「そうよ。州脇でも由香でもどっちでも呼んでもいいから」

「わかったわ。じゃあ由香ちゃん」

一人がここでこう呼んだ。

「宜しくね」

「こっちもね」

「それでね」

次に名乗ってきたのは長い黒髪をシャトーにしている女の子だ。スタイルがすらりとしていて綺麗な目をしている女の子である。

「私は野上幸恵っていうの」

「じゃああなたは」

「やっぱり私もどっちでもいいから」

この場合は名字でも名前でもだということだ。

「どっちでもね」

「じゃあ幸ちゃんでもいい？」

「その仇名で」

「いいわよ」

彼女もこれで仇名が決まった。

そして最後の一人は小柄で茶色のセミロングの髪に黄色いヘアバンドをしている。ラテン系を思わせるかなりはっきりした顔立ちである。

その彼女も自分から名乗ってきた。

「橋口智美っていうの」

「あなたは智つちかしら」

「それでいいわよね」

「ええ、それでね」
「これでお互いの名前はわかったわね」
「ここで星華がにこりと笑って言った。
「もう私名前言っただわよね」
「佐藤星華ちゃんよね」
「星華ちゃんでもいい？」
「それで」
「ええ、いいわよ」
笑顔で返す彼女だった。
「名前はそれでね」
「わかったわ、じゃあ星華ちゃん」
「これで宜しくね」
「三年間ね」
「何かいきなり友達できたよね」
笑顔で三人に話す星華だった。
「ほっとしたわ」
「そうよね。とてもね」
「やっぱりお友達いるっていいよね」
「そうそう」
三人も彼女の言葉に頷く。そしてそのうえで今日も自分の席に座ってそのうえで一人で本を読んでいる月美を見るのだった。最初に言ったのは星華だった。

第四話 桜の木の下でその六

「ねえ」

「あいつよね」

「西堀だったわよね」

「何かいけ好かないね」

「そうよね」

四人で言い合うのだった。

「深窓の令嬢ぶっててね」

「何か嫌な感じ」

「全く」

「胸もやけに大きいし」

月美のその胸も見る。そしてその他も見るのだった。

「顔も何よ」

「顔まで綺麗な感じよね」

「全く」

三人が忌々しげに言う。星華も如何にも嫌そうな顔をしている。そのうえでのやり取りだった。

「あとね話聞いたけれどね」

「どうしたの？智うち」

「何の話聞いたの？」

橋口の今の言葉に州脇と野上が問う。

「あのね、あいつね」

「ああ、西堀の奴ね」

「あいつまだ何かあるの」

「お家淒いお金持ちなんだって」

「このことも話されるのだった。」

「八条グループの企業の一つの重役さんの娘なんだって」

「えっ、八条グループっていったら」

「この学校もそうじゃない」

八条学園は八条グループが経営しているのである。その他にも様々な企業を経営している世界規模の大グループなのだ。

そのグループの重役の娘だというのだ。そのことも話に出たのである。

「そんなところの娘さんなの」

「何よ、それ」

「顔とか胸だけじゃないなんて」

「完全なお嬢様ってやつ？」

「気に入らないわね」

「全く」

こう口々に言う三人だった。

「そんな奴がいるなんてね」

「腹が立つわね」

「何なのよ」

とにかく月美への嫌悪を露わにする三人だった。

そしてだ。それは星華も同じだった。彼女はその感情に赴くまま悪意を漂わせた笑みで三人に対して言ってきたのであった。

「ねえ」

「どうしたの？星華ちゃん」

「何かあったの？」

「次ホームルームあるじゃない」

その笑みで言うのであった。

「次ね」

「うん、そうだけれど」

「何かあるの？それで」

「クラス委員決めるじゃない」

星華の笑みにある悪意がさらに出て来ていた。

「その時にだけれど」

「ああ、わかったわ」

「そういうことね」

「成程ね」

三人も彼女と同じ笑みになって話す。

「あいつに押し付けるのね」

「いいじゃない、それって」

「やろうやろう」

「ああいう奴は痛い目見ればいいのよ」

星華は自分では気付いていなかった。今自分がどういった顔になっているのかを。そして気付かないまま言うのであった。

「もうそれでね」

「よし、やろう」

「それでね」

「あいつに押し付けてやろうよ」

これで四人のやることは決まった。そしてホームルームがはじまり先生の紹介が終わりクラス委員の話になるとだ。すぐに星華が手をあげてきた。

「先生」

「ええと、佐藤だったか？」

「はい」

「そうか、御前がやってくれるのか」

「いえ、違います」

それは笑って否定するのだった。

第四話 桜の木の下でその七

「私じゃないです」

「じゃあ何で手を挙げたんだ？」

「一人是非やりたいって人がいます」

これは嘘だった。横目でちらりと月美を見る。彼女は皆と同じく星華に顔を向けて驚いた顔になっていた。誰がやるのかといった顔だった。

一瞥してから微笑んでだ。また言うのだった。

「その人のことです」

「ああ、そんな人がいるのか」

先生はそれを聞いてまずは頷いたのだった。

「それはいいな。おかげでこっちから選ばなくて済む」

「はい、そう思います」

「それで誰なんだ、それは」

先生はそれが誰かも尋ねた。

「誰がやってくれるんだ？それで」

「西堀さんです」

そして月美の名前を出すのだった。

「西堀さんがやってくれます」

「えっ……」

それを聞いた月美は思わず声をあげた。まさか自分が言われるとは思ってもしなかった。だから余計に驚いていた。

そしてだ。ここで三人も言うのだった。

「西堀さんって偉いよね」

「そうよね」

「自分からやってくれるなんてね」

自分達が言うことで月美を逃げられなくし周りの賛成も掴もうというのだ。こうして彼女を追い込んで無理にでも決めさせるのである。

った。

「凄いよね」

「クラス委員つてとても大変なのに」

「立派よね」

「じゃあ西堀さん」

星華もわざと笑みを作って月美に顔を向けて言ってきた。

「それで御願ひするわね」

「私が、ですか」

「皆もそれでどうかしら」

星華は今度は周りに問うた。周りも巻き込もうというのだ。完全に三人と協同して月美を逃げられなくしてさらに追い込むのであった。

「それで」

「何かよくわからないけれど」

「それでもね」

「クラス委員してくれるのなら」

「いいわよね」

「じゃあ決まりね」

ここでまた言う星華だった。

「クラス委員は西堀さんね」

「私は」

「まあ西堀」

先生も言ってきた。月美は俯きながら何とか言おうとしたその時にだ。彼女に対して言うのだった。

「じゃあ頼むな」

「は、はい」

「クラス委員はこれで決まりね」

微笑んでまた言う星華だった。

「女の子のはね」

「そうね。決まり決まり」

「西堀さん宜しく」

「頑張ってね」

三人もわざとらしく拍手さえしてみせる。こうして月美を無理矢理クラス委員にしたのだった。星華はことが上手くいって楽しそうに笑った。

そしてホームルームの後の休み時間でだ。四人は今度は教壇のところ立ってだ、そのうえで楽しそうに話をするのだった。

「上手くいったわね」

「そうね。クラス委員押し付けられたし」

「いい感じよね」

まずは三人が楽しそうに話す。

「あいつの顔見た？」

「もう泣きそうな顔になってたわよね」

「いい気味」

「そうよね。いい気味よ」

四人の中心にいる星華も楽しそうに笑っている。

「ああいう奴は痛い目に逢わせないとわからないからね」

「そうよね。何か生意気な感じ」

「一人だけお高く止まってね」

「ほら、今だって」

三人はここでまた忌々しげに月美の方を見る。彼女は相変わらず自分の席に座って暗い顔になっている。その顔で本を読んでいる。

第四話 桜の木の下でその八

しかしだ。その彼女のところにクラスの男連中が来てだ。親しげに声をかけてきた。

「頑張つてね、西堀さん」

「クラス委員頑張つてね」

「期待してるからね」

「あつ、はい」

月美は本から顔を離してそのうえでにこりと笑って応える。三人はその彼女を見てその苦々しい顔をさらに苦くさせるのであった。

そしてその顔でだ。さらに話すのであった。

「何よ、あれ」

「男には表情変えて嫌な感じ」

「媚びてるんじゃないわよ」

完全に先入観だけで話している。しかし彼女達はそれには気付いていない。

「嫌な感じ」

「何さ、ちよつと顔がよくて胸が大きいだけで」

「お金持ちの家なのがどうしたのよ」

「そうよね」

それに星華も頷く。

「あいつ、全然反省してないわよね」

「星華ちゃん、やつちやおうよ」

「あんな奴許したら駄目よ」

「そうそう」

「そうね」

星華も三人の言葉に頷く。そのうえでの言葉だった。

「あいつ、そもそも」

ここで無意識の中に陽太郎の顔を思い出した。言葉にも出ていた

がそれには気付かなかった。あくまで無意識の中での話だ。

だがそれでも心の中にサブリミナルの様に刻み込まれ。そのうえで言うのだった。

「やっぱり。もっと痛い目に逢わせてやらないとね」

「そうよ、そうしないと」

「何か嫌な奴だし」

「お姫様のつもり？」

口々に忌々しげに言い続ける。

「もっともっとね」

「やってやるよ」

「そうよね」

「ええ。本当にね」

彼女を一番そうした目で見ているのは他ならない星華だった。 6

「これからはもっとね」

「そうよね。あとさ」

「あと？」

ここで三人の言葉を聞く星華だった。

「どうしたの？」

「星華ちゃん部活入ってたっけ」

このことを尋ねてきたのである。

「部活。何処だったっけ」

「バスケットよ」

星華は少し自慢げにその問いに答えた。

「そこよ」

「そう、バスケットね」

「うちのバスケットって強いのよね」

「それこそインターハイの常連だしね」

「強いよ」

「そんなに強かったの」

星華は三人のその話を聞いて少し意外な顔になった。

「うちの女子バスケット」
「八条高校女子バスケット部っていったら結構有名じゃない」
「何でそれ知らないのよ」
「星華ちゃんって中学の時もバスケットやったの？」
「ええ、そうだけれど」
「この問いには少し弱く返したのだった。」
「それはね」
「じゃあ何で知らなかったのよ」
「うちの学校の女子バスケットのこと」
「どうしてなの？」
「ここに入る時は勉強のことだけを考えていたのよ」
「その事情を話すのだった。」
「もう偏差値が高いつていうことだけ頭にあつて」
「他のことは知らなかったのね」
「見なかったの」
「とにかく合格することを考えていたのよ」
「右手の人差し指を振りながらの言葉だった。」
「それで。他のことはね」
「そうなの。とにかく受かろうつて思つて」
「それ以外はだったの」
「そうなのよ。まさかバスケット部まで強いなんて」
「今はじめて知ったことが明らかだった。そしてそのうえだった。」

第四話 桜の木の下でその九

星華は首を捻ってだ。また言うのだった。

「文武両道でもあったのね」

「部の種類だつて多いしね」

「色々な部活が強いのよ」

「そうなの」

「そうよ。その中にはね」

「面白い部もあるし」

三人はそれぞれ楽しそうに星華に対して語っていく。

「居合部とかね」

「居合部……」

居合と聞くとだった。星華の顔がそれだけで急激に歪んだ。

そしてそのうえで。忌々しげな声になって言うのだった。

「あそこね」

「あれっ、どうしたの？」

「顔色急に変わったけれど」

「何かあったの？」

「別に」

今はそれについては言おうとはしない星華だった。

「何もないけど」

「そうなの。それでその居合部ってさ」

「剣道部とか柔道部と同じ道場らしくて」

「うちの学校の道場ってかなり広いから」

「このことも言う三人だった。」

「部が三つも入るのよね」

「凄いのね」

星華はそれを聞いて少し目を伏せて返した。

「うちの学校の道場って」

「とにかく凄いの多い学校だから」

「この三年間かなり楽しいと思うよ」

「そうそう」

三人は能天気話していく。今は月美のことは忘れていた。

しかしであった。星華は違っていた。居合部と聞いてだ。余計に彼女を意識して見ざるを得なかった。目が暗いものになっていた。

「あいつ、近くだったら」

心が曇ってきていた。しかもそれが晴れることはなかった。

そのまま暗鬱な気持ちになっていく。そこでだった。

「ねえ」

「星華ちゃん、ちょっと」

「どうしたの？」

「えっ!？」

言われてそれにはっとなる程だった。

「どうしたって」

「急に暗くなって」

「どうしたのよ」

「何かあったの？」

「あつ、別に」

それは誤魔化して返したのだった。

「何もないから」

「そう。だったらいいけれどね」

「あとさ。お昼になったら」

「お昼に？」

「食堂行こう」

「そこに行こうよ」

こう言って彼女を誘ってきたのである。

「この学校って食堂も立派らしいし」

「だからね。一度見に行こう」

「ついでに食べよう」

「そうね。じゃあ」

このことには素直に乗ることができた星華だった。

「お昼は食堂ね」

「パンも悪くないけれどね」

「今日はそれにしよう」

「カレーか何かにしようよ」

三人は星華に対して明るく話す。

「ラーメンでもいいし」

「私は親子丼がいいわね」

「ハンバーグ定食なんてどう？」

三人はもうその関心を昼食に向けていた。やはり月美のことは完全に何処かにいつている。

「それか焼きそば定食とか」

「オムライスもよくない？」

「ざる蕎麦もね」

「星華ちゃんは何にするの？」

「私？そうね」

星華はまだ暗い顔になっていた。しかしそれでも少し考えてから述べた。

第四話 桜の木の下でその十

「じゃあ。ホツケがあれば」

「ホツケ!? ホツケって」

「あのお魚の?」

「そう、あれ」

そのホツケだというのである。

「あれがあればいいけれど」

「あれは確かに美味しいけれど」

「学校の食堂にあるかしら」

「そうよね」

三人はこのことにはかなり疑問であった。確かに学校の食堂には普通ホツケのようなそうした魚はあまり見られないものではある。

「それがなかったらどうするの?」

「その時は」

「その時は鯖や鮭でも」

「こつも言う星華だった。」

「とにかくお魚がいいわ」

「星華ちゃんってお魚好きなの」

「そうなの?」

「ええ、好きよ」

実際にそうだと答えるのだった。

「お魚はね。特に味噌煮とかフライとかお刺身とか」

「そうなの。お魚好きなの」

「そうだったの」

「天麩羅も好きよ」

言いながら大体フライと似たものだと思ったがそれでも言うのだった。

「海のものなら何でも」

「そう。じゃあカキフライでもいいのね」

「海老フライでね」

「どちらも大好きよ」

フライを聞いても笑顔になるのだった。

「とにかく。海のものがあればいいわね」

「じゃあ天麩羅うどんとか」

「そういうのは？」

「あっ、それもいいわね」

実際に笑顔になる星華だった。やはり好きなのである。

「おうどんも嫌いじゃないし」

「とにかく食堂行こう」

「まずはね」

「そうよね。最初はね」

こうして話は決まった。こうして四人でその食堂に向かう。

その昼陽太郎はだ。まずは購買部に行った。そこでパンを買うのである。

「サンドイッチにしたの」

「他にも色々買ったけれどな」

椎名達と一緒にだ。他には狭山に津島、それと赤瀬といった面々だった。

「まあサンドイッチが多いよな」

「何サンドにしたの？」

「ハンバーグサンドにカツサンドにな」

「他は？」

「ハムサンドに野菜サンド。あとホットドッグ買ったよ」

「多いわね」

「ホットドッグは二本な」

それだけ買ったというのである。

「さあ、何処で食うかだよな」

「それならいい場所があるよ」

陽太郎のそれと比べて二倍もの数はあるパン類を持っている赤瀬が言ってきた。

「中庭に行けばいいよ」

「中庭か」

「そう、そこ」

そこだというのである。

「そこでどうか」

「いいんじゃないか？」

「そうよね」

狭山と津島はお握りを買っている。それを持つての話である。

「今日は天気もいいいな」

「桜を見ながらうらうらのもいいわよね」

「そうね」

椎名は二人の言葉にも応えて頷いた。

「それじゃあ行きましょう」

「そうだな。じゃあ場所は」

陽太郎はその食べる場所についても考えた。

「何処がいいだろうな」

「いい場所があるわ」

ここでまた言う椎名だった。

「それなら」

「何処？そこ」

「まずは外に出しましょう」

他の四人に告げた言葉だった。

第四話 桜の木の下でその十一

「その中庭にね」

「そうだな。じゃあ」

「今から」

こうして五人で中庭に出る。そうしてそのうえで椎名が案内した場所は桜の木の下だった。その下にビニールを敷いて座るのだった。

「そうか、ここか」

「どう？」

椎名は陽太郎に対して問う。見れば彼女もその手にパンを持っている。しかしそのパンは何かというのだ。

「ええと、ロシアパンか」

「それとチーズ蒸しパン。他にも黒パン」

「ロシアパンか」

「食べたたら頑丈になれそうだから」

だから選んだというのだ。見ればその大きさはかなりのものだ。

小柄な椎名が持てばそれはさらに大きく見えるものであった。

「だから」

「何かよくわからない理由だな」

「ロシアは大きくて何があってもすぐに復活するから」

少なくともその体力と回復力と生命力では他の国家の追随を許さない。

「それでなの」

「それでなのか」

「あとこれ」

言いながらさらに出してきたのは牛乳だった。毎日骨太である。

「これを飲むの」

「牛乳？」

「これで最高だから」

その独特の抑揚の見られない口調で話す。

「パンには牛乳」

「まあいいけれどな。俺はこれにしてるけれどさ」

陽太郎が出してきたのはフルーツジュースだった。

「ビタミンも考えてさ」

「僕はこれ」

赤瀬は野菜ジュースと牛乳を出してきた。二本である。

「これだけ飲んで食べないと身体がもたないから」

「そうだろうな」

陽太郎はその彼を見上げながら述べた。

「赤瀬でかいもんな。二メートルあるんじゃないか？」

「そこまではないけれど」

「けれど二メートル超えるような」

「このままいけばね」

狭山と津島はお握りに相応しいお茶であった。やはりお握りにはお茶である。ペットボトルのものだ。

「なるよな」

「成長してるから」

「なるかな、やっぱり」

赤瀬自身からも言ってきた。

「やっぱりこのままだと」

「なるって。まだでかくなるからな」

「間違いなくね」

「二メートルか」

陽太郎もそれを言う。

「そこまででかくなれるなんてな」

「羨ましい？」

「もつと背欲しいとは思ってるさ」

実際そう思っている陽太郎だった。

「せめて一八〇はな」

「それ欲張りだから」
「ここで言ってきたのは椎名だった。」
「それで満足すべき」
「何でそう言うんだよ」
「小さいから」
「ぼつりとした感じで言う椎名だった。」
「私は」
「そういえば椎名ってな」
「そうよね」
「狭山と津島もここで言う。」
「小柄だよな」
「結構ね」
「昔からそうだった」
「またその抑揚のない声で言うのであった。」
「小さかったから」
「つまり小柄か」
「そういうことなのね」
「どうしても伸びなかった」
「自分で言うのだった。」

第四話 桜の木の下でその十二

「伸びたいけれど」

「伸びたいのか」

「それでなの」

「そう、まだ伸びるかな」

「こう言うのであった。津島が言う。」

「私は無理だと思うわ」

「無理なの」

「女の子の成長期って早いし」

「大体小学校高学年からである。この辺りから変わってくるのだ。」

「私達の歳にはもう」

「終わるの」

「個人差があるけれどね。終わるから」

「じゃあ私はこのまま」

「言いにくいけれど」

「それでも言うのであった。」

「諦めた方が」

「そうなの」

「まあ気にしない気にしない」

「無理矢理こう言ってしまう津島だった。」

「女の子はそれでもいいから」

「いいの」

「小柄な娘が可愛い娘がいるから」

「そうだというのだ。これは実際に好みなのでそうした男もいる。」

「実際に椎名は顔立ちも整っている。美少女と言ってもいい顔立ちである。」

「だから」

「だからなの」

「気にすることはないわ。あと斉宮」

「俺？」

「そうよ。あんたが贅沢なのは事実ね」

彼への言葉はこれだった。

「それはね。断言できるわ」

「一八〇は欲しいって言ったわよね、今」

「ああ」

「それ贅沢だから」

陽太郎を指差しながらの言葉だった。

「あんたもう一七五あるわよね」

「まあそれはな」

「それだけあれば充分じゃない。まあ狭山は無意味に背が高いけれど」

「俺だと無意味なのかよ」

「そうよ。変にひよる長くて顔が長い印象を受けるのよ」

狭山に対しても言うのであった。

「元々長い顔がね」

「人を茄子か何かみたいに言うなよ」

「まあそこまで顔は曲がっていないけれどね」

「それでも無意味かよ」

「それでバスケットかやるのならまだわかるけれど」

「バスケットなあ」

それを言われると首を少し捻っていた。お握りを食べながらそう
したのだ。

「嫌いじゃないけれどな」

「けれどあんた映研よね」

「ああ、そこだよ」

所謂映画研究会である。そこに入ったのである。

「中学の時と同じだな」

「あんた映画好きよね」

「ドラマも好きだぜ」
笑いながら話す狭山だった。
「そっちもな」
「そうだったわね、そっちも」
「そういうの観るの好きなんだよ」
狭山の顔は笑ったままである。
「だからな。今日もな」
「部活？」
「そっちにも顔出させてもらってパソコンで観るんだよ」
「ドラマ？映画？どっち？」
「ああ、ドラマの方な」
そちらだというのだ。
「そっち観ようって思ってるんだ」
「四月だから新しいドラマ一杯はじまるしね」
「だからな。まずチェックしないとな」
「それで面白そうなドラマある？」
「それを今から確かめるんだよ」
そうするというのだ。
「帰ってからな」
「そうなの」
「最後まで観ないとわからないドラマだってあるしな」
狭山はドラマについてさらに話す。
「まあそれはそれでな」
「いいの」
「観る価値はあるしな」
「成程ね。面白そうなのあったら教えて」
「ああ、そうするな」
「あっ」

二人が話す中でふと椎名が声をあげた。

第四話 桜の木の下でその十三

「来た」

「来たって?」

「つきぴー」

月美であった。彼女が今一つ晴れない顔で来たのである。椎名はその彼女を見てすぐに声をかけたのである。

しかしだ。彼女はそれに気付かない。狭山がここで言った。

「聞こえてないんじゃないのか?」

「そうよね」

それに津島も頷く。

「そうみたいだけれど」

「それじゃあ」

椎名はここで懐から携帯を取り出した。それを左手に取ってすぐに入力するのだった。

するとだ。不意に月美の携帯が鳴った。その曲は。

「あつ、この曲」

「わかるんだ」

「ああ、この曲って」

陽太郎が赤瀬に応えながら言う。

「ドボルザークだよな」

「そうだね」

「新世界の四番だよな。俺あの曲好きなんだよ」

「クラシック好きなんだ」

「お袋が好きなんだよ」

だからだというのである。

「それでなんだよ」

「それで好きなんだ」

「ああ、実はな」

「この事情も話した。」

「それでなんだよ」

「そうなんだ。お母さんいい趣味してるね」

「綺麗系が好きなんだよ」

「ハンバーグサンドを食べながら話すのだった。」

「それで俺もな」

「成程ね」

「それだけでけれど」

「食べながらさらに話す。」

「なあ、椎名」

「うん」

「来たぞ」

「わかってるわ」

その月美は携帯を見てそのうえで椎名達に顔をやってた。静かにそこに来た。そうしてすぐに椎名に対して言ってきたのであった。

「愛ちゃん、中庭で食べてたの」

「そうなの」

自分のすぐ傍に立つ月美を見上げて答える。

「つきぴーはどうしたの？」

「私はもうお弁当食べたから」

「そうだというのだ。」

「だからもう」

「じゃあ今はお腹一杯ね」

「ええ」

椎名の言葉に謙虚そうな仕草でこくりと頷くのだった。

「そうなの」

「わかった」

椎名は月美のその言葉に頷いた。

「じゃあどうするの」

「そう言われても」

「一緒にいない？」

少しおどおどしたものを見せてきた月美に対する言葉だった。

「何もなかったら」

「いいの？」

「一人でいるより皆でいる方がいいから」

月美は今度はこう言った。

「だからね。一緒にいよう」

「ええ、わかったわ」

月美は椎名のその言葉に静かに頷いた。

「それなら」

「一緒にいるだけでいいから」

また言う椎名だった。

「それだけで」

「何か変な理屈だな」

二人、というよりは椎名の月美に対する言葉を聞いて言う陽太郎だった。

「いるだけでいいなんて」

「人間って顔を合わせるだけで違うから」

椎名はその陽太郎に対しても同じようなことを言ってきた。

「だからいいの」

「そういうものか」

「そう。それでつきぴーは座って」

「ええ」

「それでお話しよう」

完全に椎名のペースだった。そのうえで話は進んでだ。月美は椎名の横に座ってそのうえでその談笑に加わることになったのだった。

第四話 桜の木の下でその十四

月美は座ると鞆から何かを出してきた。見ればそれはメロンパンだった。

「あれっ、食べたんじゃないの？」

「今言つてたけれど」

「デザートです」

月美はこう狭山と津島の問いに答えた。

「これは」

「そうか、デザートか」

「それで持ってるの」

「はい、じゃあこれ頂きますので」

「つきぴーはパンが好きなのよ」

そのメロンパンの袋を開ける彼女の横にいる椎名がまた言った。

「それでお昼のデザートとかにいつも持ってるの」

「そうだったの」

「そうなの」

また話すのだった。

「特にメロンパンがね」

「はい、大好きです」

その頼りなげな顔を微かに笑わせての今の月美の言葉だった。

「メロンパン。お母さんが好きで」

「ああ、そうなんだ」

陽太郎はそれを聞いて述べた。

「それでなんだ」

「あっ、貴方は」

「また会ったね」

陽太郎は微笑んで月美に告げた。

「何か縁があるよね」

「そうですね」

月美もその笑みで彼に応えた。

「何か」

「今日もこうして会ってね」

「入試の時から」

「同じクラスだから」

椎名がここでまた言ってきた。

「私とこれ」

「おい、ちよつと待てよ」

陽太郎は今の椎名の言葉には少し抗議した。

「これってなんだよこれって」

「名前ど忘れしたから」

「本当か？」

「嘘」

僅か二つの文字でそれは否定した。

「ただの悪ふざけだから」

「悪ふざけかよ」

「そうよ。悪ふざけよ」

それだとまた話す椎名だった。

「私の趣味なの」

「悪趣味だな」

「そうかしら」

「そうだよ、悪趣味だよ」

こう返す陽太郎だった。

「全くな、椎名って意外とそういうところあるんだな」

「ああ、これ意外とじゃないから」

「ここで赤瀬が話す。 8」

「椎名さんってお茶目だからね」

「お茶目っていうのか？これって」

「はい、そうです」

赤瀬だけでなく月美も言ってきた。

「愛ちゃんは場を和ませる為にこうした冗談をよく言いますよ」

「そうだったのか」

「そうですねですよ。いい娘ですよ」

「うふふ」

ここで表情を崩さず笑う椎名だった。

「私はいい娘」

「そうかなあ」

「何か曲者っぽいけれど」

狭山と津島は首を傾げさせてそれはどうかと言う。

「しかし。見ているとな」

「飽きないっぽいわね」

「はい、愛ちゃんは見ていると飽きません」

また笑って言う月美だった。

「一緒にいるだけで楽しくなれます」

「つきぴーも一緒にいたら和む」

「癒し系か？」

「中々お付き合いしてくれないけれどいい娘」

椎名は月美を評してこう言った。

「とても」

「そうなのか。じゃあ西堀さんだったよね」

「はい」

「あらためて宜しく」

こう月美に言うのだった。

「これからね」

「はい、宜しく御願います」

陽太郎の言葉に微笑んで応える月美だった。

「これからも」

「剣道部と居合部って一緒に道場だしね」

「そうですね。あつ、私それに」
「それに？」

「弓道部にも入りました」

「それにも入ったというのである。

「そちらも頑張ります」

「えっ、弓道もかよ」

「そっちもしてるの」

狭山と津島はそれを聞いて目を丸くさせて驚いた。

「武道家なんだな」

「かなり意外」

「意外ですか」

「だってな。凄い美人さんだし」

「おしとやかな感じよね」

月美のその楚々とした外見を見ての言葉だったのである。実際に彼女のsの外見はどちらかという文学少女のものである。武道の印象はない。

「あまりそういうのはな」

「感じがないから」

「それでも居合も弓道もいいものです」

それはいいというのである。

「身体だけでなく心も鍛えられます」

「心も？」

「それもなの」

「はい、私はまだまだ未熟ですけど、性格故か謙遜も出た。

「そう言われています」

「まあ何かさ」

「心は優しい感じよね。礼儀正しいし」

それはわかるというのである。月美のそつした性格はだ。

「性格美人？」

「そうよね」

「つきぴーは押しが足りないの」

椎名がまたぼつりとした感じで言うてきた。

「それは何とかしないと駄目だけれど」

「まあそれは少しずつやっていけばいいんじゃないか？」

こう言ったのは陽太郎だった。

「ゆっくりとき。時間はあるし」

「時間はですか」

「そう、やっていけばいい」

「そうだといいのである。」

「そう思うよ」

「わかりました。では少しずつ」

月美は静かに頷いた。二人の関係も少しずつだった。

だがそれと共に確実だった。確実に進んでいっていた。

桜の木の下で

完

2010・3・20

第五話 部活でその一

第五話 部活で

八条学園の部活の始動は早かった。入学して暫くでもうはじまっていた。

「行って来ます」

「あれっ、もうなの？」

「朝練か」

「ああ、そうなんだ」

陽太郎は朝食を食べ歯を磨いて顔を洗ってすぐに家を出る。その時に両親に言うのである。

「もうなんだ」

「早いわね」

「そうだよな、部活がはじまるのが」

「まあそうだよな」

言われてみてそのことに返す両親だった。陽太郎もそれに返す。

「早いよな」

「ええ、それでもいいことね」

「部活でいい汗を流せるのはな」

「顧問の先生もしっかりした人みたいだし」

陽太郎はそれも聞いて安心していたのである。

「別に無茶な暴力振るったりおかしな練習強制する人でもないみたいだしさ」

「そういう先生って多いからね」

「全くだ」

二人もこのことは知っていた。教師という世界は閉鎖的な世界故かどうしてもおかしな人間も割合的に多くそのうえそうした人間が排除されない世界なのである。

「おかしな親も多いけれど」

「おかしな先生も多い」

これが世の中だった。

「そうした先生に教わってもね」

「いいことはないからな」

「いいことないんだ」

「当たり前でしょ。暴力受けて何かあつてからじゃ遅いじゃない」

「心が身体に傷を負ったらどうするんだ？」

こうしたことが実際に起こるのが世の中である。そしてそうした教師が問題にならないということは腐敗そのものであると言ってもいい。

「そんなことになるのなら剣道は道場でもできるから」

「別にそこまでして部活に行くこともないからな」

「剣道は道場でもできる。まあそうだけれど」

陽太郎もこのことはよくわかつていた。わかり過ぎる程にだ。

「わかつてない人間も多いからね」

「顧問のよし悪しが部活を決めるのよ」

また言う母だった。

「もう碌でもない教師もいるから」

「そうなんだよな。まあ中学校はそうじゃなかったけれど」

言い換えれば今の高校はわからない、そういうことになる。

「まあ今は頑張るか」

「とりあえず今はな」

「しつかりとやって来なさい」

「じゃあ行つて来るね」

妹はまだ寝ていたので挨拶はしなかった。こうしてもうはじまっている朝の練習に参加するのであった。そうしてその電車に乗るとだった。

「あつ……」

「おはようございます」

乗ったその車両に月美がいた。席の端の座って本を読んでいる。

その彼女に会ったのである。

「この電車なんですか」

「部活の朝練でさ」

「私もです」

相変わらずおどおどとした調子で返す月美だった。

「それは」

「そうなんだ。ああ、そういえば居合部も」

「はい、朝練です」

それであるおいうのである。

「朝練ですから」

「そうだよな。剣道部と居合部って朝練も一緒なんだな」

「道場も一緒なら」

「流石に朝は防具は着ないみたいだけれど」

「走るんですよ、確か」

「うん。居合部も？」

月美の座っている場所の横に来て話す。彼は立っていて扉のところに立つ。そうして月美とそのまま静かに話すのだった。

第五話 部活でその二

「やっぱり走るんだよな」

「朝は何処でもそうみたいですな」

「朝はランニングか」

「ええ、そうですね」

月美は本を持ったままそのうえで陽太郎に顔を向けている。見上げた形で話をしているのである。陽太郎はその顔を見下ろす形になっている。

「他には筋力トレーニングも」

「ジャージか、学校の」

陽太郎は着る服についても述べた。

「それ着てか。まだ体育の授業もまだなのにな」

「そうですね。私もジャージ持って来てくれって言われました」

「先輩に？部活の」

「はい、言われました」

そちらから言われたというのだ。

「それで、です」

「そうだよな。何かうちの剣道部って真面目みたいだな」

「居合部も」

「まあ真面目にしないと危ないからな、剣道も」

陽太郎の剣道への考えである。

「竹刀使うし」

「居合も。やっぱり」

「流石に練習では真剣使わないよな」

陽太郎は少し真剣な顔でそれを問うた。

「それは」

「はい、木刀です」

それを使うというのだ。

「それで練習というか稽古します」

「そうだよな。居合も凄いやな」

「いいですよ。精神が研ぎ澄まされる気持ちになれて」

月美はにこりと笑って話すのだった。

「弓道もそうですけれど」

「そういえば西堀って」

陽太郎はここであることを思い出した。それは月美は居合だけではなく弓道もしているのである。そのことを話すのである。

「あれだよな、結構色々やってるんだよな」

「色々ですか？」

「ああ、色々な」

していると話すのだった。

「してるんだな」

「昔から習いごとはよくしてました」

「それで塾も。あの椎名と一緒に塾に」

「愛ちゃんはあの時からいい娘で」

月美は椎名のことを話すと自然に笑顔になる。それは明らかに親友に対する顔であった。そしてここで自分からあることを話してきた。

「この本も」

「あつ、その本って」

月美が持っているその本を見るとだった。それは太宰治のものだった。『富岳百景』、この作家の中期の代表作であり固定の愛読者も多い作品だ。

「太宰治なんだ」

「愛ちゃんがいいって薦めてくれて」

「あいつが太宰かあ」

「意外ですか？」

「変な本ばかり読んでる気がするんだよな」

これは彼の予想である。多分に偏見も入っている。

「魔道書とか。何かそういうのとか」

「うふふ、愛ちゃんはそういう人じゃないですよ」

月美は楽しそうに笑ってそれは否定した。

「ただ。結構お茶目で」

「お茶目か。何か別の言葉が似合いそうなんだけれどな」

悪意とかそういう言葉が思い浮かぶ。やはり陽太郎の椎名への感情は今はおかしなものを見るようなそうしたものであった。

「本当にな」

「少しずつわかってきます。私愛ちゃんには随分と助けてもらってますから」

「そういえばつきぴーなんて仇名で呼んでるし」

「それも愛ちゃんが名付けてくれたんですよ」

「いい本も教えてくれてか」

「はい、愛ちゃんはとてもいい娘です」

そんな話をしながら一緒に部活に向かう。そうしてそのうえで朝練をしてそれが終わって顔を洗いすっきりしてから教室に入る。するとそこにもう椎名がいた。彼女は自分の席に静かに座ってある本を読んでいた。それは。

第五話 部活でその三

「御前も太宰なんだな」

「『ヴィヨンの妻』よ」

太宰の晩年の作品である。後期の彼の自己破滅的、自己退廃的な特徴がよく表われている作品の一つである。名作としても有名な。

「それ読んでるの」

「西堀は『富岳百景』でか」

「つきぴーに太宰は似合うから」

「御前はどうなんだ？」

「私にも似合う」

「いや、それはあまり」

このことには首を傾げさせる陽太郎だった。

「そうは思わないけれどな」

「何で？」

「御前結構おかしな奴だからな」

本人に対して直接言うのだった。

「魔道とか呪いとか。そういうの興味ないか？」

「ある」

返答は一言だった。

「大好き」

「やっぱりな」

そしてそれを聞いて素直に納得する陽太郎だった。

「そうだと思っただよ」

「そう見えるの？」

「ああ、見える」

遠慮なく言う陽太郎だった。

「それはな」

「そうなの」

「って怒らないのか」
「そう見られるの好きだから」
これは陽太郎にとっては意外な言葉だった。
「だからね」
「じゃあ別に怒ってないんだな」
「怒ってないわ。ただ」
「ただ？それでも何かあるのかよ」
「あるから」

あるというのである。話は何か椎名のペースになってきている。ただし陽太郎はこのことにはどうも気付いていないといった様子である。

「それは」

「どうあるんだ？」

「私本好きだから」

こう言ってきたのである。

「だから色々な本を読んてるの」

「そうなのか。じゃあ太宰もか」

「そう。太宰好き」

手に持っているその本を見ながらの言葉である。

「前期のも中期のも後期のも」

「どれも好きなのか、太宰の作品は」

「それでどれが一番好きなんだ？」

「『走れメロス』」

それだというのだ。

「あれが一番好き」

「へえ、あれがか」

「メロスは知ってるわね」

「ああ、それはな」

陽太郎もそれはよく知っていた。太宰の最高傑作の一つであり最も有名な作品の一作でもある。太宰といえばこの作品とまで言われ

ている。

「小学校でも習ったしな」

「そうよね。私も小学校の時に習って」

「それで太宰好きになったのか」

「そうなの」

まさにそうだというのである。

「それで好きなの」

「成程な。だからか」

「そうよ。それでね」

「今度は何だ？」

「斉宮も読む？」

こう言ってきたのである。

「太宰。どうかしら」

「そういえば太宰はあまり読んだことなかったな」

陽太郎はここで自分のことを思い出したのだった。そういえばであつた。

「太宰はな」

「じゃあ余計にどうかしら」

「ああ、読んでみる」

また言つ彼だった。読むというのだ。

第五話 部活でその四

「それで何がいいんだ？」

「何がって？」

「だからだよ。太宰のどの作品を読めばいいんだよ」

彼が言うのはこのことだった。太宰治と一口に言ってもその作品は数多い。短編が中心だがその数はかなりのものであるのだ。

「具体的にどれがいいんだ？」

「新ハムレットとかどうかしら」

「ハムレット!？」

「太宰はそれも書いてるの」

本当に太宰に詳しい椎名だった。

「だから。どうかしら」

「そうだな。ハムレットか」

「シェークスピアのとはまた違う」

椎名はまた言ってきた。

「だからどう？」

「ああ、じゃあ早速本屋に行って買って来る」

「あと御伽草子もいい」

この作品も出してきた。

「太宰は中期も最高にいいから」

「最後の方はどうなんだ？」

「文学的には高いけれどそれでも感動したりできるのは中期」
こう話すのである。

「走れメロスも中期だし」

「中期が一番いいのか？」

「いいけれどそれでも」

「それでもか」

しかしなのだった。

「そうか、まずは中期か」

「太宰は後期も読めることは読めるから」

「読めるのか」

「芥川と違って」

もう一人の異才の名前が出て来た。芥川に太宰は我が国の文学史にその名を残す文壇の異才である。芥川と太宰は並び称されてもいる。

「読めるから」

「芥川の最後の方ってそんなに酷いのか」

「芥川は知らないの」

「ああ、読んでるのはラノベばかりでな」

「そうなの。それで」

「それでそんなに酷いのか？」

今度は芥川の末期の作品について問う陽太郎だった。

「滅茶苦茶酷いのか」

「おかしい」

返答はここでは一言だった。

「頭がおかしくなっていていつてたから」

「そんなにおかしいのか」

「そう、だから気をつけて」

「ああ、わかった」

椎名の言葉に頷く。この日はかなり文学めいていた。それは部活が終わってから一緒にだった。駅前の本屋に入り太宰の本が置いてありそんな文庫本のコーナーに行くのであった。

「あつ、西堀」

「斉宮君もですか」

「ちよつと椎名に紹介されたんだよ」

このことを素直に話すのだった。

「それでなんだ」

「愛ちゃんにですか」

「太宰がいつてさ。ええと、確か」

目を上にやって言う。言われたそのタイトルを思い出しながら言う。

「新ハムレットだったかな」

「あつ、あれですか」

「知ってるのか？新ハムレット」

「はい、知ってます」

微笑んで答える月美だった。その太宰のコーナーの前での話になっている。

「いい作品です」

「それと御伽草子とか」

「あれもいいんですよ」

話す月美の声が弾んでいる。表情も晴れやかなものになっている。

「もう読んでいるだけでああいいな、って思えてきて」

「太宰そんなに好きなのか」

「はい、大好きです」

その言葉に力が入ってきていた。

「本当に」

「そうか。じゃあ俺に何かいいの薦められるかな」

「そうですね。やっぱり御伽草子ですね」

月美もにこりと笑って話した。

第五話 部活でその五

「それですね」

「何か椎名と同じこと言うな」

「新ハムレットも本当にいいですよ」

「この作品を出して来たのも同じだった。」

「それで何にされますか？」

「そうだな。じゃあそれにするか」

「御伽草子ですか」

「ああ、それにさせてもらおうよ」

微笑んで応えた言葉だった。

「じゃあそれでな」

「はい、わかりました」

こう話してそのうえでその本を買ってだった。陽太郎は月美と一緒に店を出た。二人並んで店を出てそのうえで話をするのであった。

「それなのですから」

「それで？」

「太宰はとにかく中期の作品がいいですから」

「へえ、そんなにいいのか」

「愛ちゃんも言っていましたよね」

月美は椎名の名前をここでも出してきた。もうすぐ夜になることする夕暮れの世界の中でだ。二人並んで歩きながら話をするのである。

「中期の作品がいいって」

「あいつが西堀に教えたのか」

「そうなんです。それで実際に読んでみて」

「中期がよかったのか」

「前期も後期もいいですけど」

どちらもいいというがそれでもであった。

「中期が一番好きなんです」

「走れメロスは何時頃の作品なんだ？」

「あれも中期です」

即答だった。

「他にもその御伽草子もそうですし富岳百景も津軽もですよ」

「中期にいい作品多いんだな」

「太宰に駄作はありません」

今度はこんな言葉を出してきた。この言葉から彼女が本気で太宰に入れ込んでいることがわかる。そうでなければ言えない言葉だった。

「けれど中期は特にです」

「そうか、じゃあ中期か」

「はい、是非読んで下さい」

「わかったよ。じゃあ家に帰ったら早速な」

「はい」

こんな話をして楽しく帰っていた。しかしであった。

その二人の後姿をだ。見ている者達がいた。

「何、あれ」

「西堀よね」

「そうよね」

州脇の野上、それと橋口だった。その三人が後ろから見たのだ。

三人は駅前の店を見回って遊んでいた。その時の帰りだったのである。

「あいつももう男引つ掛けたの？」

「ふん、何さ」

「フェロモン撒き散らしてね」

「早速男騙すなんて」

「信じられない奴ね」

「全くよね」

こう口々に言うのだった。そして相手を見る。ただし暗がりの中

なのでその姿はあまり見えない。そのうえでの話であった。月美は
何とか見えている。

「それにしても相手は」

「あれ誰かな」

「何年かしらね」

いぶかしみながら見る。そして制服をまじまじと見る。

「ええと、長いわよね」

「うん、長いわね」

「色は青ね」

「ここまではわかった。

「青くて丈の長い制服ね」

「それじゃあうちの生徒みたいね」

「そうよね。あの制服ってうちの制服の一つよね」

それぞれこつ話していく。

第五話 部活でその六

「うちの学校って制服多いけれどね」

「そのうちの一つだし」

「じゃあ間違いないわね」

「そうよね」

こうそれぞれ話していく。しかしであった。

三人は話しながらだ。目を細めさせてだ。月美だけでなく相手の男も見る。しかしそれでも相手が陽太郎だとはわからない。それは無理だった。

「何かしら、一体」

「あいつって」

「何年でどの組かしらね」

それはどうしてもわからなかった。しかし月美が男と一緒に歩いていることはそれぞれの頭の中にインプットした。そのうえで次の日教室でそのことを話すのだった。

「結局誰なんだろうね」

「そうよね。見てよ西堀」

「何さ、あれって」

その自分の席でいつも通り本を読んでいる月美を見て忌々しげに言うのだった。

「如何にも満足してます、充実してますって顔でね」

「そんな顔で本なんか読んで」

「ふざけないでよ」

「全くね」

「ちよつとあんた達」

そしてここで彼女達のところに星華が来た。そのうえで声をかけるのだった。

「何話してるのよ」

「あつ、星華ちゃん」

「おはよう」

「朝練終わったのね」

「今日も朝からハードだったわよ」

星華は少し笑って三人に応える。教壇のところの端に四人集まった形になった。そうしてあらためて四人になって話を再開するのだ。
つた。

「もうね。殆どダツシユで五キロ走るんだから」

「朝に五キロって結構じゃないの？」

「そうよね」

三人はその話を聞いて言う。

「女子でそれは」

「かなりなんじゃ」

「おまけに放課後も走るのよ」

星華はこのことも話した。

「もうね。走ってばかりなのよ」

「それって陸上部みたいじゃない」

「まんまそれじゃない」

「走ってばかりって」

「走るだけじゃなくてね」

星華は苦笑いを浮かべて三人にさらに話す。

「筋トレーニングも凄いしね」

「そんな部活なの」

「そこまで凄いのね」

「ええ。けれどね」

ここで星華の笑みが変わった。爽やかなものになる。

「強くなるって実感はあるわね」

「そこまで練習したらなのね」

「そついうことなのね」

「ええ、そついうこと」

練習すればそれだけ強くなる。そして自信もできる。そういつい」とだった。

「流石にそれだけのことはあるわ」

「そう。だったら」

「頑張ってるね」

「うん、そうさせてもらおうわ」

そんな話をしていた。だがここでふと橋口がさも嫌そうな顔で言うのだった。

「ねえ、見てよ」

「どうしたの？」

「何かあったの？」

「ほら、あいつ」

州脇と野上の言葉にも返す。こう言って月美を指差して言うのである。

「あいつよ。またああしてお澄まししてさ」

「うわ、本なんか読んで」

「如何にも勉強してますって感じよね」

「しかもその本がよ」

橋口はさらに言う。

第五話 部活でその七

「太宰治よ」

「太宰ね」

それを聞いた星華の顔が暗いものになった。

「太宰治って。何かベタよね」

「そうよね。文学少女って感じよね」

「狙い過ぎじゃない」

「全く」

こう言って顔を顰めさせる四人だった。そのうえで月美への偏見を強めていく。そしてそれがそのまま態度に出してしまうのだった。

星華は三人を連れてその月美のところに来た。そのうえで言うのだった。

「あのさ」

「はい？」

「どうなったのよ、あれ」

まずはこう月美に言うのだった。

「あれよ。どうなったのよ」

「あれとは？」

「だから。クラスの日誌よ」

実は今思い出して言ったのである。言い掛かりだからそうなるのも当然だった。

「今日取って来るんでしょ。それで日直に渡すんじゃない」

「そうよ、それよ」

「日誌よ」

「それどうなったのよ」

三人も月美の席を半月状に囲んだ。そのうえで銘々言うのだ。

「まさか持って来てないとか言うんじゃないでしょうね」

「クラス委員がそれでいいの？」

「本読むのもいいけれどちゃんとしてよね、そっちも」

「はい、それでしたら」

しかしであつた。ここで月美は晴れた顔になつてだ。そのうえで答えてきた。

「もう持つて来ています」

「えっ!？」

「ここにありません」

その言葉に驚く月美達に対してさらに言つてきてだ。それから自分の机の中から黒いものを出してきた。それを四人に見せてきたのだ。

「これですよね」

「え、ええ」

星華は彼女のその言葉を戸惑いながらも受けた。

「それだと思つわ」

「そうですね。じゃあすぐに日直の人に渡しますね」

「あるならあるつて言えばいいのに」

「そうよ」

「早く言いなさいよ」

攻撃する材料がなくなつたので四人はすっかりやる気をそがれてしまつていた。それでもぶつくさとした感じで言葉だけは出すのであつた。

「全く。じゃあね」

「早く渡しなさいよ」

「いいわね」

「はい、わかっています」

「ふん、何よ」

四人はすすごととした感じで月美の前から去る。星華はその彼女の方を振り向きながらそのうえで忌々しげに呟くのだった。それしかできなくなつていた。

「あるならあるつて言えばいいのに」

「そうよ、勿体ぶってさ」

「感じ悪いわ」

「本当よね」

三人もそれに続く。しかしだった。

勝敗は明らかだった。四人は敗れた。そして退けた月美はである、そつと携帯を出してメールを送る。メールを送りながら呟くのだつた。

「愛ちゃん、有り難う」

こつ御礼も言う。そしてその日の昼だった。月美はこの日は食堂にいた。そこで椎名と向かい合つて座りそのうえで話をしている。

「有り難う」

「メールのことね」

「うん。愛ちゃんが日直日誌を取りに行こつて言うてくれたわよね」

「ええ」

「おかげで思い出せたわ」

そうだというのである、

「あそこで誘ってくれたから」

「たまたまよ」

それだけだというのである。椎名はだ。

「それはね」

「そうなの？」

「御礼はいいわ」

そしてこつも言うのだった。

「それはね」

「そうなの」

「それだけけれど」

今度は椎名の方から言うてきた。彼女はきつねうどんを食べている。それに対して月美が食べているのはカレーライスである。それもカツカレーだ。

「ねえ」

「どうしたの？」

「私、まだ食べようと思って思ってるけれど」「
言うのはこのことだった。」

第五話 部活でその八

「それはどうかしら」

「いいんじゃないかしら」

月美は目を少ししばたかせてから椎名の問いに答えた。

「それで」

「じゃあ何食べよう」

「パン？」

月美はふとした感じで述べた。

「それとかは」

「そうね。おやつみたいな感じね」

「ほら、今食べてるの食べ終わったら」

「わかった。じゃあそうする」

月美の言葉を受け入れたものだった。

「それ食べるから」

「じゃあ早く御飯食べてね」

「そうね。ところでつきぴー」

「何？」

「斉宮どう？」

今度は彼のことを問うたのだった。

「斉宮はどうなの」

「斉宮君が？」

「一緒に電車での行き帰りだよね」

「ええ、そうだけれど」

月美も素直に答える。カレーを食べながらだ。

「その時のことよね」

「うん。どう？斉宮」

「優しい人だと思うわ」

まずはこう答えた月美だった。

「それに素直な人で」

「素直なのは確かよ」

それはその通りだという椎名だった。

「馬鹿正直とも言うけれど」

「馬鹿正直って」

「実際そうだから」

やはり椎名の言葉には毒がある。しかも意識してしている。

「あいつそついう奴」

「けれど嫌いじゃないのね」

「うん、私嫌いな奴とは話もしない」

自分のその主張も言うのだった。

「というか近寄りもしない」

「そつよね。愛ちゃんって好き嫌いはつきりしてるから。というよりは」

「いうよりは？」

「嫌な奴にはそれなりのことをするから」

これが椎名のポリシーだった。彼女は黙っているだけで終わらせる人間ではない。相手にはそれなりの態度で返す人間であるのだ。

「齊宮はいい奴」

「愛ちゃんはそつ思うのね」

「つきぴーと一緒にいていいから」

そつも言うのだった。

「けれど何かあつたら私もいるから」

「有り難う」

「それじゃあこれを食べたら」

話はそこに戻った。食べ物についてだ。

「それからだけれど」

「パンね」

「食べる」

やはりそつするといつのである。

「ちゃんね」

「わかったわ。じゃあ私も」

「うん。ところでつきぴー」

椎名はまだうどんを食べている。そのうえでの言葉だ。

「今困ってない？」

「困ってるって？」

「私は何時でもつきぴーの味方だから」

こう言うのである。

「困ったことがあったら何時でも何でも言って」

「ええ、それじゃあ」

「いじめられていたら絶対に許さないから」

「私を？」

「そんな訳ない」

月美自身ではないというのだ。その言葉は揺れ動かない言葉だ。

第五話 部活でその九

「つきぴーをいじめる奴を許さない」

「許さないの」

「そんな奴いたら徹底的にやるから」

目の光が強い。本気なのがそこからわかる。

「その時は」

「そんな、物騒な」

「けれど本気」

その言葉は変わらない。あくまでそれである。

「絶対にそうするから」

「そんなことはないから」

「だったらいいけれど」

「うん、じゃあ愛ちゃん」

月美は話が物騒になってきたことを察して話を変えた。咄嗟にある。

そしてそのうえで。自分がカレーを食べ終えてみせた。行動でも示したのだ。

「行こうね」

「うん、じゃあ」

こう話してだった。二人でパンを買ってそれも食べる。そしてそれが終わってからだ、それぞれ部活に向かい汗を流したり頭を使うのだった。

月美は袴になり道場にいた。白い上着に紅の袴が映えている。その手には木刀があり左手に持っている。そのうえで周りの視線を受けていた。

「おいおい、着物の上からでもわかるな」

「そうだよな」

「でかいよな」

「顔も綺麗だしな」

「髪もな」

黒のロングヘアである。その髪形も人気の元になっていた。

「いい感じだよな」

「一年であんな美人が入るなんてな」

「普通ないよな」

「ラッキーだよな」

「って俺達剣道部だろうが」

言っているのは剣道部の面々だった。月美のいる居合部とは同じ道場だからだ。それで見てそのうえであれこれと話しているのだ。た。

「同じ部活じゃないぞ」

「まあそうだけれどな」

「それでも同じ道場じゃないか」

「やっぱり運がいいよな」

「そうそう」

そんな話をしながら月美を見ている。しかしここで。

「おい、御前等」

「げっ、先生」

「来られたんですか」

「今来たばかりだ」

上下共濃紺の剣道着を着た白い角刈りの初老の男が怒った顔で立っていた。

「全く。稽古前の掃除はしたか？」

「え、ええ。一応は」

「しましたけれど」

「ならまずは走れ」

次はそれだというのだ。

「準備体操としてな」

「はい、わかりました」

「それじゃあ」

「まずは走ることだ」

その角刈りの先生は厳しい声で言う。

「一に走り二に走りだ」

「二年になってもですか？」

「三年になっても」

「俺の大嫌いな巨人のピッチャーに別所哲也という男がいた」

どうやらこの先生はアンチ巨人らしい。それが窺える言葉だった。

「そいつはとにかく走った。走って三百勝した」

「剣道じゃないですけど」

「それでもですか？」

「そうだ、剣道でも同じだ」

かなり強引に同じだとするのだった。

「とにかく走れ、素振りや稽古はそれからだ」

「体力ですか？つまりは」

「そこからですか」

「そうだ。いいな、まずは走れ」

「やれやれ、朝も走ったし放課後も」

「本当に走ってばかりの剣道部だな」

こんな話をしてだ。そのうえで行くのであった。当然その中には

陽太郎もいる。彼等はジャージ姿でその広い学園内を走るのだった。

校内には桜が咲き誇っている。陽太郎はその中を走りながら言うのだった。

「なあ」

「ああ、斉宮か」

「どうしたんだ？」

「いや、俺達だけじゃないんだな」

こう同じ一年の面々に言うのである。その桜を見ながらの言葉だ。

第五話 部活でその十

「走ってるのって」

「ああ、居合部も走ってるよな」

「向こうは袴でな」

「何か大変だな」

「こう言うのだった。」

「動きにくいだろうな」

「何で朝はジャージで放課後は袴なんだ？あつちは」

「先生の方針らしいぜ、顧問のな」

「こうしたことを話しながらのランニングだった。」

「朝は時間がないから仕方ないけれど居合は日本の心だから」

「心か」

「だからちゃんと袴を着て何でもするんだと」

「だからだというのである。」

「それでらしいぜ」

「何かうちの剣道部と全然違うな」

「こういう時はジャージだからな」

「だよな。楽だしな」

「このことに喜んでる彼等だった。」

「ジャージってな」

「あの先生とにかく走れって言うらしいぜ」

「ああ、野球の話出してまで言うしな」

「それはわかるよな」

「それとだ」

「ここで二年の先輩が彼等に言ってきた。」

「あの先生の前で阪神の悪口は言うなよ」

「ああ、阪神ファンなんですな」

「それでなんですか」

「虎キチだ」

俗に言う熱狂的阪神ファンのことである。阪神という球団はとにかく人を熱狂させるものがある。どんなことになっても絵になるだからだろうか。

「そして巨人はだ」

「嫌いなんですね」

「それもかなりですか」

「ああ、巨人が勝ったらその日は自棄酒だ」

よくある話だ。

「阪神に勝つたらな」

「うわ、大変な先生なんですね」

「じゃあ次の日は機嫌が悪いんですか」

「とはいっても授業や部活には影響させないがな」

つまり節度があるというのである。学校の教師という職業にはそういう節度を持っている人間が少ないのも残念ながら事実である。

「まあそれでもだ」

「巨人ファンって言ったら駄目なんですね」

「それは」

「死にたくなければ言うな」

結論はそれだった。

「わかつたらいいな」

「まあ俺達も阪神ファンですし」

「巨人ファンいるか？」

「俺ソフトバンクだけじゃ駄目か？」

「リーグ違ったらいいんじゃないのか？」

走りながらそんな話をするのだった。

「別にな」

「そうだよな、巨人じゃないといいよな」

「そうだよな」

「おい、斉宮だったよな」

陽太郎にも話が来た。彼は野球の話になったところで黙っていたのだ。その彼にも話が来たのである。

「御前は何処のファンなんだ？」

「何処なんだ？」

同級生達がそれを尋ねる。

「阪神か？それとも他のチームか？」

「巨人じゃないよな」

「ああ、日本ハム」

こう答える彼だった。

「セリーグは阪神だけれどな」

「じゃあいいんじゃないか？」

「阪神だったらな」

「巨人は嫌いか」

「ああ、嫌いだけれどな」

これは本当のことである。彼はアンチ巨人でもある。なお彼の一家はパリーグはばらばらだがセリーグは阪神で統一されている。そして嫌いな球団も巨人で統一されている。一家全員由緒正しいアンチ巨人なのだ。

「負けたらやっぱり嬉しいよな」

「だよな、やっぱり巨人はな」

「さっさと負けるよな」

「そうそう」

「負ける負ける」

こんなことを話しながら走っていた。この日はこうしたランニングと筋力トレーニング、それと素振りをしていた。基礎的な練習専門だった。

第五話 部活でその十一

結局ずっとジャージだった。一年達は練習の後で汗を拭きながら話をしていた。

「今日ずっとジャージか」

「まあ一年だと基礎トレばかりになるしな」

「これも当然か」

「だよな」

「そうだよな」

陽太郎もそれに入っている。皆で話す。

「やっぱりな、今は」

「袴着たいけれどな」

「今はまだ先か」

「仕方ないな」

わかっていることなのでそれはいいとするのだった。流石にこうしたことはわかっていないと部活はやっていけるものではない。

「最後にも掃除して」

「それで解散だよな」

「だよな」

こんなことを話してだった。掃除をして解散になる。陽太郎は制服に着替えて帰る時にだ。校門のところまで彼女と会ったのであった。

「あれっ、また」

「会いましたね」

月美とである。彼女は彼に顔を向けてにこやかに笑ってきた。

「一緒の道場ですから。一緒になりやすいですよね」

「そうだよな。それでだけれど」

「それで？」

「あの本のことだけれど」

陽太郎はこの話を切り出した。そして二人並んで歩きはじめる。

「ほら、太宰の」

「どうですか？太宰は」

月美は太宰の話になると晴れやかな顔になった。普段はあまり明るいとは言えない表情であるが今は違っていた。その顔で応えてきたのだ。

「御伽草子ですよね」

「かちかち山の話もあったんだ」

「浦島太郎もありますよ」

「そうだよな。何ていうか」

「意外ですか」

「ああ、意外だよな」

こう答えた。

「太宰つてもつと何かこう」

「暗いですか？」

「そのイメージもあるしさ。結構明るいところもあったんだな」

「太宰は明るい性格だったそうですし」

「えっ、そうだったのか!？」

陽太郎は今の月美の言葉を聞いて思わず声をあげてしまった。

「太宰つて明るい性格だったのか」

「意外でした？」

「意外も何も」

陽太郎の声はうわずっていた。そして実際に言うのだった。

「太宰が。そういう性格だったなんて」

「そうだったんです。それで作家ですけれど昼型の生活で」

「徹夜とかしなかったんだ」

「そうなんです。昼に起きて仕事するタイプで」

「それで生まれは」

「はい、津軽です」

太宰といえば津軽である。彼の一族は今でも津軽で政治家を出していたりする。彼の父や兄の代には津軽でも有名な名士であったの

だ。

「それは御存知ですよね」

「ああ、津軽の大地主の家の出だったよな」

「そうです。太宰はその家で生まれ育って」

「色々あつたんだよな」

これは陽太郎も知っている。太宰については言うまでもない話だ。

「確か」

「はい、複雑で興味深い生い立ちですよね」

「それで明るいんだ」

陽太郎はその話を聞きながら首を傾げさせている。

「何か信じられないな」

「御伽草子は暗い作品ではないですよね」

「明るいつていうか」

問われるまま話す。

「あれだよな。説明が多いというか」

「太宰の解釈がかなり入ってますよね」

「太宰版御伽草子か!？」

陽太郎はこう表現した。

「つまりは」

「はい、そうです」

月美の言葉はさらに明るくなった。弾んでさえいる。

「太宰の御伽草子なんですよ、あれは」

「そうか、太宰のか」

「新ハムレットも同じで」

「太宰のハムレットなんだな」

「そうです。ですから」

こう話していくのだった。

「太宰の御伽草子を楽しんで下さい」

「そうさせてもらおうよ。それでさ」

「はい、それで」

「太宰の作品他にもいいのあるよな」

「このことを尋ねるのだった。」

「あの作品の他にも」

「もうあり過ぎて困る位です」

「そんなになんだ」

「太宰に駄作はないですから」

見れば表情もだった。目がにこにことして弾んだものになっていく。

「ですから」

「駄作なしなんだ」

「モーツァルトと太宰にそれはありません」

今度は天才音楽家の名前も出て来た。

「これは本当です」

「わかったよ」

陽太郎は月美のその真剣な言葉に微笑みで返した。

「じゃあこれからも」

「読んでくれるんですね、太宰」

「そうさせてもらうよ」

二人は太宰の話で盛り上がり深くなっていた。二人はまずは自然な付き合いからはじめていった。それは星華の気付くものではなかった。

第五話 完

第六話 次第にその一

第六話 次第に

四月が終わりゴールデンウィークも終わった。陽太郎は自分の教室で今は自分の席でへばった感じで寝そべっていた。その彼に椎名が声をかけてきた。

「疲れた？」

「休み終わったからな」

そのへばったままの様子で彼女に返したのだった。

「だからなあ。もうな」

「ゴールデンウィークの間何してたの？」

「部活」

やはり姿勢は寝そべったままだ。

「それ以外には何もな」

「部活だけ？」

「ああ。部活行って家帰って勉強してパソコンやって」

「他は？」

「本読んで。それだけだよ」

「太宰？」

具体的にはどの作家のものなのかを尋ねる椎名だった。

「まだ読んでるの？」

「太宰はあらから読んだから」

「そうなの」

「ああ。今読んでるのは三島由紀夫」

その作家だというのだ。尚三島は太宰を終生嫌っていたことで知られている。学生時代に本人に向かってその文学は嫌いだと言ったこともある。そしてかなり辛辣な、いささか感情的とも取れる批判した文章も残している。

「それなんだよ」

「そう。三島なの」

「西堀の薦めでな」

具体的には彼女からの薦めであった。

「それなんだ」

「三島も薦めたから」

「やっぱり椎名が薦めたのかよ」

「うん。そうなの」

やはり彼女だった。

「三島由紀夫もいいでしょ」

「まあな。文章奇麗だしな」

「それでどの本読んでるの？今は」

「潮騒」

三島の代表作の一つである。海を舞台にした若者達の純愛ものである。三島はそうした恋愛ものを好んだ作家であるのだ。

「それだけれどな」

「そう。潮騒なの」

「ああいう恋愛もいいよな」

そしてこんなことを言うのだった。

「いや、実際そうした恋愛ってそうそうないけれどな」

「ないと思えばない」

陽太郎の今の言葉への突っ込みだった。

「あると思えばある」

「あるんだ」

「そう、ある」

また言う椎名だった。

「それだけれど」

「ああ。何？」

「起きる」

こう彼に告げた。その寝そべったままの彼にだ。顔は彼女の方に向けているが目だけを動かしている。そのうえでの会話であるのだ。

「そんな状況じゃだらしない」

「何か元気出ないんだよ」

「だからか」

「そう、駄目だから」

また言う椎名だった。

「早く起きる。だらしなのは駄目」

「別にいいじゃないか。まだ授業じゃないしさ」

「授業になったら起きる？」

「起きる。とりあえず今はゆっくりさせてくれ」

「わかった。じゃあいい」

そこまで聞いての言葉だった。

「そのまま寝ていればいい」

「悪いな」

「これを使えばもつとぐつすり寝られる」

そしてここで懐から何かを出してきた。見ればそれは。

「おい、何だよそれ」

「トンカチ」

金鎚を手にの言葉だ。左手に持っている。

第六話 次第にその二

「これで頭を叩けばぐっすり寝られる」

「何でそんなの持ってるんだ？」

「護身用」

それだというのだ。

「悪い奴が来たら蹴りとこれで撃退する。他には三段式の特種警棒も持ってる」

「物騒だな、おい」

「世の中何があるかわからない」

それを理由とする。しかし理由を超えたものがあることは陽太郎にはすぐにわかった。持っている椎名の目もかなり剣呑な感じに見えた。

「だから」

「そんなので殴られたら死ぬだろうが」

「大丈夫、手加減する」

しかし目は本気だ。

「心配しなくていい」

「つまり起きろってことか」

「どうするの？それで」

「ああ、わかったよ」

流石にそんなものを見ては起きるしかなかった。彼も我が身は大
事にする。

それで起きるとだ。今度は狭山と津島が来たのだった。

「よお、陽太郎」

「何よ。へばって」

「御前等滅茶苦茶元気だな」

「おつよ、ゴールデンウィークの映研は撮影が順調でな」

「こっちはお店が大繁盛だったのよ」

二人は学校の中と外の学園生活をそれぞれ満喫していたのである。そのせいかその表情はそれぞれかなり晴れやかなものであった。

「おかげでもうな」

「最高のゴールデンウィークだったから」

「俺もゴールデンウィークはよかったさ」

それは陽太郎もだと答えはする。

「けれど終わったからな」

「はじまりあるもの絶対に終わる」

「そうじゃないの？」

二人の反論は正論である。しかしそれが陽太郎に受けられるかどうかというとまた別問題だった。少なくとも今の彼にその気力はない。

「それでもだよ」

「だから気を取りなおしてだな」

「また頑張ればいいじゃない」

「そうするのが一番か」

二人の話を聞いてはいる。しかしまだ起き上がってはいない。

「じゃあ」

「よし、起きろ」

「クッキーあるから」

「クッキー？」

「そうよ、クッキーよ」

津島の言葉だった。

「私のバイト先のお店のね」

「そういえばバイトしてたんだな」

「そう、実家でもあるし」

「そうか。お菓子の家か」

「それじゃあ童話じゃない」

間髪入れず津島の突込みが来た。

「お菓子の家って。ただのスイーツ店だけれど」

「けれどお菓子だよな」
「まあね。それはね」
「じゃあお菓子の家じゃないか」
「ちよつと違うから。まあとにかくね」
「クッキーかよ」
「好き？」
そのクッキーを見ながらの話だった。
「それでクッキー。好きなの？」
「好きだけれどな。それもかなり」
「じゃあ起き上がったら？」
「起きないと俺が食っちまうぞ」
絶妙のコンビネーションで狭山が入って来た。
「それでもいいのか？」
「いや、それは駄目だ」
言いながら起き上がった。それも瞬時にだ。
「俺が食う」
「おい、それで起きるかよ」
言った狭山もここで呆れた。
「つたくよ。食い物のことになるとそれかよ」
「いいじゃないかよ。とにかくクッキーだよな」
「赤瀬も大好物」
椎名がここでまた言う。

第六話 次第にその三

「お菓子好きだから」

「えっ、あいつが食うってことは」

「早く食べないとあつという間になくなる」

まさにそうなるというのだった。

「何なら呼ぶけれど」

「だから食うって」

「俺の分もあるよな」

「あるから安心しなさい」

赤瀬の言葉を聞いて焦ったのは陽太郎だけではなかった。狭山もまたかなり焦っていた。無論クッキーがなくなるかも知れないからだ。

それで津島は。すぐにこう彼に言ったのである。

「ちゃんとね」

「よかった、あるのかよ」

「はい、これ」

「おっ、チョコレートか」

「あんた専門よ。どう？」

「悪いな。じゃあ早速」

「それにしても赤瀬ってクッキー好きなの」

津島もこのことを聞いて言った。顔も考える顔になっている。

「成程ね」

「とにかく何でも食べる」

椎名は彼をこう評する。

「それも山のように」

「でかいからか」

狭山はそれがどうしてかすぐにわかった。

「それでなのか」

「そう。大きいから」

とにかくそれに尽きるのだった。

「しかも成長期だから」

「おい、まだでかくなってるのかよ」

今度言ったのは陽太郎だった。もう既に起き上がっている。

「本当に二メートルいくんじじゃないのか？」

「大きいのはいいこと」

だが椎名はこう言う。

「強いし」

「そういえば黒帯なんだよな。柔道の」

「二段」

「流石だな。本当に強いんだな」

「私のボディーガード兼パートナー」

椎名の赤瀬を評する言葉は続く。

「そして盟友」

「盟友だったのかよ」

「頼りになる。その赤瀬がクッキー大好き」

「まあ今は俺が貰うから」

「はい、どうぞ」

津島が赤いリボンでラッピングしている袋を出してきた。その中にあるのが何か言うまでもなかった。それを早速食べはじめのだった。

三組はそんな呑気な調子だった。至って平和だ。だが四組は。

「そう、ゴールデンウィークも部活？」

「部活漬けだったの」

「やっぱり」

「バスケ部も厳しいわよ」

星華は困った顔で三人に言う。自分の席に彼女達が集まっている。そのうえで話すのだった。

「それもかなりね」

「まあうちの女子バスケット部って強いしね」

「練習だってハードだしね」

「そうだよね」

こう話していくのだった。

「野球部とかラグビー部も強いけれどね」

「女子だとバスケットとかバレー強いよね」

「そのバスケットだし」

「まあおかげで充実した日々だったわ」

それはしつかりと言う。

「何か剣道部も見だし」

「ああ、剣道部ってあれよね」

「走ったばかりだよね」

「そうよね、あそこは」

「何か走ってばかりだったわね」

また言う星華だった。

第六話 次第にその四

「見る限り」

「あそこの顧問の先生って走るの好きらしいからね」

「もうーに走って二に走って」

「そうだというのだ。」

「そういう部活だからね」

「素振りよりもまず走るんだって」

「素振りも結構させるみたいだけれど」

「ふうん、そうなの」

星華は三人の言葉を聞きながら頷いている。彼女は自分の席に座り三人はその彼女の周りに立って囲んでいるのである。そうした形になっていた。

「そういう感じなのね」

「そうそう、まずは体力にフットワークだからって」

「それからだってね」

「何処の部活も同じなのね」

「そしてこつも言った。」

「剣道もバスケも」

「体育会系は何処でもそうだけれど」

星華は腕を組みながら述べる。

「それでも。部活の間ずっと走ってるのよね」

「ランニングにダッシュ」

「それよね」

「バスケって動くからね」

「そう、それでなの」

まさにそうだというのだ。

「おかげでスタイルは維持できるけれど」

「そういえば星華ちゃんスタイルいいわよね」

「そうよね」

「そうかしら」

だが本人はここで暗い顔になる。そのうえで自分の胸を見るのだ
った。

「胸がね」

「それがないの」

「だから嫌なの？」

「それで」

「そうなの」

その暗い顔での言葉だった。

「私胸ないから」

「胸ってねえ」

「星華ちゃん普通位じゃない」

「そうそう」

「普通よ」

三人はこう言うのだった。

「別にね。星華ちゃん位あればね」

「別にどうでもないよね」

「そうよ。気のせいよ」

あくまでそうだというのだ。

「若しかしてさ。西堀と比べてる？」

「まさかと思うけれど」

「あいつと」

ここでその月美を見る。見れば彼女は今日も自分の席に座って本
を読んでいる。その本は。

「何よ、三島って」

「そうよね。如何にも文学少女って感じで」

「嫌な感じ」

「私あんな本読んだことないわ」

星華も言うのだった。

「何さ、あの態度」

「そうそう、ちょっと頭がいいからってね」

「そりゃ八条高校ってレベル高いけれどね」

「そうよね」

「クラスでトップだし」

「しかもあの胸」

完全にやっかみであるが本人達は気付いていない。自覚していないのだ。

「男に媚売っちゃってね」

「何だつてのよ」

「私達にだけ何か言うし」

「そうよね」

星華も目を怒らせて言った。

「何かさ、頭にくるしさ」

「どうするの？星華ちゃん」

「それで」

「今は何もないけれど」

その怒った声での言葉だった。

「このままじゃ済ませないから」

「そうよね、またね」

「頃合い見てね」

不穏な空気が漂っていた。しかし月美はそれには気付かない。彼女はそのまま三島由紀夫の本を読み授業を受けて部活に行く。その部活では。

第六話 次第にその五

「うわ、やっぱり違うわよね」

「太刀筋が全然違うっていうか」

「鋭い」

道場で木刀で居合の稽古をする月美を見たうえでの周りの言葉だ。

「しかも綺麗よね」

「もうすつとした感じで」

「確か中学校の時もやってたのよね」

「はい」

月美は同級生の言葉に対して答えた。今はその木刀を左手に持ち替えている。そのうえでの言葉だった。袴姿が実によく似合っている。

「そうですね」

「二段だったっけ、確か」

「段も持ってるのよね」

「そうですね」

聞かれたままそのまま答える。

「けれどそれは」

「他にも弓道もしてるのよね」

「そうよね」

「はい、そうですね」

その問いにも答える。

「ただ、今はこちらが主ですけど」

「そう、居合がなのね」

「居合部にとってはそれがいいけれど」

「それにしても。やっぱり違うわよね」

また彼女の居合の話になる。

「その太刀筋も姿勢も」

「剣道のそれとはまた違つてね」

「もう本当に真剣持つてる感じで」

月美は部活では評判になっていた。それは決して悪くないものである。そして同じ道場の剣道部の面々も彼女を見る。その中で女子部員達が言うのだった。

「また皆で西堀さんのこと言ってるのね」

「確かにね。居合二段だからね」

「殆どの部員が初心者で一人だけだしね」

「違つわよね」

「けれど」

ここで女子部員の一人が言う。

「あの娘クラスじゃ結構苦しい立場みたいよ」

「苦しいって？」

「どういう風に？」

「何かきつくあたる女の子がいるみたいなのよ」

「このことが話されるのだった。」

「何かね」

「ええと、それがわかる娘って」

「いないわね、剣道部」

「四組の娘いないからね」

「どうしてもね」

だからわからないのだった。部活でもクラスが関係するのは学校生活では何処でも同じであるがこの八条学園でもそうなのである。

「けれど何でだろうね」

「いい娘なのにね」

「そうよね」

居合部だけでなく剣道部でも月美の評判は悪いものではなかった。

「大人しいし優しいしね」

「言葉遣いだって丁寧だしね」

「意地悪とか全然しないし」

そういうことは確かに月美には全くなかった。これは間違いなかった。

「あんないい娘いるんだって思うけれど」

「どうしてなんだろう」

こうした話がされていた。そしてそれはすぐに椎名の耳にも入った。彼女は居合部の面々が屋上で昼食の後くつろぎながらまたこの話をしているのを聞き逃さなかったのである。

「四組も色々あるみたいね」

「そうね」

「待って」

すぐにその彼女達に声をかけた。

「それってつき……いえ西堀さんのこと？」

「あれっ、確か三組の」

「クラス委員の」10

「椎名」

自分から名乗った。

「椎名っていうの宜しく」

「そう、椎名さんっていうのね」

「小さいからわかったけれど」

「小さいのはいい」

そのことにはすぐに突っ込みで返した。

第六話 次第にその六

「それはいいから」

「御免なさい、だったら言わないわ」

「それは」

「そうして。ところでだけれど」

その彼女達はそれぞれ屋上のフェンスのところにいる。そのうえであれこれと話をしているのである。椎名はそこに来て問うたのだ。つた。

「西堀さんがクラス」

「あつ、聞いただけなの」

「私も」

まずはこう返す彼女達だった。

「だから詳しくはないけれど」

「また聞きだし」

「確かな話じゃないけれど」

「いいから」

それでもだというのだ。

「それでも。聞かせて」

「そう。そこまで言うんだったら」

「あのね。何か西堀さん」

「うん」

当然本人は今ここにはいない。月美は昼食の後大抵学校の図書館に向かう。椎名もよく一緒に行くが今日はたまたま屋上に出たのである。

「四組で孤立してるっていうか」

「お友達いないみたいなの」

「それでちよっかいかけてくる相手もいるみたいだし」

こう椎名に話すのだった。

「相手が誰もわからないけれど」

「何かそうらしいのよ」

「そういえば。椎名さんだったわよね」

「うん」

名前を呼ばれた問いにはすぐに頷く。

「そう」

「西堀さんって四組のクラス委員だけれど椎名さんは三組のよね」

「だったら一緒になる時あるじゃない」

「本人に何処となく聞いたら？」

「それどうかしら」

「わかった」

椎名はその言葉にくくりと頷いた。ここにいる誰も彼女が月美の親友だとは知らない。あくまで彼女だけが知っていることであった。

「それじゃあ」

「私達にとってはいい娘だけだね」

「そうよね」

「椎名さんってね」

「西堀さんはいい娘なの」

さりげなく月美の評判も聞いておくことにした。今後に役立つ為だ。

「とてもね」

「そう。いい娘なの」

椎名はその評判を聞いてまずは内心喜んだ。親友の評判のよさを知ってそれで喜ばない人間はいない。そういうことであった。

「そんなに」

「優しいし気配りしてくれるし」

「落ち着いてるしね」

「気品もあるし」

評判は確かに上々である。

「大和撫子って感じでね」

「居合も凄いいし頭もいいし」

「ちよつとおつとりし過ぎてるけれどね」

「引つ込み思案だし」

「そうなの」

椎名は月美の欠点を聞いても知っていると一言も言わなかった。これもあえてである。

「そういう娘なの」

「そうよ、いい娘だから」

「私達は意地悪とかしないからね」

「絶対にね」

「意地悪は駄目」

許さないと言いそうになったがそれは心の中で留めた。代わりの言葉だった。

「そういうことは」

「そんなの私達だってわかってるし」

「ねえ」

「仮にも武道やってるし」

「そうそう」

彼女達もそれはわきまえていた。

「そういうことはしないから」

「何があってもね」

「わかった」

それを聞いて静かに頷く椎名だった。そのうえで今はその場を別れた。その日の午後の休み時間であった。彼女はすぐに動いたのだ。

第六話 次第にその七

「それじゃあ」

「私達にとつてはいい娘だけれどね」

「そうよね」

「椎名さんってね」

「西堀さんはいい娘なの」

さりげなく月美の評判も聞いておくことにした。今後に役立てる為だ。

「とてもね」

「そう。いい娘なの」

椎名はその評判を聞いてまずは内心喜んだ。親友の評判のよさを知ってそれで喜ばない人間はいない。そういうことであつた。

「そんなに」

「優しいし気配りしてくれるし」

「落ち着いてるしね」

「気品もあるし」

評判は確かに上々である。

「大和撫子って感じでね」

「居合も凄いいし頭もいいし」

「ちよつとおっとりし過ぎてるけれどね」

「引つ込み思案だし」

「そうなの」

椎名は月美の欠点を聞いても知っているとはいわなかった。これもあえてである。

「そういう娘なの」

「そうよ、いい娘だから」

「私達は意地悪とかしないからね」

「絶対にね」

「意地悪は駄目」

許さないと言いそうになったがそれは心の中で留めた。代わりの言葉だった。

「そういうことは」

「そんなの私達だってわかってるし」

「ねえ」

「仮にも武道やってるし」

「そうそう」

彼女達もそれはわきまえていた。

「そういうことはしないから」

「何があってもね」

「わかった」

それを聞いて静かに頷く椎名だった。そのうえで今はその場を別れた。その日の午後の休み時間であった。彼女はすぐに動いたのだ。四組に行つてだ。いつも通り自分の席に座っている月美に声をかけた。

「ねえ」

「あれっ、愛ちゃん」

「ここにいていい？」

顔をあげてきた月美に応えたのだった。

「よかつたら」

「いいけれど」

「じゃあここにいます」

こうしてその場に立ったままでもいいようにする。しかしここで月美が彼女にこう言ってきたのだった。

「あの、席は」

「あるの？」

「ええ、あるから」

こう言うのだった。

「よかつたら持って来て座って」

「わかった」

椎名はそのまま月美のところであぐらをかいて座った。座ったままだがそれでもその場所にいたのだった。その日から休み時間になるといつも月美の傍に来た。しかしである。

それを見た星華がだ。忌々しげな感じで彼女に言ってきたのである。

「ちょっとあんた」

「何？」

「三組のクラス委員よね」

「うん」

星華に顔を向けてこくりと頷く。

「そうだけれど」

「じゃあ何でここにいるのよ」

忌々しげな顔で言うのだった。

「三組の人間がどうしてなのよ」

「いて悪いの？」

椎名はこう星華に返した。

第六話 次第にその八

「それって何処に書いてあるの？」

「何処って」

「校則の何条？」

「怯んだ星華にさらに言う。」

「それで」

「そんなのどうでもいいじゃないの」

「星華も負けていない。むきになって返す。」

「あんたね、そもそもね」

「だからこのクラスにいて悪いって言う根拠は？」

「椎名はあくまでこのことを言い返す。」

「それは？」

「ないわ。それはね」

「星華もこのことは悔し紛れに返した。」

「校則の何処にもね」

「そうね。何処にもね」

「じゃあこのクラスにいるっていうの？」

「星華はまだ言おうとする。かなり劣勢であったがそれでもまだ言おうとしていたのである。ここで引き下がるつもりはなかったのである。」

「それだけでけれど」

「そう、つきぴーと一緒にいる」

「つきぴーって誰よ」

「この娘」

「今度は月美を見ての言葉だった。」

「この娘がつきぴー」

「はあ！？つきぴーって何よ」

「星華は今度はその目を大きく見開かさせることになった。それに」

も理由があつた。

「何よ、その仇名」

「友達だから名付けた」

椎名は今はこう言うだけだった。

「だから名付けたの」

「あんだ達友達なの」

「そう、友達」

「友達いるなんて聞いてないわよ」

星華は実際にそこまで考えていなかった。月美はクラスではいつも一人で本を読んでいる。だから友達はいないと思つていたのである。

しかし今椎名が来てそれが崩された。それでもだった。

「全く、何なのよ」

「何なのって言われても」

「ふん、まあいいわ」

これで止まったのだった。星華もだ。

「もうね」

「そう。じゃあここに」

「けれどね。覚えていなさいよ」

星華は苦し紛れに返した。

「ずっといたら許さないからね」

「大丈夫。休み時間だけだから」

椎名の方が一枚上手だった。まさにだ。

「安心して」

「くっ、このチビっ子」

こうして椎名は月美の横についた。そうして言うのだ。

「じゃあつきぴー」

「うん、愛ちゃん」

「今何読んでるの」

それを問うたのである。

「三島由紀夫？」

「ええ、それなの」

まさにそれだというのだ。

「それ読んでるけれど」

「それで何読んでるの？作品は」

椎名が問うのはそれだった。

「何なの？」

「潮騒」

陽太郎に答えたのと同じ作品だった。

「それだけれど」

「そう。潮騒なのね」

「この作品奇麗よね」

月美は微笑んで述べた。

「こうして読んでいると。何か」

「何か？」

「こつした恋愛もいいなって」

「恋、なのね」

「うん。恋愛ね」

月美は自然と微笑んでいる顔になった。そのつえでの言葉だった。

第六話 次第にその九

「恋愛つていいわよね」

「恋愛ね」

「私も。何時かは」

「はじめればいい」

今はこう言うだけだった。

「そう思うのなら」

「私もなの」

「そう、つきぴーも」

また言う椎名だった。

「そうすればいい」

「そういうものなの」

「そういうもの」

こう話している間に休み時間は終わった。この日から椎名は休み時間は大抵月美の横にいるようになった。星華達はこの状況に齒嚙みするしかなかった。

「何よ、あいつ」

「いつも西堀の傍にいて」

「何かむかつく」

まずは三人が忌々しげに話す。三人はクラスの教壇のところから月美の横にいる椎名を見てだ。手出しができて困っているのであった。

それでこう言うことしかできなかったのだ。口調と顔だけが忌々しげになっている。

「隣のクラスなのにね」

「三組のクラス委員でしょ？」

「クラス空けて何してるのよ」

「もう一人いるからね」

ここで星華が話に加わる。彼女も実に忌々しげだ。

「でかいのが」

「ああ、そういえばいるわね」

「二メートル位あるの」

「確か柔道部の」

「そう、あいつよ」

また言う星華だった。

「三組はクラス委員が二人しっかりしてるから」

「こっちは実質男子だけだからね」

「あいつ本当に全然できないから」

「ぐずだし融通利かないし」

この辺りは事実だった。星華は確かにそれはできなかった。それはどうしてもである。

「おまけにね。気が利かないし」

「全然駄目だからね」

「そうよね。できるのは男に色目使っただけ」

「それ以外は何でもできないから」

完全に主観であった。ただし本人達は気付いていない。

「よくそんなのでやっていけるわね」

「全く」

「口では何でも言える」

しかしだった。ここで彼女達に突込みが来た。

「何とでも」

「えっ！？何であんたが？」

「あんたがどうしてここに」

椎名だった。彼女がそこに来たのだ。そうしてそのうえで四人に對して言ってきたのである。そのクールな目で四人を見ながらの言葉だった。

「今クラスに来た」

「ちよっと、何なのよ」

星華がその椎名を睨みすえながら言い返してきた。

「あんた私達に何か言いたいわけ？」

「言いたいことはない」

「じゃあ何なのよ」

「黙ってて欲しい」

「こうだというのだ。」

「それだけ」

「はあ！？何よそれ」

星華は椎名の今の言葉を受けて眉を顰めさせて返した。

「だから何であんたにそんなこと言われなといけないのよ」

「口では何とでも言える」

椎名はまたこう言った。向けているのは星華に対してだけではなかった。

「そういうこと」

「何よ、こいつ」

「何が言いたいのよ」

「ああ、椎名さん」

そしてだった。もう一人出て来た。山の如き大男がいきなり椎名の後ろに出て来たのだ。そしてそのうえで声をかけてきたのである。

第六話 次第にその十

「どうしたの？」

「うん、何でもない」

椎名はその赤瀬を後ろにやっただけで済ませよう。

「呼んだだけになったから。用事は終わったから」

「ああ、そうなんだ」

「有り難う、赤瀬」

また言う彼女だった。

「お陰で助かった」

「何か知らないけれど助かったの」

「そう、助かった」

今はこう言うだけだった。

「お陰で」

「うん、じゃあこのまま」

「このまま？」

「ここにいて」

「な、何よこの大きいのは」

「これがあれ？」

「そうみたいね」

星華の後ろの三人は赤瀬を見ながらあれこれと話す。彼のその巨大な身体を見て完全に気圧されていた。椎名の完勝であった。

「三組の男のクラス委員」

「柔道部のホープらしいけれど」

「こんなにでかかったの」

「とにかく口では何でも言える」

椎名はこのことを三度言った。

「わかったわね」

「ふん、わかったわよ」

星華はたまりかねた顔で返すしかなかった。

「それじゃあね」

「じゃあ赤瀬」

「何？」

「私はこのクラスに残るけれど」

「こう言うのだった。」

「それじゃあね」

「うん、また」

こうして赤瀬は自分のクラスに帰る。だがそれでもだ。椎名は残り月美のクラスに残った。そのうえでだ。彼女の傍に居続けるのだった。

四人は苦々しい顔で黙るしかなかった。しかしそれでもだ。その鬱屈とした思いは残った。その顔で今はただ苦い顔でいるだけであつた。

そしてだ。その昼休みにだ。四人は校舎の屋上でだ。その苦々しい顔をそのままにして銘々椎名に対する不平を述べていくのだった。

「一体何だつてのよ」

「全く」

「そうよ」

「こう話すのだった。」

「急に出て来てどうなのよ」

「何？口では何でも言えるって」

「何様なのよ」

「そうよね」

それについては星華も全く同じ考えだった。むしろ彼女こそが最も不平を抱いている人間だった。その不平をありのままに話す程だ。「あいつだけでもあれなのに」

星華はその忌々しげな顔で話す。

「何か近寄りにくいよね」

「全く。近寄りにくいってどうか」

「小さいのに視線が鋭いし」

「何も言えないのよね」

彼女にも気圧されていたのである。

「しかもあのでかいのもいるし」

「そうそう、あいつね」

「化け物？あれって」

こうまで言うのだった。

「あんなのがいたらどうしようもないじゃない」

「でかいのがね」

「二人がかりなんて」

「あの二人は絶対に避けないとね」

星華はまた話す。

「それにしてもよ。あいつが西堀の横にいつもいたら」

「どうしようかしら」

「それじゃあ」

「どうしよう」

また話す彼女達だった。

第六話 次第にその十一

「西堀に何も言えないじゃない」

「あいつ只でさえ何もしないし」

「どうしよう」

「いない時狙うしかないわね」

これが星華の出した答えだった。

「ここはね」

「そうね。それだったらね」

「あの二人、特にちびっ子がいないうちにね」

「その時に何とかしないと」

四人で話す。そして星華はここでまた話した。

「そうそう、いいこと思いついたけれど」

「どうするの？星華ちゃん」

「何かいいタイミング見つけたの？」

「授業中は何もできないわよ」

この時間はだった。しかしそれでも星華は言うのであった。

「だから。学校の行き帰りとかの時間よ」

「ああ、そうした時間ね」

「その時間ね」

「その時なのね」

「そうよ、その時よ」

まさにその時だというのだ。

「その時にやればいいじゃない」

「そうよね、その時間ならね」

「あのチビもいないし」

「あのデカブツもいないし」

椎名だけでなく赤瀬に対しても忌々しげに話す。

「それならその時にね」

「仕掛ければいいわよね」

「じゃあメインはやっぱり」

「ええ、見張っておくから」

星華が楽しげに笑って言ってきた。

「安心してね」

「ええ、連絡してね」

「集まれたらすぐに集まるから」

「絶対にね」

三人もそれぞれ言う。そんな話をしていた。しかしであった。

星華は知らなかった。陽太郎のことをだ。彼女は何とか頃合いを見ようとするが彼女にとって残念なことに部活が忙しくなってきたのだ。

「はい、後片付け御願いな」

「皆でやるわよ」

「はい」

先輩達の言葉に伝える。この学園の女子バスケット部は顧問の先生の方針で先生も先輩も含めて全員で後片付けや掃除をすることになっている。

当然一年の星華達もだ。彼女が後片付けをする時大抵夜になっていた。

「参ったわね」

ジャージ姿でぶつくさと不平を言っていた。

「これじゃあ」

「あれっ、どうしたの？」

「何かあったの？」

すぐに周りが彼女に問うてきた。

「これじゃあって」

「どうかしたの？」

「あっ、何でもないわ」

咄嗟にそれを誤魔化した。

「何でもないから」

「そうなの。それにしてもね」

「最近部活ハードよね」

「そうよね」

彼女の周りの一年の面々は苦笑いと共に言うのだった。

「毎日遅くまで練習だしね」

「まあ練習試合も近いしね」

「それも続くし」

「そうそう」

練習が遅くなっているのはそのせいだった。

「それに向けてだしね」

「けれどももう他の部活皆帰ってるわよ」

「道場も閉まってるし」

「ええ、そうね」

星華は道場の話が出るとすぐにむっとした顔になった。

「剣道部と居合部のあるよね」

「両方遅くまでやる部活だけだね」

「それでもうちより早いからね、今は」

「そうよね」

こう話されるのだった。

「まあダイエットになっていいかな」

「そうよね。ポジティブに考えればそうよね」

「ポジティブポジティブ」

周りにはこう考えることにしたのだった。

「明るくいけばいいよね」

「そうそう、明るくいかないと」

「帰ったらドラマが待ってるし」

「ドラマもいいけれど」

しかしここでまた言う星華だった。

第六話 次第にその十二

「あいつが」

「あいつって？」

「今度はどうしたの？」

「ああ、今度の月曜の九時からのドラマのね」

流星に同じ誤魔化し方を続けてする訳にはいかなかった。星華はそれで今はこう言うことにしたのだった。月美のことは言うわけにはいかなかった。

「ヒロインだけれど」

「ええと、あの背の高いショートカットの」

「あの人？」

「そう、あいつって言ったらあれだけれど」

取り繕いながらの話だった。

「あの人って何かね」

「好きになれないとか？」

「それでなの？」

「好きになれないんじゃないじゃなくて合わない気がするのよ」

こう言うことにしたのだった。

「何か役にね」

「そうかな」

「別にそうじゃないわよね」

「そうよね」

だが周りにはこう言うのだった。

「別にね」

「そういうわけじゃないわよね」

「そうそう」

「だったらいいけれど」

演技をそのまま続ける。

「相手役の人は好きよ」
「ああ、元仮面ライダーだったっけ」
「あれ、戦隊じゃなかったっけ」
「どっちだったかしら」
皆この辺りの記憶はあやふやだった。
「まあとにかく背高いしね」
「格好いいしね」
「いい感じよね」
「あの人は好きなのよ」
「これは星華の本音だった。
前からね」
「そうなの。あの人はいいのね」
「それで」
「ええ、いいわ」
また言うのだった。
「とにかく。お家に帰って」
「どっか寄らない？その前に」
「コンビニでも」
「どっ？」
「ああ、それはパスしとくわ」
星華はそれは断ったのだった。
「もう帰ってね」
「それで晩御飯食べて」
「それからお風呂入る？それともドラマ？」
「お風呂」
「そちらだというのだった。」
「そっちにするわ。すっきりとしてからね」
「そう、それからドラマね」
「そうするのね」
「ええ。時間もそれで丁度いい感じになるし」

「この部員達に答えるのだった。」

「それじゃあね」

「そうね。それにね」

「それに？」

「練習試合がずっと終わったら」

それから話もされるのだった。

「あれよ。インターハイだから」

「また練習が遅くなるみたいよ」

「またなの」

星華はそれを聞いて少しうんざりとしたような顔になった。そのうえで言葉であった。言いながら首を右に倒しもさせている。

「何か忙しい部活ね」

「そうね。結構ハードよね」

「先生も先輩も意地悪とかしないからいいけどね」

「そうよね。部長もいい人だしね」

「それはないのがいいわよね」

これはいいとされる。少なくとも顧問にも先輩にもそうした人間はいない。これは彼女達にとっては非常にいい助けになることであった。

「平和で和気藹々としててね」

「それで行きたくないって気持ちになるし」

「練習はハードでも思ったより疲れないし」

「このこともあった。」

「ドリンクのせいかしら」

「いや、蜂蜜のせいじゃない？」

「あれなの？」

「そう、レモンを蜂蜜に浸したあれ」

それが用意されているのだ。この部活ではだ。

第六話 次第にその十三

「部長が用意してくれてるじゃない。あれ食べたら元気が出るから」
「あれ大きいと思わない？」

「あれ美味しいしね」

星華もそのレモンについて話した。

「食べたら凄い元気が出るし」

「あれのせいよね、やっぱり」

「そうよね」

そして皆ここで話すのだった。

「あれのおかげね」

「甘いくて栄養もあるし」

「そういうことまでちゃんとしてくれてるのっていいいわよね」

「本当にね」

そんな話をしていたのだった。厳しい練習の中にもそうした温かいものもある部活だった。そして星華もそんな部活を楽しんでいた。しかしである。帰るとだ。両親がすぐに声をかけてきた。

「お風呂入れよ」

「あんたが最後よ」

「私が最後なの」

星華は玄関で靴を脱ぎながら家の奥からの両親の言葉に応えた。

「それじゃあ」

「ああ、ゆっくりしろよ」

「それから晩御飯にきなさい」

「晩御飯もう食べたの？」

靴を脱いでそれをなおしながらだ。そのうえで問うたのである。

「もう皆」

「いや、まだだ」

「まだよ」

「何でなの？」

「それも問う。そのこともだ。」

「何でまだなの？」

「まあ先に風呂に入れ」

「いいから」

「わかったわ。じゃあ」

両親の言葉に従い鞆を玄関のところに置いてそのうえで制服のまま脱衣場に向かった。そしてその制服を脱ぎピンクの清潔な下着も脱いでだ。風呂に入った。すぐに風呂を出てだ。そのうえでちゃぶ台のある部屋に來た。

するとだ。ジーンズ姿の星子がすぐに彼女に言ってきた。

「おかえり、お姉」

「ああ、只今」

「待ってたから」

「こう言うのである。」

「さあ、食べよう。一緒にね」

「一緒にって」

妹のその言葉に応える。そうして自分の席に座る。おかずは海老フライにキャベツとレタスとトマトのサラダに茄子の漬物、それと豆腐と若布の味噌汁だった。当然そこには白米もある。いただきますをしてから食べはじめる。

その中でだ。星華は両親に対して尋ねた。少し怪訝な顔になっている。

「ねえ」

「んっ、何だ？」

「どうしたの？」

「何で晩御飯待ってくれたの？」

「そのことを問うたのである。」

「それはどうしてなの？」

「ああ、それな」

「星子が言ったからなの」
「だからだというのが。」

「それで待つことにした」

「一家全員で食べようってことになってね」

「あんたが」

親のその言葉を聞いてだ。星華は今度は妹に顔を向けた。そうしてそのうえで言うのであった。

「そんなことを」

「だって家族じゃない」

星華はにこりと笑ってこっぴど姉に返した。

「そうじゃない、やっぱり」

「だからなの」

「お姉だってその方が美味しく食べられるじゃない」

そしてこっぴども言ってきた。

「だからね。食べよう」

「有り難う」

妹への言葉だった。

「おかげで美味しく食べられるわ」

「そう。じゃあ御飯おかわり三杯までね」

「ちよつと待ちなさいよ」

今の言葉にはすぐに突っ込みを返した。

「何で三杯までなのよ。私は四杯でしょ」

「だってお姉食べ過ぎだから。ダイエットしたら？」

「そんなのする必要ないから」

「必要ないっていつの」

「そうよ、ないわよ」

星華はあくまで言う。

「だって今までずっと動いてたんだし」

「けれど油断したらすぐに」

「だからその心配は無用なの」

むっとした顔になつての言葉になつていた。

「本当に今まで部活でへとへとなんだから」

「そうなの」

「そうよ。うちの学校って部活も厳しいんだから」

「勉強だけじゃなかったんだ」

星子はそれを聞いて目をしばたかせながら述べた。

「そうだったんだ」

「そうよ。うちの学校は勉強もスポーツも大真面目なんだから」

「凄い学校なのね」

「そうよ。厳しいわよ」

これを妹に言うのだった。

「あんたも受けるつもりよね」

「うん、そうだけれど」

「じゃあ気をつけなさい。うちは文武両道よ」

既にその八条学園の学生になつている言葉だった。

「凄いんだから」

「私も頑張らないといけないのね」

星子はこのことを実感するのだった。

「じゃあ。勉強だけじゃなくて」

「そうよ、身体も鍛えておかないとね」

「おいおい、二人共八条か」

「また同じ学校なの」

二人の話を横で聞いている両親が笑いながら言ってきた。

「これは本当にトンビが鷹を産んだな」

「そうね。私達の娘とは思えないよ」

「けれど顔そっくりじゃない」

「ねえ」

娘達は笑つて両親に返す。

「髪の色はお父さんで」

「顔はお母さんで」

「けれど胸は星子にいったな」

「それと背は星華にね」

「ま、まあそれはね」

「言わない約束で」

それぞれ胸や背の話にはコンプレックスがあるらしい。見れば確かに星華は胸がないし星子は背が低い。確かにそれぞれ分かれている。

「とにかく。お姉」

「ええ」

「私も八条行くから」

「これを言うのであった。」

「楽しみに待っていてね」

「そうさせてもらっわ。じゃあこれを食べたら」

「勉強？」

「その前にドラマ観るわ」

「まずはそれだった。何につけてもそれであった。」

「それからね」

「まずはドラマなの」

「それ観ないと。せめてドラマ位いいじゃない」

そんな話をしながら今は一家団欒の時を過ごす星華だった。とりあえず今は平和であった。だがそれがどうなるかは誰にもわからないものだった。

第六話 完

第七話 二人の仲その一

第七話 二人の仲

陽太郎と月美はこの日も同じ電車になった。そしてその電車の中で話をしていた。

「それで今度はさ」

「はい、これです」

二人は席に並んで座っている。月美は横に座る陽太郎にあるものを見せてきた。見ればそれは一枚のCDだった。それを出してきたのだ。

「この曲ですけれど」

「今それを聴いてるんだ」

「はい、いい曲ですよ」

にこやかに笑つての言葉だった。

「私椎名林檎好きなんです」

「へえ、椎名林檎好きなんだ」

陽太郎はそれを聞いて意外といった顔になった。そしてそのうえで言うのだった。

「そつは見えないけれど」

「見えませんか？」

「西堀つてどつちかかっていうと落ち着いた音楽の方が似合うから」

「だからですか」

「うん、だからさ」

言葉をさらに続けてきた。

「椎名林檎っていうのは意外だよ」

「そつなんですか」

「けれど好きなんだよな」

またこのことを言った。

「椎名林檎が」

「他には宇多田ヒカルも好きです
それもだという。」

「他には最近は」

「最近は？」

「AKB48も」

今度はアイドルグループであった。

「あのグループの曲も好きですよ」

「えっ、AKBも!？」

「AKB48は愛ちゃんに薦められたんですけれど」

「またあいつか」

陽太郎は椎名の名前を聞いて思わず言ってしまった。

「あいつAKB好きだったのか」

「愛ちゃん女の子の曲好きなんです」

ここで椎名の嗜好が一つわかった。彼女のそうした嗜好は実際のところ中々わからない。彼女は自分から言うことはないからである。

「他の椎名林檎や宇多田ヒカルは前からですからけれど」

「男の曲は聴かないんだ」

「布袋寅泰は好きですよ」

今度はこのアーティストの名前が出て来た。

「ジャニーズも好きですし」

「アイドルも好きなんだな」

「他には藤井フミヤも」

彼の名前も出て来た。

「色々聴きますから」

「本当に多いな。それもジャンル結構癖強いのもいよね」

「自分でもそう思います」

自覚のあることだった。

「私そういう曲が好きでして」

「成程。そうなんだ」

「斉宮君はどうですか？」

今度は陽太郎に対して尋ねてきた。彼女からだ。

「それでどんな曲が」

「まあ俺も色々かな」

陽太郎はその首を少し傾げさせてから答えた。

「色々聴くよな」

「色々ですか」

「流行の曲は何でも聴くな」

少し具体的に言ってきた。

「ラップも聴けば演歌もさ」

「そういうのもですか」

「あと昔の曲も聴くし。今さっき藤井フミヤの名前出したじゃない」

「はい」

「チエッカーズも聴くしさ」

藤井フミヤがいたグループである。長い間一世を風靡したグループだ。尚最初はアイドルグループとして扱われそうした歌を歌っていた。

「ジャニーズにしても昔の」

「マツチとかですか」

「マツチは好きだよ」

近藤真彦の仇名にすぐに反応した。

「あとトシちゃんもさ」

「詳しいですね」

「いや、やっぱり好きだからさ」

実際に好きだともいうのである。

第七話 二人の仲その二

「それでさ」

「よく知っておられるんですね」

「西堀だつてそうだろ？」

そして月美にも問うのだった。

「好きだつたらやっぱりよく知っているよな」

「はい、それは」

「好きこそもの上手なれっていうしさ」

「そうですね。自然と知りたいと思うようになって」

「それでなんだよ。俺もそうなんだよな」

陽太郎はにこにことした顔で話してきた。

「それでジャニーズだつてさ」

「それでなんですね」

「そうさ。じゃあ俺は」

「斉宮君は？」

「これだけだ」

こう言つてであつた。彼もCDを出してきたのだった。それは。

「嵐ですか」

「アルバムだけれどどうかな」

こつ月美に問うのだった。

「よかつたら聴く？」

「いいんですか？」

月美はその陽太郎に対して問い返した。

「あの、それは斉宮君の」

「いいさ。俺はもう何度も聴いたし。それに」

「それに？」

「もう一枚持つてるから」

だからいいというのだった。実際に鞆からも一枚出してきた。

それはジャーニーズではなかった。それとは別のアイドルのCDであった。

「これさ」

「それは」

「モーニング娘。も好きなんだよな」

「あつ、モーニング娘。もいいですよね」

「古いつて言われるかも知れないけれどさ」

「こう前置きはした。しかしであった。」

「けれどそれでも好きなんだよな」

「私は石川梨華さんが好きでした」

「じゃあ美勇伝かな」

「はい、大好きです」

彼女がというのだった。

「ですから」

「そうか。俺はメンバーじゃないけれど松浦亜弥がさ」

「そうですか」

「好きなんだよな。やっぱりさ」

「成程」

「じゃあさ、これさ」

こう言ってまたCDを見せたのだった。そうしてだ。

月美も微笑んだ。そのCDを受け取った。

そのうえでディスクプレーヤーに入れて聴いてみる。その感想は。

「いいですよ。ダンスが見られないのが残念ですけど」

「そうだろ？いいだろ」

「はい」

こんな話をしていた。二人は次第に仲をよくさせていた。だがしかしである。月美は学校に行くとクラスでは相変わらず一人であった。

クラスに入る時はいつも一人だった。そして星華達の冷たい視線を受ける。それが朝練が終わった後のいつもの始まりだった。

だがすぐにだ。椎名がクラスに来る。そうして彼女の傍に来るのだった。

「おはよう、つきぴー」

「おはよう、愛ちゃん」

椎名は表情に乏しいが月美はにこりと笑う。これもいつものやり取りだ。

星華達はそれを見てだ。苦々しい顔になる。これもいつもだった。

「また来てるし」

「ずっと休み時間はいるしね」

「そうよね。他のクラスなのに」

「言っても帰らないし」

四人はその椎名を見ながら不平を言うだけだった。しかしそれ以上は何もできはしなかった。月美はいじめられたりすることはなかった。

そしてだ。授業が終わるとだ。月美は部活に行く。そこには部員達がいる。彼女達は少なくとも彼女に対して悪いことをすることはなかった。

「ねえ月美ちゃん」

「ここどうするの?」

「どうしたらいいの?」

それどころか彼女にあれやこれやと聞くばかりだった。

彼女は二段だけの実力はあった。その技は見事なものであった。

鋭く見事なものである。居合のその他のことも見事であった。

しかも同じ道場には陽太郎もいる。彼女は皆に支えられている形だった。

第七話 二人の仲その三

そして帰り道には陽太郎がいる。彼もいるのだ。

「なあ」

「はい？」

その陽太郎の言葉に問う。今は駅で電車を待っている。そのプラットホームに二人並んで立ってだ。そのうえで彼の言葉に応えたのだ。

「どうかしたんですか？」

「今日居合部凄くなかった？」

「こう言ってきたのである。」

「練習」

「そうですね？」

「何か皆の素振りが凄かったじゃない」

それを言うのだった。

「もう真剣に振っていてさ」

「皆凄く上達したからでしょうが」

「上手くなっただ」

「はい、そうです」

だからではないかというのだ。

「私にしてもです」

「西堀もか」

「はい、何か最近どんどん上手くなってきている気がするんですよ
笑顔で陽太郎に話すのであった。

「やっぱりあれですよね。毎日のことですから」

「毎日のなんだ」

「剣道もそうじゃないですか」

そしてここで陽太郎がしている剣道の話もしてきた。

「やっぱり毎日の練習ですよね」

「そうなんだよな。実はさ」

「実は？」

「俺学校から帰っても素振りしてるんだよな
そうしているというのだった。」

「一日五百本はさ。してるんだよな」

「五百ですか」

「最低それだけしてるよな。まあ筋力トレーニングとかランニングは家ではしていないけれどさ」

「それはなんですか」

「学校で滅茶苦茶やってるしさ」

「そういえば剣道部って今も」

「ずっとらしいからさ」

笑って月美に返す。

「もう陸上部と同じ位走ってるんだよな」

「そんなにですか」

「もうまずは走って体力つけるって考えだからね、うちの顧問顧問の話もした。」

「何でも知っている剣道の先生のやり方を真似てるらしいんだよな」

「その先生も走ったりすることが主体ですか」

「らしいんだよな」

「それで走るんですね」

「とにかくそうなんだよ」

それがこの学園の剣道部だった。

「何かにつけてもまず走れってさ」

「それで足腰を、ですね」

「まずは足腰」

陽太郎はこうも言った。

「それが先生の重要ポイントの指摘なんだよ」

「足腰は確かに大事ですよな」

「金田正一の話も出してさ」

言わずと知れた四百勝投手である。

「それで言うんだよ」

「金田さんもですか」

「知ってるよね、金田さん」

「はい、野球は私は阪神なんですけれど」

それでもというのだ。

「国鉄、今のヤクルトの人ですよね」

「一応巨人にもいたけれどね」

だがそれはほんの数年に過ぎない。その選手生活の大部分は国鉄で過ごしてきた。まさに国鉄の象徴とも言っているいいピッチャーだったのだ。

「金田さんって現役時代物凄く走っててさ」

「それでお話にも出されるんですね」

「とにかく走れ」

今度は一言だった。

「そう言うんだよ」

「そうなんですか」

「まあ走るのはそれでもいいけれどさ」
「それはいいというのだ。」

第七話 二人の仲その四

「たださ」

「ただ？」

「あれだよな。稽古しなくていいのかな？とかも思ったりするし、
そうした考えも持つてしまつというのだ。」

「実際。素振りはかなりしているけれどさ」

「素振りはなんですね」

「それでも防具つけての稽古はあまりしないんだよな」
首を傾げながらの言葉だった。

「もう走つてばかりでさ」

「けれど素振りはしてますよね」

「うん、それはね」
していると答える。

「早素振りも大きな素振りもね。一通りしてるよ、切り返しとかも
ね」

「切り返し？」

「ほら、あれ」

その切り返しの説明を月美に対してはじめた。

「一回面を打つてね」

「はい」

「左右に四本前に出ながら打つてそれから後ろに下がりながら五本
ね」

「ああ、そういうえはされてますよね」

「それを一人でやるんだ。本当は防具着けて相手と一緒にするんだ
けどさ」

「そういうえは防具を着けられた時も」

月美は色々と気付いた。まさに言われてみればだ。

「されてますね」

「そうなんだ、あとその元の左右の素振りもしてるし」
「大体何回位ですか？」
「全部合わせて千回かな」
「それだけだという。」
「それ位はしてるけれどね。もっとかな」
「じゃあかなりですね」
「そうだろうね。とにかく走って素振りして」
「所謂基礎トレーニングばかりである。」
「そういうことばかりなんだよな」
「けれどそれでいいんじゃないですか？」
「いいかな」
「はい、いいと思います」
「こう言って応える月美だった。」
「何事も基礎ですから」
「基礎ね」
「そう、基礎ですから」
「また言う月美だった。」
「それをしっかりとしてからですから」
「うん、それは俺もわかるよ」
陽太郎もそれはわかっていた。流石にそれがわからない程愚かではない。伊達にその剣道も二段までいつているわけではない。
「基礎ができてないと本当の力じゃないからさ」
「そうですね。居合部も走りますし」
「走るからいいんだよな」
「走らない部活はやっぱり強くないです」
月美の言葉はかなり真面目なものになっていた。
「基礎ができていないと」
「とにかく基礎なんだよな」
「そうだと思います。学校の勉強でも」
「そうそう。俺もさ」

「齊宮君もですか」

「今妹が小学校一年なんだよ」

自分の妹の話をここでした。

「それに勉強教える時とか。何か自分でも色々と忘れていることに
気付くんだよな。小学校一年の勉強なんか楽に教えられる筈なのに
さ」

「あつ、それは私もです」

「西堀もつて？」

「私も妹います」

まずはそこから話すのだった。

「小学校五年で」

「へえ、妹さんいたんだ」

「その妹に勉強教える時に」

そこから話すのであつた。

「色々と忘れていることに気付きます」

「成程、西堀もそうなんだ」

「はい。結構小学校の時の勉強って大事ですよね」

「今にも生きるしね」

「それを忘れていたりしますから」

また言う月美だった。

第七話 二人の仲その五

「それに気付いたりもしますし」

「うん、学校の勉強もそうだしなあ」

「それに」

「それに？」

「やっぱり剣道もですよ。私は居合ですけど」

「何でも基礎なんだな、本当に」

「そう思います、それじゃあ」

ここであった。電車が止まった。そしてその駅名がアナウンスされる。

駅名を聞いてだ。陽太郎は驚いた顔になった。そうして言うのだ。
「えっ、もうか」

「はい、着きましたね」

月美はその陽太郎ににこりと笑って言った。

「それじゃあ今から」

「行くか」

「今日も一日はじまりますね」

「そうだよな。また走って」

「頑張つて下さいね」

「西堀もな」

こんな話をしながら登下校を一緒に過ごすようになっていた。そんな二人の中は彼等の仲間内では有名になっていた。昼食の時にだ。
「なあ斉宮」

「何だよ」

食堂でうどんを食べながらだ。向かい側に座りマカロニを食べている狭山の言葉に応えた。彼が食べているマカロニは巨大な皿の中のグラタンだ。

その白いグラタンの中にスプーンを突っ込み豪快に食べている彼に対してだ。うどんをすすりながらそのうえで彼に返したのである。

「御前西堀さんと上手くいつてるみたいだな」

「毎日一緒に行き来してるけれどな」

「いいよな、そういうのってな」

狭山は彼の言葉を聞いてしみじみとした感じで述べた。

「本当にな」

「いいのか」

「高校生の恋愛って感じてな」

だからいいというのである。

「いや、本当にな」

「そういうものかな」

「そうよ、そういうものよ」

狭山の左横にいる津島が言ってきた。彼女が食べているのはハヤシライスだ。その濃い赤と白のコントラストにスプーンを入れながら話す。

「私達を見なさい」

「おい、俺達かよ」

「そうよ、私達よ」

今度は狭山に顔を向けて言う津島だった。

「私達だって高校生の恋愛じゃない」

「そうか？腐れ縁じゃねえかよ」

「何処が腐れ縁なのよ」

むっとした顔でまた狭山に返す。

「中学校の三年間ずっと一緒のクラスだったし」

「それが腐れ縁だろ？」

「違うわよ。運命のお導きよ」

わかりかし強引にそういうことにする津島だった。

「それはね」

「俺はそうだと思うけれどなあ」

狭山は今の言葉に首を傾げながらまたグラタンの中にスプーンを入れていく。そうしてそのマカロニを口の中に入れるのであった。そのうえでまた言った。

「何で高校まで一緒なんだよ」

「嫌？」

「嫌って言ったらどうするんだよ」

「はったおす」

これが津島の返答だった。しかも目が本気である。

「容赦なくね」

「はったおされる趣味はないからよ」

彼にとつてもそれは願い下げだった。

「そんなことはな」

「それじゃあわかつたわね」

「もつとまともな交際とかしたいんだけどな」

「それ、贅沢」

陽太郎の右横にいる椎名が突っ込みを入れる。彼女のさらに右横には赤瀬がその巨体を見せている。彼は色々な食べ物を次々と食べている。

第七話 二人の仲その六

「それもかなり」

「贅沢なのか、俺は」

「彼女がいるのは幸せなこと」

椎名は水餃子と炒飯の定食を食べている。食べながらの言葉だ。

「特に狭山みたいな人間は」

「おい、待て」

今の椎名の言葉には速攻で突っ込み返す狭山だった。

「そこでそう言うのかよ」

「言う」

「何なんだよ、そりゃよ」

狭山も無然とした顔で椎名に返しはする。

「俺の何が悪いんだよ」

「全部」

「そうかよ。ったくよ」

「否定しないのね」

「流石にそこまで言われたらな」

無然とした顔のままだがそれでも言うのだった。

「文句も言えないさ」

「そうなの」

「しかし。確かにそうだよな」

何だかんだで椎名の言葉に頷きはした。

「本当にな。彼女がいるってことはな」

「それは私でいいのよね」

「若しそうじゃないって言ったらどうするんだよ」

「はったおす」

どっちにしるこの言葉が出るのだった。津島の口からはだ。

「その通りよ」

「結局そう言うんじゃないかよ」

「そういうことだから。わかったわね」

「わかったよ。とりあえずな」

「ええ」

「今度デートするか」

相変わらずマカロニを食べながらの言葉だ。

「何処に行くんだ？」

「じゃあカラオケ」

狭山のその言葉にこりと笑って返す津島だった。これこそまさに彼女が望んでいた展開だ。ならば乗るのも彼女にとっては道理だった。

「そこね」

「わかった。じゃあスタープラチナな」

「あそこ歌い放題飲み放題だしね」

「そうなんだよな。酒が好きだけ飲めるってのがいいんだよな」

「そうそう」

「飲むんだ」

楽しく話す二人に言ってきたのは赤瀬だった。秋刀魚を丸ごと頭から食べている。その左手には巨大な丼があり親子丼がそこにある。

「お酒」

「つていうか普通だろ？」

「お酒飲むのは」

二人は赤瀬の問いに平然と返した。何でもないといったふうだ。

「それ位はね」

「ここじゃ」

「まあそうだけれどね」

赤瀬もこの町にいるからわかる。八条学園のある八条町は酒に關しては極めて緩やかである。どれだけ飲んでもいい社会である。

「僕も飲むし」

「無茶苦茶飲むんだな」

「その巨体だと」

「ビールだったら六リットル」

いきなりそれだけ話に出す。

「いけるよ」

「普通の量じゃねえよな」

「私の二倍じゃない」

狭山も津島もそれだけ飲むと聞いて目が点になった。そのうえで
の言葉だ。

「じゃあ一升瓶はか」

「二本はいけるのね」

「軽く」

こう返す始末だった。

「日本酒が一番好きだから」

「食費とか飲み代大変だな」

「全くね」

「私もそれだけ飲む」

しかも椎名も言うのであった。

第七話 二人の仲その七

「普通に」

「それは普通じゃねえからな」

「絶対にね」

二人は彼女に対しても突っ込みを入れることになった。やはり目は点になっている。

「その小さな身体でな」

「何処に入るのよ」

「小さいのは余計」

クリームをつけるのはそこだった。

「それは関係ない」

「いや、関係あるだろ」

「そうよね」

また返す二人だった。目はそのままだ。

「どう見てもな」

「それは」

「お父さんもお母さんも飲める」

椎名はここでこうしたことも言った。

「それで私も」

「遺伝か、つまりは」

「そういうことなのね」

「そう、遺伝」

「僕は身体が大きいから」

そして赤瀬も言う。

「だからだろうね」

「御前はな。もうレスラー並だからな」

「ってというか柔道やってなかったらレスラーか力士でしょ」

「うん、そうだろうね」

赤瀬自身それを認める。とにかく異様なまでに大きい。

「そういうのも好きだし」

「これで酔って暴れたらどうなるかだよな」

「恐ろしいことになりそうだけれど」

「酔ったレスラーは台風」

椎名はここでぼつりと述べた。

「もうどうしようもない」

「何でそんなの知ってるんだよ」

「椎名って謎多いわね」

「うふふ」

今度は二人の言葉に思わせぶりな微笑みで返してみせた。

「私は何でも知っている」

「だからその言葉は怖いつての」

「そうよ」

すぐに言い返す二人だった。

「確かに成績もいいしな」

「クラスで一番だし」

「目指すは八条大学医学部」

「ついでに希望の進学先まで話す。」

「お医者さんになる」

「マッドサイエンティストだな」

「それしかないわね」

そう思ったのは二人だけではなかった。

陽太郎もだ。これまで大人しかったが今の椎名の言葉に再び口を

開いて彼女に顔を向けてそのうえでこんなことを言うのであった。

「死神博士の後継者になるのかよ」

「東映の特撮大好き」

「しかも否定しない。」

「人類の歴史を変えたい」

「変えるっていつても破滅はさせないよな」

彼が問うのはこのことだった。

「それは止めてくれよ」

「そのつもりはないから」

「それはないのだという。」

「安心していい」

「だったらいいけれどな」

「けれどサイボーグやアンドロイドは好き」

しかしこんなことは言うのだった。

「それもかなり」

「サイボーグとかアンドロイドは医者の話だったか？」

陽太郎は今の椎名の言葉に首を捻って呟いた。

「理学とか工学じゃなかったっけ」

「じゃあそつちも勉強する」

あつさりと言う椎名だった。

「それだったら」

「そうか。まあ頑張ってくれ」

陽太郎もそんな椎名にもうこう言うしかなかった。

「それじゃあな」

「うん、そうする」

こんな話をしながら今は昼食を食べていた。そして食べ終わりそれぞれパンを買ってだ。中庭に行く。そのベンチの一つに月美がいた。彼女は今パンを食べようとしていたところだった。

その月美にだ。椎名が最初に声をかけた。

「つきぴー、一緒に食べよう」

「あっ、愛ちゃん」

月美も彼女の声に応えて顔をあげる。

「今からのね」

「うん、今からパンを食べる」

「もうその前に食堂で食ってるんだけれどな」

「ちゃんとね」

椎名の後ろから狭山と津島が明るく言ってきた。

第七話 二人の仲その八

「食堂で結構な」

「椎名もね」

「それでも食べる」

クールに言う椎名だった。

「人間食べないと死ぬから」

「うん、じゃあ一緒に」

月美は微笑んで応えた。そのうえで椎名のすぐ後ろにいる彼を見た。そしてそのうえで頬を少し赤らめさせてこう言ったのであった。

「陽太郎君、御願います」

「あつ、言うのは俺なんだ」

「駄目ですか？」

「あつ、じゃあ俺でよかつたら」

陽太郎は戸惑った顔を赤くさせていた。目も見開かれ口も開けてしまっている。しかしすぐにその月美に言葉を返したのだった。

「二人で」

「待つて」

しかしすぐに椎名が言ってきた。

「二人じゃないから」

「あつ、そうか」

「私達がいるから」

「そうだよな。二人だったよな」

「おいおい、俺達を忘れるなよ」

「そうよ。親友なのに」

狭山と津島が今度は彼に対して言ってみせた。

「ちゃんといらんだからな」

「忘れてもらったら困るわ」

「僕もいるよ」

一番後ろから赤瀬の声もした。彼が持っているパンが一番多い。

「それじゃあ皆で」

「食べよう」

最後に椎名が言った。こうして皆木陰に移りそこで円になってだ。皆で食べはじめた。

その中でだ。月美は陽太郎の左隣にいた。そこでサンドイッチを食べながら言うのである。

「実はですね」

「実は？」

「このパン購買のパンじゃないんです」

そのサンドイッチを食べながらの言葉だった。

「私が行く駅のすぐ傍にあるパン屋さんのパンなんです」

「そうなんだ、そのパンって」

「凄く美味しいんですよ」

そしてまた話してきた。

「もう生地が最高で」

「えっ、そんなに美味しいのかよ」

それを聞いて声をあげたのは狭山だった。その声はうわずったものだ。

「そんなに美味しいんだったら一回食ってみたいな」

「じゃあお一つ」

「ああ、それはいいから」

月美がここでサンドイッチを一切れ差し出そうとしたがそれは断った。

「西堀さんが食べなよ」

「けれど今」

「自分で行って買って食うからさ」

だからいいというのである。

「そんなに美味いんだったらさ」

「そうよね。それで西堀さんのお家って最寄の駅何処？」

今度は津島が尋ねた。

「そのパン屋さんの場所知りたいただけねど」

「ええと、確か」

「ああ、津島よ」

にこりと笑って月美の問いに返した。

「津島青美っていうのよ」

「そうでしたね、津島さんでしたね」

「そうよ。宜しくね」

「津島っていえば」

「どうしたの？」

月美から話を変えてきた。津島もそれに乗る。

「あれですよ。太宰治の本名と同じですよ」

「そういえばそうね」

津島も太宰の本名は知っていた。それで月美の今の言葉にも頷けたのだ。太宰治というのはペンネームであるのだ。有名な話であるが。

「津島修治だったよね、本名は」

「はい、そうなんですよ」

「青森の大地主の家の人で」

これも有名なことである。太宰は津軽の大地主の家に生まれそうして五男だった。この三つが太宰治の人生のかなりの部分を占めているのだ。

第七話 二人の仲その九

「そうだったわよね」

「はい、太宰はそうです」

「このこと自覚したことないのよ、名前のことは」

「そうなんですか」

「そうなのよ。こいつの名前は地名だけねどね」

「俺か」

狭山が応えてきた。その彼がだ。

「大阪の狭山市だよな」

「そうよ。あんた実家は違ってたわよね」

「親父の実家もお袋の実家も神戸だぜ」

「じゃあ一緒よね」

「そうだよ、生粋の神戸人なんだよ」

名前とは違ってた。そうではないのである。

それでこう話してだ。狭山はここでまた言った。

「それで西堀さんの言うその店さ」

「はい」

「何処なの？それで」

店の話に戻った。

「よかつたら教えてくれないかな」

「須磨の方です」

「須磨の方なんだ」

「その駅で」

駅名も話す。すると声をあげたのは狭山ではなく津島だった。彼女がその駅の名前を聞いてすぐに驚きの声をあげたのだった。

「えっ、その駅前のお店っていつたら」

「何かあるんですか？」

「私の叔父さんのお店よ」

そこだというのだ。驚きの声をあげながらの言葉だった。

「そこつて」

「えっ、そうだったんですか」

「一応系列のお店で」

「こつも話した。」

「うちのお父さんの弟でね。そのお店なのよ」

「叔父さんのだったんですか」

「奇遇よね」

「思わず言った椎名だった。」

「本当に」

「ええ、言われてみれば」

「月美も彼女のその言葉に頷く。」

「本当に」

「うちはケーキ屋なのよ。けれど叔父さんってパンを作るのも好きで」

「そのお店ケーキも美味しいんですよ」

「そうそう、腕がよくてそれで独立して」

「お店とても繁盛していますよ」

「いいことね。まさか西堀さんのお家の近くだったなんて」

「このことを知って微笑むのだった。津島はにこにこしながらパンを食べる。彼女が今食べているのはチョコレートパンだった。」

「本当に奇遇よね」

「そうですね。まさかと思えますから」

「それによ」

「また狭山が言ってきた。」

「そんなに美味しいパンだったら本当にな」

「食べてみたいのね」

「ああ、このパンも悪くないけれどな」

「狭山が食べているのはロシアパンだ。大きなそれを牛乳と一緒に食べているのである。そのうえで話に加わっているのである。」

「それでも。美味いって聞いたら」

「食べてみたいのね」

「当たり前だろ？」

横にいる津島に対してすぐに返す。

「そうと聞いたらな」

「わかるわ。叔父さんのパン是非ね」

「御前も食ってみたいんだな」

「勿論よ。じゃあ放課後にね」

「おっ、早いな」

まさに急展開だった。津島は決断も行動も速いようである。

第七話 二人の仲その十

「じゃあ放課後だな」

「行くわよ、いいわね」

「ああ、それじゃあな」

「私達の他は」

「僕は部活があるから」

「私も」

赤瀬と椎名はこう言っただけですぐに断った。

「だから一緒には」

「行けないから」

「映研今日は休みだからな」

「私も。今日家お休みだし」

都合がいいのは狭山と津島であった。だが二人は残る面々にも問うた。

「そっちはどうするんだ？」

「あんた達は」

「ああ、俺達か」

「私達ですか」

陽太郎と月美は言われて気付いた顔になった。

「ええと、どうしようかな」

「とういかどうして私達二人なんですか？」

「おいおい、鈍過ぎるだろ」

「二人共ね」

狭山と津島はそんな二人の言葉に呆れた顔で返した。そうなるしかなかった。

「だからな、二人共よ」

「もう付き合ってるんでしょ」

「えっ、付き合ってるって」

「それは」

狭山と津島の今の言葉にはである。見るも無惨なまでに狼狽する二人だった。顔はおるか仕草や態度にまでそれが出ていた。その慌てきつた態度でだ。焦りきつた声で言うのだった。

「いやさ、俺は別に」

「私はそんな」

「特にそんなやましいところはないし」

「あの、高校生の時はあくまで真面目なお付き合いで」

「だから付き合ってるとかそうというのは」

「なくてですね」

「こんな有様である。それに突っ込みを入れたのは。」

「だから。別にいいからよ」

「隠すことでもないじゃない」

狭山と津島はそんな二人の顔を見て突っ込みを入れた。

「今時そんな真面目な付き合いとかないしよ」

「ちよつとどころじゃなくずれてるし」

「だから俺達はさ」

「別にそんなのは」

「もう喋らない方がいい」

「ここで言ってきたのは椎名だった。」

「言えば言う程墓穴を掘る」

「愛ちゃん、だから私は」

「それに斉宮ならいい」

「こつも言う椎名だった。」

「確かな人間だから」

「確かつて」

「そう、真面目でしかも頼りになる」

椎名の言葉は続く。

「尚且つ腕も立つ。それなら問題ない」

「俺ってそんなにいいか？」

「いい。それがわかってるから」

その陽太郎への言葉だ。そして同時に月美にも言っていた。

「つきぴーも安心していいから」

「私は。そんな」

「下手な奴なら私が許さない」

言葉に感情はないがそれは真剣な響きが見られるものだった。

「つきぴーの相手は私が見ているから」

「愛ちゃん……………」

「それに」

椎名はさらに言う。

「つきぴーをいじめる奴はもっと許さない」

「許さないのかよ」

「えらく厳しいわね」

「つきぴーは友達」

狭山と津島に対しても述べる。

第七話 二人の仲その十一

「だから。絶対に護る」

「けれどよ、椎名ってよ」

「強いのか？」

狭山と津島が気にするのはこのことだった。相手のことをだ。

「そんなによ」

「小柄だからそこまで強いようには」

「強いよ」

その二人に答えたのは赤瀬だった。

「椎名さん空手とかムエタイもしているから。足技が特にね」

「そうか。赤瀬が言うんならな」

「本当みたいね」

「僕もね」

赤瀬の言葉が続く。

「椎名さんが本気になったら勝てないかも」

「そこまで強いのかよ」

「あんたまでって」

「赤瀬には負けるから」

しかし椎名はこう言うのだった。その小さな口でサンドイッチを食べながら。食べる口は小さいがその速さはかなりのものである。

「体力が違い過ぎるから」

「そうかな。身体の急所蹴られたら終わりなんじゃ」

「大丈夫。赤瀬はスピードもあるから」

「その巨体でスピードもあるのかよ」

「赤瀬も凄いのね」

狭山と津島は驚くばかりだ。彼等にとっては信じられない話である。

そうした話をしていた。そしてここでまた陽太郎が言った。

「何か凄い話になってるけれどさ」

「ああ、そうだな」

「あんたよね」

狭山と津島が彼の言葉に応える。そうしてだった。

「御前それで西堀さんとは」

「どうなのよ」

「どうなのよって言われたら」

「私も。それは」

その横では月美が小さくなっている。そのうえでの言葉であった。

「別にそういうことはないですけど」

「そうだよ。俺だってさ」

「だからよ。特に気にすることはないからよ」

「そうよ。悪いこととかしないよね」

狭山や津島はそれでいいというのだった。しかしである。

二人はそれでもだ。まだ否定しようとする。

「だから。それは」

「その」

「もう言葉はいらない」

また椎名がここで言う。

「なるようになる」

「なるようになるのかよ」

「あの、愛ちゃんだから」

「いいから」

しかしである。椎名はまだこう言うのだった。そして最後の言葉は。

「応援する」

「応援って」

「じゃあ」

こうして話は終わった。二人のことは周りに認められた。しかし二人は気恥ずかしいのかそれを周りに見せることはなかった。だか

ら周りに見つかることはなかった。

だがここぞだ。うっすらと気付いた面々もいた。

「ねえ、最近の西堀ってさ」

「そうよね」

「何かうきうきしてる感じ？」

「何かあったのかしらね」

星華と三人が教壇のところ立って彼女を見ながらだ。こう話していた。月美はいつも通り椎名と一緒にである。それで四人も手が出せなかった。

「あつたからああいう感じなんでしょうけれど」

「それでも何よ」

「すっごい生意気」

「そう思うわよね」

「本当にね」

苦々しい顔でそれぞれ言っていた。

「幸せそうな顔しちゃってさ」

「前まで物凄く暗い顔ばかりだったのにね」

「もう根暗そのものだったのに」

「それが何よ」

「まさか」

ここで州脇が言ってきた。

「彼氏ができたとか？」

「ああ、それ有り得るよね」

「そうよね」

野上と橋口は二人のその言葉に頷いた。

第七話 二人の仲その十二

「あいつもうフェロモン全開だしね」

「それも常時ね」

「あの胸何よ」

「脚だって」

「やっかみの言葉だ。しかし彼女達に自覚はない。

「これでもかって位に出して」

「何だっていうのよ」

「男たぶらかしたんでしょ、どうせね」

「そうでしょうね」

「それでたぶらかした男騙して」

「こつ傍目から聞くと下衆な言葉を話していく。

「そうよね、騙された男が可哀想よ」

「あんな奴にね」

「それにしても」

「ここで橋口が言った。

「相手誰かしらね」

「その相手？」

「騙された相手？」

「そう、そいつ」

「話は自然とその相手についての話にもなった。

「どんな奴かしらね。うちの学校かしら」

「そうじゃないの？いるとしたら」

「だっていつもクラスに来たらそんな顔だし」

「そうよね」

「だったらね」

今星華は話を聞いているだけだ。三人で話をしていく。その中で今度は野上が言ったのであった。

「居合部かしら」

「あいつのいる部活？」

「そこ？」

「ほら、よくあるじゃない」

「ここでさらに言う野上だった。興味津々といった顔でだ。」

「同じ部活で、っていうの」

「ああ、あるある」

「それも結構以上にね」

「二人も彼女の今の言葉に頷く。」

「あるわよね、確かに」

「学校だし、ここ」

「だからよ。それじゃないかしら」

「こう言う野上だった。」

「居合部の馬鹿が誰かね」

「そうね。居合部ならね」

「誰がそうなっても不思議じゃないわね」

「そうそう、確かに」

「世の中馬鹿な男も多いし」

「三人はそれぞれ行っていく。そうしてだった。」

「今度は州脇がであった。言ってきたのである。」

「そうだ、後は剣道部」

「ああ、道場一緒だし」

「そっちの線も有り得るわね」

「えっ、剣道部って」

「ここで、であった。星華が驚きの声をあげた。そうしてそのうえで同じく驚いた顔になってそのうえで三人に対して言ってきたのであった。」

「まさか。それは」

「あれ、星華ちゃんどうしたの？」

「急に驚いた顔になって」

「何かあったの？」

「あつ、別に」

三人の言葉を受けて急に冷静さを取り戻した。そのうえで何とか落ち着きを保ってそのうえでまた言葉を返したのであった。その間は僅かだったが彼女の努力はかなりのものだった。

「何もないけれど」

「そうなんだ。急に声あげたから」

「何かって思ったけれど」

「何もないんだ」

「そう、それにしてもよ」

何とかさりげなくを装って三人に尋ねにかかった。

「剣道部って居合部と同じ場所だったの」

「そうよ。同じ道場使ってるのよ」

「柔道部とは別の場所ね」

「そこを一緒に使ってるの」

三人はこう星華に説明するのだった。

第七話 二人の仲その十三

「星華ちゃんそのことを知らなかったの」

「皆知ってることだって思ってたけれど」

「ねえ」

「ちよつとね。私武道方面疎いから」

これは本当のことだ。しかし陽太郎が剣道部なのは知っていた。

だがここでふとそのことを思い出しもしてそのうえで話すのだった。

「そういえば同じ道場ってどっかで聞いたっけ」

「前にこの話したよね」

「そうよね」

「結構前だけれど」

三人もここで話す。

「星華ちゃん忘れてただけじゃないの？」

「ただそれだけなんじゃないの？」

「そうかも。迂闊だったわ」

首を捻って無念そのものの言葉で述べた。

「そうなんだ、あいつ剣道部と一緒に道場なんだ」

「それがどうしたの？」

「何かあったの？やっぱり」

「剣道部に誰がいるの？」

「あつ、別に」

ここでまた誤魔化した星華だった。

「何もないけれどね。そうなの、剣道部と一緒にね」

「天文部だったら合うのにな」

「あのチビツ子と一緒にだしね」

「丁度いいのね」

今度は月美の傍に座る椎名を忌々しげに見る。月美にあれこれ言ったり嫌がらせをするにも彼女がいる限り無理だった。それでそう

した目になつていたのだ。

「うざいわね、本当に」

「うちのクラスに居座り続けてね」

「三組なのに」

今度は四人で言う。

「何だつていうのよ」

「文句言つても聞かないし」

「屁理屈言うし」

「どうにかしないとね」

星華も実に忌々しげな顔で言う。

「あいつがいたら西堀動かないし」

「それいいことにしてね」

「本当に嫌な奴よね」

「全くね」

こうしたことを話しながらそのうえで二人を見ていた。何処までも自分達のそうした感情が何処から出ているのかわかっていなかった。

「あんな奴痛い目に遭えばいいのに」

「つていつか遭わしたいわよね」

「全く」

三人はまた言った。

「けれどあのチビツ子がいたらそれだけで」

「何もできないし」

「あいつ口強いしね」

既に椎名の口で随分とやられているのであった。それでも手出ししないようになっていたのだ。人間痛い目に遭えばもうしなくなるものだ。

「しかも結構強いらしいし」

「えっ、強いのか？」

「天文部らしいのに」

「それがね」

それを話したのは州脇だった。

「中学まで格闘技やってたらしいし。今でもしてるんじゃないの」「今でもって」

「じゃあ腕も立つの」

「みたいよ。ほら、脚も速いじゃない」

州脇は二人にさらに話す。

「あいつ体育の時間でいつも物凄いスピードで走るじゃない」

「そういえば短距離も長距離もどちらも」

「ダントツで速いわよね」

二人も州脇の言葉に頷く。

「もうべらぼうにね」

「速いから」

そして星華に顔を向けて言うのだった。

「星華ちゃんよりも速いわよね」

「脚だけだったらね」

「そうよね」

星華はまた忌々しげな顔になって述べた。

第七話 二人の仲その十四

「あの速さ。本当にね」

「何か随分と忌々しいってどうか」

「本当よね」

「何でもかんでもね」

今度は星華を取り巻いての言葉だった。

「あいつがいなかったら」

「けれど絶対に離れないし」

「どうしたらいいかしら」

「とにかく今は無理ね」

星華の言葉も顔もそのまま忌々しげなものだった。その顔で椎名と、そして月美を見ている。そうしてそのうえでの言葉だった。

「中々離れないから」

「隙を見て、しかないわね」

「その隙も見せないけれど」

「仕掛ける？」

今言ったのは橋口だった。

「何か仕掛けて。離れる？」

「じゃあお互いに悪口吹き込んで仲間割れさせる？」

野上がこんなことを言った。視線を少し上にしてだ。

「西堀一人だったら何とでもなるし」

「それはどうかしらね」

だがそれには星華がいぶかしむ顔で返した。

「効かないと思うわ」

「効果ないのね」

「成功しないっていうの」

「あの二人お互いを信じきってるみたいだし」

星華はそのことを見抜いていた。そのうえでの言葉だった。

「だからね。迂闊な悪口、相当なものでもね」

「駄目なのね」

「それは」

「ええ、無理ね」

また言う星華だった。

「間違いなくね」

「ちえっ、だったらどうしようかしら」

「このままだと何もできないしねえ」

「鬱陶しいことこのうえないわね」

こう言い合って難しい顔になる四人だった。星華にしても手出しができませんししょうもなかった。それで何もできないまま歳月が過ぎていった。

星華が陽太郎と会える時間はかなり減った。クラスも違うし部活も違う。これでは会う方が無理というものだった。そしてたまに会った時はだ。

「あっ、久し振りね」

「そうだな」

廊下でばったりと会った時等だった。その時に挨拶するのだった。

「何か最近会わないいな」

「そうよね。ちよっと残念」

「残念なのか」

「あっ、ちよっとね」

自分の失言をここでも隠すことになってしまった。

「何ていうかね」

「何ていうか？」

「何でもないから」

無理矢理こういうことにしてしまったのであった。

「それだけけれど」

「それで？」

「今調子どうなの？」

本当はもっとこころ深い話があった。だがそれを出すことができずにこころした話を選んだのだった。それでこんなことを言ったのである。

「今は」

「ああ、部活も勉強の方もさ」

「調子がいいのね」

「ああ、いい調子だよ」

微笑んで言った陽太郎だった。二人は廊下で話をしている。

「本当にさ」

「そうなの」

「そっちはどうなんだ？」

今度は陽太郎から言ってきたのだった。

第七話 二人の仲その十五

「佐藤はさ」

「私はね。ちよつとね」

「ちよつと?」

「苦労してるわよ」

「こつ言つたのだった。これは本当のことだった。」

「本当にね」

「そんなになの」

「そつなのよ。部活も大変だし勉強も追いつかないと大変だし」

「うちの学校厳しいしな」

「そつよね、進学校っていうのは本当ね」

「本音で話す。本当に思っていることである。そしてである。」

「かなり大変よ」

「けれどこの学校に入ったんだよな」

「まぐれよ」

「実際にこつ思つてもいた。死ぬような受験勉強を経たがそれでもである。受かつたのは運だと。今でも思つていたのである。」

「あれはね」

「まぐれでも入れただろ?」

「入れたけれど」

「それじゃあ大丈夫じゃないか」

「陽太郎は明るく笑つて言う。その笑顔は爽やかなものだった。」

「それなりのものがあるから入られたんだよ」

「そつなの」

「そつさ。だからしつかりと自信をもつてやっていけば大丈夫だよ」

「あんたは成績いいじゃない」

「星華はまずこつ返した。」

「中学の時から」

「それさつきも言わなかったか？」

「言ったけれどそれでもよ」

言うのであった。

「私は違うから」

「けれど毎日少しずつでも勉強していったら違うからな」

「毎日ね」

「一応してるんだらう？」

「ええ」

こくりと頷く。これはその通りだった。

「やっぱり。毎日しないと」

「じゃあいけるんじゃないのか？」

「追いつくのに必死よ」

困った顔で言った。そこに今の彼女の考えが出ていた。

「本当にね」

「けれど勉強していたら何とかなるさ」

「追試だけは逃れないよね」

それで必死なだった。

「今思うのはそれだけよ」

「追試かあ」

「あんたには関係ないでしょうけれどね」

「いや、俺も最近理科がさ」

「危ないの？」

「結構」

こつこつのである。

「危ないのよ、これがね」

「そうなの。意外ね」

「いや、実際にこれが。物理って難しいよな」

「えっ、物理!？」

物理と聞いてだった。星華の顔が急に歪んだ。実は彼女は物理が大の苦手である。当然嫌いな科目の第一位でもある。そこまで嫌い

なのだ。

「物理って」

「ああ、それ受けてるんだけどな」

「そんなの受けてりゃ困るのも当然じゃない。あんた文系よね」

「ああ、そのつもりだけれどな」

「それで何で物理なのよ」

「国立受けようとも思ってた。やっぱり止めておいた方がいいかな」

「八条大学でいいじゃない」

星華は言う。

「そうでしょ？八条大学でね」

「そうしようか、やっぱり」

「そうしなさいよ。ところでさ」

「ああ。何？」

「ええとね」

言おうとしても中々言葉が出ない。それに困った。しかしそれでも何とか言葉を出した。それは彼女の今の勇気そのものでもあった。

第七話 二人の仲その十六

何とか言う機会を狙っていたが今だった。それで言ったのであった。

「今度の休みだけれど」

「今度の」

「そう、日曜バスケット部オフなんだ」

「ああ、俺のところもだよ」

「あつ、そうなの」

星華はそれを聞いてすぐに笑顔になった。実に明るい顔である。

「あんたもなの」

「そうなんだ。何か久し振りだよ」

「じゃあ丁度いいわね」

うっかりと自分の考えを言ってしまった。しかし幸いにして陽太郎はそれに気付かないまま。そのまま星華の言葉を聞くのだった。

「あの、よかつたら」

「ああ、よかつたら」

「街行かない？ 灘の方に」

「あつ、悪い」

しかしだった。陽太郎はここで言うてきたのだった。

「その日な」

「何かあるの？」

「約束があった。今思い出した」

「約束って」

「だからな。そっちには行けないんだよ」

「そうなの」

そう言われた星華はだ。がっかりした顔になった。そのうえで顔を俯けてだ。溜息まで出してしまいそうして言葉を出すのであった。「折角って思っただのに」

「本当に悪いな」

「いいわ」

こう言うしかなかった。

「仕方ないわよね。先約があるのなら」

「またな」

「ええ、またね」

そしてこう答えた。

「また機会があればね」

「誘ってくれよ。それじゃあな」

「ええ、またね」

こんな話をして別れた学校のある日のことだった。もう六月に入り衣替えの季節ともなっている。時間は確実に進んでいた。

陽太郎は自分の教室に戻った。するとそこに狭山と津島が笑顔で来た。自分の席に座った彼に対してすぐに声をかけてきた。

「なあ、あの店行ったか？」

「それはどうなの？」

「ああ、まだなんだよ」

こう答える陽太郎だった。二人に顔を向けてだ。

「今度行くけれどな」

「今度かよ」

「今度の日曜？」

「その日休みでさ。行くんだよ」

こう話すのだった。

「平日中々休みなくてさ」

「そうか。じゃあ仕方ないよな」

「その日にね。そういうことね」

「ああ、二人で行って来る」

彼一人ではなかった。今確かに二人と言った。それは確かだった。

「西堀とな」

「いいんじゃないのか？それでな」

「そうよね」

狭山と津島もそれを聞いて満足した声で述べた。

「俺達はもう行って来たぜ」

「やっぱり美味しかったわよ」

笑顔で言う二人だった。

「いや、こいつの親戚の店っていうからよ」

「何よ」

狭山は笑顔で自分の右にいる津島を指差し津島は横目で狭山に返す。

「期待していなかったんだけれどよ」

「期待しなさいっての」

相変わらず仲がいい程、の二人だった。

「そこは無理にでもね」

「期待できるかよ。糞まずいって思うのが自然だろ」

「それでどうだったのよ」

「美味かったけれどな」

狭山も味については素直だった。

第七話 二人の仲その十七

「それは確かだよ」

「へえ、美味しいのか」

「そうよ、美味しいからね」

「早く行けよ」

津島も狭山もそれは勧めた。

「いいわね、今度の休みね」

「西堀さんとな」

「ああ、わかつたよ」

陽太郎も二人の言葉に素直に頷いた。

「じゃあ行つて来るな」

「気合入れて行く」

急に椎名が出て来た。そのうえでの言葉だ。

「はじめてだから」

「はじめてって？」

「そう、はじめて」

こう彼に言ってくるのである。いつもの無表情でだ。

「だから」

「はじめてって何だ？」

「おい、わからないのかよ」

「あんた鈍過ぎよ」

ここでまた狭山と津島に言われたのだった。二人の顔は今度はいささか呆れたものになっている。その顔で言ってきているのである。「だからな。こうした場合はな」

「あれじゃない、あれ」

「あれって？」

「デート」

今言ったのは椎名だった。

「それ」

「えっ、デートって」

「男の子と女の子が一緒に何処かに行く」

椎名の目はいささか座っているものになっていた。その目で陽太郎に対して言ってきたものである。

「それがデートでなくて何？」

「そうなのか」

「そう。つきぴーは純情だから気をつける」

「普段の登下校の時と違うのかよ」

「大体同じでいい」

何気にアドバイスもする椎名だった。

「ただ」

「ただ？」

「変なことしたら許さない」

「また目が座っていた。」

「その場合は死なす」

「物騒だな、おい」

「私が蹴って赤瀬が窓から放り投げる」

「最後は何なんだよ」

「本気だから。とにかく変なことしたら許さない」

それは強く言うのだった。頭の後ろにある赤いリボンは綺麗だが今は何故か可愛らしくは見えなかった。鬼の角の様に見えた。

「いいわね」

「俺だって別にそんなことしないよ」

陽太郎が困った顔で椎名に返した。実際にそのつもりは毛頭ない。

「紳士的っていうか高校生らしくさ」

「まあキス位で止めておけよ」

「そうそう」

「狭山と津島がまた囃し立てる。」

「そこはしっかりどだな」

「真面目にしないとね」

「キスとかそんなことするかよ」

だが陽太郎はこのことにも慚然として返した。

「いきなりそんなことはな」

「意気地なし」

また椎名が言ってきた。

「それ位する勇氣もないの」

「御前今変なことしたら殺すとか言ったじゃないか」

「それでも勇氣はないと駄目」

「どついつ勇氣なんだよ」

「真面目にかつ大胆に」

「相反してないか？」

これまでの話を聞いてこう思わざるを得ない陽太郎だった。それで言ったのである。

「何かな」

「気にしない。とにかくファーストデートは」

椎名はこの話をまたした。

「しつかりとする。それは絶対に」

「ああ、わかったよ」

陽太郎も自分の席に座って椅子の背もたれに左手をかけた姿勢で応えた。

「俺なりに真面目にかつ大胆にだな」

「そう」

「やってみるぞ」

こう言ってであった。ファーストデートに挑むのだった。

そしてである。ここで赤瀬も来た。まさに山が出て来た感じであった。

その山がだ。言ってきたのである。

「椎名さん」

「何」

椎名は今度はその赤瀬に顔を向けた。

「今度だけれど」

「うん」

「何処に行くの？」

「二人の監視」

何気にこんなことを言うのだった。

「そこに行く」

「うん、じゃあ」

「そんなの来るなよ」

ムキになって睨んだ陽太郎だった。

「全くよ、何か変なことになったな」

「まあ頑張れ」

「応援してるからね」

最後に狭山と津島が言った。こうして陽太郎は今度の日曜にフアーストデートをすることになった。

第七話 完

2010・4・17

第八話 ファーストデートその一

第八話 ファーストデート

その朝。陽太郎は武装に忙しかった。

「お兄ちゃん、何してるの？」

「準備だよ」

洗面所の前で鏡と睨み合いをしながらだ。妹に返す。

「ちよつとな」

「準備つて？」

「出掛けるんだよ」

こつまだパジャマ姿の妹に対して言うのである。

「今日これからな」

「出掛けるのはいつもじゃないの？」

「今日は特別なんだよ」

言いながら髪をセットしている。既に服は整えている。整髪料と櫛で髪を必死に整えているのである。

「もうな。いつもと違うんだよ」

「お兄ちゃんもいつもと違う」

妹はその兄に対してこつ言った。

「全然」

「違うか？」

「うん、変」

こつ言うのである。そのまだ寝惚けが残っている顔でだ。

「何か変」

「そんなにおかしいか？」

「うん、おかしい」

あくまでこつ言う陽子だった。

「普段のお兄ちゃんと違う」

「ああ、それはな」

その言葉を聞いてだった。すぐに納得した陽太郎だった。そしてそのうえでまた言うのであった。

「当たり前だよ」

「当たり前なの？」

「お洒落をしているからな」

「お洒落？」

「そうだよ、お洒落なんだよ」

それだと話すのである。相変わらず髪をセットしながらだ。

「今日は特別な日だからな」

「特別なって？」

「ああ、特別なんだよ」

こう話すのである。

「それでこうしてるんだよ」

「いつものお兄ちゃんと違う」

後ろにいて鏡に映る妹は憮然とした顔のままだ。そうして言ってくる。

「もっと普通の感じがいい」

「普通がいいっていいのかよ」

「うん、いい」

これが彼女の言葉だった。

「何かいつもと違ってよくない」

「それは別にいいだろ？」

「よくない。いつものがいい」

あくまでこう言うのであった。そうしてだった。

髪をセットし終えて朝食を食べる。だが今テーブルに一緒なのは妹だけである。陽子は彼の向かいに座って彼が焼いたトーストを静かに食べている。

陽太郎もそのトーストと昨日の夕食の残りの鮭のムニエルとミルクを食べながらだ。そのうえで彼女に対して尋ねたのであった。

「お父さんとお母さんは？」

「寝てるよ」

寝てるというのである。

「まだ寝てるよ」

「何だよ、起きたのは御前だけかよ」

「一人で起きたんだよ」

笑顔で兄に話してきた。

「偉いでしょ」

「ああ。御前最近起きるの早いんだな」

「早寝早起きだよ」

笑顔はそのままあった。

「先生に言われたから。健康にはまずそれでいいってね」

「そうか。学校の先生にか」

「お勉強にもいいってね」

「勉強もしてるんだな」

「してるよ。陽子も八条高校に行くんだ」

「へえ、そうなのか」

陽太郎も陽子のその言葉を聞いてだった。納得した顔になった。

そうしてそのうえであらためて妹に対して言うのであった。こうした風にだ。

第八話 ファーストデートその二

「いいな、それは」

「えへへ、いいでしょ」

「もうおねしょもしないし食べる時も零さないしな」

「陽子偉いんだよ」

陽子は満面の笑顔で兄に話した。

「何だつてできるんだから」

「賢いよ、確かに」

温かい顔だった。妹に向けるのに相応しい顔だった。

そしてその顔でだ。陽子にまた話した。

「そのうちいい彼氏もできるかもな」

「彼氏って？」

「いい彼氏見つけるよ」

まだ小学一年生の妹にこう話すのだった。

「御前を幸せにしてくれる彼氏をな」

「彼氏。まだいないよ」

「今はいなくていいんだよ」

微笑んでの言葉だった。

「それでも。何時かな」

「うん、陽子彼氏見つけるから」

「それもいい彼氏をな」

「うん、見つけるから」

陽子もまた話す。

「絶対にね」

「そうしろよ。お兄ちゃんもな」

「お兄ちゃんも？」

「見つけたからな」

「こう言うのである。」

「幸せにやっっていくからな」

「お兄ちゃんも幸せになるんだ」

「なるよ。だから今から行くんだよ」

「今からそこに」

「ああ、行つて来るな」

こつ話してであつた。食べ終えて歯を磨いて家を出る。そうして最初に行った場所は余所行き駅だつた。そこに向かつたのである。駅に降りるとそこは前に綺麗な噴水がある駅だつた。白い白鳥が飾られているその噴水を見ながらだ。そこで暫く待っているとだつた。

「おはようございます」

「おっ」

その言葉がした方に顔を向けるとだつた。普段の制服とは違う月美がいた。白いロングスカートはフリルはひらひらとしたものだ。そして黄色いブラウスという楚々とした格好である。その月美が来たのである。

彼女は陽太郎を見るとだ。すぐに言つてきた。

「斉宮君はその服なんですね」

「ああ、駄目かな」

「いいと思いますよ」

にこりと笑つて答えた月美だつた。

「とても」

「そんなにいいか？」

「いいです」

笑顔はそのままだつた。

「とても」

「そう言つてもらつと嬉しいよ」

「そうですか」

「ああ、嬉しいよ」

見れば彼は白い半袖のシャツに黒いアーミー模様のジーンズであ

る。普段のあの青い七つボタンの長ランや青と水色の夏服とは違って随分とラフな姿である。靴も黒い皮靴だ。

「とてもね」

「ラフな格好にされたんですね」

「こういう服も好きなんだ」

「そうなんですか」

「ああ、それでこの格好にしたんだよ」

また話すのだった。

「それにしても西堀の今の服だけねど」

「はい」

「それも似合うよな」

今度は彼からの言葉だった。

「ロングスカート似合うんだな」

「ロングスカート好きなんです」

ここでその顔が笑顔になったのだった。

「昔から」

「そうだったんだ」

「学校の制服はあれですけどねど」

「まあ学校の制服はね」

陽太郎もそれはわかった。学校の制服は、である。

第八話 ファーストデートその三

「短いばかりだからね」

「ロングスカートもありますけれど」

「あれはいてたら昔のスケ番だしね」

「古いですよ、やっぱり」

「かなりな。まあ俺にしても」

月美に話しながらだった。陽太郎は自分の学校の制服についても考えた。その青い七つボタンの長ランである。それについて考えたのだ。

「長ランも今時ないけれどさ」

「そうですね？結構着ている人多いですよ」

「応援団は黒だよ」

「はい、それでも長い制服も多いですよ」

「そう言われてみればそうかな。長ランも人気あるかな」

「特に白いのが多いと思います」

所謂白ランである。八条学園ではそれも制服になっているのである。

「あれが」

「白ランかあ。あれ何で人気があるかわかる？」

「どうしてですか？確かに着ている人多いですけれど」

「海軍だからなんだよ」

陽太郎は笑ってその理由を話した。

「海軍の制服がそれだったからなんだよ」

「そうだったんですか」

「ほら、他にも黒い詰襟のボタンのないのとか俺のみたいに七つボタンのとか」

「そういうのもですか」

「全部海軍なんだよ。俺のは予科練のだったんだよ」

「こう話すのだった。」

「その軍服だったんだよね」

「歴史があるんですね」

「それで女の子のセーラー服はさ」

「この学園にはセーラー服もある。古典的な制服ではある。」

「海軍の水兵さんでさ」

「あつ、そうだったんですか」

「そうなんだよ。セーラー服の娘も多いよね」

「はい、何着持っていてもいいですし」

制服に関しては相当リベラルな学校なのである。

「ですから」

「そうだよ。デザインもいいしね」

「海軍の服はそうだったんですね」

「うん。けれどやっぱり白い制服っていいよね」

「見栄えしますしね」

黒と白では目立ち方が違う。そういう意味もあった。

「私も。白いブレザー買おうかしらって思ってます」

「いいんじゃない？俺も白の短いの買おうと思ってるし」

「斉宮君もなんですね」

「そうなんだ。それでさ」

「はい、それで」

「デートだけれど」

「あつ、はい」

デートの話になるとであった。月美の声が弾んだ。それまでの蘊蓄を聞く様なものから様変わりしてだ。弾んだものになったのである。

それを聞いてだ。また話す陽太郎だった。

「最初に何処に行く？パン屋はもう決まってるけれど」

「そうですね。最初は」

「映画館どうかな」

陽太郎からの誘いである。

「それでどうかな」

「映画館ですか」

「うん、ここって本屋もあるけれど、いいのがね」

「最初はですね」

本屋と聞いてであった。月美はすぐに言ってきた。

「本屋にしませんか？」

「本屋？そこにするんだよね」

「はい、そうします」

こう言つてであった。二人はまずは本屋に向かった。その本屋は三階建てであり立派な店だった。中には本がこれでもかと積み重ねられている。

そこに入るとだ。月美はすぐにあるコーナーに向かった。そこは

「ああ、凄い一杯ありますね」

「ええと、海外の翻訳本なんだ」

「推理です」

やはり声が弾んでいる月美だった。

「推理小説も好きなんです」

「そうだったんだ」

「特に。古典的ですけど」

こう前置きしてからの言葉だった。

第八話 ファーストデートその四

「コナン」ドイルが好きです」

こう述べるのだった。

「シャーロック」ホームズいいですよ」

「ああ、ホームズ確かにいいよな」

「そうですね、斉宮君もホームズ読まれてたんですか」

「好きだしな」

実際にそうだとしたのであった。

「アニメも映画もあったし」

「はい、それもですか」

「女の人のホームズも凄かったけれど」

その話もした。

「映画であつたんだよな」

「女の人のホームズですか」

「ああ、知らなかったんだそれは」

「はい、ちよつと」

首を傾げさせながら述べる月美だった。実際にそうなのがわかる。

「面白そうですね」

「面白いよ。あと俺さ」

「はい、何が」

「推理小説もいだけれど最近ホラーも好きなんだよな」

そちらもだというのである。

「そうした小説もさ」

「ホラーもですか」

「あの、ポーあるじゃない」

「エドガー」アラン」ポーですね」

月美はポーと聞いてすぐにフルネームを出した。アメリカの作家であり詩人でもある。推理小説を最初に書いた人物としても有名で

ある。

「私もあの人の作品は」

「ああ、これこれ」

陽太郎は早速本棚からポーの小説を見つけた。

「これだよ。モルグ街の殺人だよ」

「それ凄い作品ですよ」

「動物が犯人つてないよ」

「本当に最初ですから」

「だよ。後は」

言いながらポーのコーナーをさらに見ていく。そうしてまた見つけたのは。

アツシャー家の崩壊だった。それも見つけたのである。

「これって怖かったんだよ」

「斉宮君つて前からポー読まれていたんですね」

「いや、最近になってなんだよ」

「最近なんですか」

「ほら、西堀が色々と本を勧めてくれたじゃない」

「最初の頃ですか」

「その時に読んだんだよ」

そうだったというのである。

「ポーもさ」

「その時ですか」

「俺読むの早くて一日で二冊読めるんだ」

「それって凄いですよ」

「凄いんだ」

「はい、とても」

尊敬とまではいかないが羨む様な言葉だった。

「一日に二冊つて。私一冊でやっとですし」

「こういうのは個人差だったんだろっね。それで何買うのかな」

「ええと、そうですね」

ここであった。月美はドイルとポーを一冊ずつ手に取った。合わせて二冊だった。

「これだけです」

「じゃあ俺はこれにしようかな」

陽太郎は三冊買った。どれもドイルであった。

「じゃあ行こうか」

「はい、カウンターに」

「そうですね。それでは」

こう話してだった。二人でカウンターに向かいそうして買ったのであった。

本を買ってからだだった。二人は店を出た。そのままデートは続く。商店街のアーケードの中を進む。アーケードはかなり長く先も見えない。月美は左右に店が立ち並び人々も行き交うその中を進みながら陽太郎に言ってきた。

「ここいいですよね」

「気に入ってるんだ」

「はい、何度か来ていますけれど」

微笑みながらの言葉だった。

「やっぱり何度来てもいいですよね」

「そうだよ。俺もさ」

「斉宮君も？」

「時々ここに来るんだ」

彼もまた微笑んでいた。そのうえで月美に対して言ってみせたのである。

第八話 ファーストデートその五

「小学校の時からかな」

「それじゃあ結構」

「ああ、知ってるよ」

実際にそうだと話してもみせた。

「あの本屋だってそうだしさ」

「他には？」

「マクドナルドだって映画館だってあるし」

「今から行くその映画館ですよ」

「うん、そこ」

まさにそこだというのである。

「後はラーメン屋もあるしさ。うどん屋もいい店があるよ」

「そうですね。ここって色々ありますよね」

「だからここ好きなんだ」

純粹にこのことを述べてみせたのである。

「今もさ」

「高校になってもですか」

「西堀もここ好きなんだろ？」

今度は月美に対して問うてみせた言葉であった。

「だから今笑顔なんだよな」

「はい、そうです」

まさにその通りだと返す月美だった。

「あとは」

「あとは？」

「いえ、それは」

言おうとしたが止めた。顔は赤らんでいる。

「少し」

「言えないとか？」

「すみません」

その赤らんだ顔での言葉である。陽太郎はその赤らんだ顔を見た。しかしそれがどうしてなのかまではわからなかった。それに気付くにはまだ経験不測であったからだ。

「けれど。今とても楽しいです」

「そう。ならよかったよ」

「それでですけど」

月美からの言葉であった。

「まずは映画館に行くまでに」

「何か食べる？」

「何処がいいでしょうか」

食べ物の話をしてみせたのである。

「色々ありますけれど」

「そうだよな。うどんだつていいしさ」

陽太郎はまずはうどんを話に出した。

「ラーメンもハンバーガーもいいしさ」

「麦は後でパン屋さんに行きますから」

「あつ、そうか」

「今は御飯にしませんか？」

こう彼に提案するのだった。

「井か何かで」

「ああ、井か。それもいいね」

「牛井とか」

「えっ!？」

牛井と聞いてであった。陽太郎は我が目を疑う顔になって月美に顔を向けた。自分の横にいる彼女を見ずにはいられなかったのだ。

「今何て？」

「牛井ですけど」

「それでいいの？」

その驚いた顔でまた問うた。

「いや、牛丼で」

「何かありますか？」

「いや、西堀も牛丼食べるんだ」

「そうですね」

「そうだったんだ」

意外といった顔はそのままだった。

「西堀が牛丼って」

「女の子皆好きなんじゃないですか？」

「そうか？何か牛丼ってさ」

「男の子が食べるものとか？」

「あと超人とか」

漫画の話もさりげなくするのだった。この話は昔のものだが今もしっかりと残っている。かなりの宣伝効果があるのは確かなことである。

第八話 ファーストデートその六

「そういう人が食べるんじゃないの？」

「そうなんですか？」

「俺はそう思っていたけれど」

「愛ちゃんもしょっちゅう食べてますし」

「あいつか」

「はい、吉野家の牛丼特盛りをお弁当で定番のメニューの一つではある。」

「それをなんです」

「それで西堀も？」

「駄目ですか？」

「いや、駄目じゃないけれどさ」

それは彼女も否定した。

「それでもさ」

「それじゃあ牛丼止めますか？」

「あつ、それは別に」

陽太郎の言葉がここで少し変わった。

「まあ牛丼の他にも食べるし」

「吉野家の他にもですか」

「ざる蕎麦もいい店知ってるしさ」

その店も知っているというのである。

「そこも行くのかな、なんて思ってたけれど」

「お蕎麦ですか」

「蕎麦アレルギーとかないよね」

「はい、全く」

それはないというのであった。

「アレルギーはないです」

「そう。だったら後で蕎麦も食べるし」

「まずは牛丼ですか」

「順番はいいんだよ」

それはいいというのである。

「それで行くのか」

「はい、それじゃあ」

こうしてだった。二人はまずは吉野家に入った。そして牛丼を食べてからそのうえで蕎麦を食べに入った。陽太郎も月美も頼んだのはざる蕎麦だった。

それを食べながらだ。陽太郎はあらためて言うのだった。

「あのさ」

「はい」

「西堀って蕎麦も好きだったんだね」

「はい、そうですね」

そのざる蕎麦を食べながらの返事だった。

「私和食好きなんです。それで」

「蕎麦もだったんだ」

「他にもおうどんも好きですし」

それもだというのだ。

「丼も」

「だから牛丼もなんだ」

「はい、そうですね」

また答えた月美だった。

「牛丼は和食ですから」

「そうかな」

月美の今の言葉にはつい首を傾げさせる陽太郎だった。そのうえで言葉だ。

「牛丼って和食だったんだ」

「カレーだってそうじゃないですか」

「えっ、カレーもなんだ」

「はい、そうですね」

にこりと笑って陽太郎に言うのである。その和風の木の店の中で。

「カレーライスも」

「カレー丼じゃなくて」

「はい、カレーライスです」

はつきりと言ったのだった。カレーライスであると。

「それです」

「ええと、インドの料理ではなくて」

「和食ですよ」

また言うのであった。

第八話 ファーストデザートその七

「インドの人がそう言っています」

「カレーライスが和食って」

「元々はイギリスから伝わったもので。インドはイギリスの植民地だったのでその関係でイギリスから日本に伝わったんですよ」

「へえ、イギリスからだっただ」

陽太郎はそれを聞いてその目を少し丸くさせた。蕎麦を食べながら。

「インドからじゃなくて」

「斉宮君さつき海軍の軍服のこと話されましたよね」

「うん、それも関係あるんだ」

「そうですね。イギリス海軍で食べていたカレーが日本風にアレンジされたのがカレーライスなんです。日本海軍が取り入れて」

「ああ、それで海軍なんだ」

「ここまで聞いて頷いた陽太郎だった。

「そういうことだったんだ」

「そうですね。それで」

「和食になるんだ」

「もつと言えば洋食ですけどその洋食にしても」

月美の話はそのまま続く。

「あれじゃないですか。明治時代に御先祖様達が西欧の料理から作ったものですか」

「日本の料理になるんだ」

「そうですね。洋食も日本の料理です」

はつきりと言い切ったのだった。

「ですからカレーも」

「インド人してみれば和食か」

「はい、そうなります」

「成程。カレーも食べればよかったかな」
「ここでこんなことも言った陽太郎だった。」
「流石に牛丼にざる蕎麦の後だからな」
「ざる蕎麦つていつてもここのお蕎麦つて」
「ああ、多いだろ」
「優に三人前はありますよ」
「それだけあるというのである。その量は確かにかんりのものだ。」
「これだけあればもう牛丼の分も入れて」
「お腹一杯になるよな」
「後はですね」
「後は？」
「デザートもありますし」
「それも言うのであった。」
「お饅頭どうですか？」
「ああ、デザートもあつたんだ」
「はい、和食尽くしですし最後までそれでどうですか？」
「いいね、じゃあそれで行こうか」
「このお店お饅頭ありますか？」
「あるよ。むしろお饅頭よりもさ」
陽太郎も月美の話に乗った。そのうえで言ったのである。
「餡蜜とかあるけれど」
「餡蜜ですか」
「好きかな、ここの白玉餡蜜つて絶品なんだけれど」
「はい、じゃあそれで」
月美はまたしてもにこりと笑って答えた。どうやらその白玉餡蜜もまた彼女の好物であるらしい。陽太郎はその彼女を見てまた言うのだった。
「それにしてもさ」
「それにしても？」
「西堀つて結構何でも食べるんだね」

このことに気付いたのである。

「パンだけかと思つてたのに」

「私食べるの好きなんです」

「それもかなり？」

「はい、大好きです」

これまで以上ににこやかな笑顔だ。それを見ると彼女の考えがよくわかった。月美はとにかく食べるのが大好きな女の子なのだ。

「作るのは今勉強中です」

「家でかな」

「そうです。家で作っています」

「いいね、それも」

「お母さんに教わりながら」

そうしながらだというのである。

「あまり上手じゃないですけど」

「料理つてのは作っていくうちに上手になっていくじゃない」

陽太郎はその彼女に微笑んでこう告げた。

「だからさ。それはな」

「それは？」

「特に気にすることないじゃない」

こう言つのであった。

第八話 ファーストデートその八

「別にね」

「そうですね。作っていけばですか」

「誰だって最初は何でも下手なものだよ」

また言う陽太郎だった。

「俺だって剣道は最初は」

「私も。居合も弓も中々」

「そうだろ？誰だって最初は何でもそうだよ」

温かい笑顔だった。陽太郎は自然とそうなっていたのである。

「だからさ。別にさ」

「いいんですね」

「それで」

「いいと思うよ」

また言ったのだった。

「それでさ」

「大事なのは続けていくことですね」

「これって言われるじゃない」

「そうですね。何でも」

「大事なのは続けていくこと」

陽太郎もこの言葉を言ってみせたのだった。

「やっぱりそれだよ」

「ええ。じゃあ私お料理も頑張ります」

「うん、頑張つてよ」

「それで今度」

そして言う言葉は。

「よかったら学校で」

「学校で？」

「あっ、何でもないです」

言いかけたところで止めたのだった。

「それは」

「そうなんだ」

「それでですね」

咄嗟に話題を変えてきた月美であった。

「この後ですけれど」

「映画館だよね」

「映画は何でしょうか」

具体的にそれについて尋ねたのだった。

「邦画でしょうか。それとも洋画でしょうか」

「邦画だけれど」

そちらだと答える牧村だった。

「それでいいよね」

「それでジャンルは」

「ホラーだけれど駄目？」

ここでは少し慎重な口ぶりになる陽太郎だった。

「ホラーは」

「いえ、じゃあそれで」

答える月美の返答は明るいものだった。

「是非御願います」

「それでいいんだ」

「ホラー好きなんです」

だからいいというのであった。

「ですから」

「そう言ってくれてよかったよ。それじゃあさ」

「はい、それじゃあ」

「デザート食べてから行こう」

にこりと笑って言う陽太郎だった。

「その白玉餡蜜ね」

「そうですね。白玉餡蜜二つですね」

「うん」

一人一つずつという訳である。

「それじゃあそれでね」

「わかりました」

二人はそのデザート白玉餡蜜を食べた。それは上品な甘さに満ちたものだった。それを食べてからだだった。二人は映画館に入った。今丁度上映がはじまるところだった。最高のタイミングである。暗い映画館の中に二人並んで座って。そうして観はじめる。

「はい、これ」

「あつ、すみません」

陽太郎はコーラを差し出した。缶コーラである。

自分の分も持っている。それを差し出しての言葉だった。

「この映画って結構長いしさ」

「だからですか」

「うん、飲みながら観ようよ」

リラックスしての言葉だった。

第八話 ファーストデートその九

「それじゃあね」

「はい、それでは」

こう話して映画を観る。映画は所謂亡霊を扱った映画だった。それを観たのである。

観終わってからまたアーケード街を歩く。その中でだ。

陽太郎はまた自分から月美に対して言ってきた。

「じゃあ次はいよいよ」

「はい、あのお店ですね」

「パン屋さん。西堀のその鼻眞の店だよな」

「とても美味しいですよ」

満面の笑顔でその店のことを言うのだった。

「もう一口食べればそれだけで」

「狭山と津島も言っていたしな」

彼女だけではないのだった。しかしである。

そのうえで一旦アーケード街を出ることになった。電車に乗るのがあった。

電車の中で二人並んで座ってである。そこでも話すのだった。

「なあ。それでだけねどさ」

「はい」

「そのお店って津島の親戚の人のお店だったなんてな」

「奇遇ですよね」

「ああ、本当にな」

それを言うのだった。電車の中でもくつろいでいる二人だった。

「しかしこの辺りってな」

「色々なお店ありますよね」

「そうだよな。ほら、山月堂とかさ」

その店の名前も出るのだった。

「あの店のケーキも美味しいよな」
「本来は和菓子屋さんですけどそれでもですよね」
「あのお店のお菓子って八条百貨店にも売ってるしな」
「そうですね。何か百貨店の重役の人が特別に頼んで入れてもらってるそうで」
「ああ、そうなんだ」
「はい、母があこの百貨店によく出入りしていました」
「ここで月美は母親のことも話に出した。」
「それで百貨店の人がお家に来ることもあります」
「へえ、西堀の家ってそういう人も来るんだ」
「そうなんです。それで」
「わかったんだ。あの百貨店って品揃えいいけれどさ」
「そうですね。とても」
「やっぱり努力もしてるんだな」
腕を組んで言う陽太郎だった。
「最近百貨店も厳しいけれどな」
「はい、それでその重役の人の娘さんと山月堂の息子さんが婚約者同士らしいですよ」
「婚約者って。何かそれって」
「いいですよね」
陽太郎は政略結婚を見ていたが月美は違っていた。
「そうした相手がいってくれるって」
「ま、まあそうかな」
言おうと思ったが月美の晴れやかな顔を前にして言えなかった。
「それはさ」
「そう思います。その山月堂ですけど」
「ああ」
「私あそこのお菓子も好きなんですよ」
笑顔は今度はにこりとしたものだった。
「上品な美味しさですよね」

「そつだよな。あの甘さつてな」

「そうですね。それでなんですが」

「それで？」

「今から行くお店の美味しさも凄いんですよ」

「そういえばお菓子も作ってたんだっけ」

陽太郎は話をしていているうちにこのことも思い出した。

「じゃあお菓子も買って」

「美味しいですよ、とても」

それをまた言う月美だった。

「ですからそれも」

「お勧めは何かな」

陽太郎は具体的にそれを問うた。

「西堀のお勧めはさ」

「そうですね」

陽太郎の問いを受けて少し考える目になった。それからの返答だった。

第八話 ファーストデートその十

「やっぱりあれですね」

「あれって？」

「ザッハトルテですね」

それだというのである。

「それが一番美味しいですね」

「それがなんだ」

「はい、ザッハトルテがです」

「ザッハトルテっていつたら」

「御存知ですか？」

「オーストリアのあれじゃないの？」

こう切り出した陽太郎だった。

「あの贅沢なチョコレートケーキだよ」

「はい、それです」

まさにそれだと返す月美だった。

「オーストリアのウイーンの」

「そんなのもあるんだ」

それを聞いてあらためて驚くのだった。

「普通のパン屋に」

「凄いですよね、それって」

「そうだよなあ。けれど美味しいんだ」

「はい、とても」

美味しいと。実際に言いもするのだった。

「美味しいですよ」

「そうか。だったらそれにしようかな」

「是非です。そうして下さい」

「そうして下さいなんだ」

「もう本当に美味しいですから」

心から勧めるのだった。それが言葉にも出ていた。

「それじゃあ」

「うん、それにするよ」

「そのザッハトルテですけど」

お菓子のことになるのかなり饒舌になる月美だった。それを話してである。笑顔になってそのうえで陽太郎に対して話すのである。

「本場の味を再現してですね」

「オーストリアの？」

「そして日本人の口に合うようにしてあるんですよ」

「ちよつと待って」

陽太郎は今の月美の言葉にふと気付いたことがあった。

「今本場って言ったけれど」

「はい？」

「ひよつとして食べたことあるの？」

それを問うたのである。

「本場のザッハトルテ」

「そうですね」

「どうやって食べたの、そんなの」

それを問うのだった。問わずにはいられなかった。

「本場のザッハトルテなんてさ」

「どうしてって。ウィーンに行きまして」

「行ったんだ」

「夏休みに家族旅行で」

「俺の家の家族旅行っていったら」

辛い食べ物がふんだんに出て来る国がまず思い浮かんだ。

「韓国に」

「韓国ですか」

「あと中国にアメリカ西海岸。それだけだけれど」

「台湾はどうですか？」

「あるよ」

そこもあつた。

「今度タイに行こうかって話してるけれどさ」

「太平洋系なんですね」

「ウィーンみたいな優雅さはなかったなあ」

むしろ対極にあると言っている。

「いいなあ、優雅なお菓子かあ」

「そうですね？私台湾大好きですよ」

月美は笑顔でまた言ってきた。

「あそこの料理も凄く美味しいですし」

「台湾もって」

「パリのレストランは何か気取っていて」

またしても何気に物凄いことを言う月美だった。

第八話 ファーストデートその十一

「それよりもバイエルンのあのボリユームたつぷりのお料理の方が」
「バイエルン？」

「はい、父がバイロイト好きでした」

今度話に出て来たのはこの街だった。ワーグナーの歌劇場であるバイロイト歌劇場がある場所だ。ワーグナーファン、ワグネリアンの聖地でもある。

「それでそこにも」

「何か西堀の家って凄くない？」

怪訝な顔で月美に問うた。

「ウーインにバイエルン、それにパリってさ」

「父の仕事の関係で行きやすいんです」

「お父さんの？」

「はい、大学の音楽部の教授でした」

そうであるというのだ。

「八条大学の」

「八条大学のなんだ」

「そうなんです。その関係で」

「やっぱり凄いよ」

あらためて月美に対して話すのだった。

「何かさ。そういう音楽的なものって俺の家にはないし」

「ないんですか」

「うん、ただ同じ八条系列に勤めているけれど」

「八条大学じゃなくてですか」

「親父は八条銀行なんだ」

そこだというのである。

「本社にいるよ、ここのね」

「そうなんですか」

「うん、お袋はお医者さんでさ。八条病院にいるよ」

「お母さんはお医者さんで」

「内科のね。最初八条銀行にいてその縁で親父と知り合ったんだ」
「尋ねられる前から答えたのである。」

「そうして結婚して俺と妹が生まれたんだ」

「そういえば妹さんおられましたね」

「ああ、そうだよ」

妹のことになると笑顔で応える陽太郎だった。

「それでなんだ」

「私も妹がいます」

月美も言ってきた。

「小学生の。五年です」

「うちは一年だよ」

「学年は違いますね」

「そうだね。けれど妹さんいるんだ」

「そうなんですよ。結構生意気で」

「あはは、うちのもだよ」

今度は妹の話で弾むのだった。

「もうさ。やんちゃでね」

「妹ってそうですよね」

「そっちもなんだね」

「もう手がかかって」

こう話していく陽太郎だった。

「本当にさ」

「けれどそれでも」

ここで月美の言葉が少し変わった。

「可愛いですよね」

「ああ、確かにね」

陽太郎は月美が話を変えてきたのに内心戸惑った。だがそれに合わせることはできた。そうしてこう言ってみせたのである。

「それね」

「妹がいてよかったです」

「俺も。それはね」

「兄弟がいるっていいですよね」

月美もまた返した。

「本当に」

「ああ、そうだ」

ここで陽太郎はまた話した。

「それだけれどさ」

「それで？」

「妹の分も買おうかな」

こう言っただのである。

「ザツハトルテを。どうかね」

「あつ、それでいいですね」

月美も笑顔でそれに頷いた。

「私も。そうします」

「何だかんだ言っただけで妹さん大事なんだね」

「斉宮君もそうですね」

「うん、やっぱりね」

それをまた言う陽太郎だった。

第八話 ファーストデートその十二

「あいつあれでも俺のこと慕ってくれてるしさ」

「それにしても妹さん小学校一年ですよね」

月美は今度は陽太郎の妹の学年を確認してきた。

「そうですよね」

「うん、そうだけれど」

「十歳ですか」

年齢のことも話した。

「結構離れてますね」

「そうなんだよな」

陽太郎もこのことは否定しなかった。視線を少し上にやっての言葉だ。

「実際。結構気にしてるんだよ」

「すみません、気にしました!？」

「ああ、俺じゃなくてさ」

彼自身ではないというのである。

「あの、妹が」

「妹さんがですか」

「お父さんみたいだって言うんだよ」

笑いながらの言葉だった。

「これがさ。幾ら何でも大袈裟だよな」

「お父さんって」

「ああ、親父はちゃんというから」

このことは断るのだった。前以てである。

「それでも言うんだよ。小さいお父さんみたいだってさ」

「年齢が離れていても。それでも」

「ないと思うだろ?十歳違うだけでさ」

「二十歳ならともかく」

「だよなあ。幾ら何でもさ」

「はい、本当に」

「大袈裟だと思っけれど実際にそう思ってるんだよ」

「こっ妹のその年齢を気にしているということをお話すのだった。

「気にし過ぎだよ。ちよつと離れてるだけじゃないかって思うんだ
けれどさ」

「実際に十歳離れた兄弟っていますしね」

「いるよね」

「ええ、います」

「こっ陽太郎に対して答える月美だった。

「それでその妹さんにですな」

「ザツハトルテ買っよ」

「私もですし」

「話はザツハトルテに戻った。それにである。

「それじゃあ今から一緒に行きましょう」

「じゃあパン屋でそれ買って」

「買って？」

「家まで送るよ」

「微笑みを彼女に向けて。そのうえでの言葉だった。

「西堀の家までさ」

「それは」

「いや、危ないしさ最近」

「純粹に好意から出た言葉である。やましいことはなかった。

「だからさ」

「そうしてくれるんですか」

「うん。ああ、西堀が嫌だったらいいよ」

「その場合はいいというのだった。

「その時はね」

「御願います」

「これが月美の返答だった。

「それじゃあ」

「いいんだ、それで」

「はい、御願います」

また答える月美だった。

「それで」

「わかったよ。じゃあ送らせてもらっね」

「私の家まで」

「その駅だよね」

陽太郎は今度は月美の家の場所を尋ねた。

「パン屋さんのある。そこだよね」

「はい、そこです」

月美はにこりとして陽太郎の今の問いにも答えた。

「そこにあります」

「そうだったよね。そうか、それで歩いていけるの？」

「歩いて十分程です」

月美は時間も話した。

「それ位です」

「近いね」

「駅から少し離れた場所の住宅街にありまして」

そこに自分の家があるのだというのだ。

第八話 ファーストデートその十三

「そこです」

「じゃあそこまで一緒にね」

「すみません」

「だから謝ったりしなくていいって」

それはいいとまた返した。

「じゃあさ、これからね」

「わかりました」

こうして二人でザツハトルテを食べそれぞれの妹達の土産としてもそれを買った。それから月美の家の前まで来た。陽太郎はその玄関まで来て少し啞然となった。

「えっ！？まさかここ？」

「はい、ここですけれど」

啞然となっている陽太郎に対して月美は落ち着いたものだった。

「ここが私の家ですけれど」

「大きいけれど」

陽太郎はまだ啞然となっている。

「それもかなり。豪邸じゃない」

「それはその」

こう言われるとだった。どう返していいかわからない月美だった。陽太郎がここでこうした反応を見せるとは思っていなかったのである。

「あの」

「西堀の家ってお金持ちだったんだ」

「はあ」

「お嬢様だったんだね」

「別にそうじゃないですけど」

「いや、お嬢様だよ」

まだ言うのだった。

「こんな豪邸って」

「豪邸って」

「でかいなあ。けれど」

「けれど？」

「頭がよくて顔はそれで」

あえて胸は言わなかった。

「しかもお家はこれって」

「あの、別に」

「凄過ぎるんだけれど」

素直に言葉に出してしまった陽太郎だった。

「それにさ」

「それに？」

「博学だし居合だって二段だし」

このことも言うのだった。

「それに弓道だってやってたんだよな」

「それが。何か」

「とにかく凄いよ。凄過ぎるよ」

また言う陽太郎だった。

「何か俺さ」

「斉宮君が？」

「西堀と一緒にいいのかな」

首を傾げさせて真剣に言ったのであった。

「いやさ、俺なんかさ」

「あの」

しかしであった。ここでふと言う月美であった。

「いいですか？」

「いいって？」

「私いつも愛ちゃんに言われてますけれど」

それを言ったのである。

「その人のお家がお金持ちとかそういうのは全然関係ないんです」
「関係ないんだ」

「はい、そして学校の成績やスポーツのこととかもありません」
「それも違うというのだ。」

「それも関係ないって。いつも言ってくれます」

「あいつがねえ。まああいつって」

陽太郎はここで椎名のことを話すのだった。そうしてである。

「西堀には凄く親切だからな」

「愛ちゃんは凄く優しいですよ」

「俺には凄く皮肉屋だけれど」

彼にはそうであった。少なくとも椎名は月美には優しい。しかし陽太郎や他の面々には違うのである。尚椎名はそれをわかってやっ
ていたりする。

「確かに西堀には優しいんだよな」

「けれど斉宮のことも心配したりしていますよ」

「えっ、嘘」

「内緒ですけど」

こっぴど前置きしての言葉だった。

第八話 ファーストデートその十四

「携帯のメールでいつも教えてくれますから」

「携帯でなんだ」

「そうなんです。部活で怪我しなかったとかそういつことをよく携帯で」

「あいつがねえ」

「そうなんですよ。意外ですか？」

「意外っていうかそつちも驚いたよ」

それを言うのだった。

「いや、あいつが俺のことを」

「愛ちゃんって口では言いませんから」

「ううん、今日は凄いいこと知ったな」

「それでその愛ちゃんの言葉ですけど」
話が戻ったのだった。

「人と人が付き合うのに重要なことはですね」

「それは？」

「中身って言うてくれます」

「中身なんだ」

「はい、中身です」

陽太郎に顔を向けてだ。そのうえで優しく微笑んでの言葉だった。

「中身こそが大事だって」

「じゃあ俺それでも駄目だよ」

中身だと言われてもこう言う陽太郎だった。

「そつちもさ。とても西堀とはさ」

「いえ、そうではないですよ」

「そうではないって」

「まず私がそう思っていますし」

何気に告白までしていた。

「それに愛ちゃんも」

「椎名もなんだ」

「そうですね、愛ちゃんもです」

また彼女の名前が出て来たのだった。

「これも内緒ですけれど」

「その携帯で？」

「斉宮君はいい人だって。いつも言ってるんですよ」

「ううん、あいつ面と向かっては絶対に言わないんだな」

「悪いことは面と向かって言うけれどいいことは本人には言わないんです」

椎名はそうであるというのである。

「けれど本当は」

「あいついい奴だったんだ」

「いい娘ですよ、それでその愛ちゃんが携帯で」

「俺のこついい奴だって言ってたんだ」

「そうですねよ」

こつ話すのであった。

「意外でした？」

「意外っていうかさ」

まずは言葉を置いた陽太郎だった。それからゆっくりと答える。

「そうなんだ。あいつがそう」

「はい、ですから私は斉宮君と一緒にいたいです」

また言う月美だった。

「また宜しく御願いますね」

「うん、こちらこそね」

陽太郎も月美の言葉に頷いた。

「宜しくね」

「はい、それではまた」

「またって。またデートしてくれるんだ」

「はい、御願います」

また言ってきた月美だった。穏やかだが気品のある優しい笑顔である。

「また次の機会に」

「何かさ。俺さ」

陽太郎は少し顔を赤くさせながら述べた。

「いや、俺もさ」

「斉宮君もですか」

「うん、またデートしたくなつたから」

微笑んでもいた。頬を赤くさせているだけではなかった。

「宜しくね」

「また、ですね」

「うん、そうだね」

「それで明日は」

明日のことも話すのだった。

「学校で」

「登校と下校は同じだしね」

「そうですね。同じですからね」

「またね」

「今日はさようなら」

礼儀正しく一礼して頭を下げる月美だった。

「明日また御会いしましょう」

「うん、それじゃあね」

「はい」

陽太郎は手を振った。そのうえで別れたのだった。二人にとっては幸せな初めてのデートだった。陽太郎は色々なことを知ることも出来た。そんなデートだった。

2
0
1
0
·
4
·
2
6

第九話 遠のく二人その一

第九話 遠のく二人

陽太郎は教室に入ると椎名のところに向かった。だが彼女は今は自分の席にはいなかった。

それでももう一人のクラス委員の赤瀬に聞くとだ。こう答えてきた。

「四組にいるよ」

「四組に？」

「うん、最近休み時間とかはずっとそこにいるよ」

こう言うのだった。

「四組にね」

「そこにか」

「行く？」

赤瀬は今度はこう言ってきた。

「今から。どうするの？」

「ああ、そこまではいいさ」

そこまではというのだ。

「それはさ。それじゃあ待つさ」

「うん、そうするんだね」

「しかしな」

陽太郎はここでまた赤瀬に言った。今度は赤瀬自身にだ。

「クラス委員は今実質御前一人なんだな」

「まあそうなるね」

「大丈夫なのかよ、それで」

首を傾げさせながらの言葉であった。

「一人でよ。しかも御前等って」

「僕達って？」

「二人一組じゃねえかよ」

このクラスでのクラス委員の分担も話したのである。

「御前が力仕事担当で椎名が頭脳担当だろ？」

「うん、そうだよ」

「じゃあ片方ないとまずいだろ。御前だけでも椎名だけでもよ」

「ああ、それは大丈夫だから」

しかし赤瀬の返答は実にあっさりとしたものであった。

「それはね。上手くやっていってるから」

「上手くって？」

「うん、椎名さんがいつも事前にやるべきことをメモにして渡してくれているからね」

だから大丈夫だというのである。

「平気だよ、やっていってるよ」

「メモか」

「うん、そうしたことはちゃんとしてから行ってくれるから」

「そうか、だから大丈夫なんだな」

「それに大抵のことは僕だってできるしね」

赤瀬はこうも言った。

「力仕事だけじゃないから。っていうかさ」

「何だよ」

「僕鉄人二十八号じゃないから」

こう言うのである。

「電波を出す操縦機で動く存在じゃないからね」

「いや、そこまでは言っていないけれどな」

「じゃあ僕はあれかな。鉄人がジャイアントロボで」

そうした存在ではないかというのだ。言われてみればその巨体は確かにロボットめいている。どうやら赤瀬の方でも自覚があるらしい。

「それで椎名さんが正太郎君か大作君かな」

「まあ小さいしな」

陽太郎は椎名の小ささについて言及した。

「それだったら。そうかもな」

「椎名さんもね。人をコントロールのするの上手だしね」

「あれは将来恐ろしいけれどな」

陽太郎は腕を組んで述べた。

「しかしな。俺に直接言わないで西堀に言うのはな」

「何が？」

「この前西堀に言われたんだよ」

デートの時とは言わなかった。それは気恥ずかしくて言えなかったのである。彼も繊細なところがあるのだ。それで隠したというわけなのである。

「あいつ俺のいいところは西堀には言ってる俺には言わなかったんだよ」

「椎名さんらしいね」

「らしいのかよ」

「昔からそうなんだ。中学生の時からね」

その時からだというのである。

「人の悪いことは面と向かって言うけれどね」

「それでもいいことは言わないのかよ」

「あれで結構恥ずかしがり屋さんなんだよ」

「えっ、嘘だろそれって」

赤瀬の恥ずかしがり屋という言葉に反応したのである。

第九話 遠のく二人その二

「あいつがか!？」

「気付かなかったのかな」

「気付くとかそういう問題じゃないだろ」

「そうかな。僕はすぐにわかったけれどね」

「すぐにかよ」

「椎名さんをわかるにはちょっとしたコツがあつてね」

「コツだというのである。」

「表情からも言葉からもわかりにくいよね」

「わかりにくいというか全然わからないだけだよ」

「目を見ればいいから」

陽太郎の上からの言葉だ。優に二十センチ以上の差ははっきりと出ている。

「目をね」

「あいつの目かよ」

「目は口程にももの言うつからね。それにいいことを他人に言うつてさ」

「それってよくないだろ」

「人に他の人の悪口は絶対に言わないんだよ」

逆説的な言葉であった。相手に面を向かって悪口を言うが、というのだ。

「そしていいことは皆に言うんだ」

「皆になんだ」

「そう、皆にね」

明かせはまた言った。

「結果としてその相手の評判はよくなるんだよ」

「そつえばそうだよな」

言われてそのことにも気付く陽太郎だった。

「とにかく悪い評判は相手以外には絶対に言わないんだからな」
「そうだよ。実はあれで気を遣ってもいるんだよ」
「意外っていうか今凄い驚いてるんだけれどな」
陽太郎は実際にその目を大きく見開いてそのうえで述べていた。
「あいつがが」
「今まで気付かなかつたみたいだね」
「ああ。そうだよ」
「このことを否定もしなかった。」
「まさかなあ。そうなのか」
「そう。そしてね」
「そして？」
「友達思いでもあるんだよ」
赤瀬は今度はこのことを話したのであった。
「いつも西堀さんのことを気にかけているしね」
「ああ、そうだよな」
「これは陽太郎にもわかった。しかもすぐにであった。」
「だからいつも一緒にいるんだよな」
「そうだよ、だから一緒にね」
「そうか。それでなんだな」
「うん、それにしても」
赤瀬は陽太郎の上から首を捻った。
「何かあったのかな」
「何かって？」
「いや、本当にいつも西堀さんの側にいるじゃない最近」
「ああ、そうだよな」
陽太郎も今の彼の言葉に頷く。
「休み時間はずっと一緒だからな」
「西堀さんって四組のクラス委員だけれど」
「今度はこのことを話す赤瀬だった。」
「あのクラスには何かあるのかな」

「四組か」

陽太郎の彼の言葉を受けて考える顔になった。

「四組っていえばな」

「どうかしたの？」

「俺の中学の時の同級生がいるんだよ」

「そうだといいのである。」

「あそこにな」

「そうだったんだ」

「ああ、佐藤っていうんだけれどな」

その名前まで話した。

「佐藤星華っていうんだよ」

「星華っていったら」

その名前を聞いてだった。赤瀬も気付いた。

「女の子なのかな」

「ああ、そうさ」

その通りだと。赤瀬を見上げて答えた。

第九話 遠のく二人その三

「女友達なんだよ」

「ふうん、そうだったんだ」

「いい奴だぜ」

何気にどういった関係なのかも言ってしまった陽太郎だった。彼自身は気付いていないが。

「明るくてはつきりとしていな」

「けれどそうした人がいるのなら」

赤瀬は陽太郎のその言葉を聞いてだ。その巨大な身体の上にある顔をいぶかしげにさせてだ。そうしてそのうえでこう言うのである。

「椎名さんが行くのかな」

「椎名がって？」

「四組ってあまりまとまっていないんじゃないかな」

「こう言うのだった。」

「ひよっとしてね」

「あれっ、そうなのかよ」

「僕がこの目で見たわけじゃないけれどね」

これは断るのだった。

「ただ。それでもね」

「四組はごたごたしてるのかよ」

「三組とは違ってね」

この三組は少なくとも平和だった。クラス委員の椎名の頭脳と統率力故である。確かに彼女のそうした能力はかなりのものである。

「そうみたいだね」

「そうか。意外だな」

陽太郎は首を傾げさせながらまた言った。

「まとまってるって思ったんだけどな」

「まあ中に入らないとわからないけれどね」

「あいつ。まあ佐藤な」

「うん」

「あいつがいるからまとまってるって思ってたんだよ」

「こう赤瀬に話すのだった。」

「それでな。大丈夫だって思ってたんだよ」

「佐藤さんってそんなに凄い人なの？」

「はきはきしていて面倒見がよくてな」

「彼が知っている星華のことを話す。」

「それで仕切りも上手いな。俺の中学校じゃあいつが出て来たらもうそれでどんなややこしい話もまとまってたんだよ。部活でもそうだったしさ」

「部活？剣道部じゃないよね」

「ああ、それ俺だから」

「今話している相手ではないのだというのだ。」

「佐藤のことなんだよ、そのな」

「その佐藤さんだね」

「ああ。女史バスケット部でな。確か今もそうだったよな」

「言いながら自分の中で思い出していた。話の整合も自分の中で確かめてもいた。」

「高校でもそうだって言ってたしな」

「そうなんだ」

「そうだよ。まあそれでな」

「うん」

「女史バスケット部もかなりよくまとまってたんだよ」

「その佐藤さんのおかげだね」

「ああ、そうだなんだよ」

「こう言うのだった。」

「それでなんだよ」

「成程ね」

「しかし。そうはいかなかつたんだな」

あらためて言う陽太郎だった。

「あいつがいるならまず大丈夫なんだけれどな」

「何でも女の子の間がよくないらしいんだ」

赤瀬はここでこう話した。

「その女の子の間がね」

「余計にわからないな。っていうか四組ってそんなアクの強い奴いるのか？」

陽太郎は赤瀬が見下ろすその下でだ。腕を組んでいぶかしむ顔になつていた。幾ら考えてもどうしてもわからない、そうした表情であつた。

「そこまでな」

「いるんじゃないかな、やっぱり」

「そうなのかよ」

「まあ四組は四組でね」

赤瀬は話をここで打ち切りにかかった。

「椎名さんが動いているのは彼女に任せてね」

「それはいいか」

「うん、他のクラスの間が口出しできないしね」

「他のクラスだからな、結局はな」

陽太郎は赤瀬に対して述べた。学校にもテリトリーがありだ。その外のテリトリーには中々入ることができないのだ。目に見えない壁というものだ。

「じゃあ俺達は見ているだけか」

「友達が困っているのなら別だけれどね」

「そうだよな。そういうことでね」

「ああ、じゃあな」

「うん、それじゃあね」

「さて、それで赤瀬」

陽太郎はあらためて赤瀬に対して言ってきた。

第九話 遠のく二人その四

「御前にも聞きたいことがあるんだよ」

「何かな」

「ほら、この前渡してくれたプリントな」

この話を彼にするのだった。

「あれあのままでいいのか？」

「あれでいいよ」

こう述べるのであった。

「あれでね」

「そうか、わかったよ」

陽太郎は赤瀬の言葉を聞いて納得した顔で頷いた。

「じゃああのままいくな」

「それで御願いますよ」

「よし、しかしな」

陽太郎はここでまた話を変えてきた。

「ついこの前入学したばかりだと思ったのにな」

「気付いたらもう一学期の期末テストが近いね」

「勉強が大変だよ」

陽太郎は苦笑いで述べたのだった。

「もうな、この学校勉強に五月蠅いしな」

「そうだね。進学校でもあるしね」

「だろ？八条大学に入るのだったな」

八条高校の上にある。八条高校は一応この大学の付属という関係にある。

「難しいみたいだしな」

「あそこ生徒物凄く多いけれどね」

「学部や学科だって滅茶苦茶多いけれどな」

マンモス校なのである。これはこの八条高校でも同じだ。普通科

だけでなく様々な学科がある。商業科や工業科もあるのである。

「何処かに入ろうかって思ったらな。真面目に勉強しないといけなしな」

「真面目に勉強してるんだよね」

「一応な」

そうしているというのである。

「さもないと大学行けないからな」

「そうだよな、やっぱりね」

「やっぱり大学に行きたいしな」

陽太郎はこうも言った。

「だから余計にな」

「大学ね。僕も八条大学受けたいしね」

「ああ、御前も八条大学なのかよ」

「医学部受けようかな」

そしてこうも言うのだった。

「八条大学のね」

「医学部か」

「うん、どうかな」

このことを陽太郎に対して問うてきた。その巨大な身体からだ。

「それは」

「いいんじゃないか？」

陽太郎はその彼を見上げながら答えた。やはり二十センチを優に越える差がある。決して小柄ではない陽太郎をもってしてもそこまでの差が開いていた。

「医者になるのみな」

「人の役に立てるよね」

「だからか」

「うん、だからなんだ」

また言うのだった。

「やっぱり何かをするには。人の役に立たないとね」

「御前そういうところしつかりしてるんだな」

陽太郎は赤瀬のそうした考えに感心していた。

「気のいい奴だとは思ってたけれどな」

「そうかな」

「ああ、そう思うぜ」

また話す陽太郎だった。

「そうか。そういう立派な考えがあったらいいよな」

「いいよね、それだったら」

「それでどの科なんだ？」

陽太郎は次はそれを問うのだった。

「外科か？内科か？どれなんだ？」

「外科かな」

それだと答える赤瀬だった。

「外科ね。それがいいかかって思ってるんだ」

「外科か。骨折とかそういうのなおすんだな」

「うん、柔道って骨折とかそういう怪我多いじゃない」

「そうだよな。柔道だとどうしてもな」

赤瀬のその言葉に腕を組んで頷く。それを聞いてであった。

第九話 遠のく二人その五

「怪我、多いよな」

「投げて投げられてだからな」

「うん、だから余計にね」

「そうか。柔道をやつてか」

陽太郎は赤瀬の横で頷く。赤瀬の方が頭一個分以上大きい。

赤瀬のその横でだ。また話す陽太郎であった。

「そういうことか」

「うん、それで問題があるのは」

「問題は？」

「畳の上で柔道するのはいいんだよ」

それはいいというのだ。

「それはね」

「いや、普通柔道は畳でするものだろ」

赤瀬を見上げての言葉だった。

「それだろ。違うか？」

「いや、それがね」

「違うのかよ」

「酷い奴もいてね。とんでもない奴がいてね」

「とんでもない奴がかよ」

「うん、畳で投げずにね」

赤瀬は話すのだった。その大きな顔がかなり曇っていた。

「床で投げたりするのがいるんだよ」

「えっ、床でかよ」

「うん、床でね」

「それ絶対にやったら駄目なんじゃないのか？」

陽太郎がしているのは剣道である。だから柔道のことはそれ程詳しくはない。しかしその彼もこのことはわかっているのであった。

同じ武道をしている者としてだ。

「そんなことしたら怪我じゃ済まないんじゃないのか？」

「しかも受身を知らない相手にね」

「えっ!？」

それを聞いて余計にであった。

「そうなのか!? 素人に床で背負い投げ!？」

「それする奴がいるんだよ」

「世の中そんな奴がいるのかよ」

「しかもだよ」

さらに話す赤瀬だった。

「それを教師がするんだよ」

「教師がねえ。とんでもない話だな」

「ああ、その教師懲戒免職になったから」

「当たり前だ」

目を怒らせての返しだった。

「普通の世界だったら刑務所行きだろ」

「たまにだけれどそういう奴もいるからね。中にはとんでもない怪

我もあるから」

「柔道って大変なんだな」

「そうなのか」

「それにね」

そしてであった。

「普通にやっつけていても怪我の多いのが柔道だしね」

「剣道とは全然違うんだな」

「剣道だってそうじゃない」

しかしここで赤瀬は剣道についても話すのだった。

「そっちなもね」

「剣道も？」

「実際にアキレス腱とか使うよね」

「ああ」

「それで油断したら切れたりするじゃない」

話すのはこのことだった。

「それが問題だと思っよ」

「そうか、それな」

「わかるよね、それは」

「ああ、確かにな」

赤瀬の言葉にまた腕を組んで頷く。言われてみればその通りだった。

そしてだ。陽太郎は腕を組んだままさらに言うのだった。

「切れたらもう致命傷だからな」

「そう、だから油断したら駄目だよ」

「わかったよ。そうだな」

「武道は怪我と背中合わせだよ。それを考えたら外科だけじゃなくてね」

「その他もだよな」

「そう、それもね」

また話す赤瀬だった。

「スポーツの怪我のことも勉強しないといけないかな」

「そうだな。そっちもいいよな」

腕を組んでの言葉を続ける陽太郎だった。

第九話 遠のく二人その六

「何か勉強すること多いな」

「そうだね。けれどそういうのも勉強していくよ」

「ああ、頑張れよ」

笑顔を赤瀬に向けての言葉だった。

「これからな」

「そうするよ。絶対にね」

こんな話をしているとだ。そこに狭山と津島も来た。

「よお、二人共」

「何話してるの?」

二人は明るく彼等のところに来た。そして赤瀬を見上げながら話すのだった。

「随分と真面目な話をしてるみたいだけれどな」

「どうしたのよ」

「ああ、ちよつとな」

「将来のこと話してたんだ」

赤瀬は少し思わせ振りに言ったのだった。

「少しね」

「おい、その言い方はちよつとあれだろ」

陽太郎も今の彼の言葉にすぐに突っ込みを入れた。

「何か誤解されるぞ」

「何だ?進学か?」

「そのこと?」

だが狭山と津島はすぐにこう言ってきたのだった。

「それだつたら八条大学か?」

「そこ?やつぱり」

「わかるのかよ」

陽太郎は二人のその言葉を聞いて目を少ししばたかせながら応え

た。

「進学の話してただけけれど。大学もわかったのかよ」

「っていつかそこしかねえじゃねえかよ」

「ねえ」

狭山と津島はお互いを見合っつてこうも言った。

「なあ。他にないよな」

「そうよね」

「八条大学しかねえのかよ」

陽太郎はまた二人の言葉に返した。

「進学つていつたらよ」

「まあ確かにあそこもレベルはそこそこあるけれどな」

「それでもこの学校からの進学先って一番があそこじゃない」

系列の学校だからこれも当然だった。そこ以外にはそうそう考えられなかった。

それでだ。二人はさらに言ってきた。

「俺経済学部だからな」

「私文学部ね」

「そうか。じゃあ俺は法学部にするな」

陽太郎は二人が行くというその学科をあえて外してみせた。

「そういうことだな」

「おい、ちよっと待てよ」

「今のわざとでしょ」

「すかさず突っ込んできた二人だった。」

「何で経済学部じゃねえんだよ」

「文学部外したでしょ、あえて」

「大学まで御前等と一緒になんてうんざりするよ」

冗談で言ってみせたが顔はできるだけ真顔を作ってみせていた。

「ったくよ。いつもからかってくれるしな」

「だからそれが俺達の愛情表現なんだよ」

「それなのよ」

二人はこう言うのだった。

「だからよ、それはよ」

「あえて許してよ」

「まあ実際俺まだ行く学部は決めてないけれどな
それはないというのだった。」

「何処に行こうかな、本当にな」

「それはゆっくりと決めたらいいよ」

赤瀬が上から穏やかな声で言ってきたのだった。

「時間はあるしね」

「そうか、あるか」

「今年の一学期だからね」

まさにはじまったばかりだ。開幕して間もない。

「じっくりと考えたらいいよ」

「そうか。だったら考えさせてもらうな」

また言う陽太郎だった。

第九話 遠のく二人その七

「八条大学にしておきたいけれどな」

「八条大学は設備も整ってるしな」

「いい大学よね」

狭山と津島の顔がまた笑顔になる。

「あそこに入ったらよ、毎日遊びまくるぜ」

「喫茶店のケーキも美味しいしね」

「遊ぶのと食うのが中心から」

「遊んで学べ」

「人間甘いものがないと死ぬのよ」

強引にこう言う二人であった。そしてである。

二人も交えて話をするのだった。彼等は幸せな学園生活を送っていた。

だが星華はだ。今一つ満たされない気持ちのままだった。それは部活においても同じで動きにも出てしまっていて鈍さが目立つようになっていた。

「佐藤、そつちよ!」

「そつち行つたわ!」

グラウンドの練習の中でだ。周りから声がする。

皆ジャージ姿で練習をしている。その中で声をかけられたのだ。

「右にね!」

「来たわ!」

「ええ!」

星華もそれに頷いてボールの方に行く。彼女もまた学園のジャージ姿だ。

しかしであった。そのボールを取り損ねた。ボールはそのまま向こう側に転がってだ。ファールゾーンを出てそれから転がっていきのだった。

そして壁に当たってはね返る。それで止まった。

部員達はそのボールを見ながらだ。ボールを取れなかった星華に對して言うのだった。誰もが咎める顔になってそのうえでの言葉であつた。

「ちよつとお」

「何やってるのよ」

「今のは捕れてたでしょ」

口々に言うのだった。

「あんたならすぐにじゃない」

「それが何よ、今の」

「どうしたのよ」

「え、ええ」

俯いて苦い顔で応える。

「御免、ミスしたわ」

「しつかりしてよ、あんた動き速いんだし」

「それにセンターなんだから」

「ちゃんとしてももらわないといけないんだからね」

こつ言われるのだった。部活での動きも今一つでクラスでも家でもあまり楽しめなくなっていた。そしてその原因も自分でわかつていたのである。

家に帰って食事と風呂の後で勉強をする。それが一段落ついた時だつた。

部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。そうしてだつた。

「お姉、いる？」

「星子？」

「ええ、私だけけれど」

妹だつた。彼女の声だつた。

「いいかな」

「ええ、いいわよ」

実際にいいと返すのだった。

そのやり取りの後で星子が部屋に入ってきた。その手には漫画がある。雑誌であり彼女がいつも読んでいるものだった。それを持って来たのである。

「これ読むよね」

「ああ、今日だったの」

「今日だったのってお姉」

星子は今の姉の言葉にすぐに困惑した顔で返した。

「前まで自分で買ってたじゃない」

「ちよつと忘れてたのよ」

「忘れること？この雑誌好きなんですよ？」

「まあそれはね」

返答は今一つ歯切れの悪いものだった。

「それでもね。最近ね」

「忙しいの？」

「滅茶苦茶ね」

こう返すのだった。疲れた様な顔で。

そしてだ。こうも言うのだった。

「ただね」

「ただって？」

「クラスがねえ」

妹と向かい合って座りながらだ。そうして話をしていた。

第九話 遠のく二人その八

「何かね」

「居心地悪いの？」

「それもあるけれど」

「それもだというのだ。」

「今のクラスいないから」

「ああ、いないの」

「そうよ、いないのよ」

「困った顔での言葉だった。」

「どうしたものかしらね」

「先輩のことは仕方ないじゃない」

「私も言っていないわよ」

「目を少し座らせての返しだった。」

「何もよ」

「あの、言ってるから」

しかしここで星子は楽しげに微笑んでだ。そうして言ってみせてきた。

「もうね」

「言ってるって」

「だから。いないって言ったら丸わかりじゃない」

「だからだというのだ。」

「それでわからない筈がないわよ」

「うっ……」

「まあお姉」

「また言っつ星子だった。」

「それはもう考えても仕方ないじゃない」

「仕方ないの」

「何なら剣道部にでも移る？」

こんなことも言ってきたのである。

「バスケット部から。どうするの？」

「どうするもそんなことする訳ないじゃない」

星華は口を尖らせて言い返した。

「私はバスケット部よ。それ以外の部活をするつもりはないから」

「ないでしょ。剣道部に先輩がいてもね」

「中学だと同じ体育館使ってたのに」

「今度は口を尖らせる星華だった。」

「それが、今は」

「それは仕方ないじゃない。今の中学校と八条高校は全然違う学校なんだから」

「それはそうだけれどね」

「だから仕方ないじゃない」

星子の言葉は続く。

「それはね」

「うう、確かに」

「それで焦ったり疲れてもはつきり言って無駄よ」

「無駄なのよ」

「そんなに気になるんだったら」

「そしてだ。姉に告げる言葉は。」

「もう体当たりしたら？思い切ってね」

「ちよつとあんた」

妹の今の言葉にはだ。少し怒った顔で返した。

「そんなことできる訳ないじゃない」

「私だったらできるけれど」

「あのね、つまり告白よね」

「そうよ」

「そんなこと出来る筈ないじゃない」

「口も開いている。そうしてだった。」

「全く。何言ってるのよ」

「やれやれ、その度胸もないの」

「何よ」

「お姉は胸もなければ度胸もない」

わざと肩を竦めさせて笑っての言葉だ。

「本当に何もなし」

「胸は関係ないじゃない」

「まあね。胸がなくてもそれでもそれが好きな人はいるし」

「いるの」

「いるわよ、ちゃんとね」

しかしこう言う星子の胸はかなり大きい。少なくとも姉のそれよりは遙かにだ。だからといってその大きさを誇示するということとはしていない。

第九話 遠のく二人その九

「人それぞれなんだし」

「だったらいいけれど」

「とにかく言ったら？まず大丈夫よ」

「だからそれは」

目を伏せてだ。口を微妙に歪ませての言葉だ。

「そんなことできたら」

「全く。お姉は本当に意気地なしなんだから」

「あのね、それはね」

「はいはい。愚痴は聞いてあげるから」

笑いながらその姉の前にお菓子を差し出す。見ればクッキーである。

「食べて。漫画でも読みながらね」

「クッキーなのね」

「お姉好きよね」

「それはあんたが一番よく知ってるじゃない」

姉妹である。それで知らない筈もないことだった。

「それは」

「だから持って来たのよ」

「気を遣ってくれたの？」

「そうよ」

その通りだと素っ気無く述べたのである。

「甘いものは頭の栄養になるしね」

「栄養にね」

「だからね。読んでね」

また言う星子だった。

「それとだけねど」

「それと？」

「はい、これもね」

今度はお茶を出してきたのである。ミルクティーだ。

「これも飲んでね」

「有り難う」

お茶を前にして素直に礼を述べた。

「それじゃあ。飲ませてもらうわね」

「つていうかどんどん飲んで。それで先輩は？」

「斉宮のこと？」

「結局動かないのね」

それを言うのだった。少し呆れながらだ。

「そのままなのね」

「それはね。まあね」

右手にカップを持ちながらだ。そうして言うのだった。

「ちよつとね」

「やれやれ。うかうかしていると本当にやばいわよ」

「やばいって」

「先輩誰かに取られるかもよ」

悪戯っぽい笑みにもなるのだった。

「そのうちね」

「そのうちにつて」

「まあ冗談だけれどね」

「何よ、冗談つて何よ」

怒った声になる星華だった。

「それ、冗談になつてないじゃない」

「なつてない？」

「なつてないわよ」

まだ言うのだった。

「全然ね」

「まあ先輩もね」

「先輩も？」

「あれで奥手というかそういうのだけれどね」

「そうよね。あいつ鈍いのよ」

「とはいってもお姉の意気地なしも困ったものだけれど」
また姉の話をしてみせる。

「どうなのよ、それ」

「だからね。私はね」

「わかったら頑張るのよ。これでも応援してるのよ」

「本当に?」

「こんなことで嘘言っただけにするのよ」

「いつまで言う星子だった。」

第九話 遠のく二人その十

「そうでしょ？しかも話す内容が内容だし」

「確かにそうだけれど」

「大体私が嘘言ったことある？ないでしょ」

「こういうことではないわよね」

限定的だがそれは認めた星華だった。

「確かにね」

「何か引つ掛かる言い方だけれど、今のって」

「些細なことで嘘はついたことあるじゃない」

「些細なことって何がよ」

「つまみ食いとか。そういうことでね」

「それって子供の頃のことじゃない」

星子も今の言葉ではむっとした。

「そんなの今更言われても」

「けれど確かにこうしたことでは嘘つかないわね」

しかし星華はこうも言ってみせた。一応認めてはいるのである。

「それはしないわよね」

「だからいつてるじゃない。そういうことはしないって」

「世の中平気で嘘つく人もいるっていうし」

確かに実際にそうした人間もいる。息をするように嘘をつきしかも同じ嘘を何度もつく人間がいる。中にはそれを生業としているような輩までいる。

「それを考えたらね」

「私そんなに平気で嘘つけないから」

「だからいいって言ってるの。平気で嘘つく人間になったらおしまいでしょ」

「嘘吐きは泥棒のはじまりって言うしね」

これは確かにある意味において真実である。実際に大嘘吐きが泥

棒をしたということも多いのだ。嘘は悪であり盗みも悪だ。ことの善悪を意識しなくなるからそうなるのだ。

「だからね。それはね」

「私そんな泥棒なんてしないし」

「絶対に駄目よ」

妹を咎める言葉だった。

「それはね」

「わかってるわよ。それはしないから」

星子も自分で言うのだった。

「絶対にね」

「いいわ、それでだけれど」

ここまで話してそのうえでだった。また話を変えてきたのであった。

「実際斉宮ってあれ？彼女とかいないのかしら」

「まずいないと思うけど？」

こう答える星子だった。

「先輩奥手だし」

「そうよね、じゃあまだ私にもチャンスが」

「っていつか入ったら？本当に」

「だから言えたら苦労しないわよ」

言葉がそのまま先程と同じ流れになっている。

「そんなのはね。言えたらね」

「だから勇気を出してよ」

「何度も言うけれど言えないのよ」

「私が男だったらお姉にコクられたら」

「どうなるってどういうのよ」

「まずオツケー出すわよ」

にこりとしての言葉だった。

「もうそれでね。出すわよ」

「そうなの。そう言ってくれるの」

「そうよ、出すわよ」

また姉に告げた。

「確実にね」

「あんたがそうでも斉宮がどうかなのよ」

「だからやってみればいいじゃない」

「だから出来ないの」

話は完全に先程と同じだった。堂々巡りにさえなるうとしている。

「それはね」

「こりゃ駄目だ。まあいいわ」

「いいって？」

「どうにかなるでしょ」

星子は今度はこう言ったのだった。

「もうね。どうにかなるでしょ」

「なるの」

「そうよ。世の中何だかんだでどうにかなるものよ」

クッキーを食べながらこう話すのであった。ぽりぽりと音がする。

第九話 遠のく二人その十一

「気楽にいかない」と

「私今全然気楽じゃないけれど」

「そこをあえて気楽に考えるのよ」

「気楽に？」

「そうよ、あえてよ」

「こつ言つのである。」

「あえてね。気楽に考えないと」

「何か全然そうは考えられないから」

「そういうところが駄目なのよ。お姉のね」

「あんたが能天気なだけよ」

「その能気なのがいいんじゃない」

「相変わらずニコニコとしている妹だった。」

「だからお姉もね」

「全く。とにかく頃合いを見て何かするわ」

「たまりかねた様な返事だった。」

「何かをね」

「まあ頑張つて。それじゃあね」

「あんたもまた勉強？」

「そうよ。受験生だし」

今中学三年である。それならば受験は避けて通れない。星華にしても去年経験してきたことだ。それで納得しながら妹の今の話を聞くのだった。

「それなら当然よね」

「しかも八条高校だしね」

「姉妹で同じ学校行こつ」

笑顔で姉に告げる。

「二人でね。いいわね」

「全く。何で高校まで一緒なんだか」

「一緒にいいじゃない」

星子の返答は明るいままである。

「折角の姉妹なんだし」

「まあね。それじゃあどうしてもなのね」

「絶対に受かるから」

今度は強い決意での言葉であった。

「私もお姉と同じ制服着るんだ」

「私と同じなの」

「だってお姉の制服凄くいいじゃない」

「沢山バリエーションあるけれどね」

「先輩も着てるのね」

「あいつはあれよ。青の学ランよ」

「それだというのだ。」

「長ランでね。七つボタンでね」

「何か応援団みたいね」

「やっぱりそう思う？」

「長ランっていったらね」

星子はそこから言うのだった。

「やっぱり応援団じゃない」

「そうよね。それでズボンはね」

「あれ？ポントン？」

「そう、それ」

所謂変形学生ズボンである。太腿のところが広くなっていてタックが入っている。とはいっても高校でははいているのも普通である。そして八条高校では。

「うちの学校じゃ制服の中に入ってるしね」

「随分自由なのね」

「制服はね。校則も自由だし」

「じゃあやっぱりいい学校なのね」

「雰囲気とかもいいわよ」

「それもだと言う。」

「ただね。勉強はね」

「厳しいのね」

「それは気をつけることね」

「わかったわ。じゃあ勉強頑張るわ」

「部活は充実してるし」

「次は部活の話だった。」

第九話 遠のく二人その十二

「本当に楽しい学校だからね」

「それにしてもお姉って何だかんだで学校に馴染んでるよね」

「そうかしら」

「そうよ。けれど」

「けれど。どうしたのよ」

「ちよつと顔変わった？」

姉の顔を見ながらの言葉である。

「何か少し暗いものが入った感じだけれど」

「暗いつて何よ」

その言葉を聞いてだ。眉を顰めさせて怪訝な顔で問う星華だった。

「何なのよ、それって」

「何となく思ったただだけれどね」

「思ったただけなの」

「そうなの。けれどね」

「表情に出てるの？」

眉を顰めさせての言葉だった。ここでもだ。

「疲れとかが」

「疲れじゃないみたいだけれど」

星子は言いながら首を捻る。

「何かね。悩みとかある？」

「斉宮のことと勉強のことがそうだけれど」

「何か他にない？」

見れば妹も眉を顰めさせている。その顔で問うているのである。

「他にさ。何か困ったこととか」

「別に」

自分では気付いていないのだった。

「何も無いけれど」

「そうなの。ないの」

「何かむかつくのはいるけれどね」

それはわかっていた。しかし気付いてはいない。ここに大きな違いが出ている。星華はわかっているのだ。しかし気付いてはいないのだ。

「それでもそういうのはないわね」

「むかつくのって?」

「うちのクラス委員よ。グズなのに融通が利かなくて」

「そんな人なの」

「その癖男にばかり媚びてね」

月美のことである。今は実に忌々しげなか鬼なっている。

「もう最低。どうしようもない奴なのよ」

「そんなに酷いの」

「胸ばかり大きくてね」

「ちよつとお姉」

星子は姉の今の言葉であることに気付いた。それを指摘した。

「今はないでしょ」

「ないって何がなのよ」

「胸は関係ないから」

それを言うのである。

「それは関係ないじゃない。そうでしょ」

「胸も関係あるわよ」

「いや、ないから」

星子はまた姉に突っ込みを入れた。

「性格と胸は別よ。だって私だって胸大きいじゃない」

「あんたは違うからいいのよ」

「いいって?」

「あいつと違うからよ。本当にむかつく奴なんだから」

「人の好き嫌いは仕方ないけれど」

星子はここで一旦姉の矛を収めさせることにした。とりあえずそ

うしないと話が収まらないと判断したからだ。そしてそれは正解だった。

「まあそれでね」

「それで？」

「今度はこつちどつち？」

言いながらチョコレートクッキーを出してきたのである。その黒いクッキーが星華の目に入る。すると彼女の喉が思わずごくりと鳴った。

「それもあつたの」

「お姉チョコレートクッキーが一番好きだもんね」

「クッキーでは一番ね」

話すその間もチョコレートクッキーから目を放さない。

「それじゃあそれを」

「はい、どんどんね」

そのチョコレートクッキーを食べさせて姉の矛先を収めさせたのだった。それで話はこの場では無事収まった。そして次の日の学校で。

星華は廊下で陽太郎と擦れ違った。その時だ。

「おはよう」

「あつ、佐藤かよ」

「うん、久し振りね」

「だよな。クラスが別々だとあまり会わなくなるんだな」

「そうみたいね」

星華は応えながら寂しげな顔になる。そのうえでの言葉だった。

「何かね。思ったよりね」

「そうだね。それじゃあまたな」

「またつて？」

「ちよつと用事があるからさ。またな」

「えっ、用事つて」

それを言われてだった。困った顔になる星華だった。だが自覚は

ない。

「用事あるの」

「クラスの用事でさ。うちのクラス委員人使いが荒くてさ」

「それでなの」

「ああ、だからまたな」

こう言っ て別れてだ。星華は一人に戻った。

陽太郎は向こうに行っ ていき後に残ったのは彼女だけだった。彼女は その背中を見ていたが角を曲がっ て見えなくなるとそのまま自分のクラスに入った。二人の久し振りの話はこれで終わりだった。

第九話 完

2010・5・3

第十話 夏に入ってその一

第十話 夏に入って

期末テストが終わった。今さっきだ。

「終わった終わった」

「ああ、やっとだな」

陽太郎は隣の席にいる狭山に対して応えた。

「長かったな、何か」

「テストの期間って滅茶苦茶長く感じるよな」

「そうだよな。それで採点は一瞬だしな」

「しかも返って来る答案がまた滅茶苦茶不安だしな」

「御前結構できたんだろ？」

「理系はな」

こう答える狭山だった。

「そっちはな。自信あるけれどな」

「あれ、御前理系だったのか？」

「今回はそっちの方が調子よかつたんだよ」

「そっちの方がかよ」

「俺その時その時で文系になったり理系になったりするんだよ」

「何かそれ結構変わってるな」

狭山のその言葉を聞いて首を傾げてだった。

「普通文系なら文系、理系なら理系でしっかり固まるんだだけれどな」

「自分でもそう思うけれどな」

狭山自身も感じていることだった。

「何か俺はそうなんだよ」

「やっぱり変わってるな」

「まあな。それでな」

「ああ、それで？」

「これからどうするんだ？」

リラックスした顔での問いだった。

「テスト終わってもうすぐ夏休みだけれどよ」

「部活だな」

陽太郎がまず言ったのはこれだった。

「後は。何処かの塾の夏季講習か」

「何だよ、あまり面白くないな」

「それでも遊ぶ時間はあるけれどな」

それはあるというのだ。

「遊ぶ位はな」

「じゃあ時間見てプールでもどうだ？」

「プールか」

「皆誘つてな？それでどうだ？」

「悪くないな」

陽太郎は狭山のその言葉を聞いてだ。腕を組んで考える顔になった。そうして少し考えてからだ。そのうえで狭山に対して答えたのである。

「暑いしな」

「暑い時は泳ぐのが最高だしな」

何の淀みもなく明るい顔で言うのだった。

「それでどうだよ」

「プールだったら何時でも行けるしな」

「そう、何時でもだよな」

「夏休み前に一回行けるかな」

「夏休み前にかよ」

狭山は今の言葉を受けてだ。一旦目をしばたかせた。そうしてそのうえで言うのだった。

「しかしな」

「しかし？」

「それはどうなんだ？」

また言うのだった。

「それで」

「悪いのかよ、何か」

「御前一人でプールに行っても面白くないぞ」

狭山が指摘するのはこのことだった。

「それはよ。あまり面白くないぜ」

「いや、一人とは誰も言っていないぞ」

だが陽太郎はこう言うのだった。

「流石に一人だと面白くないだろ」

「じゃあ誰と行くんだ？」

「一緒に行くか？」

「俺か？」

「ああ、御前今暇だろ」

「まあな。映研は夏休みまではな」

暇だというのだ。しかしこうも言った。

「夏休みに入ったら自主制作の映画やら映画鑑賞会やら合宿やらあるけれどな」

「何気にどれも楽しそうだな」

「ああ、今から楽しみにしてるぜ」

実際に楽しげな顔になる二人だった。そしてだ。

第十話 夏に入ってその二

話を戻してだ。陽太郎に対して言うのだった。

「で、俺とか」

「嫌か？」

「男二人と行っても仕方ないだろ」

こう言う彼だった。

「そんなことをしてもよ」

「まあ普通はそうだよな」

「そうだろ？それだったら俺一人で行くさ」

「何言ってるのよ」

あらたな参戦者だった。絶好のタイミングである。

「一人で行くなんてそんなの許さないわよ」

「げっ、やっぱり御前かよ」

狭山が声が出した方に顔を向けるとだ。そこにいたのはやはり彼女だった。

「あんたが他の女の子に色目使ったらたまったものじゃないわよ」

「あのな、俺がそんな男に見えるか？」

「どうかしら。男ってわからないし」

冷たい目で言う津島だった。

「案外ね。わからないわよ」

「わからないっていうのかよ」

「そうよ。行くのなら私も一緒よ」

今度は自分も行くというのだった。狭山の首を後ろからスリーパーホールドをしながらだ。そうしながら彼に対して笑いながら言うのだった。

「いいわね、その時は」

「いいとかそういうのじゃなくてな」

「何だつてのよ」

「俺がそんな奴に見えるのかよ」

またそのことを言うのだった。自分にネックハンキングを仕掛ける津島にだ。

「そんなの色目使うようによ」

「だから男は皆狼だからよ」

「その言葉大昔の言葉じゃねえかよ」

「大昔でもそうだからよ」

言いながらまだスリーパーホールドを続けている。それは形だけだがそれでも狭山をしっかりと掴んで離そうとしない。全く外れる様子はない。

「あんたでもね」

「そうだっていうのかよ。意地でもよ」

「私が言ってるのは真実よ」

「真実じゃねえよ」

何時の間にか狭山と津島の話になっていた。

「あのな、俺はもてないんだぞ」

「今度はそう言うの」

「事実だよ。生まれてこのかたもてたことはねえんだよ」

かなり悲しい言葉である。しかしここであえて言うのだった。

「それに女の子に色目使ったらな」

「どうだっていうの？」

「それこそ姉ちゃんにぼこられるからな」

「姉ちゃん!？」

それに問うたのは陽太郎だった。

「姉ちゃんって。御前お姉さんいたのかよ」

「ああ、聞いてなかったか？」

「いや、初耳だぞ」

少し驚いた顔での言葉だった。

「そうだったのかよ」

「そうだよ。学校の先生やってるな」

「へえ、随分歳離れてるんだな」

「そうなんだよ、もう昔からな」

「綺麗な人よ」

狭山より先に津島が言ってきた。

「しっかりした人でね。面倒見もよくて」

「へえ、そうなのか」

「私も昔から可愛がってもらってるの」

「へえ、そういう人なんだ」

「あと実はこいつね」

スリーパーホールドを続けている相手への言葉である。

「実際は凄なお姉ちゃんっ子なのよね」

「あれ、そうなんだ」

「そうなのよ。何かっていうと姉ちゃん姉ちゃんだね」

笑いながらの言葉である。

「凄いんだから」

「おい、変なこと言うなよ」

スリーパーホールドを受けていても負けてはいなかった。

「俺が何時よ。そんなことよ」

「けれど事実じゃない」

津島は勝ち誇った様にして言う。

第十話 夏に入ってその三

「あんたシスコンじゃない」

「俺はシスコンじゃねえ！」

「いえ、シスコンよ」

「何処をどう見たらそうなるんだよ！」

「ありのままね」

どう見ても津島の方が上である。しかも何枚もだ。

「見て言えることよ」

「ありのままかよ」

「そうよ、ありのままよ」

また言い合う二人だった。何兌換だ言っただ狭山も負けまいとしている。

「誰がどう見てもね」

「そりゃ御前の主観だろうがよ」

「そう？その割には携帯の待ち受け画面だってお姉さんじゃない」

「あれは姉ちゃんはどうしても言うからよ」

「そんな訳ないでしょうが」

しかし津島の優勢は変わらない。そのまま言っただであった。

「そんな筈がね。そうでしょうが」

「だからそれは御前の主観なんだよ」

「そうかしら」

「そうだよ、あとな」

「あと？」

「いい加減離せよ」

話をそちらに変えたのだった。

「もうよ。スリーパーホールド止めるよ」

「ああ、それね」

「それだよ。もう止めるよ」

「わかったわ。それもそうね」

今度は素直だった。あっさりと離れる。狭山は何とか解放された。首のところを摩りながらそのうえでこつしたことを言うのであった。

「それでな、斉宮よ」

「ああ、俺か」

「それでどうするんだよ」

あらためての問いであった。

「それでよ。どうするんだよ」

「どうするんだよって」

「だからどうするんだよ、プール」

言うのはこのことだった。このことを問うのだった。

「プールな。誰と行くんだよ」

「事前にだよ。夏休みの前にな」

「さてな、どうしようかな」

それを言われてもだ。腕を組んで考えた顔になるだけだった。そこからは先に進めずどうにももどかしいような顔にもなる陽太郎だった。

「御前と行くのはな」

「だから野郎二人はな」

「やっぱり駄目か」

「何度も言うけれどよ、男二人でプールに行くもんじゃないぜ」

狭山はそこは確かに言うのだった。

「事前の下見って言ってもな」

「そうか、それでか」

「ああ。それなら一人で行く方がいいだろ」

「一人か」

「誰と行くんだ？」

またそれを問う狭山だった。

「それでな。誰となんだ？」

「もうこうなつたら一人で行くか」

陽太郎は腕を組んだままであった。しかしそれでもだった。

答えはそれだった。それしかなかった。

「それしかないだろ」

「それも駄目だつて言つてるじゃねえかよ」

狭山は真顔に戻つて彼に告げた。

「そうだろ？だから男だけで行くものじゃないんだよ」

「それじゃあ女の子だけだつたらいいのかよ」

「ああ、それはいいんだよ」

それはだというのだ。

「それはな。いいんだよ」

「そうか、それなら」

「けれどな」

しかしであつた。また言う狭山だった。

「男だけじゃ駄目なんだよ」

「その理屈は？」

「ずばり、女の子は見て奇麗だが男は見苦しい」

右手の人差し指を思いきり前に突き出しての宣言だった。その顔には不敵な笑みまである。彼にしてはかなり自信のある言葉らしい。

「だからだよ、それはよ」

「だからかよ」

「そうだよ、それに尽きるな」

「それは女の子に言わせたらどうなるんだ？」

「まあいいんじゃないの？」

その女の子の津島が陽太郎の今の問いに答えた。

第十話 夏に入ってその四

「別に男の子だけでもね」

「そうなるのかよ」

「こいつはあれよ。男の主観でだけ話してるから」

狭山を少し見たうえでの言葉だった。

「だからね。それはね」

「気にしなくていいとか言うんだな」

「そのものズバリよ。気にしなくていいから」

「おいおい、俺は男の側から言ってるんだぜ」

「じゃあ私は女の側から言ってるのよ」

ここで顔を見合わせてまた言い合いをはじめた。

「だから私が正しいのよ」

「女はいつも正しいのかよ」

「そうよ、正しいのよ」

胸を張り両手を腰にやっつての言葉だった。

「絶対にな。正しいのよ」

「そこまで暴論言うのかよ」

「暴論じゃなくて正論よ」

津島はまだ言う。

「だからいいのよ」

「よかねえよ、そんなの」

「話は聞いたわ」

二人が言い争っているところであった。また新たな人間がやって来た。今度は椎名であった。後ろには赤瀬もいる。相変わらず好対象な二人である。大人と子供では済まされない程の背のコントラストがそこにある。

そうしてそのコントラストの一方の椎名がだ。こう言うのだった。「それじゃあだけれど」

「げっ、悪のチビッコだ」

「チビッコって言わない」

言いながらすぐに狭山を何処からか出して来たハリセンではたく、それからだった。

「とりあえず斉宮と狭山は一緒に行かないのね」

「俺は別にどうでもいいけれどな」

「俺はそれは駄目なんだよ」

陽太郎と狭山がまたそれぞれ言う。

「男と一緒になんてな」

「わかった」

ここまで聞いてだ。椎名の言葉はだ。

「私が行く」

「えっ、椎名が!？」

「誰とだよ」

「つきぴーと行く」

こう言うのであった。

「つきぴーと二人で一緒に行く」

「えっ、西堀とかよ」

「あの人とかよ」

「そう、一緒に行く」

また言うのだった。

「夏休みまでに」

「えっ、それは」

椎名の今の言葉を聞いてだ。陽太郎は急に狼狽した。そうしてそのうえで言うのだった。顔にその狼狽が出てだ。かなり困惑した様子になっていた。

「御前が。西堀と二人って」

「女同士なら問題ない」

椎名の言葉は素っ気無いものだった。

「だから」

「いや、それはよ」

しかしである。陽太郎は戸惑いながらだ。こう言うのだった。

「あのさ、それはさ」

「あのさ？」

「いや、確かに女の子二人で行くのは悪くないさ」

それはいいというのだ。

「それに変な奴が来てもさ」

「私が全員蹴り倒す」

「それに西堀だって棒さえ持てば」

そうなればである。そこから先は彼等にとっては自明の理であった。

「下手な奴だったら絶対に勝てないけれどな」

「だから大丈夫」

実際にそうだと言う椎名だった。

「私達二人で無敵だから」

「まあ椎名がいたらよ」

狭山の口が微妙に歪んでいた。そのうえでの言葉である。

第十話 夏に入ってその五

「そいじよそこいらの野郎じゃ勝てないよな」

「何でそう言うの、そこで」

「外見はちびっ子、中身は悪魔だからよ」

またいらないことを言うのだった。

「そんなの相手にしたらよ。幾ら何でもよ」

「蹴っていい？」

むっとした顔で返す椎名だった。

「五回か六回。気が済むまで」

「しかも一発じゃねえのかよ」

「気が済むまで蹴る主義」

実に椎名らしい言葉だった。それを隠そうともしない。

「だから。覚悟する」

「おい、謝罪の選択肢はないのかよ」

「謝罪と賠償を要求する」

今度の言葉はこれであった。

「五億ドル」

「韓国への賠償じゃねえんだぞ」

肩を怒らせての抗議だった。

「何でそうなるんだよ」

「得意なのは踵落としと急所攻撃」

しかし椎名は狭山に対して尚も言ってみせた。

「どっちがいい？」

「謝罪がいい」

「ならいい」

ここで椎名は矛を収めてみせた。狭山は何とか助かったかに見えるた。

だが。彼女はここでさらに言うのであった。

「それなら謝罪として」

「ああ、それでかよ」

「皆で行く」

「こう言いだしたのである。

「皆で行く。いい」

「皆でつていつたら」

「私も？」

「僕もなんだね」

津島と赤瀬も言ってきた。自分達のことだと気付いたのである。

「そうなんだ」

「僕もだなんて」

「多い方が楽しい」

椎名の言葉だ。

「だから」

「だからなの」

「それで僕も」

「つきぴーも呼ぶ」

また言うのだった。

「これで三組」

「三組!？」

「ああ、そうね」

狭山は最初聞いたただけではわからなかった。しかし津島はすぐに納得した顔で頷いたのだった。彼女の方が察しがいいようである。

「私とこいつと」

「俺かよ」

「それで椎名と赤瀬で」

狭山の言葉を受けながらの言葉だった。

「これで二組」

「そう。そしてラストは」

「俺と西堀かよ」

陽太郎がここでわかった。それまではただ話を聞いているだけだったのだ。

「それで三組かよ」

「そう。それでどう」

あらためて四人に問い掛けてみせる。

「合わせて六人で」

「そうね。いいんじゃないの？」

津島はあらためて頷いてみせた。

「最初は偵察だったけれど。皆で二回行くのもいいわよね」

「そうだね」

赤瀬も津島のその言葉に頷いた。

「考えてみればね。皆で二回楽しめばね」

「じゃあ俺もそうさせてもらうか」

「斉宮、ただし」

椎名は陽太郎が声をあげたその機先を制してきた。

「一つ言っておくわ」

「何だよ、今度は」

「つきぴーだけに専念すること」

彼をじっと見ての言葉だった。

第十話 夏に入ってその六

「間違つても妹さんとか連れて来ないこと」

「幾ら俺でもそんなことしないよ」

「わからないから」

「普通デートに妹は連れて行かないだろ」

「おい、御前今よ」

「凄いこと言つたけれど」

今の言葉にだ。すかさず突っ込みを入れる狭山と津島だった。

「デートって言つたけれどよ」

「はっきり意識してるのね」

「だよな、だから今な」

「言つちやつたのね」

「うっ、今のはな」

言葉は出したらもう戻りはしない。しかしそれでも彼は言つたのだ。
つた。

「あれだよ、錯覚だよ」

「錯覚!？」

「それだつていうの?」

「いや、この場合は幻聴だな」

こう言い換えた。途中でだ。

「今のは幻聴だよ」

「じゃあ俺の耳は空耳だったのか」

「私もだったのね」

一応話を聞くのだった。

「それだったのか」

「何かかなり強引ね」

「今のは全員幻聴を聴いたんだよ」

無理矢理そういうことにしようとする。

「それだったんだよ」

「ちゃんと録音してるから」

しかしだった。ここで椎名が言うのであった。

「はい、これ」

「げっ、携帯かよ」

「これにちゃんと録音したから」

そしてであった。その出してきた携帯のボタンを押すとだ。しっかりと先程の陽太郎のデートという発言が記憶されていたのであった。

それを聞かせながらだ。また言う椎名だった。

「言い逃れは無理」

「それは機械の故障だ」

今度はそういうことにしようとする。

「偶然俺の架空の声が入ったんだよ」

「凄い設定だね」

上から赤瀬の驚いた声がしてきた。

「何処をどうやったたらそんな超絶設定になるのかな」

「超絶設定じゃない、事実だ」

その強引極まる主張は続く。

「俺は実際に」

「実際に違うから」

また椎名が言う。

「事実だから」

「うっ……」

「大体よ。事実でもいいじゃねえかよ」

「そうよね」

狭山と津島がまた言う。

「何今更言っただよ」

「そうよ。大体察しがつくものだし」

「げっ、そうなのか」

言われてようやく観念するのだった。

「ばれてたのかよ」

「ああ、ばっちりな」

「誰がどう見てもね」

「そうだったのかよ」

そしてそれを言われてだ。困った顔になるのだった。心からそう言っているのがわかるものだった。

そしてだ。陽太郎はようやく観念してだ。こう言った。

「仕方ないな」

「ほれ、諦めろ」

「諦めても何にもならないし」

また言う二人だった。

「じゃあ六人だよな」

「皆で行くのよね」

「うん。六人」

その通りだと二人にも返す椎名だった。

「六人で行こう」

「よし、これで話は決まりだね」

また赤瀬が言ってきた。

第十話 夏に入ってその七

「六人でね」

「そういえば赤瀬つてよ」

狭山はその赤瀬に対して問うた。比較的背の高い彼だがそれでも相手が赤瀬だとかかなり見上げてしまっている。途方もない高さであるからだ。

その赤瀬に言うのであった。

「水着とか。その服とか全部あれか？」

「特注かって？」

「やっぱりそうなのか？」

その巨大な彼への問いだ。

「あの超長ランもそうなのかよ」

「そうだよ。デザインは同じだけれどね」

「そうか、やっぱりそうなんだな」

「週刊少年チャンピオンの番長漫画の悪役みたいだって言われたこともあるよ」

赤瀬自身の言葉である。

「実際にね」

「そうか、そんなことも言われたんだな」

「ラスボスとかで出て来る巨大なのね」

それだというのだ。

「昔のチャンピオンつてそういう漫画が多かったそうだし」

「凄い漫画多かったんだな、昔のチャンピオンは」

狭山は赤瀬の話聞きながら思うのだった。

「そんな漫画ばかりだったのかよ」

「他にはマガジンでも三十年近く前はこういう格好の人多かったよ」

「昔の不良つて制服長かったからね」

津島もここで言う。

「それでリーゼントとかしてね」

「ああ、リーゼントな」

陽太郎もリーゼントという言葉には反応を見せた。

「あれ結構好きな髪形なんだけれどな」

「御前は似合わないと思うぜ」

「止めた方がいいわよ」

狭山と津島は彼は止めた。

「それはな」

「あんたは今の髪型が一番よ」

「ああ、一回中三の時に風呂前にやってみたんだよ」

彼自身もそれはしたことがあるのだという。

「ところがこれがな」

「酷かっただろ」

「目も当てられないとか」

「ああ。額の形がよくなってな」

リーゼントは額をあげるものだ。ジエームス・ディーンを見ても

それはわかる。だから額の形がかなり重要になってくる髪形なのだ。

そしてその額のことをだ。彼等も話すのだった。

「それで止めたんだよ。ポマードも何か好きになれないしな」

「リーゼントはやっぱりポマードだからな」

「ジェルだとオールバックになるからね」

ここが難しいのだ。尚オールバックといえはナチスの宣伝相ゲッベルスが有名だが彼を見てオールバックを止めた人間もいるかも知れない。

「ポマードじゃないと駄目なんだよ」

「そうそう」

「そうなんだよな。それでリーゼント止めたんだよ」

「正解だな」

「そうね」

その彼にまた言う二人だった。

「まあとにかくだ。六人だからな」

「わかったわね」

「ああ、わかったよ」

話は戻り一瞬で終わった。

「それじゃあ。西堀とか」

「期待しておくこと」

またぼつりと言う椎名だった。

「つきぴーに」

「西堀にかよ」

「あと何気に津島も。期待できる」

「こつも言うのだった。」

「期待していいい」

「そういうことよ」

津島は笑いながら横目で狭山を見て言ってみせた。

「あんたも期待しておいてね」

「御前の水着姿なんかどうでもいいよ」

狭山はわざとむっとした顔になって返した。

第十話 夏に入ってその八

「そんなのはよ」

「何よ、その言い方は」

「だってよ。どうせ寸胴の幼児体形なんだよ」

「全然違うわよ」

「いいや、絶対にそうだ」

わかつていて言う狭山だった。あえて喧嘩腰の様にだ。

「御前はよ」

「はったおすわよ」

いい加減頭にくての言葉だった。

「それ以上言ったらね」

「けれど実際にそうだろうが」

しかしかった。狭山はまた言うのだった。

「だってよ、そのスタイル見たらよ」

「着やせ」

ここでまた椎名が言ってきた。

「それがある」

「着やせかよ」

「女の子は油断できない」

ぼつりと正論を言う。

「それは言っておくから」

「そうなのかね。じゃあ期待しないでおこな」

「期待してていい」

ここでまたこう言う椎名だった。

「津島には」

「じゃあ御前はどうなるんだ？」

陽太郎はここで椎名に問うた。

「御前のこと言っていないけれどよ」

「ある意味において期待していい」
「自分についてはこの表現だった。」
「ある意味において」
「ある意味かよ」
「じゃあつきぴーには私から連絡しておくから」
「ああ、頼むな」
「そのことも話されるのだった。」
「そっちはな」
「水着はもうあるから」
「私もあるから」
「椎名に続いて津島も言ってきた。」
「もう何時でも行けるからね」
「安心していい」
「俺なんか普通に水泳の授業のつて考えてたけれどな」
「それ俺もだ」
「僕も。実は」
陽太郎だけでなく狭山と赤瀬も言った。
「他のじゃないと駄目かな」
「流石にまずいか」
「そっだよな。何か買おうかな」
「多分その必要はないから」
椎名は男三人にも話した。
「男の場合は」
「それはいいのかよ」
「男の水着は注目されないから」
「だからだというのだ。」
「だから別に水泳の授業でもいい」
「そうか、じゃあな」
「そのままで行くぜ、本当にな」
「それなら」

「うちの学校は水着も何種類もあるから」

椎名は今度はこのことを指摘した。

「だからいい」

「そうか。それなら」

「今は」

「そうだね」

男三人はそれぞれ顔を見合わせて頷き合った。そうしてだった。

話は決まった。彼等は六人でプールに行くことになった。陽太郎はその日の部活の帰りにいつもと同じく一緒に帰っている月美にこのことを話した。

既に夕刻になっていて夜が近付き暗くなるうとしている。その中で言うのだった。

「プール、話聞いてるよな」

「はい、聞いてます」

こう答える月美だった。その夜が近づく薄い帳の中でだ。

「それはもう」

「そうか、やっぱり椎名は仕事早いな」

「愛ちゃんは行動速いですから」

「迅速なのはあいつの専売特許だからな」

陽太郎はここでも彼女のその動きの速さを話すのだった。

「それはな」

「愛ちゃんは昔からですから」

「しっかりしてるのかな、あれは」

「はい、しっかりしてるんですよ」

彼女をこう評価していた。

第十話 夏に入ってその九

「凄く。私いつも助けてもらってますから」

「何だかんだで面倒見もいいからな」

「何だかんだですか？」

「今一つ考えてることがわからないんだよ腕を組んでの言葉だった。」

「あいつはな。だからな」

「何だかんだですか」

「ああ、何だかんだだな」

「だからだというのだ。」

「あいつはな」

「そうだからですか」

「ああ、それでな」

「はい、それで」

「あいつ期待してくれとか言ってたんだよな」

「期待ですか」

「ああ、そう言ってたよ」

「こう話すのだった。」

「実際にな」

「どういうことでしょうか」

「あいつ秘密主義でもあるしな」

「椎名のそうしたことについても言及した。」

「そこがな。どうもな」

「複雑ですか」

「ややこしいっていうか手の内読めないんだよな」

「少し困惑した言葉だった。」

「あいつだけはな」

「それが愛ちゃんですから」

「やっぱり普通に悪戯してるんだな」

「悪戯ですか」

「ああ、そうじゃないのか？」

「こづ月美に話す。」

「あいつは。悪戯っ子とかなんじゃ」

「確かに悪戯とかは好きですね」

「じゃあやっぱりそれが」

陽太郎は今は腕を組んでいた。そのうえでの言葉だった。

「あいつは」

「あいつはって」

「考えてることがわからないんだよな」

「またこう言う。」

「どうにもな」

「それもわざとなんですよ」

「わざとか」

「あまり本音とか見せるの好きじゃない娘ですから」

「それでか」

「ええ。それでもですね」

「ここで言葉を付け加えてきた。」

「愛ちゃんは嫌いな相手とは絶対に話さないんですよ」

「えっ、そうなのか」

「はい、そうなんです」

このことはだ。陽太郎がはじめて聞くことだった。彼はそれを聞いて少し驚いていた。

「実は」

「そうだったんだ、あいつは」

「気付きませんでした？」

月美はこづも言ってきた。

「そのことは」

「ああ、ちよっとな」

戸惑った顔で首を捻りながらの言葉だった。

「それは」

「そうだったんですか」

「ほら、あいつってさ」

そして椎名のことを話すのだった。

「感情表に出さないじゃないか」

「はい、そうですね」

「だからさ。そういうのはさ」

「気付かなかったんですね」

「とても。そうだったんだ」

首は捻られたままだった。

「あいつってそうだったんだ」

「あれで好き嫌いはっきりしてるんですよ」

また言う月美だった。

第十話 夏に入ってその十

「結構以上に」

「そうだったんだ」

「具体的には悪いことをしても反省しない人やかなり道徳的であった。

「それに他人をいじめる人とかが嫌いなんです」

「まあそういう奴って最低だけれどね」

「そういう人が嫌いでした」

こう話すのだった。

「他の人は別に。反省した人は普通に接しますし」

「見てるところは見てるんだな」

「だから愛ちゃんも凄いです」

彼女を素直に褒める言葉だった。

「本当に」

「そうだよな、凄いやそれって」

彼もだった。椎名を素直に褒めていた。これは自分でも内心驚いていた。しかしそれでも言葉として出てしまっているのも事実だった。

しかもその言葉を打ち消さずにだ。また言うのだった。

「あいつ、そうだったんだ」

「私なんかいつも助けてもらってばかりで」

「あいつに言わせたらそれも違うんだよな」

「違うんですか」

「ああ、そうなんだよ」

その目を少し丸くさせた彼女への言葉だ。歩きながら話していく。

「むしろ西堀がさ」

「私なんですか」

「あいつを助けてるってことになるんだよな」

「そういうのではないですけど」

少し戸惑いながらまた答える陽太郎だった。

「本当に」

「それで何でそう言うんでしょうか」

「だから気を使ってるんだろうな」

「私にですか」

「そうか、意外と気配りなんだな」

陽太郎は腕を組みながら述べた。

「本当に」

「気配り愛ちゃんですね」

「その仇名可愛いけれど本人に言ったら嫌がるよな」

「うふふ、そうですね」

それは笑ってその通りだと返す月美だった。

「愛ちゃんだったら」

「あいつはそういう奴だからな」

「はい、確かに」

このことに関しては見事に意見が一致していた。

「愛ちゃんって照れ屋ですし」

「えっ、そうなのか!？」

しかしすぐに一致しなくなった。面白いまでにだ。

「あいつってそうなのか」

「照れ屋ですよ」

「表情全然変わらないのにか」

「やっぱりわかりにくいですか」

「ああ、全然な」

まさにそうだと答える陽太郎だった。

「っていつか何処までわかりにくい奴なんだよ」

「そうですね?結構わかりやすいですよ」

「いや、全然だろ」

まだ言う陽太郎だった。

「表情全然ないしき。目にだってそれ出ないし」

「それがわかりにくいですか」

「全然わからないんだけど」

陽太郎の首は捻られたままだった。右に動いて左に動いてだ。ゆつくりと動く振り子のようになっていた。そうしながら言うのだった。

「それって」

「そうですか？私は」

「ひよつとして西堀って」

そんな彼女の言葉を聞きながらだった。陽太郎は言うのだった。

「鋭い？結構」

「そうですか？」

「そうじゃなかったらあいつのそういうことなんて気付かないよ」
だからだというのである。

第十話 夏に入ってその十一

「とてもさ」

「そうなんですか」

「自分では気付かないよ。それにしてもわかってよかったかな」
「今度は腕を組んでの言葉だった。」

「あいつのそういうところがまたわかって」

「やっぱり人ってわかりにくいですか」

「何かそう思えてきたよ」

「実際にそうだともいうのだった。」

「あいつのこの話を聞いてたら」

「そうですね。人ってわかりにくいですよね」

「ああ、かなりな」

「このことは二人共思っただった。」

「あいつだけじゃなくてな」

「わかりにくいですよね、本当に」

「見えないところだってあるしな」

「そうですね、それは」

「特にあいつはそうだけれどな」

「愛ちゃんだけじゃなくて」

「月美も言ってきた。」

「皆そうなのかも知れませんか」

「隠れたいところもあれば悪いところもあるか」

「そういうことになりますね」

「だよな。俺かなりいい勉強になったよ」

「陽太郎は腕を組みながらまた述べた。」

「本当にな」

「ええ、それで愛ちゃんですよ」

「ああ、プールな」

「それを御一緒にですね」

「急に決まったんだよ」

陽太郎はここでまた首を傾げさせたのだった。

「狭山と話してるうちに来てな」

「それでなんですか」

「最初に行かないっていうことにもなっただよ」

「それでもですか」

「椎名が出て来てそれで急に決まったんだよ」

教室であつた話をそのままするのだった。

「それがさ。急にな」

「急に、ですか」

「ああ。あいつまとめるの上手いよな」

「はい」

このことは月美もよく知っていた。伊達に長い間塾で一緒だったわけではなかった。

「生まれついでてのクラス委員ですよね」

「クラス委員どころか生徒会長でもやれるよな」

「やれますね、本当に」

「何時か立候補するかもな」

そしてこうも言うのだった。

「あいつだと」

「いい生徒会長になれそうですね」

「いや、あいつが副会長で」

陽太郎はふと考えをあらためてだ。また言うのだった。

「赤瀬が会長かな」

「赤瀬君っていつたらあの柔道部の」

「ああ、あのでかいのな」

「赤瀬君が会長さんですか」

「あれで力があつて物事を進められるからな」

「実行部隊なんですね」

「頭も結構いいしさ」

そのことも話すのだった。

「あいつもあれでさ」

「じゃあ余計にいいですね」

「椎名ってどつちかっというと参謀向きだしな」

何だかんだでだ。彼もまた椎名のことかわかってきていたのだ。その性格にだ。

そしてだ。また話す彼だった。

「戦闘力もあるけれどな」

「戦う参謀ですね」

「どっかの漫画みたいだよな」

今度思ったのはこのことだった。月美の言葉を受けてだった。

「本当にな」

「漫画みたいですか」

「そういう漫画あるじゃない。サンデーとかでさ」

「すみません、私サンデーは」

名前は知っているが、だった。月美は陽太郎の今の言葉には困った顔で返したのだった。

第十話 夏に入ってその十二

「あまり。読んでいなくて」

「ああ、そうだったんだ」

「マガジンの方を読んではまず」

そしてそちらだというのだった。

「読むのは」

「そうなんだ、マガジン派なんだ」

「他には怪奇漫画が好きです」

このことも言うのだった。

「そうした漫画も」

「へえ、そうなんだ」

怪奇漫画が好きと聞いてだ。陽太郎は意外な顔になった。そしてその顔であらためて月美を見てそのうえでまた彼女に声をかけたのだった。

「西堀って。いや、前にそんなこと言ってたっけ」

「言っていましたっけ」

「こんな話した気がするんだよ」

こう言う。

「前にな」

「それってつまりは」

「つまりは？」

「あれですよ。結構お話してきて」

月美はにこりと笑って陽太郎に話すのだった。

「それで、ですよ」

「それでなんだ」

「だって。お話してないところしたこと思いませんか」

「あっ、そうか」

言われて気付いたことだった。

「言われてみればそうだよな」
「そうですね。何度もお話しているから」
「だからですよ」
「そうだよな。そういうことか」
「ええ。そういえば私達って」
「そこからだった。自分達のことも話すのだった。」
「最近こうして」
「そうだよな。一緒に話すこと多いよな」
「そうですね。登下校の時とか」
「そのおかげで本も読むようになったしな」
「陽太郎の顔はここでは微笑みになっていた。」
「西堀の薦めてくれた本な」
「どうですか？芥川とか太宰とか」
「いいよな。太宰って最初は抵抗あつたんだよ」
「男の人って太宰に抵抗ある人多いですよね」
「俺の場合は食わず嫌いだったけれどな」
「自分のことも話すのだった。」
「けれど実際読んでみたら」
「いいですよ」
「ああ、かなりいいよな」
「笑顔になっていた。それも二人共にだ。」
「とてもな。それに」
「それに？」
「太宰の小説って読みやすいよな」
「このことも言うのだった。話は自然に文学論にもなっていた。」
「かなりさ」
「ええ、太宰はどの作品も読みやすいですよ」
「難しい表現とかあまりないっていうか」
「芥川は作品によって難しかったりしますけれど」
「だよな。芥川はな」

芥川の話にもなるのだった。芥川は作品によって文章を変えたりするのである。それによって非常に読みにくかったりするのである。

「読みにくいよな」

「はい、作品によって本当に」

「古典みたいな作品もあつたしな」

「けれどそれって考えてみたら凄いですよ」

「凄いんだ」

「だって。古典の言葉なんてそうは書けませんよ」

月美が言うのはこのことだった。

「私だってそれは」

「そついえば俺も」

「いざ書けつて言われたら無理ですよね」

「そつだよな」

陽太郎は今は月美の言葉に素直に頷いた。

「言われてみれば。確かに」

「だから凄いですよ」

月美はまた芥川を賞賛した。

第十話 夏に入ってその十三

「芥川は」

「そうだよな。じゃああれかな」

「あれ？」

「そういう文章を読めるようになるのも読者の質かな」
「こう言うのだった。」

「実際な」

「そうですね。言われてみたら」

「読みやすい本を読むのもいいけれどさ」

「純文学を読む視点での言葉になっていた。」

「そうした難しい本を読めるようになるのもさ」

「大事ですよね」

「そうだよな」

「また言う陽太郎だった。」

「まあ普段はいいけれど」

「文章は難しくても言っていることが何がわからない本もあり
ますよね」

「月美の言葉がここで変わってきた。」

「芥川はあえて文章を変えてその時代の雰囲気を再現させようとして
いますけれど」

「ああ」

「言っていることがわからない本もありますよね」

「あるね、それ」

「陽太郎もそれに頷く。」

「大江健三郎とか吉本隆明とか」

「そういう本は読まなくていいって言われました」

「そういう本はだというのだ。」

「愛ちゃんにもお父さんにもです」

「親父さんにもなんだ」

「はい、お父さんも言っていました」
またそうだといいのだった。

「そうした本はまやかしだからって」

「まやかしねえ」

「吉本隆明が特にそうだって言っていました」

「吉本隆明？」

これは陽太郎の知らない名前だった。月美からそれを聞いてもであつた。首を傾げさせるばかりだった。思い出そうにも聞いたことがなかつた。

「誰、それ」

「思想家なんですけれど」

「思想家ねえ」

「戦後最大の思想家って言われています」
それだけを聞くとかなりのものである。

「ですけどオウムを賞賛していたりしています」

「ああ、オウム真理教だよな」

陽太郎もそれでわかつた。オウムでだ。

「あのカルト教団だよな。俺達が生まれた頃か生まれる前にテロ起こした」

「はい、そのオウムです」

「あんな連中を賞賛していたのか」

「最も浄土に近い人とか言っていました」

「それは絶対に違うよ」

陽太郎は顔を曇らせて述べた。

「あんな奴が何でなんだよ」

「麻原ですよ」

「ああ、あんな奴ただの犯罪者じゃないか」

「やっぱりそう思います？」

「何でそんな奴が浄土に近いんだよ」

「そういう人間の本ですか読まなくていいと思います」

「けれど西堀は読んだんだよな」

それは月美の言葉からそれを読み取った。話を聞いてそれを察したのである。

「吉本隆明の本」

「オウムへの発言や最初の頃の本を読みました」

「それで駄目だったんだ」

「好きになれません」

彼女にしては珍しくはっきりした言葉だった。

「絶対に」

「そうなんだ」

「はい、そうです」

また言う彼女だった。

「私にはです」

「そうなんだ」

「それで愛ちゃんも言っていましたし」

「成程ね」

「専門知識が必要な本や芥川みたいにあえて文章を変えてもいない作品じゃなくてそうした何を言っているのかわからない作品は読まなくていい」

月美の言葉は続く。

第十話 夏に入ってその十四

「私もそう思います」

「そういうものか」

「それを考えたら太宰はやっぱりいいですよね」

「ここまで話してまた太宰に話を戻すのだった。」

「言っていること、伝えたいことがわかりますから」

「そうだよな。それは凄いわかるよな」

「それが本物だと思います」

「要するに太宰はそれだというのだ。」

「それにあの人が自殺しましたけれど」

「うん」

「卑怯ではなかったです」

「卑怯じゃなかったんだ」

「問題もありましたけれど正々堂々としていました」

「甘ったれているという意見もある。しかし太宰はあくまで卑怯ではなかった。己の信念や考え、良心にあくまで忠実であったのである。」

「ですから私あの人は」

「認められるんだ」

「はい、そうです」

「その通りだというのである。」

「私はですけど」

「そうなんだ」

「斉宮君はどうですか？」

「太宰はそこまでまだ読んでいないけれど」

「そうなんですか」

「けれど。そうかも知れないな」

「応えながら月美のそうしたしっかりした考えに頷いているのだ。」

「実際にさ。それは」
「そうですか」
「うん、そう思うよ」
「また言う彼だった。」
「俺もね」
「わかりました」
「何か西堀って文学部とか合いそうだね」
「大学ですよね」
「うん、そこね」
「まさにそこだというのだ。」
「大学の文学部。合いそうだね」
「私も。大学は文学部に行きたい思っています」
「そうなんだ」
「はい、そうです」
「本人もそうだと言うのだった。」
「私も思います」
「そうか。だったら」
「斉宮君はどうするんですか？」
「俺？」
「はい、大学は」
「経済学部だけれど」
「赤瀬に話したことをそのまま言うのだった。」
「そこにさ」
「経済学部ですか」
「八条大学の」
「学校まで話すのだった。」
「そこを受けようかなって思ってるんだ」
「大学は一緒ですね」
「月美は陽太郎の今の言葉を受けてさらに微笑んだ。」
「学部が違うだけで」

「同じかな」

「同じじゃないですか」

また言う月美でだった。

「八条大学ですから」

「八条大学な」

「あそこいい大学なんですよ」

満面の笑顔になっていた。

「とても」

「そんなにいいんだ」

「博物館もあつて図書館なんか本当に凄くて」

笑顔が輝いていた。そのうえでの言葉だった。

「美術館もありますし」

「何でもある大学なんだ」

「キャンパスもとても広いですし」

「そっだよな。うちの高校もその一角になってるしな」

「系列学校ですし」

八条高校は一応付属高校になっている。それを踏まえてだった。

「ですから同じになりますね」

「そっだよな。それじゃあ」

「それじゃあ？」

「一緒の大学行くようにしましょう」

自分の横にいる陽太郎を見ての言葉だった。

第十話 夏に入ってその十五

「そうしましょう」

「同じ大学に」

「学部は違っても」

それでもまだというのだ。

「同じ大学に行きましょう」

「そうだね」

陽太郎もだ。月美に言われているうちに頷いてだ。そして言うのだった。

「だったら」

「はい、八条大学に」

「一緒に行こうか。けれどその前に」

「その前に？」

「プール行こうか」

この話に戻すのだった。

「皆と一緒にさ」

「はい、愛ちゃん達と」

「西堀つて泳げる？」

陽太郎はふと気になって尋ねた。

「泳げなかったら」

「水練をしましたから」

「水練なんだ」

「あっ、武芸としてやっていました」

そうだったというのである。

「それで」

「水泳も武芸に入るんだ」

「そうなんです。武士は泳ぎも出来ないと駄目だって言われてましたから」

「馬に乗るだけじゃなかったんだ」

それを聞いてこう言葉に出して言った。

「それだけじゃなかったんだ」

「だって。敵が来て前に河とかがあったら」

「泳ぐしかないからなんだ」

「だからなんです」

こう話すのだった。

「それでなんです」

「成程、それでなんだ」

「それでお父さん私に水泳もしなさいって言って」

「それで泳げるようになった」

「はい。今では水泳はやってませんけれど」

それでもという口調だった。

「泳げることは泳げます」

「居合とか弓道だけじゃないんだ、できるの」

「あっ、流石に馬は乗れません」

くすりと笑つての言葉だった。

「それは」

「まあそれはさ。今時馬はさ」

「乗らなくてもいいって。お父さんも言ってました」

「そうだろうな。まあ黒王号みたいな馬ならともかく」

何気に北斗の拳に出て来た巨大な馬の話を出したのだった。馬は本来繊細で気性の優しい生き物であるがそうした常識をも覆した馬であり多くの人間を踏み殺してもいる。大きさは一見して二メートルを優に越える程度であるが時として何十メートルにもなったりする。

「普通の馬はさ。別に」

「けれどあれですよ」

「あれって？」

「お馬さんって大きいんですよ」

月美は馬のその話もするのだった。

「私なんかよりずっと高い場所に顔があったり」

「ずっとなんかそんなに大きいかな」

「私にとっては大きいです」

こう言う月美を見るとだった。確かにお世辞にも背は高いとは言えない。一五六程とやや小柄になるかも知れない。陽太郎はその彼女を見てそれで内心頷くものがあった。

その彼女がだ。また言うのだった。

「ですから馬術は」

「無理なんだね」

「ちよつと」

苦さと困ったものを混ぜ合わせての言葉だった。

「私には」

「そうなんだ。それでも泳げるんなら今回はね」

「問題ありませんか」

「うん、だから楽しく行こうよ」

「わかりました」

二人で歩きながら笑顔で言い合っていた。陽太郎は今二人だった。だが星華はその時一人だった。一人で今部室を出たばかりであった。周りには誰もいなかった。

第十話 完

2010・5・12

第十一話 プールでその一

第十一話 プールで

「それでさ」

「今度の日曜」

「それでいいわよね」

「ええ、いいわよ」

星華はまた三人と話していた。クラスの教壇のところまで立ちながらだ。そのうえで彼女達と明るい顔で話に興じているのであった。

「じゃあそれでね」

「やっとテストも終わったしね」

「本当に。もう数学」

「ああ、あれね」

「滅茶苦茶難しかったわよね」

話は自然とテストのものにもなった。

「まさかあんなに難しいなんてね」

「私まずいかな」

ここで星華は少し困った顔になるのだった。

「赤点じゃないかしら」

「大丈夫じゃないの？」

「ねえ」

しかし周りはこちら言うのだった。

「別にね」

「勉強したんでしょ、ちゃんと」

「それならね」

「赤点にはならないわよ」

「だったらいいけれど」

励ましの言葉を受けてもだった。星華の顔色はまだ明るいものにはならなかった。

「それで」
「だから大丈夫よ」
「それよりもよ」
「もうテストは終わったんだし」
三人は明るい顔で星華に言ってきた。
「日曜よ、日曜」
「あのアーケードってそんなにいいの」
「そうよ、色々なお店があってね」
「食べ物も美味しいしね」
三人は明るい顔でそれぞれ星華に話す。
「だから行きましょう」
「星華ちゃんも楽しめるから」
「おうどんとかね」
「あつ、おうどんの美味しいお店もあるの」
うどんと聞いてだった。星華は笑顔になった。
「そうなの」
「おうどん好き？」
「ひよっとして」
「うん、大好きなの」
それを自分でも言うのだった。
「お蕎麦も好きだけれど」
「へえ、和食派だったの」
「そうだったの」
「和食だけじゃないけれどね」
「微笑みながらの言葉だった」
「それでも。おうどんはね」
「特に好きなの」
「じゃあ丁度いいわね」
「そう、おうどんね」

星華の目がきらきらとなっていた。美味しいものがあると聞いた

その顔で、である。三人に対してさらに言ってきたのであった。

「天麩羅うどんがいいかしら。それとも鴨なんばがいいかしら」

「あっ、そのお店ね」

「うん」

「本当の鴨使ってるから」

「えっ、そうなの」

それを聞いてだった。さらに明るい顔になる星華だった。

「本当の鴨をなの」

「鶏もあるけれどね」

「へえ、どっちもあるの」

「あっ、星華ちゃんって鶏肉も好きなんだ」

「そうなのね」

「そうなの。もう親子丼とか大好きで」

それもだと。笑顔で三人に話すのだった。

第十一話 プールでその二

「鴨なんばうどんと親子丼の組み合わせでいいかしら」

「それって結構最高じゃないの？」

「そうよね」

「今日のお昼それにする？」

自然とこんな話にもなるのだった。

「うちの学校メニューも多いしね」

「そうそう、しかも安くて美味しい」

「だから。今日はおうどんと丼でね」

「鴨なんばと親子丼」

「話してるだけで涎出そう」

そんな話をしているうちにだ。星華が満面の笑顔で三人に告げた。

「じゃあお昼には皆でね」

「鴨なんばと親子丼食べて」

「日曜のこと考えましようか」

「それいいね」

三人も彼女の言葉に満面の笑顔で頷く。ただしここでの鴨は鶏のことである。流石に学校の食堂で鴨は置いてはいないのだった。

星華と三人がそんな話をしているとだった。同じ教室で月美と椎名も話をしていた。月美はにこやかに笑って椎名に対して言った。

「それじゃあ日曜ね」

「うん」

椎名は月美に対してこくりと頷いてから答えた。

「もう水着用意したから」

「愛ちゃんはまだ用意できたの」

「つきぴーは？」

「私は。まだなの」

少し申し訳なさそうに答える月美だった。

「どれにしようか迷って」

「水着どれにするかなの」

「何がいいかしら」

少し困った顔に変わっていた。

「本当に」

「気をつけた方がいい」

椎名はここでこう言った。

「つきぴーの場合は」

「私はなの」

「そう、気をつけた方がいい」

また言う椎名だった。

「つきぴーは」

「どうしてなの？」

「スタイルがいいから」

胸を見ながらの言葉だった。

「だから」

「私そんなに」

「いや、いい」

ここでは言わせなかった。

「謙遜はいいから」

「そうなの」

「つきぴーのスタイルはいい」

それを強い言葉で言う。

「特に胸が」

「胸が」

「規格外」

冗談で言っている言葉ではなかった。

「まさに核兵器」

「核兵器って」

「それだけの威力がある」
「こつこつ言うのであった。」
「完全に」
「そうかしら」
「斉宮に変な刺激与えたらよくない」
「斉宮君に？」
「そう、彼氏でもつきぴーの胸は刺激が強過ぎる」
「そんなに」
「そう、そんなに」
「言いながらまだ彼女の胸を見ていた。」
「今どれだけあるの」
「ええと、確か」
「確か。どれだけ」
「多分九〇はいつてるけれど」
「それだけだというのだ。」
「それっておかしいかしら」
「犯罪的な大きさ。しかも」
「しかも？」
「他の部分も凄い」
「胸だけではないのだというのだ。」

第十一話 プールでその三

「だから。よくない」

「そうなの」

「そう。それに顔もいい」

「そんな、何かずっと」

「私は嘘は言わない。お世辞も言わない」

「それは知ってるけれど」

「だからよくない」

つまり何もかもが良過ぎるといっているのである。

「水着は絶対に選ぶべし」

「絶対なのね」

「まず露出の多い水着は避ける」

最初はそれだというのだ。

「いいわね」

「露出の多い水着は」

「ビキニなんかは特に注意」

「ビキニはなの」

「絶対に胸に目がいくから」

その理由も話す。椎名は親友のことをよくわかっていて。

「だから」

「それじゃあワンピースなのね」

「ただし競泳水着も駄目」

「えっ!?!」

競泳水着が駄目と言われてだ。思わず声をあげてしまった月美だつた。

そのうえでだ。椎名に対して問うのだった。

「それはどうしてなの?」

「競泳水着は身体のラインが出るから」

「だからなの」

「あれははつきり言ってまずい」

また言う椎名だった。

「ビキニよりもラインがはつきり出る」

「ということは」

「つきぴーのその胸もウエストもお尻も全部出る」

かなり具体的な言葉だった。

「サンプルはアイドルのグラビア」

「そういえば最近のアイドルって競泳水着着ることも」

「多いのはそうした理由。ラインがはつきり出るから」

それで観る者の目を引くからだというのである。グラビアというものは観られて、注目されてこそだからだ。だからこそそうした競泳水着も着るのだった。

「だから駄目」

「駄目なの」

「大人しいワンピースか」

「それか？」

「セパレーツか。露出の多くないものならいい」

「それじゃあ」

月美はここでぼけた。

「スクール水着とかは」

「あれはかえって駄目」

「かえって？」

「そう、駄目」

また駄目出しをする椎名だった。

「マニア心をくすぐるから駄目」

「だからなの」

「そう、だから」

椎名の言葉は続く。

「スクール水着もかえって駄目」

「難しいのね、水着って」

「私も駄目らしいけれどつきぴーはもつと駄目」
駄目出しもまた続くのだった。

「何故なら」

「何故なら？」

「そのスタイルと顔だから」

「だからなの」

「童顔なのに巨乳」

月美を形成する二大要素だった。ついでに言えば背もお世辞にも高いとは言えない。しかし椎名と一緒ならば彼女の方がずっと小さいからそれはここでも問題ではなかった。

「それでスクール水着の組み合わせは」

「駄目なの」

「戦略兵器レベルの威力がある」

この言葉ははったりではなかった。椎名の冷静な分析による言葉だ。

「だからそれはビキニや競泳水着と同じ位駄目」

「そうなの」

「わからなくてもわかってくれたらいい」

少し聞くと矛盾する言葉だった。

第十一話 プールでその四

「それでいい」

「わからなくてもわかったって」

「言葉を覚えておいてくれたらいい」

具体的にはそういうことだった。

「それでいい」

「それじゃあ具体的にはビキニと競泳水着は」

「スクール水着も」

スクール水着は外せないというのだった。

「そういうこと」

「わかったわ。それじゃあ」

「それで行く。つきぴー水着持つてる？」

「それでもビキニと競泳水着、スクール水着もまだあるからそれは全部外して」

椎名の言葉はしっかりと聞いていた。

「その中から派手でない水着を選んで」

「そうして」

「わかったわ。じゃあ愛ちゃんはどつするの？」

「これから選ぶ」

そうするとうのだった。

「今日お店に行く」

「八条百貨店？」

「そこにするつもりだけれど」

「それだったら」

八条百貨店と聞いてだった。月美は明るい顔で彼女に言うのだった。

「部活の帰りに待ち合わせして行かない？」

「一緒になの」

「そう、一緒に行かない？二人で」

「こう椎名に提案するのだった。」

「実は私も行きたかったし」

「何処に行くつもりだったの？」

「CDショップなの」

「そこだというのである。」

「そこに行くつもりなの」

「そうだったの」

「ベルリオーズ買おうって思って」

「クラシックね」

「そう、幻想交響曲」

ベルリオーズの代表作の一つである。自殺未遂を起こし意識朦朧としていた中で見た夢、幻想といったものを音楽にしたものである。実に不思議な響きのある曲だ。

「それを買うつもりだけれど」

「相変わらずクラシック好きなの」

「うん、だからね」

「それでだということだった。」

「それでなの」

「わかった」

椎名は月美のその言葉に頷いた。

「それなら一緒に」

「行きましょう。そういえば愛ちゃんは」

「今度は何？」

「音楽はやっぱり」

「パンクかヘビメタ」

「それだというのである。」

「ハードメタルも好き」

「派手系よね」

「ファッションも」

それもだというのである。

「それもそつち系列がいい」

「そうよね。けれど白いすっきりしたのも好きよね」

「それもいい」

趣味は結構幅が広いようである。

「どつちも」

「私はやつぱり」

「つきぴーはしつとり系ね」

「清潔な感じなのが好きなの」

ある意味自分に合った服を選んでいると言えた。

「あと和服も」

「似合ってるからいい」

「有り難う」

「それじゃあ日曜は」

「うん、地味な水着でね」

こう話してだった。二人で日曜の話をしていた。そうしてだった。その日の部活の後実際に二人で百貨店に行った。そのスポーツ用品店の隣にある水着売り場に入ってた。椎名の水着を二人で選ぶだった。

それから日曜になった。プールの最寄の駅に行くとなった。

既に陽太郎がいた。狭山と津島もだった。

「おはよう」

「よお、チビツ子」

「おはよう」

陽太郎と狭山、それに津島が二人に笑顔で挨拶をする。駅から出たそこにいたのである。

第十一話 プールでその五

ただしだ。椎名は自分をチビと言った狭山にだ。むっとした顔で返すのだった。

「チビは挨拶じゃない」

「いいじゃねえかよ、挨拶だよ」

「挨拶じゃない」

むっとした目で返すのだった。

「だから訂正する」

「訂正しないとどうなるんだ？」

「ドロップキック」

一言だった。

「それからミリオンゴーストアタック」

「おい、聖闘士星矢かよ」

「車田正美先生は偉大」

どうやら彼女は車田正美のファンらしい。それでこう言っているようだ。

「だからそれをする」

「うわ、本当にするのかよ」

「されたくなかったらちゃんと挨拶する」

要するにそうしろとのことだった。

「わかった」

「わかったよ。じゃあな」

狭山もそれに頷いてだった。それであらためて彼女に挨拶するのだった。

「おはよう」

「おはよう」

椎名も挨拶を返す。それで終わりだった。

狭山と津島の話が終わるとだった。今度は上から声がしてきた。

「おはよう」

「ああ、赤瀬」

陽太郎が微笑んだ顔を上に向けて応えた。

「今戻って来たんだ」

「うん、これ」

「悪いな」

赤瀬はその野球ボールを一度に何個も持てるような大きな手から缶ジュースを出してきた。両手に六本全部持っていた。しかも軽くである。

「それじゃあな」

「うん、それじゃあ」

「はい、これ」

陽太郎が他のメンバーにそれぞれ缶ジュースを渡す。種類は同じで午後の紅茶だった。ミルクティーのそれを出したのである。

「これでいいよな」

「おお、悪いな」

「それじゃあね」

狭山と津島がまず笑顔で応えた。

「じゃあ早速な」

「飲ませてもらうわね」

「そっちもいいよな、これで」

陽太郎は月美と椎名に対しても問い返す。

「ミルクティーで」

「はい、有り難うございます」

「ミルクティー大好き」

こう答える二人だった。月美は笑顔だが椎名はいつもの無表情だった。

何はともあれ六人で飲む。それからだった。

陽太郎が皆に言うのだった。

「じゃあ今からさ」

「はい、プールですね」

「行こうか」

こう言って行くことを誘う。

「そろそろ」

「そうだよな。ああ、お弁当だけねどな」

「六人分持って来たから」

狭山と津島が言ってきた。

「こいつがサンドイッチ作ったんだよ」

「折角だと思ってね」

「えっ、そうなんですか」

それを聞いた月美が驚いた顔になる。そして自分が両手に持っているバスケットボックスを申し訳なさそうに見る。そうして言うのだった。

「すみません、私も」

「あっ、持って来たの」

「私はお握りですけれど」

それだというのだった。

「それを」

「お握りにサンドイッチか」

「いいんじゃない？」

陽太郎と狭山は量については今は全く考慮していなかった。

「そうだよな。お昼にはな」

「丁度いいよな」

「そうですね。じゃあ決まりね」

「ああ、お昼はそれで」

「余ることもないしな」

「それは絶対はないから」

椎名もそれはないと断言する。

第十一話 プールでその六

「赤瀬がいるから」

「僕なんだ」

「赤瀬はどんなものでもどれだけあっても食べきれからだからだというのである。」

「だから。安心していい」

「まあね。食べられるけれどね」

彼も自分でそれを認めるのだった。

「好きなだけね」

「だから大丈夫」

また言うのだった。

「量は問題ない」

「けれど味は」

「陸上自衛隊の食事だと思えば大丈夫」

月美にもこう返すのだった。

「あれは凄い」

「あれっ、陸上自衛隊って」

「飯まずいのかよ」

「素人さんが持ち回りで作る」

これは本当のことである。陸上自衛隊では航空自衛隊や海上自衛隊の様に給養、即ち食事を専門に作る職種は存在しない。兵士達が当番で作るのである。それで美味しいものができるかということと言ってもないことである。

「そんなもの」

「そりゃ酷いな」

「まんまいつもキャンプファイアーなのかよ」

「それに比べたらつきぴーの料理は大御馳走」

そうだというのである。

「実際にそこそこ美味しい」
「そうか、それならな」
「期待していいわね、そっちも」
狭山と津島はここでまた笑顔になった。
「こいつのサンドイッチ以外にも御馳走が加わったんだからな」
「全然オツケーよね」
「ただし。あれだよな」
陽太郎はここで少し苦笑いになって述べた。
「食べ過ぎたらお腹がな」
「そこまで食べるのもいいんじゃない？」
赤瀬が上から述べる。
「美味しいって証拠だし」
「それもそうか」
「お握りと後は」
月美はさらに言ってきた。
「他には玉子焼きに野菜の煮付けもありますから」
「私はデザートにフルーツ持って来たけれど」
津島が持つて来たのはそれであるというのだ。
「へえ、西堀さんはそっちなんだ」
「お握りのおかずにも思いました」
「それでだというのだ。」
「駄目でしょうか」
「いや、それ凄いよ」
「ねえ」
狭山と津島がまた言い合う。
「玉子焼きまでって」
「それもお野菜まで」
「凄いですか？」
「っていうかそこまでのってさ」
「サンドイッチなんてあれだし」

津島はここでそのサンドイッチについて話すのだった。

「簡単だから。挟むだけ」

「そうですか？サンドイッチも」

「いや、だから挟むだけだから」

それを言う津島だった。

「それで終わりじゃない」

「はあ」

「後は耳を切って程よい形、っていうか三角にしてそれで終わりだから」

「耳はどうするんだ？」

「後で牛乳を入れてお粥にするかカリッと焼くの」

そうすると陽太郎にさりげなく答える。

「何でも無駄なくよ」

「それは忘れないんだな」

「忘れたらお料理じゃないから。とにかく西堀さんって本格的ね」

「いえ、そんな」

いささか弱気に応える。それはここでもだった。

そしてだ。その月美にだ。また椎名が言ってきた。

第十一話 プールでその七

「凄いいからいいと思う」

「いいの」

「そう、いい」

言うまでもなく彼女を褒めてフォローする言葉である。

「つきぴーのお料理は自信持っていていい。じゃあ行く」

「よし、じゃあ豪快に泳ぐか」

「そうね。泳がないとね」

「プールに来たら泳ぐんだよ」

狭山はもう今からそのことを考えているのだった。そうして津島にも応える。

「じゃあ行くか」

「それでどれだけ泳ぐのよ」

「三キロは泳ぎたいな」

「相変わらず泳ぐの好きなのね」

「ああ、好きだよ」

自信満々に津島に応える。そんなやり取りをしてだった。

皆でプールに入る。陽太郎はここでまた驚くことになった。

「えっ……」

「だよな」

「これは本当に」

彼だけでなかった。狭山と津島も啞然だった。その顔で水着姿の月美を見てだ。そのうえでそうした顔になってしまっていたのだ。

「凄いいよな」

「ええと、何カップかしら」

「Gですけれど」

こう津島の言葉に応える。比較的露出のない青いワンピースだがそれでもだ。月美は充分過ぎるまでに凄かった。津島は黒地の競泳

水着だ。胸は普通程度だが尻のラインがかなりいい。彼女にしてもかなりのプロポーションである。

「それが」

「Gって」

「いや、凄い迫力」

今度は狭山と津島が言う。

「そうか、陽太郎って幸せなんだな」

「どれ位っていうの？ここで」

「俺と同じ位だな」

「よし、合格よ」

二人はさりげなくそんなやり取りもした。

そしてそこに椎名が来た。彼女は白いビキニだ。だがそれはあまり目立たないものだった。狭山も彼女を見ては特に何も言わなかった。

「ふうん」

「ふうん、なの」

「ああ、それだけだな」

返答も実に素っ気無い。

「じゃあな」

「帰るみたいに言わない」

「いや、俺ロリコンじゃないしよ」

こう椎名に返す。

「別にそれはよ」

「それで返答はないの」

「別に聞きたくもないだろ」

「確かに」

「じゃあいいよな」

これで強引に話を終わらせてしまった。

「それじゃあな」

「それでこれからどうするの」

「だから泳ぐんだよ」

他の選択肢は用意してなかったらしい。先程と同じ返答だった。

「精一杯な」

「そうそう、お昼までね」

津島も言う。

「じゃあ百メートルプール行くか」

「そうね、そこでね」

二人はそれで話を決めた。そして椎名と赤瀬もだ。

「何処に行くのかな」

「滑り台」

そこだと答える椎名だった。

第十一話 プールでその八

「そこに行く」

「うん、じゃあそこでね」

「二人も楽しむ」

椎名は残る二人にも言うことを忘れなかった。

「わかった？」

「あ、ああ」

「それじゃあ」

その広いプールの中で話す。屋内だがそこには様々なプールがある。流れる円になっているプールもあればかなり大きなプールもある。滑り台付のものもある。そして周りには緑のジャングルを模した木々もある。その中に色々な店や休む為の関や寝椅子がある。かなり見事な中であつた。

その中においてだ。椎名は二人に言うのである。

「好きな場所に行つて」

「じゃああつちのジャングルプールに行くか」

「そうします？」

「西堀はそつちでいいよな」

「はい、私は」

「よし、じゃあ」

これで二人の話は決まりだった。そして椎名もその二人にまた言うのだった。

「私達も二人で行くから」

「そつちもかよ」

「私と」

「僕とね」

赤瀬もここで言うのだった。

そして二人はその滑り台のところに向かう。既に狭山と津島は大

きな、その百メートルはあるプールの中にいる。陽太郎は月美を誘うのだった。

「なあ」

「はい」

「向こうのジャングルプール行くか」

「あそこはかなり凄いですよ」

「えっ、そんなに!？」

「ジャングルプールですよ」

それを言うのだった。

「そこですよ」

「ああ、そこだけれど」

「あそこは凄いんですよ」

また言う月美だった。

「プールが幾つもあったてそこがそれぞれつながってて」

「えっ、そういうところなんだ」

「ボートで行ったりもします」

そうしたこともあるのだという。陽太郎は月美の今の言葉を聞いてだ。その眉を思わず顰めさせた。そのうえでまた言うのであった。

「そんな場所だったんだ」

「知りませんでした?ここの看板なんですけれど」

「そうだったんだ」

「はい、凄い場所ですから」

月美は話しながら笑顔で述べる。

「もうかなり」

「そうか。じゃあボートでも借りる?」

「そうします?」

「それともゆっくりと泳いで回ろっか」

「そうですね。それでしたら」

「泳ぐか」

月美の言葉を入れて話が決まった。そのうえでだった。

「それじゃあな」

「行きますか」

「うん、行こうか」

また言う陽太郎だった。そうしてである。

二人でそのジャングルプールに向かう。周りはまさにアマゾンといった演出であり多くのプールがつながっていた。二人はその中を泳いでいきながら話をしていた。

「ここって全部でどれ位かな」

「まっすぐ行って二キロは普通にあると思います」

「そうか、二キロか」

「泳げます?」

「ああ、大丈夫だよ」

こう答えることはできた。

「それ位だったらな」

「斉宮君も泳ぎは得意なんですね」

「結構好きなんだよな」

実際にそうだというのだった。

第十一話 プールでその九

「泳ぐのもさ」

「そうですね」

「うん、それでだけねどさ」

また言う陽太郎だった。二人で横に並んで平泳ぎをしている。そうしながらプールの中を進んでいく。そのプールを少しずつ進んでいく。

「プールとプールが水路でつながってるんだ、ここって」

「そうですね。ですからボートを借りることも」

「できるってことか」

「そうですね。それでなんですけれど」

「それで？」

「ここを出たら丁度いい時間ですね」

「ああ、お昼なんだ」

時間のことは忘れてしまっていた。泳ぐのとプールの中に夢中でだ。

それでそのことを思い出すとだ。その途端にだ。

「何かさ」

「何か？」

「お腹空いてきたし」

「あつ、もうですか」

「何か空いてきたよ」

また言う陽太郎だった。

「お昼のことを考えたらさ」

「そうですね」

「西堀のお握り楽しみにしてるしね」

「有り難うございます」

笑顔で陽太郎の笑顔に応える。同じ笑顔になっていた。

「それじゃあお昼を目指して」

「泳ぐか」

「そうしましょう」

こう笑顔で言い合ってそのうえでプールの中を進んでいく。時々ボートが来るがそれも避けてだ。そうしてそれぞれのプールを進む。その中でだ。時々カップルを見る。彼等はプールの中でかなりいちやいちやしていた。

月美はそれを見てだ。顔を赤らめさせていた。そしてだ。

「何か」

「何か？」

「皆さん凄いですね」

こう言うのだった。どのカップルも水の中で身体を寄せ合っている。そのうえでいちやいちやとして明るい笑顔で居るといふ訳なのだ。

「何か」

「凄いな、確かにね」

「あんな風に」

「プールってデートスポットらしいしね」

「えっ、そうなんですか」

「うん、そうらしいよ」

こう月美に話すのだった。やはり横に並んで泳ぎながらだ。

「実際にね」

「プールがですか」

「プールってどういう場所だと思ってたの？西堀は」

「泳ぐ場所じゃ」

実に率直な返答だった。

「それだけだと」

「思ってたんだ」

「それが違うんですね」

「結局どんな場所でもデートスポットになるらしいよ」

これは本で知った知識なのでこうした言葉遣いになっていた。彼にしてもこうしたデートの経験は浅いので今一つ弱いのである。

「二人でいられる場所ならね」

「それならなんですか」

「みたいだね。それで」

「それで？」

「特にプールはね」

そこはだというのだ。

「ほら、水着になるじゃない」

「はい」

「だからとりわけそうなるらしいね」

「それでなんですか」

「若しかしてあいつ等、っていうか椎名だよな」

「愛ちゃんですか」

「そういうことわかっていたのかな、やっぱり」

こう考えたのであった。

「そうしたこと」

「そうですね」

陽太郎の言葉を受けてだ。月美も考える顔で言うのだった。

「それもあるかも知れませんか」

「あいつ切れるからなあ」

「参謀タイプですよ」

「ああ、統率力もあるけれどな」

何気にそうした才能に恵まれているというのだ。

第十一話 プールでその十

「だからな」

「そうですね。かなり」

「あれで何もかも考えているしな」

「はい」

「じゃあそれに乗るか」

「こうしてであった。陽太郎も頷いてだ。

あらためて月美に言うのである。

「これからさ」

「はい、一緒に泳いでいきましょう」

「うん、じゃあな」

こんな話をしてそのうえでジャングルプールの中を泳いでいく。

そうして様々なプールを巡りそこから出た時にはだ。確かにいい時間になっていた。

そして滑り台のところに行くのだ。そこに椎名がいた。赤瀬も一緒だ。

「どうだった？」

「ええ、楽しく過ごせたわ」

月美がにこやかに笑って椎名の問いに応えた。

「とてもね」

「それならいい」

それを聞いて満足した顔で頷く椎名だった。

「それなら」

「そうなの」

「こんな奴でも役に立つ」

陽太郎への言葉だった。

「だからいい」

「そりゃ俺のことかよ」

「そう」

実際に陽太郎にも言う椎名だった。

「オーチンハラショー」

「何でここでロシア語になるんだ？」

「言ってみただけ」

いつもの蒲鉾を逆さまにしたみたいなやぶめになった目での言葉だった。

「気にすることはない」

「相変わらず何考えてて言うかわからない奴だな」

「けれど丁度いい時間だよ」

ここでまた上から赤瀬の声がした。

「それじゃあ後は」

「もう狭山と津島は待ってるから」

「あつ、そうなんだ」

「そう、テーブルのところに行こう」

こう陽太郎と月美に言うてだった。そのうえで店が並んでいる場所に行く。その六人席にはもう狭山と津島が待っていた。席に座ってそこから四人に手を振ってきた。

「よお」

「こつちよ」

「ほら、待ってるよね」

「そうだな」

陽太郎は赤瀬のその言葉に応えた。テーブルの上にはもう弁当が置かれていた。その津島の作ったサンドイッチと月美の作ったお握りがだ。

椎名はそれを見てだ。静かに言うのであった。

「食べよう」

「ああ、じゃあな」

「食べましよう」

陽太郎と月美が彼女に伝えてだった。そうしてだった。

六人で楽しく食べる。そのお握りの味はだ。

「あつ、これ」

「美味しいわよね」

「そうだよな」

狭山と津島、そして陽太郎が最初に声をあげた。

「中に入ってるおかずも色々だしよ」

「海苔も塩加減もいいし」

「ああ、美味しいよこれ」

「美味しいですか？」

作った本人がここで三人に問うた。誰もがそのお握りを手にして食べている。それを見ての問いであった。彼女だけがお握りを食べていない。

「私のお握り」

「ああ、美味しいよこれ」

陽太郎は目を丸くさせていた。

「へえ、中におかかが」

「おかが好きでして」

「こっちはタラコか」

「鮭もあるわね」

狭山が今食べているのはそれで津島はそれだった。

「あと昆布もあるしな」

「それに定番の梅干も」

「麦御飯のお握りも好きですけれど」

月美がここでまた述べた。

「それでも。好き嫌いがあると思ひまして」

「えっ、そのお握りも作れるんだ」

陽太郎はそれを聞いて驚いた顔になった。

第十一話 プールでその十一

「麦でのお握りも」

「はい、そうなんですけれど」

「麦の御飯も美味しい」

椎名は両手にお握りを持ってだ。そのうえで頬張っていた。

「つきぴーはセンスがいい」

「さつき陸上自衛隊より上とか言ってなかったか？」

「上は上」

「けれど素人さんが持ち回りで作っている料理なんてな」

「上のレベルは言っていない」

この辺りはまさに椎名であった。椎名の罨である。

「そう、かなり上」

「他にも色々言っただけでなかったか？」

「まずいと思っていれば美味しくなる」

つまり心理作戦だった。彼女のだ。

「そういうこと」

「そうなのかよ」

「そう、そして」

「野菜の煮付けも美味しいよ」

赤瀬は今はそれを食べていたのだ。

「凄く上品な味付けだね」

「あっ、確かに」

「これもかなり」

狭山と津島も今度はそちらを食べていた。お握り片手にだ。

「人参も椎茸もよく煮られてるしな」

「レンコンとか筍も」

「蒟蒻もあるしな」

「味付け確かに上品だし」

「あつ、本当だ」

陽太郎も箸を出してそれを食べてみる。月美が用意した割り箸を使っている。

口の中にその人参を入れてみるとだ。確かに美味かった。

「あまり醤油の味を強くしていないんだ」

「薄口醤油です」

月美の言葉だ。

「それとみりんと。素材の味を生かせてお母さんに言われまして」

「へえ、それでなんだ」

「どうですか？それで」

「いや、美味しいよ」

陽太郎もまたこう言うのだった。

「本当に」

「そうですね。それは何よりです」

「西堀って本当に料理上手いんだ」

「そうだね。津島さんのもいいけれど」

「ふふふ、そうですね」

津島は赤瀬が自分を作ったサンドイッチを食べるのを見ながら笑顔になっていた。

「私だつて努力してるんだから」

「伊達にケーキ屋の娘じゃないんだな」

「ケーキとパンは元々同じだしね」

「こう狭山にも言う」

「それはマスターしないと」

「ああ、同じか」

「つて何言ってるのよ」

津島はその口を少し尖らせて狭山に返す。

「同じ小麦じゃない」

「そうだよな。生地だつてな」

「似てるなんてものじゃないでしょ。同じなのよ」

「じゃああれかパン屋とケーキ屋が同じなのが多いのも」

「そうよ。同じなのよ」

また言うのであった。

「これでわかったわね」

「そういうことが。ケーキって主食にもなるんだな」

「甘いのを抑えたらね。マリー＝アントワネットじゃないけれど」

「あれ事実じゃないけれどね」

それはこっそりとだが椎名が注意した。

「実は」

「ああ、そうだったの」

「そう。あれは元々中国の話」

「三国志の後だったね」

赤瀬がサンドイッチを食べながら述べてきた。

第十一話 プールでその十二

「そうだったね」

「その通り。実は」

「ううん、それは意外」

「俺ずつとそうだって思ってたけれどな」

「私も」

狭山と津島は驚いた顔で述べる次第だった。もつともその間もサ
ンドイッチにお握りを食べ続けている。食べることは止めていな
った。

「フランスじゃなかったのかよ」

「フランス人言いそうな感じだけどね」

「しかもマリー＝アントワネットは元々フランス人じゃない」

「ああ、オーストリアの人だったよな」

「そう」

こう陽太郎に述べる。

「お母さんはマリア＝テレジア」

「何かどっかで聞いたよな」

「有名な人？私達世界史は専門じゃないからわからないけれど」

二人は公民系なのである。社会と一口に言っても様々な科目があ
るのである。

「漫画で出てなかったか？」

「そうよね」

「女帝エカテリーナ」

椎名はぼつりと述べてみせた。

「その漫画に少しだけ出てる」

「あのロシアの人が」

「そう、ベルサイユのばらを描いた人も漫画」

「じゃあやっぱりゴージャスなんだな」

「服も何もかもがゴージャス」

池田理代子という漫画家の特色である。そこには深い歴史の知識と教養もある。意外なことに男性でも読める少女漫画であるのだ。

「それも味わえる」

「そうか。一回読んでみようかな」

「読んでみるといい」

椎名は陽太郎に薦めもした。

「勉強になる」

「ロシアって寒いイメージがあるけれどな」

「シベリアは暖かい」

さりねがくこんなことも言ってきた。

「そう、ヨシフおじさんも優しい」

「いや、それはないから」

陽太郎は速攻で突っ込み返した。この場合は誰かというと言つまでもなかった。ソ連の独裁者であるヨシフ＝スターリンのことである。

「何でスターリンが優しいんだよ」

「ロマノフの慈悲」

「それも怖い言葉だよな」

「殺される前の言葉ね」

歴史が専門ではない狭山と津島も直感で感じたことである。

「何で怖いんだよ」

「そんなに」

「後は寛容なソ連、雷帝の涙、そして」

「そして？」

「プーチンの微笑み」

最後はこれだった。

「そういう言葉がある」

「どれも反語だね」

赤瀬はその言葉を聞きながら今はハンバーグサンドを食べている。

「見事なまでに」

「ロシアの歴史は楽しい」

椎名はどんどん黒くなっていく。そのオーラがだ。

「何かあるとすぐに大粛清があるから」

「どのレベルの粛清なんだよ」

「信長の一向一揆征伐や比叡山が些細なこおてになるレベル」

「それがすぐに起こるのかよ」

「そう」

こう陽太郎に答えるのである。サンドイッチを食べ続けながら。しかもよく見てみるとその食べる速さが尋常なものではなかった。

「すぐに」

「滅茶苦茶怖いだろう、それってよ」

「けれど毀誉褒貶が凄くて楽しい」

「中にいる人達はたまったものじゃねえな」

「けれどロシアでは」

その黒いロシア論が続く。

「そういう人が英雄として尊ばれる」

「イワン雷帝がか？」

「他にはピョートル大帝にその女帝エカテリーナ」

「じゃあ女帝も怖い人なんだな」

「歴史を見ればわかる」

それが答えなのだというのだ。

第十一話 プールでその十三

「それでわかる」

「そうか」

「それ位した方が頼もしいと思われる」

「じゃああの怖い首相もかよ」

「ウラジミールおじさんも？」

「そう」

まさにそうだと狭山と津島にも答える。

「それがロシア」

「凄い国なんだね」

赤瀬は今はお握りを食べながらだ。ぽつりと述べた。

「本当に」

「音楽や文学もいい」

「あつ、そうですね」

それには月美が応えてきた。

「ロシア文学はかなり」

「つきぴーも知ってるのね」

「ええ、読んだことがあるわ」

「何を読んだの？」

「戦争と平和を」

それをだど。椎名に対して答えるのだった。

「読んだけれど」

「トルストイだよな」

「そうよね」

狭山と津島がその本の題名を聞いて話す。今は狭山は林檎を、津島はオレンジをそれぞれ食べている。どちらも津島が持って来たデザートである。

「その代表作だよな」

「かなりの大作よね」

「どう、それで」

「凄かったわ」

こう椎名の問いに答える月美だった。その優しい目が輝いている。

「とてもね」

「そうなの。そんなに」

「トルストイの他にも読みたくなっただし」

「ドストエフスキーとか？」

「それよりもプーシキンかしら」

ロシア文学をはじめたと言っていい偉大な詩人だ。ロシアにおいては詩聖とまで言われている。そこまで高名な詩人がプーシキンなのである。

「その人のを読んでみようって思ってるけれど」

「いいことね」

「いいことなの」

「ええ。ただし」

「ただし？」

「気をつけることがあるわ」

こう月美に言うのであった。

「プーシキンには」

「何かあるの？」

「オペラだと全く違う」

「そんなに違うの」

「別物」

オペラの話を出してきたのである。椎名はさらにその言葉を続ける。言葉を出しながらである。そのうえで今はバナナを食べていた。サンドイッチもお握りも野菜もである。全て綺麗になくなっていった。皆で食べてしまったのである。

「チャイコフスキーのだけれど」

「わかったわ、別なのね」

「チャイコフスキーは悪趣味だったから」

椎名は意外なことを言った。少なくとも陽太郎にはそう思えるものだった。

それでだ。彼もつい聞いたのだった。

「チャイコフスキーってそういう人だったわけ」

「ホモだった」

恐ろしい事実が今語られた。

「女の人には冷たくていじめる趣味があった」

「実際にいじめてたら最悪だな」

「少なくとも作品の中ではそうだった」

とりあえず現実でどうだったかはわからないというのである。

「原作でそうでなくても自分のオペラでは不幸にさせる」

「確かに悪趣味だね」

赤瀬はネーブルを食べている。そうしながらの言葉だった。

「それって」

「そう、あの作曲家はそうした趣味があったから」

「それでそこはか」

「そう、ゲイだったし」

またチャイコフスキーの嗜好について述べるのであった。

第十一話 プールでその十四

「だから結果として」

「そうか。しかし意外だな」

陽太郎は椎名の話の話を聞いてだ。腕を組んで述べた。

「チャイコフスキーってホモだったんだな」

「それを咎められて殺されたって説もあるから」

「そうした話もあるのか」

「そう、それで」

「オスカー・ワイルドもそれで捕まったしね」

また赤瀬が言ってきた。

「昔のヨーロッパはそうだったよね」

「同性愛は御法度だったから」

「そこが日本と違いますよね」

月美は日本の話をしてきた。

「それは」

「ああ、織田信長とかな」

「武田信玄も上杉謙信もよね」

狭山と津島が戦国大名の代表的な三人を話に出してきた。

「あと平安時代も普通だったよね」

「江戸時代でも」

「日本ではそれで捕まった人も死刑になった人もいない」

椎名はこの事実を指摘した。実はそうなのである。

「今でも」

「だよな。っていうか捕まることでもないだろ、それって」

陽太郎は腕を組んだまま述べた。

「俺はそっちの趣味はないけれどな」

「だといいいけれど」

「女の子だけだよ」

これは確かに言うのだった。

「それはな」

そんな話をしてからまた少しプールで遊んでだ。三時頃にプールを出た。六人共満足した顔でそこを出てだ。駅に向かったのだった。

「じゃあな」

「これでね」

まずは狭山と津島が笑顔で別れた。四人に手を振って彼等の電車に乗る。

そして椎名もだ。まず赤瀬に声をかけたのである。

「赤瀬」

「うん」

赤瀬は彼女の言葉に応えてだ。そうして言うのだった。

「それじゃあね」

「行こう」

椎名から言っただ。そのうえで二人も二人の電車に向かった。その時にだ。最後に残った陽太郎と椎名の方を振り向いた。口元が微かだが綻んでいるように見えた。その顔での言葉だった。

「じゃあ」

「あ、ああ」

「また学校でね」

「後はごゆっくり」

今度はあからさまだった。顔が微笑んでいた。

その顔を見せてだ。赤瀬と共に姿を消した。そうしてであった。

陽太郎は二人きりになるとだ。それでだ。

月美に声をかける。それから。

「あのさ」

「はい」

「ええと、これからだけれど」

「どうします？」

「何かプールで一杯泳いだし」

自分でもわかった。言葉がたどたどしくなっていることがだ。だがそれでも言わずにはいられなかった。それが今の彼の置かれた状況だった。

「疲れたけれど」

「それでもまだ時間がありますよね」

「何処に行く？」

陽太郎はこう月美に言った。

「それじゃあ」

「何処ですか」

「西堀の好きな場所でもいいからさ」

陽太郎は温かい顔で述べた。

「どうかな、それで」

「そうですね。それじゃあ」

「うん、じゃあ」

「本屋行きますか？」

にこりと笑っての言葉だった。

第十一話 プールでその十五

「そこに」

「本屋なんだ」

「いつもですけれど」

「ここでこんなことも言う月美だった。」

「それは」

「じゃあ本屋にする？」

あえてそのいつもという言葉には何も言わずにだ。そのうえでにこりと笑っての言葉だった。陽太郎はその顔で月美を見て言ったのである。

「それじゃあさ」

「はい、それじゃあここからですね」

「あつ、いい本屋知ってるんだ」

「はい、ここから少し歩いたところです」

右手を指差しての言葉だった。

「そこにあります」

「ああ、この近くだったんだ」

「そうなんです。色々な本が置いてある五階建てのお店です」

「あれ、しかもビルなんだ」

「はい、じゃあそこでいいですね」

「うん、じゃあ」

こうしてだった。話を決めてだ。そのうえで今度は二人だけでその本屋で楽しんだのである。その頃星華達はどうしていたかということである。

州脇達と一緒にだった。それであのアーケード街で楽しい時間を過ごしてだ。そのうえで満足した顔で帰りの駅にいたのである。

その駅でだ。四人で楽しく話をしていた。

「どうだった？アーケード街」

「うん、よかったね」

「そうよね」

「とてもね」

こう言っただけであった。それぞれの手に持っているハンバーガーやブローチ等を見せ合ってた。そのうえで話をするのであった。

「あそこのお蕎麦美味しかったよね」

「ええ」

星華は橋口の笑顔に満面の笑顔で応えていた。

「私もお蕎麦好きだけれどね」

「星華ちゃん和食好きだしね」

「お蕎麦もなのね」

州脇と野上がここで話す。二人もブローチやアクセサリーをそれぞれ持っている。

「丁度よかったよね」

「確かにあれも美味しいし」

「デザートもね」

「そうよね」

ここで星華も三人の言葉に頷いたのだった。

「あの白玉あんみつ美味しかったわね」

「和食尽くしもいいわよね」

「案外ね」

「また行くっ」

「そうね」

そんなことを話してだった。四人で明るい顔になっていた。その顔はまさに女子高生のものであった。その笑顔で話をしていく。

その四人の前を電車が通り過ぎた。向かい側の線路である。星華はその電車をふと見た。するとその中の扉のところ立っていたのは。

「あれ？」

「どうしたの？」

「何かあったの？」
「今の電車にだけけれど」
一瞬だが確かに見た。それで言ったのである。
「西堀がいたわ」
「西堀？」
「あいつがいたの」
「それも誰かと一緒だったわ」
「それも見たのである。」
「あれは」
「あのおチビ？」
「三組のクラス委員の」
「あいつ？」
「違ったわ」
月美は確かに見えた。しかしもう一人は、なのだった。
「あれはね」
「じゃあ誰？」
「誰だったの？わかったの？」
「ええと、あれは」
確かに誰かを見た。しかしであった。
「男だったみたいだけれど」
「男？」
「男？」
「男なの」
「けれど誰だったかわからなかったわ」
それはどうしてもであった。わからなかったのである。

第十一話 プールでその十六

「ちよつとね」

「そうなの」

「誰かはなの」

「そういえばあいつ誰かと付き合ってたっけ」

既に電車は通り過ぎた。それでもまだ目に残っている残像を思いながらだ。そのうえで三人に対してその眉を少し顰めさせて言うのだった。

「そうだったかしら」

「初耳だけれど、それって」

「そうよね」

「あいつが誰かと付き合ってるって」

三人もだ。それを聞いて眉を顰めさせるのだった。

「そんなのあつた？」

「あつたっけ」

「ないよね」

「けれど確かに男だったわ」

それを思い出しての言葉である。

「あれはね」

「ううん、話がわからないっていうか」

「誰なんだろうね」

「男だとしても」

「あいつ男に媚びてるし」

これは完全に誤解だった。だがそれは星華、そして他の三人にとつてはである。その中で事実として定着してしまっていることだった。

「誰か騙したんなら有り得るわね」

「それで援助交際とか？」

「そういうことしそうよね」

「そうよね、あいつはね」

「有り得るわよね」

その誤解のまま話すのだった。

「そんな奴だし」

「騙されてる男も馬鹿だけれど」

「けれど騙してるのなら問題よね」

「何企んでるのかしら」

「何か余計に腹が立ってきたわ」

星華は眉を顰めさせて言った。

「ちよつと家がお金持ちで頭がいいからってね」

「そうよね、顔もいいし」

「胸だつて大きいし」

「それで男騙すなんてね」

「見てなさいよ」

星華はむつとした顔で述べた。

「懲らしめてやるんだから」

「そうよね、クラス委員の仕事もしないし」

「それで融通も利かないし」

「実質何もしないしね」

「それで男たぶらかして」

「見てなさいよ」

星華も三人も誤解したまま月美への反感を高めていく。だがそれがどうした結果になるかは。彼女達も全くわかっていなかったのだ。

2
0
1
0
·
5
·
2
2
2

第十二話 夏に入りその一

第十二話 夏に入り

夏休みに入った。その中でだ。

星華は自分の家で朝御飯を食べながら妹の星子の話を聞いていた。

「もうずっとなのよね」

「夏期講習ね」

「休みなしよ」

むくれた顔で姉に話す。その手にはお箸と茶碗がある。

「殆ど毎日なのよ」

「まあそうでしょうね」

それを聞いても当然といった様子で返す星華だった。

「それもね」

「何かわかつているみたい言葉だけれど」

「当たり前でしょ。受験生じゃない」

「だからなのね」

「そう、だからよ」

「こつ返す星華だった。

「受験生だったらやつぱりね」

「夏期講習ばかりになるのね」

「それが当然よ。けれど土日休みじゃない」

「まあそれはね」

そのことについてはそのまま頷く星子だった。

「それはそうだけれど」

「じゃあいいじゃない。ってどうか」

「ってどうか？」

「部活がそれに代わっただけじゃない」

「さばさばとした口調での言葉だった。

「そうじゃない。ただ」

「そうなるの？」

「そうなるの。だってあんた二年の時までずっとバスケット部で夏は潰れてたじゃない」

「ううん、そう考えればいいのね」

「そうよ。そのままよ」

あっけらかんとした言葉だった。

「そう考えればいいのよ」

「そうね。じゃあそう考えるわ」

星子も姉の言葉に納得した顔になった。

「そういうことでね。ただ」

「ただ？」

「今頑張ったらそれが後に生きるってね。これは先生の言葉だけ」

「それ夏休み前にも実際に言われたわよ」

必ず言われる言葉だった。これはどの学校でも大体同じである。

そしてだ。さらに話をする二人であった。

「何度もね」

「そうでしょ。じゃあここは頑張ったらね」

「八条高校に受かる為には」

「そう、頑張つてね」

「わかったわよ。それじゃあこれからだけれど」

「うん、塾に行つて来るわ」

納得した顔で頷く星子だった。そうしてであった。

そのうえでだ。今度は彼女から姉に尋ねてきた。

「それでお姉はあれよね。これから」

「そう、部活よ」

完全に元に戻っていた。中学二年までにである。

「これから部活行つて来るわ」

「何か同じよね、それって」

「そういうことよ。夏休みは有意義に使わないとね」

「有意義にねえ」

「ダイエットになるしいいじゃない」

星華も割り切っていた。

「それじゃあだけれど」

「行つてらっしゃい」

「八条高校はあれよ。スポーツも五月蠅いからね」

「女子バスケ部ねえ」

「あんたも入るんでしょ？」

星華はおかずの玉子焼きを食べながらだ。また話してきた。

「女子バスケ部に」

「そのつもりだけれど」

「それじゃあ今は余計にね」

「部活ね」

「そうよ、頑張りなさい」

それをといたった。

第十二話 夏に入りその二

「わかったわね」

「頑張るわよ。未来の為に」

そんな話をしてからそのうえで部活に向かう。夏の学校は校舎の中からは人の気配がしない。しかしそれでもだ。体育館の中は別であった。

中に入るともうだ。部員達が集まっていた。

「おはよう」

「おはよう」

こう挨拶をし合ってた。そのうえでだ。

部室の中で着替えてだ。そのうえで部活に入る。まずは外に出てランニングであった。

そのランニングの中でだ。星華は部員達と話をしていた。その内容。

「ねえ、これ終わったらね」

「そうね」

「何処行く？」

そんな話をしてた。女子高生らしい話だった。

「それからだけれど」

「何処に行こうかしら」

「そうね。ここはね」

星華がここで言った。

「マクド行かない？」

「ああ、マクドね」

「いいわね、そこで」

マクドナルドでいいというのだった。話はそれで決まった。

「それじゃあ後でね」

「行きましょう」

こんな話をしながら走っていた。そこにだ。
先輩の一人が来てだ。そっと注意してきた。
「お喋りもいいけれど」

「あつ、すいません」

「失礼しました」

「走ることに気を払ってね」

「こう注意してきたのである。」

「今はね」

「わかりました」

「それじゃあ」

「特に足元に注意しないと」

走っているその足元というのであった。

「危ないわよ」

「足元ですか」

「スポーツ選手は足が命よ」

先輩は自分の足をちらりと見てから述べてきた。

「とりわけね」

「歯だけじゃないんですね」

「足もなんですね」

「そう、足もよ」

古いCMの懐かしい言葉を使ったジョークに合わせながらの言葉
だった。

「足もだからね」

「だから余計に注意ですか」

「こけたりして怪我しないように」

「石につまづいてくねることだってあるから」

「そうした場合もあるというのだ。」

「だからね」

「それでなんですね」

「走ってる時は」

「とにかく練習中は気を抜かないことね」
要するにと。そうした口調だった。

「怪我したら馬鹿馬鹿しいわよ」

「わかりました」

「それじゃあ」

「さあ、じゃあ気合入れなおして走るわよ」

しっかりとした声で星華達に対して言ってきた。

「わかったわね」

「はい、わかりました」

「じゃあ。今からまた」

「はい、掛け声」

その掛け声も出させてだ。先輩は星華達を走らせた。夏の炎天下なのでそれぞれ帽子を被っていてその爽やかな中だ。彼女達は走っていた。

ランニングの後は筋力トレーニングにダッシュだった。そして反復横跳びもする。

それが終わって少し休憩になった。星華は水筒の中のスポーツドリンクを水筒のストローで飲みながらだ。そのうえで仲間達と話していた。

「あつついわねえ」

「本当にね」

「見事なまでにね」

「暑い暑い」

皆も星華のその言葉に応える。言いながらそれぞれ座ったり壁にもたれかかったりしてである。そのうえで休憩に入っているのである。

「もうこの暑さってねえ」

「うんざりするし」

「外には蝉の音」

それが嫌になるまで響いていた。学園中にだ。

第十二話 夏に入りその三

「日差しが余計にね」

「もう何もかもが暑い要素を醸し出していて」
「全く」

そんな話をしながらだった。星華はスポーツドリンクを飲んでいく。その時に仲間の一人が彼女を含めた皆にあるものを差し出してきた。

「はい、これ」

「あつ、レモンじゃない」

「マナージャーから？」

「そうよ、マナージャーからの差し入れよ」
まさにそれだというのである。

「これ食べてね。皆一個ずつね」

「いいわね、それも」

「レモン食べると疲れ取れるしね」

「爽やかになるし」

だからだというのだった。確かにレモンは疲れにいいものだ。

「それじゃあ今からね」

「一個ずつ食べて」

「また練習再開なのね」

「そうよ。水分とエネルギーの補給は忘れないことよ」

白いティーシャツと赤いジャージの妙齢の美女が来た。茶色の波がかかった長い髪を後ろで束ねている。その彼女が星華達に言ってきた。

「さもないと倒れるわよ」

「そのうえで汗をかけたことですね」

「エネルギー補給をしながら」

「そういうこと。水分やエネルギーをよく採って」

そしてであった。

「そのうえでよく動く。いいわね」

「わかりました」

「そして汗をかけたことね」

「そうよ。汗をね」

まさにその通りだというのだった。

「汗をかきなさい、たっぷりとね」

「熱中症や日射病にならないようにですね」

「それに気をつけてですか」

「そういうことよ。わかったわね」

コーチはまた星華達に言ってきた。

「そういうことよ」

「それじゃあ御言葉に甘えまして」

「レモン頂きます」

「一個ずつ」

「あと水分も忘れないでね」

コーチはこのことを言うのも忘れなかった。

「それもね」

「わかりました」

星華はストローから口を離して答えた。

「じゃあそれも」

「そういうことよ。あとはね」

先生はさらに言ってきた。

「顔を洗って気分もすっきりさせなさい。それでまた練習よ」

「はい」

「それじゃあ」

彼女達は激しい中にも爽やかな部活を楽しんでいた。そして彼女達がいる体育館の側の道場ではだ。剣道部員達が汗をかいていた。

「よし、練習止め」

部長の声が響く。

「少し休憩にするぞ」

「わかりました」

皆それに応えてだった。それぞれの場所に正座してそのうえで面を取る。その瞬間に誰もがほっとしたような顔になる。汗だらけの顔でだ。

「ふう」

「終わったなあ」

「面つけての稽古はな」

「そうだよな」

こつ口々に言うのだった。

そして中にはだ。自分の喉を押さえて言う部員もいた。

「しかし。突きはな」

「ああ、効くな」

「話は聞いていたけれどな」

「外れるとやばいしな」

「だよな。喉だしな」

「やばいやばい」

剣道の突きの話だった。その練習もしたのだ。

第十二話 夏に入りその四

そしてその中でだ。部員の一人がこんな話をしてきた。

「何か中学校で突きする学校もあるってな」

「いや、それないだろ」

「禁止されてるだろ」

「いや、生徒の間ではしなくてもだ」

それでもだというのだ。その生徒は話していく。

「顧問の先生がするんだってよ」

「顧問の？」

「先生が？」

「ああ、生徒にな」

こつ眉を顰めさせて言うのだった。

「するらしいぜ」

「おい、練習のメニューにないのか？」

「しかも禁止されてる技をか？」

「先生がするのかよ」

「何だよ、それって」

皆それを聞いて一斉に顔を顰めさせた。

「しかも中学生に突きってな」

「まずいだろ」

「待ってくれるか」

ここで話を聞いた顧問の先生も来た。

「それは本当の話なんだろうな」

「はい、間違いありません」

この話をはじめた一年生、陽太郎の同期もその白髪の先生に答える。

「実際にこの目で見ましたし」

「そうか。本当なんだな」

「しかもそれだけじゃないんですよ」

彼は先生にさらに話す。

「他にも兎跳びやらせたり受身知らない生徒相手に床で背負い投げしたり」

「信じられないな」

先生も啞然としていた。

「そこまでするか」

「そういう先生だったんですけれど」

「その教師の名前教えてくれるか」

先生は真顔で彼に問うてきた。

「よかつたらな」

「ええ。何でしたら担当の教科もどの中学校かも」

「御前の中学校だな」

「はい、そうです」

まさにそうだとこのうだった。

「俺それを見て中学校では剣道は道場でしていました」

「ああ、それがいいよ」

「正解だったな」

周りは彼のその判断とよしとした。

「そんな奴が顧問の部活なんてな」

「碌なものじゃないからな」

「実際に学校でも指折りの嫌われ者もいたしな」

「それでもあつたというのだ。」

「何か碌な顧問じゃない部には碌な奴が集まらなかったな」

「それは当たり前だ」

先生はそれは当然だというのだった。

「それはな」

「当然なんですか」

「類は友を呼ぶ」

まずはこの言葉からだった。

「そして糞には糞蠅がたかるものだ」

「だからなんですか」

「碌でもない人間は集まるものだ」

つまりその蠅が集まるといっているのである。

「そうした部活には入らなくて正解だった」

「じゃあ道場で剣道をしていたのは」

「正解だな、先生もそう思う」

「そうですか」

「そうだ、正解だ」

まさにそうだというのだった。

「しかし。そんな奴が剣道をやっているか」

「確か四段です」

「段の問題ではない」

先生の言葉は厳しいものになる。

「それでその顧問のことを教えてくれるか」

「はい、俺の通っていた中学校で」

「それで」

話を聞いていく。彼は先生にその教師のことを全て話した。それを聞いた誰もが啞然としてだ。そのうえで怒りを露わにして言うのであった。

第十二話 夏に入りその五

「日本にそんな奴がいるなんてな」

「そいつ北朝鮮の強制収容所にもいるのか？」

「収容所かよ」

「その衛兵か何かじゃないのか？」

「こつまで言う生徒もいた。その生徒の声は呆れ返っていたものだった。」

「こつまで無法な奴が日本にいるなんてな」

「ああ、ちよつとな」

「有り得ないな」

「教師には変な奴もいる」

顧問の先生自身の言葉である。

「中にはそんな人間もだ」

「いるんですか」

「そういうことですか」

「そつだ、残念ながらいる」

こつ陽太郎達に話すのだった。

「武道をやる資格のない人間がな。しかし」

「しかし？」

「つていいますと」

「こつまで非道な奴ははじめて聞いた」

この先生ですらというのだった。

「教育委員会はそういう奴を野放しにする世界だがな」

「この高校にはそんなのいませんよね」

「普通の世界なら即刻クビだ」

先生は彼の言葉に答えながら実際に右手で自分の首を切る動作を試みせた。

「この学校でもだ」

「普通の世界ならですか」

「教師の世界は普通じゃないんだ」

俗に言われていることである。教師の世界というものは実際に閉鎖的でありしかも特定のイデオロギーに支配されていたりもする。おまけに日教組という存在がである。その世界をさらに歪にさせてしまっているのである。

「それもかなりな」

「かなりですか」

「この学校はまずそうした教師を淘汰するんだ」

そうした学校だというのだ。

「だからだ。そんな教師はだ」

「いませんよね」

「そうだ、いない」

はつきりとした断定の言葉だった。

「だから安心してくれ、このことはな」

「わかりました」

「愛の鞭も必要だ」

先生もそれは否定しない。

「しかし。暴力や虐待は駄目だ」

「あいつのやってたことは虐待だったんですね」

「生徒に恐れられて得意になっていたんだな」

「はい、そうです」

彼はまた答えた。

「自分の前に来てがたがたしているのを楽しんでましたから」

「なら今度はあいつががたがたする番だ」

先生は完全に怒っていた。目が本気だった。

「すぐにあらゆる場所に連絡してだ。先生が完全に抹殺してやる」

「抹殺ですか」

「そいつは懲戒免職だ。剣道界からも永久追放だ」

そこまで至るといっているのである。

「そうしてやる。そんな奴は剣道をしてはならない」

「絶対にですか」

「絶対だ。いいか」

そして今度は自分の生徒達に言うのだった。

「そんな人間にはなるな」

「その暴力教師みたいなですよね」

「そんな奴には」

「そうだ、なるな」

先生の言葉は強いものだった。

「絶対にだ」

「はい、それはわかってますよ」

「だってねえ。そんなことしたら」

「最低ですよね」

「そうだ、まさに最低だ」

先生はさらに言う。

「人を暴力で従わせ悦に入っている様な奴はだ」

「最低ですからね」

「そんなことをしたら」

「皆わかってるようだな」

先生は彼等のそうした言葉を聞いて安心した顔で頷いた。そうしてであった。

第十二話 夏に入りその六

「それならいい」

「だつてねえ。普通の人間はしませんよ」

「そうですよ、普通は」

「そんなことはね」

「そつだ。絶対にしてはいけない」

そしてだ。先生はこのことも言うのだった。

「いじめもだ」

「いじめもですよ」

「やっぱり」

「武道をやるかやらないか以前だ」

最早そつした問題ではないといつのであつた。

「それはな」

「いじめつてやっぱり最低ですよ」

「それも」

「自分より腕力が弱い人間をさらにいじめて何だといつのだ」

先生はその顔を思いきり曇らせていた。そしてさらに言つてだ。

「その弱いといつのは何だ」

「何かつて？」

「腕力じゃないんですか」

「腕力の強い齡は本当の強さではない」

それはだといつのである。先生の話はかなり教育的なものになつていた。やはり教育者だけはあるだ。そつしたものになつてゐるのだつた。

「それはだ」

「じゃあ一体」

「本当の強さつてのは」

「心だ」

それだというのである。

「心こそが大事なのだ」

「心ですか」

「それがですか」

「何故いじめをするかだ」

その教育者としての言葉である。

「何故かだ」

「心が弱いからですか」

「それで」

「だからするっていうんですね」

「そうだ、その通りだ」

こう己の部員達に対して話す。

「先程のその暴力教師もだ」

「心が弱いんですか、つまりは」

「そういうことなんです」

「おそらく碌な生き方をしていない」

そのことまでもだ。ばつさりと切り捨ててみせる。先生は極めて厳しかった。今はとりわけそうでありそのまま話を続けるのであった。

「ヤクザか何かの様な生き方をしていたのだろう」

「何か学生時代は不良だったそうですね」

「それも碌な不良ではなかったな」

先生は先程の部員の話をさらに話す。

「後輩を虐待でもしていたんだろう」

「虐待ですか」

「それをしていたんですか」

「生徒にそこまでする奴だ。後輩にも普通にそうしている筈だ」

それを見抜いてだった。そのうえでの言葉だった。

「将来結婚して家庭を持てば家族にもそうするな」

「筋金入りの屑ですね」

それを聞いた部員の一人が述べた。

「奥さんとか子供にもですか」

「ドメスティックバイオレンスですか」

「普通にする筈だ」

先生は何処までも読んでいた。しかしそれでもその顔は晴れない。そのうえでの言葉をさらに続けていくのだった。不愉快なままでの言葉だった。

「そうしたことだ」

「確かに。そういう奴ですしね」

その部員も確かな顔で頷いた。

「自分より立場が弱い奴には徹底的な暴力を振るうような奴でした」

「やはりな。剣道をしていても心の修養はできていなかった」

先生はまたばっさり切り捨てた。

「最も駄目な奴だ」

「最もですか」

「確かにその通りですね」

「いじめですしね、それって」

「誰もそんな暴力教師にはなりたくないな」

先生はここでまた部員達に告げる。

第十二話 夏に入りその七

「醜い奴だな」

「ええ、そう言われますと」

「醜いですね」

「本当に」

「真の醜さはそれだ」

また言う先生だった。

「心が醜い。そうした弱さが最も醜い」

「わかりました」

「絶対にそうなりません」

「この部活ではそれを一番教えていく」

宣言まで出た。

「心を強く打。真の強さをだ」

「はい、わかりました」

「それじゃあ」

こんな話をしてだった。彼等は大切なことを教わった。そしてそれは陽太郎も同じだった。部活の帰りに月美にこのことを話すのだった。

「こんな話してくれただよな」

「とんでもない先生もいますね」

「全くだよ」

月美も話を聞いてその眉を顰めさせていた。

「西堀もそう思うよな」

「武道をやる資格どころか」

先生と全く同じ言葉になっていた。

「生きている資格すらありません」

「そつだよな。それで先生もな」

「通報ですか」

「ああ。絶対にクビにしてやるって言ってるよ」

月美に「このことも話した。」

「絶対に許さないってな。剣道界にもいられないようにしてやるってな」

「物凄く怒っておられますね」

「やっぱりそうなるよな」

「誰もそうなると思います」

月美の言葉もだ。厳しいものになっていた。その声で言うのである。

「そんな人は罰せられるべきです」

「全くだよ。しかしな」

「しかし？」

「そんな人間もいるんだな」

陽太郎も顔を顰めさせて述べる。

「非常識っていうか」

「ですよね」

「屑って呼ぶにも値しないような奴がな」

「武道をしても」

「そんなことをする資格以前の奴が。いるんだな」

「居合は刀を持ちますよね」

月美は自分がしているその居合の話をした。

「真剣を」

「ああ、それはな」

「だから余計にです。心の鍛錬が必要なんです」

「斬るからか」

「剣道でも同じ筈ですが」

「それもだというのだった。陽太郎がしているそれもだ。」

「竹刀でも人を傷つけますよね」

「あれ凶器だしな。だから防具を着けてるしな」

「そんなものを使うから余計に気をつけないといけない筈です」

「しかしそれを知らない奴が剣道とかやると」

「そうなるんですね」

「しかもな。その教師ってな」

話を聞いたそのことをだ。さらに話すのだった。

「生徒を切り捨てたりするらしいからな。部活が強くなる為にさ」

「その為にですか」

「何か顧問をしている部活が強くなったら評価があがるらしくて」

「その為に生徒を切り捨てて、ですか」

「虐待とかしていたらしいんだよ」

「さらに最低ですね」

月美はその怒りをいよいよ強いものにさせた。本気で怒っているのが傍目でもわかる。

「その先生は」

「全くだよ。それにしても」

「はい？」

「そうはならないようにしないとな」

反面教師にするというのである。教師は教師でも反面教師だ。残念ながら我が国の教師にはそうした意味で見事な教師が多いようであるが。

「絶対にな」

「大丈夫ですよ」

ここでこう言う月美だった。

第十二話 夏に入りその八

「斉宮君は」

「大丈夫かな」

「はい。大丈夫です」

また言うのだった。

「絶対に」

「そうはならないってこと？」

「だって。優しいですししっかりわかっていますしだからだというのである。」

「ですから。そんなことは」

「だといいいけれどね」

「本当に大丈夫ですよ、斉宮君は」

さらに言うのであった。真剣な顔になってだ。

「そんな人には絶対になりません」

「けれどな。人って変わるからな」

「変わりますけれど。それでも」

「それでも？」

「斉宮君はなりません」

絶対にだという。そうした響きの言葉だった。

「私が断言します」

「有り難う。じゃあ絶対にそうならないようにね」

「心掛けるんですね」

「そうするよ。それでだ」

「はい、それで」

「今日は何処に行く？」

話を変えてきた。下校中のデートの話にだ。

「今日はさ。一体何処に」

「何処にですか」

「何処でも好きな場所でもいいけれど。西堀は何処がいいかな」

「そうですね。それだったら」

「うん」

「本屋さん、いえ百貨店に行きませんか？」

「こう提案するのだった。」

「百貨店に」

「八条百貨店か」

「あそこでどうでしょうか」

「また話す月美だった。」

「そこで」

「そうだな。それだったら」

「月美の言葉を聞いてだった。そのうえでの言葉は。」

「そこにしようか」

「はい、じゃあそこで」

「確か今何かフェアやってたよな」

「フェアですか」

「何だったかな。何処かの名物料理の」

「防具を担いだままで腕を組んでだ。そのうえでの言葉であった。」

「何かそういうフェアだったかな」

「何でしょうか」

「それがわからないし。それを確かめる為にも行こうか」

「そうですね。それじゃあ」

「こんな話をしてだ。二人はその八条百貨店に向かった。その入り口に入るとであった。入り口の案内のコーナーに東北フェアと書いてある看板があった。」

「それが行われている階も書いてあった。そこは。」

「七階かあ」

「それで東北ですか」

「東北っていつたらきりたんぼかな」

「秋田ですね」

「それと林檎」

「青森ですね」

次々に答えを返す月美だった。

「美味しいもの多いですよね」

「山形はさくらんぼで仙台はタン塩で」

「本当に美味しいものばかりで」

「ホヤもあつたかな」

この一見すると変わった食べ物も話に出たのだった。

「あれも東北だったよな」

「はい、そうです」

「本当に美味しいもの多いな」

陽太郎はここでも腕を組んだ。尚防具は百貨店の近くにあるコインロッカーに入れている。流石に担いだまま人の多い百貨店の中は無理だった。

「東北って」

「何を食べられますか？」

「まずは七階に行くか」

とりあえず今は決められないのだった。

第十二話 夏に入りその九

「それから決めるか」

「そうしますか」

「そうしよう。それじゃあさ」

「はい、それじゃあ」

「行こうか、エレベーターでも使って」

こうして二人はそのエレベーターに乗りだ。七階に来た。するとそこはとりわけごった返しており様々な店が並んでいた。そこに入ったのである。

そして二人が最初に見たのはだ。そばだった。

「ええと、わんこそばか」

「盛岡ですね」

「へえ、話には聞いてたけれど」

陽太郎はその筆で大きな木の板に書かれた太い文字を見ながら述べた。

「実際には」

「はじめてですか」

「見るのもね」

こう月美に答える。

「はじめてなんだよな」

「それじゃあ一度食べてみますか？」

陽太郎に笑って提案してきた。

「わんこそば。どうですか？」

「食べてみますかってことは」

「はい、私もです」

月美はもうその目をだ。きらきらとさせていた。そのうえでの言葉だった。

「それでどうですか？」

「そういえば西堀っておそばは」
「大好きですし」

あのアーケードの時のだ。その時のことを思い出しての話になっていた。

「それにですね」

「それに？」

「おそばって身体にいいんですよ」

こんなことも話すのだった。

「カロリーも少なく栄養もあって」

「ああ、それはよく言われるよな」

「だから幾らでも食べていいですし」

何故かこうした方向にも話をやるのだった。これはいささか以上に自己弁護というか言い逃れ、そうした類のものになってもいた。

「ですから。どうですか？」

「そうだよな。丁度部活の後で」

「お腹も空いていますし」

「お金もあるしね」

「最高の条件ですよな」

「うん、確かにそうだよな」

笑顔で頷く陽太郎だった。まさに天佑とも言えるものだった。

「それはな」

「はい、それじゃあ」

「行こうか」

「わんこそばですよな」

「ええと、消費税は別にして千五百円か」

値段も見る。見ればそうはつきりと書いてあった。

「こんなものかな」

「バイキングと思えば元は取れますよね」

「ああ、充分にな」

「じゃあ」

こう話してであった。そのうえで店の中に入る。簡単に、組み立てて作ったと思われるそのお店の中にはもう客が優に十人はいた。店の規模を考えれば繁盛していると言えた。

その店の中の二人掛けの席に座ってだった。そばを注文する。それからだった。

「じゃあ。わんこそばって」

「実は私も食べるのはじめてでして」

「ああ、そうだったんだ」

「実はそうなんです」

陽太郎の向かい側に座りながらの言葉だった。

「お話には聞いてましたけれど」

「けれどどういふものは知ってるんだよな」

「斉宮君もそれは」

「ああ、知ってるよ」

それはだというのだ。

「ちゃんとな」

「どんどん来ますからね」

「はい、どんどんですね」

「じゃあ。そろそろはじまるし」

「食べましょう」

こう話しているとだった。すぐに来た。そうして戦闘開始となった。

第十二話 夏に入りその十

「はい、どんどん」

「はい、頑張つて」

「はい、もう一丁」

小さなお椀から二人が持っているお椀にそばがどんどん運ばれてくる。二人はそれを次々と、飲むように食べていく。やがてそれが

十杯、二十杯となりだ。瞬く間に五十杯となった。

だが二人の勢いは止まらない。そうしてだった。

「はい、どんどん」

「はい、頑張つて」

「はい、もう一杯」

食べると次から次だった。そうするとだ。

あつという間に七十杯を超え八十になりだ。九十も越えた。

「へえ、あの二人」

「女の子もな」

「かなり食べるよな」

「ああ、あのままだとな」

「いくよな」

周りの客達がそんな話をはじめたその時だった。

遂に二人共百杯を超えた。ここぞだ。

「あの」

「終わりですか？」

「はい、私は」

月美はだ。ここで箸を置いたのであった。

「有り難うございました」

「はい、じゃあこちらのお兄さんは」

「まだいけます」

陽太郎はこう返す。そうしてだった。

百十杯を越えた。百二十もだ。しかしだ。

これで終わりだった。流石にだ。

「ふう」

「終わりですね」

「有り難うございました」

満足した顔での言葉だった。

「おかげで」

「はい、それにしても御二人共」

「はい？」

「何ですか？」

「凄いですね、高校生ですよ」

お店の人はにこりと笑ってだ。こう二人に言うのである。

「御二人共百杯なんて」

「美味しかったですから」

「おそば好きなんで」

「いや、お見事ですよ」

お店の人はだ。そんな二人を褒め称えていた。まさに店員冥利に
尽きるといったようなだ。そんな顔と声で二人に話すのである。

「本当に」

「はあ」

「そうなのですか」

「それじゃあこれに」

そしてだ。木の手形が出されてきた。

「御名前と食べた杯数を書いて下さいね」

「ああ、ここに書くんですか」

「手形に」

「わんこそばはそうなんですよ」

このことを二人に説明するのだった。

「こうして書きますから」

「わかりました。じゃあ」

「杯数を今から」

二人で数える。そうするとだった。

二人共かなりの数だった。やはりと言うべきものだった。

まず月美がだ。己の横に重ねられて置かれている杯の数を数えて言った。

「百五杯です」

「俺は」

そして陽太郎はだ。数えるとだ。

「百二十七杯です」

「すげえ」

「百二十七杯に百五杯か」

「壮絶だな」

客達も啞然となる。そうしてだ。

それからであった。賞賛の言葉も述べた。

「いや、見事」

「それだけ食うなんてな」

「将来有望じゃないのか？」

「二人共な」

陽太郎だけでなくだ。月美もだというのである。

第十二話 夏に入りその十一

「あの女の子もな」

「美人だしな」

「ああ、かなりな」

「アイドルじゃないのか？」

「あの、私は」

自分への賞賛の言葉を聞いてだ。月美はその顔を真っ赤にさせてしまった。かなり食べたので体温が上気しだしている時にそれであった。

「そんな」

「あれっ、照れちゃったよ」

「恥ずかしがり屋みたいだな」

「そうみたいだな」

ここで彼等もこのことに気付いたのだった。

「こりゃ悪いことしたかな」

「黙るか、じゃあ」

「そうね」

「あのさ」

そしてだ。陽太郎がここで月美に言うのであった。

「次はさ」

「あっ、次のお店ですね」

「何処行く？」

「こう尋ねたのだった。」

「何処に行く？それで」

「はい、それじゃあ次は」

「俺は何処でもいいからさ」

陽太郎は月美の好きな場所がいいというのであった。ここは彼女の好きな場所に行ってもらって自分はそれに合わせるというのである。

る。

「西堀の好きな場所にしたらいいよ」

「私のですか」

「うん。それで何処に行く？」

これをまた問う。

「次は」

「それではですね」

「うん、それじゃあ」

「林檎ですね」

にこりと笑って言った言葉だった。

「ですからここは」

「青森か」

「そこでどうですか？」

青森はどうかというのである。

「青森の」

「青森の林檎かあ。何かあるかな」

「林檎のお菓子って多いから楽しみなんです」

どうやら月美は林檎が好きらしい。それが表情にも出ていた。に

こりと笑ってそのうえでだ。こう陽太郎に対して提案したのである。

「それでなんですけれど」

「じゃあそこにしようか」

「はい、じゃあそこに」

そうしてであった。二人でお勘定を払ってだった。そのうえでわ

んこそばの店を出て青森のコーナーに行く。そこには実際に林檎菓

子が何種類も置かれていた。

その中には干し林檎やアップルパイ、それにアップルケーキとい

ったものもあった。他にはジュースもある。まさに林檎尽くしだっ

た。

「ああ、本当に林檎ばかりだな」

「それで何にしましょう」

月美は目を輝かせている。きらきらとさえしている。

「食べるのは」

「そうだな。アップルパイはどうか」

陽太郎はたまたま目に入ったそれはといたった。

「アップルパイで」

「そうですね。それじゃあそれと」

「他には？」

「干し林檎とアップルジュースですね」

その三つだというのだった。

「いえ、むしろ」

「むしろ？」

「アップルティーもありますね」

見ればその通りだった。アップルジュースの他にだ。アップルティーもあつた。紅茶の赤ではなく独特の赤を二人に見せているのだった。

「それじゃあここは」

「アップルティーにしようか」

「そうですね」

陽太郎の言葉を受けてにこりと頷いての言葉だった。

「それじゃあそれで」

「アップルティーか。そういえば飲んだことないんだよな」

「美味しいですよ」

その味はすぐに保障する月美だった。

第十二話 夏に入りその十二

「飲みやすくて」

「飲みやすいんだ」

「はい、ただこうした林檎のお菓子やお茶は」

そのことを話してきた。

「使う林檎が大事なんですけれど」

「そうなんだ」

「紅玉がいいんです」

その林檎の種類まで言うのだった。

「ここは」

「紅玉って？」

「林檎の種類です。小さくで酸味の強い種類です」

「それがいいんだ」

「はい、とてもです」

こう陽太郎に話をしてきていた。

「お菓子やお茶に使うには」

「成程ね。そうなんだ」

「お菓子にはそれです。それでこのアップルパイやアップルティー

は

「とりあえず買ってみようか」

何はともあれ食べてからだった。全てはそれからだった。

「どれも」

「はい、それじゃあ」

こうして実際に買ってみた。そのうえで食べてみる。するとその味はだ。かなり美味しいものであった。林檎の甘みと酸味を美味くいかしていた。

それを食べてだ。月美は満足した顔で言うのだった。

「紅玉ですね」

「それなんだ、やつぱり」

「アメリカの林檎が近いんです」

今度話に出してきたのはそちらの林檎だった。

「あの国の林檎は日本でよく売られている林檎に比べて甘いんです」

「へえ、そうだったんだ」

陽太郎は干し林檎を食べていた。会場の隅の席に二人並んで座ってそのうえでだ。買ったお菓子やお茶を飲みながらそのうえで話をしていた。目の前では名産品に目を輝かせていたり名物に舌鼓を打つ人々とそうしたものを売る人達で活気に満ちていた。

「アメリカ人って林檎をよく食べるって聞いたけれど」

「こうしてお菓子にしてもよく食べるんですよ」

「本当に林檎が好きなんだ」

「アメリカにも行ったことがありますから」

月美は今度は自分のことを話してきた。

「それで見まして」

「食べてみて」

「はい、それでわかりました」

まさにそれによってという。やはり食べてみないと何もわからない。

「アップルパイやアップルティーに合う林檎は」

「何か他の林檎は違うみたいだけれどね」

「はい、紅玉は特別なんです」

その林檎はというのだ。こう話す月美だった。

「本当にこうしたものに使う林檎でして」

「成程ね」

「林檎もそれぞれの種類によって使い方がありませんから」

このことも話すのだった。6

「それでこのアップルパイとアップルティーは」

「それがしっかりとわかっているからか」

「美味しくなってますね。あんなにおそばを食べたのに」

「それでも食べられるよな」

「甘いものは別腹つていいいますけれど」

月美はこの言葉も出した。

「それでも余計に」

「そうだよな。何かまだ入るしな」

「そうですね、不思議に」

「はい、その後には」

「どうしようか、これを食べたら」

「何か買いませんか？」

こう陽太郎に提案するのだった。

「お父さんとお母さんに」

「親父とお袋にかあ」

「特産品もありますし。ですから」

「そうだよな。それだったらな」

「はい、じゃあそれで」

「何買おうか」

ここぞだ。陽太郎は腕を組んだ。そうしてそのうえで考える顔になったのである。

「買うのはいいとして」

「そうですね。ここは」

「ここは？」

「アクセサリーみたいなものがないじゃないでしょうか」

月美はこう陽太郎に提案するのだった。

第十二話 夏に入りその十三

「それで」

「そうか。一つずつ、合わせて三つだよな」

「三つっていいますと」

「妹にも買わないとな」

彼女のことを忘れてはいなかった。それはしっかりとわかっていた。

「ちゃんとな」

「そうですね。私も」

「ああ、西堀も妹さんいたよな」

「はい、あの娘にも買ってあげないと」

「結構散財するけれどな」

陽太郎はお金の話をするとだった。少し困った顔になってもいた。

「それは」

「そうですね。妹ってお金かかるんですよ」

「奢ったりしないといけないしな」

「そうそう」

「こつも話すのだった。」

「それは本当にね。困るんだけどな」

「けれどそれでも」

「可愛いよな」

「いえ、うちの妹は少し違います」

月美はここだ。むくれた顔になってきたのであった。

「生意気です」

「生意気なんだ」

「はい、最近特にそうです」

「こつ話すのだった。」

「生意気で困ったものです」

「そうなんだ、そんなになんだ」

「女の子って小学五年になると急にそうなるみたいで」

自覚のない言葉であった。その証拠に自分その話に入れていない。

「それで」

「そういうものかな、あいつも」

「人それぞれだと思えますけれど」

「素直なままでいてくれたらいいな」

陽太郎は何気に自分の感情を述べていた。

「本当に」

「斉宮君の妹さんってどんな方ですか？」

月美はこつも尋ねてきたのだった。

「それで」

「ああ、俺の妹ね」

「はい、どんな方ですか？」

「うん、素直でさ」

まずは性格から話すのだった。

「それで真面目でね。いい妹だよ」

「素直で真面目ですか」

「顔はお袋に似ててな」

このことも話した。

「っていうかそっくりなんだよ」

「妹さんはお母さん似ですか」

「それで俺がさ」

「お父さんになんですな」

「そうなんだよな。妹は完全にお袋似でさ。凄くそっくりなんだよ」

そしてだ。今度は陽太郎が月美に問うた。

「西堀はどうか。そっちは」

「私ですか」

「うん、やっぱりどっちかが親父さん似とか？それかお袋さんか」

「そうですね。私達はですね」

「うん、どうかな」

「両方共お母さん似だと思えます」

こつ陽太郎に話すのだった。

「私と妹はかなり似てますから」

「似てるんだ」

「似てます、かなり」

このことは気付いている月美だった。彼女も気付いていることと気付いていないことがあった。これは誰にもあることであった。

「顔も髪の毛の質も」

「どちらもなんだ」

「はい、特に目元と髪の毛がそっくりなんです」

そえを聞いてだ。陽太郎は言った。

「じゃあ妹さんも目が大きくて髪は黒いんだ」

「そうなんです。それで私みたいに伸ばしてて」

「成程ね」

それを聞いて頷く陽太郎だった。

第十二話 夏に入りその十四

「そうなんだ」

「そうなんです。もうそっくりで」

「何かそれを聞いたらさ」

陽太郎はここまで話を聞いてだった。そうして言うのであった。

「何か一度会ってみたくなったな」

「妹にですか」

「駄目かな」

こころ月美にも問う。

「それは」

「それでしたら」

それを聞いてだ。すぐに返してきた月美だった。

「今度ですけれど」

「今度？」

「部活がない時にどうですか？」

「部活がない時って？」

「はい、その時に」

そして言う言葉は。

「私の家に」

「えっ!？」

そう言われてだ。思わず目が点になった陽太郎だった。

そしてだ。驚き狼狽した顔で問う返す。

「今何て!？」

「ですから。私のお家に」

陽太郎とは正反対に月美は落ち着いていた。

「どうでしょうか」

「どうでしょうかって」

「ですから私のお家に」

「本気で言ってるの？」
思わず問い返してしまった。
「それさ、本気で」
「はい、そうですけれど」
今度は笑顔であった。
「それでなんですけれど」
「嘘じゃないよね、それって」
「ですから。嘘じゃないですよ」
また言う月美だった。話が噛み合っていない感じだった。
「私のお家に。どうぞいらして下さい」
「本当にいいんだ」
「いいですよ。それでなんですけれど」
「うん」
「今度の日曜ですけれど」
今度は日まで指定されてきた。
「それでいいでしょうか」
「日曜なんだ」
「はい、どうぞそれで御願います」
相変わらず微笑んでいる。
「斉宮君さえよければ」
「嘘みたいな話だな」
思わずこんなことを話した彼だった。
「何か本当に」
「嘘みたいですか」
「うん、そんな感じだけけれど」
陽太郎は本気で言っていた。ただ月美がそれに気付いていないだけだ。
「それでさ」
「はい、いいですよね」
「御願いますよ。しかし」

「ここでだ。何とか自分のペースに戻って話す。

「女の子の家なんて行くのは」

「はじめてですか」

「はじめてっていうかな」

「また話す彼だった。」

「子供の頃行ってそれ以来なんだよな」

「子供の頃からですか」

「普通は行かないだろ、男の家ならともかく」

「そうなんですか？」

「そうなんですか。西堀そういうことしたことないの？」

「愛ちゃんと呼んでますよ」

「椎名はというのである。」

第十二話 夏に入りその十五

「ちゃんと」

「いや、だからさ。異性を呼ぶなんてことは」

「お友達。それも大切なお友達なら」

「呼ぶんだ」

「お母さんにはそう言われてますし。ですから」

「俺って大切だったんだ」

「はい、そうですけれど」

とにかく今は天然どころでは済まない月美だった。しかし本人は気付いていない。

「違いますか？ 斉宮君は私の大切な」

「友達なんだ」

「彼氏ですよ」

これは陽太郎の予想外のことだった。まさにだ」

「それでいいですか？」

「えっ、彼氏!？」

「彼氏で。いいですよ」

陽太郎は彼氏と言われて思わず声をあげてしまった。そして月美はというのだ。相変わらずピントがずれている感じであり続けた。

「それで」

「あの、だから俺は」

「この前愛ちゃんに言われたんです」

「椎名にか」

「はい、斉宮君は私の彼氏で」

そしてだった。さらに言うことはだ。

「私は斉宮君の彼女だって」

「あいつが言ったんだ」

「それで駄目ですか？」

「こう話すのだった。」

「それでは」

「いや、駄目とかそうじゃなくてさ」

「はい？」

「それでいいんだ」

陽太郎は思わず腕を組んでしまっていた。そのうえで考える顔になっっていた。

「俺が彼氏で」

「御願います」

月美からも言った言葉だった。

「それで」

「わかったよ。それじゃあさ」

「はい、それじゃあ」

「俺でよかつたら」

「こう月美に話した。」

「御願いますよ」

「はい、それじゃあ私も」

「今度の日曜ね」

「はい、日曜に」

こんな話をしてだ。陽太郎は月美の家に招かれることになった。

そしてその話が終わってからだ。陽太郎は家に帰るとだ。すぐに椎名に電話をかけた。

電話をかけるのだ。すぐに出て来た。

「何？」

「何？じゃないよ」

「まずはこう言う彼だった。」

「御前さ、西堀に吹き込んだろ」

「ああ、あのことね」

「自覚あるんだな」

「彼氏と彼女のことね」
「そうだよ、何であんなこと言ったんだよ」
「けれどその通りだから」
「ぼそりと話す椎名だった。それはここでも変わらない。
「だから言っただけ」
「今日いきなり言われてびっくりしたぞ」
「サプライズ」
「今度の言葉はこれだった。
「驚かすのが趣味」
「悪趣味だな、おい」
「それはそうと」
椎名は強引に話を変えてきた。
「いい？」
「今度は何だよ」
「つきぴーのことだけれど」
「ああ。西堀がどうしたんだ？」
「楽しんでだ？」
このことを尋ねるのである。

第十二話 夏に入りその十六

「それはどうだったの」

「ああ、それはな」

陽太郎は一呼吸置いてだ。その問いにしっかりと答えた。

「ちゃんと喜んでくれてたよ」

「そうなの」

「それでなんだよ。今度の日曜な」

「うん」

「家に誘われたんだよ」

「このことも話すのだった。」

「それでなんだよ」

「家に」

「ああ、西堀の家にな」

これをだ。電話の向こうの椎名に話す。

「御前もあいつの家に誘われたことあるんだって？」

「何度か行ったことある」

「ここでも静かに告げる椎名だった。この口調は変わらない。」

「ただ」

「ただ？」

「つきぴーはそうした相手は限ってる」

「限ってるのかよ」

「そう、大切な人だけお家に呼ぶ」

陽太郎に話す。的確にだ。

「だから斉宮も」

「あいつにそう思ってもらってるんだな」

「そういうこと。だからそれは有り難く思っていていい」

「何かそれってよ」

「それって？」

「不思議な気分だな」

実際にそうしてはいない。だが心で腕を組んでだ。そのうえでの言葉だった。

「それってよ」

「そうなの」

「ああ、俺を大切に思ってるのか」

「そしてだ。このことも言うのだった。」

「それにな」

「それに？」

「彼氏って言うてくれたしな」

「それさつき言った」

「けれどかなり驚いたんだよ」

「だから話すというのである。」

「いや、本当にな」

「うん」

「俺でいいのかな」

「そしてだった。陽太郎はこうも言うのであった。」

「俺でさ。いいのかな」

「彼氏がってこと？」

「大切な人とまで言うてもらったしな」

「それも言うのだった。」

「本当にいいのかな、それで」

「いいと思う」

「いいのか？」

「つきぴーが言うから」

「それでいいのかよ」

「本人が言うから」

「それが理由であった。」

「だからいい」

「そういうものか？」

「そう、本人が認めてる」

また言う椎名だった。

「ただ」

「ただ？」

「おかしい奴なら」

ここぞで。椎名の言葉が少し剣呑な色を帯びた。

「私が消す」

「消すのかよ」

「見破ったその時点で消す」

かなり物騒なことを言ってみせていた。

「そういう時には」

「本気だよな、それ」

「勿論」

しかもこんな返答だった。

第十二話 夏に入りその十七

「こんなことで嘘は言わないから」

「冗談で済まさないか？普通」

「私の場合が違う」

その言葉にもそれが出ていた。本気にしか見えない。そんな言葉だった。

「そうした相手は消す」

「粛清かよ」

「抹殺とも言っ」

ここでは冗談も入れてはいた。

「それをするから」

「で、その椎名から見て俺はどうなんだ？」

「斉宮は？」

「ああ、どうなんだ？」

「いい加減なところはああるけれどそれ程じゃない」

これが椎名から見た陽太郎だった。

「別に。そこまではいかないから」

「けれどいい加減なんだな」

「というか妙に頼りないところもある」

「ア著り内なあ」

「隙がある」

具体的にはそういうことだった。

「抜けたところがある」

「抜けてるか」

「それが問題」

「こつ言っつのである。」

「そこは気をつける」

「ああ、わかった」

「ただ。つきぴーはそれ以上にやばいところがある」

「隙があるってか」

「お嬢様だから」

実はここで陽太郎にかなりのことを教えていた。しかし彼はそれに気付かなかつた。椎名が言っているのはこういふところだった。

「だから」

「それでなのか」

「そう、そこがあぶない」

こつ話すのである。

「だから私はその分」

「警戒するんだな」

「レーダーになりソナーにもなる」

軍事用語も出してきた。それが妙に似合う。

「そうなるから」

「西堀の為にか」

「友達の為に」

片言だがそれでもだ。そこには確かな心があった。

「そうなる」

「御前つて時々いい奴だよな」

陽太郎は椎名のその言葉を受けて述べた。

「時々だけれどな」

「普段は？」

「さっきのやり取りのままだよ」

「これが返答だった。」

「とんでもねえ奴だ」

「そう言っの」

「何度でも言うさ。ったくよお」

「気にしない気にしない」

「気にするよ」

少しむっとした言葉になって返す陽太郎だった。

「っていつかここで気にしなくてどうするんだよ」

「それでも気にしない」

まだ言う椎名だった。やはり強い。

そしてだ。彼女のペースで切り返しを付けてきたのだった。

「それでだけれど」

「何だよ、それで」

「つきぴーのお家のこと」

今度言うのはこのことだった。本当に見事な切り返しだった。

「いいかしら」

「何だよ、それで」

「驚かない、慌てない、平常心を保つ」

言うのはこの三つだった。それを言うのである。

「それはしっかりとしておく」

「慌てないのだけはわかるような気がするけれどな」

「後の二つは？」

「よくわからないな。特に驚かないって何だ？」

とりわけ問うのはこのことだった。

「何だよ、それって」

「言ったまま」

ここでも素っ気無く返す椎名である。その口調は変わらない。

「けれど行けばわかる」

「今ここで言わないのかよ」

「内緒」

電話の向こうで表情を消しているのがわかる。そんな言葉だった。

「気にしない気にしない」

「また企んでるんだな」

「そう思ってくれるなら思ってくれたらいい」

「そうした言葉好きだな」

「うふふふ」

感情をわざと込めていない笑いだった。そんな笑いであった。

「楽しみにしておくこと」

「すげえ気になるな。御前そんな表現ばかりするな」

「じゃあまた」

話をすぐに切ってきた。ここでだ。

「何かあつたら電話して」

「つておい、まだ話したいんだけどな」

「これからすることあるから」

「何だよ、それ」

「お風呂」

それだというのだ。

「今からだから」

「ああ、それか」

「それじゃあね」

「またな」

「お休み」

別れの挨拶をしてから電話を切りだった。そのうえで話を終えたのだった。そうしてである。陽太郎は次のことを考えながら今は休みに入るのだった。

第十二話 完

第十三話 家へその一

第十三話 家へ

「んっ、何だ？」

「何かあったのか？」

陽太郎は部活の休憩中少しぼやいた。ランニングをしてた。その後の休憩の時に呟いたのだ。夏もすっかり走る、そんな部活であった。

「急に言葉出してよ」

「どうしたんだよ」

「あっ、いや」

周りに突っ込まれてた。すぐに言葉を返す彼だった。夏の暑い日差しを防ぐ為にそれぞれ帽子を被っている。そのうえでのやり取りだった。

「何でもないけれどさ」

「何だよ、ただの独り言かよ」

「それが」

「ちよつと今やってるゲームで悩んでさ」

「こつ言って誤魔化すのだった。」

「それでなんだよ」

「ああ、何やってんだ？」

「ネットゲでもやってるのか？」

「いや、ウィルのな」

「そつちだというのだ。これは本当のことだ。」

「そつちで今攻略本読んでやってるんだけれどな」

「それでも難しいゲームか」

「本読んでもか」

「ネットでも情報検索してるけれどな」

「それでもだというのである。」

「でもな。難しいよな」

「別にラスボスが勝てない訳じゃないだろ」

「ゲーニッツみたいなの」

キングオブファイターズのラスボスである。そのあまりもの強さで伝説にもなっている。そんな恐ろしいキャラクターであった。勝つのは至難の技だった。

「そういうのじゃないだろ」

「あそこまで強いとか難しいとかじゃないだろ」

「まあそこまではな」

こんな話をしてだ。そのうえで誤魔化した。実際に彼は月美のことを考えていたのだ。彼女の家に行くそのことである。

「本当に何かがあるんだ？」

「また言う彼だった。」

「一体」

そんなことを考えているうちに時間は過ぎていく。しかしだ。遂にその時が来た。時間は確実に過ぎる。それによってだ。

それでその日は月美に最寄の駅に招かれた。まずはそこだった。

静かな駅だった。広いがそれでいて気品がある。駅前もそんな感じだった。海が遠くに見える静かな、神戸の高級住宅街であった。

月美は陽太郎をまずそこに呼んだ。白いワンピースでそこにいた。

「今来られたところですか？」

「あつ、うん」

陽太郎はその高級住宅街を見回していた。そして月美がお嬢様であるという噂を思い出していた。それが事実だと内心確かめてもいた。

「そうなんだけれど」

「何か？」

「いや、何でもないよ」

彼女に対しても誤魔化す形になっていた。

「たださ」

「ただ？」

「ここって」

「町がですか？」

「凄い場所だよな」

まだ辺りを見回してそのうえで言うのだった。

「まさにあれじゃない。高級住宅街でさ」

「はあ」

「セレブってというか。俺この言葉好きじゃないけれど
前置きもしての言葉だった。」

「いや、凄い場所だね」

「住んでいる人達が重要ですよ」

しかし月美の言葉はこうであった。

「それが一番」

「大切なのは中身」

「はい」

それだという。ここでも月美の言葉自体はぶれてはいない。やはり彼女は人の外見や周りよりもだ。中身を見てそれを重視する少女であった。

第十三話 家へその二

だからこそこう言いだ。そうしてだった。

「じゃあ行きましょう」

「西堀の家にだよな」

「はい、今から」

こう話してそのうえでだった。二人で月美の家に向かう。するとだ。

豪邸だった。立派な門にそして広い大きな家、洋館を思わせるそれは実に見事なものだった。陽太郎はその家を見てまずは啞然となった。

そしてだ。その顔で月美に顔を向けて問うた。

「あのさ」

「はい？」

「ここがまさか」

「はい、私の家です」

穏やかな口調で答えてきたのだった。

「ここがです」

「何かさ、ここってさ」

「ここって？」

「凄い屋敷なんだけれどさ」

「こう言うのだった。」

「こんなお家に住んでるんだ」

「はい、そうですけれど」

「お金持ちだったんだ」

庭まで広い。しかも立派な木々が見えている。そうしたものを見ていけばそれだけで自然と答えが出る、まさにそうした話であった。

「そうだったんだ」

「じゃあ入りましょう」

やはりここでもそうしたことにはこだわらない月美だった。

「それじゃあ」

「いいんだよね」

陽太郎はかなり畏まってそのうえで問うたのだった。

「ここで」

「はい、御願います」

「そうなんだ、そこなんだ」

こんな話をしながらそのうえで家に入る。門から家の中まで結構歩いた。そうしてそのうえで辿り着いたその家の中はというとだった。

立派な玄関に長い木の廊下だった。玄関も綺麗でそのうえで左右には部屋の扉が幾つも見えている。それも見てまた言う陽太郎だった。

「やっぱり凄いな」

「はい？」

「いや、豪邸じゃない」

またこれを言う。しかしであった。

月美は全く動じずにだ。そうして先に進んである部屋に案内された。そこはビロードの絨毯に黒檀の食器入れ、それに柔らかそうなソファアが置かれている部屋だった。百インチはあるテレビもある。そんな部屋だった。

月美は陽太郎をその部屋に案内してだ。そのうえでまた言うてきた。

「お茶を持って来ますから」

「うん、悪いね」

「お茶は何がいいですか？」

部屋の中にも啞然とする陽太郎にまた話してきた。

「ダージリンがいいかアッサムがいいか」

「えっ、ダージリンにアッサムって」

「ハーブティーにされますか？それともローズですか？」

「あの、それ何？」

「紅茶です」

それだと。返答自体はにこりとしていた。

「それですけれど」

「紅茶も幾つもあるんだ」

「それがコーヒーにされますか？」

言うのはまだあった。コーヒーもあったのであった。

「キリマンジャロですか？ブルーマウンテンですか？」

「いや、そう言われてもさ」

「決まりませんか？」

「紅茶だけでなくコーヒーもそんなにあるんだ」

「ありますけれど」

返答は素っ気無いものだった。気付いていない顔だった。

「それが何か」

「何かじゃなくて。物凄いな」

「はあ」

「気を使ってもらわなくていいよ」

陽太郎は月美の家と言葉にだ。完全に気圧されていた。そうして呆然としたまま彼女に言葉を返す。それだけしかできなかった。

「別にさ」

「じゃあ紅茶ですか？」

「あっ、うん」

陽太郎は紅茶でもコーヒーでもいける。しかしそれでも今はとても言えなかった。

「それじゃあそれでね」

「そうされますか」

「種類は何でもいいからさ」

「何でもですか」

「うん、何でもね」

こつ話すのであった。

「何でもいいからさ」

「お任せさせてもらっていいのですね」

「うん、それでね」

「わかりました。じゃあお菓子は」

まだあるのだった。お茶だけではなかった。

第十三話 家へその三

「ザッハトルテにしますね」

「西堀つてザッハトルテ好きだよな」

「ウイーンから取り寄せたものでして」

「えっ、ウイーン!？」

それを聞いてだ。陽太郎はここでも驚いたのだった。

「ウイーンっていったら」

「オーストリアの首都ですけれど」

「いや、それは知ってるけれど」

これは常識のことであった。中学校で習う程度だ。

「それでも。そこからって」

「それが何か」

「滅茶苦茶凄いんだけど」

こう言つて啞然とするばかりだった。

「あの、それって」

「はあ」

「それで今からそれを？」

「そうですね」

やはり気付いていない月美だった。

「駄目ですか？」

「いや、駄目つて訳じゃ」

「じゃあちよつと待つて下さいね」

おっとりとした口調での返事だった。

「今からお茶を淹れて切りますから」

「うん」

こうしてだった。その紅茶とザッハトルテが運ばれてきた。ザッハトルテはかなり大きく切られていた。そしてその紅茶はとうとうであった。

「ロイヤルミルクティーにしました」

「それなんだ」

「どうでしょうか、イギリスとオーストリアになりましたが」

「何でロイヤルミルクティーなの？」

「ザツハトルテって味が強いですから」

「それに負けない味ってことなんだ」

「そう思いました」

「それでだというのである。」

「それで」

「成程、そうなんだ」

「美味しいですよ」

「また話す月美だった。」

「この組み合わせも」

「そうなんだ」

「紅茶もミルクも味を強くしていますから」

「強く？」

「紅茶は濃くしてミルクはコンデンスミルクです」

「そこまで気を使っているというのである。月美はそこまで考えていたのだ。」

「それにしてみました」

「じゃあ食べてみて」

「飲んでみて下さい」

「こう述べてだった。実際にザツハトルテを食べロイヤルミルクティーを飲んでみる。確かにどちらも味がかなり強いものだった。」

「まずザツハトルテだ。その甘さはかなりのものだ。日本のそれと比べるとだ。その味は相当に強く強烈なまでに口の中に残っていた。そしてそのロイヤルミルクティーはだ。砂糖が入っていない。しかし紅茶の味もミルクの味もかなり強い。だがそれがザツハトルテを中和したのだ。」

「両方味わってだ。陽太郎は言った。」

「へえ、これはまた」

「どうですか？この組み合わせは」

「いいね」

目を丸くさせての言葉だった。

「この組み合わせって」

「そうですよね。美味しいですよね」

「うん、とても」

こう月美に話す。

「美味しいよ」

「ザッハトルテはオーストリアのものはかなり甘いです」

「相当凄いね」

「そうですよね、かなり強いです」

また話す。

「日本にはない甘さですね」

「そっだよな。甘いよ本当に」

実際に陽太郎がはじめて味遭う甘さだった。そこまだった。

第十三話 家へその四

「オーストリア人って普段からこんなのを食べてるのかな」

「ウィーンの甘さはこうした感じですよ」

「実際にそうなんだ」

「はい」

まさにその通りだと話す。

「その通りです」

「ううん、それはまた」

「それがオーストリアの人達にはそのままの味になってます」

「そのままのって？」

「つまり。生粋の味です」

月美はこう表現したのだった。

「それになってるんですよ」

「これかなんだ」

「例えばですね」

「例えば？」

「斉宮君お団子好きですよね」

「あ、ああ」

少し戸惑いながらの返答になってしまった。

「そうだけれど」

「それと同じで」

「日本人には日本人の味があ」

「それでオーストリア人にはオーストリア人の味です」

「成程、それでなんだ」

「はい、それでなんです」

こう話すのだった。

「それでこの味がオーストリアの味になるんです」

「向こうの人にはこれがいいんだね」

「フランス人の好きなカマンベールチーズも」

「ああ、あれね」

そのチーズのことは彼も知っていた。実際に食べたこともある味だった。だからすぐに味を思い出してそのうえで応えることができたのだ。

「あのチーズね」

「癖、強いですよね」

「結構ね」

「けれどあれがフランス人にはいいんですよ」

「何か匂いが凄いチーズもあるんだって？」

「はい」

そうしたチーズについても話される。

「とても食べられないみたいな」

「それも向こうの人にはなんだ」

「丁度いいんです」

そのチーズの話もするのだった。

「匂いも含めて」

「成程、何か勉強になるね」

「そしてですね」

ここまで話してそれからだった。

「私、このザツハトルテに合うものを考えまして」

「それがこのロイヤルミルクティー」

「はい、うんと濃くした」

またその話になる。

「それにしました」

「ううん、よく考えたね」

「コーヒーだとウィンナーコーヒーです」

「あはは、それはわかるよ」

「わかりますか？」

「だってオーストリアだから」

陽太郎は笑顔で月美の今の言葉に返す。

「だからさ。合うんだよね」

「はい、オーストリアにはオーストリアで」

「それで紅茶はこうして」

「ウインナーティーもありますけれど」

「ああ、ウインナーコーヒーと一緒に」

「生クリームを上に乗せています」

つまりただウインナーコーヒーが紅茶に代わっただけである。それだけであった。だがコーヒーが紅茶に代わると全く違ってもくる。

「それです」

「それでもいいんだ」

「生クリームですから」

「そうなるんだね」

「それもいいんですよ」

また話す月美だった。

「生クリームも」

「そっちにすればよかったかな」

陽太郎は話を聞いて純粹に思ったことを口にした。

第十三話 家へその五

「それなら」

「そうですね。それじゃあ今度は」

「今度つて」

「はい、今度です」

月美の顔はここでも邪気のないものであった。

「今度はそれをお出ししますね」

「そうしてくれるんだ」

「はい、それですけれど」

「今度つて」

「ですから今度に」

また来ると言うことはだ。月美の中では既に決まっていた。実にあつさりと言っているのがそのことの何よりの証拠であった。

「御馳走させてもらいますね」

「うん、じゃあ」

そして陽太郎はだ。言われるままに頷くのだった。

「それじゃあその時に」

「今度はまた別のお菓子にしますね」

月美はそのまま明るく話す。

「何か考えておきますね」

「頼むよ」

「ただしね」

ここであった。また別の声が出てきた。

「月美、言っておくけれど」

「あつ、お母さん」

「アメリカのケーキはいきなり出さないこと」

こう言っていた。黒い、月美と同じ髪の色で長いそれを後ろで上にあげて束ねている背の高い女性が来た。顔は月美にそっくりで

胸がかなり目立つ。黒と白のスーツを着てそのうえでいた。

「それは気をつけてね」

「帰ってきたの」

「今帰ってきたところよ」

その美女はこう月美に微笑んで答えた。

「丁度今ね」

「そうだったの」

「話は聞いてるわ。楽しくやっていたみたいね」

「え、ええ」

「はじめまして」

美女はだ。今度は陽太郎に顔を向けて微笑んできた。

「月美の母です」

「お母さんですか」

「西堀真奈美です」

そしてこう名乗ってきた。

「斉宮陽太郎君ね。話は聞いてるわ」

「話って」

「月美がいつも話してるのよ」

にこりとした顔での言葉だった。

「いつもね。貴方のことをね」

「西堀……いえ、西堀さんですか」

「そうよ、いつも言ってるのよ」

こう陽太郎に話すのである。

「とても優しくて親切だったね」

「そうだったんですか」

「そうよ。その通りみたいね」

「いえ、それは」

「隠さなくても謙遜しなくてもいいのよ。わかるから」

麻奈美はまた彼に話す。

「貴方のことはね」

「俺のことがって」
「いい子ね。それならいいわ」
「いい？」
「月美のこと御願いな」
いきなりだった。彼にこう告げたのである。
「宜しくね」
「はあ」
言葉を上手に出せないまま。陽太郎は頷いた。
「わかりました」
「そういうことだからね。頑張つてね」
「わかりました、それじゃあ」
また言う陽太郎だった。
「これから」
「月美もよ。彼を困らせたら駄目よ」
今度は娘に顔を向けての言葉だった。
「それはね」
「ええ」
月美は母のそのことばにこくりと頷いた。
「それは」
「わかつていたらいいわ。それじゃあ私はこれで」
「何処に行くの？」
「着替えるのよ」
「それだというのだ。」
「このままでいても仕方ないじゃない」
「あっ、そうね」
「お家の中までスーツにいるのもね」
「それもだというのである。」
「だから。いいわね」
「ええ、じゃあ」
「そういうこと。じゃあ続けて」

部屋を去るにつとするとところでまた言つ真奈美だった。

第十三話 家へその六

「遠慮なくね」

「遠慮なくって」

「月美はもう少し積極的にいった方がいいのよ」

「今度は娘の背中を押す言葉だった。」

「もっとね。それで丁度いいから」

「丁度って」

「はい、続けて」

娘の言葉を打ち切ってさらに告げたのであった。

「そういうこと。それじゃあね」

楽しげに微笑んで部屋を後にする。こうして二人はまた二人になった。

月美がだ。最初に陽太郎に言ってきた。

「あのですね」

「うん、どうしたのかな」

「お母さん塾を経営してしまして」

「塾をなんだ」

「はい、八条学習塾」

その塾の名前も話す。

「名前は知ってますか？」

「予備校もやってない？そこって」

「やってます」

その通りだというのであった。

「予備校もしていて。兵庫じゃ結構」

「そっだよな。俺は違う塾だったけれど」

「御存知なんですね」

「ツレが何人か通ってたから」

だからだというのである。

「知ってるよ」

「そうだったんですか」

「そうだったんだ、その経営者だったんだ」

「はい、一応八条グループの傘下ですけど経営を任されています」

「八条グループの」

「はい、そうなんです」

このことは自分から話した月美だった。

「その塾なんです」

「そういえば八条グループってそっちの方も進出していたっけ」

「何でも進出していますよ」

こう陽太郎に話す。

「参考書も出していますし」

「出版もだったんだ」

「漫画雑誌も出してるじゃないですか。ほら、野球だって」

「ああ、八条リーグね」

グループだけでプロ野球を設立しているのである。こうしたこと
もしているのだ。

「あれね」

「あれもいいですよね」

「うん、確かに」

月美のその言葉に頷く陽太郎だった。

「そうだね、何しろジャイアンツはいないし」

「それが一番いいですか」

「俺巨人嫌いだからね」

陽太郎はこのことは隠そうとしなかった。

「あのチームだけは好きになれないよ」

「私です」

そしてそれは月美も同じだった。彼女もであった。

「あのチームは。かなり」

「好きになれという方が無理じゃないかな」

「そうですね。ここ関西ですし」

「俺の知り合いも巨人嫌いな奴ばかりなんだよな」

「愛ちゃんもですよ」

月美はそれは椎名もだというのである。

「愛ちゃんあれでも野球好きで」

「そういえば阪神ファンだったっけ」

「はい、それもかなり熱狂的な」

そうだと聞いてだ。陽太郎はその椎名が阪神のグッズに身を包んでいる姿を想像した。その阪神帽に法被にメガホンである。甲子園の一塁側のスタイルだ。想像するとだ。それがまた実によく似合っていた。

「凄いですよ」

「そんなに凄いな」

「もう。阪神が巨人に負けたら」

「そついや何か微妙に機嫌が悪い日あるな」

「大抵阪神が負けた日です」

そつした日だというのだ。

第十三話 家へその七

「それで。その次の日はです」

「厄介だな」

陽太郎は少し困った顔で述べた。

「それはまた」

「けれど。可愛いですよ」

何とここでだ。月美は微笑んでこう話したのである。

「愛ちゃんのそういうところって」

「可愛いんだ」

「愛ちゃんって可愛い性格ですよ」

そしてこれも話すのだった。

「とても」

「可愛い。そういえば茶目っ気はあるよ」

「それがいいんですよ」

また言うのであった。

「あの茶目っ気が」

「そうか。何か意地悪に思えたりもするけれど」

「愛ちゃんは嫌いな人は最初から声をかけたり相手にしたりしませ

んよ」

「ああ、みたいだな」

陽太郎もそれは察してきていた。何となくではあるがだ。

「何かそんな感じかな」

「はい、それで大事な人にはです」

「ああいう感じなんだ」

「優しいんですけれど素直じゃないところがあるんです」

椎名の性格をよくわかっていて。それを窺わさせる言葉だった。

「愛ちゃんは」

「それ考えたらわかりやすい性格なんだな」

「わかりやすいですよ。いい娘ですよ」

「いい娘なあ」

「私にもよく声をかけてくれるし」

「ああ、同じ塾だったっけ」

「はい」

陽太郎のこの話にも頷く。そしてだ。

陽太郎はふと先程の話を思い出してだ。そのうえで月美に対してまた問うた。

「あの子」

「はい？」

「椎名の通っていた塾ってあれ？やっぱりお母さんの」

「あっ、違います」

そうではないというのだった。

「別系統のです。その塾に行っていました」

「そうだったんだ」

「お母さんの塾だと色々言われるだろうってことで」

「あのお母さんが言ったとか？」

「お父さんが言ったんです」

母ではなくだ。父だというのだった。

「お父さんが」

「親父さんがなんだ」

「お父さんは八条電鉄に勤めていて」

父はそこだというのだ。八条電鉄とは関西全域に路線を持っている私鉄である。私鉄で最大の路面面積を誇っている。

「そのお父さんが。自分で塾を選べって言って」

「それで椎名と同じ塾に」

「なりました。愛ちゃんと会ったのは縁でしたけれど」

「縁かなあ」

「人と人の出会って縁ですよ」

こう話す月美だった。

「お父さんとお母さんに言われました」

「縁かあ」

「愛ちゃんと会えたのは縁で」

そしてだった。陽太郎を見てだ。

「斉宮君に会えたのも」

「それも縁」

「いい縁ですよね」

ここまで話してにこりと笑ってみせたのだった。

「とても」

「そう言ってくれるんだ」

「何か？」

「いや、有り難う」

月美のその言葉への感謝である。

「そう言ってくれて」

「何が？」

「うん、有り難う」

また言う陽太郎だった。月美の言葉に出たその心が有り難かったのである。

「それじゃあ俺さ」

「はい」

「この縁大事にするよ」

こう月美に話したのだった。

第十三話 家へその八

「何があってもね」

「大事にしてくださいますか？」

「絶対に」

しっかりとした顔で頷きもする。

「大事にするよ」

「有り難うございます」

「うん、それでだけねどさ」

「はい、何ですか？」

「西堀って結構本読むじゃない」

今度は本の話であった。

「それで本ってやつぱりあれ？書斎とかがあって」

「はい、そうなんです」

にこりとした笑顔で答えてであった。

「そこに全部置いてます」

「そうなんだ、やつぱり」

「私の勉強部屋に全部置いてまして」

「勉強部屋に？」

「はい、そこにあります」

その言葉を聞いてだ。陽太郎は違和感を感じずにはいられなかった。それでそのうえでまた月美に対して問うのだった。それは何かというのだ。

「あのさ、勉強部屋って」

「何か？」

「西堀の部屋じゃなくて？」

「寝室と勉強部屋があります」

こう話すのだった。

「二つありますけれど」

「部屋が二つもあるんだ」

それを聞いてであった。陽太郎はまた怪訝な顔になった。そのうえでの言葉だった。

「何か凄いね、それって」

「凄いですか？」

「凄いよ。俺もまあ部屋は持つてるけれど」

ここではだ。陽太郎は常識から話した。

「それでもさ。二つなんてとても」

「そうなんですか」

「部屋がないよ」

だからだというのである。

「俺の家マンションだからさ。そんなにさ」

「ありませんか」

「そうだよ。妹なんかお袋達と一緒に部屋で」

「お部屋ないんですか」

「まだ小さいしね。部屋は一個あるけれど」

それはあるというのだ。しかしであった。

「あんまり小さい子に部屋持たせるのは早いからさ」

「あつ、そうなんですか!？」

「そうなんですかって。西堀の家じゃ違うんだ」

「うちの家の教育方針で」

月美がここで出してきたのはそれだった。

「それで私も小学校に入ったら」

「自分の部屋を持つてたんだ」

「寝るのはその時から一人でした」

このことも話す。

「自立心をつける為にお母さんが言って」

「さっきの綺麗な人がなんだ」

「綺麗ですか？」

月美は陽太郎の今の言葉にも反応を見せた。

「お母さんが」

「うん、綺麗な人だよね」

陽太郎は気付かなかつた。そのまま頷いたのだった。

「とても」

「実は私達そっくりって言われてるんですけど」

「あつ、確かに」

言われてみればその通りだった。確かに二人はそっくりだった。母娘だからそれは当然とはいえ確しかに似ているのであった。

「そういえばそうだよね」

「昔から言われていました」

月美の顔がにこりとしたものになる。

「妹も」

「心美ちゃんもなんだ」

「そうです、それでなんです」

そしてであった。

「心美もお部屋、二つ持ってます」

「妹さんも二つなんだ」

「小学校に入った時に。私にもだからって」

「公平にってことだね」

「兄弟姉妹は公平にしないといけないって」

「それも教育方針なんだ」

「はい、そうなんです」

こう述べるのであった。

第十三話 家へその九

「それでなんです」

「成程ねえ。何か持っているものをふんだんに使えるっていいよな」
「ふんだん、ですか」

今度は月美がわからない顔になった。その顔で陽太郎に問う。

「そうなのでしょうか」

「ふんだんだよ、それに」

「それに？」

「妹さんもそっくりなんだ」

陽太郎はここではこのことを話す。妹のことであった。

「同じ顔なんだ」

「そうなんです、そっくりで」

そしてだった。月美はここで一步前に出た。言葉がである。

「そうだ、それだったら」

「それだったら？」

「今から呼びますね」

こんなことを言うのだった。

「それでいいですよね」

「えっ、今からって」

「はい、ここに呼びますね」

「あの、ちよつと」

「心美、ちよつと来て」

すぐに立ち上がってそのうえで扉を開けてだ。廊下のところに顔をやってそのうえでその妹を呼んだのである。そうしたというのである。

「応接間に来て。すぐにね」

「お姉ちゃん、どうしたの？」

すぐに子供の可愛らしい声が返って来た。

「何かあったの？」

「いいから来て」

月美はここでは理由を聞かなかった。

「いいからね。こっちに来て」

「うん」

返事は素直なものだった。

「それじゃあ今から行くよ」

「ええ、来て」

「わかったわ」

こうしてであった。その彼女が来たのであった。白いシャツと黄色いスカートの彼女の顔はというとだ。本当にそっくりであった。

「はじめまして」

すぐに陽太郎に対して話してきた。

「お姉ちゃんの彼女ですね」

「えっ、彼女って」

「そうですよね」

天真爛漫だがそれだけに困った問いだった。

「だからここに来たんですよね」

「それは」

「それでお姉ちゃんとは」

そして言う言葉はというとだ。

「キスとかしたんですか？」

「えっ!？」

「キ、キス!？」

この言葉にはだった。陽太郎ではなく月美もだ。目を丸くさせて口を両手で覆ってだ。そのうえで驚く様子を見せたのであった。

「あの、それは」

「心美、何てこと言うのよ」

陽太郎は驚いているだけだが月美は怒ってもいた。

「そんなのはとても」

「してる善ないでしょ、怒るわよ」

「何で怒るの？」

心美はそう言われてもだ。目を丸くさせるだけだった。

「それで。だってキスってさ」

そしてだ。その目で言うのであった。

「普通に好きな人同士がするんじゃないの？」

「それはそうだけれど」

月美もそれは認めた。同じ丸くさせてしまっている目であってもある。姉妹のその丸くなった理由は全く違ってしまっているのである。

「けれど。そんなことは」

「じゃあキスまだなの？」

純朴なところがかえって問題だった。

「斉宮さんもお姉ちゃんも」

「あれっ、俺の名前知ってるんだ」

陽太郎が気付いたのはこのことだった。

第十三話 家へその十

「そうだったんだ」

「お姉ちゃんからいつも聞いてます」

また純朴にはらす心美だった。

「斉宮さんのことは」

「それでなんだ」

「毎日言ってますよ」

にこりと笑ったうえでだ。聞かれていないことまで話してみせた。

「にこにことして」

「ちよつと心美」

言われている月美は弱り果てた顔になっていた。その顔で溜息をつきながら言うのであった。

「あのね」

「あのね？」

「お部屋に戻って」

言うのはこのことだった。

「もうね」

「お部屋に？」

「もついいから」

多くは言わなかった。そしてそれは正解だった。帰って。漫画読むなりお勉強するなりしていて

「じゃあお勉強するね」

心美が選んだのはそちらだった。

「とりあえず宿題終わらせて予習しておくから」

「そうしておいて。それじゃあね」

「うん。じゃあ斉宮さん」

陽太郎にも笑顔で話す。

「また宜しく御願います」

「うん、それじゃあ」

別れの挨拶は礼儀正しくであった。心美はぺこりと頭を下げた。そのうえで部屋を退出した。陽太郎はここで壁にある時計を見た。するとであった。

「あつ、もういい時間だね」

「五時ですね」

「これで帰らせてもらうよ」

こう月美に話した。

「これでね」

「御夕食は」

「ああ、気を使わなくていいよ」

笑ってそれはいいとした。

「別にさ。そこまではね」

「そうですね」

「うん、だからこれでね」

また言うのであった。

「帰らせてもらうよ」

「わかりました。それじゃあ」

「月美、どうしたの？」

いいタイミングで真奈美の声が奥からしてきた。

「何かあったの？」

「斉宮君が帰るの」

こう母に答えたのだった。

「これで」

「帰られるのね」

「送っていったいいい？」

「そうしなさい」

こうしたやり取りが陽太郎にも聞こえる。

「是非ね」

「わかったわ。それじゃあ」

こう扉に顔を出してやり取りをしてからだ。そのうえでまた陽太郎のところに戻って話をするのだった。その顔は少し寂しそうではあった。

「今からですよね」

「うん、長居したら悪いしね」

「そんなの気にしなくていいんですよ」

陽太郎にこんなことも言ってきた。

「別に」

「そういう訳にはいかないよ」

陽太郎は図々しい人間ではなかった。だからこう言ったのだ。

「それはさ」

「そうですね」

「だからこれでね」

陽太郎が笑顔でこう話した。

第十三話 家へその十一

「帰らせてもらうよ」

「わかりました。じゃあ」

「じゃあね」

陽太郎はまた笑顔で話す。

「帰らせてもらうよ」

「送らせて下さい」

それならせめて、という感じでだ。月美は言ってきた。

「駅まで」

「えっ、駅まで」

「はい、駅までです」

そこまでだというのである。

「遅らせて下さい」

「そんな、悪いよ」

「いいですから」

月美も何時になく引き下がらない。

「ですから」

「駅まで。いいの？」

「はい、御願います」

「こつも言ってきた。」

「それで」

「わかったよ」

そこまで言われてだった。陽太郎も遂に頷いたのだった。

「それじゃあ」

「そういうことで御願います」

「今から帰るけれどいい？」

「はい」

今度はにこりとした笑みになっていた。

「今からですね」

「うん、今から」

こう話してであった。二人で家を出て帰路につく。夏なのでまだ日は高い。かるうじて夕方にもなっていない。そんな中でまた話をするのだった。

「あの」

「あつ、何かな」

月美からの言葉に応える陽太郎だった。赤くなりかけている世界の中で。

「それで何かな」

「私のお家どうでした？」

これが彼女のここでの問いだった。

「それで」

「ああ、西堀のお家のこと」

「楽しんで頂けました？」

こう彼に問うのだった。

「それで」

「うん、かなりね」

実際にそうだった。陽太郎は素直に答えた。

「凄くいい家だよね」

「じゃあまた来て下さいね」

笑顔で話す月美だった。

「近いうちに」

「いいんだ」

「遠慮しなくていいですから」

俯いていた。真っ赤になった顔を見られたくないからだった。陽太郎も顔が赤い。そして彼もやはりその顔を赤くさせてしまった。た。

「また来て下さい」

「けれど悪いよ」

陽太郎はその赤くなつた顔で申し訳なさそうに告げる。

「それは」

「そうですね」

「それならさ」

そしてだ。彼は言うのだった。

「西堀の家とは比べ物にならないけれどさ」

「はい？」

「来てよ」

誘いだつた。明らかだ。

「俺の家にさ。親父とお袋いるから」

「斉宮君のお家にですか」

「うん、よかつたら来て」

こつ話すのだった。

「俺の家にね」

「それでいいの？」

「いいよ」

月美に対して話すのだった。

第十三話 家へその十二

「それでね」

「わかりました」

「そしてだった。さらに話すのだった。」

「それじゃあ」

「来てよ。あとは」

「あとは？」

「呼び方だけねどさ」

陽太郎はふとだ。月美に対して話すのだった。

「今名字で呼び合ってるじゃない」

「はい」

「それ。そろそろ変えないかな」

「こう言うのだった。」

「そろそろさ」

「変えるっていいいますと」

「名前で呼び合わない？」

月美を見て。そのうえでの言葉だ。

「名前でお互いに」

「名前で、ですか」

「ほら、俺今西堀って呼んでるじゃない」

「ええ」

「それで俺のことは斉宮って呼んでくれるけれどち」

「それを名前に、ですか」

「どうか」

また月美を見て問う。

「それで」

「いいですか？それで」

またおさおすと問う月美だった。

「陽太郎君って呼ぶことになりますけれど」
「いいよ」

微笑んでだ。月美に答えた。

「よかつたら。呼んで」

「じゃあ」

一呼吸置いてからだ。そのうえでの言葉だった。

「陽太郎君」

「じゃあ俺も」

「はい、御願います」

「月美」

実際に呼んでみた。最初は違和感があった。

しかし呼んでみるとであった。何か温かいものも感じるのだった。それでだ。ついまた呼んでしまった。

「月美、いいかな」

「はい、いいですね」

実際ににこりと笑う月美だった。

「呼ばれてみますと」

「そう、よかつたよ」

「陽太郎君、それじゃあ」

「うん」

「駅まで一緒に」

こつ言ってきたのである。その穏やかな笑顔でだ。

「行きましょう」

「そうだね、帰らないとね」

「ええ、ですから」

「うん、行こう」

こつ話をしてそれで駅に向かうのだった。そして改札口のところ
でだ。

「今日は楽しかったよ」

「はい、私もです」

駅に着いた時にはもう夕暮れになっていた。その時にまた二人で話すのだった。

「とても」

「そう、月美も楽しかったんだ」

「普段のデートとはまた違って」

「そうだとするのである。」

「とても楽しかったです」

「俺もだよ。それじゃあね」

「はい、また」

「今度は俺の家に来て」

「またこう話すのだった。」

「それでいいね」

「その時にまた御願います」

「何か美味しいもの出すから」

「また」

「またね」

二人で手を振ってそのうえで別れるのだった。二人は幸せなまま別れた。こうして陽太郎のはじめての時間は終わったのであった。

そして陽太郎は帰りの電車の中で。彼女と会った。

「あれっ、斉宮じゃない」

「佐藤かよ」

星華だった。見れば彼女は制服であった。陽太郎は彼女のその服を見て言うのであった。

第十三話 家へその十三

「部活だったのか？」

「そうなの、練習試合でね」

「そうか。バスケ部も大変だな」

「何言ってるのよ。剣道部なんて夏にあの防具でしょ？」

「ああ、それが？」

「そっちの方がずっと大変よ」

「こつ言つのであった。」

「ずっとね」

「そうか？バスケ部だってさ」

「大変っていうの？」

「だって今日も練習試合だろ」

「剣道部だってあるでしょ、練習試合」

「まあな」

「それはその通りだ。否定しなかった。」

「それは何処だったかさ」

「そうよ、何処だってじゃない」

星華はそれを言う。

「だったら剣道部の方が同じじゃない」

「そうなるかな」

「なるわよ。それでね」

「ああ」

「今日何処に行ってたの？」

「えっ、何処って」

「私服だし部活じゃないわよね」

「それはすぐにわかった。学校に行くには絶対に制服、若しくはジヤージだからだ。」

「そうよね。遊んでたのよね」

「まあそうだけれどさ」

「それじゃあ何処なの？」

それをまた問うのであった。

「何処に行つてたの？」

「ああ、それは」

流石に月美のところに行つていたというのは憚れた。気心の知れた相手だから言つてもいいかとは思つた。しかしここは、であった。

「あのさ」

「あのさ？」

「ちよつと美味しい店があるつて聞いてさ」

「美味しいお店？」

「そう、カレー屋でさ」

こつ言つて誤魔化すことにしたのだった。

「カレー屋。あの御飯とルーが混ざつてる」

「ああ、自由軒ね」

星華はそのカレーのタイプを聞いてすぐにこつ返してきた。

「あそこね」

「知つてるんだ」

「有名よ。本店が難波にあつてね」

「うん」

「あそこじゃ名物の一つになつてるのよ」

「そうだったんだ」

「学校の授業で教えてもらったのよ」

星華は何故知つているのかまで言つてきた。

「ほら、現国の織田先生」

「ああ、あの痩せた」

「あの先生に教えてもらったの」

こつ話すのだった。

「難波のカレーのことね」

「あそこつてそんなに有名なカレーだったんだ」

「夫婦善哉って小説に出て来るんだって」

星華はこのことも話した。

「私はまだ読んだことはないけれど」

「夫婦善哉ねえ」

「書いたのは織田作之助」

月美はこのことも話した。

「その人らしいわ」

「織田作之助かあ」

「知ってる？この人」

「名前は聞いたことあるけれどさ」

月美からだ。それは教えられたことだった。

「あの人なんだ」

「何か大阪生まれで大阪を舞台にした小説が多いそうよ」

「大阪なんだ」

「斉宮も行ったことあるわよね」

星華はここで大阪の話に変えてきた。

「大阪は」

「あるよ、そりゃね」

「神戸からすぐだしね」

「賑やかだよな、あそこは」

陽太郎が大阪にまず受けた印象はこれだった。

第十三話 家へその十四

「本当にさ」

「そうよね、大阪はね」

「賑やかだよ」

彼はまた言った。

「本当に。ただ」

「ただ？」

「食べ物美味しいよな」

ここでは笑顔になっていた。

「お店も色々多いしさ」

「夫婦善哉もそこにあるのよ」

「成程、そうなんだ」

「そう聞いたわ」

「星華は行ったことないんだ」

「そのお店にはね」

「他のお店は？」

「結構」

あるというのだった。

「もう色々なお店に」

「難波辺り本当に多いよな」

「昔はすつぽんのお店もあったらしいわね」

「ああ、千日堂」

この店の名前も出て来た。

「もうないんだよな、あそこも」

「そうよね。私達が小さい頃になくなったそうね」

「すつぽん結構好きなんだけれどな」

陽太郎はこんなことも言った。

「あれで結構」

「すっぽん好きなの」

「鶏肉みたいな味がしてさ」

星華にすっぽんのことをそのまま話す。

「ゼラチンもあって美味いんだよ」

「鶏肉みたいな味なの」

「ああ、案外食べやすいんだ、あれで」

こう話すのだった。

「本当にな」

「ふうん、そうなんだ」

「佐藤は食べたことないのか」

「ちよつとね」

星華は苦笑いを浮かべて答えた。

「あれって高いし」

「まあそうだけれどな」

すっぽんは御馳走である。だからそうは食べられない。陽太郎にしろ食べられたのは縁であったりする。それで食べたのである。

「すっぽんはな」

「けれど美味しいのね」

「ああ、美味しいことは美味いよ」

それは保障するのだった。

「それは間違いないからさ」

「機会があればね」

「そのうちその機会は来るさ。それでさ」

「ええ、それで？」

「試合どうなったんだよ」

その練習試合のことを尋ねるのだった。

「試合さ、それで」

「勝ったわ」

星華は陽太郎の問いに対してにこりと笑って返した。

「それはね」

「そうか、勝ったんだな」

「ちやんとね。試合にも出られたし」

「あつ、よかったな」

「少しだけれど出させてもらったのよ」

「出られてよかったじゃないか」

陽太郎はそのことを喜んだのだった。半分我がことのようにだ。

「試合にさ」

「やっぱり試合っていいわよね」

星華もそのことは素直に喜んでいた。

「雰囲気が違うわ」

「練習とはまた違ってだよな」

「そういうこと。やっぱりいいわ」

また言う星華だった。

「先生も勝って喜んでたし」

「だよな。やっぱり勝てたらいいよな」

「それ以上に私達が奇麗に試合したことがいいって言ってたわ」

「奇麗なつて？」

「中にはわざと反則する人間とかいるじゃない」

世の中残念だがそうした人間もいる。スポーツをしながらもスポーツマンシップということを理解していない者も世の中にはいるのだ。

「そういうことがなかったからって言ってたわ」

「それって勝ち負け以前だしな」

「先生って結果として試合に負けても怒らないのよ」

そつだというのだ。だが教師の中には一回戦で負けたからといって生徒全員に丸坊主を強制して自分はしないという輩もいる。自分もしなければならぬのは強要する、しかも指導する立場として当然のことであるがそれをしないのだ。こうした教師どころか人間としても失格の輩が大手を振って『聖職者』として世間に顔向けできるのが日本という国である。こんな怪奇現象が起こるのは我が国だ

けだ。

第十三話 家へその十五

「けれど。そういうことをしたらね」

「怒るよな」

「物凄く怒るんだって。相手チームに対してもね」

「相手にもか」

「先輩の話だけれど」

「こつ前置きしてからの話だった。」

「去年の冬休みの練習試合で相手が何かしたのよ」

「わざとだよな」

「そう、それで凄く怒ったのよ」

「こつ話すのである。」

「もうこんな先生見たことないって程だったらしいわ」

「確か女子バスケの顧問って」

「ええ、水野先生よ」

「先生の名前も出された。」

「二年の数学のね」

「だったよな、あの人だよな」

「この学校の卒業生なんだって」

「へえ、八条学園の」

「高校から大学までずっと八条でね」

「八条学園の進路で最もよくあるパターンである。」

「それで先生になったらしいわ」

「そうだったんだ」

「それで、そういうことになったらね」

「滅茶苦茶怒るってわけか」

「けれどその通りよな」

「星華もそのことは頷けることだった。」

「やっぱりね。スポーツマンだしね」

「だよな、俺は武道だけねど」

「どっちにしてもそうした卑怯なことしたらいけないわよね」

「反則はな」

「私もそういうこと嫌いだし」

これはその通りだった。星華は昔からそうしたことは嫌う方なのだ。

「やっぱりね」

「俺もそういうのはさ」

「ああ、斉宮は昔からそうよね」

「大嫌いだよ」

そうだというのだった。

「特にいじめとかはね」

「そうよね。いじめは私も」

そのことはだ。星華も真剣な顔で頷く。

「最低よね」

「俺御前がいじめとかするような奴だったらさ」

「その時は？」

「もう友達とかじゃなかったらうな」

陽太郎は少し真剣な顔になっていた。そのうえでの言葉だった。

「もうそんな奴だったらな」

「私そんなことしないから」

顔を俯けさせて。深刻な真顔で答えた星華だった。

「絶対に」

「ああ、御前そういう奴じゃないから」

「わかってくれてるのね」

「わかるさ」

陽太郎はまた真剣な顔で答えた。

「それはさ」

「有り難う」

「じゃあこれから帰るんだよな」

陽太郎はまた星華に問うた。

「これからな」

「ええ、そうよ。もうね」

「じゃあ途中まで一緒だよな」

「こう言って星華に頬笑むのだった。」

「家までな」

「そうね。何か久し振りよね」

「あはは、そうだよな」

「ついついだ。星華のその言葉に笑ってしまった。」

「高校に入ってからそういう機会はな」

「なかつたわよね」

「中学校の時は結構あったのにな」

「陽太郎は少し残念そうに話す。」

「高校に入ったら急にな」

「仕方ないわよ」

「星華はそれは認めていた。」

「残念だけれどね」

「残念？」

「あつ、別に」

「つい本音を出してしまった。しかしそれは慌てて消すのだった。」

第十三話 家へその十六

そのうえでだ。何とか取り繕ってそれで話す。

「それでね」

「それで？」

「それはやっぱり」

とりあえず話を元に戻してだった。星華はまた話す。

「仕方ないわよ」

「部活も違うしな」

「それは元からじゃない。部活はね」

「じゃあ何でだろうな」

「クラスが違うからよ」

だからだというのだ。それはだ。

「だからよ」

「それでか」

「そういうこと。残念だけれどね」

星華は本当に残念そうに話す。顔にもそれが出ていた。

しかし陽太郎はそれがどうしてかわからない。そしてそのまま話すのだった。

「そうだよな。クラスが違うってのはな」

「残念よ」

今度も本音を出す星華だった。相手に気付かれないまま。

「どうしたものかしらね」

「仕方ないよな、それは」

「仕方ないのね」

「ああ。けれど高校も一緒だからな」

ここだ。陽太郎はまた気付かないまま話す。

「佐藤何で八条高校にしたんだ？」

「えっ!？」

「しかも普通科に」
「こう星華に言うのである。」
「何でなんだ？それって」
「えっ、それはって」
「だから何でなんだ？」
「また星華に問うた。何も気付かないまま。」
「確か商業高校希望だったよな」
「ええ」
「八条高校って商業科もあるのにさ」
「ちよつとね」
「星華はここでは取り繕った。またしてもだ。」
「大学に行こうと思って」
「大学にか」
「うん、八条大学ね」
「その大学の名前も出した。」
「経済学部に行こうって思って」
「ああ、家のお店継ぐ為にか」
「ほら、私長女じゃない」
「取り繕いが顔にも出ているがだ。それでも話すのだった。」
「二人姉妹のね」
「星子じゃ駄目か？」
「星子も八条大学に行くつもりだけれどね」
「これは事実だった。事実を話すことは特に後ろめたさは感じなかった。」
「やっぱりあれじゃない。大学で勉強してからの方がお店にいいじゃない」
「そういうものか」
「だからなの」
「そういうことにするのだった。」
「それでなのよ」

「それで急に八条大学だったんだな」

「その通り。わかってくれた？」

「頑張ってるんだな」

陽太郎はここまで聞いて微笑むのだった。

「御前も」

「頑張るわよ。そういえばあんたも」

「俺？」

「経済学部だったわよね」

このことは密かに聞いていた。それを隠して問うたのだ。

「志望は」

「それか法学部かな」

「どっちかなの」

「どっちかに行こうって思ってるけれどさ」

今は少し迷っていたのだ。少しばかりだ。

「どっちがいいかな」

「経済学部がいいわよ」

星華はこのことは必死に話す。

「絶対にね」

「経済学部？」

「そっちの方がいいわよ」

必死の顔で陽太郎に話していた。

「絶対にね。経済学部の方がね」

「何でそこなんだ？」

「あつ、それは」

それを問われるとだった。星華は顔を赤くさせてしまった。言葉に詰まった。

しかしそれでも何とかだ。気を取り直して話すのだった。

「何となくね」

「何となくかよ」

「あんた公務員とかになりたいの？」

こう陽太郎に問う。

「別にそうじゃないわよね」

「公務員は別に」

「だったら経済学部の方がいいわよ」

力説だった。何とか陽太郎にそうして欲しいというようにだ。

「絶対に。そっちの方が」

「そういうものか」

「だからね」

「考えておくよ」

また話す陽太郎だった。

「それじゃあ」

「そうしてよ、本当に」

「何でかよくわからないけれどな」

そんな話をしてであつた。二人は久し振りに一緒に帰つた。今はであつた。夏の時間は過ぎていく。それと共に絆も強まっていたのだつた。

第十三話 完

第十四話 夏の終わりにその一

第十四話 夏の終わりに

「おい、マジかよ」

「家に行ったの」

海の近くのファミリーレストランだった。そこで集まって夏休みの宿題のレポートを書いている最中だった。

狭山と津島は驚いた顔で陽太郎に問う。赤瀬と椎名も一緒である。

「西堀さんの家に」

「すっごい進んだじゃない」

「進んだってどうかさ」

陽太郎は自分が注文したアイスコーヒーの氷をストローでかき混ぜながら二人に答える。

「向こうから誘われてさ」

「って西堀さんからかよ」

「嘘でしょ、それ」

狭山と津島は自分が今手にしているそのコップを割れそうになるまで強く握り締めてしまっていた。そうしてそのうえで話すのであった。

「あの大人しい人が」

「自分から」

「けれどよ。本当だぜこれって」

陽太郎は驚き続ける二人にまた話す。

「月美からな」

「しかも名前で呼んでるし」

「仲進展し過ぎ」

二人はさらに驚く。

「何だっただよ、それって」

「おかしいでしょ、私達なんか全然なのに」

「二人はまた馬鹿過ぎる」

今のは椎名の言葉だ。

「子供過ぎるから」

「子供過ぎるって」

「私達って子供だったの」

「そう、子供」

椎名の言葉は厳しい。

「だからそこまでいかない」

「ちっ、じゃあ大人にならないとな」

「早くね」

こうしたところがやはり子供だった。それがどうしても出てしまっている。

「何時までも子供だと仕方ないしな」

「そうよね、やっぱり」

「努力すればなれる」

また言う椎名だった。

「だから頑張る」

「よし、そうするな」

「是非ね」

無意味にいきり立つ二人だった。その二人からちよっかいの対象を外してだ。椎名はここでとんでもないことを暴露するのであった。その言うことはだ。これだった。

「勧めた介があつた」

「勧めた？」

「そう、勧めた介があつた」

まずはこう言うのであつた。

「つきぴーに」

「勧めたって何がだよ」

陽太郎は話かわからず彼女に問い返した。

「月美に何を勧めたんだよ」

「齊宮を家に入れること」
それをだというのだ。
「勧めて正解だった」
「おい待て」
陽太郎は今の月美の言葉に真剣な顔で突っ込みを入れた。
「今何て言っただよ」
「聞こえたのね」
「っていうかあきらかに俺に聞こえるように言っただろ」
口を大きく開けて椎名に告げた。
「どう見てもな」
「そうだけれど」
「それで何て言っただよ」
必死なものを思わせる形相でまた椎名に問う。
「今よ、御前が月美に勧めた!？」
「そう」
声だけで頷いてみせた。
「その通り」
「そうだったのかよ」
「その通り、そろそろ必要だと思って」
「つまり御前が全部仕組んでいたのかよ」
「全てはつきぴーの為」
また言う椎名だった。
「全部アドバイスして決めた」
「じゃあ俺はそれにまんまと乗せられたって訳か」
「そう。齊宮の考えていることも全部考えてた」
何処までも考えていた。まさに策士であった。

第十四話 夏の終わりにその二

「それで大成功」

「成功はいいけれどよ」

陽太郎はそのことは認めた。しかしであった。

「あのな、それでもな」

「文句あるの？」

「俺は全部御前に仕組まれたってのかよ」

「私はつきぴーの友達」

「それはもうわかってるよ」

「だからつきぴーの為にする」

あくまでこう言うのだった。

「そういうこと」

「ったくよ、何て奴だ」

陽太郎は憤懣やるかたない様子だった。

「こんな裏があつたのかよ」

「けれどだよ」

だがここで赤瀬が言ってきた。椎名の横でこれでもかという程巨大なパフェを食べながらだ。そのうえで陽太郎に対して言ってきたのである。

「それでも斉宮にとってよかつたと思うよ」

「俺にとつてもか」

「椎名は嫌いな相手には容赦しないし」

「ああ、そんな風だな」

「西堀さんとの付き合いも許さないしね」

「変な奴は絶対に近付けない」

椎名自身もそれは断言した。

「つきぴーに群がる悪い虫は全部駆除する」

「物騒な言葉だな」

「けれど言い換えればだよ」
また赤瀬が陽太郎に話す。
「斉宮が西堀さんに相応しい相手って認めてるってことだよ」
「そういうことか」
「そういうことだよ。だから斉宮にとってもいいことだよ」
「言われてみればそうだな」
「ここで陽太郎も頷くことができた。」
「そうだよな」
「そうだよ。それでさ」
「ああ」
「椎名はまだ言いたいみたいだよ」
「こう彼に言うのだった。」
「まだね」
「そうなのかよ」
「じゃあ選手交代だね」
「実にあっさりとした交代だった。」
「そういうことでね」
「はい、交代」
その椎名の言葉である。
「そういうことだから。次もね」
「そっちも考えてあつたんだな」
「斉宮は誘うと思っていた」
やはり読んでいた。椎名の読みはとにかく凄かった。
「絶対に」
「何でそこまでわかるんだよ」
「誘われたら誘い返す」
椎名が今言うのはこうしたことだった。
「そういうタイプだから」
「凄いな、そこまで読んでるなんてな」
「そうよね」

これには狭山と津島も驚きを隠せない。

「やっぱり椎名って凄いよ」

「天才的じゃないの？」

「何歩先も読んでこそ」

椎名は二人のその言葉を受けながら話す。

「それが軍師だから」

「御前軍師だったのかよ」

「つきぴーの軍師」

こう陽太郎に述べる。

「それが私」

「西堀さんも凄い軍師いるよな」

「そうよね。最強軍師よね」

狭山と津島はここでまた言う。思わず唖っている。

「こりゃ凄いわ」

「死角なしっていうかね」

「三百六十度全部見える」

こんな風にも言ってみせた。

第十四話 夏の終わりにその三

「それが私」

「で、斉宮は完全に陥落か」

「完敗よね」

二人は今度は陽太郎を見て話した。

「もうどう見てもな」

「一勝もできてないわね」

「何か腑に落ちないな」

陽太郎は今は憮然とした顔になっていた。

「今の流れってよ」

「けれど悪くない筈」

それはしつかりと言う椎名だった。

「斉宮にとつても」

「まあそれはな」

それを言われるとだった。陽太郎も頷くのだった。

「やっぱり。月美と仲良くなれるしな」

「もつともつと仲良くなるといい」

椎名は自分のコーラをストローですすりながら述べた。

「応援してるから」

「有り難うな、それは」

「ただし泣かせたら許さない」

「このことは釘を刺すのであった。」

「それは絶対に」

「わかってるよ。それはしないからな」

「あと何があっても護って」

今度はこう言ってきたのだった。

「つきぴーを」

「護れってか」

「そう、あれで心が弱いし素手だと弱いから」
居合や弓道をしていてもそれはだというのだ、
「だから護って」
「ああ、わかったよ」
陽太郎もそれで納得して頷いてみせた。
「それじゃあそれはな」
「そう、泣かせないで護る」
「二つを要約してもみせて話す。」
「それはして」
「ああ、俺だつてさ」
「男だから？」
「男以前に人間だからな」
「だからだと返すのだった。」
「それでだよ」
「そう、人間だから」
「俺そういうことしないよ」
「絶対にそうしてね」
「何があつてもな」
「だったらいい」
「ここまで聞いて頷く椎名だった。そうしてそのうえでまた話す。
「それにしても斉宮って」
「俺かよ」
「うん、思ったよりしつかりしてる」
「そうだというのだった。今それを話したのである。」
「そこで男って言わなかったし」
「男とか女とかそういう言い方って好きじゃないしな」
「だから今みたいな言い方にしたの」
「ああ、今はな」
「そうだと返したうえでだった。さらに話す。」
「昔はそういう言い方していた時期もあつたけれどな」

「何でそれ止めたの？」

「中学校の教師で最低な奴がいてな」

よくある話だ。最低な教師というものはどの学校にもいる。むしろそうした人間が異常なまでに多いというのが学校という場所の問題であるのだ。

「それでそいつがよく男がどうとか言ってるさ」

「だから止めたの」

「ああ。止めた」

それでだというのだった。

「だからそういう言い方はしないんだよ」

「成程」

「とにかく酷い奴だな。暴力の振るい方が半端じゃなくてな」

「どんな風だったの？」

「いつも竹刀持っててそれで殴ってたな」

今度は赤瀬の問いに答えていた。

「それでな。一旦殴ると何十発も殴ったりな」

「一旦暴力を振るったら止まらないタイプだったんだ」

「しかもそれがしょっちゅうだったんだよ」

「異常なまでに暴力的ってことだね」

「受身知らない生徒に床で背負い投げしたりな。これ前に言ったかな」

「そつえばそうだったかな」

赤瀬はここまで聞いてこう述べた。

第十四話 夏の終わりにその四

「そんな気もするね」

「とにかくそんな奴なんだよ。とんでもなかったな」

「そんな教師普通クビ」

椎名はぼつりと呟いて答えた。

「一般社会なら間違いない」

「実際にすぐに問題になって何処かに飛ばされたけれどな」

「だから普通はクビ」

「とにかくそれでそういう言い方はしなくなったんだよ」

ここまで話してであった。

「男だの女だつてのは」

「つまり反面教師か」

「そうね」

狭山と津島はそう解釈したのだ。

「完璧にそうだよな」

「そういう先生って何処にもいるのね」

「教師は選べないからね」

赤瀬も言ってきた。

「問題のある教師でもね」

「ああ、全くだよ」

陽太郎も苦い顔で赤瀬の今の言葉に頷く。

「教師って本当にとんでもないのいるよな」

「俺達の中学でもそうだったしな」

「そうそう」

狭山と津島も自分達の中学校について思い出して話をした。

「酷い教師いたからなあ」

「そうよね。えこ贔屓ばかりして」

「そんな奴よく教師になるよな」

「全くよ。どうなってるのよ」

「碌な人間じゃないから教師になる」

「これは椎名の言葉だ。」

「そういうもの」

「普通逆だろ」

「ねえ」

狭山と津島はここでまた話した。

「いい人が先生になるんだろ？」

「それが違うのかしら」

「日本じゃ違う」

椎名はストローを口に咥えて述べた。

「我が国の教師は違うから」

「まさか碌でもない奴をあえて選んだりしないよな」

「まさかと思うけれど」

「そのまさか」

まさにその通りだというのだった。

「それだから」

「うわ、最悪」

「そうだったの」

「日教組がある限りそうなる」

所謂日本教職員組合である。所謂左翼思想の元凶の一つであり極めて閉鎖的かつ独善的な組織である。その組織が教師の世界を牛耳っているのだ。

「あの組織がある限り」

「何かテロ組織にも見えるな」

「そうよね」

狭山と津島は日教組と聞いてまた話した。

「名前を聞いたらな」

「実際にどうなの？オウム真理教みたいな組織？」

「今はアレフなんじゃ？」

赤瀬がオウムについて突っ込んだ。

「それだったと思うけれど」

「ああ、そういえばそうか」

「そうね」

二人も赤瀬の言葉で気付いてそのうえで述べた。

「アレフだったんだ」

「じゃあアレフみたいなもの？」

「もっと悪質」

椎名の言葉は簡潔だが手厳しいものだった。

「北朝鮮とつながってるし」

「おい、そんなのが俺達の先生かよ」

「北朝鮮と結託してるって」

二人もこれには啞然だった。

「とんでもない組織じゃないのか？」

「そうよね」

北朝鮮がどういった国家についてはもう言うまでもなかった。誰も
もが知っている犯罪国家であり存在そのものが人類の敵である。そ
うした国家だ。

第十四話 夏の終わりにその五

「そんな国とだったのかよ」

「洒落にならないわよね」

「そうした組織があるから」

また話す彼等だった。そうしてだった。

とりあえずといった感じで赤瀬が一同に言う。

「ところで」

「宿題ね」

「うん、それを進めよう」

こう話すのだった。

「進んでないからね」

「そうか、それじゃあ」

「今はね」

狭山と津島が頷いてであった。そのうえでツレポート用紙を開く。

そうして書くのだった。陽太郎が言ってきた。

「何かな」

「どうしたの」

「いや、このレポート難しくないか？」

陽太郎は首を捻りながら椎名に返した。

「ちよつとな」

「難しいの」

「ああ、元々レポートって得意じゃないんだよ」

このことも言うのだった。

「それでこのテーマはな」

「絶滅した動物について」

「何かなあ」

書きながらまた首を捻るのだった。

「こんなに書きにくいなんてな」

「それで何の動物？」

「オオウミガラスだけれどな」

かつて北極海にいた鳥である。最初にペンギンと呼ばれていた鳥だ。食用として乱獲されそのうえで絶滅してしまった生き物のうちの一つである。

「書いてると気が滅入るな」

「そうなんだよなあ、俺ドードーだけれどな」

「私はリヨコウバト」

狭山と津島もそれぞれそれだった。

「書いてると鬱になるよな」

「全くね」

「僕もだよ」

赤瀬もそれは同じだった。

「ニホンオオカミだけれどね」

「それ生きてるかも知れない」

椎名は赤瀬にすぐに突っ込みを入れた。

「奈良県の奥の方に」

「そうみたいだね」

「それはわかったの」

「ネットでも書いてあったしそれを書いていた本もあるしね」

このことは諸説ある。ニホンオオカミは獲物を毛ごと飲み込む為それでその糞には毛が混じるがその糞を目撃した者もいるのである。

「それでね」

「そうだったんだ」

「私のフクロオオカミだってそうだから」

椎名はタスマニア島のこの生き物を扱っていた。

「これもだから」

「ああ、それもなんだ」

「生きているって言われている」

これもまた諸説ある。

「実際はどうかかわからないけれど」

「生きていればいいよな」

陽太郎はこう言った。

「絶滅つてのは何かな」

「ああ、暗くなるよな」

「全くよね」

「けれど生き残っている場合もある」

椎名は今度は一同を励ます様にして言ってきた。

「絶滅したことも多いけれど」

「生き残っていることもあるか」

「そうなのね」

「うん、だから」

また言う椎名だった。

「極端に悲しむことはない」

「だったらいいけれどな」

「そうよね」

それで少し救われた気になれたのは二人だけではなかった。

陽太郎もだ。レポートを書きながら少しだけその目を晴れたものにさせていた。

そのうえでだ。こう言うのだった。

「生きている場合もある、か」

「期待はできる」

「そういうえば恐竜が生き残ってるとかってな」

「そういう話もあるわよね」

狭山と津島は今度はそう話をした。

第十四話 夏の終わりにその六

「ネッシーとかな」

「そういうのもあるのね」

「恐竜もひよっとしたらいる」

椎名はその可能性を否定しなかった。

「ひよっとしたらただけれど」

「ひよっとしたらなんだね」

「うん、それでも」

今度は赤瀬の言葉に応えた。

「いると思う」

「いるか？」

陽太郎は椎名の今の言葉には懐疑的に返した。

「恐竜ってよ」

「目撃例はかなり多い」

「ネッシーとかあれか」

「そう、他にも一杯」

「あれって恐竜か？」

陽太郎が問うのはこのことだった。

「ネッシーって恐竜なのか？」

「違うっていうのね」

「あれ恐竜なのか？本当に」

そしてだった。陽太郎はここで自説を話した。

「鰻か何かじゃないのか？」

「鰻っていうのね」

「そういう感じに思えるんだよな」

陽太郎は首を傾げさせていた。そうしてそのついで話すのだった。

「あれってな」

「鰻なの」

「色が変わったたりしてるだろ」
「うん」

ネツシーの目撃例は不思議なことが多い。色が変わっていたり角があつたりする。その他にはコブがあつたりなかつたりしているのである。陽太郎もこのことを話した。

「魚つて。鯨とか色変わるだろ」

「それを言うのね」

「あれじゃないのか？」

「こつ話すのだった。」

「だから鰻かなにかじゃないのか？」

「そうかしら」

「椎名は恐竜だつていうのか」

「うん」

椎名はあくまでそう主張するのだった。

「そう思つけれど」

「どっちもネツシーはいるつて思つてるんだ」

二人に言つてきたのは赤瀬だった。

「どちらにしても」

「赤瀬は？」

「僕もいるとは思つよ」

それは彼も同じだった。それを確かに言う。

しかしだった。ここで彼はこつ主張した。

「あれは鯨か海驢だろうね」

「海驢なのね」

「そつ、海驢じゃないかな」

こつ主張するのだった。

「あれは」

「鯨か海驢か」

「そつじゃないかな」

陽太郎にも答える。

「僕はそう思うよ」

「うづん、どうなんだよそれ」

「斉宮は違っつていうんだね」

「俺はやっぱり鰻か何かだと思っただがな」

あくまでこう言うのだった。

「違うか？それは」

「僕は海驢だと思っよ」

「実際にどれだろうな」

「そうよね」

狭山と津島は三人の話を聞いてもどれか言えなかった。

「どれなのかはな」

「いるとは思っけれど」

こう考えているのは二人も同じだった。宿題のレポートをしながらそんな話をしていた。そしてこのことを自分の家に来た月美にも話した。

「っつて話してたんだよ」

「愛ちゃんらしいですね」

その話を聞いた月美は微笑んで述べていた。二人は今陽太郎の家のリビングのソファアに向かい合っつて座っつてだ。そのうえで話をしていた。

第十四話 夏の終わりにその七

「それって」

「あいつらしいんだ」

「はい、愛ちゃんらしいです」

微笑んでこう話すのだった。

「そういうところが」

「そうなのか」

「それがいいところなんです。夢があって」

「夢ねえ」

「ネツシーが恐竜だって思うことも」

まずはそこから話す。

「それに絶滅した動物画今も生き残ってるんじゃないかって思う」とも

「そのこともなんだ」

「はい、そうです」

また話す月美だった。

「それで私も」

「月美も？」

「その影響を受けてステラーカイギュウを選びました」

こう話すのだった。

「それで」

「ステラーカイギュウをなんだ」

「絶滅したってことにはなってますけれど」

発見されて二十七年である。ベーリング海にいたそのカイギュウは発見から僅か二十七年で人間によって絶滅させられたのである。

ステラーカイギュウは肉は美味でしかも脂も皮も良質だった。しかも人を警戒せず動きも極めて鈍重だった。しかも危機に陥っている仲間を助けようとする性質もまた備えていたのである。捕らえる

にあたってこれ程都合のいい生き物はなかったのだ。

「それでも」

「いるかな」

「目撃例が多いです」

月美が言っているという根拠はこのことだった。

「最近でもありましたし」

「じゃあいるのかな」

「いると思いたいですね」

「思いたい」

「はつきりと確かめられたわけじゃないですから」

「だから思いたいんだ」

「はい」

陽太郎の言葉にこくりと頷く。

「けれどいますよね」

「そうだよな。いるよな」

「そう思えば見つからないものも見つけられる」

こんなことも言う月美だった。

「愛ちゃんによく言われます」

「ああ、ここでもあいつなんだ」

「私、ずっと友達いなくて」

月美はふと寂しい顔になってこう前置きもしてきた。

「それで愛ちゃんは」

「そんな中でできたんだ」

「中学校の時に同じ塾で」

陽太郎には前に話したことだ。しかしここでも話したのである。

「一年の時に一緒のクラスになって」

「成績が同じレベルだったとか？」

「はい」

塾ではそのそれぞれの成績によってクラスが決まるということが非常に多い。それで彼女と椎名も同じクラスになったということなのだ。

「それでなんです」
「成程、よくあることだよな」
「そうですね。けれどそれで一緒になってから」
「あいつに色々教えてもらって」
「絶滅した動物のこともです」
「それもだというのだ。」
「そのうちの一つです」
「そういうことだったんだ」
「それでステラーカイギュウですけど」
「今月美が書いているそれだよな」
「凄く変わった動物なんですよ」
「こう陽太郎に話す。」
「マナティーとかジユゴンの仲間なんですけれど」
「ああ、あんな感じなんだ」
「けれど凄く大きくて」
「ええと、相当大きいんだっけ」
「九メートルはあったんですよ」
「その大きさを詳しく話すのだった。」

第十四話 夏の終わりにその八

「大きいものになると」

「九メートルって」

「殆ど鯨位はありますよね」

「それは位はあるよな」

陽太郎は頭の中で巨大なマナティを想像してみた。聞いた大きさにだ。するとかなりとんでもない生き物だと想像できたのであった。

「ええと、つまりは」

「つまりは？」

「俺のこの部屋全体よりまだ大きいんだ」

「長さもかなりですから」

「そうだよな。やっぱり凄いな」

想像してみてもあらためて認識することだった。

「そこまで大きいとな」

「はい。それなのに大人しくて」

「ジユゴンとかも大人しいよな」

「それと同じで」

「あんな感じなんだ」

「冷たい海のところに住んでいて天敵もいなくて」

「ドードーとかと似てるな」

この動物も思い出した。狭山達と話している時に出た鳥だ。狭山がレポートの題材にしていたこともここで思い出したりもした。

「それって」

「ええ、そういえば」

「あれも可哀想だよな、ドードーも」

「はい、何か調べていると」

「人間って愚かなのかって思ったりもするよな」

「そうした一面は確かにありますね」

月美もそれは否定しなかった。

「けれど人間が絶滅から救った生き物もいますし」

「どっちとも言えないか」

「地球の為には。ほら、人間はいらないうっていう考えですが」

「何か安っぽいSFでよくある話だよな」

「ああいう考えも間違ってるって思います」

少なくとも一国の宰相が言うような言葉ではない。そしてそうしたことを言う人間を持て囃す人間というのも非常に愚かなものである。少なくとも月美はそうした人間ではなかった。

「人間も地球の生き物です」

「何かがいらないって訳じゃないんだ」

「そう思います」

こう話すのだった。

「私は、ですけど」

「そうだろうな」

陽太郎も腕を組んで月美のその考えに頷いた。そうして言うのだった。

「これって極論だけれどさ」

「はい」

「そんなこと言う奴って自分は何もしないんだよな」

「そうですね、念仏みたいに言うだけで」

「それで動かない」

こうした主張をする人間の常である。

「自分が一番いらなとも言わないしさ」

「だからおかしいと思います」

「自分だって人間なんだから。じゃあ自分もいらなくなるけれど」

「けれど何もしませんよね」

「そういうこと言ったら自殺しかないけれどさ」

そうした意味では某国の首相は自殺しなければならぬ。だがそ

うした人間程我が身のことばかり可愛いものである。その首相もまた同じ輩であった。

「それ、ないよな」

「自殺もよくないですけどそれでも」

「嘔吐きだよな」

陽太郎はこの結論に至った。

「やっぱりな」

「はい、確かに」

「結局そういうのって綺麗事ってどうかさ」

「嘘でしかないんですね」

「やっぱりそうなんだろうな」

陽太郎は月美と話していてこのことを再認識した。

「本当に」

「ですよ。ステラーカイギュウだって絶滅していなかったら」

「保護するのは人間の役目か」

「人間だけが駄目とかはないです」

月美はきっぱりと言った。

「人間は善でもあり悪でもある」

「だよな、よく言われるよな」

「だからそう言うのは間違いです」

「つまり何かだけが悪いってことはない」

「はい」

これが月美の言いたいことだった。

第十四話 夏の終わりにその九

「そうも思います」

「月美ってさ」

「はい？」

「そういうところいいよね」

「こう言って微笑むのだった。」

「とてもさ」

「とてもですか」

「ああ、いいと思うよ」

微笑んだまままた告げたのだった。

「そういうさ、いいところも悪いところも見てそれで認めるっていうのは」

「人間誰もがそうだって言われまして」

「誰に？」

「お父さんにもお母さんにも」

「まずは両親からだった。」

「それに」

「椎名かな」

「はい、愛ちゃんにも言われました」

「やはり彼女の名前も出たのだった。」

「ですから」

「あいつにもな」

「愛ちゃんも。人間はそう簡単にわからないって言って」

「椎名が言いそうなことだよな」

「そうですね。それで私も」

「わかったんだな」

月美の言葉をここまで聞いてまた頷く陽太郎だった。

「成程な」

「わかったというよりは教えてもらいました」
「教えて？」
「はい、そうしてもらいました」
「そうだといいのである。」
「それでなのです」
「そしてです」
「そして？」
「私もそれでそう考えるようになりました」
「ううん、そういう経緯だったんだ」
それを聞いてだ。陽太郎も言うのであった。
「よくわかったよ」
「はい、それでなんですけれど」
「それで？」
「このステラーカイギウもそうだったとおもいまして」
「絶滅していない」
「そう思うようにしてます」
「絶滅したって思ったならそれで終わりだしね」
陽太郎は自然とこの言葉を出した。
「それでもう完全にさ」
「そうですね。それでもいるって思っていたら」
「探せるし見つけられるかも知れ名ない」
「そう思います」
「そうか、それじゃあ」
ここまで聞いてだった。陽太郎は一旦笑顔で頷いてから。また月美に話した。
「これからだけれどさ」
「これからですか？」
「俺の家に来てくれて悪いんだだけれどさ」
「こつ前置きしてからの言葉だった。」
「ちよつと行かない？」

「何処にですか？」
「見せたい場所があるんだ」
「見せたい、ですか」
「ああ、是非月美にな」
「また月美に対して言う。
「見せたいんだけどさ」
「それは何処ですか？」
「来てくれればわかるよ」
微笑んで話す。
「そこにさ。いいかな」
「わかりました」
月美は陽太郎のその言葉にすぐに頷いた。
「それじゃあ」
「よし、じゃあ今から行こう」
少し急いだ感じでの言葉になっていた。
「今からそこに」
「ええ」
「陽太郎」
「ここであった。家の奥から母親の声がしてきた。実は家にいてあえて奥に引っ込んでいたのだ。全ては彼に気を遣ってである。」
「外に出てもいいけれど」
「何だよ」
「変なことしたら駄目よ」
母が言うことはこれだった。
「いいわね、幾ら綺麗な娘でもね」
「そんなことしないよ」
息子はむっとした顔で母に返す。
「俺がそんなことするように見えるのかよ」
「ええと、西堀さんだったわよね」
「はい」

「陽太郎が何かしたら容赦する必要はないから
月美に対しても言うのだった。」

「その居合で切り捨てていいからね」

「切り捨ててって」

「女の子も強いんだって見せてやって」

随分と物騒なことを言うのだった。

「わかったわね。それでね」

「それは」

「ああ、気にしなくてもいいからさ」

陽太郎はたまりかねた顔で月美に対して告げる。

第十四話 夏の終わりにその十

「うちのお袋いつもああだから」

「いつもですか」

「妹にも何かつていこうと言ってるんだよ」

「何てですか？」

「だから今みたいにさ。悪い男が言い寄ってきたらもうのしてしまえってね」

「それはまた」

それを聞いてだ。月美は驚いた顔になってしまった。そのうえで言うのだった。

「かなり凄いですね」

「それでいい男を見つけてさ」

「いい男をですか」

「悪い男はのしていい男をとてさ」

そうだというのである。

「それはいいけれどものしてっていうのはないよな」

「普通は言いません、よね」

「言わないよ。絶対にさ」

それはないというのだった。

「うちのお袋だけ変わってるんだよ」

「はあ」

「だから気にしなくていいから。そんなつもりもないし」

「そうですか」

「こら、意気地なし」

また家の奥から声がしてきた。

「男なら積極的にいきなさい」

「変なことしたら布って言ったのは誰だよ」

「悪い男なら斬れってことよ」

「こつ息子に言い返す。」
「そういつことよ」
「だから何だよ、矛盾してるじゃないか」
「矛盾してないわよ」
「また言い返す母だった。」
「それはね」
「矛盾してないのかよ」
「正々堂々とルールに則って押す」
「母は言ってきた。」
「それが男の子なのよ」
「それがなのかよ」
「そうよ、それがなのよ」
「こつ彼に告げるのだ。」
「わかったわね。それは」
「何かわかったようなわからないようになっていつか
「そういつか？」
「全然わからないんだけれどさ」
「むっとした顔で姿を見せない母に対して返す。」
「それって」
「じゃあわかりやすく言うわね」
「ああ、それで何なんだよ」
「騎士になりなさい」
「いいわね。騎士になりなさい」
「騎士に？」
「そう、騎士によ」
「こつ言ってきたのだった。」
「騎士になりなさい」
「騎士ねえ」
「つまりナイト」

今度は英語読みであった。あえてこれでも呼んでみせたのだ。

「ナイトになるのよ。いいわね」

「ナイトになれていうのか」

「正々堂々と戦って女の子を尊敬してその身を守る」

殆どアーサー王かローランの歌の話だった。

「そうしなさい、いいわね」

「何かえらく格好いいこと言うな」

「あんた剣道やってるし丁度いいじゃない」

「騎士は剣道じゃないだろ」

陽太郎はこのことにはかなりいぶかしんで言葉を返した。

「あれって武士のやるやつだろ？騎士ならフェシングじゃないか」

「武士でも何でも女の子は大切にしなさい」

言葉の確信だった。

「いいわね」

「ああ、わかったよ」

陽太郎も母の言葉に頷くことは頷いた。

第十四話 夏の終わりにその十一

「つまり礼儀正しく。女の子を大事にしろってことだな」

「そのうえでアタックしなさい。それで月美ちゃん」

「は、はい」

「この馬鹿息子御願いね」

言葉が笑っていた。

「変なことしたら遠慮なくひっぱたいていいから」

「ひっぱたくって」

「男っていうのは女の子が引っ張っていかないと駄目なところがあるから」

月美はこう言うのだった。

「だからね。御願いね」

「そうなんですか」

「女は太陽、男は月よ」

日本神話の話である。何故か日本でだけこうなっている。太陽は国旗にも使われている日本の象徴でもあるがそれは女性ということになるのだ。

「だからなのよ」

「女の子が太陽なんですか」

「そういうこと。じゃあお日様として御願いね」

「陽太郎君をですか」

「こんなのだけれどね」

「何か俺って」

陽太郎は二人の話を聞きながらいぶかしむ顔で言った。

「無茶苦茶馬鹿みたいだな」

「いえ、そんなことは」

「自分を馬鹿だと思っておきなさい」

月美はフオーロしようとするが母の言葉はこんなものだった。

「いいわね」

「馬鹿って思うのかよ」

「その方が何かとやりやすいのよ。利口って思うよりはね」

「賢いより馬鹿の方がいいのかよ」

「世の中はそういうものなのよ」

今の陽太郎にはわからない言葉だった。しかしそれでも母は言ったのである。

「この言葉覚えておきなさい。それじゃあね」

「ああ、今からな」

「行って来なさい」

こんな話をしてだ。そのうえで外に向かう。そうして陽太郎が月美を案内した場所は。

波止場だった。そこに二人で来たのだ。コンクリートの波止場の左右には海が広がっている。そして前にはもう赤くなり海に落ちようとしている太陽があった。

その海も赤く照らされ銀の輝きと二色になっている。陽太郎はその海を月美に見せたのである。

そのうえでだ。彼は隣にいる月美に対して言った。

「ここなんだけれどさ」

「ここですか」

「そう、ここなんだ」

「ここ月美に話すのだった。」

「ここを見せたくてさ」

「それで案内してくれたんですか」

「どうかな、ここ」

また月美に対して問う。

「どう思っかな」

「綺麗ですね」

月美は優しい微笑を浮かべて陽太郎の問いに答えた。

「とても」

「気に入ってもらえたかな」
「私海好きですから」
そしてこうも言った。
「それに」
「それに？」
「夕暮れも好きなんです」
微笑んでの言葉だった。
「ですから」
「気に入ってもらえたんだ」
「はい」
にこりと笑つての返答だった。
「とても」
「そう、よかったよ」
「それにですね」
月美の言葉は続く。
「何かここつて」
「ここつて？」
「見ているだけで吸い込まれそうですよね」
「こつ言つのがあった。」
「本当に」
「そう思えるんだ」
「はい、思えます」
にこりと笑っていた。ここでも。

第十四話 夏の終わりにその十二

「とても」

「そうか、そこまで気に入ってもらってよかったよ」

「それでなんですけれど」

「それで？」

「何かこうした場所にいますと」

月美の言葉がだ。少しずつうつうつとってきていた。そうしてだつた。

「いいですよね」

「うん、そうだね」

「何か。ロマンチックで」

声は次第にうつとりとなっていていっている。そうして。

「あの」

「今度は何だい？」

「陽太郎君がよかったですけれど」

「俺がよかったですら」

「はい、よかったですけれど」

こう言つてであつた。

「いいです、私は」

「えっ、何がいいって」

「恋人同士ですよね、私達」

顔を俯けさせてだ。そのうえでその顔を赤くさせていた。

「そうですよね」

「うん、そうだけれど」

それは陽太郎も頷いた。まさにその通りである。

「それは」

「そうですよね。だったら」

言葉は中々出ない感じだった。しかしそれでも月美は言うのであ

った。

「キス……ですけれど」

「キス？」

「はい、キスです」

「それだというのである。」

「キスを御願いできますか」

「あの、キスって」

「駄目ですか」

顔を俯けさせたまま陽太郎に問うてきた。

「それは」

「いや、嫌じゃないけれど」

「恋人同士ならキスをするって」

また言ったのだった。

「そう聞きましたから」

「それでなんだ」

「私こういうことはよく知らないです」

これは恋愛というものに疎い月美らしい言葉だった。

「ですけど。それでも」

「いいんだよな、本当に」

陽太郎も俯いてしまった。それでも言ったのだ。

「あのさ、俺が相手で」

「はい」

陽太郎の問いにだ。月美はこくりと頷いてみせた。

「そうです。御願います」

「俺なんかでいいんだ」

「陽太郎君だからです」

「俺だからって」

「はい、恋人ですから」

そしてだった。さらに言ってきたのだった。

「好きですから」

「俺のことが好き」

「言うことが凄く恥ずかしいですけどね」

実際にその顔が真っ赤になっている。それは否定できなかった。

「それでも。好きです」

「俺のことが好きなんだ」

「陽太郎君はどうですか？」

月美からの問いも来た。

「それは。私のことは」

「あかさ。俺もさ」

「はい」

「言いくいんだけれどさ」

自然と前置きせざるを得なかった。そのうえでの言葉である。

「俺も。月美のこと好きだよ」

「私のことですか」

「何か。一緒にいるうちにさ」

「そうですよね。少しずつ」

「好きになったよ、本当に」

「私もです」

そうして意味においてだった。二人は同じだった。そうした自然に形成されていく恋愛感情だった。それが二人の恋愛感情だったのだ。

第十四話 夏の終わりにその十三

「一緒にいるうちに」

「ああ、本当に一緒にいるうちに」

「最初はそれ程でもなかったんですけど。少しずつ」

「そうなっていったよな。少しずつだけれど」

「じゃあ私は」

「いいんだよな、俺で」

陽太郎は月美に顔を向けた。そのうえで問うた。

「キス。はじめてだよな」

「はい」

「それが俺で」

「御願います」

月美は勇気を出した。そうして陽太郎に顔を向けた。そのうえで応えたのだ。

「是非」

「わかったよ」

ここまで聞いてだ。陽太郎はこくりと頷いた。

それからゆっくりと近付いてだ。彼は言った。

「今からな」

「はい、今から」

二人は見詰め合い抱き締め合った。そうして目を閉じて顔を近付け合っつてそのうえで。夕陽の中で唇と唇を重ねたのであった。

それが終わってからだ。月美はだ。真っ赤な顔で陽太郎に言った。

「キス、しましたね」

「うん」

「はじめてのキス。本当に」

「実はさ」

波止場から街に戻ってきていた。その中での話だった。

「俺もだつたんだ」

「陽太郎君も？」

「うん、はじめてだつたんだ」

「こう言うのだった。」

「実はさ」

「そうだったんですか」

「女の子と付き合ったこともなかったんだよ」

「このことも話した。」

「実はさ」

「私と同じだつたんですね」

「そうだよな。同じだったよな」

「そうですね。同じですよな」

「それでこうしてキスして」

「はい」

「はじめて同士だつたんだな」

そのことをだ。今心の中で噛み締めるのだった。それは陽太郎だ
けではなかった。

「不思議だよな、何かキスしたとは思えないよな」

「そうですね、夢みたいですよ」

「それでも実際に今」

「はい、キスしました」

月美は頬を赤らめさせて述べた。

「確かに」

「そうだよな、俺達本当に」

「嘘みたいですけど。けれど」

月美は自分の唇に右手の指を当てていた。そのうえでまた言った。

「感触はまだ」

「残ってるんだ」

「はい、残ってます」

微笑みは消えない。それはどうしてもだった。

「こうして今も」

「俺も」

そしてそれは彼もだった。

「残ってるよ」

「ですよ。夢みたいなのに感触は残っていて」

「不思議だよ。あのさ」

「はい」

「また、ここに来ないか？」

陽太郎も顔が赤くなっている。その顔で月美に対して言ったのだ。

「ここに。この波止場に」

「ここにですか」

「ここって人あまり来ないんだ」

このことは自然に出た。

「朝に釣りに来る人がいる位でさ」

「それ以外はですか」

「うん、あまり来ないんだ」

そうだというのだ。言いながら自分の右手を見る。遠くには砂浜が見える。それと防波堤も見える。まさに海の場所であった。

第十四話 夏の終わりにその十四

「皆あつちに行くから」

「砂浜ですか」

「そうなんだ。だからさ」

「また機会があればですね」

「うん、ここにさ」

こつ月美に言つのである。

「来ような」

「わかりました。それなら」

「それじゃあ今日は帰るか」

「はい」

また陽太郎の言葉に頷いた。そして。

「駅まで」

「一緒に」

「そうですね。もうすぐ夏休みも終わりですからけれど」

「早いよな」

陽太郎は今度は少しくすりと笑った。

「何かな。すぐだよな」

「そうですね。あつという間でしたね」

「四十日以上もあるのにいつもすぐに終わるよな」

「今年は特にそうでしたね」

「ああ、本当にな」

月美のその言葉に夕陽の中で頷いた。その夕陽も深くなつていつている。

「あつという間だったよ」

「気付いたら今こうしていますし」

「短かったな。けれど」

陽太郎は言った。

「楽しかったよな」

「楽しかったですか」

「月美はどうなんだよ、そこ」

微笑んでだった。こう月美に問うたのである。

「この夏休み楽しくなかったか？」

「それは」

「月美とデートもできたし家にも行けたしな」

デートもだった。多くしてきた。陽太郎にとってはそれもいいことになってきているのだ。

「それに今だって」

「今も。そうですね」

「こない夏休みなかったよ」

「こう言うのだった。」

「それで月美はどうなんだ？」

「私事です」

月美はまた述べた。

「私も。短くて」

「楽しかったんだな」

「はい、とても」

にこりと笑っていた。そのうえでの言葉だった。

「楽しかったです。今は特に」

「今は、か」

「はい、陽太郎君もですよ」

「うん、そうだよ」

その通りだと。陽太郎は微笑んで答えることができた。

「こんな楽しい思い出ってないよ」

「このままずっと一緒にいたい位です」

月美はこんなことも話した。

「ここにずっと」

「ははは、そうだよな」

陽太郎はここでも笑顔だった。

「ずっと一緒にな。いたいよな」

「時間が過ぎてしまうのが惜しいです」

「惜しいよな。けれどさ」

「けれど？」

「これからも一緒にいたらそうじゃないんじゃないかな」

陽太郎はだ。ここでこう言ったのだった。

「一緒にさ。いたらさ」

「一緒にですか」

「そう、一緒にさ」

これが今の陽太郎の言葉だった。

「惜しいって思う時間はないんじゃないかな」

「そうでしょうか」

「今と同じだけ。いやもつと楽しい時間を過ごせればさ」

そうではないかと。陽太郎は話した。

「そうじゃないかな」

「そうですか」

「だからさ。夏休みが終わっても」

暫く正面に向けていたその顔をだ。また月美に向けての言葉だっ

た。

「一緒にいような」

「はいっ」

月美にしては強い返答だった。

「それではこれからも」

「一緒にな」

「いましょう、二人で」

「うん、二人でさ」

月美はにこりと笑っていた。そして陽太郎もだ。二人でにこりと笑っていた。夏の終わりの夕暮れの時の話であった。

第十四話

完

2
0
1
0
・
6
・
2
2
1

第十五話 抱いた疑惑その一

第十五話 抱いた疑惑

「よかったね」

「ええ」

二学期がはじまった。始業式が終わるとすぐだった。椎名は四組に行つてそのうえでいつも通り月美の席の側に来て彼女と話をしていた。

その時に陽太郎とのかを一部始終聞いた。当然あのこともだ。それでだった。椎名は彼女がしたことを心から喜んで答えたのである。

「勇気出したけれど」

「斉宮はあれで奥手だから」

「奥手なのね」

「そう、奥手だから」

「だから積極的に？」

「女は度胸」

椎名はここでこんなことも言った。

「だから」

「それで積極的になの」

「そう、何をするかは私がアドバイスするから」

つまり軍師に徹するといふのだった。

「それは安心して」

「有り難う、いつも」

「けれどするのはつきぴー」

他ならぬ月美だといふのだった。

「勇気を出すのは」

「そつなのね。私なのね」

「そう、つきぴー」

また月美に対して話した。

「だからしつかりとする」

「そうよね。私がしつかりしないと」

「さもないと斉宮は一步も動かない」

このことも話すのだった。

「だから自分から動く」

「私から」

「斉宮も前に押すから」

「陽太郎君もなの？」

「お互いに前に出ないと駄目」

クールな顔と口調である。しかしその内容は熱いものだった。

「恋愛とはそういうもの」

「私だけでなく陽太郎君も」

「そう、二人共前に出る」

椎名はまた言った。

「そうする。いい？」

「うん」

月美は椎名のその言葉に頷いた。

「じゃあ私勇気を出すから」

「私が策を出すから」

「それで陽太郎君も」

「背中を押す。蹴っ飛ばしてでも前にやるから」

言葉はかなり極端だった。過激ですらある。

「つきぴーもね」

「そうするわ。私頑張るから」

そんな話を教室でしていた。だが周りには何を話しているかはあまりわからなかった。皆それぞれ話をしたり携帯をいじったりしていたからだ。しかしであった。

教壇のところにいる橋口がだ。二人の方を見ながら仲間達に話した。

「何かさ、西堀の奴だけねど」

「どうしたの？」

「何かあったの？」

「あのいつものチビと彼氏がどうとか話してるわよ」

「こっ野上と州脇に話したのである。」

「何かね」

「えっ、あいつが!？」

「彼氏って!？」

「そうよ。何か積極的にとかどうとか」

「こっ二人に話すのだった。」

「言ってるけれど」

「そんな訳ないじゃない」

「そうよ」

しかしであった。野上も州脇も橋口のその言葉にすぐに言い返した。

「あいつがどうして彼氏なんかできるのよ」

「あの引っ込み思案が」

「わからないわよ」

橋口はその二人に逆に言い返した。

第十五話 抱いた疑惑その二

「それはね」

「わからないって」

「どういことよ」

「だから。ほら、あの胸じゃない」

今は月美のその豊かな胸を指し示していた。

「あの胸」

「でかいわね、相変わらず」

「夏服だから余計に目立つし」

二人もその胸を見て言う。

「あの胸に惑わされて、ならどう?」

「言われてみればね」

「有り得るわね」

三人でそうした話をしてしているとだった。ここで。

星華が来た。そうしてだった。

「只今」

「あつ、星華ちゃん」

「お帰り」

「ふう、やっと終わったわ」

星華は溜息混じりに三人に対してこう言った。

「何かと手間がかかったわ」

「お疲れ様」

「女子バスケ部も何かと大変ね」

「まあね。仕方ないわよ」

星華はこう三人に返した。

「私が一年のまとめ役みたいなものだしね」

「他にはいないの?そういう娘は」

「誰かいないの?」

「それがね」

困った顔での言葉だった。

「私以外にはね。これといってね」

「そうね、いないのね」

「誰も」

「いそうでないのよ」

よくあることだった。何でもいそうでないものだ。そして一人はいる。その一人がここでは星華であったというわけなのである。

「それで私がね」

「けれど星華ちゃんがいたらね」

「そうそう」

「それで大丈夫じゃない」

「頼りにされてるってこと？」

星華は三人の言葉からこのことを悟った。

「つまりは」

「そう考えたらいいんじゃない？」

「そうよね」

「ポジティブにね」

三人はそうではないかと話した。

「そう考えようよ」

「後ろ向きでもいいことないしね」

「それでどう？」

「そうね」

そして星華もそちらの考えでいくことにするのだった。三人の今の言葉に対してこくりと頷いてそれからまた言ったのである。

「そう考えるわ」

「それでよしってね」

「やっぱり星華ちゃんは何でも前向きでないと」

「成績があまりよくななくてもね」

「成績は余計」

州脇の今の言葉には少し苦笑いで返した。

「私だつてこれでも努力してるんだし」

「赤点は取らなかつたよね」

「追試はなしだったのね」

「そうよ、ないわよ」

その通りだと答えるのだった。

「取つたら後が大変だし」

「それを言えば頑張ってるわね」

「うんうん、確かに」

「必死だつてことね」

「そうよ、必死よ」

星華はその通りだと答えた。

「私だつてね」

「成程ね、そうなのね」

「星華ちゃんも勉強してるんだ」

「大学にも行きたいし」

そしてこんなことも話した。

第十五話 抱いた疑惑その三

「八条大学ね」

「ああ、そつちな」

「八条大学に進学するの」

「ええ、そのつもりなのよ」

「このことも話すのだった。」

「実はね」

「いいんじゃない？それも」

「そつよね」

「何学部かが問題だけれど」

「法学部。いえ」

ふとだ。脳裏に陽太郎の言葉を思い出してだった。

「まだ決めてないわ」

「そつなの」

「学部まではまだ決めてないけれどね」

それはだというのだった。

「それでもね。八条大学に行きたいわ」

「私もそこにしようかしら」

「そつよね」

「エスカレーターでね」

三人もそこにしようかと考えた。そうしてだった。

星華はここまで話してだ。そうしてそのうえで三人に対して問うた。

「それでなんだけれど」

「それでつて？」

「さつき何の話してたの？」

目をしばたかせながら三人に対して問うた。

「それで」

「ああ、ちよつとね」

「西堀とあのちびっ子の話聞いてたのよ」

「そうだったのよ」

「あいつ等の？」

その名前を聞いてだった。星華の顔がすぐに歪んだ。奇麗な眉が顰められる。

「あの連中がどうかしたの？」

「西堀に彼氏ができたみたいなのよ」

「何かね」

「彼氏ね」

それを聞いてだ。顔をさらに顰めさせた星華だった。

「それができたの」

「何か二人で色々話してるわよ」

「これからのことをね」

「あいつに彼氏がねえ」

星華は今度は首を捻った。

「あんな奥手そうなのに」

「奥手でもそれで男好きなんじゃない？」

「そんな顔してるしね」

「そうよね」

三人がここで話した。

「普段から男に媚びてるしね」

「それを考えたらね」

「普通にあるじゃない」

「そうね。言われてみれば」

星華も月美については全くわかっていなかった。わかっていると
思い込んでいるだけだ。それで三人の言葉にも頷いたのである。

「その通りよね」

「だからよ。どうせそうしたのよ」

「その彼氏だったぶらかしてね」

「あの胸とか使って」

「しかも家お金持ちだったわよね」

「これは星華の言葉だ。」

「条件揃ってるわね」

「嫌な奴よね」

「全く」

「何か腹が立ってきたわ」

「そうね」

星華は二人のその言葉に頷いた。

「本当にね」

「どうする？それで」

「あいつどうしようか」

「まあ放っておいてもいいんじゃない？」

星華はこう三人に返した。

第十五話 抱いた疑惑その四

「あのチビがいつも傍にいて手出ししにくいし」

「あのチビも鬱陶しいわね」

「全く」

「それにその彼氏も馬鹿な奴みたいだし」

相手が誰かわからない。しかしそれでも馬鹿にして言った。

「だからね」

「放っておいてもいいか」

「それじゃあ」

「馬鹿は放置ってことで」

「精々幸せになるといいわ」

星華を見て馬鹿にした顔で述べたのだった。

「精々ね」

「じゃあ私達は見るだけってことでね」

「何もしない」

「相手が弄ばれるのを見てるだけで」

「ああいう奴って男騙して楽しむからね」

星華も三人もここでも誤解を確信だと錯覚していた。そのうえで
の言葉だった。

「それで痛い目見るといいのよ」

「何か中学校で男の子が告白してきてそれをいつも断って相手が落ち込むの見て楽しんでたらしいしね」

これは野上の言葉だ。

「私の中学校の時の友達から聞いたのよ。同じ高校にあいつと同じ
中学の娘がいてそこからね」

「えっ、何それ最悪」

「性格凄く悪いじゃない」

それを聞いて州脇も橋口も言った。

「そんな奴なの」

「言われてみればそんな感じよね」

「確かにね」

「だからね」

野上は意地悪そうな、悪意のある笑みを浮かべて述べた。

「その彼氏も最後には痛い目を見るわよ」

「自業自得ね」

星華は野上のその話を聞いて馬鹿にした笑顔で述べた。

「悪い女に引つ掛かるからよ」

「そうよね、本当にね」

「彼女は選べっての」

「そうそう」

「私も。そうね」

星華はここでまた陽太郎の顔を脳裏に思い浮かべた。

「そう思っわ」

「そうでしょう？だからね」

「そいつはどうなってもいいけれどね」

「別にね」

三人もここで話す。

「まあそれでもあいつは許せないけれどね」

「男たぶらかして遊ぶなんてね」

「とんでもない奴よ」

「全く」

「あいつ、見てなさいよ」

星華は目を怒らせていた。

「絶対に懲らしめてやるから」

「何する？それで」

「どうしてやるの？」

「考えておくわ」

星華は今はそのままで考えていなかった。腕を組んで目を怒らせて

いるだけだ。

「けれどすぐにね」

「やっつけるのね」

「そうするのね」

「そうするわ。只じゃおかないから」

「こつ話すのである。」

「絶対にね」

「そうね、じゃあね」

「そうしよう」

「何があってもね」

三人も星華のその言葉に頷いた。そのうえで四人で決意を固めるのだった。

しかしだった。その月美はだ。今も椎名と明るく話していた。

「それじゃあだけれど」

「うん」

椎名の言葉に少しだけ明るい顔で応える。

「今度は何をすればいいの？」

「暫くはこのままでいい」

「これが椎名の返答だった。」

「このままで」

「何もしなくていいの」

「キヌは大勝負だった。それに勝ったから」

「今は何もしないの？」

「そう、むしろ動いたら駄目」

「これが椎名の提案だった。」

「むしろ」

「そうなの」

「そう、動いたら駄目」

月美に対して強い顔で答えた。

第十五話 抱いた疑惑その五

「このまま斉宮と一緒にいるだけでいい」

「一緒になのね」

「そう、それだけで進んでいくから」

「よくわからないけれど」

「わからなくてもいい。後でわかる」

椎名はここでは深く言わなかった。

「だから」

「そうなの」

「そう、つきぴーとあいつと一緒にいるだけで」

「あいつ？」

あいつと聞くとだった。ふと星華が声をあげた。

「誰のことかしら」

「だからその馬鹿でしょ」

「あいつに騙されてるその馬鹿」

「そいつのことでしょ」

三人はここでも星華に対して話した。

「だから特に気にすることないじゃない」

「うちの学校の奴か他の学校の奴かはわからないけれどね」

「それでもね」

「そうね。気にすることはないわね」

星華もそれで頷いたのだった。

「別にね」

「そうそう、それだったらね」

「まあ今は聞いているだけでいいじゃない」

「見ているだけでね」

「そうね。今はね」

星華もそれで頷いた。そうしてだった。

今は月美を嫌悪の目で見るだけだった。それで留まることができた。

そしてだ。月美と椎名の話は続いていた。

「このまま二人でね」

「デートね」

「そう、行き帰りの」

ここは星華達には聞こえなかった。

「今何て言ったの、あのチビっ子」

「ええと、何？」

「聞こえなかったけれど」

「ねえ」

四人はこれには戸惑ってしまった。

「あいつの喋り方って何か淡々としてるし」

「声も小さめだし」

「だからね」

「今は」

それだった。聞こえなかったのだ。それが彼女達にとっては残念だった。

月美はだ。椎名のその言葉に頷いていた。

「じゃあ今はこのままデートしていればいいのね」

「それでも随分違うから」

「そういえば」

月美もここで頷いた。

「これまでとはそれだけで随分違うわね」

「そう、デートなんてしていなかった筈」

「ええ、確かに」

まさにその通りだった。

「そうよね。全然ね」

「そこが違うから。動いていないけれど進んでいる」

「だから今は動かなくていいのね」

「動く時になつたら言つから」

椎名は静かな顔で話した。

「そしてあいつも後ろから押す」

「有り難う」

「何なら背中から蹴つ飛ばす」

「ここで言葉は少し過激になつた。

「そうするから」

「蹴つ飛ばすつて」

「例え。ただし」

「ただし？」

「必要ならそうする」

目には感情がない。椎名のその無表情な顔そのままである。しかしそれでも本気であることは月美にはよくわかることだった。

「つきぴーにはそういうことしないけれど」

「何で彼だけなの？」

ここで陽太郎と言わなかったのは偶然だった。しかしそれでもそれがそのまま星華達から彼女自身を守ることになったのである。

第十五話 抱いた疑惑その六

「それは」

「レディーファースト」

椎名は言った。

「それ」

「レディーファースト？」

「特につきぴーみたいな娘には」

そうするというのである。

「だから」

「それでなの」

「そう。レディーファースト」

椎名はまたこの言葉を述べてみせた。

「それ」

「有り難う」

「お礼はいい」

それはいいとした。ここでもだった。

「それに私達友達じゃない」

「友達でもそれでも」

「つきぴーは謙遜し過ぎる。それもよくない」

また言う椎名だった。

「もっとおおらかに構えていい。そっちの方がいい」

「けれど」

「できなくてもいいけれど意識しておくといい」

そうだというのだった。

「このことは」

「おおらかなの」

「優しくおおらかに」

こつも話した。

「もつともつきぴーは元々優しいけれど」
「有り難う」

「その優しさはあいつにも絶対に伝わる」
それはだというのだった。

「だから安心していい」

「絶対なのね」

「そう、絶対」

断言であった。

「あいつはそういうのは絶対に伝わるしわかるから」

「そう。じゃあこれからも」

「動かなくていいから頑張る」

動かないということは念押しだった。

「そういうことで」

「うん、じゃあ」

こんな話をしたのだった。そうしてだった。

陽太郎は陽太郎でだ。二学期になってクラスでまた狭山達とあれこれ話していたのであった。その内容は最初はとりとめもないものだった。

「それで御前等この夏は」

「ああ、いつも通りだよ」

「本当にね」

二人はこう陽太郎の問いに答える。赤瀬も交えて陽太郎の席の周りに集まっている。そのうえで話をしているのである。

「別にな」

「本当にこれまでの夏も同じよ」

「同じっていうと？」

「だからよ。何かだべってな」

「図書館とか喫茶店で」

場所だけは様々らしい。

「お互いの家で宿題したりゲームしてな」

「それだけよ」

「おい、お互いの家に行つてたのかよ」

陽太郎はそのことに驚いて問うた。

「それって凄いいんじゃないのか？」

「幼稚園の頃からだけれどな」

「それがどうかしたの？」

二人は全く自覚していなかった。そう、全くである」

「親も普通に入れるしな」

「家族みたいなものよ」

「何か全然緊張ないんだな」

陽太郎はそこまで聞いて少しがっかりとした。少なくとも期待したものを聞けなくて残念に思っている自分に気付いたのである。

「そんなものか」

「そうだよ、何せ幼稚園の頃からずっと一緒なんだぜ」

「もうね」

「キスとかはないか」

「何だそりゃ」

「食べられるの？」

返答はこんなものだった。

「そんなのねえよ」

「私達の間にはね」

こつ答えが返ってきた。

第十五話 抱いた疑惑その七

「そんなものか」

「そうだよ、何せ幼稚園の頃からずっと一緒なんだぜ」
「もうね」

「キスとかはないか」

「何だそりゃ」

「食べられるの？」

返答はこんなものだった。

「そんなのねえよ」

「私達の間にはね」

こう答えが返ってきた。

「何かいつも一緒にいるとな」

「そうしたこともないっていうかね」

「っていうかそれって」

赤瀬がここで横から言ってきた。

「倦怠期の夫婦なんだけれど」

「おい、まだ十六でかよ」

「倦怠期って」

二人も流石にこの指摘にはあまり面白い顔をしない。

「俺達ってそんなのか？」

「そこまであれになってる？」

「話を聞く限りはね」

そつだと答える赤瀬だった。

「そう聞こえるよ」

「うっ、そりゃまずいな」

「何とかしないと」

こう言われるとだった。流石に二人も危惧を覚えて顔色を変える。しかしであった。

「とはいってもなあ」
「そうよね」
「すぐに話の調子を変えるのであった。」
「別に何もな」
「これからどうしようってこともないし」
「そういうのが駄目なんじゃないのか？」
陽太郎もここで二人に言った。
「やっぱりな。何かこう付き合ってるとか好き同士っていうかな」
「いや、俺好きじゃないし」
「私もよ」
「言われるとすぐに否定する二人だった。」
「こんな奴よ」
「特にはね」
「そう言い合うのが駄目なんじゃないかな」
「すぐに赤瀬の突込みが来た。」
「やっぱりね」
「俺もそう思う」
陽太郎は赤瀬の言葉に同調した。
「そんなのじゃやっぱりな」
「おい、何だよ斉宮よ」
「何でもわかってるって口調じゃない」
二人はその陽太郎に即座に抗議してきた。
「何かあったのかよ」
「そうよ、西堀さんも」
「少なくとも御前等よりはだと思っけれどな」
「あえて何があったかは言わなかった。」
「っていうか御前等もうそのままでもいいんじゃないか？」
「いいって？」
「それってどういうこと？」
「何かすっごい自然だからな」

だからだというのである。

「もうそのままだな」

「つまり夫婦みたいだったか」

「その倦怠期の」

「そう、だからだよ」

そのものずばりであった。

「そうでいいんじゃないのか？そのままです」

「そう言われると面白くないな」

「そうよね」

狭山も津島も今の言葉には嬉しくなさそうであった。

「何かよ、倦怠期を乗り越えるとかな」

「そういう智恵ってないの？」

「冒険」

突如として声が聞こえてきた。

「それがいい」

「ああ、それが」

「それなのね」

二人はその言葉に頷くのだった。

第十五話 抱いた疑惑その八

「冒険なあ」

「じゃあ何処がいいかしら」

「お化け屋敷」

声はまた言ってきた。

「それがいい」

「そうか、それでな」

「椎名は何処がいいと思うの？」

言ったのは津島だった。

「それで何処の遊園地がいいのよ」

「行っただんならわかるんだよな」

狭山も言う。実は二人はその声の色からもう察していたのである。

「どの遊園地？」

「それで何処がいいんだよ」

「八条テーマパーク」

椎名が薦めるのはそこだった。

「その遊園地はかなりいい」

「ああ、あそこか」

「噂には聞くけれどね」

二人はそこだと聞いてすぐに頷いたのだった。

「滅茶苦茶怖いんだって？」

「病院みたいな形で」

「そう、トラウマになる」

そこまでだというのである。

「一度見たら忘れられない」

「実はね」

今度は赤瀬が言ってきた。

「一度一緒に行ってきたんだ」

「ああ、椎名とか」

暫く話を聞いていた陽太郎がこう指摘した。

「二人でだよな」

「わかるんだ」

「何かちよつとわかつたんだよ」

「そうだと赤瀬に返す。」

「そうか、それでか」

「凄かつたよ。椎名さんは全然動かないけれどね」

「赤瀬も」

それは二人共だというのだつた。

「全然動かなかつた」

「だつてさ。目線が下にあるからね」

赤瀬は大きい。それは当然だがそれでもだ。お化け屋敷の中でも

その巨大さは全く変わることがないのである。

「見えるし迫力もないしね」

「そうだよな。でかいとやっぱりな」

「怖くないわよね、小さい相手は」

狭山と津島もこの事に頷いた。

「そういうことが」

「成程ね」

「僕は怖いとは思わなかつたよ」

「私も」

小柄な椎名もだというのだつた。

「けれど皆が怖がるものなのはわかる」

「椎名は動じないからな」

陽太郎はその椎名にも突っ込みを入れた。

「やっぱりそうなるよな」

「そう。それは平気」

また言う椎名だつた。

「怖いことは」

「っていつか何で怖いって思うんだ？」

陽太郎は実際に何時でも冷静な彼女にそうした感情があるのかどうか疑問にさえ思った。それでこう問い返さずにはいらなかったのだ。

「椎名ってどういふのに対して」

「壊れること」

「壊れること!？」

「そう、それは怖いと思う」

これが彼女の怖いものだというのだ。

「人の心が」

「それがか」

「癒せるものだけけれどそれ以上に壊れやすいから」

「そういうものか」

「そういうもの。特に」

彼女はまた言った。

「つきぴーみたいな娘は」

「ああ、椎名さんな」

「そうよね、あの娘はね」

彼女の心がどうかについては狭山と津島もすぐに察することができた。それだけ月美の心は誰がどう見ても強いものではないのである。

「気が弱いしな」

「何かあつたらすぐに折れそうだし」

「折れそうだし壊れやすい」

椎名の言葉だ。

「それが凄く心配」

「だからいつも一緒にいるんだな」

「それだからなのね」

「私つきぴーが好き」

これは親友としての言葉だ。

第十五話 抱いた疑惑その九

「だから余計にそのことが心配だから」

「本当に友達思いなんだな」

陽太郎は腕を組んで感心する言葉を出したのだった。

「いいところあるな」

「それどういう意味？」

「悪い意味じゃないさ」

それは本人にも断った。

「何か結構冷たく見える時もあるからな、椎名って」

「そうなの」

「けれど本当は友達思いなんだな」

「少なくとも友達は大事にしたい」

こう答える椎名だった。

「だから」

「それがいいんだよ。それでな」

「うん、それで」

「そのお化け屋敷ってそんなに怖いのか」

あらためて椎名にこのことを問うのだった。

「そこって」

「凄く怖い」

椎名は陽太郎にもこう話した。

「私達以外はもう真っ青になってた」

「そうか、そこまでかよ」

「それはかなりね」

狭山と津島がここまで聞いて述べた。

「じゃあ行くか？そこに」

「そうね」

そしてそのうえで二人で顔を見合わせて話す。

「どれだけ怖いかな」

「見てみたくもあるし」

「ああ、お化け屋敷な」

陽太郎は二人とは違つ反応を見せた。そうして四人に話してきた。

「あのさ」

「あのさ？」

「どうしたの、急に」

「文化祭のことだけれどな」

話すのはこのことだった。

「確か十一月のはじめだったよな」

「結構先じゃないか？」

「そうよね」

「だったらな。まだ少し先だけれどな」

前置きしてからの言葉だった。

「何をするか考えないか？」

「何かなあ」

「やっぱり早いと思うけれど」

「それでもだよ。さっきの話聞いて少し考えたんだよ」

陽太郎は四人に話を続ける。

「お化け屋敷とかどうか、クラスの出し物」

「お化け屋敷か」

「それなの」

「そう、それね」

「ああ、それな」

まさにそれだというのだった。それではとだ。

「面白くないか？それも」

「まあ文化祭の出し物だと定番だよな」

「喫茶店と並んでね」

狭山と津島は陽太郎のその言葉に反応して述べた。

「それもいいんじゃないのか？」

「うっん、そうね」

しかしだった。津島がここで言った。

「それよりも喫茶店がいいんじゃない？」

「そっちの方がか」

「ええ、それでいいんじゃないかしら」

津島はこう提案する。

「やっぱり」

「ああ、そうだよな」

赤瀬が彼女のその言葉に伝えて言ってきた。

「津島さんのお家ってケーキ屋さんだし」

「ケーキなら用意できるし。お茶淹れるのも得意だし」

つまり必要なものはどちらもあるというのである。

「だからね。どうかしら」

「まあ安全牌だよな」

狭山は津島の提案に腕を組んで答えた。

「津島の家のケーキは評判いいしな。いいんじゃないかねえのか？」

「じゃあそれにする？」

「そのお化け屋敷に行ってから決めないか？」

だが狭山は津島にこう返した。

「それからでもいいだろ」

「それからでもなのね」

「まずはな。それにクラスの皆の話も聞かないとな」

クラスにいるのは彼等だけではない。それならばというのがあった。

第十五話 抱いた疑惑その十

「だからな」

「そうだよな。俺達だけで決めていい話じゃないしな」

陽太郎もこう言う。

「それはないよな」

「そうだよな、今は」

「提案っただけね」

狭山と津島は陽太郎のその言葉も受けた。それから椎名が言ってきた。

「とりあえず提案として受けたから」

「お化け屋敷と喫茶店だね」

赤瀬も言う。

「わかったよ。他にもあつたら聞いてみたいし」

「今からもう考えるんだな」

「先に先に考えていく」

こう陽太郎にも返す。

「それが基本」

「そうして動いていくってのか」

「そう。仕事はそうするもの」

椎名は淡々と述べていく。まだ高校一年だがそれでもわかっていくのだ。

「だから」

「だからしっかりしてるんだな」

陽太郎はここまで話を聞いて静かに述べた。

「先に先を考えていくから」

「それも何パターンも考えておく」

椎名はまた言った。

「最悪のケースも」

「ちょっと怖い話だな」
「けれど考えておくといい」
「そうだというのだった。」
「だから」
「ううん、最悪のケースも考えておくとその対処ができるか」
「斜め上の事態もたまにあるけれど」
「斜め上なあ」
「それでも考えておくといい」
「あくまでそうだというのである。」
「わかった？」
「まあ一応は」
陽太郎は難しい顔で答えた。
「わかったけれどな」
「そうなの」
「とにかく文化祭は絶対するしな」
「それは決まっていた。既にだ。」
「学校の行事だしな」
「最後にフォークダンスもあつたよな」
「そうよね」
狭山と津島はこのことも話したのだった。
「あれってカッブルで踊るんだろ？」
「そう聞いたけれど」
「ああ、そうなのか」
陽太郎はそれを聞いてはじめて知った顔になった。
「それでなのか」
「あれっ、御前知らなかったの」
「これ有名な話じゃない」
「文化祭でフォークダンスがあるのは聞いていたよ」
「それはだというのだった。」
「しかしな。そんな話があつたのか」

「そうしたらそのカップルは幸せになれるってな」

「そんな話もあるのよ」

「そうか。だったら」

その話を聞いてだ。陽太郎は心の中で思った。そしてその思ったことをだ。あらためて話すのだった。

「俺も。二人で」

「二人で？」

「二人でっていうとやっぱり」

「あっ、しまった」

失言だった。言ってから気付いた。

しかし言ったことは戻らない。観念して話すのだった。

「ま、まあ月美とな」

「やるねえ」

「相変わらずね」

「と、とにかくな」

陽太郎は必死に話を変えようとしていた。

「考えてみるか、本当に」

「運動会の後で文化祭か」

「とにかくうちの学校って行事もしっかりやるのね」

「そっちの方がいい」

椎名はそれを肯定した。

「何もしないよりずっといい」

「そうだね。何もないと全然面白くないから」

赤瀬は椎名のその言葉に同意して頷いた。

「その通りだね」

「うん。運動会は何もないけれど」

「看板の絵を描いて終わりだしな」

「そうよね」

また狭山と津島が話す。

「まあそれは俺達の仕事じゃないしな」

「絵描けないしね」

これは今ここにいる五人には縁のないことだった。絵を描くということはこれまた特殊な部類に入る技能であるからである。五人共そうした技能はない。

第十五話 抱いた疑惑その十一

「だから競技に出てな」

「まあ健闘はしないとね」

「うちのクラスは文科系が多いから」

「こつ言う椎名も天文部である。」

「だから優勝は多分無理」

「やっぱりそうか」

「それは無理なのね」

「うん、けれど参加競技の割り当ては考えておくからそれはだというのだ。」

「任せておいて」

「相変わらずの名軍師だな」

陽太郎はその彼女に対して述べた。

「何でもわかってるんだな」

「調べてるから」

「だからだというのだ。」

「適材適所でいくわ」

「何か本当に軍師だな」

陽太郎はそれを聞いてまた言った。

「椎名がいたらうちのクラスは大丈夫か」

「そうだよな。何か何でもやれそうだな」

「そうよね、確かに」

狭山と津島がここでまた頷いた。

「運動会も仕切ってくれて文化祭でも」

「やっぱり考えてるのね」

「文化祭は今考えはじめたから」

陽太郎の話からというのはいつまでもなかった。

「けれど面白そう」

「ああ、椎名さんが考えたらね」
赤瀬も言ってきた。
「もうそれだけで百人力だから」
「それってあれだよな」
「あれって？」
「太公望みたいだな」
陽太郎は赤瀬に対してこの伝説の軍師の名前を出してきた。
「封神演義のさ」
「そこで諸葛孔明じゃないんだね」
「最近何かな」
赤瀬の今の問いには首を傾げさせたのだった。
「その名前を出すとな」
「何かあるの？」
「白いスーツを着たおっさんとかはわわとか言う女の子思い出すんだよな」
「それが孔明？」
「最近の漫画とかアニメじゃそうなってるんだよな」
三国志から様々な作品が出ている。その中には孔明がそうしてスーツを着ていたり女の子になっていたりするのである。本当に作品によりけりだ。
「凄いことにな」
「女の子ねえ」
「小柄でブロンドのショートヘアのな」
「外見についても話す。」
「紫のドレスみたいなフリフリの服着てな」
「それが孔明？」
「俺も最初見た時びっくりしたさ」
陽太郎は腕を組んで述べている。
「アニメで観たんだよ」
「アニメならいい」

椎名が不意にこんなことを言ってきた。

「アニメなら」

「アニメならって？」

「原作がある」

「こっ話すのだった。」

「だから」

「原作？何だそりゃ」

「知らなかったらいい」

「ここでは多くを話そうとしない椎名だった。」

「それで」

「それで？」

「それでなの？」

「狭山と津島にも今の言葉はよくわからない話だった。」

「何なんだ？それで」

「原作って漫画？」

「そうじゃないかな」

「赤瀬もそれではないかと述べる。」

「やっぱり」

「そうだよな、やっぱり」

「それか小説よね」

「漫画や小説にもなっているけれど原作じゃない」

「椎名は三人にも言った。」

「また違う」

「じゃあ本当に原作は何なんだよ」

「知ったらびっくりする」

「やはりこっ言うだけだった。」

第十五話 抱いた疑惑その十二

「それだけ」

「それだけ？」

「そう、うふふ」

ここまで言つて不思議な微笑みを浮かべてみせる。そんな彼女だった。

そんな話をしながら二学期のはじまりの時を過ごしていた。部活は当然その二学期のはじまりにもある。暦では秋とはいえまだ暑かった。

「あつついよなあ」

「全く」

「何なんだよこの暑さ」

部活の後で防具をなおしながら言い合っていた。

「一応もう秋なんだろう？」

「ああ」

「そうだよ」

「それでこんなに暑いのかよ」

「昨日は何日だ？」

だがここで先生が言ってきた。

「昨日は何日だ？」

「八月三十一日です」

「夏休みの終わりです」

すぐに生徒達は答えた。

「夏の最後の日です」

「残念な日でした」

何故残念というのだった。夏休み最後の日には他ならない。

「それで終わりなんて」

「いつも悲しい日ですよ」

「たった一日だ」
先生はここでまた言った。
「それならまだ暑いのも当然だ」
「そういうことですか」
「つまりは」
「そうだ。まだ気温は全く下がっていない」
そのままの事実だった。先生が今話したのはだ。
「わかったな」
「よくわかりました」
「まだ暑い理由が」
「残暑だ。暫くは我慢しろ」
先生はこうも話す。そしてこんなことも告げた。
「水分はよく採っておけよ」
「あつ、はい」
「わかりました」
「熱中症になるからな。剣道部は余計に気をつける」
「防具を着けているからだ。そうなるのは自明の理である。」
「さもないと本当に倒れるからな」
「それと後で身体を冷やさないと駄目ですよね」
「やっぱり」
「清潔さの為にシャワーも浴びておけ」
「それも言う。言うべきことは言う先生である。」
「終わったら身体を冷やしておくことも大事だ」
「熱中症の為にですよ」
「やっぱり」
「まあ身体を冷やすのは良し悪しだがな」
腕を組んでの言葉だった。
「それでも熱中症には気をつけることだ」
「そうですね。暑いままじゃ苦しいですし」
「尚更ですね」

「頑張るべきだが無理はするな」

先生の言葉は一つ一つ丹念に考えられたものであった。

「わかったな」

「わかりました」

「じゃあ掃除の後でシャワーですね」

「しっかりと綺麗になれよ。清潔にな」

最後に言うのはこのことだった。こうした話の後でだった。

陽太郎もまたシャワーを浴び帰路に着く。その時だった。

「あつ、陽太郎君」

「ああ、そつちも終わったんだ」

「はい」

月美だった。さらりとした雰囲気で来たのである。

「シャワーを浴びて」

「浴びないともういられないよな」

「はい、とても」

見ればであった。まだ半分濡れている髪の毛が艶かしく光っている。黒い髪に天使の輪がある、まさにそつした輝きを見せていた。

第十五話 抱いた疑惑その十三

「暑過ぎて」

「そうそう。それでさ」

「はい、それで」

「シャワー浴びた後メイクとかする？」

「はい、それは」

するといつのである。今では高校生でもメイクをするのが普通である。月美も普通の高校生でありこれはもう当然のことになった。た。

「ナチュラルにですけれど」

「ナチュラルメイクなんだ」

「はい、そうです」

まさにそうだといつのであつた。

「少ししてるだけで」

「女の子って何かと大変なんだな」

陽太郎は自分の左横に来た月美の話を聞いてこう述べた。

「やっぱり」

「大変ですか？」

「その長い髪洗わないと駄目じゃないか」

月美の髪は見事なロングヘアである。まずはそれを見て言ったのである。

「その髪の毛さ」

「別にそれは」

「慣れてるからだよ。お風呂の時とかもまとめるんだよな」

「湯舟に入ると困りますから」

だからだといつ。実際に髪が長いとそれで後ろや上で束ねてから入るものである。月美もそうしていると陽太郎に対して話すのである。

「それで」

「面倒臭くない？本当に」

「いえ、別に」

本人はこう返す。

「そんな風を感じたことは」

「ないんだ」

「子供の時からこの髪型ですし」

「ロングだったんだ」

「だから別に」

また言う月美だった。

「そう感じたことはありません」

「そうなんだ」

「はい、そうです」

また答える。

「本当に」

「いつもしてるからかな」

「多分」

月美も陽太郎の言いたいことや考えていることが掴めてきたのでこう返した。

「そうだと思います」

「そういうものなんだ」

「はい。私これでもシャワーからメイクまで二十分です」

「あれっ、それだけなんだ」

「長くないですよね」

「長くないっていうか短いよ」

率直に感想を述べた。

「髪も洗ってだよね」

「はい」

「それで二十分ってやっぱり短いよ」

「勿論全部奇麗にしています」

その証拠に今の彼女からはいい香がする。シャンプーとボディソープの香りだ。その香りはどちらも薔薇を思わせるものである。

「清潔に、って思ってますから」

「ううん、それでメイクまでして二十分かあ」

「そうですけれど」

「やっぱり短いよな」

陽太郎はまた言った。

「それってさ」

「そうでしょうか」

「いや、俺も二十分だけねどさ」

彼もそのかかる時間を話す。

「服まで着てだよ。尋常な早さじゃないよ」

「皆そんな感じですけどねど」

「皆なんだ」

「手早くしないと」

こんなことも言ってきた。

「ですから」

「女の子って凄いな」

「凄いですか？」

「ああ、凄いよ」

そしてこんなことも言葉として出した。

「男にはできないよ」

「できると思いますけれど」

「いやあ、無理だね」

しかし陽太郎は首を傾げさせて言った。

第十五話 抱いた疑惑その十四

「そこまではさ」

「そうですね」

「男って意外と動きが悪いのかもな」

「お化粧までできないからですか」

「だと思っよ。そりゃ男でも化粧するのはいるけれど」

このことは断った。

「けれどそこまではさ」

「しませんか」

「うん、ちよっとね」

こう話す。

「男のそうしたことって時間かかるんだよな」

「ああ、つまりこういうことですね」

月美はここでわかった。

「男の人のそういうことって」

「そういうことって？」

「凝ってしまうんです」

こう話すのだった。

「つまりは」

「凝るって？」

「例えば男の人のお料理って凝りますよね」

「そういうえばうちの親父もたまに料理をするけれど」

自分の父親のことを思い出してみた。するとよくわかることだった。

「確かにな。時間もお金もな」

「特に時間ですよね」

「うん、随分とかかるよ」

「それと同じだと思います。男の人は凝りますから」

「けれどお風呂とかシャワーもかな」

「そうだと思います。男の人って体臭気にしますよね」

「ああ、確かに」

言われてみればそれもその通りである。男の方が体臭はきつい。

そのことはどうしても気になってしまふことである。陽太郎にしても同じだ。

「汗の臭いにしても何にしても」

「だから余計にお風呂とかに時間がかかると思います」

「そういうものなんだ」

「私はそう思いましたけれど」

「言われてみればそうかな」

月美の言葉を受けて考える顔になった。

「やっぱり」

「女の子って体臭はあまりしませんから」

「っていつかいい匂いがするし」

こつ月美に述べる。

「正直言って」

「そうですね？女の子の匂いってあるんですか」

「あるよ、それはね」

その通りだと述べる。

「月美だって今は特に」

「シャンプーとボディーソープですよ」

「いや、それでもいい香りがするよ」

そつだと言う。

「今だってさ」

「そうですね」

「そつだよ、本当に」

こつ話す。

「それでかな。そういうのもあるかな」

「女の子ってとにかく時間ないですし」

「そんなに？」

話がここで戻った。月美が戻してきたのだ。

「時間ないの？」

「髪の毛もそうですしメイクもですし」

「そういったことが全部積み重なってなんだ」

「そうです。それで時間がないんです」

月美の話によるとだった。それは一つだけではなかった。多くのことが積み重なってそれで時間がないというのであった。忙しい話である。

「女の子って」

「それでそれをこなしていく為に」

「何でも手早くってのが無意識のうちについていくんだと思います」

「おっとりしてるってわけじゃないんだ」

「私かなりおっとりしてるって言われますけれど」

「俺も今まではそう思ってたよ」

陽太郎は実際に月美にこう述べた。

「けれど違うんだな。今わかったよ」

「そうなんですか」

「うん、少しだけねどさ」

わかったというのである。

第十五話 抱いた疑惑その十五

「そういうものなんだな」

「お料理なんか特にそうですし」

「お菓子なんかも？」

「やっぱり無意識のうちに手早くするといつのである。」

「それに慣れて」

「そうしないといけなくてしかもやっていくうちに慣れる」

月美の言葉を総合して合わせての言葉である。

「そういうことなんだ」

「そうなりますね」

「成程なあ。そうなんだ」

こんな話をしながら駅に向かった。そしてそのうえで駅から同じ電車に乗る。そして同じ電車にであった。

星華もいた。だが彼女は最初二人には気付いていなかった。部活の先輩の一人と一緒にいてだ。そのうえで彼女の話聞いていたのだ。

「アメリカでだけれどね」

「何かあつたんですか？」

「凄い選手が出て来たのよ」

アメリカのバスケットの話だ。先輩から聞いていたのだ。

「身長二メートル二十でね」

「えっ、随分高いですね」

「それでももう跳躍なんかね」

「どんな感じですか？」

「空を歩いてる感じなのよ」

こう星華に話す。そして鞆からバスケットの雑誌を出してきてそのうえでさらに話す。そこには髪を短く刈った黒人が明るい笑顔でいた。

「この選手だけね」
「何かはじめて見る選手ですね」
「ルーキーなのよ」
それで星華も知らないというのである。
「この選手はね」
「そうだったんですか」
「もう出て来ていきなり大活躍なのよ」
「いきなりですか」
「そう、もう凄いのよ」
その選手の写真を見ながらだ。先輩は話していく。
「タイトルも取りそうだしね」
「一年目で、ですか」
「そうよ。凄いでしょ」
「はい、本当に」
先輩の言葉に笑顔で頷いていた。
「こんな選手がいるなんて」
「そうでしょ。それで注目してるのよ」
「アメリカですか」
星華はにこりと笑って先輩の言葉に返した。
「一度行ってみたいですね」
「そう思う？やっぱり」
「機会はないですけど」
星華はここでは苦笑いになった。実はアメリカには行ったことが
なかったりする。
「けれど本当に一度は」
「行って見たらいいわよ。特にね」
「特に？」
「ロスね」
所謂ロサンゼルスのことである。アメリカ西海岸の街だ。
「あそこがいいわよ」

「ロスですか」

「私アメリカはそこしか行ったことがないけれど」

先輩はこう言いはしたがそれでも笑顔で話す。

「一度ね。行ってみたらいいわ」

「大学に入ったらアルバイトして行ってみます」

「そうしたらいいわ。じゃあ機会があればね」

「はい、それじゃあ」

こんな話をしていた。この時は星華にとってはいい時だった。

しかし先輩と別れて電車から出るとその時にだ。彼を見てしまった。

「それじゃあね」

「はい」

「あれっ？」

ここでだ。隣の車両から出て来る陽太郎を見かけた。

「あれっ？。 斉宮？」

「またな」

「はい、また明日」

こう話してだった。誰かと別れて車両から出たのである。問題は

相手だった。誰か見ようとする。しかしその前に電車は出てしまった。

それで見られなかった。そのことに残念に思っているとだった。

陽太郎が来てだ。声をかけてきた。

「よお」

「斉宮？」

「ああ、俺だけれど」

陽太郎はいつもの明るい笑顔で応えてきた。

「一緒に電車だったんだな」

「そうね。珍しいわよね」

誰と一緒にだったのか気になりながら応える星華だった。

「お互い部活が違うようになってね」

「それって」

「そうだよな。何か同じ高校になってもさ」

「部活が違うと会うことも減ったわよね」

「クラスも違うしな」

「ええ」

部活もクラスも違うということを再認識してしまった。すると星華の顔は自然に曇ってしまった。そこに彼女の感情が出てしまった。いた。

「そうよね、本当に」

「こんなに会うことが減るなんて思わなかったよな」

「せめて同じクラスだったらね」

ここでも感情が出てしまっているが陽太郎は気付かない。

第十五話 抱いた疑惑その十六

「よかつたんだけれど」

「ああ。同じクラスだったらな」

「隣のクラスだし。それに」

「それに？」

「今のクラス嫌な奴もいるし」

月美のことだ。このことは自然に言葉に出してしまっていた。

「何か今一つ馴染めないのよ」

「嫌な奴って？」

「何かね。お嬢様ぶっててね」

こう話すのだった。

「それで男に媚びててね」

「そんな奴がいるのかよ」

「そうなのよ。他の面々とは仲良くやってるけれど」

「じゃあいいんじゃないのか？」

「それでも一人だけそういうのがいたら全然違うじゃない」

月美がクラスにいるということだけではなかった。そこに椎名も来る。それで星華の感情はささくれだってしまうのである。どうしても勘に触るのだ。

「だからね」

「それでか」

「そう、それでなの」

二人並んで歩きながら話す。

「今一つね」

「馴染めないってわけか」

「斉宮はどう？」

今度は陽太郎に対して問うた。

「そういうことない？」

「俺は別に」
陽太郎は首を少し捻って述べた。
「ないなあ」
「そう。ないの」
「うちのクラスは平和だしさ。それに」
「それに？」
「クラス委員がしっかりしてるし」
「こつも話すのであった。」
「それで別にさ」
「いいクラスなんだ」
「喧嘩とかないしさ。仲良くやってるよ」
「私そのクラス行きたかったな」
陽太郎のその顔を見ながらの言葉であった。
「本当にね」
「こつちのクラスにか」
「斉宮のいるクラスにね」
「ここでは三度己の感情を出してしまっていた。」
「やっぱりね」
「中学校の時みたいにか」
「うん」
顔を正面に戻してこくりと頷いた。
「そう思うわ」
「二年になればそうなるかな」
「なつたらいいね」
「だよな。あの時みたいにな」
「ずっとあのままだったらよかったかな」
星華の顔は自然と俯いてしまっていた。
「中学校の時みたいに」
「そつだよな。俺もそう思うよ」
「斉宮もなの」

「あの時はあの時で楽しかったしな」

彼は今も楽しんでいる。それが出ている言葉だった。

「だからさ」

「それでなの」

「また。一緒に皆で騒ぎたいよな」

「皆で、なの」

「ああ、皆でさ」

陽気な口調で星華に返す。

「騒ぎたいんだけどさ」

「いいわね」

星華もであった。彼のその言葉に笑顔で頷いた。そしてそのうえで言う。

第十五話 抱いた疑惑その十七

「中学時代のメンバーでね」

「いや、そこにさ」

しかしだった。陽太郎はここでさらに言うのだった。

「高校時代のメンバーも入れてさ」

「高校のって!?!」

「だから今のさ」

こつ星華に話すのであった。

「今のメンバーもさ」

「今のって」

「あれだろ? 佐藤だって今のクラスに友達いるだろ」

「ええ、まあ」

州脇や野上達だ。いないと言えば嘘になることだった。

「それはそうだけれど」

「それだったらさ。そうした面々も入れてさ」

「中学も高校も一緒に、なの」

「騒ぐんだつたら人数が多い方がいいだろ?」

「そうね。それはね」

ここでは陽太郎と星華の考えは一致していた。しかし星華はここで。思わずこんなことを言ってしまった。やはり無意識のうちでの言葉だった。

「その通りだけれど」

「じゃあそれでいいよな」

「けれどね」

「けれど?」

「二人で騒ぐのもいいんじゃないかしら」

これがその無意識のうちの言葉だ。彼女は陽太郎の顔を見上げてだ。そうしてそのうえでこの言葉を出してしまっていたのである。

「それも」

「二人でか」

「そう、二人でね」

「また言うのだった。」

「騒ぐのもね」

「二人かあ。それって」

「カップルっていうか」

無意識のうちの言葉は続く。

「恋人同士でね」

「ああ、それいいな」

陽太郎は意識していた。しかしその相手は星華ではなかった。

「それもな」

「そうよね。二人でね」

「じゃあ今度そうしようかな」

「えっ!？」

星華は今の陽太郎の言葉を聞き逃さなかった。そして問い返してしまった。

「今何て？」

「だから二人でさ」

自覚のないまま答えた陽太郎だった。

「それもいいよな」

「誰となの？」

危惧する顔で問うた言葉だった。

「それって」

「えっ、誰って？」

「だから誰となの!？」

表情は強張ってもいた。そのうえでまた問うたのである。

「二人で騒ぐって」

「いや、普通に狭山とだけねどさ」

「狭山って？」

「知らないか？うちのクラスの狭山水樹」

彼の名前を出したことには自覚がなかった。ついでに言えば恋人同士という言葉も打ち消してしまっている。しかしこうしたことには疎い陽太郎には気付かないことだった。そしてそれはここでは非常に幸いなことであつた。

「あいつとかとさ」

「男友達と？」

「別にゲイとかじゃないしいいよな」

目をしばたかせながら星華に問い返す。

「それも」

「ま、まあね」

男友達と聞いてだ。星華は落ち着きを取り戻して言葉を返した。

「それだったら」

「そうだろ？二人で馬鹿騒ぎもな」

「いいわね、それって」

「今度そうしようかな」

「そうするといいわね。何かそれを聞いてね」

その落ち着きは安堵だった。言葉にもそれは出ていた。

第十五話 抱いた疑惑その十八

「ほっとしたわ」

「何でなんだよ」

「いや、それはね」

慌てて自分の感情を隠して返す。

「まあ何ていうか」

「何ていうか？」

「何でもないから」

今度は誤魔化した。

「それは」

「何だよ、何もないのかよ」

「うん、何でもないから」

「だったらいいけれどな」

「うん。それじゃあ」

前を見た。既に駅を出ていて二人で夜の道を歩いている。その中の言葉だ。夜の街灯の周りに虫達が集まっているのが見える。

「そろそろね」

「ああ、御前の家この辺りだったよな」

「うん、だからね」

「もうすぐお別れだな」

「久し振りだったから」

つつい顔顔を赤くさせる。しかしそれは夜の中に隠れてしまっていた。

「嬉しかったわ」

「嬉しかったって？」

「だから。一緒に帰って」

その密かに赤らめさせた顔で話す。

「それでこうして話したじゃない」

「それがか」

「そうよ。それが楽しかったから」

本音を言っていた。だが陽太郎はそれには気付かない。

「有り難う」

「おいおい、お礼なんかいいよ」

陽太郎は星華のその本音に気付かないまま応えた。

「そんなのさ」

「いいの？」

「いいよ、だって俺と佐藤の仲だろ？」

その彼女の気持ちに気付かない言葉であった。

「だったらいいさ」

「私と斉宮の？」

「だからいいさ」

また言ってしまった。気付かないうちに。

「そんなのさ」

「いいの」

「そんなに気を使わなくていいさ。それじゃあさ」

「ええ、それじゃあ」

「またな」

「明日ね」

別れは星華の家の前であった。別れは穏やかでありふれたものだった。しかし星華の心中は次第にありふれたものではなくなろうとされていた。楔が打ち込まれようとしていた。

第十六話 深まっっていく疑惑その一

第十六話 深まっっていく疑惑

星華は家でだ。妹の星子と話をしていた。苺を食べながら。

「ねえ」

「どうしたのよ、今日は」

「聞きたいことがあるんだけど」

居間のちゃぶ台を囲んで苺を食べながらの言葉だ。

「いいかしら」

「聞きたいことって？」

「あんただったらどうするかな」

妹の顔を見ながら言う。その豊かな胸は今は見えてはいない。

「好きな相手に好きな人がいるかも知れなかったら」

「先輩のこと？」

「ち、違うわよ」

凶星を言われて顔を赤らめさせてしまった。

「別に」

「言わなくてもわかるから」

しかし星子は少し呆れた顔で姉に言葉を返した。

「っていかもうわかってるから」

「もうなの」

「そうよ。態度とか言葉でわかるから」

その二つでだというのだ。

「そうしたことはね」

「何時の間にわかったのよ」

「ずっと前から。だってお姉先輩の話ばかりするし」

もうその時点でだというのだ。迂闊といえは迂闊な星華である。

「それでわからないっていうのもねえ」

「ないっていうの？」

「はつきり言っていないわね」

妹は明るい顔で毒を右手に取って自分の口の中に入れながら姉に返す。

「モロバレだから」

「うっ……」

「それで何？」

ここまで話してあらためて姉に問う。

「先輩に彼女がいるとか？」

「それはその」

「それなら早くアタックすればいいじゃない」

星子はぶしつけにこう言ってみせた。

「いても奪い取る位の気迫でね」

「奪い取るって」

「彼女いるかどうか不安なんですよ」

星子は今の話の核心を指摘してみせた。

「先輩に。そうなんですよ？」

「それはそうだけれど」

「それであるかいないか不安ならよ」

「アタックしろってこと？」

「告白すればいいじゃない。それならすぐにわかるわよ」

「何でそれでわかるのよ」

星華もまた毒を手に取る。そのうえで妹に問うた。

「告白でわかるのよ」

「決まってるじゃない。いたら振られるからよ」

「いたらなの」

「先輩真面目だからいたら断るから」

星子も陽太郎とは面識がある。だからその性格もよくわかってい
るのだ。それでそのうえで姉に対してこう言ってみせたのである。

「だからよ」

「いたら終わりじゃない」

「振られるからね」

「それに告白しても」

星華は苺を食べながら引っ込み思案になっていた。

「結局は」

「断られるかもっていうの？」

「そうならない？」

不安に満ちた目で妹に問う。苺を食べていてもその味は今一つに感じた、。

「どうなるかわからないから」

「そんなこと言って何年経つものよ」

少し呆れた口調で姉に言った。

「もう何年よ」

「何年って」

「お姉先輩と三年間一緒のクラスだったんでしょ？」

「そうよ」

「それでその間ずっと好きだったんでしょ」

一途と言うべきだった。星華は少なくとも浮気性ではない。

「先輩のこと」

「だったらどうなのよ」

「それならアタックした方がいいわよ」

またこう言うのだった。

「ここはね」

「アタックね」

「そう、当たって砕ける」

実際にはつきりとした提案だった。

第十六話 深まっっていく疑惑その二

「それでいけばいいじゃない」

「できる筈ないじゃない」

星華は妹のその提案に眉を顰めさせて返した。

「そんなおっかないこと」

「やれやれ、相変わらず度胸はないのね」

「悪い？」

「お姉は胸もなければ度胸もない」

眉を顰めさせる姉を少しからかつての言葉だ。

「そんなのだから駄目なのよ」

「駄目って」

「だから。告白すればいいじゃない」

この提案は変わらなかった。

「それならね」

「告白、なの」

「そう、告白」

星子の提案はあくまでそこに決まっていた。揺らぐこともなかった。

「すればいいじゃない、これは本当にね」

「彼女がいるかどうかもわかるから」

「いても奪い取る気迫で」

この言葉も変わらない。

「わかったわね。告白すればいいじゃない」

「勇気を出してなの」

「そういうこと。やってみたら？」

「けれど」

「けれどもそれもなくてね」

さらにけしかける調子になっていた。

「本当によ。告白しないと何もはじまらないわよ」

「告白かあ」

「まあお姉は度胸ないから」

またからかう調子だった。少し笑いながら自分の苺を食べて姉に言う。

「無理かしらね、それは」

「じゃああなたはできるの？」

「うっ、それは」

「できないでしょ」

星華はむっとした顔で妹に言った。

「やっぱり」

「まあ難しいけれどね」

「ほら見なさい、そうじゃない」

「何ていうか。勇気がいるから」

「そうでしょ。勇気がいるのよ」

立場が逆転していた。

「告白って」

「それでもよ」

「それでも？」

「お姉もいい加減勇気を出したら？」

あらためて姉を見ての言葉だ。

「そうやって何年もいたし」

「あくまでそう言うのね」

「言うわよ。それがお姉の為だし」

「うっん、けれど」

「けれどもそれでもなくてよ。私だって勇気ないけれど」

自分のことも話す。そのうえでだった。

「当たったらいじゃない」

「それで道が開けるっていうのね」

「そういうこと。私はそう思うけれどね」

「どうしてもね」

しかしであった。星華の表情はどうしても晴れないものだった。何時しか苺を食べる手を止めてた。そうしてそのうえで妹に言葉を返す。

「できないから」

「仕方ないわね。けれどそれじゃあね」

「前に進まないっていうのね」

「そういうこと」

まさにそうだというのだった。

「それでもいいの？」

「それは」

「よくないでしょ」

あらためての言葉だった。

「やっぱり」

「どうすればいいのかしらって思ったりもするし」

「困ったお姉ね、全く」

「困ったってのは何よ」

「だから。度胸がないからよ」

どうしても言い出せない姉のことをまた言う妹だった。

第十六話 深まっっていく疑惑その三

「昔からそういうことは駄目だからね」

「悪い？」

「お姉らしいけれどね」

それは否定しなかった。妹としての気遣いである。

「それもね」

「私らしいの」

「まあ頑張れとは言っておくわ」

これまでよりだ。温かい口調になっていた。

「私からはそれだけ」

「それだけなのね」

「そう、それだけ」

こう話すのであった。

「頑張つてね、お姉もね」

「そうはするわ」

こんな話をしてだった。二人は尊を食べることに戻った。星華はここでは結局答えを出せなかった。何をしたいのかするべきかわからなかった。

そして次の日。また教室の教壇のところに来てだ。いつもの三人と話していた。話の内容はまずはもう少ししたら行われる運動会のことだった。

「星華ちゃん何出るの？」

「やっぱり短距離走？」

「体育委員からはそう頼まれてるわ」

その通りだと三人の問いに答える。

「実際にね」

「じゃあ出たら？百メートルね」

「丁度いいじゃない」

「ええ。あと二百メートルも頼まれてるの」
「それもだというのだった。」

「他にはね」

「他にも？」

「あとはハードル？」

「それもね。ほら、うちの陸上部ってあれじゃない」

ここで自分のクラスメイトについて言及する。四人の目は自然にその彼女に向かう。黒いショートヘアのさばさばとした感じの女の子だ。

「長距離じゃない」

「短距離は駄目なのね」

「本人も言うのよ。短い距離はってね」

三人にそうだろ話す。

「それよりも私の方がってね」

「そうなの」

「そういうこと。それであの娘からも頼まれたの」

少し笑っての言葉だった。

「短距離で出てくれて」

「お墨付き？陸上部員からの」

「やったじゃない」

「ええ、結構嬉しいわ」

笑って話す星華だった。

「出たら本当に頑張るからね」

「期待してるからね」

「優勝目指してね」

「そうするわ。優勝は四組よ」

自分のクラスだと。これは断言だった。

「絶対だね」

「よし、じゃあ私達もね」

「頑張ろうね」

「出られるかどうかわからないけれど」

それでもだと。お互いに話す三人だった。

そのうえでだ。ふと月美を見る。そして言うのだった。

「あいつはどうかしら」

「何か陸上競技無理っぽいね」

「そうね」

忌々しげな目で見ながら話す。

「あの胸じゃね」

「どうせまた男たぶらかすんでしょうけれど」

「それでもね」

「そうよね。出ないのに人気だけはあるって」

星華もだった。忌々しげな顔で三人の言葉に頷く。

「嫌な奴よね」

「全く。クラス委員の仕事も碌にしないし」

「っていつかできない？」

「そんな奴だし」

四人で無理矢理委員にしたことはここでは考えもしなかった。そ

のうえで不平不満をぶちまけていた。自分達が気付かないうちに。

「どうせ運動会も何もしないしね」

「文化祭までそうするのかしら」

「それ最悪」

「そんなこと許さないから」

だがここぞだ。星華が目を怒らせて言った。

「文化祭はね」

「じゃあもう強引に仕事やらせる？」

「そうする？」

三人は星華のその言葉に問うた。

第十六話 深まっっていく疑惑その四

「言わないと何もしないんだし」

「それならね」

「もう背中蹴っ飛ばしてでも」

「そのつもりでやらせるわよ」

星華はその細い眉を怒らせて述べた。腕も自然に組んでいる。

「絶対にね」

「そうしよう。まあ運動会は無視してね」

「出ても出なくてもね」

「そうしてやりましょう」

「そうね。あとは応援だけれど」

運動会と言えば応援は外せない。その話もするのだった。

「どうしようかしらね」

「チアガール？」

「それか学ラン？」

どちらかだというのだ。

「女がチアガールで男は学ラン？」

「そうなるのかな、やっぱり」

「男のチアガールはNGとして」

それはだというのだった。

「けれど女の学ランはいいかもね」

「男装の麗人ってやつ？」

「宝塚みたいなのね」

こんな話にもなった。

「かなりいいかも」

「考えてみましょう」

こんな話をして盛り上がっていた。その間月美はずっと椎名の話
を聞いていた。彼女もまた運動会のことを話していたのだった。

「それでね」

「うん」

「応援だけれど」

「それどうしようかしら」

「派手にいかないと駄目」

引っ込み思案になりがちな月美への発破でもあった。

「派手にね」

「派手になの」

「そう、派手に」

こつ話すのだった。

「そうしないと駄目」

「具体的にはどうしようかしら」

「爆竹とか花火とか」

まずは鳴り物であった。

「そういうのも使って」

「音を出すの」

「それと光。この応援は絶対に目立つから」

「爆竹なのね」

「花火は鼠花火」

話に出すものはかなり過激であると言えた。少なくとも大人しいものではない。椎名はそうした意味で明らかに狙っているのだった。

「そうしたもので音を鳴らして」

「そうすればいいのね」

「それとだけれど」

月美にさらに話すのだった。

「応援の衣装は」

「どうすればいいの？」

「まずはチアガール」

最初はそれだった。チアガールだった。

「それと学生服」

「それもなの」

「どっちもあるし」

椎名の口調は素っ気無いが事実を述べていた。

「だから丁度いい」

「学生服は普通にあるわよね」

「応援団にもあるし学校の制服にもある」

椎名は月美にこのことを話す。

「長ランが普通に」

「長ランっていったら」

「斉宮も着ているあれ」

「そうよね。あれよね」

椎名のその言葉に素直に頷く形となっていた。ごく自然にだ。

「あの制服よね」

「あれを着ればいい」

椎名はまた言った。

第十六話 深まっっていく疑惑その五

「それで済むから」

「楽に調達できるのね」

「チアガールの服も同じ」

「それもだというのだ。」

「チアリーダー部があるから」

「あそこね」

「あそこは色々な色の服を持つてるから尚更いい」

「バリエーションってことね」

「そういうこと。つきぴーのクラスはそれでいくといい」

「わかったわ。じゃあそうするわ」

「私のクラスも」

ここで自分のクラスのことも話すのだった。それは忘れていなかった。

「考えてるし」

「学生服かチアガール？」

「悪くないけれど別のことを考えてる」

「そうだというのである。」

「乞御期待」

「わかったわ。じゃあ聞かないわね」

「見てみてのお楽しみ」

「そして、であった。」

「うふふ」

「うふふなのね」

「つきぴーはつきぴーで頑張ってる」

企む笑いの後でだった。また月美に対して告げた。

「そういうことだね」

「うん。それじゃあ」

「頑張れば頑張っただけ返ってくる」
世の中でよく言われることである。
「だから」
「わかったわ。私頑張る」
「運動会の後は文化祭」
「続いてこのことも話すのだった。」
「それも頑張つて」
「そうするわ。本当にね」
二人はこんなことを話していた。そうしてであった。
その日のお昼にだ。陽太郎は椎名に告げられた。
「斉宮は応援団」
「俺がか」
「しかも団長」
「それだというのである。」
「副団長は赤瀬」
「随分とでかいの持って来たな」
「大きいからいい」
「素っ気無い口調で述べたのだった。」
「だから赤瀬は副団長」
「団長じゃないのかよ」
「赤瀬には競技にも沢山出してもらつから」
「じゃあ俺は何に出るんだよ」
「スプーン運びのレース」
「それだというのである。」
「それに出て」
「それか」
「バランス感覚がいいから」
「それでか」
「だから御願い。赤瀬は力仕事関係に出てもらつから」
「でかいし力もあるからな」

「その通り」

まさにそれで、であった。椎名は話した。

「赤瀬は幾つも出て忙しいから」

「それで副団長か」

「斉宮にも幾つも出てもらうかも知れなかったけれど他にいい人材が一杯いたし応援団長に最適だから」

「で、俺が」

「その通り。決定」

ぼつりと話した言葉だった。

「そういうことで」

「ああ、わかったよ」

陽太郎も椎名のその言葉に素直に頷いた。

「それじゃあな」

「この大会勝てる」

椎名は今度はこんなことを言った。

第十六話 深まっっていく疑惑その六

「絶対に」

「絶対にか」

「人選は決まったし士気を鼓舞する応援も決まったから」

そのどちらもだという。見事に決まったというのだ。

そうしてだ。椎名はここで自分が食べているうどんをすすった。

二人は今学校の食堂で話している。そこでのやり取りであるのだ。

「それと」

「まだあるのかよ」

「運動会の際は食べ物も用意するから」

「それもかよ」

「そう。おうどん」

言うのはそれだった。

「おうどんも用意するから」

「うどんか!？」

「おうどんは力がつく」

まずはそれが理由だった。

「腹もちもいし身体もあつためるから」

「だからいいっていうのか」

「冬に食べるのが一番だけれど秋に食べてもいい」

「それでうどんか」

「しかも力うどん」

見ればだ。椎名は今その力うどんを食べていた。うどんの上に大きな焼いた餅が二個ある。それもまた実に美味そうであった。

「美味しい」

「美味しいのは確かだな」

「それに力がつく」

このことも言う。

「だから食べる」

「それで丼はそれか」

「そう、かきあげ天」

かきあげにつゆがかかっている。それが丼の上にあった。

「これもいい」

「和風だよな」

「和食大好き」

「その他のものも食べるよな、椎名って」

「好物が多いから」

椎名の嗜好は中々面白いものであるのだ。少なくとも陽太郎から見ても飽きるものでもつまらないものでもない。色々食べるのである。

「それは活かせる」

「何にだよ」

「文化祭にも」

こう話すのであった。

「色々考えてる」

「じゃあ文化祭はうどん屋でもするのか」

「それだと少し野暮ったい」

だからしないというのだった。

「どうかしら」

「じゃあうどん屋はなしか」

「別のを考えているから」

「別のなあ。じゃあ蕎麦とかか？」

陽太郎は今ざる蕎麦を食べている。それと玉子丼だ。彼もまた和食である。その蕎麦を食べているからこそ今その蕎麦を話に出したのである。

「それにするか？」

「それもどうかしら」

「蕎麦も駄目か」

「甘いものがないと思う」
「それだというのである。」

「そっちの方が」

「じゃあスイーツか」

「丁度いい具合に狭山がいてくれている」

「あいつお菓子屋の娘だからな」

「丁度いい。それでどう」

「いいんじゃないのか？」

陽太郎はここでは特に考えることなく述べた。

「それも」

「いいでしょ」

「ああ、いいな」

陽太郎は椎名のその言葉に頷いた。

「それじゃあ文化祭のことも考えてな」

「それで今は」

「運動会か」

「それは任せて」

椎名はそちらに話を戻してまた述べた。

第十六話 深まっっていく疑惑その七

「適材適所を徹底させたから」

「そうか。けれど他のクラスもだろ」

陽太郎は自分達のクラスだけではないと言った。運動会は学校全体で行われるものだ。そうならば他のクラスのことを考えるのも当然だった。

「それはな」

「その通り。けれど」

「けれどか」

「他のクラスのこと調べておいたから
蕎麦をすする陽太郎にこう告げた。

「安心していい」

「他のクラスもかよ」

「敵を知り己を知れば」

孫子の言葉も出て来た。

「百戦危うからず」

「何か凄い話になってきたな」

「他のクラスは全部調べてそのうえで誰が何処に出てもらうか考え
たから」

「そこまでか」

「大体全部勝てるようにしたから」

「全部か」

「普通こうした場合に二勝一敗を考えるけれど」

これも孫子である。ただしその子孫の話だ。

「勝てるように考えたから」

「じゃあ安心していいのか」

「かなりのアクシデントがない限り」

大丈夫だというのだ。

「安心して」
「凄い軍師だな」
「参謀でもいい」
「椎名だけは敵に回したくないよ」
「陽太郎の偽らざる本音である。」
「今そう思ったよ」
「私誰かに対して攻撃することない」
「いや、それでもな」
「敵に回したくない」
「本気で思ったよ。そこまで頭が回る相手なんだな。しかもな」
「しかも？」
「格闘技もやってるんだよな」
「椎名はただ頭脳だけではないのだ。腕も立つのだ。」
「キックボクシングか空手が。蹴り得意だったよな」
「うん」
「やっぱり敵に回したくないよ」
「あらためてこう言うのだった。」
「いや、本当にな」
「敵に回すとかじゃないんじゃ」
「それでも本当にそう思うよ」
「こう言って憚らない。しかしその言葉の間にも食べている。今度は玉子丼を食べている。玉子とつゆが飯によく合って非常に美味である。」
「お手柔らかなにな」
「基本的に」
「基本的にかよ」
「つきぴーを泣かしたら許さない」
「ここで月美の名前が出て来た。」
「それは絶対に」
「それだけはか」

「つきぴーは友達だから」

だからだといつのである。

「その時は覚悟していて」

「ああ、わかってるさ」

陽太郎も真剣な面持ちで言葉を返す。

「それはな。絶対にな」

「ならいいけれど」

「むしろ守らないといけないよな」

男の考えだった。それも恋をする。

「やっぱりな」

「そう、守って」

椎名の言葉に僅かだが願いが籠った。

第十六話 深まっっていく疑惑その八

「私がない時は」

「その時はか」

「つきぴー居合やってるけれど戦えないから」

「気が優しいからな」

「それに弱いから」

「気が、というのである。」

「だから。私がないその時には」

「ああ、わかつてるさ」

陽太郎はむべもなく答えた。

「俺がだな」

「そう」

まさにその通りだった。

「斉宮が御願い」

「俺が月美を守る」

「これまでは私だけが守っていたけれど」

「それだけじゃなくてか」

「守ってくれる人が多い」

椎名はふとこんな言葉も出してきた。

「そうしてくれる人が多ければ多いだけ」

「多いだけ？」

「その人は幸せ」

「幸せなのか」

「人はどうでもいい相手は守らない」

「そうだよな」

陽太郎は今の椎名の言葉に頷いた。聞けばまさにその通りだった。

「誰だつてな。大切な相手だから」

「守るから」

「沢山の人にそう思われてるならか」

「そう、それだけ幸せ」

椎名が今言うのはこのことだった。

「そして。つきぴーは幸せになって欲しいから」

「俺も守るのか」

「守りたくないならそれでいい」

椎名は今度は一旦引き離れた言葉を出してきた。

「けれど。つきぴーを大切に思っているのなら」

「わかつてるさ。守るよ」

確かな顔と声での返答だった。

「俺、絶対にさ」

「そうしてくれたら嬉しい」

ふと顔を綻ばせた椎名だった。

「御願いね」

「何度も言うけれどわかつてるさ」

これが陽太郎の今の言葉であり考えだ。

「俺が一番に」

「一番になのね」

「月美を守るよ」

言葉も表情もさらに確かなものになっていた。

「何があってもな」

「そうしてくれると嬉しい。じゃあ」

「ああ、運動会に文化祭だよな」

「まずは運動会」

順番はしっかりと頭の中に入っていた。

「それから」

「よし、じゃあそれでだよ」

陽太郎は笑顔で頷いた。彼等もまたその運動会に考えを巡らそうとしていた。大会に向けて皆着々とその準備を進めていた。

その中でだ。陽太郎はまた部活の後の下校で月美と一緒に

いた。そしてその場で彼女に対してその運動会のことを話していた。

「高校の運動会ってな」

「どうかしたんですか？」

「いや、行進の練習とかそういうのしないんだな」

こつ月美に話すのだった。

「そういうのは」

「そうですね。組み立て体操とかの練習も」

「全然ないよな」

「ありませんね」

このことを二人で話すのだった。

「創作ダンスも」

「女の子はそれだったよな」

「男の子が組み立て体操で女の子は創作ダンスですよな」

運動会の出し物の定番である。

「けれどその練習は」

「ないんだな」

「それどころかそれ自体ありませんよな」

月美はこのことを指摘してきた。下校中に二人仲良く話す。

第十六話 深まっていく疑惑その九

「組み立て体操も創作ダンスも」

「入場行進もなく開会式だけだしな」

「何か随分違いますね」

「あの入場行進とかの練習は何だったんだ？」

陽太郎は首を傾げさえしていた。

「結局。何だったんだ？」

「中学校までは必要だったんでしょうか」

「そうなのかな。ああした時って先生の質もわかるしな」

「質もですか」

「怒っても生徒に認められる先生っているからな」

陽太郎は小学校や中学校のことを思い出しながら月美に話した。

その運動会の練習の時である。その時に他ならなかった。

「けれどその逆にな」

「認められない先生もですか」

「いるからな」

「こつ話すのだった。」

「そついうのもあるからな」

「先生を見る為のものでもあるんでしょうか」

「結果としてそつじゃないか？」

「こつ月美に話す。」

「やっぱりな」

「そついうものなんですか」

「はつきりとはわからないけれどな」

断言は避けた。

「そつじゃないのかな」

「そつですかね」

「まあそれで競技に出て応援して」

「応援もですよね」

「俺そつちがメインになったから」

「頑張つて下さいね」

月美は優しい笑みを浮かべて言ってきた。

「応援。頑張つて下さいね」

「いや、それはまずいだろ」

陽太郎は今の月美の言葉には笑って返した。

「流石にさ」

「まずいですか？」

「まずいさ。だってクラス違うからさ」

このことを話して駄目だというのである。

「だから。それはまずいだろ」

「いえ、スポーツマンシップですから」

月美はそれを話に出して反論してきた。

「ですからそれは」

「いいっていいのか」

「敵味方でも立派だったら褒めればいいと思います」

月美は静かだが確かな言葉で語った。

「それで」

「そついうものか」

「そつだと思えます」

また言うのだった。

「私は」

「そつか」

月美のその言葉を聞いてだ。陽太郎は目から鱗が落ちた感じだった。

しかしだ。一応はこう返した。

「それでもな」

「それでも？」

「おおっぴらにはしない方がいいよな」

「これが今の彼の言葉であり考えだった。

「ちよつとな」

「いいですか」

「周りの目があるからさ」

「それでなんですね」

「うん、大人しくしよう」

「こつ月美に告げた。

「それでいいよね」

「そうですね」

「月美は陽太郎の今の言葉に素直に頷いた。

「それじゃあ」

「俺達それぞれのクラスで楽しもう」

「陽太郎はこつも彼女に話した。

「そうしよう、運動会はさ」

「はい、わかりました」

「またしても素直な返答だった。

「それじゃあ」

「そうしよう。それでさ」

「はい、今度は一体」

「月美は何か競技に出るのかな」

「今度はこのことを問うたのだった。

第十六話 深まっっていく疑惑その十

「それで。何の競技に」

「私はまだ」

「決まっていないのか」

「はい、残念ですけれど」

「そうだったのだった。」

「それはまだ」

「そうか。決まっていないのか」

「一つは絶対に出ますけれど」

「そういう決まりだからな」

「それでもまだ何に出るかは」

やはり決まっていないという。月美自身の言葉も曖昧なものになっている。

「まだ」

「俺のクラスはもう大体決まってるんだけれどな」

「愛ちゃんが決めるんですね」

「ああ、そうなんだよ」

「やっぱりそうなんですな」

自分の予想が当たってだ。月美は今は微笑んだ。

「愛ちゃんが」

「椎名はやっぱり凄いよ」

陽太郎は素直に椎名を褒める言葉を口にした。

「何ていうかさ」

「何につけても深く考えてますよね」

「しかも的確だしな」

「ここが重要なだった。」

「あいつが考えて決めて間違いはなかったからな」

「それずっとなんですよ」

「中学校の頃からか」

「はい、その時からなんです」

つまりその時から筋金入りの名軍師だったのである。

「愛ちゃんって頼りになって」

「だよなあ。あいつがクラス委員でよかったよ」

陽太郎の口調はしみじみとしたものになっていた。

「本当にさ」

「そこまでするか」

「そのお陰で今度の運動会うちのクラスいい結果になりそうだしな」

「愛ちゃんのお陰で」

「味方にしたらあれ程頼もしい存在はないさ」

しかしである。逆説も述べられた。

「ただしな」

「ただし？」

「敵だったら怖いな」

味方として頼もしければ敵になった場合は、である。当然そんなことだった。

「あいつはな」

「愛ちゃんって敵になったら怖いですか」

「そう思う」

またしみじみとした口調になっていた。

「とりあえず敵に回したくはないよ」

「私はそういうこと考えたことないですけどね」

「そりゃ親友だからだよ」

それでだと月美に話す。

「月美とあいつはさ」

「親友だからですか」

「椎名のこと好きだろ」

「はい」

陽太郎のその問いにすぐに答えた。

「大好きです」

「あいつも月美のこと好きだからな」

「だからですか」

「お互い親友同士で仲がよい状況だったら何も起きないさ」

今の陽太郎の言葉はしみじみとしたものであった。

「そういうことだよ」

「ずっと友達同士でいたいんです」

月美は本音も述べていた。

「愛ちゃんとは」

「そうしたらいいさ。それで運動会はな」

「はい、運動会は」

「お互い頑張ろうな」

この言葉を結論にした。

「それじゃあな」

「はい、運動会はお互いに」

こんな話をして下校していた。しかしその現場をだ。州脇達三人が見てしまった。

三人はその時ファミレスにいた。そこでお茶を飲んでいたので。

窓側の四人用の席に座っている。そこであれこれと話をしている。

「やっぱりお茶飲み放題っていいよね」

「そうよね、何杯でも飲めるってね」

「しかもお茶以外も飲めるし」

見れば三人は紅茶だけを飲んでいなかった。ジンジャーエールやサ

イダーもだ。その他にはコーラも飲んでいるのだった。

そうしたもの飲んでだ。こんな話もした。

「ところで星華ちゃんは？」

「まだよ」

「部活なんだって」

こう話すのだった。

第十六話 深まっっていく疑惑その十一

「だから今日は無理なんだって」
「そうなんだ」

州脇は二人の言葉に少しがっかりとした顔で応えた。

「折角四人用の席なのにね」
「まあ仕方ないじゃない」
「そうよね」

結局二人の言葉に頷いた。

「それじゃあ今は」
「そうそう、三人で楽しもう」
「飲み放題なんだし」
「お酒じゃないけれどね」

それは残念だった。彼女達にとっては。
「制服で飲むのは流石にやばいからね」
「せめて私服だったらよかったけれど」
「まあそれは仕方ないとして」
「今はこれを楽しみましょう」
「そうよね」

州脇はまた二人の言葉に頷いた。そうしてだ。自分の目の前のチヨコレートをたっぷりとかけたクレープを見てだ。こう言うのだった。

「ここ、スイーツも美味しいしね」
「甘さがわかってるわよね」
「アイスクリームだってね」
三人の前にはアイスも置かれていた。
「美味しいしね」
「そうよね」
「いいお店よね」

こんな話をしていた。そうしてだ。

不意にだ。橋口が二人に言ってきた。

「それでだけれど」

「それで？」

「それでって？」

「星華ちゃんの好きな人って誰かな」

この話をはじめたのである。

「それで。誰かな」

「ああ、あれね」

「あのことね」

州脇と野上もである。橋口はその言葉に応えて頷いた。

「どう見たって好きな相手いるしね」

「それもこの学校？」

「そうよね」

こう口々に話すのだった。

「それで相手だけれど」

「誰かしら」

「多分だけれど」

橋口はこう前置きしたうえでだ。そのうえで二人に話した。

「あの中学の頃から一緒だっている」

「三組のだっけ」

「あの剣道部の」

二人はすぐにこう言った。名前は中々出ない。

「ええと、あの青い長ランの？」

「誰だったかしら」

「確か」

野上がだ。首を捻りながら述べた。

「斉宮だったかしら」

「そうそう、そいつだったわ」

「あの何か線の細い」

陽太郎の顔と名前がだ。ここで三人の中で一致した。

「あいつなのね」

「星華ちゃんが好きなのって」

「成程ね」

橋口は頭の中で彼の顔と名前を一致させてだ。そのうえで言うのだった。

「星華ちゃんの好みってああいうんだ」

「悪くないんじゃない？」

「そうよね」

州脇と野上はその好みについてこう述べた。

「特にね」

「悪い奴でもないっばいし」

「けれど中学の頃から好きみたいじゃない」

橋口は鋭くこのことを指摘した。

「それって凄くない？」

「言われてみたら」

「長いしね」

二人も橋口のその言葉に頷く。

第十六話 深まっっていく疑惑その十二

「そうなんだ。星華ちゃんって一途なんだ」

「そうみたいね」

「そうよね。一途よね」

橋口も二人のその言葉に頷く。

「それじゃあ。応援しようね」

「私達友達だしね」

「やっぱりね」

二人は彼女へのそうした感情からこう決めた。

「そうしようね」

「三人でね」

「そうして。それでね」

今度はだ。野上が言う。

「星華ちゃんが付き合えるようにしてあげよう」

「一途な想いは報われないとね」

「やっぱりね」

こんな話をしてきた。そしてであった。

丁度そこでだ。野上がふと窓を見る。するとだった。

「あっ」

「?どうしたの?」

「何かいたの?」

「噂をすれば」

こう二人に述べた。

「何とやらよ」

「噂をすればって」

「まさか」

「そう、そのまさかよ」

また二人に言う。

「その斉宮よ。ほら」

「あっ、本当」

「あいつじゃない」

窓の向こうにだ。彼が歩いていたのだ。その部活帰りの下校である。

「ここ通学路だしね」

「通るのも当然ね」

「そうね」

何故彼がここを通るのかはもう自然とわかることだった。

「ふうん、確かに横顔いい感じ？」

「そうよね」

「私も彼氏いなかったらね」

橋口はくすりと笑って冗談半分に話した。

「その時はね」

「その時はなのね」

「こくつてた？」

「そうしたかも」

くすりと笑って述べたのだった。

「ひよつとしてだけれどね」

「まあ確かにね」

「悪くはないわよね」

「むしろいい感じ？」

「そうよね」

州脇と野上もこう話す。

「ああいう相手と横にいたらね」

「いい感じよね」

「確かに」

こんなことを話しながら彼を見ていた。そうしてだった。

州脇がだ。最初に気付いたのだ。

「あっ」

「んっ!？」

「あれっ!？」

そしてだ。後の二人も続いて気付いた。

「誰か横にいるわよね」

「あれ誰？」

「誰かしら」

陽太郎は右半分を彼女達に見せる形になっている。そしてその左手に誰かいた。だがそれが誰かは彼女達の方からは見えないのだ。

「彼女かしら」

「けれどあれって」

「誰？」

三人の方からはよく見えない。どうしてもだ。

「髪、長くない？」

「長いみたいね」

「それに背はあまり高くない？」

それでも何とか見ながら言う。

「小柄、って言えるかしら」

「そこまでいかないんじゃ」

「それにあの制服って」

制服もだ。闇の中に何とかちらりと見られた。

「うちの学校よね」

「うん、そのうちの一つよ」

「間違いないわ」

三人はこのことも確認した。

第十六話 深まっっていく疑惑その十三

「じゃあまさか」

「付き合ってる!？」

「うちの学校の生徒と」

陽太郎についてそう疑念を感じたのだ。

「これってまずいよね」

「まずいわよ」

「まずくない筈ないじゃない」

三人は深刻な顔になって言い合った。

「これって。星華ちゃんにも言わないとね」

「言わないとまずいでしょ」

「隠してもこういうことってばれるし」

「そうよね」

「ばれるからね」

こうしたことはよくわかっていた。実際にこうしたことは自然と

関係者の目や耳に入る。そうなれば、ということなのである。

「だから。今のうちに話して」

「傷を最低限にしとかないと」

「星華ちゃんショック受けるし」

「それじゃあね」

「決まりね」

「そうよね」

三人で頷き合っただ。そうしてだ。

「相手、確かめよう」

「うん、そうしよう」

「誰か」

陽太郎の隣にいるのが誰かだ。確かめようとした。

そのうえで席を立つ。直前にテーブルの上のドリンクやスイーツ

を全て腹の中に入れる。そのうえでカウンターに向かう。

そこに向かうとだ。ここぞだ。

「あれっ、いない」

「お店の人は？」

「何処？」

「あっ、はい」

ここぞだ三人より少し歳が上と思われるウエイトレスが来た。慌てた様子でカウンターに来てだ。そして対するのだった。

「お勘定ですね」

「はい、そうですけれど」

「御願いますね」

「わかりました。それじゃあ」

「あの、けれど」

しかしだ。ここで野上がそのウエイトレスに話した。

「その前にですね」

「その前に？」

「手、拭かないと駄目なんじゃ」

「こう言うのだった。見ればだ。」

ウエイトレスのその手は濡れていた。しかも泡だらけだ。どうしてそうなっているのかはもう言うまでもなかった。それだけでわかることだった。

「食器洗ってたんですか？」

「ちよっとさつきまで」

「お店今人がいない？」

「まさか」

橋口と州脇はこのことに思い至った。

「そういえば今日ウエイトレスさん少ないとね」

「ウエイターさんもね」

「いつもよりも」

「ちよっと新規開店のお店に応援に行っていますして」

そのカウンターウェイトレスがその事情を話してきた。

「それでなんです」

「それでなんですか」

「今人がいないんですか」

「それで」

「すみません、それじゃあすぐに戻りますから」

ウェイトレスは一旦お店の中に戻った。その手の泡を洗い落とすてそのうえで拭く為である。濡れた手でカウンターを扱うことはできない。

そしてその間だ。三人は待つことしかできなかった。

「これってまずいよね」

「まずいなんてものじゃないし」

「そうよね」

陽太郎の横にいる相手のことを考えてだ。こう言うのだった。

「こうしているうちに行っちゃうし」

「だよ、まずいよ」

「ついてないわね」

この状況は仕方なかった。そうしてだ。

ウェイトレスが戻ってきてそのうえで勘定を済ませてそれから店を後にする。しかしその時にはもう二人の姿は何処にもなかった。

「やっぱり」

「何処に行ったのかしら」

「ええと、こつち？」

橋口が夜道のうちの一つを指差した。三人共その夜道を見回す。だが見えるのは闇の中の灯りだけだった。

「こつちに行ったかな」

「そうじゃないの？」

「そつちなんじゃ」

三人は何処に二人が何処に行ったのか全くわからなかった。何一つとしてだ。

そして見回すうちにも時間が過ぎてだ。諦めるしかなかった。

「やっぱりいないし」

「それじゃあ」

「もう仕方ない？」

州脇が言った。

「見失ったし」

「もう何処に行ったかわからないし」

「帰ろう」

こう言うしかなかった。そうしてだ。

三人は仕方なく彼女達の帰路についた。そのうえでこの日は終わった。だがこれもまただ。星華をさらに焦らせ歪ませるのだった。

第十六話 完

2010・8・3

第十七話 姿の見えない嫉妬その一

第十七話 姿の見えない嫉妬

星華はその話を校舎の屋上で聞いた。そして最初に言った言葉は。

「嘘……」

「嘘じゃないから」

「それは絶対に言わないから」

「本当だから」

三人は啞然とする彼女にだ。目を少し伏せさせて告げた。

「私達見たし」

「相手は誰かはわからないけれど」

「制服は」

「うちの学校ね」

星華はさつき聞いた話を自分の口から述べた。

「そうだったって」

「うん。多分斉宮って」

「うちの学校の誰かと付き合ってるよ」

「それは間違いないわ」

「誰なのよ」

星華は狼狽を隠せない調子で言葉を出した。

「それでその相手は。誰なのよ」

「だからそれはわからないけれど」

「それでもね」

「うちの学校の娘よ」

「どんな外見だったの？」

「ええとね」

まずは州脇が言った。

「髪は黒かったわね」

「そうそう、それでロング」

「背はあまり高くなかったわね」

野上と橋口も言ってきた。

「星華ちゃんより小さいわよね」

「何センチかね」

「そう、髪は黒髪のロングね」

星華はまずはそのことを確認した。そして次は背だった。

「それで背は私より低いの」

「そんな感じ」

「後姿だけがわかったけれど」

「けれどね。わかったのはね」

「それだけよね」

あらためてこう話すのだった。

「わかったのは」

「それだけよね」

「それだけなの」

星華はここまで聞いて残念な顔になった。

「わかったことはそれだけなの」

「悪いけれどね」

「それだけなのよ」

「そう。わかったわ」

星華は暗い顔で述べた。

「とりあえずうちの学校ね」

「どんなタイプの制服だったかな」

「黒いタイツだったよね」

「確かね」

今度は制服も確かめられる。三人はそうしたことを思い出しながら話す。

「それで黒いスカート」

「だったわよね」

「ブラウスは白？」

「ピンク？」

「水色だったかしら」

ところがここです。ブラウスについては曖昧だった。闇夜でしかも離れて見たので。三人もそこまでは確かに見られなかったのだ。

「とりあえず黒いタイツだったわよね」

「ハイソックスでしょ、あれ」

「そうだったかしら」

「タイツは夏しないでしょ」

星華がこのことを指摘した。

「それはちよつと」

「そうよね、言われてみればね」

「暑いしね、まだ」

「だったらね」

タイツについてはだ。星華も含めて否定された。

そのうえでだ。あらためて話された。

「じゃあハイソックスね」

「黒なのは間違いないから」

「それはね」

「そう、黒いハイソックスね」

星華はこのことを確認した。

第十七話 姿の見えない嫉妬その二

「それと黒いスカート。丈は？」

「短かったわ」

「そうよね、短かったわよね」

「ハイソックスだったし」

「黒くて短いのね。わかったわ」

星華はこのことも確認したスカートもだ。

「つまり背は私より低くて黒のロングヘアで」

「ええ」

「外見はね」

「それで制服は黒の短いスカートに同じ色のハイソックスね」

「頭の中に入れた？」

「それで」

「しかもうちの学校の生徒」

またこのことも話した。

「かなり限られるわね」

「そうよね。けれどもうちの学校って生徒多いから」

「探すの難しいけれど」

「誰か確かめるのは」

「いいわよ、それは」

ふとだ。星華はこんなことを言ったのだった。

「それはね。いいわよ」

「いいの？」

「どうして？」

「後は私が見つけるから。そして」

そして。次の言葉にはだ。星華の感情がそのまま出た。

「絶対に許さないから」

「許さないって」

「どづいづこと?」
「そいつ絶対に許さないから」
また言うのだった。
「何があってもね」
「?どづいづこと?」
「ちょっとわからないけれど」
「そうよね」
「斉宮は絶対に渡さないから」
またしても感情をそのまま出した。
「だからよ。許さないわよ」
「渡さないのね、彼」
「絶対に」
「誰でもよ。私はね」
もう止まらなかつた。本音を出していく。こづなつてはどづいづこよ
うもなかつた。
「ずっと好きだったのよ」
「その相手をね」
「そうだったの」
「中学校の時からずっと。だからよ」
それでだと。三人に話していく。
「渡さないわ、絶対にね」
「じゃあ相手見つけたら」
「どづするのよ」
「その時は」
「決まってるわ。思い知らせてやるわよ」
言葉が荒くなっていた。そして大きくもなっていた。
「その時はね」
「わかつたわ。じゃあね」
「その時は私達もね」
「協力させて」

三人は間違っていた。ここで協力するのが友情だと思ったのだ。だから星華を止めはしなかった。それこそが間違いであった。

「星華ちゃんがそこまで思うんならね」

「そうさせて」

「それでいいわよね」

「そうしてくれる？」

ここで星華は少し弱気な顔も見せた。

「その時は」

「勿論よ。友達じゃない」

「ねえ」

「当たり前じゃない」

間違いに気付かないまま約束する。

第十七話 姿の見えない嫉妬その三

「そんなこと」

「ねえ」

「星華ちゃんの為だったらよ」

「何でもするわ」

「有り難う」

星華も誤ったまま礼を述べる。

「じゃあ相手を」

「まあ特徴はわかったしね」

「ひよっとしたら見つかるかも」

「まずは探してね」

「そうしましょう」

「ただね」

しかしであった。州脇がふと言ったのである。

「星華ちゃんさあ」

「何？」

「斉宮好きなのよね」

あまり考えなかった。しかし言ったのである。

「そうなのよね」

「う、うん」

星華は覚悟を決めた顔で州脇のその言葉に頷いた。

「そうだけれど」

「じゃあ告白したら？」

「そうよね、そこまで好きならね」

「やっぱりね。告白しないと」

野上と橋口も州脇のその言葉に続く。

「一途なのはいいことだしね」

「ここは一気にね。言ってみたら？」

「そんなことできないわよ」

今度は困った顔になる星華だった。

「だって。怖いから」

「ううん、怖いのは」

「告白するのは」

「怖いわよ。勇気がいるじゃない」

その困った顔で話す。

「告白なんて。ちょっとやさそつとじゃ」

「気持ちわかるけれどね」

「それはね」

三人もその感情は認めた。同じ女の子だからわからないわけではない。だから今の星華の言葉をだ。むげに否定したりはしなかったのだ。

「わかるけれどね」

「それでもよ」

「勇気出したら？」

「ううん、どうしよう」

困ったものに弱ったものが入った顔になった。

「言えたら」

「機会があればね」

「そうしたら？」

また告げる三人だった。

「運動会は。そういう機会ないか」

「残念だけれどね」

「クラスとクラスの対抗だし」

それはないというのである。星華にとっては残念であると共にほつとしたものもある。そうしたことだった。幸か不幸かはわからないが。

「けれどね」

「けれど？」

野上の言葉に問うた。

「何かあるの？」

「あるわよ。文化祭はね」

その時はといたのである。

「あるわよ」

「あるのかしら」

「あのね、文化祭の最後のフォークダンスだけれど」

野上はこのことを話に出してきた。

「あれに誘えばいいじゃない」

「フォークダンスに」

「私部活の先輩から聞いたけれどあれに誘えばね」

「どうなるの？」

「そのカップルは一緒になれるそうよ」

こう星華に話すのだった。

「一緒に踊ったらね」

「それ本当？」

怪訝な顔で野上に問い返す。

第十七話 姿の見えない嫉妬その四

「フォークダンスに誘ったらって」

「そうよ。この学校言い伝えだって」

また話す野上だった。

「じゃあやってみたら？」

「そうね」

それを聞いてだった。星華は少し考える顔になった。

「それじゃあ。ちよつと」

「いい機会よね、文化祭だと」

「そうよね」

州脇と橋口もその話を聞いて言うのだった。

「カップルが誕生するにはね」

「絶好のイベントだし」

「だからよ」

野上はここでも星華に告げる。

「その時に。勝負かけたら？」

「私達も一緒にいてあげるから」

「告白ついでにね」

「そうね」

三人の言葉を受けてだ。星華も遂に強気を見せた。

「それじゃあ。文化祭の時ね」

「運動会ではいいところ見せてね」

「事前にイメージアップ」

「それどう？」

「運動会はそれなのね」

また三人の言葉を聞いてであった。

「その時は」

「そうよ。競技一杯出てね」

「齊宮に見せればいいじゃない」

「星華ちゃんの活躍」

また口々に言う三人だった。

「それから文化祭にかかればね」

「もう御の字じゃない」

「それで行きましょう」

「わかったわ」

星華の表情に明るいものが戻った。そのうえで頷く。

「それじゃあ。そうするわ」

「まずは運動会頑張りましょう」

「そしてその勢いで文化祭」

「それでね」

「それだったら」

ここでは勇気を出せた。そうしてである。

すぐに月美のところに向かう。そうして言う。

「ねえ。いいかしら」

「はい？」

「私運動会の競技幾つか出るから」

「こつ月美に言うのだった。」

「それでいいわね」

「幾つかですか」

「幾つもよ」

「こつも言い換えたのだった。」

「出るからね」

「出てくれるんですね」

「競技は適当にそつちで決めて」

「つつけんどんな言葉だがそれでも月美に話した。」

「それで御願い」

「はい、それじゃあ」

椎名はその彼女をじっと見ていた。しかし今は話さなかった。

そしてだ。この時はそれで終わった。しかしだ。

星華は変わった。常に誰かを探していた。そうしていつも三人に
対して言うのであった。

「見つかった？」

「その黒髪のロングの娘よね」

「その娘よね」

「ええ。誰かわかったの？」

不安と猜疑に満ちた顔での言葉だった。

「その相手って。誰なのか」

「ちよっとね」

「まだ」

「悪いけれど」

三人は眉を顰めさせてだ。こう返すばかりだった。

「黒髪って多いし」

「ロングヘアもね」

「背も。それ位の娘なら」

「そうなの」

それを言われていつもがっくりとなる星華だった。

第十七話 姿の見えない嫉妬その五

「まだ見つからないのね」

「そうなのよね。誰かしら」

「制服もわかってるけれどね」

「黒いスカートに白いブラウス」

「それに黒のハイソックス」

「この三つであつた。その相手の制服の特徴はだ。」

「これも結構多いわよね」

「人気のある制服だしね」

「ちよつとね。多過ぎて」

「こういう時マンモス校って厄介ね」

星華は眉を顰めさせていた。

「どうにもね」

「そうよね。うちの学校って生徒数滅茶苦茶多いし」

「だから余計にね」

「困るのよね」

こう話しててあつた。さらに話すのだった。

「普通科だけじゃないし」

「商業科に農業科もあるしね」

「それにデザイン科」

「看護科もね」

「あらためて聞くと多いわね」

また顔を曇らせる星華だった。

「うちの学校って」

「工業科もあるけれどね」

「そっちは女の子殆どいないしね」

「割合にして十対一だからね」

男が十で女が一だ。その割合は圧倒的ですからある。

「けれどそつちかも」

「そつちにいるかも」

「考えたらきりがないけれど」

「そうね」

それを聞いてだ。星華の目が剣呑なものになった。

「工業科にもいるかもね」

「しかも一年に二年に三年よ」

「学年は三つだし」

「三倍になるけれど」

「うっん、本当に誰なのよ」

星華の苛立ちはさらに高まる。

「誰がなのよ。斉宮の横にいたの」

「まあ落ち着いて」

苛立つ星華を見かねてだ。橋口が止めた。

「落ち着いて考えないとわかることもわからないわよ」

「そうね」

言われてだった。星華はとりあえず落ち着いた。

「それじゃあ今はね」

「そうして。とにかく特徴はね」

そしてだった。もう一度その相手の特徴を話すのだった。

「小柄に近くて黒いロングヘア」

「それで白のブラウスに黒のスカートとハイソックス」

「しかもスカートは短い」

三人でそれぞれ話した。

「これだけね」

「この特徴よね」

「これがその相手よ」

「待って」

その一連の特徴を聞いてだ。星華はふと気付いた。

「それって」

「どうしたの？」

「心当たりあるとか？」

「何かさ、それって」

そして言うのだった。

「あれじゃないの？西堀」

「西堀？そういえば」

「確かに」

「そうよね」

ここで三人も気付いたのだった。

「全部あいつの特徴よね」

「背も髪の色も髪型も」

「それに制服だって」

「そうよね。同じよね」

また言う星華だった。

「全部ね」

「確かにね。全部同じね」

「それはね」

「けれどよ」

ところがだ。ここで州脇が他の三人に話した。

第十七話 姿の見えない嫉妬その六

「あいつはないわよ」

「ないの？」

「そうかしら」

「あいつ確かに男たぶらかすけれど」
誤解のまま話す。

「斉宮と一緒にいるなんて考えられる？」

「けれど。剣道部と居合部って道場同じだけれど」

「ねえ」

橋口と野上はこのことを出してきた。

「だからそれも」

「あるんじゃない？」

「ああ、それはないわよ」

だが、だった。州脇がそれを否定した。

「星華ちゃんもそう思うわよね」

「それはね」

星華もだった。州脇の言葉に頷いた。そしてその理由も話した。

「斉宮はあんなのに引つ掛かる奴じゃないし」

「ほらね、それでなのよ」

州脇は今の星華の言葉に我が意を得た顔で返した。

「普通に考えてよ。ああした女に引つ掛かるのって」

「色ボケとか？」

「馬鹿とか？」

橋口も野上もそんな言葉を出した。

「そういう奴しかいないわよね」

「騙されるのは」

「斉宮ってそういうことには疎いのよ」

星華は話しながら困った顔になっていた。

「鈍感だし」

「そんな相手が西堀みたいなのと一緒になったりしないわよ」
これが州脇の持論だった。

「絶対にね」

「そういえばそうね」

「言われてみれば」

野上と橋口も州脇の言葉に頷いた。

「じゃああいつはないわね」

「それは」

「まあ男の誰かは今でもたぶらかしてるわよ」

州脇は腕を組んで月美を見据えて言った。

「それはそれで許せないけれどね」

「そうよね、本当に嫌な奴」

「何時か思い知らせてやるから」

野上と橋口も州脇に続く。

「ああいう奴許せないからね」

「とてもね」

「それだけけれど」

今言ったのは星華だった。

「誰なのかしら」

「誰なのかなのね」

「その斉宮と一緒にいたのが」

「それよね」

話が戻った。そのうえでまた話されるのだった。

しかし結局この時は何もわからなかった。陽太郎と月美にとっていいことは二人への疑惑が真実だったがそれが否定された。彼等の知らない幸運だった。

そんなことを話している間にも運動会は近付いていた。そこでだ。椎名がだ。赤瀬と共にホームルームの時に教壇のところ立ってだ。こうクラスメイト達に対して言うのだった。

「優勝よ」

「いきなりそれが」

「優勝なのね」

「そう、優勝するから」

「こつ皆に告げる。」

「この運動会、貰ったわ」

「またえらく自信あるんだな」

狭山がその彼女に対して自分の席から突っ込みを入れた。

「やっぱりあれか？その出場の割り当てでか」

「この通りで勝てる」

断言する椎名だった。

「優勝確実」

「アクシデントとかあったらどうするの？」

今度は津島が椎名に問うた。

「その場合は」

「その場合でもいける」

「それでもなの」

「そう、いける」

津島にも断言で返したのだった。

第十七話 姿の見えない嫉妬その七

「その場合も考えて割り当てたから」

「うっん、何か凄くない？椎名って」

「そっだよな」

「何ていうか天才軍師？」

「そんな感じよね」

皆津島の言葉を受けて唸るようにして話した。

「ちよつと。何ていうか」

「竹中半兵衛みたいな」

「小さな軍師」

「リボンを付けた」

「小さいのだけ余計」

椎名が反応したのはそこだった。

「それ以外はいい」

「天才なのはいいんだ」

「自分でも自覚してるのかな」

「天才は九十九パーセントの努力と一パーセントの才能」

椎名が言葉に出したのはエジソンの言葉だ。尚エジソンは確かに発明ではそのようにして天才だった。だが経営者や世渡りという面ではその努力を払う余裕がなかった。人間の努力は集中されるものでありエジソンは経営者としては残念ながら天才ではなかった。

「だから嬉しい」

「本当に嬉しいのか？」

狭山は今は椎名のその無表情を見ていた。

「あんまりそっちは見えないけれどな」

「嬉しい」

しかし椎名は言う。

「褒められて嬉しい」

「だったらいいけれどな」

「嬉しい。ただ」

「ただ？」

「絶対に優勝するのは事実だから」

「このことはまた言った。」

「皆頑張ろう」

「ええ、わかったわ」

津島が今の津島の言葉に頷いた。しかも微笑んでだ。

「優勝ね。頑張るわよ」

「赤瀬もいるしな」

「これは陽太郎の言葉だ。」

「学園で一番のパワーファイターもいるしな」

「僕もなんだ」

「って御前もクラス委員じゃないか」

陽太郎の突っ込みは鋭い。そこを指摘する。

「一度は喋れよ」

「だから今喋ってるけれど」

「いや、ホームルームになると絶対に椎名が喋るからな」

「僕喋る必要ないからね」

「それでか？」

首を捻って言う陽太郎だった。

「御前が喋らないのって」

「そうだけれど」

「無口だからじゃないのか」

陽太郎の突っ込みは今度はそこだった。

「それでなのか」

「うん、確かに僕は口数は少ないけれど」

自覚はしているのだった。

「それでも。全部椎名さんがやってくれるから」

「私が軍師になってるから」

また椎名が言う。

「赤瀬は指揮官と思ってるいい」

「指揮官っていうかロボットなんじゃ？」

「椎名が操る探偵か何かで」

「赤瀬が鉄人」

「何かそんな感じだけれど」

「それならそれで面白い」

皆の今の言葉も頷いて受け入れる椎名だった。

「美少女探偵Sとして売り出す」

「美少女かよ」

陽太郎の突っ込みは椎名にもかけられた。

「自分で言うのはどうなんだよ」

「その方が気持ちいいからそれでいきたい」

「それでか」

「そう。美少女天才軍師でもいい」

「こつも言ってきた。」

「どつちでもいい」

「どちらにしろ美少女なんだな」

陽太郎の突っ込みも続く。

「それは譲れないんだな」

「譲らない」

実際にそうだと返す椎名だった。

「美少女だけは」

「何か椎名もなあ」

今度は狭山が首を傾げさせながら述べた。

第十七話 姿の見えない嫉妬その八

「冗談か本気がわからないところがあるからな」

「そうよね」

狭山のその言葉に津島も頷く。

「今はどうなのかしら」

「半分本気で半分冗談じゃないのか？」

陽太郎はすぐにこう分析した。

「流石に全部本気で自分を美少女なんて言わないだろ」

「まあそんなところだろうな」

「そうよね」

狭山と津島も陽太郎のその分析に頷いた。

「椎名はそこまで言わないしな」

「自惚れ屋さんでもないし」

「自惚れたら足元すくわれるから」

また言う椎名だった。

「それは気をつけてる」

「じゃあやつぱり半分冗談なんだな？」

「そのつもり」

陽太郎の問いにもこう返した。

「だから安心して」

「安心するな。それで安心するのはこのことだけじゃないんだな」

「メインのことは一番安心していい」

その運動会のことであるのは言うまでもない。

「ちゃんと。優勝するから」

「よし、それじゃあな」

「頑張るわよ」

狭山と津島は早速乗り気になっていた。

「ぶっちぎりで優勝してな」

「文化祭につながるわよ」

「文化祭のことも考えてあるから」

やはり椎名は軍師だった。冷静に先の先を読んでいた。

「やっていこう」

「そういうことだね」

赤瀬は頃合いを見計らって絶好のタイミングでこう述べた。

「皆、頑張ろう」

「ああ、よくな」

「アクシデントが起こった場合も考えてるけれど」

最後にまた椎名が皆に言ってきた。

「それでも各自怪我には気をつけて」

「それはか」

「大会が起こる前も起こってから」

言うのは両方の時だった。起こる前だけではなかった。

「一番痛いのは自分だから」

「だから怪我には気をつけようね」

赤瀬もそこは注意した。

「そういうことだね」

「よし、それじゃあ」

「怪我に気をつけてそれで」

「頑張るか」

「そうよね」

皆意気あがった顔で笑顔で頷き合う。三組は椎名の用意周到な策略というか根回しと言葉のやり取りによりだ。まとまってもいた。

しかし四組はだ。全く違っていた。

星華が勝手にだ。こんなことを言ったのである。

「だから。これだけじゃなくてね」

「他にもですか？」

「これとこれにも出るわよ」

いつも横にいる椎名を他所にだ。こう月美に彼女の机の前に立つ

て言うのである。それもかなりぞんざいで横柄な口調でだ。

後ろには橋口達もいる。そのうえで無言の圧力を月美に仕掛け同時に星華を援護していた。月美には到底守れない状況だった。

「いいわね」

「けれど佐藤さんって」

「何よ」

「もう三つの競技に出てますよね」

指摘するのはこのことだった。

「しかも最後のは」

「何なのよ」

「あの、マラソンですけど」

月美は自分の席に座ったままだ。そのうえで少し怯えた感じだ。自分の前に両手を腰に置いて立つ星華に対していたのである。

「いいんですか？最後にですけど」

「いいのよ」

月美はここでもぞんざいな口調だった。

第十七話 姿の見えない嫉妬その九

「私がいいつて言ったらいいのよ」

「そう、ですか」

「そうよ」

星華は出来るだけ強い声で月美に圧力をかけた。

「わかったわね、それで」

「はい……」

「全部出るから」

星華はまた言った。

「当然マラソンもね」

「わかりました。それじゃあ」

「わかったらいいわ。ちゃんと書いておきなさいよ」

三人をバツクにして言い切ってみせる。ところがここであった。椎名がだ。ぽつりとした口調で呟いたのである。

「出るのはいいけれど」

「!?!」

「考えた方がいい」

星華は見えていない。しかし確かに言った。

「ちゃんと。考えた方がいい」

「どうということよ、それって」

「だから。考えた方がいい」

また言う椎名だった。

「自分のことと競技のことは」

「何が言いたいのよ」

「無理はしないこと」

そしてまた言った。

「それだけ」

「何よ、それ。忠告のつもり?」

星華は椎名を見据えて突っかった。

「生憎だけれどね、女子バスケット部は鍛え方が違つたのよ」

「慢心や自惚れは墓穴」

だが椎名は再び呟いた。

「無理はしない」

「無理じゃないわよ」

星華の言葉は虚勢になってきていた。彼女が意識しないうちにだ。

「全部の競技でね。一等取ってやるから」

「クラス全体の競技にも出て」

「そうよ」

その虚勢を再度椎名にぶつけた。

「そうするわよ。女子バスケット部の力見せてやるわ」

「ならそうしたらいい」

椎名の言葉はここでは突き放しだった。

「そこまで言うのなら」

「大体ね、あんたね」

星華は言い切ってもだった。気持ちが収まらずに椎名にさらに言

った。攻撃せずには止まらない、まさにそうした感じであった。

「何でここにいるのよ」

「ここに」

「そうよ、うちのクラスによ」

「こつ椎名に言った。」

「何でいるのよ」

「いて悪いの」

「悪いわよ」

むっとした顔で椎名に返す。

「あんた三組じゃない」

「うん」

「ここは四組よ。それで何でいるのよ」

「つきぴーの友達だから」

だからだと返す椎名だった。

「それで」

「それでってそれが理由!？」

「そう、だから」

あくまで冷静な口調の椎名だった。

「それだけの」

「それでってね。そんな理由にはならないわよ」

椎名にさらに突っかかる。完全に戦闘態勢だった。

「何度も言うけれどここは四組なのよ」

「校則に書いてあるの?」

「はあ!？校則!？」

「そう。書いてあるの」

椎名は月美の席の横に座っている。そうしてそのうえで星華を見上げている。その態勢で自分に突っかかる星華と対峙しているのだ。

第十七話 姿の見えない嫉妬その十

「校則に」

「うっ、それは」

「前にもそれ言ったと思うけれど」

椎名は記憶力でも星華の先をいっていた。

「ちゃんと」

「そんなの書いてないけれど」

「じゃあいい」

きつぱりと言い切ったのだった。

「私がここにいてもいい」

「校則に書いてないからなのね」

「勿論法律にも書いてない」

椎名はさらに畳み掛けた。完全に優勢に立っていた。

「だからいい」

「くっ、わかったわよ」

星華も遂にだ。それで頷いた。

「それはね」

「そういうことね」

「ただよ」

それでもだった。星華は敗れてもそれでもだ。反論するのだった。

「さっきの話何よ」

「何って？」

「あんた何で私がマラソンに出るのにケチつけるのよ」

言うのはこのことだった。

「それは何だよ」

「何でももそれもないわよ」

また話す星華だった。

「私ずっと長い距離も走ってるし。陸上部にも負けないわよ」

「それでもよ。止めた方がいい」

「だからそれは何でなのよ」

「短距離出るよね」

「ええ、そうよ」

この問いには胸を張って返した。

「四つね。ハードルとかもね」

「だから」

「短距離なんかすぐに終わるからどうってことないわよ」

さらにむっとした顔になっての言葉だった。

「そんなのはね。私にとつたらね」

「短距離が長距離どつちに専念すべき」

「ダッシュもマラソンもどつちもやってるわよ、練習でいつもね」

「練習は練習」

しかし椎名はまだ言う。

「それ以外の何でもない」

「何でもないって?」

「そう、本番とは違う」

こつ星華に告げる。

「だからどちらかにしないと駄目」

「そんなの全然平気よ」

星華も完全に意固地になってしまっていた。

「見てなさい、本番には強いからね」

「そうよ、星華ちゃん馬鹿にしないでよ」

「あんた何知ってるのよ」

三人がこの場ではじめて口を開いた。

「知らないでしょ、そんなの」

「大体クラスも部活も違うし」

「おまけに運動部でもないでしょ」

「天文部」

椎名は三人の相手もした。やはり臆してはいない。

「そこにいるけれど」

「じゃあ女子バスケ部のこと全然知らないじゃない」

「それで何？偉そうに」

「何様なのよ」

「運動部のことは知らない」

椎名自身それは認めた。

「けれど格闘技やってるからそれはわかる」

「へっ、格闘技!？」

「何、それ」

「また藪から棒に」

今の三人にとってはだ。まさにそんな言葉だった。

「格闘技って何よ」

「急に話出してきたけれど」

「何やってるのよ」

「まずは空手」

最初にはだ。空手を話に出してみせた。

「それとムエタイ。カポエラもやってる」

「ええと、足技多い？」

「そうよね」

「何か」

三人もだ。ムエタイやカポエラのことには知っていた。主に格闘ゲームをやっただ。そのうえでそうしたものを知ったのである。

第十七話 姿の見えない嫉妬その十一

「つまり身体は動かしてるのね」

「運動は知ってる」

「そういうことね」

「そう。だから言える」

椎名の言葉は冷静なままだ。そして表情も変わらない。

「長距離と短距離は同時にはできない」

「まだ言うのね、こいつ」

「口の減らない」

「何だっというのよ」

「しかも」

さらに言う椎名だった。

「五つは多い」

「今度は競技の数なのね」

星華が返した。

「それね」

「そう、五つは多い」

また言うのだった。

「だから減らすべき」

「だから大丈夫って言うてるでしょ」

「無理」

しかし椎名の駄目出しは変わらない。

「人間には限界があるから」

「じゃあその限界超えてやるわよ」

星華もムキになってそれが止まらなくなっていた。

「絶対にね」

「それは超えられる」

椎名は今の星華の言葉は認めた。

「人間は努力すれば限界は超えられる」

「言ったわね、だからよ」

「けれどそれでもすぐには無理」

椎名のその話の根幹は変わらなかった。

「すぐには」

「すぐにはですって!?!」

「このことは言っておくから」

「ふん、見てなさいよ」

星華のその言葉が荒々しい。

「絶対にそれを見せてやるから」

「言ったから」

椎名の言葉は変わらない。

「そういうことだから」

「ふん、それじゃあね」

星華はもう苛立ちを隠せなくなっていた。そしてだ。

椎名と月美に背を向けた。そのうえで目の前に来た三人に話す。

「行きましょう」

「行ってくて」

「いいの、もう」

「ええ、いいわ」

荒くなった言葉で話す彼女だった。

「もうね。いいから」

「そう。じゃあ」

「丁度お昼だし」

「食堂に行く?」

「行きましょう」

また三人に言った。そしてであった。

その三人を引き連れるようにして慌しく席を立った。椎名はその後姿を冷静に見ていた。そのうえで月美に対しても言うのだった。

「あの娘だけれど」

「佐藤さん？」

「気をつけて」

こう話すのだった。

「危ういから」

「危ういって」

「バランスが崩れてる」

星華を評しての言葉であるのは間違いなかった。

「心のバランスが」

「それがなの」

「そう、崩れてる」

また言った。

「あのままだと大変なことになるから」

「運動会で。失敗するのね」

「それで済めばいい」

椎名の言葉はそこから先も見ているものだった。

「そこから先も。あのままだと」

「どうなるの？」

「大変なことになる」

また話すのだった。

第十七話 姿の見えない嫉妬その十二

「それでつきぴーにもいくかも」

「私にもって」

「あのまま自分自身も壊してしまいそう。それに巻き込まれるかも」
「私が」

「そう、つきぴーが」

月美を見てだ。そうしての言葉だった。

「そうならまた。動く」

「あの、愛ちゃん」

月美は椎名の言葉に何やら剣呑なものも感じていた。そこには確かな決意を見た。そのうえでまた彼女に話すのだった。

「何考えてるの？」

「これまでと同じ」

「同じって」

「私はつきぴーの友達」

その目には表情はない。だがそこには確かなものがあった。

「だから。ピンチの時には」

「その時には？」

「何とかする」

「こう話すのだった。」

「そうするから」

「それはいつも聞いているけれど」

実際に何かにつけ月美も聞いていることだった。そして月美もまたそれは同じである。彼女もまた自分のことで椎名を助けてきている。そうした意味でも二人は本当の意味での親友同士なのだ。

「いつも有り難う」

「御礼はいい」

これもいつもの椎名の言葉だった。

「ただ」

「ただ？」

「その時は何とかするから」

また話す椎名だった。

「任せて」

「うん、それじゃあ」

「今はそれだけ」

椎名の話はとりあえずこれで終わった。

「それじゃあお昼行こう」

「お昼ね」

「斉宮達が待つてる」

何気に陽太郎の名前も出した。計算してである。

「だから。急ごう」

「お昼だけねど」

「何かあったの？」

「あの、これ」

恥ずかしそうな顔であるものを机の上に出してきた。それは。

重箱であった。三段重ねである。それを白い風呂敷に包んでた。

そのうえで椎名に見せてきたのである。

「これだけねど」

「自分で作ったのね」

「うん」

椎名の問いにくくりと頷いて答える。

「そうなの」

「斉宮の為に」

「陽太郎君って色々好きなもの多いわよね」

「はつきり言えば何でも食べる」

椎名は彼の好みも既に知っていた。

「だからそれは」

「いいの？」

「気にしなくていい」
「そうだといいのだった。」
「あいつの食べ物の好き嫌いは」
「とりあえず好きだって聞いたものを入れたけれど」
「どれ位？」
「十品位」
「これだけの数だと話す。」
「品数は」
「量もあるのね」
「うん。やっぱり多過ぎるかしら」
「数も量も気にしなくていい」
「ところが、だった。椎名はこんなことを言ってきたのだった。」
「それはいい」
「いいの？」
「好き嫌いもだけれど気にしなくていい」
「椎名はまた月美に告げた。」
「全く気にしなくていい」
「それはどうしてなの？」
「男子生徒で運動部だとどれだけ食べても足りない」
「言うのはこのことだった。」

第十七話 姿の見えない嫉妬その十三

「だから」

「それでなの」

「むしろ多ければ多い程いいから」

「多ければなのね」

「そういうこと。だから重箱三段は大成功」

「よかった。それなら」

椎名の言葉を受けてだった。月美も笑顔になった。ほっとしたよ
うな笑顔だった。

「これを陽太郎君にね」

「ただし」

「ただし？」

「狭山が横から取るうとするから気をつけること」

それはとうのだった。

「あいつは意地汚いから」

「狭山君はなの」

「そう。あいつは津島と私で何とかするから」

そして自分もだと述べた。

「ただし注意はしていて」

「うん、わかったわ」

「それと赤瀬は」

「赤瀬君はそういうことしないわよね」

「私が作ったから」

何とでだった。椎名がここで何処からともなく出てきたものは
月美が持っているのよりも二回りは大きい重箱であった。しかもそ
れは何と七段もあった。

「これを」

「えっ、それって」

その七段の巨大な重箱を見てだ。月美も引いた。

「それが赤瀬君のお弁当なの」

「お握りに玉子焼きに野菜のおひたしに鳥の唐揚げに塩鮭に昆布にデザートが入ってるから」

「それで七段なの」

「赤瀬は巨大だから」

何しろ二メートル近い。椎名と比べると余計に凄まじい巨大さなのだ。

「だからこれだけ」

「全部愛ちゃんが作ったの？それ」

「そう」

その通りだというのだった。

「昨日の夜に」

「そうだったの」

「あいつにはこれだけ必要」

また言う椎名だった。

「だから作った」

「それ持てるの？」

月美が次に言うのはこのことだった。

「愛ちゃん、大丈夫？持ってた前とか見える？」

「気にしないでいい」

この時もこうした返答をする椎名だった。

「持てるし見えるから」

「そうなの」

「それじゃあ行こう」

その巨大七段重箱セットを両手に持ったの言葉だった。顔が隠れてしまう。それどころか上半身でもある。椎名は小柄なので隠れてしまった。

だがそれを全く苦にせずだ。彼女は普通に歩く。月美もそれに続く。

そうして校舎を出て校庭の緑の芝生の上に出る。既に陽太郎達
そこにいた。狭山に津島、それと赤瀬もいる。半円を描いてそれぞ
れ芝生の上に座っている。

まずは陽太郎がだ。七段を持つ椎名を見て言った。

「御前、何だそりゃ」

「お弁当」

椎名の彼への最初の返答はこれだった。

「それだけけど」

「まさか御前のか？」

「違う、赤瀬の」

そして次にはこう答えたのだった。

「赤瀬へのお弁当」

「赤瀬のかよ」

「そう。赤瀬食べるよね」

「うん、頂くよ」

赤瀬からの返事はすぐでしかも平和なものだった。

「有り難うね」

「気にしなくていい」

椎名は赤瀬の前にその弁当を置いてから述べた。

「好きで作ったから」

「好きで」

「赤瀬、食べて」

椎名は頬を少しだけ赤くさせてまた彼に告げた。

第十七話 姿の見えない嫉妬その十四

「たっぷりとね」

「うん、それじゃあね」

赤瀬もにこりと笑ってだ。椎名のその言葉を受けた。

そのうえでだ。月美も陽太郎に自分が持って来た重箱を差し出すのだった。

「あの、これを」

「俺に？」

「はい、食べてくれますか？」

差し出しながらの言葉だった。

「よかつたら」

「是非頂くよ」

陽太郎はにこりと笑って月美のその申し出を受けた。

「月美が作ってくれたんだよな」

「はい」

赤くなつた顔で陽太郎に答える、やや俯いていてその赤も椎名の赤より赤かった。

「そうです」

「じゃあ是非。全部貰うよ」

「有り難うございます」

「御礼なんかいよいよ。むしろさ」

「むしろ？」

「御礼を言うのは俺の方だよ」

まだ俯いて赤い顔の月美だ。微笑んで言うのだった。

「だって。こんなに作ってくれたんだからさ」

「それでなんですか」

「本当に有り難うな」

実際に礼を言う陽太郎だった。

「じゃあ食べさせてもらおうよ」

「はい」

そしてだ。ここで椎名の予想通りの事態が起こった。

狭山がだ。陽太郎の横からスケベそうな顔で言うのだった。

「なあ、いいか？」

「何がだよ」

「俺にも一つくれないか？」

にへらとした笑みで陽太郎が開けた重箱を覗きながら言う。そこにはお握りやトンカツ、それに野菜の酢のものや明太子等があった。

「凄く美味そうだしな」

「駄目」

「駄目に決まってるじゃない」

ここですぐに椎名と津島が言ってきた。

「それはね」

「あなたのお弁当じゃないじゃない」

「げっ、駄目なのか」

言われた狭山はびくりとした態度になって返した。

「そうなのかよ」

「あなたにはあなたのお弁当があるから」

「はい、これ」

津島がここでパンを出してきた。

「これ食べなさい」

「御前の家の店のか」

「そうよ、パンもやってるじゃない」

「そういえばそっか」

「パンとケーキは元は同じものだからね」

だからだというのである。津島は完全にパン屋の娘の顔になっている。

「食べなさいよ。わざわざ持って来たのよ」

「俺の為にか？」

「そう、あんたの為」

まさにその通りだということのである。

「そういうことだからね」

「そうか。じゃあ悪いな」

狭山も彼女の言葉に頷くのだった。それでそのパンを手に取った。

それは一つだけではなかった。まずは食パンが一斤だった。

それから大きなコッペパンが出て来た。それは。

「ロシアパンよ」

「ロシアパンってあのスーパーとかで売ってるか」

「そ、そのパンよ」

まさにそれだということのである。

「これもあるから」

「何か凄い量だよな」

「あんたもう自分のお弁当持ってるし」

見ればだ。彼の膝の上にはちゃんと食べ物があつた。サンドイッチである。

第十七話 姿の見えない嫉妬その十五

「それと合わせたらもうお腹一杯でしょ」

「ああ、確かにな」

「これで満足しときなさい」

津島はほはお袋さんだった。

「返事は？」

「わかったよ」

「はいでしょ、はい」

やはりお袋さんである。

「言葉はちゃんと言ったこと」

「わかったよ、はいだな」

「そう、返事は一言よ」

「何か最近俺ボロクソだな」

「尻に敷かれてる」

椎名がそんな彼をぽつりと一言で評した。

「恐妻家」

「何かそれって凄く嫌だな」

「ところがそうでもない」

椎名は今度はこう話すのだった。

「恐妻家は世の中を平和にする」

「そうなのか？」

陽太郎が今の椎名の言葉に突っ込みを入れた。

「そんなの初耳だけれどな」

「私が今作った言葉」

「そうなのだというのだった。」

「だけれど事実だから」

「何でだよ」

「女は戦争とか血生臭い争いはあまり好きじゃない」

だからだといつのである。実際に女性が君主だつたり国を預かっている場合はだ。無用な戦争は起こらない傾向にある。中国でも呂后や則天武后の時代には無闇な戦争は起こっていない。宮中は血生臭かつたがそれでもだ。

「だから」

「それでなのか」

「そう。別に女が偉いとは思わないけれど」

「それはないというのだ。」

「それでも。男だけが偉いとバランスが悪い」

「むしろ多少尻に敷かれてる方がいい」

「男は何だかんだで好き勝手するし」

椎名の今の言葉にはこう返す陽太郎だった。

「何かそれで田嶋陽子みたいだな」

「私はあそこまで馬鹿じゃないつもり」

「それは違うか」

「違う。あれは完全に女上位主義者」

それに過ぎないというのである。

「男上位主義が入れ替わっただけ」

「だよな。あのおばさんはな」

「斉宮もわかること」

「わかるよ。はっきり言つて俺あの人嫌いだしな」

「ああ、俺も」

「私も」

それは狭山と津島と同じだった。

「何かああした風に言つてな」

「言つてること滅茶苦茶なことばかりだし」

「それは馬鹿だから」

椎名はまたその学者をばっさりと切り捨てた。

「言っていることは全部間違つてる」

「全部かよ」

「そう、全部」

まさに駄目出しであった。

「多少尻に敷かれてもそれはバランスのうち」

「だからいいっていうのか」

「そういうことなんだな」

陽太郎と狭山もそれで納得するのだった。

「成程なあ」

「まあわかったかな」

「多少わかつてくれるだけでいい」

椎名はまた二人に話した。

「だから女の子の尻には敷かれるべき」

「ってことか」

「わかったわね」

狭山に顔を向けて言う津島だった。

「あんたも」

「ああ、わかったよ」

狭山は少し面白くなさそうな顔で応えた。

「まだ釈然としないけれどな」

「尻に敷かれるだけでなく世話も焼いてもらえる」

椎名はここでも言った。

「バランスは本当に取れている」

「じゃあ俺もか」

陽太郎は月美が作ったその弁当を食べながら述べた。

「そうなるのか」

「えっ、それって」

暫く黙っていた月美もここで声をあげた。

「私が陽太郎君を」

「ってなるのか？」

「言い換えると尽くす」

だが椎名は尻に敷くというのをこう変換してみせた。

「そういうこと」

「尽くすのね」

「つきぴーは尽くす娘」

その月美を見ながらの言葉であった。

「それも何処までも」

「よっ、この幸せ者」

「憎いね」

ここで狭山と津島がコンビになって陽太郎を囃す。

「美人で頭がよくてお嬢様でしかも性格もいい」

「凄い娘に会ったじゃない」

「だよな。俺こんな幸せでいいのかな」

陽太郎はかなり本気になってこう言った。

「料理も美味いしさ」

「斉宮はその幸せを守る義務がある」

椎名はその陽太郎にも言うことを忘れなかった。

「そしてつきぴーも」

「だからこそその幸せか」

「斉宮のやるべきことはそのつきぴーを幸せにすること」

「それが」

「そう、それ」

まさしくというのである。

「わかった？」

「ああ、わかった」

陽太郎も確かな顔で頷いた。

「それはな。よくわかったよ」

「わかったらいい。それじゃあ」

「ああ、俺やるぜ」

弁当を食べながら言葉に気合を入れる。

「月美の為にな」

こんな話をしていた秋のはじめだった。陽太郎は自分の為すべき

ことを見つけた。そしてその為に強く決意したのであった。そんな秋だった。

第十七話 完

2010・8・14

第十八話 運動会その一

第十八話 運動会

運動会がはじまった。三組では椎名が教室で皆に話していた。もう全員既に体操服に着替えている。全員それぞれの色のジャージである。

「皆、いい？」

「ああ、いいぜ」

「何時でもね」

全員教壇のところに立っている椎名に対して応えた。その横には赤瀬がいる。ここでも大柄な彼と小柄な彼女が際立っている配置だった。

「優勝だよな」

「それだよな」

「目指すのは」

「そう、それはもう決まっていること」

椎名は普段と変わらないクールな口調であった。

「皆に期待することは」

「ああ、何だ？」

「それで一体」

「何なんだ？」

「スポーツマンシップ」

「それだというのである。」

「それを守って」

「それなのね」

津島がそれを聞いて言った。当然彼女もジャージ姿である。黄色いジャージの上下でありその格好は嫌でも目立つものであった。

「つまり反則もズルもしないで正々堂々ね」

「それを忘れたスポーツはスポーツじゃない」

椎名の今の言葉は厳しいものだった。

「爽やかに汗をかこう」

「それで優勝するのか」

「逆に言えば爽やかでない優勝なんて意味はない」

「こつも言う椎名だった。」

「そういうこと」

「それか」

「そういうことね」

今度は狭山も加わり二人で言う津島だった。

「何か椎名もこれだな」

「スポーツ好きなのね」

「やってるのは武道と格闘技だけれど同じこと」

「そうだといいのであった。」

「だから。爽やかに汗をかこう」

「皆頑張ろう」

赤瀬も皆に対して話す。軍師の次は大将が話すのだった。

「それで爽やかに汗をかこうよ」

「よし、それなら」

「皆で頑張つて」

「それで優勝だよな」

「ハッピーエンドってわけね」

「そう。爽やかでない優勝はハッピーエンドじゃない」

椎名はこの時もスポーツマンシップにこだわる。

「じゃあいざ」

「出陣だな」

「よし、皆行きましよう」

皆で言っただった。三組は一致団結してそのうえで大会に向かうのだった。それに対して四組はというのだ。まさに正反対であった。
「いいわね」

「あんた達も頑張りなさいよ」

「わかってんでしょうね」

橋口達三人がだ。男子に対して言っていた。それぞれの席から立ってそのうえで座っている彼等に対して居丈高に言っていた。

「変に手を抜いたらね」

「その時は許さないからね」

「いいわね、それは」

「ああ、わかってるからよ」

「そこまで言う必要ないだろ」

「何なんだよ」

男は男で嫌そうな顔になって言い返す。

「つたくよお、いちいち五月蠅いんだよ」

「出る競技は絶対に勝つからな」

「それでいいんだろ？」

「違うか？」

「そうよ」

今度は星華が立った。そのうえでの返事だった。

「あんた達、絶対に勝ちなさいよ」

「そう言う御前もな」

「言ってるからには勝てよ」

「そっちこそな」

「勿論よ」

星華は胸を張って言葉を返した。

「こっちは全部一番になつてやるわよ」

「ああ、言つたな」

「じゃあ絶対に勝てよ」

「マラソンまで全部な」

男達はその星華に対してまた言った。

第十八話 運動会その二

「優勝目指すんだよな」

「佐藤、御前言ったよな」

「そうだよな」

「出るからには勝たないと意味がないわよ」

半ば売り言葉に買い言葉だった。星華を中心とした女子と男子がだ。それぞれ大会を前にしてまずはお互いで睨み合っていたのである。

「そういうことよ、優勝よ」

「マラソン、勝つんだよな」

「最後に出るあれも」

「そのつもりだよな」

「勿論よ」

星華は強い顔で言い切った。

「出るからにはって言ったわよね」

「言ったな、じゃあ絶対に優勝しろよ」

「いいな」

男子は口々に星華に対して言葉を返す。

「絶対にだからな」

「いいな、それ」

「優勝してやるわよ。それに」

そして、と。前置きしてさらに言ってみせた。

「四組も優勝するわよ」

「うん、そうよ」

「そうしましょう」

三人が彼女の力瘤を入れた言葉に頷く。だが頷いたのはその三人だけであった。四組はそんな有様だった。そのうえで運動会に赴くのだった。

運動会はだ。まずは三組と四組は競っていた。まさに一進一退だった。

今は百メートル走だが星華は快足で三組の女子を抜かして一等だった。陽太郎はそれを見て椎名に言った。彼は学生服姿だ。白い長ランを借りてそれを着ている。

「なあ」

「大丈夫だから」

椎名は既に陽太郎が何を言うのか察していた。

「全然平気」

「あれでか？」

「二等だったわよね」

「ああ」

「ここは二等でよかったの」

こつ陽太郎に話すのである。

「負けるのはわかってたから」

「それでなのか」

「だから二等になる娘を選んだの」

「あの中でか？」

「そう、あの娘は絶対に二等」

椎名は断言していた。

「二等になる娘だから」

「あの顔触れになるってことはわかってたんだな」

「事前に調べておいた」

「そうだったというのである。」

「それでこつちも組んだから」

「情報収集は細かく、か」

「敵を知り己を知れば百戦危うからず」

椎名の好きな言葉である。

「そういうこと」

「そうか。それで狙い通り二等か」

「二等で御の字」

椎名はこつも言った。

「次は絶対に一等だから」

「次はか」

「次は一等になる娘を選んだから」

「それでか」

「そう。今回は絶対に一等」

そしてだ。椎名はこんなことも言うのだった。

「さっきの走る時は四組は絶対にあの娘が出るってわかってたから」

「佐藤がか」

「だから二等にしたの」

「一番速いのはぶつけないのか？」

「ぶつけない」

断言であつた。

「競つても仕方ない。それなら二等でいい」

「そういうものか」

「二等は一回取つて一等は二回取る」

「この競技三回だけけれど二勝一敗か」

「そう。二勝一敗でいい」

椎名はここでだ。得点板を見た。見れば三組と四組は今競つてい
る。だがそれを見ながらだ。陽太郎に対してまた言つてみせたので
ある。

第十八話 運動会その三

「向こうは常に全力で一番手強い相手にぶつかってるけれど」

「こっちは違うよな」

「勝てる勝負で勝って負ける勝負は次点」

「そうしていくんだな」

「そう、それで斉宮は」

あらためてだ。陽太郎をちらりと見た。

「それ」

「応援か」

「斉宮は声大きいし体力もあるから応援に向いてる」

「剣道って声出すしな」

陽太郎はまずは声のことを話した。剣道はとかく声を出す武道である。

「それでか」

「そう。それで暑いのは慣れてる」

「ああ、この長ランな」

「防具と比べてどう？」

「そりゃ防具の方がずっと辛さ」

陽太郎はこう答えた。

「あの暑さなんてな。それこそな」

「そういうこと考えて応援に回ってもらった」

「それでか」

「適材適所」

これもまた椎名の好きな言葉だ。

「だから」

「それで俺は殆どこっちに専念してか」

「斉宮も運動は苦手じゃないけれど」

伊達に剣道部ではない。陽太郎もそれなりに運動神経はある。む

しろそれなり以上だ。しかし椎名はあえて彼を余りださなかったのである。

「向いている競技が少なかったから」

「少ないか？」

「剣道と陸上の筋肉は全然違う」

「このことも指摘してみせたのだった。」

「だから」

「筋肉か」

「赤瀬だったら力系がいけるけれど」

「柔道だからだよな」

「そう」

まさにその通りであった。

「赤瀬の柔道は身体を活したものだから」

「力凄いな。体格がああだしな」

「だから赤瀬には結構出てもらってる」

「それで俺は応援だな」

「応援は斉宮」

「ここでも陽太郎を見ている。」

「そういうこと」

「わかったぜ。それじゃあやらせてもらうからな」

「点差は縮まらないけれど最後に勝つのはうち」

「最後はか」

「そう、勝つ」

勝てる、ではなかった。ここでもだ。

「勝つから」

「そうだな。じゃあ俺もな」

「どうしたの？」

「その言葉通りやらせてもらうぜ」

爽やかに笑っての言葉だった。

「応援な」

「そうして。それじゃあ頑張ること」

「ああ。ところでな」

「ところで？」

「ジュース飲まないか？」

「こっちは椎名に言ってきたのである。」

「これから買いに行くけれどな」

「そうなの」

「お金出したらついでに買ってくるよ。何がいいんだ？」

「豆乳」

「それだというのがあった。」

「豆乳を御願い」

「豆乳かよ」

「それか野菜ジュース」

「若しくはこれだというのである。」

「豆乳がなければだけれど」

「野菜ジュースな」

「身体にいいから」

「椎名はそれを考慮して話すのだった。」

「だからそれがいい」

「そうか。椎名ってヘルシー志向だったよな」

「医食同源」

「またしても言うのだった。」

第十八話 運動会その四

「美味しくて栄養のあるものを食べること」

「それか」

「そうしないと駄目だから」

「何かそういう考えって真面目だよな」

「真面目に生きてそれでこそ」

椎名の話は続く。陽太郎にその話をしていた。

「だから」

「そうか。それじゃあ俺もな」

「うん」

「コーラ飲もうと思ってたけれど豆乳にしようか」
考える顔で述べたのだった。

「それにするか」

「そうすればいい。それじゃあ」

「ああ、お金は？」

「はい」

小銭を出す。陽太郎はその小さな手から受け取った。

「豆乳ね」

「豆乳だったら何でもいいよな」

「麦芽入りがいい」

「こっつ注文はした。」

「あれが美味しいから」

「普通の豆乳も捨て難いよな」

「豆乳はあっさりしていていい」

豆腐だからこれは当然のことである。そうした飲みやすさも魅力なのである。

「何気に抹茶も好き」

「抹茶な。俺はそれにするか」

「それにするの」

「あつたらな。じゃあ買って来るな」

「うん、じゃあ」

こんな話をしてであった。陽太郎は椎名の分の豆乳も買ってきてそれで二人で飲むのだった。三組は全体としてこうした雰囲気でありリラックスしていた。

だが四組はだ。運動会が進めば進む程だ。ギスギスとしていた。何で負けるのよ」

星華が帰ってきた男子の一人の前に立って睨みながら問うた。

「あそこで負けたら意味ないじゃない」

「いや、けれどあの三組のよ」

「けれども何も無いわよ」

相手の言い訳はさせなかった。

「あんたそれでサッカー部なの!？」

「ああ、サッカー部だよ」

「走るの得意じゃない。じゃあ何で二百メートル負けるのよ」

「相手が強いんだから仕方ないだろ」

相手の男子の方もムキになって星華に返す。

「佐藤だつて見ただろ。あの速さよ」

「ええ、見たわよ」

「じゃあわかるだろ。ありや抜けるものじゃねえよ」

「それでも何とかしなさいよ」

佐藤は自分より十センチは高い相手に対しても臆してはいなかった。

「あそこであんたが一等だったたら三組に逆転していたのよ」

「そうよ、あんたが二等だったからね」

「四組も二等じゃない」

「どうしてくれるのよ」

橋口や州脇達も来てだ。その男子に言う。

「責任取れるの?」

「どうなのよ」

「あのな、責任って何だよ」

男子も言われっぱなしでは気が収まらない。こつ星華達に返す。

「二等じゃ駄目だっていうのかよ」

「ええ、駄目よ」

「決まってるじゃない」

「何言ってるのよ」

三人はその彼にさらに攻撃を浴びせる。

「わかったわね。次に出る時はよ」

「絶対に一等取りなさい」

「いいわね」

「そっちこそな」

男子はそのまま三人にその攻撃を返した。

「絶対に取れよ。一等な」

「勿論よ。見てなさいよ」

「私達も一等取るからね」

「絶対にね」

「全部一等取ってやるわよ」

星華も言うのだった。

第十八話 運動会その五

「もうね。全部ね」

「おい、言ったな」

「今の言葉聞いたぞ」

「忘れないからな」

男子達が今の言葉に一齐に突っ込む。四組は男子と星華達を中心にした女子の主力とでだ。完全に分裂してしまっていた。

そしてだ。星華はそのギスギスした雰囲気の中で競技に出るのだった。彼女の次の競技は。

「ハードルね」

「四百メートルよ」

「いけるわよね」

「楽勝よ」

毅然として三人に述べた。

「ハードルは向かいから得意だったしね」

「じゃあ今度も一等ね」

「そうよね」

「ええ、そうよ」

その通りだというのであった。

「全部の競技で一等になってやるわよ」

「じゃあね。今度も頑張つて」

「御願いな」

「さて、じゃあ」

その場で足を伸ばしはじめる。準備体操である。

「また言ってくるわ」

「女子は星華ちゃんが主力だしね」

「そうよね」

「だからね」

「健闘を祈るわね」

「任せてよね」

星華はあくまで強気だ。言葉にそれが何よりも出ていた。

「それじゃあ。やってやるから」

「まあ精々頑張れよ」

「そこまで優勝言っんならな」

男子の声は冷ややかなものになっていた。そうした不協和音は四組の中に満ちていた。月美もこのことは気になっていて昼食の時に言うのだった。

「ちよつと。今は」

「そうなのね」

「うん……」

こう椎名に言う。いつもの顔触れと食べていた。場所はやはり校庭の芝生のところだ。木陰に入ってそこで六人で食べているのである。

「どうしようかしら」

「どうしようもない」

椎名が言った。

「とりあえずつきぴーは」

「私は？」

「今は難を逃れるべき」

「こっつ月美に言うのである。」

「そうするべき」

「難って？」

「その流れじゃつきぴーにもとばっちりが来てもおかしくないから」

「来るのかしら」

「八つ当たりがある」

椎名が今考慮に入れているのは人間の負の行動であった。

「そんなの受けることないから」

「だからなの」

「お昼はここにいて」

また月美に対して述べたのだった。

「それで」

「それで？」

「競技の間はクラスの端にいて」

「端になの」

「出来るだけ目立たないようにする。競技はもう出たの？」

「ええ」

椎名の問いにこくりと頷いて答えた。

「一応は。借り物競争に」

「ならいい。もう大人しくしていること」

「大人しくね」

「具体的に言えばいつも通りしていればいい」

しかしであった。今椎名が言うのはその場所であった。同じことをしているも場所が違えばそれで何もかもが全く違うからである。

「端っこで」

「それは絶対なのね」

「とにかく目立たないようにすること」

これが第一だということである。

「そして何も言わないこと」

「静かにもして」

「男子と女子が争っていても関わらない」

「クラス委員なの？」

「どつやらつきぴーのことは今はどうでもいいから」

月美の話の聞いてである。そこまで見抜いたのである。

第十八話 運動会その六

「だからいい。それで」

「そう。それじゃあ」

「何かあつたら私が行くから」

「ここでも言う椎名だった。」

「任せて」

「愛ちゃんが。けれど」

「四組は隣だから見られるから」

いいというのである。今はクラスそれぞれに別れて応援をしているのである。それで三組の隣は四組となっているというわけなのだ。

「だから安心して」

「有り難う」

「御礼はいいから。とにかくそうして」

「大人しく、目立たずに」

「時として隠れるのも大事」

椎名はこんなことも言った。

「変な難は避けること」

「避けるの」

「そう。特に今の四組はどうしようもないし」

「先生も忙しくて」

月美は今度は担任の話もした。

「運動会の係やっててそれで」

「副担任の先生も」

「そうなの。それで今クラスに先生誰もいないから」

それが状況をさらに悪化させていたのである。監督する者がいないと人はどうしても勝手になってしまう。だからそうもなっているのだ。

「どうしようかしら」

「学年主任の先生は？」

今言ったのは津島である。

「どうかしら、主任先生呼んだら」

「ああ、それいいよな」

狭山も津島のその言葉に頷く。今二人はそれぞれ同じ弁当を食べ
ている。ハンバーグと野菜の味噌煮が入った御飯の弁当である。

「先生が一人いたら違うしな」

「そうよね。いいんじゃない？」

「けれどどうやって呼ぶんだ？」

ここで陽太郎が言う。今日も月美の作った弁当を食べている。

「それが問題だろ」

「そうだよな。どうやって来てもらうかだね」

赤瀬も言う。

「それはどうしようかな」

「直接言っ
て来てもらったってやったらな。ちくつたように思われ
るよな」

陽太郎はこのことを気にかけていたのだ。

「月美への風当たりが強くなるしな」

「それは避けないとね」

「だろ？じゃあどうするんだ？」

「それはどうしたら」

「考えがある」

「ここでも策を出す椎名だった。

「それだったら」

「ああ、どうするんだよ」

「それで」

その椎名に陽太郎と赤瀬が問うた。

「今度の策はよ」

「どういったものなのかな」

「私が行くから」

椎名がだというのだ。

「だから任せて」

「椎名が？」

「行くんだ」

「そう、行く」

また陽太郎と赤瀬に述べた。

「私が行く。さりげなく」

「さりげなくっていつてもよ」

「どうするのかな」

「それも任せて」

「任せていいんだな」

「ええ」

また陽太郎に答えるのだった。

「そういうことで」

「何か椎名ってな」

狭山が首を傾げさせながら述べた。

「本当に天才軍師だな」

「天才美少女軍師」

またこう言う椎名であった。

「それは譲れない」

「美少女は、なんだな」

「天才と軍師がなくてもそれは」

「だというのである。」

「そういうことだから」

「わかったよ。じゃあ天才美少女軍師な」

「うん」

「それだよな。もう張良とかそういう感じだよな」

「孔明じゃないの」

「孔明は実際はどっちかかっていうと政治家だったんだろ？」

彼は蜀の宰相であった。これはそのまま政治家である。彼は現実

的かつ細かい政治家であり蜀を治めていた。軍師であつたのは事実だがそれ以上に政治家だったのである。

第十八話 運動会その七

「だからな。どっちかかっていうとな」

「あれっ、政治家もできそうよ」

今言つたのは津島である。

「そっちもね」

「じゃあ何ていうんだ？」

「ビスマルクかな」

今言つたのは赤瀬である。

「それかな」

「ビスマルクじゃねえだろ」

狭山はそれはないとした。

「ちよつとな」

「違うかな」

「ビスマルクつて身長二メートル近い大男だつたんだぜ」

狭山はここから話すのだった。

「それに凄い大食らいでな」

「どんなのだつたの？」

「生牡蠣百個以上とかゆで卵を十何個とかな」

こつ津島に述べる。

「とにかく滅茶苦茶食つてたんだよ」

「僕どつちも食べたことあるよ」

その大男の赤瀬の言葉だ。

「大体背もそれ位だし」

「つていうか御前は化け物かよ」

「僕が化け物ならビスマルクも化け物だけれど」

「だから凄い大食漢だつたんだよ」

あらためてこのことを話す狭山だった。

「それにな」

「それに？」

「二十数回の決闘に勝って顔に向こう傷まであってな」

「向こう傷ね」

「乱暴者ビスマルクって呼ばれてたんだよ」

「このことも話すのだった。これは実際のことでありビスマルクはかなり過激な男でもあったのだ。少なくとも畏まった人物ではなかったようである。」

「そういう奴だったんだけれどな」

「っていつかそれって外見と食べる量以外椎名じゃない」

「ところが津島はまた狭山に言うのであった。」

「そのまま」

「喧嘩が強いところもか」

「そうよ。椎名ってビスマルクよ」

「椎名をこう評するのだった。」

「うちのクラスだね」

「そうか、軍師じゃなくて宰相だったんだな」

「実際に将来選挙に出るから」

「椎名はポーカークフェイスで語った。」

「宜しく」

「何か怖いな。鉄血宰相の再来か」

「日本を最強の国にする」

「椎名の口元はここでは微かに緩んだ。」

「そう、アメリカや中国よりも強い国にする」

「まあその時は応援するさ」

「陽太郎は相変わらず月美が作ったその重箱の弁当を食べていた。食べながら述べたのであった。」

「選挙に出たその時はな」

「宜しく」

「それじゃあ四組のことは頼めるか？」

「うん」

このことはくりと頷いて答えた椎名だった。
「任せて」

「じゃあそういうことだな。あらためて食つか」

「よし、そうだな」70

「午後もあるしね」

狭山と津島も応えた。そのうえで楽しい昼食の一時を過ごしたのだった。

そしてだ。椎名はふと学年主任の前を通り過ぎた。その時だった。

「おい、椎名」

「はい」

呼び止められてだ。すぐに言葉を返した。

「何か」

「落としものだぞ。ハンカチだぞ」

そう言っただ。主任先生は自分からそのハンカチを拾った。純白の綺麗なハンカチだった。

それを拾ってからだ。椎名に対して言うのだった。

「ほら」

「有り難うございます」

「落としものには気をつけるよ……んっ？」

差し出そうとしたそこでだ。ハンカチに名前が書いてあるのを見つけたのだった。その名前は。

第十八話 運動会その八

「何だ、このハンカチ西堀のだな」

「西堀さんから借りてました」

「そうか、借りたものはちゃんと返さないとな」

「はい」

実は月美からわざわざ借りたのである。これが今回の椎名の策略であるのだ。

「それじゃあ今から」

「ああ、いい」

だがここで主任先生が自分から言ってきたのだった。

「椎名はもう自分のクラスに帰りなさい」

「自分のですか」

「これは先生が西堀に返しておく」

主任先生はマメで親切な性格である。細長いモアイかバナナを思わせるその顔にある目は実に優しい。教師達からも生徒達からも人望のあるいい先生なのだ。

「だから椎名は帰りなさい」

「いいんですか、それで」

「いいとも。西堀は四組だったな」

「そうです」

「じゃあ先生が四組に行って西堀に返しておく。それじゃあな」

「すみません」

「御礼はいい」

こう返す先生だった。

「それよりもだ。今は帰りなさい、いいね」

「わかりました」

こうしてだった。主任先生は四組に行きそのまま四組の監督になった。椎名は一人になったところでこっそりと勝利のブイサインを

するのであった。

その四組は主任先生が来てとりあえず喧嘩はしなくなった。しかしであった。

四組は次第に点数が伸びなくなってきた。三組に常に遅れを取るよううづになってきていた。

「おい、まずいだろ」

「このままだと」

「負けるんじゃないのか？」

まずは男子達が不安を感じだした。

「優勝するんじゃないのか？」

「そこんところ大丈夫なのかね」

「そうだよ」

「まずいんじゃないのか？」

「大丈夫よ」

しかしここでまた星華が言うのだった。

「最後の最後で大逆転よ」

「マラソンよね」

「やっぱりそれよね」

「ええ、そうよ」

また州脇達に伝えて言う星華だった。

「そこで決めるから安心して」

「うん、じゃあ星華ちゃん御願いな」

「最後の最後で決めて」

「それで優勝よ」

「そのつもりよ。見てなさい」

星華は三組の応援席を見据えて言い切る。

「勝つのは私達なんだからね」

「あのゴミチビがいるね」

「何よ、あのチビ」

「いつも鬱陶しい」

三人は椎名を見ていた。彼女は今赤と白のチアガール姿で三組の応援に回っている。その横には白ラン姿の陽太郎もいる。

「澄ました顔でチアガールなんかしてね」

「胸小さいから全然似合っていないっての」

「そうそう」

「こつ忌まわしげに口々に言うのだった。」

「見てなさい、その澄まし顔もね」

「星華ちゃんが打ち砕くから」

「精々今のうちに楽しんでおきなさいよ」

「そのつもりよ。それに」

星華はここで椎名の横を見た。その彼をだ。

「いいところ見せないかね」

「いいところろって?」

「何かあったの?」

「誰に見せるの?」

「あつ、何でもないわ」

三人にすぐに突っ込まれたが慌てて取り繕った。

第十八話 運動会その九

「だから気にしないで」

「そうなの。だったらいいけれど」

「まあとにかく頑張ってるね」

「優勝よ、優勝」

「ええ、それじゃあ」

星華はここでトマトジュースを出してきた。パック入りでストロ―で飲むものだ。二〇〇ミリリットルのそれをストロ―で一気に飲んだ。

そして飲み終えてからだ。気合を入れた顔で言った。

「じゃあ行つて来るわね」

「本当に大丈夫なんだろうな」

「これまで四つも出てるのに」

「最後の最後でマラソンかよ」

「考えてみれば無謀だよな」

男子連中がここで話した。

「出るって言つて聞かないしな」

「どうしようもないからな」

「全くな」

「だから。優勝するって言ってるのよ」

星華はその彼等に堂々と言い切ってみせた。

「わかる？私が優勝してね」

「そこまで言うんなら頑張れよ」

「ああ、一等以外じゃないと承知しないからな」

「いいな」

「だからわかつてるって言ってるのよ」

いい加減切れたところを見せる星華だった。

「大体ね、それって杞憂だし」

「優勝しないことか」

「それか」

「そうよ。伊達に毎日走ってるわけじゃないわよ」
部活でだ。このことを話したのである。

「そういうことよ」

「それはわかってるけれどな」

「僕も、一応は」

「俺も」

「じゃあ黙ってなさい」

星華は今度はむっとした顔で返した。

「いいわね」

「まあそこまで言うんならいいけれどな」

「本当に頑張れよ」

こつした声を受けてマラソンの場に向かう星華だった。そしてだ。陽太郎と椎名もここで話をしていた。応援の合間で立ちながらである。

「なあ」

「何？」

「マラソンの選手が集まってるけれどな」

「最後の競技ね」

「これで向こうが一等になったら負けるぜ」

陽太郎は不安になっている声だった。

「点差を見たらな」

「そうね」

「そうねって今回も冷静だな」

「冷静なのは当然」

椎名はここでも相変わらずである。

「それは」

「当然か」

「だって。勝てるから」

だからだというのが。]

「三組は二人出してるけれど」

「ああ、二人な」

「その二人で一等と二等」

「独占かよ」

「だからいける。何の問題もない」

こう陽太郎に話すのだった。

「うちが優勝する」

「確実か」

「若しどっちかが怪我したりアクシデントに遭ってももう一人いる」

その場合も考えているというのが。]

「だから安心」

「最後の最後に優勝を確かなものにするっていうのか」

「そういうこと。最後に勝っていることが大事」

「最後にか」

「そう、劉邦と同じ」

漢の高祖である。]

第十八話 運動会その十

「そういうことだから」

「最後の最後にか」

「その手はもう打っておいた」

「ここでも椎名は冷静に述べた」

「後は見ているだけ」

「俺達はか」

「選手達は必死だけれど」

二人はこんな話をしていった。そうしてであった。

最後の競技がスタートした。時間がかかるうえに校外で行われるので他の競技の前にはじまった。そのうえで全員走るのだった。

当然そこには星華もいる。彼女は最初から飛ばしていた。

「負けないからね」

先頭を走っていく。序盤から中盤はそれでいけた。しかしであった。

「えっ……」

次第にペースが落ちてきたのだ。星華もそれを感じ何とか頑張ろうとする。

だが体力が追いつかずだ。次第に足が遅くなってきた。そして後ろから他のクラスの選手達がどんどんと迫ってきたのであった。

「まずい……」

後ろをちらりと見て眩く。四組の選手達の姿は見えない。

「このままじゃ……」

危惧を覚えた。そうしてであった。

その危惧は的中した。星華は遂に抜かされた。終盤に入ったところでだ。しかも抜いたその相手がだ。彼女にとっては問題だった。

「そんな、三組の」

見間違えようがなかった。三組の生徒の一人だった。そしてまた。

もう一人来た。それも三組の生徒だった。二人の三組の生徒に抜かされたのだ。

今彼女は三番目だ。何とかペースを元に戻そうとするが適わない。足が思った以上に動いてくれない。それで次第に焦りを覚えてきた。「負けたら……」

駄目なのはわかっていた。それでもだった。

ペースは元に戻らないまま距離だけを浪費していく。そして遂に学校に戻った。歓声が聞こえる。しかしだった。

「えっ、三位？」

「星華ちゃんトップじゃないの？」

「それに」

州脇達三人は帰って来た選手達を見て驚いていた。

「一位と二位って三組の」

「そうよね、ここで一番と二番取られたら終わりよ」

「優勝できないじゃない」

三人はこのことも危惧した。そうしてであった。

「星華ちゃんしっかり！」

「頑張つてよ！」

「あと少しだから！」

「わ、わかつてるわよ」

星華は三人の言葉に心で頷いた。しかしであった。

「けれど……」

足がもう思うように動いてはくれないのだ。自分がどう思ってもだ。

それで先に走る二人との距離を縮められないままだ。遂にゴールに着いた。

三番だった。結局それで終わった。倒れ込む彼女のところに三人が来た。

「大丈夫!？」

「動ける!？」

「飲みものいる!？」

「だ、大丈夫よ」

倒れ込み肩で息をしながら言った。

「けれどね」

「いいわよ、頑張ったんだし」

「そうそう」

「それはね」

「悔しい……」

顔を俯けさせての言葉だった。その顔から銀色の汗が滴り落ちる。

「一番だったら優勝できたのに」

「それはそうだけれど」

「それでも仕方ないじゃない」

「そうよ」

「あいつに……」

同時に二人脳裏に浮かんでいた。

「負けたし。いいところを見せられなかったし」

「負けた？」

「いいところって？」

「誰に？」

三人はその対象は一人だと思った。しかしそれは違っていった。そしてそれがわかるのはだ。他ならぬ星華本人だけであった。

第十八話 運動会その十一

「とにかく今は汗拭いて」

「それでクラスに帰ろう」

「いいよね、それで」

「え、ええ」

肩で息をしたまま頷く。ジャージにも汗が滲んできている。

「それじゃあ」

「立てる？」

「いける？」

「いけるわ」

何とか立ち上がりながら三人に答えた。そうしてであった。

クラスの応援席に戻る。皆静まり返りそのうえで星華を見ている。彼女の周りを守るようにして囲んでいる三人が彼等に言うのであった。

「星華ちゃん頑張ったんだからね」

「わかってるでしょうね、それ」

「見てたわよね」

「あ、ああ」

「見てたよ」

「それはな」

男連中も応えはした。

「わかってるからな」

「何も言わないからね」

「それでいいんだろ」

「そうよ、言ったら許さないからね」

「星華ちゃん、座ろう」

「はい、席持って来たから」

「有り難う」

三人に守られるようにしてだ。星華は席に着いた。そのうえで自分のクラスの点数と三組の点数を見る。どちらも彼女の思った通りの点数だった。

「くっ……」

それを見て歯噛みするしかなかった。だがもうどうしようもなかった。

優勝は三組だった。そしてである。椎名はそのトロフィーを両手に持ちながら陽太郎達に対して言うのであった。

「皆お疲れ様」

「ああ」

「椎名もな」

「私は考えただけ」

だが椎名は今はいこう言うだけだった。

「それだけだから」

「その考えで優勝できたんじゃないか」

その椎名に狭山が言ってきた。

「そうだろ？椎名が誰が何に出るか決めたからな」

「そうよね、それはね」

「椎名がいなかったら優勝できたかどうか」

「多分無理だったんじゃない」

「四組強かったし」

「総合力だったら四組だった」

実際にこんなことを言う椎名だった。

「特に女子は」

「佐藤がいるからな」

陽太郎はここで彼女の名前を出した。

「あいつ運動神経いいからな」

「ああ、あの女子バスケ部の」

津島はその名前を聞いてすぐに述べた。

「あの娘よね」

「あいつ昔から運動神経抜群なんだよ」

陽太郎は津島だけでなくクラスの一同に彼女のことを話した。

「それでも。最後のマラソンはペース落ちてなかったか？」

「体力の限界」

椎名はそこを指摘したのだった。

「だから」

「それでペース落ちたのか」

「そういうこと」

「こつ言つのであった。」

「けれどもうちのクラスは満を持しての投入だったから」

「あいつマラソンの前にも色々と出てたしな」

「あいつ、そうね」

「佐藤な」

彼女のことだった。

「あいつ出過ぎだったんだな」

「そう、それに」

「それに？」

「短距離に出てた」

椎名が次に指摘するのはこのことだった。

「それで筋肉が短距離に慣れていた」

「筋肉がか」

「それで同じ日にマラソンには出られない」

「それでも出たのがか」

「失敗だった」

そうだったというのである。

第十八話 運動会その十二

「それが失敗だった」

「そうか。それで最後にあんなったんだな」

「わかっていた。同じクラスだったら何があっても出さなかった」
「そうしたというのである。椎名は冷静に話す。」

「けれど違うクラスだったから」

「言わなかったのか」

「そうなの」

こう陽太郎に話す。

「けれど」

「けれど？」

「頑張ったことは確か」

それはだというのである。

「だからそれは認められるから」

「ああ、そういえばな」

陽太郎は今の椎名の言葉にまた気付いた。

「あれだよな、優秀選手ってあったよな」

「それと最優秀選手」

それもあるのだというのだ。

「最優秀選手は」

「誰かなるんだろうな」

「佐藤さんは有力候補」

「一等四つも取ったからその資格はあるよな」

「そう、だからいける」

「それって得点高いよな」

陽太郎は腕を組み考える顔になって述べた。

「特に最優秀選手は」

「若しかしたらそれでまた得点入る」

「じゃああれか？」
「うん、その分四組にプラスされたら」
「わからないか」
「そう、わからない」
また話す椎名だった。
「その辺りは」
「うちのクラス優勝難しいか？」
「大丈夫」
「まさかその点数も考えてたのか」
「そう。だから安心していい」
椎名の計算は用意周到であった。そこまでであったのだ。
「だから」
「そうか。だからか」
「それじゃあ後は閉会式に出るだけ」
やはり至って冷静である。
「それだけ」
「そうだよな。閉会式が終わるまでが運動会だよな」
「そういうこと。全部終わってやっと落ち着くこと」
そしてだ。こつも言つのであった。
「勝つて兜の緒を締めよ」
「だよな。油断するなつてことか」
「それだけじゃない。それからもある」
「それからも？」
「ある」
「つていうとあれか」
話を聞いてだった。陽太郎はすぐに述べたのであった。
「文化祭もか」
「余勢をかるのはいいけれど油断は駄目」
この辺りも実によくわかっているのであった。
「文化祭のことはもう考えてあるし」

「それで何するんだ？文化祭は」

「運動会が終わってから考える」

その時にだというのである。

「そういうことだから」

「そうか。それじゃあ待っておくからな」

「うん、期待していて」

こうした話の後であった。彼等は閉会式に出た。そこで優勝チームも発表された。それは。

「同点か」

「そうね。まさか最優秀選手の得点が入るなんてね」

津島が狭山に応えていた。

第十八話 運動会その十三

「意外だったわね」

「まあそれでもうちのクラス優勝したよな」

「同点だけれどね」

それでもまだという津島だった。

「優勝は事実ね」

「ああ。しかし最優秀選手は四組のあいつか？」

「そう、佐藤さんよね」

「確か陽太郎と同じ中学校だったんだろ？」

「そうよ。私とあんたの関係と同じよ」

今度はこう狭山に言う津島だった。

「ただし。私達はね」

「俺達は何だつてんだ？」

「恋人同士だけれどね」

くすりと笑つての言葉だった。

「そこは違うけれどね」

「おい、こんなところで言うなよ」

「何だよ」

「閉会式だぞ。皆いるんだぞ」

皆が集まっているその中での言葉だった。

「それでそんなこと言うなよ」

「いいじゃない。皆知ってるんだし」

「何で知ってるんだよ、おい」

「だから見ればわかるから」

笑いはくすくすとしたものになっていた。

「だからなのよ」

「ちっ、何でなんだよ」

「嫌とか？」

「それはな」

そう言われるとだった。言葉を濁す狭山だった。

「別に何もないけれどな」

「ほら、言ったわね」

「くそつ、何でこうなるんだよ」

「気にしない気にしない」

また話す津島だった。

「それでだけれど」

「ああ。何だよ」

「この後どうする？ ケーキでも食べに行く？」

こう狭山に提案する。

「これからだけれど」

「ああ、いいな」

狭山もその提案にすぐに頷いた。

「肩の荷が下りたしな」

「次への息抜きの意味でもね」

「次って文化祭か」

「そう、それ」

まさにその通りであった。

「だからね。それも兼ねてね」

「祝勝と息抜きか」

「両方しても別に構わないでしょ」

津島はいささか以上にあっさりと言った。

「それでも」

「まあ俺は美味しいもの食べられればそれでいいしな」

狭山はここでは顔を崩して笑った。

「それじゃあそれでな」

「あんたそういうところ風情ないわね」

津島は今の彼の言葉には少し目をクールなものにさせた。

「もうちよつとね。美味しいぞー、とか最高だー、と」

かないの？」

「それで巨大化したり口から謎の光放ったり異次元空間を乱舞する
のか？」

「そう、そういうのはないの？」

「あるわけないだろ」

狭山はそうしたことは即座に否定した。

「そんなの人間ができるかよ」

「まあできたらDNA鑑定必要だけれどね、人間かどうか」

「そうだよ、そんなの人間じゃねえだろ」

狭山は少し呆れた感じで述べた。

「それに随分昔のアニメだったよな」

「ミスターとか味とかね」

「そうそう、そういうタイトルだったな」

「うちの親がDVD持ってるのよ」

津島の話である。

「もう滅茶苦茶な演出だね。ガンダムとかより凄いつていうか」

「あれは確かに凄いよな」

「あんたも知ってるのね」

「姉ちゃんが好きなんだよ」

それで知っているという狭山だった。

第十八話 運動会その十四

「それでなんだよ」

「そうなの、それでなの」

「姉ちゃんそれで旦那さんにも子供にも見せるしな」

「子供つてあんたにとつたら」

「ああ、甥な」

それに当たるのだった。狭山はここで性別も話していた。

「甥っ子にな。いつも見せてるんだよ」

「随分凄いの見えるお母さんね」

「それと仮面ライダーな。平成ものばかりな」

何となくその趣味がわかる狭山の姉であった。

「特に好きなのがファイズとキバでな」

「ハードね、特にファイズは」

「あれ子供に見せていいのか？」

「一応子供番組だったけど」

「あれの小説も持つてるんだよ」

しかもそれもものだというのだ。

「凄いだろ、かなり」

「ファイズの小説ってどんなの？」

津島が狭山に問おうとしたところだ。椎名がにっこりと出て来た。閉会式だというのに随分と砕けたものになってしまっている。

「一応てれびマガジンの関係」

「じゃあ子供向け？」

「と思つたら大間違い」

椎名はこう津島に告げた。

「かなりハード。テレビではお見せできません」

「そこまで凄い内容なの」

「読めばわかる」

津島にまた告げた。

「そう、読めば」

「何か読むの怖いけれど」

「ああ、一応言っておくぜ」

また狭山が津島に言う。

「読んでも落ち込むなよ。沈むなよ」

「そういう話なのね」

「すっげえからな。本当にテレビじゃ放送できないからな」

「うっん、何か読むのが怖いけれど」

「後悔するのなら読まないことだな」

狭山はこつも言った。

「そういうことだ」

「そうなの」

「ああ。まあとにかく今日はあれだよな」

「そう、ケーキね」

何はともあれそれは決まっていた。

「いいわね、それで」

「ああ、それじゃあな」

「じゃあ私も」

ここで椎名がまた言ってきた。

「津島の家ケーキ食べたい」

「あれっ、椎名もなの」

「うん」

椎名は津島に対してこくりと頷いてみせた。

「駄目かな」

「いいけれど」

津島は特に反対はしなかった。まさに来る者は拒まずであった。

「それはね」

「そう。いいのね」

「ええ、いいわよ」

津島は最後彼女に話した。

「それじゃあ。三人ね」

「うん、じゃあ」

こう話して運動会を終わる三人だった。陽太郎は月美と共に帰り赤瀬は片付けの後椎名に携帯で呼び出され津島の家でケーキ屋で彼女と合流した。そうして星華はというと。

「まあよかったじゃない」

「そうそう」

「最優秀選手だったし」

ファミレスでだった。三人の慰めの言葉を受けていた。四人用の座席なので他の三つから集中的にそうされる形となっていた。

「優勝したし」

「その最優秀選手の得点でね」

「だから星華ちゃんのお陰よ」

三人は難しい顔になっている星華に対して言うのだった。

第十八話 運動会その十五

「四組の優勝は星華ちゃんのおかげだから」

「だからいいじゃない」

「そうじゃないの？」

「けれど」

だが、だ星華は言うのだった。声は苦いものであった。

「マラソン。負けたから」

「けれど三位じゃない」

「三位よ、銅メダルよ」

「上出来よ」

三人はこのことも慰めるのだった。

「一位は四回だし」

「三位は一回」

「だから最優秀選手にも選ばれたし」

「満足できるんじゃない？」

「そうね」

こう話されてだ。星華もようやく頷きはした。

しかしである。彼女はここでこうも言ったのであった。

「ただね」

「ただ？」

「何かあるの？」

「あいつ、いるじゃない」

まずはこう言うのであった。顔は無然としたままだ。

「あのチビ」

「ああ、いつも来てる三組の」

「向こうのクラス委員のね」

「西堀と一緒にいる」

「そうよ、あいつよ」

まさにその彼女のことだというのだ。

「あいつが言ってたじゃない。五つも競技に出るとかマラソンのことか」

「そんなの気にしない気にしない」

「そうよ、でまかせじゃない」

「適当なこと言ってるだけよ」

「けれど私実際にマラソンは失敗したわ」

星華が言うのはこの現実だった。

「三位だったから。一位じゃなかった」

「うっん、だからたまたま当たったのよ」

「あいつの言ったことがね」

「偶然よ、偶然」

「そう思いたいけれど」

その顔は晴れないままだった。

「実際にそうだったから」

「けれど最優秀選手じゃない」

「学年でたった一人のね」

「それ喜ぼう」

「そうね。そうするべきよね」

何とか心を落ち着けながらの返事だった。

「そうしないかね」

「だって優勝したんだよ」

「それで喜ばないでどうするのよ」

「じゃあ今は」

そしてだった。星華はここでまた言った。

「この店ってフリードリンクの中にお酒あったわよね」

「ええ、そうよ」

「それで八条町だし、ここ」

「それだったらわかるわよね」

彼女達がいるのはその八条町である。この町には一つこの町だけ

で通用するルールがあった。四人もそのルールについて話すのだ
た。

「お酒飲むわよ」

「高校生でも気にしない気にしない」

「その前にね」

「そうよね。着替えないとね」

星華の言葉だ。流石に制服で飲むのははばかれたのである。

それでだ。今こう言ったのである。

「ちゃんとね」

「よし、それじゃあトイレ行こう」

「そこで着替えよう」

「そうしよう」

三人も星華の言葉に頷いてだ。あらかじめ持って来ていたラフな
私服に着替えてそのうえで飲みはじめた。鞆は見えない場所に隠し
ている。

そうしてしこたま飲んでそのうえで鞆を持ってまたトイレに入っ
て制服に着替えなおしてだ。それで店を後にしてその日は終わった
のだった。

だが、だ。家に帰ってだ。星華は風呂で酒を幾分か抜いてだ。そ
のうえで居間でテレビを観ているとそこでまた思い出したのだった。

「癢ね、本当に」

「あっ、お姉飲んでる？」

ここで星子が居間に来て姉に問うた。

「ビールの匂いするけれど」

「ビールはあまり飲んでないわよ」

懽然とした顔でテレビを観ながらの言葉であった。

第十八話 運動会その十六

「そっちはね」

「何だ、飲んでるの」

「だからビールはあまり飲んでないわよ」

「じゃあ何飲んだのよ」

「チューハイ」

それをだというのである。

「カルピスとレモンね」

「結構飲んだの？」

「いつも通りよ、そっちは」

「何だ、じゃあかなり飲んだのね」

「飲んでるもね。それでもね」

ここでまた言う星華だった。妹はその彼女の横に来てだ。そのう
えで姉の話を聞きはじめた。彼女は日本酒を持って来ている。

「嫌な奴の顔は思い浮かぶはね」

「嫌な奴ねえ」

「これが凄い嫌な奴なのよ」

憮然とした顔のまままた妹に話す。

「すっごくね」

「そんなに嫌な奴なの？」

「何か癪に障るのよ」

「こつ言つのであつた。」

「ちよつとね」

「まあまあ。飲む？」

星子は湯飲みを一個姉の前に差し出してみせた。

「お姉も」

「日本酒？」

「そうよ。飲む？」

「今日はもう充分飲んだしいわ」
「だが彼女はこう言って妹の勧める酒を断った。」
「だからね。悪いけれどね」
「そうなの。じゃあ私だけ飲ませてもらうね」
「そうしなさい。それでだけれどね」
「うん。今度はどうしたの？」
星子は自分の湯飲みで酒を飲みながら姉の言葉を聞く。
「あんたも嫌な奴いるのよね」
「そういう相手がいない人っていないんじゃないの？」
「これが星子の返答だった。」
「この世の中に」
「いないかしら」
「だって百人いて百人共好きってことないじゃない」
「ええ」
「好き嫌いつてどうしてもあるしさ」
「こう姉に話す。つまみは柿の種である。」
「だから。それで普通よ」
「普通なのね」
「まあ私だって嫌な奴いるけれど」
「今度は自分自身についての話を姉にする。」
「それでもね。そうした相手は無視するし」
「それで済ませるの」
「こつちが何かしても気分は晴れないしね。だからね」
「無視するのね」
「それだといいいじゃない。お互い不愉快な思いしなしいし」
「そういうものなのね」
星華は妹の話を聞いて頷いた。顔はテレビに向けられたままだ。
「成程ね」
「それでいいじゃない。それでだけれど」
「お酒はいいわよ」

「サイダーにする？それじゃあ」

今度はそれを勧めてきたのだった。

「それと柿の種だけねど」

「じゃあ柿の種頂戴」

「サイダーは？」

「そっちも」

両方をだというのだった。

「頂戴、お酒じゃなくてね」

「はい、どうぞ」

「有り難う」

それを受け取って実際に飲む。それでまた言っのだった。

「今度はね」

「今度はって？」

「絶対に負けないから」

妹に対して言うのであった。

「文化祭はね」

「お姉文化祭は何するの？」

「そうね。何しようかしら」

「文化祭よね」

星子がこのことから話した。

「それだとお化け屋敷なんかどうかしら」

「お化け屋敷？」

「そう、文化祭なら結構やるわよね」

「ええ、確かに」

「それじゃあどうなかしら、これで」

「考えさせて」

星華は実際にサイダーを飲みながら考える顔を見せた。

「それいいかもね」

「そうでしょ。お化け屋敷ってお客さんそこそこ入るしそのうえや

りがあるでしょ」

「色々工夫もできるしね」

「じゃあそれでいく？」

「まだ考えさせて。けれど面白いわね」

「そうでしょ。それじゃあね」

「ええ、話もしてみるわ」

こう話してだった。そのうえで文化祭にその考えを移していく星華だった。彼女の心は運動会から離れようとしていた。しかしわかたかまりは残っていたのであった。

第十八話 完

2010・8・24

第十九話 お化け屋敷その一

お化け屋敷

椎名がだ。ホームルームでクラスの面々に話していた。

「文化祭のうちのクラスの出し物だけれど」

「ああ、それよね」

「何するんだ？それで」

「喫茶店」

「こつ言つのだった。

「それでどう？」

「喫茶店？いいかも」

「そうよね」

「面白いかもね」

皆彼女のその言葉に頷くのであった。

「他には何かある？」

椎名はまたクラスの面々に問うた。

「それで他には」

「他にはねえ」

「ええと、占いとかな？」

「他にあるかな」

「壁新聞とかは」

「壁新聞なら」

「ここでまた言つ椎名だった。

「一つ考えがあるから」

「考えてどうするんだよ」

狭山が自分の席から教壇のところに赤瀬と共に立つ椎名に問うた。

「壁新聞については」

「新聞を置く」

そうするというのであった。

「大スポと八条スポーツを」

「何でスポーツ新聞なんだ？」

狭山はこのことを突っ込んだ。

「朝日とか読売とかは置かないのかよ」

「朝日嫌いだから」

椎名はぼつりと言った。

「嘘ばかり吐く新聞は嫌い」

「朝日は嘘吐きかよ」

「大嘘吐き」

まさにそうだというのだった。

「朝日は何度も前科ある。朝日と毎日とテレビは観ていたら馬鹿になる」

「馬と鹿か」

「そうなる」

椎名はこう言って引かない。

「だから朝日は駄目」

「読売は言うまでもないよな」

「巨人は大嫌い」

「うんうん、わかるわかる」

「巨人についてはね」

「俺も嫌いだし」

「私も」

皆巨人については口々に話す。関西だからである。巨人が嫌いな人間は非常に多い。巨人が嫌いということは人間のコモンセンスである。

「じゃあ読売は置かないってことで」

「それで大スポと八条スポーツって」

「それがわからないけれど」

「大スポは最高だから」

椎名は言った。

「宇宙人が出て来る新聞は読まないと損する」
「あれって全部嘘だよな」
「っていうかまともな記事ないよな」
「全部ネタだけれど」
「ネタだからいい」
椎名はそれでいいというのであった。しっかりとした言葉だった。
「意図的に嘘を流したり事実を隠蔽したりする新聞やテレビよりずっといい」
「っていうかさ」
今度言ったのは津島であった。
「マスコミが嘘流したら報道資格剥奪されない？」
「だよなあ。そうならない？」
「なるよな」
「日本だとならない」
だが椎名はまた言った。
「それが日本だから」
「マスコミは嘘書き放題ってことかあ」
「そういえば古館とか鳥越とかつて胡散臭いよね」
「確かにね」
「死んだ筑紫哲也にしても」
「そういう顔触れは顔も見ない方がいい」
椎名の今の言葉には嫌悪が含まれていた。
「少なくとも私は見ない」
「それで八条スポーツは面白いから」
「それでなの？」
皆こう話題を変えてきた。

第十九話 お化け屋敷その二

「それでかな」

「確かにあの新聞は面白いけれど」

「その通り。八条スポーツは面白い」

実際にそうだというのであった。

「だから大スポとその二つ」

「成程、それでか」

「その二つなんだ」

「壁新聞はこれでいい」

椎名はそれについてはこれで終わらせた。

「次は占いだけれど」

「それ駄目？」

「占いとかは」

「できる」

皆の懐疑的な言葉への返答であった。

「タロットが」

「まさかと思うけれどな」

ここで陽太郎が椎名に問うた。

「御前がやるのかよ」

「そう」

その通りだという返答であった。

「私がやるから」

「御前占いもできたのか」

「趣味はタロット」

椎名はまた言ってみせた。

「しかも当たる」

「当たるのかよ」

「私の占いは当たる」

何処かのヒーローの如く話すのだった。

「それも確実に」

「そこまで当たるのかよ」

「何なら今占つてもいい」

感情のない言葉だがそれだからこそだ。迫力のある言葉だった。

「それでも」

「そうなのかよ」

「そう。スポーツ新聞が置いてある占い師所属の喫茶店」

椎名はその喫茶店がどういいうものか話した。

「そういうものにするから」

「何か凄いことになるんだな」

陽太郎は首を傾げさせながら述べた。

「そんな喫茶店はじめて聞くな」

「だからこそいい」

「だからかよ」

「普通の喫茶店でもお客さんはそこそこ以上に入る」

その根拠も話すのだった。

「宣伝もするし腕のいいシェフもいるから」

「私？」

「そう、津島」

まさに彼女であった。

「津島はシェフ兼メイド長」

「何か大役ね」

「それで斉宮は執事長」

今度は陽太郎についても話した。

「それでお願い。狭山はホールスタッフ兼執事」

また話すのだった。

「赤瀬は用心棒」

「うん」

赤瀬は横にいる椎名の言葉に頷いた。

「わかったよ」
「そういうことで」
「それはいいんだけどな」
「しかしであった。ここで狭山が椎名に問うた。
「メイドと執事か？」
「そうだけれど」
「何か秋葉原とか日本橋みたいだな」
「ここは関西だから日本橋」
「椎名は注釈も入れた。」
「秋葉原は知らないから」
「じゃあ日本橋か」
「そう。日本橋」
「また言う椎名だった。」
「日本橋も取り入れるから」
「俺今度は執事かよ」
陽太郎は今度は腕を組んで首を捻ったのだった。

第十九話 お化け屋敷その三

「何だかな」

「嫌？」

「いや、頼まれたことはやるさ」

「これが陽太郎の返答だった」

「ただな」

「ただなの」

「どうなんだよ、これって」

「彼はまた言った」

「応援団で白で今度は黒か」

「うん、对象的に」

「しかし。執事なんてな」

「執事は女の子に向けてメイドは男の子向け」

「いや、それはわかるさ」

「言うまでもないことだった。それはだ」

「しかし。色々と盛り込んでるな」

「盛り込んでこそ面白い」

「とはいってもだ。椎名の今の言葉にはまたしても感情はなかった」

「ただ普通にやっても面白くない」

「ええと、つまりは？」

「そのシェフがここまでの話をまとめた」

「メイドと執事と占い師がいてそれとスポーツ新聞がある喫茶店よね」

「そう」

「何か壮絶なまでに色々盛り込んでるけれど」

「そして」

「まだ言う椎名だった」

「お店のマスケットも考えたから」

「おい、マスコットもあるのかよ」
「そう、ある」
椎名は今度は驚く狭山に対して述べた。
「それもある」
「それでどんなマスコットなんだ？」
「せんと君」
返答は一言だった。
「それ」
「おい、あれは止めておけ」
「そうよ」
しかしであった。狭山と津島がすぐに抗議した。
「あのマスコットはな」
「止めておいた方がいいわよ」
「うん、冗談だから」
何とフェイントだった。
「それはないから」
「ああ、そうか」
「それはないの」
「そう。それでそのマスコットは」
それが何かをだ。椎名は話した。
「八条グループから借りたから」
「八条グループ？」
「あそこから？」
「そう、あそこに話したら快く承諾してくれた」
「そうだとするのである。」
「だから安心して」
「八条グループのマスコットっていったらな」
陽太郎がそれを聞いて述べた。
「あれか？」
「わかったのね」

「ああ、あれだよな」

そしてだ。言うのであった。

「八ちゃんだよな」

「そう、それ」

具体的にはだ。左胸に八の字のわっぺんをしている小さな女の子である。可愛いイラストで有名な漫画家にデザインしてもらったものである。八条グループ自体のマスケットキャラクターである。

「それにしたから」

「よく承諾してくれたな」

「気前のいいグループだから」

「それでか？」

「そう、電話したら一発だった」

椎名は言う。

「総帥さんに」

「待て、おい」

陽太郎は椎名の今の言葉にはすぐに突っ込みを入れた。

「今何て言ったんだよ」

「だから八条グループの総帥さんに直接電話したの」

「造作もなく言うよな。あそこのグループっていったら」

日本を拠点として太平洋を中心に全世界に進出している。戦前は日本で屈指の財閥であり今は世界で一、二を争うグループである。

第十九話 お化け屋敷その四

「そう簡単に総帥までな」

「実は八条町に天理教の教会があつて」

しかし椎名は言うのであつた。落ち着いたまま。

「総帥さんはその教会の信者さんなの」

「えっ、そうなのか」

「そうなの。その信者さんなの」

衝撃の事実であつた。

「だからそこに行けば連絡が取れるの」

「そうだったのかよ」

「そう。あの人は信仰心も篤いの」

これまた衝撃の事実が語られる。

「だからそのルートで」

「そうか。しかしな」

「今度は何？」

「何で椎名がそんなこと知ってるんだ？」

陽太郎は自分の席で腕を組み首を左右に交互に傾げさせながらだ。

そのうえで椎名に対して問うのだった。

「あそこの総帥さんがその天理教の教会の信者さんなんてよ」

「調べればわかること」

「わかるのかよ」

「ネットとあとは町を詳しく調べる」

この二つの情報源だというのだ。

「それでわかる」

「それだけでわかるのかよ」

「後は秘密の情報源」

ここで、だつた。椎名の口元に思わせぶりな笑みが宿つた。

「それも使つて」

「その情報源って何だよ」

「秘密って」

「何、それ」

「やばいの？」

「秘密」

皆の問いにも答えようとしない。

「企業秘密」

「御前それ下手したらやばいルートじゃないよな」

「どんなルートなのよ」

狭山と津島もそれが気になった。

「本当によ。大丈夫か？」

「そのルートを使って」

「私は大丈夫」

これが返答だった。

「だから安心」

「やっぱりやばいんだな」

「そうね」

狭山と津島だけでなく皆も察したことだった。

「これはな」

「確実にね」

「うふふ」

しかもだった。椎名はここで笑ってもみせたのだった。

そうしてだ。彼女は最後に言った。

「全ては決まったってことでいいかしら」

「気になる部分もあるにはあったけれど」

「それもかなり」

皆このことは言わずにはいられなかった。

「まあそれでもね」

「いいんじゃない？それで」

「完璧なんじゃ」

「わかったわ。じゃあうちはこれで決まり」
ぼつりと言う椎名だった。

「マスコット八ちゃんの手招きする占い師も専属する執事メイド喫茶スポーツ新聞付き」

「長いな」

「そうね」

店の名前は長かった。

「名付けて喫茶店三組」

「今度は随分愛想ないな」

「そうよね」

これはこれで問題であった。

「お店の名前はまだ未定」

「ああ、そうなんだ」

「じゃあそれはこれからじっくりと話し合って」

「それで決めればいいよね」

「そうしよう」

「まあお店の種類は決まりだね」

赤瀬は話をまとめにかかった。

「そういうことでいいよね」

「異議なし」

「それでいいわよ」

こうしてであった。三組は喫茶店に決定した。そして四組でも話し合いが行われていたがこのクラスの話し合いはかなり酷いものだった。

第十九話 お化け屋敷その五

「あの、その」

教壇のところでは月美が言おうとする。だが誰も聞かずにめいめいが話をしてるばかりだ。

男のクラス委員も一応教壇にいる。しかし彼は発言せず書記に徹している。黒板であれこれと書くばかりだ。結果として月美一人で話の司会をしていた。

「それで四組の出し物は何がいいですか？」

「ああ、それね」

「出し物だよな」

皆一応彼女の話は聞いた。

「それなあ」

「何か前に誰かお化け屋敷はどうかって言ってたよな」

「そうよね」

そして誰かがこんなことを言っただけの誰かが頷いた。

「じゃあそれでいいんじゃないか？」

「そうよね」

「面白そうだし」

「それでね」

「そうですか」

月美は教壇からその話を聞いて俯いて頷いた。

「それじゃあそれで」

「それでいいじゃない」

星華がここで素っ気無く自分の席から言った。周りにはいつもの三人がいる。

「西堀、後はあんたがやって」

「私ですか」

「そうよ、あんたクラス委員じゃない」

だからだというのである。冷たい顔での言葉だった。

「だからよ」

「私ですか」

「お化け屋敷のレイアウトとか何を出すかとか」

「そういうのをですか」

「そうよ、決めておいてよね」

完全に彼女に丸投げだった。

「いいわね、それで」

「あの、私は」

「何よ、文句あるの？」

「いえ、別に」

「なかつたらそれで決まりね」

星華は強引にそういうことにしてしまった。

「そういうことでね」

「わかりました」

「はい、じゃあ話はこれで終わりね」

星華は完全に仕切っていた。クラス委員をほったらかしにしてだ。

「後は自由時間でいいわよね」

「うん、そうよね」

「それじゃあね」

「そうしよう」

三人が星華の言葉に頷いてだ。既成事実にしてしまった。

こうして月美は文化祭の自分のクラスの出し物のレイアウト等を全て自分ですることになった。それで放課後自分のクラスに残っているのだった。

「どうしたの？」

「愛ちゃん？」

「うん、私」

椎名だった。そして陽太郎も一緒である。

「部活は行かないの？」

「誘いに来たんだけれどな」

陽太郎はこう月美に言ってきた。

「今日は何か用事あるのか？」

「ちよつと文化祭のことで」

「文化祭？」

「はい、それで今日は」

残念そうに陽太郎達に話す。

「駄目なんです」

「文化祭か。四組は何出すんだ？」

「お化け屋敷です」

それだというのである。

「それなんですけれど」

「レイアウトやどんなお化けを出すのかなのね」

椎名は月美が今書いているそれを見て言った。今彼女は自分の席に座ってそのうえでだ。書類の上にペンを置いていたのである。

椎名はそれを見てだ。すぐに述べたのである。

「それなのね」

「どうしようかしら」

「それならいける」

「いける？」

「そう、いける」

椎名の言葉である。

「簡単に」

「簡単にいけるってどうするんだよ」

椎名の横にいる陽太郎がここで彼女に問うた。

第十九話 お化け屋敷その六

「何か考えがあるのかよ、また」

「そう、また」

椎名はここでもぽつりと答えた。

「そういうレイアウトなら三十分ね」

「早いな、そりゃまた」

「レイアウトとかそういうのも決めるのも得意だから」

「それで三十分でできるのか」

「そう、できる」

また言う椎名だった。

「任せて」

「おい、他のクラスなのにいいのかよ」

陽太郎はこのことを問題にしたのだった。

「何か言われるぞ。いいのか？」

「それも大丈夫」

「大丈夫ってどうするんだよ、今度は」

「私は呟くだけ」

それだけだというのである。

「つきぴーはBGMを聴きながら考えて書いている」

「そういうことになるんだな」

「そう、そうなる」

まさにその通りだというのだった。

「そういうことだから」

「椎名ってそういうの本当に上手だよな」

陽太郎は思わず唸ってしまった。

「けれど三十分か」

「これで部活行けるわね」

「ああ。じゃあちよっと連絡するか」

「私も」

陽太郎も月美もそれぞれ携帯を出した。そうしてそのうえで二人共メールを打つてだ。すぐにそのメールを送信したのであった。

「これでいいな」

「そうね、これでね」

「じゃあ呟いていい？」

椎名はもう月美の傍に座っていた。動きが速い。

「今から」

「えっ、ええ」

月美は椎名のその言葉に頷いて応えた。

「それじゃあお願い」

「斉宮はどうするの」

「俺？」

「そう、どうするの」

「ええと、俺は」

「手が空いてるわよね」

「まあそうなるな」

「部活は遅れて」

つまり月美を待てというのだ。

「それでいいわね」

「部活はか」

「つきぴーを大事にしてくれるのなら待つ」

それならばというのだ。

「そういうことだから」

「ああ、わかったさ」

陽太郎もその言葉に頷く。

「じゃあ待たせてもらうな」

「そうして。じゃあ待つ間」

「ああ。何すればいいんだ？」

「赤瀬の手伝いしてきて」

それをしてくれというのである。

「その間は」

「あいつもう仕事はじめてるのか」

「そう、働き者だから」

「何も言わずに黙々と動くよな、本当に」

「それが赤瀬のいいところ」

椎名は今度は彼を褒めた。

「それもかなり」

「かなりか」

「そう、だから好き」

「好きなのかよ」

「っていうかここで言うか」

「事実だから」

椎名は隠そうともしない。

「隠さない」

「俺達はいいけれどな」

ここで陽太郎は自分達はいいとしたり。しかしであった。

第十九話 お化け屋敷その七

「けれどな」

「先生ね」

「ちゃんといるからな」

「今はいない。しかしなのだった。」

「先生だってな」

「先生に言われるようなことはしてないから大丈夫」

「プラトニックってことか」

「そういうこと」

「こう話すのだった。」

「だから大丈夫」

「プラトニックなのかよ」

「そう。恋愛はそれが最高」

その恋愛観まで語られる。椎名の恋愛観は独特なものだった。

「もどかしいのがいい」

「がつつかないのかよ」

「がつつくのもそれはそれで恋愛だけれどもどかしいのがいい」

「という訳だからね」

参謀に続いて指揮官が述べる。

「僕もそうなんだ」

「斉宮はどうなの」

「俺か？まあ俺はな」

「こいつ奥手だからなあ」

「そうなのよね」

何時の間にか狭山と津島も来ていた。

「まあだからこそ見ていたいな」

「そうなのよね」

「御前等何時来たんだよ」

陽太郎はその二人を見て少しいぶかしむ目になっていた。

「そういえば赤瀬も。その身体で気配感じさせないのかよ」

「僕気配消せるんだ」

「こつ話す赤瀬だった。」

「だから」

「柔道をやってるからか？」

「うん、武道だからね」

柔道はれっきとした武道である。そうした意味で剣道と同じなのである。

「鍛えたらこついうこともできるんだ」

「かなり鍛えた結果だろ？」

「まあそれはそうだけれど」

「何かな、それってな」

「斉宮君はできる？」

「俺は忍者じゃないよ」

こつ話してこのことを否定するのだった。

「気配消すところまでいってないさ」

「そうなんだ。そこまではなんだ」

「っていつか御前それ何処で覚えたんだよ」

「柔術の道場でなんだ」

柔道とは少し離れてはいた。しかし大筋において同じである。柔術から柔道が生まれたからである。そうした意味では同じなのだ。

「そこでなんだけれど」

「じゃあ俺も剣術の道場で修業したら気配消せるのか」

「難しいけれどね」

「難しいどころじゃないだろ」

「私もできる」

ぼつりと。絶好のタイミングで言った椎名であった。

「気配消せるから」

「椎名は本当に何者なんだろうな」

「只者じゃないのは間違いないわね」

狭山と津島もこのことは確信していた。

「っていうかこんな話している間にな」

「もうレイアウトできたの」

「はい、完成」

話してるその間にもうであった。

「つきぴーはこの通りにやって」

「このレイアウトの通りね」

「これでいいから。お化けとか幽霊も考えておいたから」

「有り難う、愛ちゃん」

月美はにこりと笑って椎名に礼を述べた。

「お陰でこれで」

「もうできるよね、これで」

「うん、凄いのになりそう」

「やるからには完璧に」

また話す椎名だった。

「そういうこと。三組と四組の競争になるけれど」

「何かどっちも椎名プロデュースカ」

「私は呟いただけ」

レイアウトやデザインは確かに月美のものだ。しかし傍には椎名のメモ書きがある。明らかにそれを見るようにということであった。

第十九話 お化け屋敷その八

何はともあれ本当に三十分で仕事は終わった。それからであった。

「じゃあ。後は」

「部活か」

「行ってらっしゃい」

椎名は二人に告げた。

「それじゃあ部活頑張つてね」

「何か今回も椎名大活躍だな」

陽太郎は首を捻りながら述べた。

「運動会に続いてな」

「それは気のせい」

「気のせいなのかよ」

「眩きを聞き入れたのはつきぴー」

あくまで彼女だと。手柄も渡していた。

「だからつきぴーがやったの」

「そうなるか」

「なる。じゃあ行ってらっしゃい」

また告げる椎名だった。

こうしてだった。二人は部活で汗をかいた。それが終わってからだ。もうすっかり暗くなってしまうている夜道で話をするのだった。

「あの」

「文化祭のことだよな」

「はい、愛ちゃんにはまた助けてもらいました」

月美は照れ臭そうな顔で右隣にいる陽太郎に述べた。

「いつもですけれど」

「椎名って本当に月美大事にするよな」

「どうしてなんでしようか」

こんなことを言う月美だった。

「私なんかの為にいつも」
「月美だからじゃないのか？」
「私だからですか？」
「そうだよ、月美だからだと思うよ」
陽太郎はその横にいる月美を見てまた話す。
「だからあいつだつてな」
「けれど私愛ちゃんには何も」
「それは月美が気付いていないだけだよ」
「気付いていないだけなんですか」
「自分ではさ」
「こつ月美に話す。」
「気付かないものだしな」
「そうなのですか」
「自分のことが一番気付かないんだよ」
陽太郎はこつ言うのだった。
「月美はあいつにとってかけがえのない存在なんだよ」
「だったらいいのですが」
「そうだよ。そのことは安心したらいいさ」
「はあ」
「だからな」
陽太郎の言葉は続く。
「そんなに自信ない感じでおどおどしなくてもいいしさ」
「おどおど、ですか」
「ああ。月美ってそういうところあるから」
「ですか」
「それって昔からだよな」
「また月美に問うた。」
「やっぱり」
「はい、子供の頃から言われています」
「このことを実際だと。本人も認めた。」

「私、子供の頃から」

「言われてきたんだな」

「習いごとがとても多くて」

月美は自分の過去も話す。それは彼女にとっては今ではあまりいい思い出ではなかった。だがそれをあえて話すのであった。

「それで友達は」

「いなかったんだ」

「はい。けれど塾で愛ちゃんと会って」

「あいつが友達だったんだな」

「そうです」

こう陽太郎に述べる。

「愛ちゃんが本当にはじめての友達で」

「あいつもそうなんじゃないかな」

「えっ、愛ちゃんもって」

「あいつ。結構とっつきにくいからな」

陽太郎はその椎名のこと話す。

第十九話 お化け屋敷その九

「無口で何か醒めた感じがするよな」

「はい」

「それで何考えてるかわからないしな」

「そんなところありますか」

「ああ、あいつとはいつもありのまま話してるんだよな」

「そうなんです」

それが二人の関係なのだ。本当にありのまま話をしているのだ。

「だからそういうのは感じないか」

「最初はそうだったかも知れないですけど」

「そうか。それってつまりは」

「つまりは？」

「それだけあいつと波長が合うってことだよな」

陽太郎は月美の顔を見てだ。微笑んで告げた。

「月美は」

「波長がですか」

「あいつと波長が合う奴ってあまりいなかったんだろっつな」

「愛ちゃんですか」

「けれど月美は合った。それで二人仲良くなれたんだよ」

「私達それで」

「そうさ。多分それってな」

陽太郎は微笑みから確かな笑顔になってだ。それでさらに話した。

「あれなんだよ。運命なんだよ」

「運命ですか」

「ああ、運命なんだよ」

それだというのである。

「二人が会ったのってそれなんだよ」

「あの塾で」

「お互い友達がいなくても友達になれたよな」

「はい」

「出会いがあつてな。やっぱりそれって運命なんだよ」

「そうなんですか」

「だからさ。あいつにとつてもさ」

椎名のことを考えてだ。そのうえで話を続ける陽太郎だった。

「月美と会えたことつて大きいんだよ」

「そういうことなんですか」

「自分が傍にいてもいい話を聞いてくれる。そういう相手だからな」

「だから私が」

「それでだよ。月美にとつて椎名がかけがえのない相手なのと同じで」

「はい」

「椎名にとつても。月美はかけがえのない相手なんだよ」

「そうですね」

そこまで聞いて頷いた月美だった。

「私達つてそんな」

「多分月美と会つてあいつも変わつて」

「そうして？」

「赤瀬とも付き合つてそれでこの学校に来て俺達とも会つて」

「どんだん動いたつて感じですね」

「月美もな。お互いがあつて変わったんだよ」

こつ話す陽太郎の目はだ。これまでになく温かいものだった。その目で話すのである。

「そういうことじゃないかな」

「そうですね」

「だから別に卑屈になることもないしさ」

「はい」

「おどおどすることもないよ。月美はさ」

「わかりました」

陽太郎の言葉にこくりと頷いた。

「それじゃあ」

「俺だっているし」

ふとだ。意識せずに自分のことを話に出した。

「だからそれもあってさ」

「陽太郎君も」

「何かあったら何でも言ってくれよ」

また微笑みになっての言葉であった。

「何でもさ」

「いいんですか、それって」

「ああ、いいよ」

実際にいいのだというのだった。

第十九話 お化け屋敷その十

「本当に何でも言ってくれよ」

「すいません」

「だから謝る必要はないさ」

それはだというのだ。

「だからそれはさ」

「それはですか」

「だって俺って月美の彼氏だろ？」

「え……」

「それで月美は俺の彼女で。だったらそんなの当たり前じゃないか」

こつ月美に話すのだった。

「付き合ってるんだから」

「それでなんですか」

「そつだよ。だから何でも言ってくれよ」

「それじゃあ」

「ああ、そういうことだな」

「わかりました」

月美は微笑んでた。陽太郎の言葉に頷いてみせた。

そつしてである。彼女の方から言ってきた。

「私、ずっとですね」

「ずっと？」

「お友達いなかったんです」

まずはここから話す。

「当然彼氏なんて」

「いなかったんだな」

「はい、いませんでした」

顔を少し上にあげて話していた。

「ずっと。十六年間」

「それで今は、なんだよな」
「そうです。陽太郎君が私の彼氏ですから」
「にこりとしての言葉であった。」
「だから。今はいます」
「俺もだよ」
「陽太郎君もですか」
「月美がはじめての彼女だよ」
「彼は少し俯いてた。そのうえで微笑んで言うのであった。」
「本当にさ。はじめてなんだよ」
「そうだったんですか」
「ああ、そうなんだ」
「こう話すのであった。」
「月美と会うまで彼女なんていなかったんだよ」
「じゃあデートとかは」
「したこともなかったんだ」
「このことも話すのだった。」
「一度も。だからかなり緊張してたんだ」
「あの時そうだったんですか」
「こう話してであった。」
「あの時は」
「ああ、それでな」
「それで緊張していて」
「まずいかな、失敗したかなって思う時が多くてさ」
「照れ隠しでの言葉でもあった。」
「けれど月美はあれでよかったのかな」
「はい」
「月美の返答は一言だった。」
「とても楽しかったです」
「だったらいいんだけどさ」
「陽太郎君必死だったんですね」

「何処に行つたらいいか、何を喋つたらいいか」
そんな話もするのだった。

「本当に悩んでさ。はじめてのデートだったけれど」
「実は私も」

「月美もだったんだ」
「怖かったです」

月美は今度は俯いた。陽太郎も俯いたままだつたので二人は同じ姿勢になった。その姿勢でさらに話をするのであった。

そうしてだ。月美はその怖かつた理由も話した。

「私もデートではじめてだったんで」

「ああ、彼氏がいなかったから」

「はい、それで」

「怖かつたんだ」

「はじめてすることって怖いですよね」

月美は今度はこう言うのだった。

「何をしていたのかわからないから。本当に」

「そうだよな、本当にさ」

「だからなんです。怖かつたです」

それだけというのである。

「私、ずっと」

「そうだったんだ」

「けれど今は怖くないですよ」

ここでは陽太郎に顔を向けてきた。笑顔になっている。

「今こうして一緒にいても」

「それでもなんだ」

「今もデートしてますよね」

「あつ、そうだよな」

陽太郎はこのことは言われて気付いた。

第十九話 お化け屋敷その十一

「俺達つて今」

「はい、デートしていますよね」

「ああ、してるよ」

それを今頷いて認めたのだった。

「確かにさ」

「こうしてデートしていても。全然怖くはありません」

「怖くないんだ、よかった」

「嬉しいです」

また俯いて微笑んだ言葉だった。

「とても」

「俺も」

「陽太郎君もですか」

「あの時は緊張したけれど今は落ち着いてるよ」

「そうなんですか」

「ああ、落ち着いてるよ」

また話す彼だった。

「だから。また一緒に行きたくなるよな」

「はい」

「明日も。明後日も」

「そしてそれからも」

「一緒にさ」

こう話すのであった。

「こうして下校の時は二人一緒にさ」

デートをして」

「そうしていいかな」

「御願います」

月美の方からの言葉だった。

「私からも是非」

「ああ、それじゃあまた二人で」

「ずっと二人で」

「こうして一緒に帰ろうか」

「そうしましょう」

こんな話をした楽しい下校のデートであった。そしてである。

お化け屋敷のレイアウトや出しものは次の日の朝のホームルームで月美の口から四組全員に話された。するとであった。

「えっ、よくできてるし」

「確かに」

「これいけない？」

「いけるわよね」

「そうよね」

まずは三人が話した。

「こんなにできるって」

「とろそうなのに」

「何なのよ」

「あの」

月美はそのレイアウトを「コピー」にして皆に配っていた。これも椎名の呟きからである。それで皆に見せたうえでだ。彼等に対して尋ねるのだった。

「これでいいですか？」

「ええ、いいんじゃない？」

星華が無然として答えた。

「これでいけるわよ」

「はい、それじゃあ」

「それにしても早いわね」

星華は「ここでもこうも言った。

「あなたにしては」

「そうでしょうか」

「ええ、早いわ」

また言う星華だった。

「けれどそれでいいわ」

「いいですか」

「早ければ早ければいいのよ」

運動部に所属しているのがよくわかるはきはきとした言葉であった。

「そういうことだからね」

「わかりました」

「じゃあ後はね」

星華は月美にさらに話した。

「あんた細かいところやっておいて」

「あつ、それももう」

「書いてあるわね」

見ればコピーの紙にだ。これからの段取りやスケジュールまで書かれていた。やはりこれも椎名の書きものである。

「ここまでしてるの」

「書いてみましたけれど」

「よくできてるわね」

星華の言葉は少し忌々しげなものになっていた。

第十九話 お化け屋敷その十二

「後はこれをやっていけばいいわね」

「そうよね。何かいける感じ？」

「もうここまで決めてたら」

「楽よね」

州脇達三人も言う。

「じゃあ後はね」

「皆で教室をお化け屋敷にして」

「そうすればいいわね」

「後は受付ね」

星華は今度はこのことを話した。

「それをどうするかね」

「それもです」

また言う月美であった。

「誰が何時担当するか決めてますから」

「それもなの」

「はい、ここに」

月美は少しおどおどとした仕草でそれで自分の制服から紙を出してきた。見ればそこにだ。もう名前が書かれていた。

「決めてます」

「じゃあそれも決めてるし」

「それじゃあ楽よね」

「本当にはじまるだけね」

「まあやるわね」

星華はそれを見ても渋々頷くのだった。

「それじゃあ全部決まったってことだね」

「よし、それじゃあやるか」

「あらかた決めてもらったしな」

「委員長やるじゃねえか」

「ここでこれまで黙っていたクラスの男達が言葉を出してきた。

「よし、頑張るか」

「ああ」

「そうしような」

「こうして四組も決まった。その後でだ。

月美は昼食の時に椎名に話していた。今は二人で校庭にいる。まだ陽太郎達は着ていないがそこで話をしているのだった。ま

「有り難う」

「だから御礼はいいから」

「けれど本当に助かったから」

「こう言って椎名に礼を述べるのだった。

「文化祭、いけそうなの」

「私は呟いただけ」

「ここでもこう言う椎名だった。

「それだけだから」

「そうなの」

「そう。つきぴーはそれを聞いていただけ」

「それでいいのね」

「いい」

「これが椎名の返答である。

「じゃあお化け屋敷頑張るって」

「はい、わかりました」

「ただし。私が書いたあの演目は出さないこと」

「あの二つはなのね」

「そう、あの二つは駄目」

「こう月美に話すのであった。

「忠臣蔵の裏話と首の話は」

「その二つって本当に危ないのね」

「科学的根拠はないけれど実際に色々な話が残っている」

それでだというのである。椎名は決して科学だけを見て何かを決めるのではない。それ以外のものも見てそれで言うのである。

「だから駄目」

「わかったわ。じゃあ」

「そういうことだから。その二つは駄目」

「ええ」

「他はいい」

その他はというのだ。

「うんと怖いものにしていいから」

「愛ちゃんの眩き通りね」

「そうしたらいいから」

「それじゃあ。幽霊とか生首も出して」

「お化け屋敷はうんと怖く」

椎名はこつとも言った。

「それでこそだから」

「そうよね。私もお化け屋敷好きだし」

「つきぴーはうんと怖いのが好きだったわね」

「そうなの。漫画でも小説でも映画でも」

月美はサンドイッチを食べながら椎名と話す。椎名は椎名で弁当のざるそばを食べる。そのうえで月美と話をしているのだ。

「うんと怖いのが好きだから」

「つのだじろつとか楳図かずおとかもね」

「大好きだから。映画だと」

「そうね。ドラキュラとか」

「好きだから」

こつ話していた。その時にだ。

「お待たせ」

「遅れて御免ね」

狭山と津島が来た。当然陽太郎と赤瀬も一緒である。

「パン買うの遅れてさ」

「カップラーメンにお湯も入れてたし」
それで遅れたと話す狭山と津島だった。話ながらそのうえでだ。
二人の傍に座っていつもの様に車座を組んで食べはじめるのだった。
それからまた話をした。そうして楽しい時間を過ごすのであった。
昼の一時をだ。

第十九話 完

2010・8・31

第二十話 準備の中でその一

第二十話 準備の中で

「意外よね」

「そうよね」

「本当にね」

橋口達三人がまず話していた。場所は駅前の喫茶店だ。

アンティークな趣きのダークブラウンの店である。イギリスの雰囲気を感じさせている。その中でだ。三人は星華と一緒に話をしていた。

「あのどん臭い西堀がね」

「あつという間にあそこまでやるなんて」

「あれで一週間はかかるって思ったのにね」

これが彼女達の予想だったのだ。

「それが一日でって」

「何よ、あれ」

「嫌がらせにならなかったじゃない」

「そうね」

ここで星華も言った。四人はそれぞれ紅茶を飲みながら話している。

「あいつ、その間時間でまたなんでしようね」

「男たぶらかしてね」

「遊んでるのよ」

「絶対にそうよ」

「それはわかってるわ」

星華も三人のそんな言葉に頷く。

「あいつ、何時かきつとね」

「ええ、思い知らせてやりましょう」

「絶対にね」

「近いうちにね」
「そうしてやるう。まあそれは置いておいて」
話を置いた星華だった。
「その文化祭だけれど」
「ええ、それよね」
「星華ちゃん何か予定ある？」
「あるの？」
「それがないのよね」
ここで寂しい顔になる星華だった。
「残念だけれど」
「そうなんだ」
「じゃあ最後のフォークダンスも？」
「そっちもなの？」
「相手いないの」
「いないわ」
こう答える星華だった。
「残念なことだね。寂しい文化祭になりそう」
「だったら誘えばいいじゃない」
「ようそうね」
「誘えばね」
「簡単に言うけれど」
また言う星華だった。困った笑顔になってだ。
「誘うなんて」
「だってねえ」
「うちの文化祭のフォークダンスってね」
「そうそう」
ところだ。ここで三人はこんなことを話すのであった。
「一緒に踊ったらね」
「それから一年間は幸せな交際が続くってね」
「そう言われてるし」

まずはこんなことを話す。

「告白して誘えばそのカップルは結ばれる」

「一緒に踊ればその時は」

「そう言われてるし」

「えっ、そうなの」

話を聞いた星華はだ。目を少し大きくさせて三人に問うた。

「そんなことあったの」

「あれっ、知らなかったの？」

「そういう話あるのよ」

「この八条高校にはね」

「だから初耳よ」

驚いた顔で言葉を返す星華だった。

「そんなことって」

「そういう話あるから」

「だから星華ちゃんも誘ってみたら？」

「相手がいたらね」

「ええと、そんな話があったの」

ここまで話を聞いてだ。彼女は考える顔になった。そうしてであった。

第二十話 準備の中でその二

「じゃあ。そうしようかしら」

「あつ、やっぱり好きな人いるんだ」

「そうだったんだ」

「いたのね」

「ま、まあ」

星華は顔を赤らめさせて頬を赤くさせて述べた。

「いないって言ったら嘘になるしね」

「じゃあ誘おうよ」

「文化祭のフォークダンスの日だね」

「一緒に踊ればね」

「わかったわ。じゃあ」

ようやく頷いた星華だった。そうしてであった。

あらためて三人に話すのであった。

「その日、勝負かけるから」

「よし、じゃあね」

「その日覚悟決めてね」

「意中の相手誘おう」

「そうするわ」

あらためて三人の言葉に頷いた。彼女はこんな話をしてきた。

そして陽太郎もだ。同じ話を狭山と津島から聞いていた。

「フォークダンスの時から」

「ああ、好きな相手と踊ったらな」

「そのカップルは一年幸せになれるのよ」

二人はにこにここと笑って自分の席にいる陽太郎に話していた。

「で、俺は不本意だけれどな」

「不本意は余計よ」

「痛ててて、何するんだよ」

津島は狭山の今の言葉にむっとした顔になって耳をつねった。狭山は耳の方に顔をやって実際に痛そうな顔をしている。

「いきなりよ」

「耳つねってんのよ」

「わかったよ、じゃあ不本意じゃねえからよ」

「宜しい」

その言葉で耳から手を離れた津島だった。そのうえでまた陽太郎に話すのであった。

「だからあんたもどうなのよ」

「月美とか」

「そうよ、そうしたら？」

こう彼に提案するのであった。

「幸せになりたいだろ」

「だからよ」

「そうだな」

そう言われてだ。陽太郎も言う。

「じゃあ」

「ああ、それじゃあな」

「そうするのね」

「しかしそんな話があったのかよ」

陽太郎はその話を聞いてだ。首を傾げさせながら話す。
文化祭に」

「ああ、俺達もはじめて聞いたけれどな」

「そういう話があるから」

また陽太郎に話す二人だった。

「それじゃあそっちも幸せになりなよ」

「私達もそうなるから」

「幸せか」

陽太郎はその言葉を心に留めてだ。考える顔になった。
「幸せにならないと駄目だよな、やっぱり」

「当たり前だろ、人間ってその為に生きてるからな」

「憲法にも書いてあるじゃない」

「こんなことも言う二人だった。」

「だからだよ。御前も西堀さんもな」

「幸せになりなさい」

「わかったよ」

陽太郎も二人のその言葉に頷いた。

「それじゃあ。フォークダンスだな」

「完全に掴めよ」

「西堀さんをね」

「ああ、わかってるさ」

陽太郎はまた頷いてみせた。

「彼氏と彼女だしな」

「そうするといい」

いきなり椎名の声 came。

「というかそうしないと」

「しないと？」

「殺す」

一言であった。抑揚のない言葉だからこそ余計に迫力がある。

「つきぴーを不幸にすると許さないから」

「わかっているさ、言われなくてもな」

「わかっていたらいい」

「だよなあ。俺ってやっぱりな」

「そう、つきぴーを大事にしないと駄目」

椎名はこのことに五月蠅かった。それもかなりだ。

第二十話 準備の中でその三

「そういうことだから」

「ああ。ところで椎名」

「何？」

「御前もやっぱり踊るのか？」

陽太郎は彼女にこのことを尋ねたのだった。

「フオークダンスな。どうするんだ？」

「踊る」

「こつ返す椎名だった。」

「勿論」

「ああ、やっぱりそうなのか」

「そう。そしてその相手は」

「赤瀬だよな」

「勿論」

「またこつ言うのだった。」

「赤瀬と一緒に出て一緒に踊る」

「やっぱりそうか」

「もう赤瀬にも話してるから」

「御前この話前から知ってたのか」

「その通り。二学期はじまってすぐに聞いた」

「相変わらず情報通なんだな」

陽太郎はここでも発揮された椎名の情報収集能力に感心していた。

「こつしたことができるからこそ椎名であると言えた。」

「凄いな、俺なんか今聞いたばかりなのにな」

「情報は集め方にコツがあるの」

「コツ？」

「学校の情報はさりげなく先輩の話を聞く」

「それでか」

「部活の他には食堂とか廊下でも聞けるから」

「ああ、普通に話してたりするよな」

陽太郎もわかった。そうしたところから情報を集めるといふのだ。
「それを聞いてか」

「そういうこと。他にもサイトとか」

「あれか。学校の裏サイトか」

「悪いことも書かれてるけれどそうしたことも書かれている」

とにかくあらゆる手段を使って情報を集める椎名であった。それでそのうえで陽太郎や狭山達に対して話すのであった。

「そこでもわかる」

「情報って色々転がってるんだな」

「そういうこと。情報収集には自信がある」

椎名は言った。

「軍師としての基本だから」

「ああ、じゃあ頼むぜ天才美少女軍師」

「お任せあれ」

ここで微笑んで左手を出してだ。ブイサインを示す椎名であった。

その椎名にだ。狭山と津島が言ってきた。

「さっき裏サイトの話したけれどな」

「うちの学校にもあったのね」

「何処にもある」

こう二人にも答える。

「どの学校にも」

「そうだったのか」

「まさかと思つてたけれど」

「そういうこと」

「しかし。悪いことも書かれてるって」

「結構以上にまずくない？それって」

「そう、まずい」

これはすぐに認めた。

「その通り。かなりまずい」
「あれだよな。いじめとかあるんだってな」
「あることないこと書いて」
「そういうことをする奴がいる」
「また話す椎名だった。」
「それが問題」
「うっん、何ていうか」
「そうよね。嫌な話よね」
「それどうにかして止められないか？」
「何とかならないの？」
「これが難しい」
椎名も今はその言葉に確信がなかった。声の響きが弱い。
「それもかなり」
「だよなあ。誰が書いてるかわからないしな」
「嘘でも書かれた本人にはたまったものじゃないし」
「そう。だからやばい」
「それでだというのだ。」

第二十話 準備の中でその四

「私のことなら気にしないけれど」

「問題はあれだよな。月美だよな」

「つきぴーは結構誤解受けやすい」

親友だからこそわかっていることだった。

「だから気をつけている」

「だよな。なあ」

「そのサイトのことね」

「ああ。よかつたら俺にも教えてくれないか？」

こう椎名に言うのであった。

「よかつたらな」

「うん」

椎名は陽太郎のその言葉にこくりと頷いてみせた。

「わかった。じゃあ」

「えっ、もつかよ」

「携帯で見られるから」

「こつ言って自分の携帯を出して陽太郎に見せてきたのだ。そのつえで彼に言う。」

「斉宮も」

「あ、ああ」

陽太郎もそれに頷いてだった。自分の携帯を出した。

「それでまずは椎名がそのサイトを出してだ。陽太郎の携帯にメールで送ったのであった。」

「これでよし」

「このサイトかよ」

「そう。そこだから」

「悪いな。若し月美の悪口が書かれていたらな」

「その時はその時でやり方があるにはある」

「あるのかよ」
「ハッキング」
「やたらと物騒な言葉が出て来た。」
「それするから」
「そりゃ犯罪じゃねえのか？」
「確かに犯罪だけれどいざという時はそれもする」
「また極端だな」
「いざという時にはそうした手段を取ることも必要」
「椎名は落ち着いているが強い口調だった。」
「本当にね」
「ばれたら大変だぞ」
「大丈夫」
「大丈夫ってのかよ」
「そう、、ばれないようにする」
「だから大丈夫」
「御前本当にどういう人間なんだ？」
「陽太郎は椎名のそんな言葉を聞いて内心かなり思うところがあった。」
「裏で何やってんだよ」
「裏とかはないから」
「ないのかよ」
「非常時の為にそういう知識は持つてるけれど普段は使わないから」
「当たり前だよ。しかしな」
「しかし？」
「そんな知識持つてること自体がまずいだろ」
「こう椎名に話す。」
「ったくよ」
「まあそういうことだから」
「いいていうのかよ」

「そう、いい」

本人だけが平然としていた。そしてだ。

ここで赤瀬が来てだ。一同に話す。

「それでね」

「それで？」

「それでって？」

狭山と津島がその彼に問い返す。

「一体何が」

「何があるのよ」

「スケジュール決まったよ」

それがだというのである。

「文化祭のスケジュールがね」

「えっ、もう決まったのかよ」

「そうなの」

「そう、決まったから」

こう一同に話すのだった。

「もうね。それで文化祭前になったら皆で用意するからね」

「ああ、わかったぜ」

「それならね」

狭山と津島は納得した顔で彼の言葉に頷いた。そうしてである。

第二十話 準備の中でその五

そのうえでだ。彼等は話すのだった。

「いよいよはじまるな」

「秋の大イベントがね」

「よし、気合入れてくぜ」

「メイドになるわよ」

「執事にな」

「気合入れるのはそっちかよ」

陽太郎は今の二人の言葉にいささか冷めた目で突っ込みを入れた。

「執事とメイドにかよ」

「当たり前だろ、それになるんだからな」

「なるんだつたらね」

「私も気合入れる」

椎名も出て来た。

「ちゃんね」

「占い師もかよ」

「そう、タロット占い」

言いながらであった。実際に何処からかタロットカードを出してだ。そうしてそのうえでカードを切つてなのであった。

一枚出してきた。それは。

「上手くいきそうね」

「何だよ、そのカード」

「世界のカード」

それだというのだ。見ればだ。何か大樹のところにいる。そうしたカードであった。

「これはとてもいいカードだから」

「そうなのか」

「うん、これが出たら安心」

「そうだという。」

「私達のクラスは安心」

「よし、それじゃあな」

「気合入れていくわよ」

そのカードを見てもこう言う二人だった。

「俺は執事兼ホールスタッフだしな」

「私はシェフ長兼メイド長だし」

「何気に津島さん大忙しだね」

赤瀬がぼつりと話した。

「それって」

「忙しければ忙しいだけいいのよ」

まさに商売人の娘の言葉である。

「やるからにはね」

「成程ね。そうなんだ」

「そうよ。やるわよ」

津島は満面の笑みで両手を拳にしている。そのうえその背中には炎まで背負っている。まさに燃え上がっていたのである。

「売り上げナンバーワン目指すわよ」

「売り上げはアフリカの恵まれない子供達に寄付されるから」

椎名がこう話す。

「それと植林に」

「あれっ、俺達のものじゃないのかよ」

「それはないから」

狭山にも述べる。

「けれどいいことをするからね」

「そうだよな。寄付に植林に使われるからな」

「そういうこと。北朝鮮には一円も行かない」

「あそこは別にいいだろ」

陽太郎は素っ気無く言った。

「っていうか拉致被害者とつとと返せよ」

「嘘なかり言わないでな」
「全くよ」

これは狭山と津島も同意見であった。

「まあとにかくな」

「気合入れていきましよう」

またこう言った津島であった。そうしてその準備の日が迫ってきた。

その直前だ。陽太郎も月美もそれぞれの部活で言われた。

「部活は暫く休みだからな」

「文化祭の準備と本番に専念しろ」

「いいな」

こう顧問の先生や先輩達に言われてだ。実際に部活は休みになった。

そう言われた日の帰り道だ。陽太郎はこの日も月美と一緒にだった。

そしてそこでだ。月美に尋ねた。

「あのさ」

「はい？」

「四組の準備どうなんだ？」

「尋ねるのはこのことだった。」

「順調にいきそうか？」

「はい、大丈夫です」

陽太郎は月美に顔を向けて微笑んで答えた。

「愛ちゃんのあの眩き通りにしていきますので」

「それでか」

「もう凄くよくできていますから」

「あいつはとにかくそういうこと凄いからな」

「はい、ですから」

「こつちもなんだよな」

陽太郎は自分のクラスの話もした。周りはまだ暗い。秋になった証拠である。そして二人もそれぞれ冬服になっている。

第二十話 準備の中でその六

「お陰でこっちもかなり凄いことになりそうだよ」

「喫茶店ですよね」

「そうなんだ。まあできてのお楽しみだよ」

細かいことはあえて言わなかった。

「一回来てみてくれよ」

「はい、じゃあ陽太郎君も」

「ああ。行かせてもらおうよ」

笑顔で答える陽太郎だった。

「勿論な」

「楽しみに待ってます」

月美は満面ににこりとした笑みを浮かべて述べた。

「その時を」

「そうだよな。俺もかなり楽しみになってきたよ」

「そうですね。凄い文化祭にしたいですよね」

「最後の最後までな」

「はい。ですから」

「お互い頑張るか」

二人ほぼ同時に言ったのだった。

「それじゃあな」

「そうですね。それじゃあ」

「それで最後はさ」

「あれですよ。フォークダンスですよね」

月美からの言葉であった。

「最後のキャンプファイアの」

「あれっ、知ってたんだ」

「聞きました」

それで知ったというのである。

「それで」
「そうだったんだ」
「じゃあそのフォークダンスを二人で踊って」
「本当にそれで幸せになれるのかな」
陽太郎はふとその言い伝えについて首を傾げさせて述べた。
「そんなことで」
「いえ、幸せになれますよ」
「なれるのか？それで」
「少なくとも私は幸せになれます」
「月美が？どうしてなんだよ」
「はい、それはですね」
穏やかで優しい笑みになってだ。そのうえで陽太郎に話す。
「陽太郎君と一緒にになれるからです」
「俺と」
「だって陽太郎君と一緒に踊るのですよね」
「そうだよな」
「だったら私幸せです」
また話す月美だった。
「とても」
「そうか。それじゃあな」
「それじゃあ？」
「俺もだよな」
陽太郎も微笑んでだ。そのうえで月美に話す。
「俺も月美と一緒にになれるんだよな」
「はい、私が陽太郎君と一緒にですから」
「俺も月美と」
当たり前前のことである。しかしである。それでも二人はこのことを確かめ合うのだった。そのことを確かめて自分達の心の中に喜びとして置きたかったからである。だからそうするのだった。
「幸せになれるよな」

「はい、なれます」

「じゃあ文化祭の最後はな」

「フオークダンス。踊りましょう」

「二人でか。そういうのってはじめてだけれど」

「私も。実は」

「やっぱり凄くいいんだろっな」

陽太郎は微笑んでいた。ここでもだ。

そして空を見上げる。夜空だ。そこには白い三日月がある。それは白く優しい光で周りの雲を照らし出しそこにあった。

その白い月を見てだ。陽太郎はまた言った。

「あのさ」

「はい？」

「月って太陽の光を受けて輝いてるんだよな」

「そうですね」

「だから太陽って凄いつて言われるけれど」

それからだった。さらに言うのだった。

「太陽ってさ。太陽だけじゃ駄目だよな」

「そうなんですか？」

「太陽って月がないとそれだけでしかないじゃないか」

これが陽太郎の今の言葉だった。

第二十話 準備の中でその七

「月が夜にあるから昼にいられるんだよな」

「月が夜にですか」

「昼にだつていたりするけれどそれだつて」

「それもですか」

「うん。太陽は月に傍にいて欲しいんだよ」

それで月は昼も空にいるのだというのだ。

「それに月に光を与えるのも」

「それは？」

「月に光を与えたくて仕方ないんだと思うよ」

「それで月が輝くんですね」

「太陽は月が好きなんだ」

陽太郎は話した。

「それに月もさ」

「月もですか」

「太陽が好きだからその光を受けるんだよ」

「太陽が好きだから。それでなのですか」

「嫌いなら受けなくていいじゃないか」

「そういえばそうですね」

月美も彼のその言葉に頷く。

「言われてみれば」

「だからだよ。それでなんだよ」

ここで結論を述べる。

「太陽と月は空にあるんだよ」

「そういうことですか」

「そう思ったんだ、今」

陽太郎は笑みはそのままだった。

「空を見てさ」

「それなら私達もですね」

「そういう感じになれたらいいよな」

「はい、本当に」

「それじゃあ文化祭お互いに頑張って」

文化祭の話もした。

「そしてその最後に」

「フォークダンスを」

「そうしよう」

「はい、そうしましょう」

二人で言い合った。

「そうして二人で」

「ずっと二人でな」

「実は」

月美はここまで話してから一呼吸置いた。それからだった。

「私、実はですね」

「実は？」

「こういうこと言うのはじめてなんです」

月明かりにその赤らんだ顔が見えた。

「陽太郎君に対して。誰に対しても」

「俺もだよ」

「陽太郎君もですか」

「俺もはじめてだから」

照れ臭そうに笑つての言葉である。

「それはさ」

「そうですね。じゃあお互いに」

「一緒だよな」

陽太郎はまた月美に話した。

「そう思うといいよな」

「はい、本当に」

そんな話をしながら太陽に照らされて白く輝いている月を見上げ

ていた。そこには月はあつた。だが星は何処にもない夜だった。星華は日が近づくにつれだ。難しい顔になってきていた。そしてである。

教室で三人に対して声をかけた。

「ねえ」

「ねえ？」

「ねえつて？」

「どうしたの？」

「文化祭の最後だけねど」

その難しい顔に不安なものも入っていた。

第二十話 準備の中でその八

「あれよね。キャンプファイヤーよね」

「ああ、あれね」

「あれがどうかしたの？」

「ひょっとしてダンスのこと？」

「うん、それ」

まさにそれだというのである。

「ダンスのことだけれどね」

「それね」

「星華ちゃん前も言ってたよね」

「確かそうだったよね」

「そうよ。それでね」

星華はここでさらに話す。

「いいかしら」

「あつ、わかったわ」

「相手がいてその子と一緒に踊って欲しいから」

「それでなのね」

三人は笑顔で星華に対して応えたのだった。

「私達に助けて欲しい」

「成程ねえ」

「そういうことね」

三人は星華をからかうようにしてにんまりと笑って述べてきた。

「星華ちゃんも隅に置けないっていうかね」

「中々やるじゃない」

「ここぞって時に勝負かけるってね」

「そういうわけじゃないけれど」

星華は弱った顔で三人に言い返す。

「ただ。私も」

「で、相手は？」

「相手誰？」

「何となるわかるけれど」

「その先は言わないでよっ」

野上が言おうとしたところだ。他の二人も気付いていると感じ取ってだ。星華は彼女達の言葉をすぐに遮ったのだった。

「御願いだから」

「はいはい、わかったからわかったから」

「そんなに必死にならないの」

「純情なんだから」

「とにかくね」

星華は顔を赤くさせてまた三人に言った。

「その日その時に一緒にいて」

「えっ、それだけ？」

「それだけでいいの」

「一緒にいるだけで」

「誘う位は自分ですから」

もじもじとした感じで話す。

「だから。傍にいて欲しいだけだから」

「どうせなら私達から言うのにね」

「そうよね。星華ちゃん照れて仕方ないんだったら」

「それじゃあね」

「だからそれ位は自分で言うわよ」

また言う星華だった。

「私もそれ位の勇氣はあるから」

「偉いつ、よく言った」

橋口は彼女の今の言葉ににこりと笑ってみせた。

「その意気よ」

「それでこそね」

「私達だってね」

州脇と野上も橋口に続く。

「助太刀のしがいがあるわ」

「じゃあ傍にね」

「ええ、いて」

星華は穏やかな笑みになって三人に返した。

「御願いますわね」

「文化祭楽しみになってきたわね」

「確かにね」

「何かとね」

「ここでこんなことも言う三人だった。そうしてだ。」

「お化け屋敷も頑張ろう」

「そうね。もうやることは決まってるし」

「準備は一気にやってね」

「あの段取りだとね」

星華は真面目な顔になって文化祭のことを話した。それまでの照れて真っ赤になってしまっている顔はもう何処にもなかった。

「もうすぐに終わるわ」

「男を何人とか女を何人とかそこまで決めてるしね。その場所について」

「そこまで決めてるしね」

「後はするだけだからね」

椎名はそこまで一瞬で考えて段取りをしているのである。この辺りがやはりである。美少女軍師、それもまさに天才であった。

第二十話 準備の中でその九

「あいつがいるけれどね」

「あいつ動くかしら」

「動かないんじゃないの？」

三人はここでじっと、であった。今日も教室に来た椎名と話す月美を見た。彼女は椎名と楽しげに話をしている最中だった。

三人だけでなく星華も見ている。そのうえで言うのであった。

「ねえ」

「うん、何？」

「どうしたの？」

「あいつ全然動かないでしょうし」

決め付けであった。だが彼女の中ではそうとしか見えないし思えないものだった。

「文化祭の時はね」

「うん、どうするの？」

「それで」

「何かするの？」

「受付あいつにやらせようよ」

目を怒らせての言葉であった。

「あいつにね」

「ああ、その日位は働いてもらわないとね」

「そうそう、いつも男に色目ばかり使ってるからね」

「それが仕事じゃないから」

三人も忌々しげに星華の言葉に続く。

「それはやらせよう」

「絶対にね」

「そうしてやりましょうよ」

「勿論よ」

また言う星華だった。

「たまには働きなさいっての」

「そうそう」

「融通利かないしね」

「動き遅いし」

「鈍いし」

三人も彼女に続く。

「それでお勉強はできるしね」

「ガリ勉でね」

「何か余計に嫌な奴よね」

「もう楽々この学校に入ったらしいけれど」

星華にとつてはこのことも忌々しかった。

「私なんかもう必死で受験勉強したのに」

「星華ちゃんもそうだったの」

「私もよ」

「私も」

これは三人もであった。彼女達も学校の成績はあまりよくはないのだ。そうした意味でも星華と同じなのである。だからこそであった。

四人はよく一緒にいる。まさに類は友を呼ぶだった。

その四人がだ。あらためて話す。

「それでね」

「そうね」

「それでなんだけれど」

「今度は何？」

星華はその四人の言葉を聞いた。

「文化祭のこと？」

「女の子もお店の中で出るらしいけれど」

「私何かな」

「そうよね、化け猫とか？」

「幽霊とかかな」

「あつ、それね」

それを聞くとだった。星華も笑顔で言うのだった。

「それじゃあだけれどね」

「星華ちゃんは何がいいの？」

「何したいの？それで」

「どの役？」

「雪女か幽霊かしら」

にこりと笑つての言葉だった。

「それがいいかしら」

「あつ、雪女いいんじゃない？」

「そうよね。星華ちゃん和服似合いそうだし」

「だったらね」

「そうよね。それ考えたら」

ここであった。星華は少し残念な顔になった。そのうえで話すのだった。

「失敗だったかしら」

「失敗つて？」

「何がなの？」

「うっん、浴衣よ」

話すのはこのことだった。

第二十話 準備の中でその十

「浴衣。夏に着たらよかったかしら」

「そうよね。浴衣ね」

「お祭りに行った時にね」

「着ればよかったよね」

「それ、失敗だったかも」

「こう言うのであった。」

「やっぱり」

「まあね。彼氏に見せたらね」

「浴衣も効果あるしね」

「そうそう」

どうして浴衣なのかはだ。三人もわかっていて。服は誰かに見せる為という部分の比重も高い。浴衣等は特にそうだからだ。

それだった。彼等は話すのであった。

「その彼氏にね」

「見せるべきだったわね」

「そうよね」

「失敗したかしら」

またこう言う星華だった。実際に残念な顔になっている。

「ううん、悔やまれるわね」

「まあまあ。文化祭があるから」

「そこで取り戻せばいいじゃない」

「そうしよう」

「そうね」

星華は三人の言葉に励まされそのうえで頷いた。

「それじゃあ。文化祭でね」

「気合入れていこうね」

「余計にね」

「もう一気に行く勢いで」

「わかったわ。本当にこの文化祭は」

「星華は意を決した顔になった。そうしてであった。

「勝負になるわね」

「よし、じゃあこの文化祭星華ちゃんは」

「想い人を見事ゲットして」

「最高の文化祭にするっ」と

「ちよつと、言わないでよ」

「言われると困る彼女だった。顔を赤くさせる。

「それは」

「あはは、御免ね」

「許してね」

「星華はここで意を決したのだった。そうしてであった。

「文化祭の前の最後の部活を終えた。そしてその帰りだ。

「ふう、これで暫く終わりね」

「そうね」

「これでね」

「部活の後の掃除をしながらだ。それで女子バスケット部の中で話をし

「ていた。コートにモップをかけてそれで掃除にしているのだ。

「後は。文化祭かあ」

「泊まりになるけれど」

「この学校にね」

「どんなのかしらね」

「そうね」

「こう話しながら掃除をしてであった。

「はじめてだからわからないけれど」

「教室で皆寝るんでしょう？」

「そうそう、男子も女子もね」

「何か凄いことになりそうね」

「変なことする奴いないかしら」

このことを心配する娘もいた。

「寝てる間に襲って来たりとか」

「そんな奴いたら許さないわよ」

「私もよ」

「私も」

彼女達は次々に強い言葉を出す。

「ひっばたいてやるから、そんな奴」

「ぎったんぎったんにしてね」

「もう足腰立たないまですてね」

「思い知らせてやればいいのよ」

「そうそう」

「そうよね」

ここで星華も頷くのだった。

「そんな奴はね」

「星華気が強いからそういう奴許さないでしょ」

「そつでしょ」

「勿論よ」

さも当然といった口調であった。

第二十話 準備の中でその十一

「その時はね」

「流石よね、そこは」

「頼りにしてるわよ」

「そうした相手にもね」

「それによ」

星華はここでさらに言うのであった。

「文化祭って色々な学校からも来るけれど」

「そうよね、結構他からも来るみたいよね」

「文化祭の時期って重なるしね」

「この辺りって学校集まってるし」

そうした事情もあった。そうしたこと踏まえて話をする彼女達だった。

「大抵は普通の学校だけけどね」

「中にはとんでもない学校もあるし」

「そういえばよ」

野上が顔を顰めさせて話してきた。

「何処だったつけ。どっかの高校の一年でね」

「どうしたの？」

「何か変なのいるの？」

「凄い乱暴な奴がいるらしいのよ」

州脇と橋口、そして星華に対して顔を顰めさせて話す。

「もうね。何かあると暴力沙汰を起こしてね」

「うわ、最悪」

「そんな奴がいるの」

「女の子と見たら襲い掛かる様な奴なんだって」

こう話すのであった。

「そんな奴がいるんだって」

「最悪ね」

星華は野上のその話を眉を顰めさせて述べた。

「そんなのがうろろしてるの？この辺りに」

「そうみたい。確か名前はね」

「ええ、名前は？」

「何ていうの？」

「それでどの高校？」

星華達は三人で顔をぐい、と前にやってそのうえで野上の話を聞く。自分達の身の安全の為にもだ。聞かずにはいられなかった。

「どの高校にいるのよ」

「それでよ」

「何処なの？」

「ええと、確かね」

野上は視線を上にしてやってその名前を思い出して話した。

「三山高校の堀内って奴？」

「堀内？」

「堀内っていうの」

「三山高校って神戸でも有名な不良学校だけれどね」

高校にはどうしてもそうした高校が存在する。ランクというものがどうしてもできて不良が集まる高校も出て来るからである。

「あそこでも特になのよ」

「そんなに酷い奴なのね」

「その堀内って」

「そうなのよ。だからね」

野上は警戒する顔になって三人に話す。

「その堀内には気をつけて」

「ええ、わかったわ」

「高校と名前覚えたら」

州脇と橋口が野上の言葉に頷く。

「三山高校の堀内ね」

「そいつね」

「そんなやばいのが学校に来たら」

星華も顔を顰めさせて話す。

「ちよっと考えないとね」

「その場合先生呼ぶ？」

「それが強い子」

「うちのクラスにもいるし」

三人は星華に続いて話す。

「柔道部も空手部もいるしね」

「プロレス研究会に相撲部にね」

「拳法部もね」

「こういう時格闘系の部活あると便利ね」

星華はしみじみとした口調で話した。

「本当にね」

「そうよね。いざっていう時にね」

「活躍してくれるしね」

「確かにね」

三人もその通りだと頷くのだった。

「とにかく。名前は覚えたから」

「三山高校の堀内」

「そいつね」

星華に州脇、橋口はここでまたその男のことを話した。

第二十話 準備の中でその十二

「どうしようもない乱暴者で」

「何かあればすぐに暴れる」

「女の子にも襲い掛かる」

「とにかくとんでもない奴らしいから」

野上もここでまた話す。

「皆気をつけてね」

「ええ、それじゃあね」

「そいつが来たらね」

「警戒するわ」

三人もあらためて頷く。そんな話をしていた。

そしてである。いよいよ準備の時が来た。学校の何処もかしこもその準備にかかった。大忙しといった有様になっていた。

「おい、トンカチ何処だ？」

「ああ、こつちだ」

「衣装何処？」

「そつちに一杯あるわよ」

あちこちの教室でこんなやり取りが行われていた。そうしてそのうえで皆右に左に動き回って走り回っていたのである。

一年三組でもだ。椎名が見せの見取り図を手に皆に話していた。

彼女はクラスの中央にいてそこから全体を見回しているのだ。

「ええと、大石と新井はそこね」

「ああ」

「トンカチ打ってるからよ」

「わかった」

二人の男子の言葉に頷く椎名だった。

「じゃあそこ御願い」

「ああ、わかった」

「それじゃあな」

「それで栗橋と羽田は」

今度は二人の女子だった。

「テーブルをね」

「こつちに置いていくわね」

「それでいいのよね」

「うん」

二人の言葉にこくりと頷く。

「そこで御願い」

「よし、じゃあね」

「ここに置いていってね」

二人は椎名の言葉に頷くそのテーブルを一旦教室の端に置いていく。そして椎名自身もかなり積極的に動き回っていたのだった。

ふと窓のところに行つてだ。椅子に乗って拭いたうえで飾りをつけていく。その動きが実に速い。

そのうえでだ。動きながらまた指示を出す。

「中村と磯部はそこでね」

「よし来た」

「それじゃあな」

「窓の飾りを御願い」

自分もそれをしながらの言葉である。

「それで赤瀬は」

「うん」

学級委員の赤瀬にも声をかける。彼はその大柄な身体と怪力を生かしてだ。それを有効に使って荷物を運んでいた。しかも動きが速い。

その彼に声をかけてであった。言つのだった。

「そのまま」

「そのまま？」

「そう、そのまま」

「こう告げるのだった。」

「荷物をどんだん運んでいった」

「それでいいんだ」

「何を何処に運ぶかはわかっているよね」

「勿論だよ」

それはその通りだと返す赤瀬だった。

「それじゃあこのままだね」

「そういうこと。それと」

「それと？」

「赤瀬はこれでいい」

彼はだというのだ。

椎名は赤瀬に話を終えるとだった。すぐに携帯を取り出した。そうしてそのうえでだ。ある人間に対して連絡を入れたのであった。

「狭山」

「おっ、椎名か」

狭山の声だった。彼の携帯に電話をかけたのである。

第二十話 準備の中でその十三

「買出しは」

「ああ、順調だぜ」

「椎名のお店からよね」

「そうだけ。今そこにいるんだけれどな」

「どれ位ある？」

椎名はまた狭山に問うた。

「それで」

「どれ位ってか」

「そう。どれ位」

また問う椎名だった。

「どれ位あったの」

「椎名が言った分だけはあったぜ」

「そうなの」

「材料全部な」

それだけあったというのである。

「あったぜ」

「じゃあ後はそれをクラスに戻って来るだけ」

椎名はぼつりと話した。

「ただし。どれも割ったり落としたりしないでね」

「ああ、わかってるさ」

「狭山はこの場合あまりあてにならない」

ところが椎名はここできつい一言を出したのだった。

「津島と齊宮に任せる」

「ちえっ、俺信頼ねえなあ」

「信頼はしている」

それはだというのだ。

「信頼は」

「じゃあ何でそんな言うんだよ」

「狭山はおつちよこちよいだしものもよく落とすから」

「それでかよ」

「そういうこと」

こう話してだった。また狭山に話す。

「わかったわね」

「わかったよ。けれども何か信頼されてねえ気分だな」

「信頼しているからこう言う」

「そうなのか？」

「できることとできないことがある」

だからだというのである。

「そういうこと」

「そうか。じゃあな」

「そう。持って来て」

「わかったよ。じゃあな」

こうしてであった。狭山達とのことを確認してだった。この話は終わった。そして四組ではだ。月美が椎名の呟きのままに動いてだ。準備を順調に進めていた。

「このままだったらいけるよな」

「ああ、いけるな」

「もう開始の頃にはね」

「準備全部いけるし」

「そうそう」

「それに」

四組の面々は月美の指示や行動に満足していた。そのうえで彼女を見てだ。見直す顔をしていた。

「西堀つて案外やる？」

「そうよね。ただいるだけのクラス委員って思ってたけれど」

「しっかりしているし」

「機転も利くしね」

「案外いける？」

「確かにな」

そしてこうした声は星華達の耳にも入る。彼女達も月美の指示に従いだ。そのうえでクラスの準備にかかっていたのである。

しかしだ。ここで彼女は言うのだった。

「何かね」

「そうよね、何かね」

「あまり面白くないわよね」

「そうよね」

彼女の言葉にだ。橋口達三人が頷く。四人でだった。

「あいつあんなにときばきと動いて」

「いつものあいつと違うじゃない」

「何か違うわよね」

三人が言う。

「折角今回あたふたするって思ってたのに」

「何よ、ときばきして」

「思惑外れたし」

「まあいいわ」

星華はここで釈然としないながらも頷いたのだった。

「準備は順調だしね」

「それならそれでいいの」

「そうなの？」

「文化祭優先なの」

「何だかんだでお化け屋敷は大事だしね」

「だからだというのである。」

「それでいいわ」

「そう。星華ちゃんが言うんならね」

「それでいいけれどね」

「私達もね」

三人もそれでいいというのだった。そうしてだ。

そのまま作業を続ける。しかし星華はここで言った。

「見てなさいよ」

忌々しい顔で呟く。

「この文化祭の間にぎゃふんと言わせてやるから」

こう話してだった。その機会を探っていた。彼女はである。今本来の姿から離れたしていた。そしてそれには自分では気付いていなかった。

第二十話 完

2010・9・8

第二十一話 見てしまったものその一

見てしまったもの

どのクラスも泊りがけだった。夜まで準備をしてだ。その夜はだ。

「コンビニあつてよかったよな」

「そうだよな」

「ポットもな」

皆コンビニ弁当やパン、若しくはカップラーメンといったものを食べている。それを夜食としてそのうえでそれぞれ集まって話をしている。

「そういうのがないとな」

「泊まりつてな」

「ああ。難しいよな」

「学校じゃな」

こんな話をしながら食べて話をしていた。そして。

見ればだ。彼等が口に行っているのは他にもあった。それは。

「で、これな」

「サイダーな」

「流石に酒はまずいからな」

「いいよな」

こう話してだった。そうしたものを飲んでいた。

その他にはコーラもある。それもだ。

「コーラもあるしな」

「まあこういうの飲むのもいいよな」

「酒がないのは残念だけれどな」

「それは言わない約束でな」

「やっぱりな」

こんな話をしながら飲み食いをしていた。そうしてだ。椎名もその中にいてだ。赤瀬に言っていた。

「ねえ」

「何？」

「その量でいける？」

自分の傍で食べている彼を見ながらの言葉だった。

「それだけで」

「それだけって言うけれど」

見れた。彼の食べている量はだ。

「食パン三斤だけけれど」

「それとおかずもあるわよね」

「うん、フライドチキン」

まずはそれだった。

「それとサラダね」

「それだけあればいける？」

「いけるよ」

こう椎名に答えていた。

「だから安心して」

「わかった。それじゃあ」

「これでいけるから」

そうしてその食パンを食べていく。それを見ながらだ。椎名は言
った。

「食べ物はまだあるから」

「あるんだ」

「そう、かなりある」

あるというのである。

「足りなくなっても安心して」

「悪いね、いつも」

「気にしなくていい」

いつものぼつりとした調子で話す。

「全然」

「そういえば椎名さんは」

「これ」

言いながら赤瀬に今自分が手に持っているそのお握りを魅せる。それはだった。海苔に包まれていて黒光を見せているのだった。

「これがあるから」

「お握り好きだよね」

「うん、好き」

また答える椎名だった。

「パンも好きだけれどお握りはもっと好き」

「そうだよね。椎名さんってやっぱりお握りだよね」

「お握りは神様の恵みもの」

椎名は言った。

第二十一話 見てしまったものその二

「お米には大勢の神様がいるから」

「パンには？」

「多分いる」

「パンは多分なんだ」

「そう、多分」

多分だというのであった。

「いる」

「麦はわからないんだ」

「そう、神様はありとあらゆるものにいる」

「よく言われるよね」

「だからパンにもいる」

椎名はこう主張する。

「そういうことだから」

「うん、それでも椎名さんはお米なんだ」

「特にお握り」

「お握りは僕も好きだけれどね」

「今は食べてない」

「あれなんだよ。お握りって僕には小さ過ぎて」

相変わらぬの身体の大きさである。小柄な椎名と比べるとだった。赤瀬の巨大さはさらに引き立っていた。そこまで巨大な彼であった。

「だからね」

「それじゃあ爆弾持って来るから」

「爆弾？」

「明日のお昼楽しみにしておいて」
彼女は言った。

「その時を」

「うん、それじゃあね」

「じゃあ」

二人はこんな話をしていた周りでも皆それぞれ食べている。そしてであった。

陽太郎はだ。かなり疲れた顔で椎名の傍にいた。そうしてであった。

「疲れたな、今日は」

「ああ」

「そうよね」

一緒にいる狭山と津島も彼の言葉に頷く。

「今までずっとだったからな」

「働き詰めだったしね」

「だからだよ」

陽太郎はこう言いながらハンバーガーを口にしている。

「いや、疲れたよ」

「じゃあ食った後はな」

「シャワーを浴びてよね」

「ああ」

二人の言葉に頷く。

「寝るか」

「そうするか」

「それじゃあね」

「待って」

しかしだった。ここで椎名が彼等に言ってきた。

「寝る前に」

「おっ、何だ？」

「何かあるの？」

「二人は適当にやっておいて」

狭山と津島にはこう言うだけだった。

「勝手にしていいから」

「じゃああれか」

「斉宮なのね」

「そう」

まさにその通りだというのである。

「斉宮だけれど」

「ああ」

「御飯食べたら一時間待つてるから」

時間を指定してきた。

「三十分でシャワーと歯磨き終えて」

「三十分かよ」

「できるわよね」

「まあな」

椎名の言葉にすぐに答える。

「それはな」

「じゃあ。待つてるから」

「場所は？」

「屋上」

そこだというのである。

「そこにいるから」

「何で屋上なんだよ」

「それも来ればわかる」

「相変わらず秘密主義なんだな」

「秘密主義の方が面白いから」

それが理由だというのが実に椎名らしい言葉だった。

「そういうことだから」

「それでか」

「そういうことだから」

そしてであった。椎名は教室をすっとなあつと出る。

第二十一話 見てしまったものその三

「私も」

「シャワーかよ」

「身体は清潔にするもの」

椎名はぼつりと言った。

「特に女の子は」

「いや、そりゃ男もだろ」

「そう。けれど女の子の匂いはきついから」

「そうなのか？」

「試しに女子更衣室の前を通ればいい」

こんなことを言うのであった。

「するとわかるから」

「そんな場所の前通ったら変態って怪しまれるだろ」

「それでも通ればわかる」

「そんなに凄いのかよ」

「甘い腐った匂いがする」

その匂いはだ。そうした匂いだという。

「それはまさに毒の花」

「毒かよ」

「だから毎日シャワーを浴びるかお風呂に入る」

「女の子も大変なんだな」

「それがわかるのとわからないのとで男が変わる」

椎名はぼつりとした口調でかなり大事なことを話した。

「そういうことだから」

「そうなのか」

「そういうことじゃあ。三十分」

「ああ、わかった」

椎名のその言葉に頷いてだった。陽太郎はバスタオルやボディ―

ソープ、それに替えのトランクス等を持ってシャワールームに向かった。

そこで身体を洗い着替えて歯を磨いてだ。そのうえで屋上に向かった。

「三十分か。丁度だな」

左手の腕時計を見ながら屋上への階段を登る。屋上への階段は暗い。学校の廊下全体が暗く教室からの灯りが目の頼りになっている。その階段を登って屋上に出るとだ。そこには。椎名はいなかった。そのかわりに彼女がいた。

「あっ……」

「月美？」

「は、はい」

月美は戸惑った調子で陽太郎に伝えてきた。じっと彼を見ている。

「愛ちゃんにここに来るように言われまして」

「そうだったんだ」

「シャワーを浴びて歯を磨いてからここについて」

「何だ、俺と同じか」

「同じっていいですよ」

「俺も椎名にそう言われてここにさ」

「来られたんですか」

月美は陽太郎の話聞いて言った。

「そうだったんですか」

「あいつまた仕掛けてきたな」

陽太郎はここでようやく椎名の今回の考えがわかった。

「そういうことだったのかよ」

「あの、それで」

「ああ」

「どうしましょう、これから」

少し戸惑った感じで陽太郎に問うた。

「私達」

「そつだよな。多分な」

「はい、多分」

「ここで何もしないで帰ってもな」

「駄目ですか」

「椎名怒るだろうな」

「こつ予想したのだ。」

「絶対にな」

「愛ちゃん怒りますか」

「だつてさ。俺達をここに来させたのはさ」

「はい」

「あいつの考えがあつてのことだし」

「そうですね。それは」

「だからここで何もなくて帰つても駄目だろうな」

陽太郎はここまで読んだ。そのついで月美に対して話す。

「だからさ」

「だから？」

「折角二人になつたんだし」

微笑んだ。夜の灯りの中でその微笑みが月美の目にも入った。

「暫くここにいようか」

「そうですね」

月美の微笑みも陽太郎に見えた。

第二十一話 見てしまったものその四

「もう後は寝るだけですし」

「そうだよな。ええと」

屋上を見回す。するとだった。

ベンチがあつた。プラスチックとパイプでできたベンチだ。屋上にいつも置かれているそのベンチである。

そのベンチを見てだ。陽太郎は月美に話した。

「座る？」

「あのベンチにですよね」

「ああ、あそこに座ろうか」

「こつ彼女に勧めるのだった。」

「それでどうかな」

「わかりました」

月美はまた微笑んで陽太郎に答えた。

「それじゃあ」

「それでゆつくりと話そう」

陽太郎は穏やかな声で誘う。

「二人でさ」

「はい、それじゃあ」

こつしてだった。二人は一緒に座つて話をはじめたのだった。

まずはだ。月美から話してきた。足を閉じて俯き加減で座っている。両手は膝の上だ。

「陽太郎君って」

「俺？」

陽太郎は足は少し開いてだ。手は拳にして太腿の上に置いている。

「俺なんだ」

「というか妹さんですけれど」

「ああ、あいつね」

「妹さんおられますよね」

「こっちは切り出すのだった。」

「確か」

「ああ、いるよ」

そのことを自分で認める陽太郎だった。

「それがどうかしたのかな」

「私もいますから」

月美もだというのだ。

「手のかかる妹で」

「あはは、こっちもだよ」

「そうなんですか？」

「うん、そうだよ」

笑って答える陽太郎だった。

「実際さ。妹ってそうだよな」

「そうですよね。生意気でまかせていて」

「あれっ、こっちは違うけれど」

「そうなんですか」

「生意気でもまかせてもないな」⁸

「じゃあどういふ娘ですか？」

「何ていうか。何かっていうと俺になついできて」

「こっちは月美に話すのだった。」

「それで慕ってくれてさ」

「いい娘ですか？」

「いい娘だよ、とても」

このことを自分でも認める陽太郎だった。

「それでいつも学校から帰ったらさ」

「どうされていますか？」

「相手してるよ。勉強の時以外は」

「うふふ、何か妹さん思いですね」

「俺はそんなつもりはないけれど」

「けれどそれがわかります」

月美はにこりと笑って陽太郎に話した。

「とても」

「そうかな。俺本当にそんなつもりはないけれど」

「けれどそうですよ」

「月美から見たらかい？」

「そうです。陽太郎君ってとても妹さん思いですね」

「ううん、自覚はないんだけれどな」

腕を組んでの言葉だった。そうしてそのうえで話すのであった。

実は彼はそうしたことははじめて言われたのである。誰にも言われたことはなかった。

「それでも。そうかな」

「そう思います。私の方は」

「その生意気でませているって娘？」

「そうなんです。まだ小学生なのに」

「何年なの？」

「五年です」

「ああ、こっちは一年」

それぞれの妹の学園も話すことになった。自然な流れだった。

第二十一話 見てしまったものその五

「六歳なんだ」

「こっちは十一歳です」

「女の子って十一になったらそうなるのかな」

「うちの妹は特別だと思います」

月美はその口を少し尖らせて話した。

「本当に」

「そんなにませてるんだ」

「私が陽太郎君と付き合うの知っていて」

彼のこともここで話に出してだ。そのうえでさらに話していく。

「それをいつも冷やかしてきて」

「って何でそんなの知ってるんだよ」

「あのですね、それは」

「それは？」

「私ついつい言っちゃって」

陽太郎に対して申し訳なさそうに話す。

「それで」

「妹さんに？」

「家族にです」

話は陽太郎が当初予想していたより広範囲だった。

「あの、それで」

「家族につて」

「すみません、お酒が入ってついつい言っちゃって」

「ああ、それは仕方ないよ」

「仕方ないですか」

「俺も飲むとさ」

「喋ってしまいますか」

八条町は酒については非常に寛容である。それで中学生でも二年

になれば飲める人間は大抵飲むようになる。高校生ならば当然である。

「陽太郎君」

「俺飲むとあれなんだよ」

「あれって？」

「何か黙るんだよな」

「黙り上戸なんですな」

「そうなるかな。そうなんだよ」

「そうだよ。月美に話す。」

「実はさ」

「私はついつい喋ってしまって」

「喋り上戸な」

「お父さんやお母さんは笑ってくれますけれど」

「親父さんやお袋さんも知ってるんだ」

「はいっ」

「ここではにこりと笑う月美だった。」

「その通りですよ」

「それってまずくない？」

「まずいですか？」

「だって親父さんやお袋さんも知ってるんだよな」

「そうですね」

「それってやっぱりまずいよな」

陽太郎はいささか深刻な顔になって述べた。

「御両親に知られてるって」

「けれど別に隠すことはありませんよ」

「いや、そうじゃなくてさ」

「何かよくないんですか？」

「よくないってどうかその」

「その？」

「やっぱりまずいじゃないか」

月美にどう答えていいかわからずだ。八方破れを感じて返した。

「あのさ、そこまで知られてるってさ」

「ただお付き合ひして何回かデートしたことを話しただけですよ」

「それだけ？」

「全部ありのまま。ほら」

今度は月美の方から話す。驚き狼狽する陽太郎の顔を見てだ。そのうえでそれがどうしてかわからずその大きな目をぱちくりとさせている。

「お家の前まで送ってくれたことも」

「それもなんですか」

「はい、それもですけど」

「うっん、そうだったんだ」

「私達何も悪いこととかしていませんよ」

「そうだけれどさ」

それを聞いてもだった。まだ言う陽太郎であった。

第二十一話 見てしまったものその六

「それでも。恥ずかしいから」

「私達のことを知られるのがですか」

「そうだよ、それがだよ」

まさにそれであつた。

「どうにもさ」

「そうなんですか」

「だからこつちの親父にもお袋にも言つてないけれど」

「言つてもいいと思いますよ」

「どうもさ。それはさ」

そう言われてもだつた。それはどうしても恥ずかしい陽太郎であつた。それで口をくぐもらせてしまつていふのだ。

「それは？」

「いや、言いくいつていふかな」

陽太郎は口ごもりながらさらに話す。

「あれだよ」

「あれつて」

「付き合つてる人の家に行くのはさ」

「行きにくいんですか」

「どうしてもな。俺が勇気がないだけだけれど」

「それでもですよ」

その陽太郎にだ。月美が話すのであつた。

「若し結婚とかになったらですよ」

「おいおい、結婚なんだ」

「はい？」

「それつて。あのさ」

「だつて。交際したらですよ」

「結婚までなんだ」

「はい、宜しく御願います」

あくまで天然な、悪気がないままで話す月美であった。
「ずっと」

「そうだよな。女の子は十六歳だったよな」

「男の子は十八歳ですね」

「結婚できるよな」

「はい、できますから」

「流石に高校卒業してすぐはあれだけれど」

陽太郎は大学に進むつもりだ。それは月美も同じである。八条高校はレベル的には進学校と言ってもいい立場でありそうしてだ。大学が上にある。そこに進学する者も多いのである。それで戸惑った口調になっているのだ。

「それでもさ」

「それでも？」

「大学を卒業して。就職して」

「はい」

「その時になったら」

「はい、御願います」

「わかったさ」

流れに従ってだったがそれでもだった。陽太郎の声は確かなものだった。

「それじゃあその時になったら」

「私も」

「いや、ひよっとして」

ここでふとこう思った陽太郎だった。

「まさかと思うけれどさ」

「何ですか？」

「月美の家に行くのってその時だけじゃなくて」

「何時でもですよ」

やはり天然のまま話す月美だった。こうしたことには疎い彼女だ

った。

「来て下さいね」

「ううん、そう来るか」

「それで私も」

「ああ、その時になったらさ」

「はい、その時ですね」

「家に呼ばせてもらうさ」

彼女を自分の家に呼ぶことは怖じ気付いていたのだ。こうしたところは奥手というべきだった。陽太郎自身の言葉では勇気がないのだった。

「それでいいよな」

「はい、それじゃあ」

「じゃあさ」

陽太郎は話を終えて上を見上げた。夜空には月がある。半月になっていた。

「暫く月を見てさ」

「見ますか」

「うん、それから帰ろうか」

「そうですね。それからですね」

また話してであった。二人は月を見続けていた。それを暫くやってからその場を後にするのであった。

第二十一話 見てしまったものその七

階段が終わったところで別れる。その時だった。

「あれ？」

「あれって？」

「どうしたの？」

橋口達三人は寝る前にトイレに行っていた。そこでだった。

月美を見たのである。その陽太郎と別れる月美をだ。それを見て

橋口が言った。

「ほら、西堀だけれど」

「ええ、そうよね」

「暫く見えないと思っていたら」

州脇と野上も見た。見れば確かにそこに月美がいた、

「何か話してるわね」

「そうね。その相手は」

「あれ誰？」

「男子じゃないの？」

「そうよね」

橋口はあらためて二人に話した。

「あれって一体」

「三組のあれよね」

「そうよね、その星華ちゃんのこと？」

「同じ中学校だった？」

「このことに気付いたのだった。」

「ほら、あの斉宮よね」

「斉宮陽太郎」

「あいつよね」

「確かにね」

こう話してであった。そのうえで三人で頷き合う。そうしてであ

った。

あらためて見てだ。三人はまた話すのだった。

「暫く二人で話してたのよね」

「そうよね」

「夜に二人きりでね」

「それってまさか」

「そのまさか？」

「やっぱり」

ひそひそと話しているうちに顔を曇らせていく。そしてであった。

「付き合ってるのよね」

「間違いないわね」

「そうとしか考えられないよね」

三人でこの結論に達した。そしてであった。

苦い顔になってだ。一旦トイレに向かった。そこで密談に入った。

「ねえ、どうする？」

「このことどうする？」

「星華ちゃんに話す？」

「そうする？」

「やっぱりね」

「話さないかね」

「このことってね」

この結論に至った。何故ならだ。

「星華ちゃん齊宮のこと好きだしね」

「あいつのことね」

「だったらね」

「もうね。そうしないかね」

「じゃあ言おう」

そしてであった。

「星華ちゃんと齊宮ちゃんくっつけてあげないかね」

「何よ、西堀なんか」

「あんな奴に取られてたまるかっていうのよ」
「全くよ」

こう話してであった。三人はトイレを後にした。そしてその星華に話そうとした。

しかしである。その星華はだ。

「寝てるの」

「じゃあ仕方ないわよね」

「そうよね」

寝ている彼女を見て残念な顔になる三人だった。

「それじゃあ」

「私達も寝る？」

「明日また作業があるし」

それはまだあるのだった。

「それじゃあね」

「寝よう」

「うん、寝よう」

こう話してそのうえでそれぞれの寝袋に入るのだった。そうして寝て次の日の朝にだ。星華に対して朝食を食べながら昨日のあのことを話した。

話を聞いてだ。星華はまだ寝ていた顔を起こしたのだった。

「えっ、嘘……」

「嘘じゃないのよ」

「これがね」

三人は真剣な顔で否定しようとする彼女に返した。

第二十一話 見てしまったものその八

「私達見たし」

「それも全員よ」

「三人共よ」

「それによ」

特に州脇が言うのであった。

「私達嘘ついたことないでしょ」

「ええ」

星華もそれはわかっていて。三人は嘘は言わないのだ。

「それじゃあやっぱり」

「そうよ。本当にね」

「西堀の奴彼と付き合ってるから」

「斉宮とね」

「間違いないから」

「わかったわ」

星華もここで遂に頷いたのだった。

「それじゃあ」

「ねえ、それでどうするの?」

「ここは」

「一体どうするの?」

「それは決まってるわ」

星華は意を決した顔になって述べた。

「もうね」

「決まってるっていったら」

「やっぱり仕掛けるのね」

「そうなのね」

「ええ、斉宮にね」

彼にだというのである。

「仕掛けるから」

「よし、それならよ」

「私達も協力するから」

「頑張ってね」

「ええ、もう決めたしね」

だからだという星華だった。

「それはね。こうなったら絶対によ」

「ゲットね」

「彼氏ゲットよね」

「そうよ。それで相手は」

言うまでもないことだったがあえて言ってみせた。それは周りにはなく自分自身への誓いだった。誓って己を奮い立たせる為のことだった。

「もうね」

「ええ、文化祭の日だね」

「仕掛けましょう」

「私達も協力するから」

「有り難う」

星華は三人の友情に素直に感謝した。

「それじゃあね。やるから」

「ええ、それじゃあね」

「やってやりましょうよ」

「本当にね」

「決めるわ」

また言った星華だった。

「西堀になんか負けてたまるものですか」

「そうよね。あんな天然を装ってる女」

「胸が大きくてちよつと顔がいいからってね」

「そうそう。お高く止まってね」

三人も星華も月美を完全に誤解していた。四人共彼女とこれとい

つておおく話したことはない。だからよくは知らないことだったのである。

それでだ。よく知らないままだ。また話すのだった。

星華はその朝御飯のコンビニのお握りを食べながら周囲を見回した。周りにはクラスの皆がいる。しかし彼女が探しているその相手はというと。

「いないわね」

「そうね」

「何処に行ったのかしら」

「まさかあいつのところ？」

ここで三人はこう考えた。

「夜に続いて朝もね」

「有り得るわね、それ」

「そうよね」

そしてだ。その話を聞いた星華もだった。

目を怒らせてだ。立ち上がるうとした。

「ちよっど行って来るわ」

「何処に？」

「何処に行くの？」

「あいつ探してくるわ」

そのあいつが誰なのかももう言うまでもなかった。

「ちよっどね」

「行くの？今から」

「そうするの？」

「ええ、そうするわ」

こう三人にも返す。もう完全に立ち上がっている。

第二十一話 見てしまったものその九

「ちよつと今からね」

「わかつたわ。それじゃあね」

「私達も一緒にね」

「行くわ」

三人はそれぞれ今食べているパンやお握りを急いでかき込みながらだ。あらためて星華に対して言うのであった。星華はもう食べ終えている。

「少し待ってね」

「今終わるからね」

「ちよつとだけね」

「ええ、わかつたわ」

星華もお茶を一口飲んでから答えた。ペットボトルのお茶である。

「それじゃあね」

「少し待ってくれたらいいからね」

「ちよつとだけね」

「御願いな」

「わかつてるわ。今度も有り難うね」

星華は立ち上がったまま座ったままで急いで食べている三人に話した。

「一緒につて」

「いいつていいつて」

「友達じゃない」

「そうそう」

「それじゃあ」

三人の言葉を受けてだ。星華はさらに言った。

「文化祭がはじまったら本当に」

「アタックよね」

「それよね」

「仕掛けるわよね」

「ええ、決めたわ」

完全に意を決した顔であった。

「その時にね」

「ええ、それじゃあね」

「やってやりましょう」

「あんな奴一気に出し抜いてね」

「見てなさいよ」

月美がいた場所を見る。彼女は今はいない。朝御飯も陽太郎や椎名達と食べているのである。だから教室にはいないのである。

しかしいた場所に彼女を見てだ。そのうえでなのだった。

「この文化祭で決めてやるから」

こう言うのであった。しかし当然ながら月美はそんなことは全く知らずにだ。朝御飯を椎名達と一緒に食べていたのであった。

「朝はパンよね」

「そうか？」

狭山が津島に対して言い返す。

「俺はやっぱりな」

「御飯だつていうの？」

「やっぱりそれだよ」

これが彼の主張だった。見ればだ。

「このお握りだろ」

「お握りなのね」

「そうだろ、朝はやっぱり御飯だろ」

そう言いながらそのお握りを食べている。その中には。

「しかも梅干だよ」

「凄い古典的なお握りね」

「けれどそれが一番美味いんだよ」

こう言うのである。

「梅干のお握りがな」
「そういえばあんた梅干好きよね」
「ああ、大好きだぜ」
ただ好きだというのだけではなかった。その上にだった。こうした言葉までついていた。
「あつさりしてて美味しいな」
「それでなの」
「しかも梅干って身体にいいんだぜ」
味だけではないというのだ。
「疲労回復にも効くし口の臭いだって消してくれるしな」
「それでお酒の肴にもなの」
「上杉謙信だつてそうしてたぜ」
朝から戦国大名の名前であった。それも軍神とまで言われた男だ。
「梅干でお酒をだな」
「あんたもそうしてるわね」
「そういう御前はサンドイッチだよな」
「ワインに合うわよ」
それでサンドイッチだという津島だった。

第二十一話 見てしまったものその十

「一回やってみたらいいわ」

「そうか。じゃあ一回やってみつか」

「あれっ、案外素直なのね」

「お酒だったら何でもいけるしな」

実は酒好きの狭山だった。

「確かに朝は御飯だけれどな」

「パンも食べるしね」

「食べるさ。それじゃあな」

「ええ、それで？」

「パンは昼な」

パンについてもしつかりと言う。

「その時に食べるからな」

「そう。私お昼は御飯食べるつもりだけれど」

「パン屋の娘でもか」

「そうよ。私お米も好きだしね」

「そついや御前も何でも食べるよな」

「何でも残さず食べる」

お父さんやお母さんが聞けば手放して喜びそうな言葉である。食べ物粗末にすることはやはり悪いことなのである。それは津島も同じだった。

「そついうことよ」

「そつか。そつだよな」

「そついうことよ」

「そつ。食べ物を残したら駄目」

ここで椎名が言う。見ればいつもの面々が全員揃っている。そしていつもの校庭の木の下で車座になって食べているのであった。

「絶対に」

「そうだよな。椎名いいこと言うよな」

陽太郎はお握りを食べながら椎名に対して言う。

「俺もそう思うよ」

「その通り。ところで斉宮」

「何だよ」

「そのお握り美味しい？」

「こっぴくに問うのだった。」

「それで」

「ああ、美味いぜ」

「食べながら率直に答える陽太郎だった。」

「俺このお握りが好きなんだよ」

「そうなの」

「けれど何でそんなの聞くんだ？」

「それ麦入ってるわよね」

「ああ」

見ればだ。そのお握りには麦が入っていた。コンビニで売っている麦飯のお握りなのである。

「そうだけれどな」

「斉宮って麦飯も好きだったの」

「好きだぜ」

「実際にそうだと答える陽太郎だった。」

「けれどそれがおかしいのか？」

「うっん、いいこと」

「いいことなのか」

「そう、いいこと」

「悪いということはないというのだ。」

「麦が入った御飯はいい」

「質素だからか？」

「違う。身体にいいから」

「それが椎名がいいと言う理由であった。」

「だから」

「俺美味いから食ってるんだけれどな」

「麦飯食べてたら脚気にならない」

「おい、脚気かよ」

陽太郎は脚気と聞いて眉を顰めさせた。

「今時脚気になる奴はいないだろ」

「油断してたらなるから」

「いや、だから今は普通にパンとか食べるからだろ」

脚気がどうしてなるか。ビタミンB₁が不足することによってなる。陽太郎はこのことを言うのだった。実際に昔の我が国ではそれでかなり大変だった。

「麦飯を食べなくてもな」

「そうだけれど脚気以外にもいいから」

「そうなのか」

「もつといいのは十六穀御飯」

椎名はこれも話に出すのだった。

「それはもつといい」

「健康志向なんだな」

「美味しくて身体もいい」

椎名は言った。

第二十一話 見てしまったものその十一

「そして身体も作ってくれる」

「成程な」

「私もいつも食べてる」

椎名はこつも話した。

「どれも」

「どれも？」

「そう、どれも」

そつだというのだ。

「麦飯も十六穀も」

「僕にも御馳走してくれるしね」

赤瀬もここで言ってきた。

「色々な身体にいい食べ物だね」

「赤瀬にはいいかもな」

陽太郎はその麦飯のお握りを食べながら述べた。

「柔道やってるしな」

「うん、椎名さんいつも考えてくれるから」

「名軍師だけでなく名トレーナーでもあるのか」

「それは違う」

椎名は陽太郎の今の言葉はすぐに否定した。

「言葉が抜けてる」

「美少女がかよ」

「そこ、強調して言って」

顔にも言葉にも表情はない。しかしそれでもだ。口調はしっかりとしていた。

「絶対に」

「相変わらずそこにこだわるな」

「女の子だから」

だからだという椎名だった。

「美容にも気を使ってるし」

「そうなのか」

「美はいいもの」

椎名は一言で言った。

「だから」

「それでか」

「メイクもしてる」

椎名はこのことも話した。

「実は」

「えっ、そうなのか」

それを聞いてだ。驚いた顔になる陽太郎だった。

「全然そうは見えないけれどな」

「ナチュラルメイク」

本人の言葉ではそれであるというのだ。

「それをしてるから」

「ナチュラルメイクなのか」

「そう」

その通りだというのだ。

「女の子は皆してるから」

「私もよ」

津島がにこりと笑って陽太郎にこのことを話してきた。

「実はね」

「そうだったのか」

「そうなのよ。皆今日も朝早く起きてね」

「メイクしたのか」

「ええ。勿論つきぴーもね」

これまで静かにしていた月美のことも話した。当然彼女もここに
いる。

「一緒におトイレでね。メイクしたによ」

「そうだったのか」

「女の子って大変なのよ」

津島は腕を組んで少しむくれたような顔になって述べた。

「メイクもしないといけないし」

「それだけじゃないんだな」

「服だって気を使わないといけないし。髪型だってアクセサリーだ
って」

「多いな、おい」

「そうよ。女の子は何から何までそうなのよ」

「そうだというのである。」

「つきぴーだってそうよ」

「私は別に」

「何言ってるの、そんな綺麗な顔と髪で」

見れば月美の顔は今日も整っている。そして髪もだ。起き抜けとは思えない程さらりとして光沢を放っている。見事なロングヘアは今日もだった。

第二十一話 見てしまったものその十二

「女の子の目は誤魔化せないわよ」

「そうなんですか」

「そうよ。本当に綺麗な髪よね」

「確かに」

椎名は津島の今の言葉に頷いた。

「つきぴーの髪はとても綺麗」

「そしてその髪はね」

津島はまた月美の髪を見て話す。同時に陽太郎も見ている。

「こいつのものなのね」

「いいよな、本当に」

狭山も言っ。

「そんな綺麗な娘が彼女だよ」

「こらっ、あなたには私がいるじゃない」

津島は怒った顔になって今の狭山に噛み付く。

「浮気したら承知しないわよ」

「何でそんな話になるんだよ」

「だから私達付き合ってるじゃない」

「何時の間にそうなったんだよ」

「前からよ」

津島の方が上手であった。

「決まってたのよ」

「ちえっ、何か俺ボロクソだな」

狭山はお握りを食べながら口を歪める。

「ったくよお」

「男は尻に敷かれてナンボ」

また椎名の言葉が来た。

「それが甲斐性」

「随分そつちに都合のいい甲斐性だな」

「暴力振るうと最低」

椎名はこのことも話した。所謂DVである。

「これは女もだけれど」

「いや、それは論外だろ」

「そよね」

陽太郎と津島が椎名の今の言葉に突っ込みを入れる。

「幾ら何でもな」

「暴力はね」

「けれど世の中には多いから」

椎名はポツリと事実を言う。

「そつという人間も」

「奥さんや旦那に対してだけでなく子供にもな」

「動物にもね」

二人だけでなく他の面々も考える顔になる。

「そついうどうしようもないのつてな」

「やっぱりいるわよね」

「そついう手合いは嫌い」

椎名は言った。

「本当に」

「そついう奴も来るかもな」

陽太郎はふと不安を覚えた。

「文化祭にさ」

「だよな。それで何かしたらな」

狭山もそれに応えて話す。

「あれだよな。斉宮の木刀とな」

「まずは俺か」

「それと赤瀬だな」

そして彼だった。

「頼むぜ、武道家さん達な」

「うん、わかったよ」

赤瀬は狭山のその言葉に対して返事をした。

「その時はね」

「じゃあそういうことだな」

「私もいるから」

椎名もであった。

「戦うことできる」

「御前はちよつとなあ」

だが狭山はだ。彼女の申し出には難しい顔を見せるのだった。

「困ったことになるかもな」

「何で？」

「御前容赦しねえだろ」

だからだというのだ。

「それも一切」

「そんな奴には容赦しない」

実際にそうであった。他ならぬ本人の言葉だ。

「絶対に」

「絶対になのね」

「そう、絶対に」

また言う椎名だった。

「男でも女でも急所はわかってるから」

「ほらな、どうせ喉とか脳天とか狙うんだろ」

「男なら特に」

椎名はここで言いながらにやりと笑ってみせた。

「あの急所を狙うから」

「こいつだけは敵にしたくないな」

「そうだな」

陽太郎は狭山のその言葉に頷いた。少し真剣になった顔でだ。

「半端じゃねえからな」

「全くだ」

「けれど味方にしたらね」

「はい」

月美が津島のその言葉に頷く。

「愛ちゃんにはいつも助けてもらってますから」

「味方の時は任せて」

椎名は再び笑顔を見せる。

「そういうことだから」

こんな話をしてまた作業に戻ってだ。文化祭当日になるのであった。

第二十一話 完

2010・9・17

第二十二話 文化祭その一

第二十二

話 文化祭

遂にはじまった。文化祭である。

その文化祭のはじまりにだ。椎名がクラスの皆を集めて話す。

「興国の興廢この一戦にあり」

「おい、それかよ」

「いきなり帝国海軍!？」

皆椎名のその言葉に突っ込みを入れずにはいらなかった。

「何でそれなんだよ」

「全く。どうということなのよ」

「しかもだよ」

「何、その格好」

「コスプレ研究会から借りてきた」

八条高校にあるその学校である。

「それ」

「帝国海軍の軍服か」

「つていうかそれってセーラー服じゃないのかよ」

「詰襟つてあつたの」

「これが将校の軍服」

椎名は言う。見れば帽子も水兵の帽子ではない。詰襟の実に折り目正しい軍服を着てその場に直立不動で立っているのである。

「それも海軍中将」

「中将か」

「それなの」

「そう、海軍中将」

またそれだと話すのだった。

「そうということだから」

「じゃあ大将は赤瀬か」

「そうなるか？」

「そうよね」

皆椎名が中将と聞いてそれだというのである。

「それで参謀総長」

「宜しいでしょうか」

「うん」

椎名は敬礼をしながら皆に応える。手を狭くしている海軍の敬礼である。

「皆頑張ろう」

「よし、それじゃあ」

「今からな」

「占い師付きメイド執事喫茶」

「やるか」

「そのお店の名前は違う」

ところがだった。椎名はここでクラスの一人が言った店の名前にクレームをつけた。そうしてそのうえでこう付け加えさせるのであった。

「美少女占い師が専属しているメイド執事喫茶」

「美処女かよ」

「しかも専属なの」

「専属はいいけれど美少女は絶対」

それはだというのだ。

「そういうことだから」

「我儘な奴だよな」

「全く」

「椎名っていつもそう言うよな」

「本当に」

皆椎名のそういうところには呆れた。しかし皆その顔は笑っていてそうしてである。何処か温かいものをその目に見せているのであ

った。

「じゃあとにかくな」

「頑張ろうか」

「目指せ売り上げナンバーワン」

「そして恵まれない子供達や福祉に寄付を」

「そう。間違っても」

椎名がここでまた話す。

「北朝鮮には寄付しないから」

「いや、あそこは問題外だろ」

「なあ」

「ねえ」

皆北朝鮮にはそういう考えだった。

「あそこに寄付するんだったらな」

「自分達で飲むわよ」

「そうそう」

皆で言う。

「お酒でもね」

「そっちの方がどれだけいいか」

「全くだよな」

「どうせあの將軍様か軍隊にお金がいくんだし」

「食べ物もね」

そういう国家であることはもうそれこそ高校生どころか中学生、いや小学生でも知っていることだった。何しろ現実にある東映の特撮ものの悪役だからだ。

第二十二話 文化祭その二

その国のことを考えながらだ。あらためて話をする。

「で、ちゃんとしたところに寄付をすることを決めて」

「その為によね」

「ちゃんと働いてね」

「頑張ろうか」

「いざ行けつわもの」

ここでまた言う椎名だった。

「日本人」

「日本男児じゃないか」

「それは違うんだな」

「女の子もいるから」

自分も女の子だからこそその言葉だった。

「そういうことだから」

「よし、それじゃあ皆気合入れてくか」

「日本人としてね」

「日本男児も大和撫子も」

どちらも絶えようとしているものである。しかし何だかんだで生き残っているのかも知れない。世の中美しいと思われるものは残る運命にあるのだ。

「じゃあ私は」

「御前占いだつたよな」

「そう」

椎名はここでは陽太郎の問いに答えた。

「もう服は用意している」

「まさかと思うけれどよ」

陽太郎はふとだ。眉を顰めさせて彼女に問い返した。

「その海軍中将の格好か？」

「格好いい」

「こう呟く椎名だった。」

「日本軍は最高」

「いや、その格好で占いはしないよな」

「眉を顰めさせたまま椎名に問い返す。」

「軍服と占いはちよつと以上に合わないだろ」

「秘技」

「秘技!?!」

「瞬間着替え」

「こう言つとであつた。椎名はその海軍の軍服を脱ぎ捨てた。そうしてそのうえでだ。紫の薄い頭から被り顔の部分を出した長いヴェールに薄紫のゆつたりとしたアラビア風の服になつてみせた。まさ一瞬であつた。」

「その格好でだ。椎名はまた言つた。」

「これで占いをするから」

「その格好ならいいけれどな」

「そういうことだから」

「しかし椎名つてな」

「陽太郎はここでまたいぶかしむ顔を見せた。」

「服着替えるの早いんだな」

「コツがあるから」

「瞬間的に着替えるのにコツがあるのかよ」

「そう、ある」

「椎名の言葉によればそうなのだった。」

「この通り」

「そうなのか」

「じゃあ今からはじまる」

「また言つ椎名であつた。」

「喫茶店が」

「で、俺は執事長か」

「その通り」

「ホール長は狭山だったよな」

「そういうこと」

「何か役職変わってるような気がするな」

しかし今は大した問題ではなかった。それはだった。

「まあいいか。じゃあな」

「ええ、じゃあ御願い」

「わかったよ、占い師兼マスターだったよな」

「マスターは赤瀬」

「おっと、あいつだったか」

「私はゼネラルマネージャー」

それだというのである。

「広岡達郎」

「お客さんに玄米とか野菜ものばかり出しそうだな」

陽太郎は広岡という名前には不吉なものを感じた。

「まああの人の野球に対する愛情は凄いいけれどな」

「広岡もいいけれど野村、森がいい」

椎名も何気に自分の野球の好みを話す。

「ああでないといけない」

「渋いな」

「だからヤクルトも好き」

実は三人共ヤクルトにおいて監督や指導者を務めていたことがある。そしてその時にそれぞれ優勝しているのだ。野村の時だけではないのだ。

第二十二話 文化祭その三

「阪神第一だけれど」

「そうか」

「その通り。私は野村さんと森さんを目指してる」
尊敬している対象についても話した。

「そういうことだから」

「美少女ゼネラルマネージャーか」

「その通り。頑張る」

最後にいつものブイサインを左手でしてだった。椎名も戦闘態勢に入った。喫茶店はすぐにだった。盛況となった。

「さあどうぞどうぞ」

「喫茶店はこつちですよ」

「いらつしやい」

お客さん達を次々に迎え入れる。そのうえで注文を受けお茶やコーヒー、それにスイーツを出す。そうして接客を続けていくのであった。

最初から賑わい大忙しだった。狭山もだ。

店の奥で執事の服の上に黒いエプロンをしてだ。あくせくと料理を作っていた。

「おい、次なんだ？」

「チョコクレープだよ」

「二つな」

「ああ、わかった」

注文に応えてだ。彼は動いた。

素早くクレープの生地を焼いてそれを移動させて上にスライスしたバナナとチョコをかけてだ。そのうえで軽くラッピングをして出すのだった。

「あいよ」

「おう、じゃあな」

「今から出してくるな」

「次は何だ？」

作ったそのそばから次の注文を聞く。

「クレープか？アイスか？」

「ああ、ケーキだ」

「キャラットのな」

それだというのだ。

「それ切ってくれるか」

「三つな」

「ああ、わかった」

すぐに頷く狭山だった。

そしてそのケーキを切ってだ。出した。

「これだよな」

「ああ、それだよ」

「じゃあすぐに出すからな」

「頼んだぜ。しかしな」

狭山はここだ。袖をたくしあげたその左手で額の汗をぬぐってだ。そのうえでたまたま奥に入って来た津島に対して言うのだった。

「今お客さん多いんだな」

「注文多いでしょ」

「多過ぎて困ってるんだけれどな」

「それがその証拠よ」

こう返す津島だった。彼女は黒をベースとして所々に白が入っているメイド服を着ている。エプロンにカチューシャも備わっている。それは白だ。

「多いわよ」

「ああ、やっぱりな」

「中には変なお客さんもいるけれどね」

「何だ？お尻でも触ろうとしてくるのか？」

「そうよ。そういうのもいるのよ」
「その通りだというのである。」
「それでそういうお客さんはね」
「容赦しねえんだな」
津島のその性格を知つての問いであつた。
「やっぱりそうなんだな」
「そうよ。さつきもお盆で頭ぶつ叩いてやったわよ」
「まあ御前らしいな」
「そんなお客さんには容赦しないの」
実際にその手に持っているお盆を上から下に振つての言葉である。
「こうしてね」
「大変なんだな、そつちも」
「そうよ。もう修羅場よ」
まさにそれというのだ。そしてだ。
「で、オーダー来たわよ」
「おう、何だ？」
「バナナサンデーよ」
それだというのである。

第二十二話 文化祭その四

「すぐに作ってね」

「おう、わかった」

「それと苺サンデー」

もう一つ来た。

「両方共大至急ね」

「多いな、本当に」

「注文が多いのは繁盛してる証拠よ」

またこのことを言う津島だった。

「それじゃあ御願いな」

「わかったよ。で、皆休憩してるのかよ」

「一応ね」

していると返す津島だった。

「あんたもそうしなさいよ。一時間交代だから」

「ああ、わかった」

狭山はその二種類のサンデーを作りながら話す。

「それじゃあその時にな」

「そうしなさいよ。で、その時だけれど」

「昼飯は適当に食うか」

「何呑気なこと言ってるのよ」

津島は狭山の今の言葉に突っ込みを入れてきた。

「文化祭なのよ、文化祭」

「それがどうしたんだよ」

「あちこち回るに決まってるでしょ」

こつ狭山に言うのである。

「交代時間一緒なんだし」

「おい、一緒だったのかよ」

「初耳だったのね」

「そうだよ。っていうかスケジュールそうだったのかよ」

「私が椎名に言ってるようにしてもらったの」
「そうだというのである。」

「そういうことだから」

「ちえっ、何かいつもの展開だな」

「けれどそれでいいでしょ。じゃあいいわね」

「反対する選択肢はあるのかよ」

「そんなのある筈ないじゃない」

「そうだというのであった。」

「女の子からの申し出は断れないのよ」

「またえらく強引なルールだな」

「私が作ったのよ」

椎名はここで胸を張ってきた。両手を腰にやってえへんとした仕事を見せる。

「どう？これでわかったでしょ」

「御前かよ」

「その通りよ。じゃあいいわね」

「ああ、仕方ないな」

狭山もここで頷いた。

「じゃあ休憩になったらな」

「最初は何処に行く？それで」

「何処って言われてもな」

相変わらずサンデーを作りながらの話だった。話をしているがそれでもだ。狭山のその手の動きは止まるどころか鈍りもしていない。

そしてだ。その二種類のサンデーを津島に差し出した。

「ほら、完成」

「よし、受け取ったわ」

「そのお客さんの飲み物は何だったんだ？」

「アイスコーヒーよ」

すぐに答える津島だった。

「それよ」

「そうか、それか」

「もうこっちで用意しておいてから」

狭山はあくまで調理専門である。お茶やコーヒーを入れることは他のスタッフの仕事である、彼も全てをやるのは到底無理であるからだ。

それだ。津島はそのサンデーとコーヒーをお盆の上に置いてだ。お店に戻った。それから注文は次から次に来るのであった。

そんな修羅場が終わってお昼になるとだ。皆少し落ち着いた。陽太郎はいつもの中庭でお弁当を食べながらだ。椎名に対して尋ねた。

「なあ」

「何？」

「占いの方はどうなってるんだ？」

「尋ねるのはこのことだった。」

「それで」

「繁盛してるわ」

「こつ返す椎名だった、」

「もう普通の占い師さんの一日分はね」

「入ったんだな」

「そう」

こつ陽太郎に答えるのだった。

第二十二話 文化祭その五

「だから安心して」

「いや、繁盛してるのはわかるさ」

「それはなの」

「だから。お客さんはどんな人が来るんだ」

「色々」

これが返答だった。

「色々な人が来てるわ」

「色々なのか」

「そう、色々」

こう言っただ。椎名はここで陽太郎にとっても気になることを話した。

「ただ」

「ただ？」

「やばいのもいる」

そうだというのだった。

「どうにもこうにも」

「ヤンキーとかそういうのか」

「そう、変に騒ぐお客さんも中にはいる」

「そういう時はマスターの出番だな」

「大抵の奴は赤瀬を見ただけで逃げるから」

その巨大な身体はただそこにあるだけでだった。かなりのインパクトがある。それを見ただけで腰の座っていない人間は、なのだった。

「頼りになる」

「有り難いな、本当に」

「それでも暴れるなら」

その場合についても話す椎名だった。

「その時は」

「赤瀬の実力発動だな」

「勝てるのは日本軍の兵隊さん位」

伝説的な存在が話に出た。

「そう、コピペに出ている」

「あれか？日本刀で戦場で百人斬りを競い合ってたっていう」

「日本刀で普通一本で百人も斬れない」

「いや、普通に戦場で百人斬るってないからな」

陽太郎もこのことは知っていた。そこまでの武勇の持ち主はとうとだ。

「あの荒木又右衛門の三十六人斬りだってな」

「創作」

「そうだよ。精々数人だよ」

「しかも将校だったから部下を指揮しながら競い合ってたって斬っていた」

「最後に兜割りまでしてな」

つまり敵兵のヘルメットを叩き斬ったのである。剣道の極意の一つだ。

「凄いよな、本当に」

「できる？それ」

「音撃戦士かサイヤ人ならできるだろ」

つまり普通の人間では絶対に無理ということだった。

「赤瀬のしている柔道でも百万人殺したんだよな」

「朝鮮半島だけで」

「曾爺ちゃん達って凄かったんだな」

「それで戦争映画作れる」

「戦争映画じゃなくて特撮だろ」

「多分それ」

最早その域まで達していることだった。

「凄い作品になる」

「赤瀬ってそんな人達じゃないと勝てないか」

「身体は大きいし技も素早さもある」

「オリンピック出られるな」

「多分」

いけるといふのだった。椎名の言葉だ。

「それで金メダル」

「そんな用心棒がいればうちの店は大丈夫か」

「いける。ただ本当にやばい奴を見た」

「やばいの？誰だよ」

「堀内」

椎名はその名前を出した。

「三山高校の堀内」

「三山の？ああ、話じゃ相当どうにもならない奴らしいな」

「やっぱり知ってたの」

「話には聞いているよ。喧嘩にそれにかっぱらいにか」54

「カツアゲもやってる」

「最悪だな、そりゃ」

「とにかく悪いことなら何でもありの奴」

そつだというのである。

第二十二話 文化祭その六

「そいつもいた」

「やばくないか？それって」

「かなり。だから何かあったら」

「ああ」

「赤瀬だけじゃなくて私も行く」

椎名もだというのだ。

「斉宮も来て」

「俺は剣道でか」

「はい、これ」

椎名はここで陽太郎にあるものを差し出してきた。それは特殊警棒だった。それを出してきたのである。

「これ使って」

「警棒？」

「そう、二段式の」

「これでぶん殴れってことか」

「肩打つたらそれで鎖骨折れるから」

「またえらく物騒だな」

「けれどそれが必要な相手だから」

だから出してきたというのである。

「持ってる」

「ああ、わかった」

陽太郎もそれに頷いた。そうしてだった。

警棒を受け取った。それを胸に収めた。

「いざって時はか」

「そう、来て」

「わかった。女の子に何かしたりしたら本当にやばいよな」

「本当にしてもおかしくない奴だから」

「そのうち少年院行くな」

「行くと思う」

また言う椎名だった。

「けれどそれで犠牲者は出させない」

「この学校じゃな」

「そういうこと。じゃあ」

「ああ」

「つきぴーのところ行ってきたら」

椎名はダイレクトに話した。

「今から」

「月美か。お化け屋敷だよな」

「そう」

「元気でやってるかな」

陽太郎は首を捻りながら言った。

「ちょっと見てくるか」

「途中まで一緒に行くから」

「お化け屋敷の前までか」

「後は二人でいればいい」

さりげなくではないが気を回しての言葉だ。

「それじゃあ」

「悪いな、何もかも」

「気にしなくていいから」

それはいいというのであった。

「ただ。つきぴーを楽しませて」

「ああ、わかったさ」

陽太郎は椎名の今の言葉には笑顔で返した。

「じゃあ行くか」

「うん」

こうして二人はそれぞれ執事、占い師の姿のまま四組に向かった。そこはすぐ隣だった。そしてその前に行くのであった。

「ちょっとあんたね」

「そうよ。何処行つてたのよ」

「店番でしょ」

「何やってたのよ」

「何って……」

月美がだ。店の前で星華達に囲まれていた。そうして言われていた。

「私、休憩でしたから」

「だから。言ってるじゃない」

月美の正面に立つ星華が怒った声で返してきた。

「あんた私の時間も店番だつてね」

「そんな……」

「バスケ部の用事があるんだから仕方ないじゃない」

「こういう理由をつけてだった。」

「そうでしょ？言つたわよね」

「それは……」

「だからよ。あんた店番だったのよ」

星華に続いてだ。三人も言う。

第二十二話 文化祭その七

「あんたわかつてんの？」

「クラス委員なんだしね」

「そんなの当然じゃない」

「けれど……」

気の弱い月美に言いたい放題である。

しかしそれは陽太郎と椎名が見ていた。まず椎名が陽太郎に言う。

「斉宮」

「ああ」

まずは強い顔で頷く陽太郎だった。

「すぐに止めよう」

「つきぴーをいじめる奴は許さない」

「ここでもこう言う椎名だった。」

「人利でも行く」

「そうだよな。絶対にな」

「斉宮もなのね」

「ああ、行くさ」

こう言っただけであった。実際に陽太郎の方から前に出る。そうして
だった。

「おい、止めるよ」

「！？何よ」

「クラスの話なのよ」

「それでもこんな話があるのかよ」

こう三人に言い返す陽太郎だった。

「一体何やってんだよ」

「三組の斉宮……」

「あんたなの」

「そうだよ。俺が言って悪いかよ」

こつ三人に言い返す。そうしてだった。

ここぞだ。三人の顔を見回しているうちに星華に気付いた。それ
でだ。

「おい、佐藤」

「え、ええ」

陽太郎に言われるとだ。星華は急に弱くなった。それまでの強気
さが嘘の様子に気弱になってた。そのうえで陽太郎に対するのだっ
た。

「御前もやってたのかよ」

「あの、その……」

陽太郎に問われてしどろもどろになる。

「何ていうか」

「こんなのすぐに止めさせるよ」

また言う陽太郎だった。

「いいな」

「ちょ、ちよつと。言っただけだし」

「随分ときつい言い方だよな」

陽太郎は星華に対して絶対の優位に立つて言うのだった。

「それに何だよ。この連中話聞いてたら」

「ええ」

幸いにして星華が中心人物とは気付いていない。これは星華にと
つては幸いなことだった。

「この連中が悪いんじゃないのか？」

「そうね」

ここで椎名も来た。

「何か自分達の順番のときびーに押し付けてたみたい」

「そんなの御前等もやれよ」

陽太郎はまた三人に言った。

「人に仕事押し付けるなんて何なんだよ」

「だってこいつクラス委員じゃない」

「それに私達だつてやることあるし」

「そうよ」

「それでも人に仕事なんて押し付けるな」

また言う陽太郎だった。

「今度そんな話聞いたら許さないからな」

「あのね」

陽太郎があまり言うからだ。野上がムキになって言ってきた。

「あんた三組の人間じゃない」

「それがどうしたんだ」

「それで何でうちのクラスのことを首突っ込むのよ」

「そうよ、何でなのよ」

「関係ないじゃない」

橋口と州脇も続く。

「あなたには関係ないことですよ」

「それで何で言うのよ」

「そんなの決まってるだろ」

陽太郎は月美を守るようにして彼女の前に来て言った。三人から

彼女を魔も得う形になってそのうえだ。

第二十二話 文化祭その八

「俺、こいつと付き合ってるからだよ」

「えっ……」

それを聞いてだ。驚いたのは星華だった。呆然とした顔になって思わず問い返す。

「今何て」

「俺、こいつの彼氏なんだよ」

また言い返した。

「だからだよ。放っておけるかよ」

「そんな、嘘……」

実際に話を聞くとだ。呆然とならざるを得なかった。彼女にとつては最も聞きたくない、認めたくない話だったからだ。そうなってしまったのだ。

「彼氏って……」

「何で驚いてんだよ」

陽太郎は星華の気持ちを知らないまま彼女に返す。

「それよりも佐藤」

「う、うん……」

「御前からこんなこと止めさせる」

彼女のことには気付かない。それでも告げた。

「いいな」

「わ、わかったわ」

「御前等もだよ」

陽太郎は返す刀で三人にも言った。

「二度とこんなことするなよ」

「ふん、わかったわよ」

「もうしないわよ」

三人は苛立ったような顔で陽太郎に返した。

「全く、何だつてのよ」
「彼氏なんて」
「彼氏とか友達だったら守るのは当然」
「椎名も出て来た。」
「つきぴーをいじめたら本当に許さないから」
「チビツ子まで出て来たなんてね」
「鬱陶しいったらありゃしない」
「鬱陶しいのはここでは褒め言葉」
「全然悪びれていない椎名だった。」
「そういうことだから」
「じゃあ私達が当番するわよ」
「それでいいんでしょ」
「当たり前だろ？」
陽太郎はその三人を睨んでいた。
「そんなことはな」
「じゃあつきぴー」
椎名も彼女の前に来て話した。
「一緒に行こう」
「う、うん」
「よし、じゃあ行くか」
陽太郎は三人から顔を話して月美に話した。
「何処に行く？」
「ええと」
「何か食べるか」
月美が戸惑っているのを見て自分からも話した。
「うちの店に来るか？」
「三組のですか」
「ああ、うちの店自慢じゃないが結構いけるんだよ」
こう提案した。
「それでどうかな」

「はい、じゃあ」

「それじゃあ行こう」

椎名も話してきた。

「喫茶店にね」

「それで何がいい？」

陽太郎は笑顔になって月美に話す。

「何でもあるけれどさ」

「ホットケーキを」

それだというのであった。

「それがいいです」

「ああ、それなんだ」

「それね」

陽太郎と椎名はそれを聞いて言った。

「じゃあ俺もそれにするか」

「私も」

「二人もそれでいいんですか」

「ああ、俺もそれ好きだしな」

「ホットケーキも色々あるから」

だからだというのである。

第二十二話 文化祭その九

「フルーツをたっぷりかけたホットケーキな」

「あれも最高」

「それじゃあ今から行こうか」

「そうね」

こう話してだった。三人でその三組に行く。するとだ。

狭山がだ。頂垂れた顔で三人を迎えた。そして言うのだった。

「全くよお」

「あれ？御前休憩じゃなかったのか？」

「何でいるの？」

「津島に言われたんだよ」

だからだというのである。

「それでな」

「いるっていうのか」

「そうなの」

「そうだよ。あいつが残るからな」

こう話すのだった。

「それで俺もって」

「凄いとばっちりだな」

「でも同情しない」

椎名の言葉がきつい。

「私は」

「何で同情しないんだよ」

「だって。それもデートだから」

「デートなのかよ、これって」

「そう、店内デート」

それだというのである。

「だからいい」

「あのな、そもそも何で津島が残ってるのか聞かないのかよ」

「ああ。何でなんだ？」

ここで陽太郎が聞いた。彼のリクエストに応じてdき。

「それはで」

「何か頑張りたいつてな」

狭山は首を傾げさせながら答えた。

「それでなんだよ」

「それでかよ」

「俺にしちゃ本当にとぼつちりだよ」

狭山は言いながらとほほとした顔になっている。

「全くよお」

「その割には嬉しそうだな」

「うん」

陽太郎も椎名もこのことをもう見抜いている。この辺りの鋭さは見事である。

「全然嫌そうじゃないしな」

「何だかんだで楽しんでる」

「ちっ、勝手な解釈だな」

「そうか？」

「私はそうは思わない」

「そうなんだよ。まあとにかくな」

狭山は二人が見抜いているのをわかってそえでだった。話を変えてきた。

「それだけでれどな」

「ああ、オーダーだよ」

「フルーツホットケーキ三つ」

「まずはそれだった。」

「それと紅茶な」

「ミルクティーをホットで」

「ああ、わかったよ」

素早くオーダーを書く狭山だった。そうしてだった。それを書いてからだ。三人はテーブルに着いてだ。あらためてだ。椎名が言ってきた。

「ねえ、二人共」

「ああ」

「どうしたの？」

「文化祭の最後だけれど」

その時の話をだ。もうするのだった。

「キャンプファイアーは出るの」

「ああ、それな」

「陽太郎君はどうされますか？」

「出ようか」

陽太郎はその月美の顔を見て話した。

「やっぱりな」

「そうですね。やっぱり出ないと」

「それで一緒に踊らないとな」

「はい、だから是非」

「出るよ」

陽太郎は話をまとめてから椎名に話した。

第二十二話 文化祭その十

「俺達も」

「そう。よかった」

それを聞いて静かに頷く椎名だった。

「それなら」

「確か踊ったら幸せになれるんだったな」

「そうよね」

「うん」

椎名は二人のその問いにくくりと頷いてみせた。

「その通り」

「じゃあ是非な」

「一緒に」

「そう、二人で踊る」

また言う椎名だった。

「私もそうするし」

「赤瀬とか」

「そう」

こう陽太郎に答えた。

「そのつもり」

「何か凄いアンバランスな組み合わせだな」

陽太郎は椎名のその言葉に首を捻る。その間に注文したフルーツホットケーキとホットミルクティーが来た。ホットケーキの上に様々な種類の小さく切ったフルーツがかけられている。中々豪勢である。

それを切って食べながらだ。三人は話すのだった。

「それってな」

「そう」

「ああ、失礼な言葉だけれどな」

「齊宮だつたらいい」
「俺だつたらか」
「つきぴーを守ってるから」
「だからだというのである。」
「それでいい」
「そうなのかよ」
「そう。そして」
「そして？」
「多分狭山と津島も出るから」
「この二人のことも話すのだった。」
「三組揃う」
「だよな。それ考えたらあいつもいいか」
陽太郎は首を少し傾げさせながらこう言った。
「この文化祭」
「運動会と文化祭はチャンス」
「チャンスなのかよ」
「そう、仲を進展させるチャンス」
椎名は紅茶を飲みながら述べた。
「そのチャンス」
「よく言われるよな、そのこと」
「だからこそ。後は二人きり」
「えっ、おい」
「二人きりって」
陽太郎だけでなく月美もだ。椎名の今の言葉に驚いた。
「あのよ、今」
「愛ちゃん、それって」
「その通り。校内デートにゴー」
言葉は淡々としているが二人の心に告げたものだった。
「いちゃいちゃして来ること」
「いちゃいちゃって」

「そこまで」

「そう、徹底的に皆に知らせる」

「こうまで言う椎名だった。」

「何かあったら私がいるから」

「いや、それはいいさ」

陽太郎は椎名に真面目な顔で返した。パンケーキを刺して切るその手が止まってしまっていた。そのうえでの話になっていた。

「別にさ」

「いいの」

「それ位俺がするさ」

「だからだというのだ。」

「月美のことだったらな」

「そうするの」

「ああ、そうする」

「強い言葉での返答だった。」

「だから任せろ」

「わかった」

椎名はいつもの一言での返答で頷いた。

第二十二話 文化祭その十一

「それなら」

「じゃあ月美、これ食ったらな」

「は、はい」

「行こうぜ」

こう月美にも言う。月美は戸惑いながら彼の言葉に応えた。

「わかりました。デートですね」

「ああ、二人で楽しもうな」

「わかりました。それでは」

「何かいい感じになってきた」

椎名は紅茶を啜りながら呟くようにして述べた。

「とてもいい感じ」

「何か御前に乗せられてる気がするけれどな」

「実際にそうしてる」

このことを隠さない。最初からその素振りさえ見せない。

「けれど気にしない気にしない」

「何か適当にも聞こえるな」

「私はつきぴーが幸せになることを願ってるから」

「俺は？」

「その次」

考えてはいるというのである。しかし優先順位ははっきりとさせている。

「その次に願ってる」

「そうなのか」

「私、ずっと友達いなかった」

椎名は過去の自分についての話もはじめた。

「けれどつきぴーと会ってそれができて」

「何か随分月美を大事にしてると思っただらそれでか」

「うん。つきぴーも私を大事にしてくれるし」
「私も」

月美もここで言ってきた。

「愛ちゃんと会うまでずっと友達なんていなかったから」

「はじめてできた友達。そして親友」

「うん、本当に」

「何よりも換え難いものだから」

「私も。やっぱり愛ちゃんのこと」

「二人共似てるんだな」

陽太郎は二人の話を聞いていてだ。このことに気付いたのだった。

「外見は全然違うけれど。中身はさ」

「似てる」

「そうですか？」

「芯強いし」

その芯の強さをそれぞれの言葉から感じ取ってだ。そうしての言葉であった。

「しっかりしてるしな」

「そうかも知れない」

椎名は陽太郎のその言葉を認めた。

「それは」

「そう思うんだな」

「だから親友になれた。けれど」

「けれど？」

「お互い持っていないものをそれぞれ持ってる」

これは椎名が気付いたことである。

「だから余計に」

「そうなってるか」

「多分。じゃあとにかく」

「ああ、そうだな」

「校内デート行って来て」

こう話してだった。二人は席を立つてだった。

そのうえでデートをはじめた。それは二人水いらずのもので同時に二人の仲を校内に知らしめるものだった。そしてそれはだ。星華の目にも入っていたのだった。彼女の心にも。

そしてだ。星華はいつもの三人とだ。お化け屋敷の裏方をしながら言うのだった。

「こうなったら」

「どうするの？」

「一体」

「見てらっしゃい」

怒りに満ちた言葉でまた話す。

「目にももの見せてやるから」

「目にもものって」

「一体」

「あいつ、絶対に許さない」

無意識のうちに右の親指の爪を噛んでいる。そのうえでの言葉だった。目は血走り何か得体の知れないものもそこにはあった。

「もう、徹底的にやっつけてやるから」

「あの、星華ちゃん」

「ちよつと」

三人はそんな彼女に気付いてた。戸惑いながら声をかけた。

「ここはね」

「落ち着いてね」

「わかってるわよ」

言葉ではこう返しはした。しかしであった。

親指の爪を噛み目を血走らせたまままた言う。

「齊宮はね」

「そうよね、好きなのよね」

「だったら」

「何があっても言うから」

最早周りは何も見えていなかった。

「それで。絶対に」

「アタックしてね」

「何があっても」

「振り向かせてみせる」

強い決意だけはあった。

「何をしてでも」

「ううん、それはいいわ」

「そうね」

三人は今の星華に不吉なものを感じた。それで言葉が弱くなっていた。

しかしである。星華はまだ言うのだった。

「斉宮は私のもものだから」

こう言っただであった。彼女は周りが完全に見えなくなっていた。

そしてそれがだ。彼女自身を奈落に落としてしまうことになるのであった。

第二十二話 完

2010・9・24

第二十三話 嫉妬と憤怒その一

第二十三話 嫉妬と憤怒

陽太郎は月美と校内デートを楽しんでいた。それを見た周囲は。

「へえ、三組の斉宮と四組の西堀がねえ」

「付き合ってたなんてね」

「意外だよな」

「そうよね」

皆ひそひそと話す。その二人を見てだ。

そしてだ。こんな言葉も出ていた。

「意外？」

「意外なカップリング？」

「ちよつと以上に」

「そうかも」

組み合わせがというのだ。

しかしだ。こんな意見もあった。

「いい感じじゃない？」

「斉宮もあれで格好いいしね」

「西堀さん美人だし」

「美男美女のカップルかな」

「そうかも」

言葉や評価は人それぞれであった。だが悪いものは少なかった。

しかし月美はそんな周囲の言葉にだ。顔を真っ赤にさせてしまっていた。

「何か」

「何か？」

「恥ずかしいです」

俯いて陽太郎に言う。二人は今も校内を歩いている。

その廊下でだ。こつ言ったのである。

「とても」

「ううん、わかるよそれ」

「わかってくれます?」

「だって俺もだから」

「こつ言つてであつた。」

「俺も恥ずかしいしさ」

「陽太郎君もですか」

「いや、普通に恥ずかしいじゃないか」

月美は横目でちらりとその彼の顔を見た。するととであつた。その顔もまた、であつた。自分と同じように赤くなっているのがわかつた。

「それはさ」

「そうなんですネ。陽太郎君も」

「ああ、そうさ」

その赤い顔での返答だつた。

「恥ずかしいよ」

「愛ちゃん、提案が大胆過ぎます」

「そうだよな。あいつつてな」

「けれど」

しかしであつた。月美はこつこつも言つのであつた。

「楽しいです」

「楽しい?今」

「甘いですし」

この言葉も出て来た。

「気持ちだ。甘くなっています」

「甘く?」

「はい、甘くなっています」

そうだというのである。

「とても」

「ううん、実は俺も」

「陽太郎君も？」

「今とても嬉しいんだよな」

赤くなつた顔を右斜め上にしての言葉だ。月美は左にいて俯いたままになつていたので彼女から視線を外した形になつている。

「こうしてさ」

「私と一緒にいて」

「いや、これまでもデートしてたじゃない」

「はい」

「その時とはまた違った感触でさ」

「そうなんですか」

「何か違つんだよな」

口が波線になつていた。自然とそうなつていた。

「普段と」

「そうですね。普段のデートは行き帰りとかで二人だけですし」

「今も二人だけけれど」

「皆が見ているから」

「ううん、秘密にしていたわけじゃなかったけれど」

ただ限られた友達にだけ話してただけだ。陽太郎はそうだった。

だが月美はだ。こう言うのだった。

「けれど私は」

「月美は？」

「殆ど誰にも言えませんでした」

「そうだったんだ」

「だって。恥ずかしいですから」

だからだというのである。

第二十三話 嫉妬と憤怒その二

「とても」

「そうだったんだ」

「はい、本当に」

また言う彼女だった。

「だから今だって」

「何か月美らしいな」

「私らしいですか」

「その恥ずかしいってというのがさ」

それがだというのである。

「月美らしくてさ。いいんじゃないかな」

「いいですか？」

「そう思うんだけどな」

こう彼女に話す。

「そうじゃないかな」

「だったらいいんですけど」

「まあとにかくさ」

「はい」

「今はこのデート楽しもうか」

これが陽太郎の提案だった。

「周りの目は気になるけれどできるだけ気にしないで」

「できるだけ、ですか」

「ああ。それでさ」

「はい、それで」

「できるだけ一緒にいような、この文化祭」

こうした提案もするのだった。

「それでいいよな」

「わかりました」

月美は今の言葉に顔をあげた。そうしてであった。
陽太郎に顔を向けて笑う。今は晴れやかになっている。
その顔でだ。彼に言うのだった。

「陽太郎君と一緒に」

「ああ、それでさ」

「はい、じゃあ」

こんな話をしながらデートを楽しむ二人だった。
そして彼等もだ。楽しむことは楽しんでいた。

椎名は赤瀬と一緒に食堂でうどんを食べていた。きし麺である。
それをすすりつつだ。赤瀬に言うのであった。

「ねえ」

「何かな」

「美味しい」

微かにだが微笑んでの言葉であった。

「とても」

「そう、美味しいんだ」

「元々きし麺は好きだけれど」

「それでも？」

「普段よりも美味しい」

頬も赤らんだ。そのうえで向かい側にいる赤瀬に対して言った。

「一緒にいるから」

「僕もだよ」

赤瀬もこう返した。

「とてもね」

「そうなの」

「うん、椎名さんと一緒にいるから」

だからだというのだった。椎名の頭上から。

「美味しいよ、普段よりもずつとね」

「そうなの。私と一緒にだから」

「それで」

珍しくだ。赤瀬からの言葉であった。

「いいかな」

「何？」

「この文化祭の最後のキャンプファイアーだけれど」

「うん」

「一緒にどうかな」

こう椎名に提案するのであった。

「一緒にね。踊らない？」

「いいよ」

椎名はここでも頬を赤らめさせて微笑んでいた。

「その言葉待ってたから」

「待ってたんだ」

「だから二人きりになったの」

見ればだ。赤瀬を見上げるその目は潤んでいた。普段の落ち着いた、無表情ですらある彼女からは想像もできない姿がそこにあった。

第二十三話 嫉妬と憤怒その三

「それで」

「そうだったんだ」

「よかった」

今度はほっとした言葉だった。

「そう言ってもらって」

「そんなに嬉しかったんだ」

「嬉しいからこう言うの」

まさにその通りの。一直線の言葉だった。

「だから」

「成程ね」

「それで赤瀬」

「うん」

「もう椎名って呼ばなくていいから」

こう彼に告げた。

「それはいいから」

「じゃあ何て呼べばいいの？」

「愛海」

他ならぬ彼女のその名前である。

「この名前で呼んで」

「愛海って」

「そう、名前で呼んで」

これが彼女の言葉であり願いであった。

「いいかな」

「わかったよ」

赤瀬はまずは頷いて。それからだった。

「じゃあこれからはね」

「うん、呼んでみて」

「愛海さん」

実際にだ。呼んでみた。

「キャンプファイアー宜しくね」

「こちらこそ。御願い」

椎名はにこりと笑って応えた。それは普段の彼女が全く見せはしない、そうした実に女の子らしい可愛らしい笑顔なのであった。

そしてだ。狭山と津島もだった。

調理場でまかないの昼食と弁当と一緒に食べながら。話をするのだった。

「ねえ」

「何だよ」

津島からだった。狭山はそれに応える。

「何かあるのかよ」

「あるから声をかけるのよ」

だからだというのであった。

「それでね」

「ああ、それで何なんだ？」

「キャンプファイアー行くわよね」

津島はアメリカンクラブサンドを口に入れながら彼に問うた。

「ちゃんと」

「ああ、行くぜ」

「わかってるわよね」

「俺一人で相手をその場でゲットしてな」

能天気な調子での言葉であった。

「そうしてな」

「あんた馬鹿でしょ」

狭山のその実に能天気な言葉を受けてだ。こう返す津島だった。

「ひよつとしなくても」

「おい、馬鹿って何だよ馬鹿ってよ」

カツサンドを食べながら抗議する狭山だった。彼もまたサンドイ

ツチであった。まかないはと見ればどちらもフルーツ盛り合わせである。

「それって何なんだよ」

「フォークダンスよ、フォークダンス」

「ああ」

「それもキャンプファイアーを囲んでね」

「だからやっぱりその場で相手をゲットしてだな」

「本気で言ってるの？それ」

「そのつもりだぜ」

売り言葉に買い言葉であった。

「俺は何時でも本気だぜ」

「じゃあ言うわよ」

怒ってだ。自分から言ってしまった。

「あのね、ゲットするならね」

「ああ、何だよ」

「ここでしなさいっての」

これが言ってしまった言葉である。

「わかったわね、いいわね」

「おう、わかったぜ」

狭山も半ば無意識のうちに言い返す。

第二十三話 嫉妬と憤怒その四

「それじゃあな」

「で、何を言うのかしら」

「おい、いいよな」

ムキになった調子で津島に言う。

「キャンプファイアーな」

「ええ」

「一緒に行くか」

「こつ告げたのだった。」

「それでいいよな」

「ええ、聞いたわ」

「ちえつ、何でこつなるんだよ」

「これが駆け引きってやつよ」

「駆け引きかよ」

「そう、それよ」

津島はにこにことなった顔で彼に話す。

「それなのよ」

「うつむ、何か俺やられたか？」

「どっかの馬鹿官房長官よりはましな駆け引きだったけれどね」

「あいつは馬鹿にも程があるだろ」

「まあね。あんたあいつよりはずっとましだから」

「全然褒められてる感じがしねえな」

首を捻りながら話す狭山だった。

「まあそれでもな」

「それでも？」

「まあいいか」

「こつも言う彼だった。」

「それでな」

「そうよ。キャンプファイアーと一緒に踊ったらね」

「そのカップルは幸せになるってか」

「その話は聞いているわよね」

「一応な」

「だからね。踊りましょう」

今度は津島からの言葉だった。

「いいわね」

「ああ、わかったさ」

また応える狭山だった。ここでカツサンドを食べ終えた。

そして今度はだ。ハムサンドを食べるのだった。

そのハムサンドを食べてだ。彼は言った。

「なあ」

「何？」

「ここのサンドイッチ美味しいよな」

津島に今話すのはこのことだった。

「学校の売店のこれな」

「そうよね。美味しいわね」

津島は今はハンバーグサンドを食べていた。それを食べながらだつた。

「はじめて食べたけれど」

「パンとかの種類もそれぞれの数も多かったしな」

「そうよね。いいお店よね」

「御前の家の関係者とかじゃないよな」

「ああ、また別の系列よ」

それは違うというのである。

「確か八条グループのね」

「そっちのかよ」

「そうよ、そっちのね」

八条高校自体が八条財閥が所有する大学である。理事長は八条家の当主である。そうした関係がここでも生きているのであった。

「だからね」

「ああ、そういえば八条百貨店のパン屋も」

「美味しいって評判よね」

「そうだよな。同じ系列だからか」

「そうね。それに」

「それに？」

「ハンバーガーやドーナツもあるし」

「そうしたものもあるのだった。」

「中国の餅とか包とかお饅頭までね」

「とにかく何でもあるんだな」

「そうね、何かそういうの見たら」

「対抗心でも湧いたか？」

「ええ、負けないわよ」

「ケーキ屋の娘としての意地がだ。ここでもたげている。」

「ケーキだつてあつたし」

「ケーキもな」

「ケーキはね。人類の永遠の友達なのよ」

「こんなことまで言う椎名だった。」

「ステーキ、ラーメン、そしてケーキの三つはね」

「何気にカロリー高そうなものばかりだな」

「ほら、スリーナインでもあつたじゃない」

漫画界における永遠の名作の一つである。その独特の虚空と浪漫を感じさせる作風がだ。読者の心を惹きつけて離さないのである。

第二十三話 嫉妬と憤怒その五

津島は今その作品を話に出して話すのだった。

「ラーメンは人類の味の友って」

「それと同じか」

「そういうことよ。あの漫画の主人公ってやたらラーメン食べてるわよね」

「それとステーキだよな」

「その二つしか食べていない気もするけれど」

「こつも言う津島だった。」

「まあとにかくね」

「ああ、ケーキはか」

「人類の永遠の友達。それを作ることでは負けないから」

目が燃えていた。今度は何処かの野球漫画の主人公のようである。
「絶対にね」

「そうか。それじゃあな」

「ケーキじゃ負けないから」

見ればその店のケーキもあつた。その味はだ。

二人共食べてだ。こつは言った。

「美味しいな」

「そうね」

「食べたら余計にか」

「負けたくなくなつたわ」

こんな話をしていた彼等だった。彼等も幸せな時間を過ごしていることは過ごしていた。

しかしであつた。そうでない面々もいた。

星華達は今それぞれ異なつた格好をしていた。幽霊だったり化け猫だったりろくろ首だったりしている。星華は雪女になっている。

その姿でだ。不機嫌な顔で話していた。

「全くね」
「そうよね、何かね」
「面白くないよね」
「まずは州脇達三人が話す。」
「全く。あいつは出て来るし」
「西堀に押し付けられなくなったし」
「お陰でこうしてお化け屋敷もしないといけなくなったし」
「不平不満に満ちた言葉であった。」
「遊びに行きにくくなったしね」
「全くね」
「何でこうなるのよ」
「そしてだった。星華も言うのだった。」
「ねえ」
「うん」
「どうしたの、星華ちゃん」
「それで」
「今日これ終わったらだけけど」
「不機嫌な顔のまままでの言葉であった。」
「いいわよね」
「仕掛けるのね、相手に」
「いよいよね」
「キャンプファイアーのこと」
「西堀が何だったのよ」
「目を怒らせての言葉だった。」
「絶対に私がね」
「そうよ、だからよ」
「ここで意地を見せてよ」
「気合も」
「明日誘うわ」
「このことも決めていたのだった。」

「明日ね」

「じゃあ今日はどうするの？」

「それで」

「スケジュールだけねどね」

星華がここで話に出したのはそれだった。

「変えましょう」

「スケジュール？」

「それを？」

「そう、それよ」

まさにそれだというのがのである。

第二十三話 嫉妬と憤怒その六

「それを変えるのよ」

「変えるってそれで」

「どうするの？」

「だから。あいつがキャンプファイアーに出られないようにスケジュールを組み替えさせるのよ」

そうするといふのであった。

「そして私が斉宮とね」

「あつ、それいいかも」

「そうよね」

「名案？」

三人も彼女のその言葉に笑顔になる。

「じゃあ早速そうして？」

「それでやってく？」

「あいつに言って認めさせて」

「そうしてやりましょう。わざとスケジュール前の時間に合わせて星華は三人に話していく。話していくうちにその顔にドス黒いものも宿っていく。だがこのことには当人も三人も気付いてはいなかった。」

「私達の四人分の仕事をそこで押し付けてやってね」

「そうしようか」

「それで星華ちゃんはね」

「斉宮と」

「ずっとだったのよ」

ドス黒いものが消えて切実な顔になった。

「私、ずっとなのよ」

「ずっと好きだったのね」

「そうだったのね」

「ええ、そうよ」

まさにその通りだというのである。

「だから。本当にね」

そして言ったのだった。このことを。

「この文化祭にかけてるのよ」

「だから頑張つてよ」

「私達もいるんだからね」

「本当にね」

「ええ、わかってるわ」

切実な顔のままこくりと頷いた。

「だからこそね」

「武運長久を祈るわ」

橋口が言った。

「勝利をね」

「そうよね、勝たないとね」

州脇も続く。

「こういうのって意味がないし」

「そうそう」

野上はその言葉に頷いた。

「勝たないと何もならないからね」

「そうだからね」

また言う星華だった。

「ここは何をしてでもね」

「決める」

「それしかないしね」

「そうよ。明日何があっても」

星華は不必要なまでに燃え上がってしまった。そしてその炎
によからぬものが混ざっていることにも気付いていなかったのだっ
た。

そのままだ。彼女は言うのであった。

「今から。あいつ除ける用意しましょう」

「うん、わかったわ」

「それじゃあね」

こんな話をしていた。今それは四人の間だけだった。しかし彼女達は確かに動きはじめていた。それがどういった結果をもたらすかまでは考えずに。

陽太郎はこの時月美と一緒にいた。今はお化け屋敷の中にいる。その四組のお化け屋敷の中を見ながらだ。彼は言うのだった。

「やっぱりな」

「はい？」

「お化け屋敷って暗いのが一番いいよな」

こう笑顔で言うのだった。

「ほら、今ここ真っ暗じゃないか」

「はい、お化け屋敷ですから」

「お化け屋敷ってのはさ、暗いところから急に何かが出て来るじゃない」

「そうですね。ここだと」

「おっと」

いきなり頬に何か来た。ひやりとしたものがだ。

第二十三話 嫉妬と憤怒その七

陽太郎はそれを受けてだ。すぐに何か察した。

「こつこついう蒟蒻とかさ」

「あつ、わかりますか」

「こつこついう場所での定番じゃない」

だからわかるというのである。

「蒟蒻で驚かすのって」

「うづん、考えて作ったんですけれど」

「あれだろ？上から吊るしてさ」

「そうですね、それもわかるんですね」

「わかるよ。後は」

前の薄のところから出て来たのは。幽霊だった。

「うらめしや〜〜〜」

頭に三角巾を着けてざんばら髪で青い顔をしている。何処からどう見てもだった。

陽太郎はその幽霊を見てだ。また月美に話した。

「これもさ」

「おわかりなんですな」

「俺実はこつこついうの平気なんだよね」

そつだとも話すのだった。

「幾ら見てもそんなに驚かないし」

「じゃあもつと怖いものにすればよかつたかも」

「悪いけれどね。けれど怖がる人は怖がってるみたいだね」

あちこちから悲鳴が上がっていた。男女共にだ。

「じゃあやつぱりここは怖いよ」

「だといいんですけれど」

「まああれだよ」

陽太郎は笑顔で月美に話す。

「学校のお化け屋敷でそんなに怖くてまさ」

「おかしいですか？」

「おかしくはないけれどやっぱりそんなに凝れないしさ」 104
だからだというのである。

「それに」

「それに？」

「人によって怖いと思う対象も違うし」

「そういえば私は」

月美は陽太郎の言葉を受けて視線を上に行った。右の人差し指を唇にやってそのうえで言うのだった。

「ゾンビが怖いです」

「ゾンビっていうと」

「はい、バイオハザードです」

まさにそれであつた。ゲームのあれだ。

「ですからあのゲームは」

「してないんだ」

「どうしても抵抗がありました。エイリアンとかは平気ですけど」

「あれも気持ち悪いよな」

「けれどあれは平気なんです」

そうだと陽太郎に話すのだった。

「他には十三日の金曜日も」

「あれもなんだ」

「オーメンは嫌な感じがしましたけれど」

「あれっ、月美ってまさか」

彼女の話聞いていてだ。気付いたのだった。

「ホラー映画とか好き？」

「そういう小説も好きです」

まさにそうだというのだった。

「怖いのは昔から」

「そうだったんだ」

「最近是小泉八雲も読んでますし」

「ラフカディオ・ハーンだったかな」

「はい、凄く奇麗で怖い話が多いんですよ」

日本に来てその美しさに魅せられた人物である。そして心まで完全に日本人になりただひたすら日本を愛した。そうした人物である。

「雪女の他にも色々なお話がありますよ」

「そうか、小泉八雲もだったんだ」

「他にはポーも読んでます」

今度は外国文学だった。

「魯迅も」

「あれっ、魯迅の本って怖いんだ」

「怖いですよ。私魯迅はホラーだと思ってます」

「そんなに怖いんだ」

「剣を打つ話とか」

具体的な作品の名前も出て来た。

「薬も。人の血を饅頭に浸して食べるお話でして」

「確かにそれって怖い感じだよな」

話を聞けばそれで感じ取れることであつた。

第二十三話 嫉妬と憤怒その八

「人が人食う話か」

「はい、ですから」

「何かそういう話って多いんだな」

陽太郎は月美の話聞いて腕を組んで考える顔になった。

「純文学に見えても」

「そうですね。純文学でも怖い作品は怖いですし」

「何か芥川の歯車あるじゃない」

「あの作品ですか」

「あれこの前読んだけれどさ」

月美に顔を向けて話す。月美も彼に顔を向けているので向かい合った形になった。

「あれもさ」

「あの作品は確かに怖いですよね」

「ドッペルゲンガー出てるし」

作者である芥川自身のだ。もう一人の自分である。

「作品の雰囲気全体が何か」

「芥川が自殺する直前ですから」

「だからああした作品になってるんだ」

「そうなんです」

「あれはホラーに入るのかな」

「どうでしょうか。難しいかも」

「だよなあ、どうなのかな」

陽太郎がこう言うと思った。月美が話してきた。

「分類しにくい作品ですよね」

「確かに。それでだけれど」

「はい、それで」

「そろそろ出口かな」

歩いている時間が結構長くなっているのを感じ取っての言葉だった。

「それは」

「はい、そろそろだと思えます」

「何か思ったより長かったな」

「教室の中をわざと曲がりくねって作りましたから」

「椎名の独り言通りにしてか」

「それでなんです」

「成程な。ああ、見えてきたよ」

出口がある。光が見えてきたのだ。

陽太郎はその光を見てだ。笑顔になった。

それで外に出ようとす。しかしだった。

「わっ！！」

「！！！！」

何とだ。出口の前でいきなりあるものが出て来た。それは標本模型だった。

人体のものである。右半分が肉や内臓になっていて左半分が皮になっている。よく理科の教室に置いてある、あれが出て来たのである。

それを見てだ。陽太郎は月美を咄嗟に自分の後ろに庇ってだ。それから声をあげた。

「な、何だよ急に！！」

「あっ、成功したよ」

「やったな」

「やっぱりこれって効くよな」

「最後の最後だしな」

そしてだ。その出口からこんな声が聞こえてきたのだった。見ればだ。

四組の面々だった。彼等が笑いながら出て来て言っていた。

そしてだ。陽太郎の後ろにいる月美に気付いてだ。

「あつ、西堀さんだったんだ」

「これが有名な彼氏？」

「成程ねえ」

「お化け屋敷でのデートだったのね」

「妬けるわねえ」

「全く」

「そんな問題じゃないだろ」

月美を見てそれぞれ言う彼等にだ。陽太郎が少し怒った顔で返した。

「全く。最後の最後でこれかよ」

「そうだよ、油断した時にね」

「こうして攻める」

「どう？効くでしょ」

「驚いたでしょ」

「心臓が止まるかと思ったよ」

陽太郎はこう言って抗議する。

「本当にな」

「うんうん、その言葉こそがね」

「お化け屋敷やってる醍醐味っていうかね」

「それでいいのよ」

「くそつ、じゃあ俺は引つ掛かったのかよ」

それがわかってだ。陽太郎は今度は口を尖らせた。

第二十三話 嫉妬と憤怒その九

そのうえでだ。また言うのだった。

「してやられたな」

「どうもー」

「褒め言葉だと思っておくからね」

「そういうことでね」

「有り難う」

「全く。まあ驚いた俺が悪いか」

負けは認めるしかなかった。それはだ。

「仕方ないな」

「あの、それで」

月美の声がしてきた。

「あつ、それで？」

「さっきですけれど」

いつものおずおずとした調子の言葉ではあった。だがそれでも言うのだった。

「今さつき、私を」

「月美を？」

「庇ってくれたんですね」

彼女が言うのはこのことだった。

「そうだったんですね」

「あつ、そうだったかな」

陽太郎は言われてそれに気付いたのだった。

「俺特に」

「気付いてなかったんですか？」

「今言われてはじめてだけれど」

「そうだったんですか」

「うん、実は」

こつ返す彼だった。

「別にさ。意識しては」

「無意識だったんですか」

「いや、悪いけれど本当に」

「それってつまりは」

月美はそれを聞いてだ。微笑んで言うのだった。

「私を自然に守ってくれたってことですよね」

「そうなるかな」

「はい」

そうなると返す月美だった。

「本当に有り難うございます」

「そんなのいいさ」

「いいんですか？」

「男が守るものじゃない」

当然の様に言ったことだった。

「それって」

「守るって」

「男が女の子を守るものだろ？」

陽太郎はまた言った。

「それができないとき、やっぱりさ」

「そういう言葉はよく聞きますけれど」

「だからさ。特に気にすることはないさ」

「それでも」

「それでも？」

「本当に有り難うございます」

月美は微笑んだままそれでまた礼を言ったのだった。

第二十三話 嫉妬と憤怒その十

「今も」

「今もつて」

「受付の時も助けてもらいましたし」

「だからそういうのもさ」

「いいんですか」

「いちいち気にしなくていいよ」

月美に微笑んで話す。

「そういうことはさ」

「ですか」

「うん、それよりも」

陽太郎から言った。

「出ようか、お化け屋敷」

「あつ、そうですね」

言われてそれに気付いた月美だった。

「出ないといけませんよね」

「そうだよ。早く出ないとね」

「他のお客さん達が迷惑しますから」

「うん、じゃあ出ようか」

「はい」

月美は陽太郎の言葉に頷いた。そうしてだった。

陽太郎の左手にそつと寄り添ってだ。また告げた。

「行きましょう」

「うん、じゃあね」

「はい、それで今度は何処に行きます?」

「今度?今度は」

「何処に行きます?それで」

「絵でも観に行く?」

お化け屋敷を二人で出ながらだ。陽太郎は月美に話した。

「それじゃあ」

「美術部ですね」

「そこはどうか」

提案してそれからだった。

「美術部の部室でやってるけれど」

「そうですね。それじゃあそこに」

「行こうか」

「それと陶芸なんかもいいですよ」

「ああ、陶芸部の」

「そこもどうですか？」

月美も提案したのだった。

「一緒に」

「ああ、いいな」

陽太郎は真面目な顔で月美のその言葉に頷いた。

「それじゃあそこも行くか」

「はい、それで」

「何か行く場所多いよな」

陽太郎も微笑んで月美に話した。

「文化祭って」

「全部回るのが大変ですね」

「そうだよな。けれどそれでもな」

「行きます？」

「できる限りそうする？」

「私はその方が」

「俺も。じゃあ決まりだな」

二人横に並んで話をした。そうして決めたのだった。

そしてだった。二人で学校の中の様々な場所を歩くのだった。二人はこの文化祭を心から楽しんでた。二人は幸せの中にいた。

だがその中でだ。不穏な空気もまた渦巻いていた。幸せは急に変

わるものでもある。秋の空と同じ様に。不変のものではないのだ。

第二十三話 完

2010・9・29

第二十四話 過ちその一

第二十四話 過ち

星華は二人を連れてだ。その日の朝最初に月美に対して言った。

「あのさ」

「はい？」

月美は丁度椎名と朝食を食べていた。パンを両手に持ってそのうえで口に運んでいるがそれを止めて彼女に応えたのである。横で椎名が目を光らせている。

星華達はその椎名に警戒を抱いていた。それで声のトーンと勢いをわざと殺してだ。そのうえで月美に対して話をするのだった。

「今日の最後だけねど」

「はい」

「後片付け御願いできる？」

「こう彼女に言ったのである。

「それ。駄目？」

「いえ、後片付けですよね」

「ええ、そうよ」

その通りだと月美に返す。

「それだけねどね」

「それは皆でやるって決まっていますし」

「違うわよ、やる場所とかよ」

話すのはそれだった。

「倉庫担当して欲しいのよ」

「倉庫ですか」

「あそこをね。御願いできる？」

「担当は」

「最初は私だったけれど」

州脇が出て来て話す。

「ちょっとバレーの部活の方で用事が入って」

「それでなんですか」

「そういうことだからね」

やや高圧的に月美に言う。

「わかったわよね」

「え、ええ」

月美はいつも通り弱気な声で返す。

「それじゃあ」

「わかったわね。それじゃあ」

「私も」

「私もだし」

橋口と野上もそうだと言うのだった。

「それじゃあいいわよね」

「私達の分もね」

「それで私もね」

ここで星華も言ってきた。

「その時間駄目だから」

「四人共ですか」

「そういうこと。だから御願いな」

星華が代表して話した。

「倉庫の方ね」

「はい」

星華は四人の言葉に弱気なこえで答えた。しかしであった。

椎名は違った。その四人をじっと見てた。そのうえで言うのだった。

「おかしい」

「おかしって何がよ」

「四人共そうなんておかしい」

こう言うのである。

「部活も違うのに」

「何よ、疑ってるっていの？」「うん」

その通りだと。星華の問いに返した。

「そうだけれど」

「けれど本当なんだからね」

困った顔で何とか返しはした。

「私だつてね。色々忙しいのよ」

「一人ならわかる」

「一人ならて」

「ただし。四人ともなると」

「信じられないっていうのね」

「その通り。ねえつきぴー」

星華達に言つてからだ。月美に顔を向けて言った。

「断ればいい」

「断ればいいって」

「そう、あからさまにおかしいから」

だからだというのである。

「断るべき」

「ええと、けれど」

「何か裏がある」

また言う椎名だった。

「どうせ仕事押し付けようとか」

「うつ・・・」

凶星だった。それを言われた星華達はだ。嫌な顔をしてそのうえでだ。椎名の前で戸惑った顔を見せるのだった。それは隠しきれないなかった。

第二十四話 過ちその二

それで困っていた。ところがだ。思いも寄らぬところから助け舟が出た。

その月美がだ。こう言ってきたのである。

「あの」

「あの？」

「あのつて？」

「それなら私」

こう言ってきたのだった。

「受けますけれど」

「そうよ、忙しいんだからね、こっちも」

「当然でしょ」

四人はその月美に礼を言うことなく無然と返した。

「それはね」

「ならこれで決まりね」

「はい、それじゃあ」

それに頷くとだった。しかしであった。

椎名はだ。ここでまた言うのだった。

「つきぴーって」

「うん、どうしたの？」

「お人よし過ぎ」

そうだとするのである。

「そんなのだから」

「そんなのだから？」

「色々苦労する。けれど」

それでもだと。椎名の言葉がここで変わった。

そしてである。こう月美に話すのだった。

「それがいい」

「いいの？」
「そんなつきぴーだからいい」
「こう話すのである。」
「なら頑張って」
「有り難う」
「私も時間ができたら助けに行くから」
「ちよつと、何であんたが出て来るのよ」
星華は椎名まで来ると聞いてだ。顔をむつとさせて言った。
「そんなの駄目に決まってるじゃない」
「そんな校則はない」
「校則つてね」
「友達を助けるのは普通のこと」
椎名はこう言って星華達に反論する。
「それが悪い筈がない」
「くつ、このチビ……」
「いつも口ばかり立って」
「口だけじゃないから」
四人を牽制するように見ての言葉だった。
「動くこともちゃんとできる」
「ふん、じゃあやってみせなさいよ」
星華は苦い顔になって月美に話した。
「やれるものならね、あんたのクラスの仕事だけで手が一杯でしよ
うけれど」
「私は嘘は言わない」
「また言う椎名だった。」
「見ていること」
「くつ……」
星華も三人も齒噛みした。しかしそれ以上は言えなかった。
それだった。苦い顔で踵を返す。とりあえずは仕事を押し付け
ただけだった。

星華達はこれで一旦教室から姿を消した。そしてだ。

椎名はだ。あらためて月美に言ってきた。

「夕方よね」

「うん、後片付けは」

「その時任せて」

「こう言うのだった。」

「絶対に来るから」96

「来てくれるの」

「そう来るから」

月美に約束する。

「待っててね」

「有り難う、本当に」

にこりと笑ってそれで椎名に返す。

「いつもね」

「つきぴーだから」

「私だから」

「そういうこと。それでキャンプファイアーは」

「うん」

「斉宮と一緒に」

このことを強調するのだった。

第二十四話 過ちその三

「二人で踊って」

「陽太郎君と」

「そう、踊って」

「そうしてくれというのである。」

「だからね」

「うん、じゃあ私絶対にね」

「倉庫は終わらせて」

「こつ月美に話す。」

「早くね。私も本当に行くから」

「有り難う」

「恋の前に障害はつきもの」

「椎名はぼつりとこんなことも言った。」

「ただ」

「ただ？」

「それでもその障害は乗り越えるべきもの」

「そしてそれを乗り越えて？」

「そう」

「こつ一呼吸置いてまた話すのだった。」

「それからまた恋愛を深めていくものだから」

「だったら余計になのね」

「そう、頑張る」

「そうしろというのであった。」

「そういうことだから」

「恋愛って難しいものなのね」

「私も最近それがわかった」

「愛ちゃんもなの？」

「自分もやってみて」

パンをかじりながら頬を赤らめさせる椎名だった。

「そうしてそれでわかった」

「そうだったの」

「そう、そして」

「そして？」

「思った以上にいいもの」

パンをかじる顔が微笑んでもきていた。

「温かくて甘くて。切なくて」

普段の彼女からは思いも寄らぬ言葉だった。

「それでいて嬉しくて。不思議な感覚よね」

「ええ、本当に」

月美もその言葉に頷く。二人は朝も恋愛を確かめ合っていた。そうしてそのうえでだった。放課後のキャンプファイアーを見ているのだった。

文化祭はいよいよクライマックスだった。皆この日は特にせわしない感じだった。

三組もそれは同じでだ。厨房の中の狭山があちこち動き回っていた。

包丁はもう一度に何本も持っている感じだ。手も蛸みたいに八本あるように見える。

そんな忙しい中でだ。彼は言うのだった。

「ったく今日は特によ」

「あんたは今から」

ここで津島が彼に対して言う。

「忙しくて仕方がないって言う」

「忙しくて仕方がないぜって」

言うてから気付いた狭山だった。

それでメイド姿の津島に顔を向けてだ。それで言い返したのだった。

「あのな、何言うんだよ」

「本当に言つたじゃない」

「御前は何処かのスタンド使いの二代目かよ」

「あの時はまだ波紋だったじゃない」

「まあそうだけれどな」

「こつ指摘されてさらに弱る彼だった。」

「それでもな」

「それでも？」

「何変なこと言ってるんだよ」

「あんたが言うからよ」

「俺が？」

「そう、あんた今忙しくて仕方ないって思ってるでしょ」

「確かにな」

言いながらも包丁を使う手は止まらない。本当に手が八本に見える。

「実際にそうだしな」

「忙しい忙しいって言ってたら」

「駄目か？」

「そのことに頭が一杯になって他が見えなくなるじゃない」
指摘するのはこのことだった。

第二十四話 過ちその四

「そうでしょ？だからね」

「気持ちのリラックスさせるってか？」

「そういうこと」

彼女が言いたいのはそういうことだった。

「わかった？真面目にやるのはいいけれどリラックスするのも忘れないでね」

「それが怪我をしない為のコツってか」

「周りが見えなくなったら黄信号よ」

津島はこうも言った。

「そっからもう一直線だから」

「ううん、何かと危ない状況だったんだな、さっきまでの俺って」

「凄くね。注意しておいてね」

「ああ、わかった」

津島のその言葉に頷くのだった。そうしてだった。

狭山は周りを見ながら仕事を再開した。それでかなりリラックスもしていた。

陽太郎もだ。注文をあれこれと受けてそれで仕事をしていた。その中でだった。

赤瀬がだ。彼に言ってきたのだった。

「まずいね」

「まずいって？」

「あれが来てるから」

こう陽太郎に言ってきた。店の端にいる目つきの悪い男を密かに指し示した。

眉は剃っていて非常に短い黒い学生服の下から赤いシャツが見える。ズボンも黒でタックが二ついつている所謂ボンタンだった。

髪は左右は黒く刈っていて上だけが金色である。赤瀬はその男を

見ながら言つのだつた。

「あれが堀内だよ」

「あの三山のか」

「うん、そのね」

その彼だというのである。

「何してもおかしくない奴だから」

「若し店の中で暴れたら」

「その時は僕が出るよ」

彼がだというのだ。

「相手が拳銃持つていても勝てるから」

「拳銃でもかよ」

「日本刀持つてる相手何人も相手にしたことあるし」

「何でそんなことになつたんだ？」

「練習の時に」

その時にだというのである。

「ちよつとね。ハードにやろうつてことになつて」

「いや、それハードつてものじゃないだろ」

「けれどそういう修行もあるんだ」

修行と来た。

「道場によつてはね」

「何処の山奥の修行なんだよ」

「人にはちよつと言えない場所。椎名さんの紹介で」

「またあいつかよ」

「だから。相手が拳銃持つててもね」

「大丈夫なんだな」

「うん、安心して」

そうだと。陽太郎に話すのだつた。

「そういうことだから」

「その言葉信用させてもらつていいんだな」

「是非」

「こう答えたのだった。

「ああいう奴だったら何てことはないから」

「いや、その時は俺も行くさ」

「君も？」

「ああ、俺もな」

強い顔になっていた。

「行くさ」

「というと剣道だよな」

「棒持たないと駄目だけれどな。それでもな」

「棒？あるよ」

「あるのか？」

「何処にでもあるよ、それは」

赤瀬はこう陽太郎に話すのだった。

「棒だったらね」

「箒でも何でもか」

「そうだよ、だからその時はね」

「何でも戦うか」

「うん、だから」

「ああ、わかった」

これで頷く陽太郎だった。そしてだった。

第二十四話 過ちその五

あらためて堀内を見る。そうしながら赤瀬に言った。

「それにしてもな」

「彼のことだね」

「ああ、如何にもって感じだよな」

「こう言うのだった。」

「本当にな」

「見るからに悪そうってことだよな」

「実際に何をしてもおかしくない奴なんだろう？」

「そうだよ。中学校の時なんかはね」

「知ってるのかよ」

「近くだったから聞いてたんだ」

「それでだというのだ。赤瀬もまた彼を見ている。そうしながら二人で話すのだった。」

「よくな」

「それでか」

「喧嘩も聞いていたけれど」

「他のことが」

「いじめにカツアゲに恐喝に万引きにね。女の子を襲ったりしたって噂もあるし」

「とことんの屑なんだな」

「女の子の方は未遂らしいけれど」

「それは幸いにしてだというのだ。」

「けれど実際にそういうことをしてきてるっていうのは」

「充分過ぎる程やばいってことだよな」

「ナイフも持ってるらしいし」

「武器もかよ」

「だからいざって時は気をつけて」

赤瀬は実際にその声を警戒させるものにしていて。そのうえで話すのである。

「怪我とかじゃ済まないから」

「だよな。それは御前もだよな」

「うん、わかってるよ」

それは既にだというのだ。

「そうした相手との戦いもわかっているから」

「その時が来ないことは祈るけれどな」

「それに越したことはないね」

「ああ、そうだな」

彼に警戒を向けながら仕事に戻る二人だった。仕事もそろそろ終わりに近付こうとしていた。そしてそれはこのクラスだけではなくだった。

四組でもだ。仕事が次第に終わろうとしていた。昼食が終わって暫くするとだ。誰もが終わってからのことを話すのだった。

「いよいよだな」

「ああ、キャンプファイアーだな」

「ああ、それな」

「もうすぐだよな」

「けれどな」

しかしだった。彼等は今は現在の世界にいた。まだ来るべき未来にはいない。だからだった。その現実に戻るしかなかった。

その現実はまだ。いささか面白いものだった。

そのことに溜息をついてからだ。彼等は話した。

「今は最後の仕事をしないとな」

「ああ、そうだな」

「そろそろ終わらせるんだよな」

「店じまいだよな」

「ああ」

この話だった。何につけてもそれだった。

店はまだ営業していた。しかし今は終わるその時間を待っていた。それで待っているのは彼等だけではなかった。星華もだ。その時を今か今かと待っていた。

そしてだ。何時も周りにいる三人に声をかけたのだった。

「ねえ」

「行くのね」

「今からね」

「ええ、行くわ」

こう三人に話す。意を決した顔になっている。

「いいわよね、それで」

「そうね。今しかないわね」

「言っんなら」

「もうね」

「だからよ」

それでだというのだった。星華はそつと前に出る。三人もそれに続く。

その彼女達にだ。後ろから声が来た。

「おい佐藤」

「何処に行くんだ？」

「今休み時間なの？」

「ええ、そうよ」

休み時間という言葉に対して返した。

第二十四話 過ちその六

「これからね」

「そうか。だったらいいけれどな」

「それで」

「うん、ちよつと行って来るわ」

こう言つてだった。三人と共に三組に向かう。そうしてだった。

丁度店の前にいた陽太郎を見てだ。顔を赤くさせる。

そうしてだった。彼に言うのだった。

「ねえ、斉宮」

「あれっ、佐藤かよ」

「うん、あのね」

顔を真つ赤にさせたうえで口元に微笑みを浮かべてだ。そうして彼に言うのだった。

「これが終わつたらだけれど」

「終わつたら？」

「ええと」

「ここで、だった。口ごもってしまった。それで言えなくなったのだった。」

だがここでだ。三人が彼女にかわつて陽太郎に話す。

「キャンプファイアー空いてるかしら」

「ちよつと時間があればいいから」

「踊つて欲しい娘がいるのよ」

星華の横と後ろから話す。

「それでなんだけれどね」

「星華ちゃんなんてどうかな」

「それどう？」

「ああ、悪い」

陽太郎は気持ちに気付いていなかった。それで、である。素っ気

ない声で返した。それと共に右手を横に振るのだった。

「それはできないんだ」

「えっ、どうしてなの？」

「俺月美と踊るから」

「だからだというのである。」

「だからな。駄目だよ」

「えっ、それって」

星華がそれを聞いてがっかりとした声をあげた。

「どうしてなのよ」

「どうしてって俺達付き合ってるから」

「付き合ってるって」

「それ言っただけじゃなかったっけ」

星華にきょとんとした顔になって言葉を返した。

「確かな」

「そ、そうだったかも知れないけれど」

「悪いな、佐藤」

やはり気付かないまま言葉を返す。

「それは無理だからな」

「うっ……」

「他に誰がいるだろ」

気付かないままの言葉である。

「そいつと踊ったらどうだ？」

「ちよつと、それはないんじゃないの？」

「そうよ」

「せめてよ」

三人が引っ込んでしまった星華に代わって言う。

「ほんの少しだけでもね」

「踊ってあげても」

「それも駄目だっていうの？」

「だからこれって彼女と踊るものなんだろう？」

何もわかっていないまま返す。

「そうだろ？だからな」

「……わかつたわ」

星華は観念した声で言った。

「それじゃあね」

「悪いな」

陽太郎は申し訳ない声で彼女に謝った。

「そういうことだからな」

「ああ、いいから」

顔では笑っていた。

「気にしないで。私の我儘だし」

「誰か他の相手選んでくれよ」

「誰かいるだろ？一人は」

「多分ね」

答えた。だが俯いてしまっていた。

その俯いてしまった顔でだ。陽太郎に対して言ったのである。

そのうえでだ。顔を彼に見せないようにしてまた言った。

「それじゃあね」

「ああ、またな」

「ええ、じゃあ」

こつ言つて踵を返してだった。陽太郎の前を去った。

第二十四話 過ちその七

三人がその彼女を追いかける。そうして彼女に声をかけた。

「ね、ねえ」

「大丈夫？」

「落ち込んでない？」

「え、ええ」

歩きながら俯いている。そのうえでの返事だった。

「それはね」

「またチャンスがあるから」

「挽回しよう」

「その時にね」

三人も必死に彼女を宥めようとする。しかしだった。

今の星華は心が乱れていた。それはもうどうすることもできなくなっていた。顔にもそれが出てしまっていた。俯いて隠していたのだ。

そのまま足早に駆け去ろうとする。だがここで。

前から来た男にだ。ぶつかってしまった。

「おい、何なんだよ！」

「えっ!?!」

顔をあげるとだ。そこにはだ。

堀内だった。この男にぶつかってしまったのだ。

堀内はすぐに癡悪な顔を向けてだ。星華に言ってきた。

「手前何のつもりだよ。俺に喧嘩売ってるのかよ」

「そ、それは」

「喧嘩なら買っぞ」

女相手にも何の容赦もしない彼だった。

「それで相手してもらっぞ」

「相手って」

「どう落とし前つけるんだよ」

星華の胸倉を今にも掴まんばかりだった。

「一体よ」

「そ、それは」

「ちよ、ちよっと待ちなさいよ」

「あんた一体何なのよ」

三人は星華の後ろでおろおろとしながら言っただった。

「星華ちゃんいじめるの？」

「だったら許さないわよ」

「そんなことしたら私達が」

「何だっというんだよ」

堀内はその三人をジロリと睨んだ。

「御前等が相手をするのかよ、俺のよ」

「あ、相手って」

「何なのよ」

「何するつもりなのよ」

「俺は何人でもいいんだぜ」

下卑た顔を向けての言葉だった。

「それこそな」

「ちよ、ちよっとまさか」

「あんたそんなこと考えてるの？」

「何て奴なのよ」

「それでどうするんだよ」

堀内は三人がおろおろしているのを見てさらに言ってきた。嵩にかかっていた。

「御前等四人どうして落とし前つけるんだよ」

「どうしてって」

「落とし前って」

「それって」

三人はもうどうしていいかわからなくなっていた。

そしてだ。星華はだ。ここで言ってしまった。

陽太郎に断られその原因をふと脳裏に思い浮かべてしまった。
それだった。

「わかったわよ」

「あん！？相手するのかわよ」

「そうよ、だからね」

そしてだ。言ってしまった。

「倉庫に來なさいよ」

「倉庫！？」

「この校舎の一階にあるわ。その端にね」

そこにだというのだった。

「來なさいよ、後でね」

「後かよ」

「一時間程したらよ」

時間も言った。言ってしまった。

「來なさいよ。いいわね」

「覚悟はいいんだな」

「ええ、いいわよ」

勢いそのまま言う。

第二十四話 過ちその八

「わかったわね、それで」

「その言葉忘れるなよ」

堀内は星華の言葉を受けて言い返した。

「いいな、絶対にだぞ」

「わかってるわよ」

また言ってしまった。

「それじゃあ一時間後ね」

「ああ」

「その時倉庫でね」

「行くからな、その時にな」

こう言い捨ててだった。堀内は何処かに行ってしまった。そして後に残ったのは四人だけだった。橋口がここで星華に言ったのだ。

「あの、今のって」

「今のって？」

「倉庫って言ったわよね」

眉を暗くさせながら星華に言うのだった。

「確かに」

「そうよ、言ったわ」

「いいの？それって」

「そうよね」

州脇と野上もここで言った。

「あの、そこにいるのって」

「あの二人だけね」

「いいじゃない、どうなつてしまえばいいのよ」

完全に我を失ってしまった。それが今の星華だった。

「あんな連中」

「まあ西堀とあのチビだしね」

「あんな連中どうなってもいいか」

「それにね。あいつ等強いし」

「そうよね」

彼女達もだ。知らず知らずのうちに自己弁護を行っていた。

そうしてだ。星華のその言葉に頷いたのだった。

「じゃあ」

「いいか」

「そうね。あんな奴だし」

「それだったらね」

「どうなっても」

逃げていた。自分自身から。だが自分では気付かないことだった。そうしてだった。彼女達はそそくさと逃げるようにして言い合った。

「ねえ星華ちゃん」

「行こう」

「そうしよう」

その星華に対して話す。

「それでね。今からね」

「私達の作業にかかろうよ」

「そうしよう」

「そ、そうね」

星華もだ。隠した顔で三人の言葉に頷いた。

そうしてだ。彼女も三人に話した。

「じゃあ教室片付けてね」

「うん、それしないとね」

「早くしようよ」

「今からしないと間に合わないわよ」

「そうよね。それじゃあ」

四人共そそくさと立ち去ったのだった。

その倉庫では今は月美だけだった。暫く一人で倉庫の整理を行っ

ていた。

几帳面な彼女らしくゆつくりとだが的確に整理を進めていた。そのせいか倉庫は確実にまとまってきていた。

倉庫の中は暗くそのうえ密室になっている。三方が色々なもので埋まっている。そしてあちこち埃だらけだ。その中で作業をしているのだ。

その倉庫にだ。誰かが来た。

「愛ちゃん？」

月美は椎名だと思いそうして扉の方を見た。しかしそこには。

「あれっ、あの連中いねえな」

「えっ……」

椎名ではなかった。堀内だった。彼が目つきの悪い顔で入ってきたのだ。月美はそれまで扉に背を向けてしゃがみ込んでいた。しかし彼を見てすぐに立ち上がりだ。身体全体を彼に向けたのだった。

そしてそのうえでだ。彼は言うのだった。

「その代わりに何だよこいつは」

「あの、貴方誰ですか？」

「ふうん、胸はでけえし」

まずは月美のその大きな胸を見てだった。

「しかも脚は綺麗だし顔もいいし」

「だから誰なんですか？」

「いいじゃねえか。二人きりだしな」

「二人きりって」

「手前に相手してもらおうか」

「相手……」

その言葉と言葉を発する表情に本能的に身構えた。

第二十四話 過ちその九

「あの、何ですか相手って」

「すぐにわかるさ。それじゃあな」

「あの、人を呼びますよ」

「呼んだって来るかよ。それに」

堀内はだ。ここでまた言った。

「人が来て困るのは手前だけ」

「どうしてなんですか、それは」

「鈍い奴だな。まあいいさ」

堀内が一步前に出た。それを見て月美は一步退いてしまった。そしてだつた。

堀内が襲い掛かって来た。月美の手首を掴んできた。

「きゃっ！」

「ほら、大人しくしろよ！」

「い、嫌です！」

必死に抵抗しようとする。

「私は。私には」

「何だつてんだよ」

「決めた人がいます。ですから」

「そんなこと俺の知ったことかよ！」

これが堀内の返答だつた。

「手前のことなんてな！」

「そんな……！！」

「わかつたら大人しくしろ！」

右の拳を振るってきた。それで月美の腹を打つた。

その一撃を受けてだ。月美の動きは止まった。

「うぐっ……」

「どんな奴でもこれでいちころなんだよ」

堀内はうづくまつた彼女を見下ろして酷薄な笑みを浮かべた。

「さて、それじゃあ楽しませてもらうか」

「陽太郎君……」

上から覆い被さるうとしてきていた。だが何もできなくなっていた。

倉庫にだ。椎名が向かっていた。もう一人いた。

「俺かよ」

「そう」

その通りだと。陽太郎に対して言うのだった。

「だってつきぴーの仕事だから」

「手伝えっていうんだな」

「嫌ならいい」

椎名は一旦突き放しもしてきた。

「それならそれで」

「別にそんなの言ってないだろ」

これが陽太郎の返答だった。

「俺は一言もな。そんなことはな」

「じゃあいいのね」

「当たり前だろ」

そしてこう返したのだった。

「あいつが困ってたら何でも付き合っさ」

「いい返事。それじゃあ」

「ああ、早く行こうぜ」

こんな話をしながら倉庫に向かっていた。そして倉庫に近付くようになった。

椎名の耳がだ。その声を聞いた。その瞬間にだ。

即座に懐からあるものを取り出して陽太郎に言ってきた。

「これ持って」

「えっ、これって」

「特殊警棒」

黒光りするその金属のものを出して手渡したのである。

「それでダツシユで倉庫に向かおう」

「って何かあつたのかよ」

「声が聞こえた」

その目が鋭くなっていた。

「今確かに」

「おい、声って」

「一刻の猶予もない」

椎名はもう多くは話そうとしなかった。

そしてだ。彼女から駆けたのだった。

「行く」

「!?!? 一体何があつたんだ?」

陽太郎は何が何なのかわからなかった。だが彼もまた椎名の後ろを追い倉庫に向かった。

堀内は月美の身体を仰向けにさせようとしていた。そうしながらだった。

「へっ、鍵はもうかけてるからな」

「そんな……」

「誰も来やしねえよ」

このことを強調して告げたのだった。

第二十四話 過ちその十

「諦めな、いいな」

「陽太郎君……」

「例え誰か来てもな」

またこのことを言ってきた。

「恥をかくのは手前だけ。襲われる姿見られるんだからな」

「うう……」

「わかつたら大人しくしゃがれ」

言いながら髪の毛を掴んだ。その長く綺麗な髪の毛をだ。

「いいな」

「誰か、陽太郎君……」

陽太郎をだ。その瞼に見ていた。だが全てを諦めようとしていた。

その時だった。

「よし」

扉が開いてだ。この声が出た。

その開いた扉の向こうからだ。彼女が言った。

「正義の味方参上」

「正義の味方だと!？」

「そう、私」

椎名だった。月美に覆い被さったまま扉の方に向いた堀内の目の前にいた。

「私が出来たからもう終わり」

「何だっつてんだ、手前はよ」

「つきびーの友達」

それだというのである。

「それが私」

「じゃあ手前は何するってんだよ」

「勿論つきびーを助ける」

言いながらだ。右手にスタンガンを出してきた。そうしてだった。一歩前に出る。するとだった。

堀内も月美からその身体を離してだ。立ち上がりそのうえで椎名に向かおうとする。その椎名を見てからこんなことを言うのだった。

「何だ、チビじゃねえかよ」

「チビって言うな」

「こんなチビが俺をやっつけようっていつのかよ」

「そう」

こう一言で毅然として返す。

「その通り」

「このチビ」

「チビって言うな」

またこの言葉を出す椎名だった。

「どっちにしろつきぴーは守る」

「手前がかよ」

「そう。覚悟しておくこと」

「そのスタンガンで何するっていうのかよ」

「それだけじゃない」

椎名は堀内を見上げながら話す。足は一ミリも後ろに引かない。

「私はスタンガンだけじゃない」

「何っ、どういうことだよそりゃ」

「そして」

ここからだ。彼に仕掛けた。

その耳には外の音も聴こえていた。足早にこちらに駆けてくる音がだ。

その音を聴きつつだ。言うのだった。

「齊宮」

「えっ、陽太郎君!？」

堀内の後ろでようやく身体を起こした月美がその声に反応した。

「陽太郎君がここに」

「ここよ」

椎名は普段より大きな声を発していた。ただ声に感情は込めていない。

「この倉庫の中」

「そこか！」

「直角に曲がって飛び込んで」

その陽太郎の声にまた言う。

「そして」

「そして？」

「飛び込んで面一本」

こうその声に告げた。

「まずはそれ」

「ああ、わかった！」

陽太郎の声が頷く。そうしてだった。

実際に彼は倉庫の中に飛び込んでだ。それと同時にだった。

「めーーーーーん！」

掛け声と共に一本出す。それは椎名に気を取られていた堀内の額を直撃した。

第二十四話 過ちその十一

「ぐっ……」

「お見事」

椎名はその一本を見て静かに言った。

そのうえでだった。彼女も前に出てだ。堀内の腹にスタンガンを当ててスイッチを入れた。

額を割られ蹲まろうとする彼に電流が襲った。それに苦悶の声をあげた。

「うぐぐ……」

「止め」

椎名はさらに動いた。最後は彼の急所をだ。まともに蹴り飛ばしたのだった。何かが割れる様な、嫌な響きの音が倉庫の中に響いた。

「これで終わり」

「ああ、これでいいんだな」

「そう、つきぴーは助かった」

こう陽太郎に話す。

「これで」

「そうか。それにしても一体何があったんだ？」

陽太郎は警棒を椎名に返して呼吸を整えながら話した。

「それで」

「つきぴーが襲われてた」

そうだったと。気を失いその場に崩れ落ちている堀内を見ながら話す。

「こいつに」

「あつ、こいつ確か」

陽太郎はその蹲る彼に気付いた。

「堀内じゃないか、三山高の」

「その通り」

「まさかこいつが月美を」

「襲おうとしていた」

「何っ、そうだったのかよ」

「まさに間一髪」 78

こつこつ言う椎名だった。

「けれどももう安心」

「最後の一撃が凄かったみたいだな」

「もう二度と女の子を襲えない」

そこまですべてなっているというのである。

「何があっても」

「徹底してるな」

「悪い奴には容赦しない」

椎名の考えがここに見事に出ていた。

「絶対に」

「絶対にかよ」

「特につきぴーに何かしようとした奴は」

「それでもかも。潰れただろ、今は」

「うん、潰した」

わかっててやった椎名だった。その言葉には何の迷いも後悔も罪悪感もない。

「両方共」

「終わったな、こいつ」

「後で警察に通報する。それで少年院送り」

椎名はさらに言った。

「それで絶対に終わり」

「少年院から出たらまた悪さするだろ」

「その時の手も打つ」

椎名はとにかく容赦しないのだった。

「安心して」

「そうか。まあとにかくな」

陽太郎は椎名との話を終えて月美を見た。すると彼女は。

何とか立ち上がった。そうして陽太郎達を見て言うのだった。

「来て、くれたの」

「ああ。最初からそのつもりだったんだよ」

「その通り」

陽太郎と椎名はこう月美に答えた。

「ただな、こいつが急に駆け出してな」

「声を聴いたから」

「声を？」

「そう、聴いた」

だからだという椎名だった。

「急いで来た」

「それでだったの」

「つきぴーのピンチには駆けつける」

さながら正義の味方の言葉だった。

「嘘は言わない」

「有り難う、愛ちゃん」

「御礼はいいから」

「しかしな」

ここで陽太郎が言うのだった。

「よく聴こえたよな」

「そのこと？」

「ああ、それだよ」

椎名が聞いたというそのことを言うのだった。

「よく聴こえたよな、本当に」

「私は耳がいい」

「そういう問題か？」

「耳だけでなく目や鼻もいい」

だというのだった。

「ちなみに視力は二・〇」

「かなりいいな」

「しかも近くのものもよく見える」
「目がかなりいいのは確かだった。」

第二十四話 過ちその十二

「そう、五感はしっかりしている」

「それにしても何か人間離れしてないか？」

「だから今回の危機を察することができた」

「それでよしとするか？」

「そう考えてくれたらいい。とりあえずは」

「ああ、とりあえず？」

「危機は去った」

それはだというのだった。

「それでは赤瀬を呼んで」

「それからどうするんだ？」

「こいつを学校から放り出してそのうえで警察に連絡する」

「で、少年院に送ってか」

「そうなる。これで一件落着」

こつ話す椎名だった。

「そういうことだから」

「よし、けれどな」

「けれど？」

「さつき凄く嫌な音がしたんだけれどな」

陽太郎はまだ気絶している堀内を見た。上から見ているのでわからないがその顔は白目を剥いて口から泡を吹いて悶絶している。

「まさかな」

「そのまさか」

そうだというのだった。

「さつきも言った通り両方潰したから」

「うわ、死んだんじゃないのかそれって」

「死んでても自業自得」

平気な顔で言う椎名だった。

「気にすることはない」

「いや、幾ら何でもやり過ぎじゃないのか？」

「悪党には容赦しない」

まるで何処かの拳法の継承者の如き言葉である。少なくともそこには一片の容赦もない。それがよくわかる椎名の今の言葉だった。

それを言っただけだった。椎名は携帯を取り出してきてきた。そうしてだ。

「さて」

「赤瀬呼ぶんだな」

「こいつを学校から放り出す。そこにお巡さんと呼ぶから」

「こいつ前から随分悪いことしてきたからな」

「それも全部わかるから何もかもが終わり」

「そういうことか」

「うん。それで斉宮」

ここまで話したうえで陽太郎に対して声をかけるのだった。

「つきぴーを御願い」

「あ、ああ」

陽太郎は彼女の言葉にすぐに頷いた。そうして月美を見る。見れば彼女はやつと落ち着きを取り戻して二人のところに来たのだった。そうしてだ。陽太郎に対して言うのだった。

「あの、陽太郎君」

「ああ、何ていうかさ」

陽太郎は落ち着きを必死に保とうとしながらそのうえで彼女に応えた。

「今回のことはあの、その」

「有り難うございます」

月美はその陽太郎に対してぺこりと頭を下げてから述べた。

「本当に助かりました」

「いや、俺は」

「愛ちゃんについて来ただけじゃないですよね」

陽太郎が何か言う前の言葉だった。

「ここに来てくれたのは」

「いや、それは」

「本当に有り難うございます」

また頭を下げる彼女だった。

「お陰で助かりました」

「俺より椎名の方が」

「いや、ナイトは斉宮」

椎名がぼつりと言った。

「それは間違いない」

「俺がナイトなのか？」

「そう、ヒロインのピンチを救ったナイト」

まさにそれだというのである。

「斉宮の面があつてこそだった」

「いや、止めをさしたのは御前じゃないか」

「あの面がなかったら私は何もできなかった」

「だからなのかよ」

「そういうこと。勲功第一位は斉宮」

椎名はまた言った。

「おめでとう」

「そうなのかよ」

「それでなのですが」

月美はもう陽太郎のすぐ傍まで来ていた。そして彼に言うのだった。

「あの」

「あの？」

「よかったですね」

「よかったですら？」

「今度私の家に」

こつ彼に言うのである。

「来て下さい」

「えっ、それって」

「ナイトは姫の申し出を受けるもの」
また言う椎名だった。

「とりあえずは」

「とりあえずは？」

「赤瀬が来てこいつを放り出して」
また堀内を見ての言葉だった。

「そうしてからここを整理して」

「俺達の本来の仕事だよな」

「それからフォークダンスだから」

「そこまで話をしたのだった。」

「それじゃあ頑張ろう」

「ああ、それじゃあな」

「わかったわ、愛ちゃん」

こうしてだった。三人はまずは赤瀬が堀内を放り出してから倉庫整理にあたった。そうしてからだった。文化祭の最後の時間に向かうのだった。

第二十四話

完

第二十五話 キャンプファイアーその一

第二十五話 キャンプファイアー

「そんなことがあったんだ」
「そう」

椎名が赤瀬に話していた。今二人は教室にいる。手早く後片付けをしたので今は元の教室に戻っている。喫茶店だった名残はない。

「危なかった」

「あいつ、やつぱり」

「それでだけれど」

椎名はここで赤瀬に問うた。今教室にいつのは彼等だけだ。

「そのあいつは」

「ああ、言った通り放り出しておいたよ」

「そうなの」

「学校の裏手にね」

そこにだというのだった。

「丁度そこにお巡さん達がいてくれたから」

「呼んでおいたから」

「相変わらず用意がいいね」

「事前に準備しておけば何でもできる」

椎名はこのことがよくわかっていた。少なくとも某国の赤い官房長官よりは遥かに、いや比べ物にならないまでわかっているのだ。た。

「だから」

「その通りだね。じゃああいつはこれで」

「そう、終わり」

まさにそうだというのであった。

「多分少年院に送られて」

「全然反省しないで出て来るかも知れないよ」

「そうはならない」

「あいつが反省するっていうのかな」

「それはない」

赤瀬の今の言葉にはすぐに首を横に振って答えた。

「ああいう奴はそれは絶対にない」

「じゃあ何でそうならないっていうの？」

「多分送られるのは」

「うん、だから少年院だよ」

「網走超高等少年院」

何とも剣呑そうな名前の少年院だった。

「あそこまで悪い奴はそこに送られる」

「網走なんだ」

「そこに入れられたら終わり」

そうした恐ろしい場所だというのだ。世の中恐ろしい場所は幾らでもある。

「十年で出ても」

「うん」

「出た瞬間に闇業者が来てどっかの国で地雷処理に出される」

物騒な話であった。椎名はその物騒な話をいつもと変わらない無表情で話す。

「歩いて」

「ええと、歩いて？」

「そう、応援団付きで」

「応援団ってどんなの？」

「後ろで機関銃持つてる応援団」

さらに物騒な話になっていた。少なくともそこに人権やそういうものが欠片程もないことは赤瀬も聞いているだけでわかった。

「そうした場所に送られるから」

「それって中東とかその辺り？」

「多分。そうして消えていくから」

「恐ろしい話だね、それって」

「悪党に生きる資格なし」

「ここでも何処かの拳法の伝承者みたいなことを言う椎名だった。

「そこまでしていい」

「地雷原歩いてもだね」

「噂では他にもある」

椎名はここでまた言った。

「そう、こつちも凄い」

「凄いつてどんなのかな」

「内臓牧場」

その言葉だけで血も凍る単語であった。

「それ」

「ええと、考えたくないけれど」

赤瀬の常識の中ではだ。それは最大限におぞましい話だった。つ

まりそれは。

「あれ？臓器売買の？」

「そう、ドナーになる」

「やっぱりそうなんだ」

「噂じゃ高く売れる」

実際に臓器売買はかなりの闇ビジネスになっている。それにまつ

わる黒い噂や不気味な都市伝説も後を絶たない。実際にある話もそ

こにあるのだ。

「それもかなり」

「内臓がねえ」

「角膜とかそこも」

つまり目であった。

第二十五話 キャンプファイアーその二

「売れるから」

「どっちにしてもそこに入れられたら完全に終わりなんだね」

「そういうこと。送られそうになかったら根回しするし」

椎名の特技発動であった。

「安心していいから」

「逆にあいつのことが心配になるかな」

「悪党に情けは無用」

またこんな言葉であった。

「だからいい」

「まあ僕もある程度以上はその言葉に同意するよ」

「有り難う」

「まあとにかくね」

「うん」

「西堀さんに何もなくてよかったよ」

赤瀬はこのことにほっと胸を撫で下ろしていた。そのうえで椎名にさらに尋ねた。

「それでだけれど」

「つきぴーのこと？」

「うん、今どうしてるかな」

「私達で倉庫整理を終わらせて」

「そうしたんだ」

「倉庫整理は得意」

椎名の得意ジャンルの一つであるというのだ。

「要するに倉庫番だから」

「随分古いゲームやってるんだね」

「けれど大好き」

「成程ね」

「他にはフロッキーとかちゃっくんほつぷとかロードランナーも好き」

椎名は自分の好きな古いゲームをあげていった。どれもパズルゲームである。

「ああいうゲームが」

「懐かしいね、どれも」

「チャンピオンシップロードランナー」

恐ろしいまでの難易度を誇るゲームの名前も出た。

「全ステージクリアした」

「余計に凄いね」

「うふふ」

勝ち誇る微笑みがここで出た。

「やったから」

「椎名さんってそういうゲーム好きなんだ」

「手で動かすのだったらルービックキューブも」

これまた懐かしいものを話に出してきた。

「あれも得意」

「ううん、頭の回転速いんだね」

「とにかく倉庫整理はそういうのと同じだから」

つまりパズルだというのだ。

「すぐに終わらせられる」

「そういうことなんだね」

「そういうこと。それでつきぴーと斉宮は」

「今何処にいるの？」

「キャンプファイアーの場所に向かっている」

そこにだというのだった。

「全てが終わって」

「そう、よかったね」

「終わりよければ全てよし」

椎名の言葉がまた来た。

「ハッピーエンド最高」

「そうだね。それが一番いいよね」

「そういうことだから。じゃあ」

「うん、じゃあ」

「私達も」

椎名達もだというのだった。

「それじゃあ行こう」

「僕達もなんだ」

「これまで言った通り」

「そういえばそうだね。ずっと言ってたよね」

「そういうことだから。一緒に行こう」

「僕達もフォークダンスに」

「踊れるから」

椎名の言葉はここでもぽつりとしたものだった。

「私も」

「実は僕は」

「ダンス駄目？」

「苦手なんだよね」

赤瀬の顔が苦笑いになった。椎名はその彼の顔を見上げている。

そうしてそのうえで彼の顔を見て話をするのであった。身長差は五十はある。

第二十五話 キャンプファイアーその三

「そういうのは」

「そうなの」

「それでもいいかな」

「いい」

いいというのだった。

「高校のダンスはそれでもいいから」

「いいんだ」

「そう、いい」

また話した。

「それよりもそういうことを気にしたら駄目」

「気にせず踊るんだね」

「恥ずかしがっていても何にもならない」

「じゃあやっぱり」

「一緒に踊ろう」

椎名はまた赤瀬に話した。

「そういうことで」

「わかったよ。それじゃあね」

「一緒にね」

こうして二人も向かうのだった。そしてであった。キャンプファイアーの場所にはであった。狭山と津島も一緒にいたのであった。

二人もそこで話をしていた。それは。

「何かあつという間だったよな」

「この文化祭？」

「ああ、本当にあつという間だったよな」

こう話すのだった。

「あれやこれやで動いてな」

「そうよね。何か気付いたら終わってたって感じよね」

「さつきまで執事の服だったのにな」

「私もメイドだったし」

「それが今じゃ制服だしな」

見れば二人共今は制服姿である。その姿で話すのだった。

「何か本当にあつという間だな」

「気付いたらフォークダンスね」

「こんなの入学したときは想像もしなかったよ」

「そうね。同意するわ」

「けれど」

ここであった。津島は微笑んだ。そうして狭山に話す。二人はまだ燃え上がっていないそのキャンプファイアーを見ている。火もまだだ。

「今からよ」

「まだ食いたかったな」

「食べたかった？」

「ああ、お菓子とかな」

「あれだけ食べたのにな？」

「美味かったからな」

それでだというのだ。

「だからな。もうちょっとな」

「ふうん、だったらね」

「だったら？」

「はい、これ」

津島は何処からか何かを出してきた。それが何かというのだった。クレープだった。それを出してきてだ。そうしてそのうえで狭山に言うのだった。

「食べる？」

「何処から出してきたんだよ、それ」

「それは言わない約束よ」

顔を正面に向けて左手でそのクレープを差し出していた。

「だからね」

「食べていいんだよな、これ」

「まだあるから」

「まだなのね」

「そう、まだ」

「こう話すのだった。」

「まだあるから」

「そういえば御前今胸のポケットから出してなかったか？」

「それがどうかしたの？」

「滅茶苦茶不自然だろ」

「そんなことは気にしない。とにかくね」

「食べていいんだな」

「そう、どうぞ」

津島はまたクレープを勧めた。

第二十五話 キャンプファイアーその四

「何個でもあるから」

「何個でもか」

「クレープ以外にもあるから」

「何でもあるんだな」

「お菓子なら任せて」

言いながらだった。自分はスカートの右のポケットに右手を入れてだ。そうしてそこから板チョコを出してそれを食べて話を続けるのだった。

「パンもあるけれどね」

「パンは欠かせないんだな」

「一日一食は絶対に御飯を食べるようにしてるけれど、それはだというのだった。

「ただ。それでもね」

「パンはなのね」

「そう、パンは絶対よ」

「欠かせないのね」

「そういうこと。だからね」

また言う津島だった。

「パンは欠かせないわよ」

「じゃあパンもか」

「持つてるわよ」

そうだとするのである。

「何なら出すけれど」

「いや、それはいいよ」

「いいのね」

「お菓子だけでいいさ、今はな」

「じゃああげるわよ」

「ああ、悪いな」

実際にそのクレープを受け取ってだった。狭山は食べはじめた。そうしている間にだった。陽太郎や椎名達も来た。そうしてだった。

椎名が言うのだった。

「もうすぐね」

「そうね」

月美が彼女の言葉に応える。

「文化祭もこれで終わりね」

「有終の美」

椎名はまた言った。

「最後は楽しく華やかに」

「そうだよな。色々あったけれどな」

「うん」

陽太郎に対しても述べた。

「これで終わりだよな」

「そうね。斉宮は」

「俺は？」

「綿私的にはこの文化祭のMVP」

「それだというのである。」

「まさにそれ」

「俺がか」

「そう、斉宮が」

また彼に話した。

「最優秀選手」

「今度は日本語なんだな」

「あえて変えてみた」

「何で変えたんだ？」

「何となく」

こう答えるところがやはり椎名だった。その表情もいつも通りな

い。その無表情で鷹揚のない言葉で話していくのもいつも通りだった。

しかしだ。それでも彼に確かに言った。

「それでだけれど」

「ああ」

「教室では普通だった」

そちらはだというのだ。

「教室の最優秀選手は津島」

「あいつか」

「津島がいなかったらここまでできなかった」

こう話すのだった。

「だから。最優秀選手は間違いなく津島」

「そうなんだな」

「そう。ただ」

「ただ？」

「それでも最優秀選手」

どうしてなのかはあえて言わなかった。彼女も陽太郎もそこはあえて言わなかったし問わなかった。月美のことを気遣ってである。

そのうえで告げてだ。そうしてだった。

「じゃあ後は」

「フオークダンスだよな」

「二人で楽しんできて」

こう陽太郎に告げた。

「思う存分」

「ああ、そうさせてもらうな」

「私達も踊るから」

言葉は複数称になっていた。わかつてのことである。

第二十五話 キャンプファイアーその五

「だから」

「何か夢みたいだよ」

陽太郎はここでその言葉を恍惚とさせた。

「こんなのもってさ」

「けれど夢じゃない」

「ああ、そうだよな」

「つきぴーは現実にいる娘だから」

「だから夢じゃないんだよな」

「そういうこと。だから現実を思いきり楽しんでくればいい」

「現実って楽しいものなんだな」

津島のその言葉にだった。陽太郎はこのことに気付いたのだった。

「そうだったんだな」

「そう。ただ」

「ただ？」

「楽しみだけじゃないけれど」

言葉がいささか哲学的なものにもなった。

「それだけじゃないけれど」

「苦しみもあるっていうのか」

「愛別離苦」

この言葉を出す椎名だった。

「それもある」

「そうした悲しいことも辛いこともか」

「全部ある。それが現実」

「ややこしいんだな、それじゃあ」

「そう。ただ」

「ただ？」

「それは仮想の世界も同じ」

そちらもだというのである。つまりアニメや漫画や小説、ゲームの世界もだ。そうした世界もまた現実と同じものだというのである。

「現実には人が作るもの」

「人が住んでる世界だからだよな」

「そう。そして仮想も人が作るもの」

「それで同じなんだな」

「そう、人には楽しみがあつて」

まずはその楽しみから話すのだった。

「悲しみや苦しみがあるから」

「だからそつちもなんだな」

「そう。どの世界も同じ」

「ユートピアとかそういうのってないんだな」

「ない」

断言だった。

「それも人が作る世界だから」

「結局楽しみや苦しみがあるのか」

「そしてその人は」

「ああ、人は？」

「神様が創つたもの」

この言葉も出た。神だった。

「その神様達がどう思っているかも関係するから」

「神様なあ。俺の場合は」

「何？」

「仏様なんだよな」

そちらだというのだ。日本においては古来より神と仏はおおむね同じものとして考えられている。日本独自の考えである。本地垂迹説等がそれだ。

「だからな」

「家仏教だったの」

「元々な。爺ちゃんがあれなんだよ。お寺でさ」

「お坊さんね」

「それも両方な。ひよっとしたら俺も将来は」

「頭つるつる」

「いや、それはしなくてもいいから」

それはいいというのである。

「宗派の関係でさ。それはいいんだよ」

「そうなの」

「ただ。お坊さんになるかもな」

陽太郎は首を傾げさせながらこう話した。

「ひよっとしたらな」

「お坊さんに」

「将来のことはわからないけれどさ」

このことが最もわかりにくいことだ。まさにこの世は三寸先は闇であるからだ。未来のことは誰にもわかりはしないのである。そういうことだ。

第二十五話 キャンプファイアーその六

「それでもな。ひよっとしたら」

「じゃあつきぴーはお寺の奥さん」

「だからどうしてそうなるんだよ」

「つきぴーはそれでいいの」

椎名はここでは陽太郎を一旦無視して月美に尋ねた。彼女はずっと陽太郎の傍にいる。そこで無言で立っていたのである。その彼女にだった。

「それで」

「私はそれで」

「そう、それでいい」

こつ月美に話す。

「だって斉宮がそうなるから」

「陽太郎君がそうなるから」

「そう。だから」

また話す椎名だった。

「それでいい」

「うっん、そうなの」

「斉宮に合わせるタイプだし」

「それはやっぱり」

月美の性格をよくわかっていた。そうしての言葉だった。

「そうしないと」

「そう。だから」

「俺がお寺の坊さんになるのはいいのか？」

「なればいい」

陽太郎には素っ気ない返答だった。

「好きにすればいい」

「それだけかよ」

「そう、それだけ」

やはり素っ気ない、愛想も何もない返答である。だがそれはあえてしていた。彼女の照れ隠しとそして気遣い故の言葉なのである。

「向いてると思うし」

「向いてるか？俺が坊さんに」

「頭剃らないで済むのよね」

「ああ、その宗派はな」

それはいけるというのである。最近の日本の仏教は宗派によって頭を剃らなくてもいいのだ。勿論剃らなければいけない宗派も存在する。

「それは自由なんだよ」

「じゃあそれでいい。斉宮は禿げないし」

「おっ、それ本当か？」

「うん、禿げない」

「そうだとするのである。」

「禿げないから」

「だったらいいけれどな」

「禿は男にとつて最も恐ろしい恐怖ね」

「信じられないまでの恐怖だよ」

「その通りだよ」

陽太郎だけでなくだ。狭山もここで力説してきた。

「男で一番怖いよ、それはよ」

「僕もそう思うね」

赤瀬も参戦してきた。

「禿るってというのは。怖いよ」

「前から来るか天辺から来るか」

「それともつむじから来るかな」

「生え際からエムの字で来るのもあるし」

禿げ方もそれぞれである。バラエティに富んでいると言える。

「どれも怖いよな」

「ああ、禿げたら人生の殆どが終わりだよ」

「恐怖だよな」

「それはわかる」

椎名もこのことは充分わかっていた。やはり天才軍師だった。

「けれど三人共薄毛にはなっても禿げはしない」

「そうなのか」

陽太郎はそれを聞いて述べた。安心した顔になっている。

「薄くなっても禿はか」

「ないから。ただし薄くなる可能性はある」

それはあるというのだった。

「それは注意しておいて」

「わかったよ。ケアは大事ってことだな」

「頭皮のマッサージに洗った泡もじっくりと落とす」

頭の洗い方の話もした。

「とにかく気をつける」

「ううん、洗い方は」

「例えばオールバックやリゼントにする」

「ジェルやポマードとかか」

「その髪型の時はじっくりと洗わないと駄目」

「整髪料って髪の毛に悪いからな」

「特に毛根を埋める。これが問題」

椎名は詳しい。何処からもだった。

第二十五話 キャンプファイアーその七

「だからよく洗う。最後は冷水で頭皮を」引き締めるのも忘れない」
「最後は冷水か」

「それまでは熱湯。油を溶かして洗う」

「このことも話す。椎名はこうしたところまでわかっていた。

「そうすること」

「わかった。じゃあそうするな」

「斉宮が薄毛になったらつきぴーが悲しむから」

「私そんなことで別に」

「じーーーーっ」

椎名は月美が言おうとしたところでだ。右手の人差し指を自分の口元に当ててだ。そうしてそのうえで月美に対して言うのだった。

「斉宮が格好いい方がつきぴーにとっていいから」

「それがかよ」

「そう、私は何処までもつきぴーの力になる」

陽太郎への言葉だった。

「何時までも」

「有り難う、愛ちゃん」

「そういうこと。それだったら」

「それだったら？」

「そろそろはじまる」

椎名の言葉が変わった。

「そう、そろそろ」

「そうね。もうその時間ね」

「その通り。だから」

「今から用意をしよう」

「何か話が急に変わるな」

陽太郎は椎名のその言葉に難しい顔になって話す。

「右から左にな」

「風の中の羽根の様に」

「何時も変わるってか？」

「それが世の中だから」

「だから話もか」

「うふふ」

「うふふじゃねえだろ、そこで」

陽太郎は少し怒った顔をしてみせて抗議する。しかしここで、だ
った。

放送が聞こえてきた。その放送は。

「それでは皆さん」

「おっ、いよいよだな」

「そうね」

狭山と津島が笑顔の声を出した。

「じゃあいよいよ」

「踊りましょう」

「そうだね。じゃあ」

赤瀬はだ。椎名を見る。首がかなり下に向いている。

「僕達もね」

「踊ろう」

「何かこのカップルはな」

「踊れるのかしら」

「安心すること」

椎名が狭山と津島に言い返す。

「私ダンスは得意だから」

「いや、身長差がな」

狭山が指摘するのはやはりここだった。

「それは大丈夫なのかよ」

「それは問題にならない」

「大丈夫なのかよ」

「全然平気」

「こつ言つのである。」

「ノープロブレム」

「英語もなんだな」

「それじゃあ踊ろつ」

「一同に話した。」

「それぞれの場所で」

「ああ、そうだな」

陽太郎が椎名のその言葉に頷いてであつた。そうしてだ。

全員フォークダンスの中に入った。陽太郎は当然月美の手を握っている。

その二人を見てだ。周りがまた言う。

「やっぱりあの二人って」

「そうよね」

「付き合ってたんだな」

「一年の普通科の？」

「三組と四組の」

「剣道部と居合部の」

こつそれぞれ言つていくのであつた。

第二十五話 キャンプファイアーその八

「何時の間にああなっ たんだろうな」

「気付いたらただけれど」

「けれどよく見たらあの二人って」

「お似合いか？」

「そうだよな」

「こんな言葉も出ていた。

「あの斉宮って結構格好いいよな」

「背もそこそこあるしな」

「顔も悪くないし」

「確かにな」

男連中からもだった。陽太郎は好意的に見られていた。

そして椎名もだ。女組の言葉だった。

「四組にあんな綺麗な娘いたなんてね」

「意外なところにいるってどうか」

「髪も綺麗だし胸も大きいし」

「何か反則よね」

そんな声を聞いてだった。月美は恥ずかしそうに顔を赤らめさせ

る。そうしてその顔で陽太郎に対して言うのであった。

「あの、何か」

「気にすることないさ」

陽太郎はその月美に優しい声で話した。

「周りの声なんてさ」

「けれど」

「気にしない気にしない」

また言う陽太郎だった。

「そんなことはさ」

「そうなんですか」

「今は踊ることに集中しよう」

その優しい声での言葉だった。

「いいよな、それで」

「踊りに」

「もうすぐはじまるぜ」

「こっ月美に告げた。」

「だからさ。そちらに」

「わかりました」

月美も陽太郎のその言葉に頷いた。

「それなら。今から」

「音楽はじまるかな」

陽太郎は無意識のうちには耳を澄ました。するとだった。

静かで穏やかな曲が流れてきた。それを聴いてすぐにだった。

月美にだ。また告げたのだった。

「じゃあ今からな」

「はい」

「踊ろうか」

「そうですね。それにしても何か」

月美もその音楽を聴いている聴きながらでの言葉だった。

「こっして。陽太郎君と踊れるなんて」

「それがどうかしたのかい？」

「夢みたいですよ」

「こっ言ってまた頬を赤らめさせる月美だった。」

「本当に。何か」

「夢じゃないさ」

陽太郎はその月美に優しく告げた。

「その証拠にさ」

「証拠に？」

「俺、月美の温かさ感じてるから」

それが証拠だというのである。

「だからさ。夢じゃないさ」

「だからですか」

「そうだよ。じゃあいよいよ」

「はい、いよいよ」

「踊ろうか」

陽太郎が先に身体を動かした。月美もそれに続く。

二人は両手を握り合わせそのうえで前に出た。二人で微笑みを向け合っている。

その微笑みのまま陽太郎が左手をあげると月美がそこに自分の左手を合わせてくるりと一回転した。陽太郎は後ろからその彼女を支える。

そうしたダンスをしながらだ。二人は幸せな時間を楽しんでいた。

第二十五話 キャンプファイアーその九

だがそんな彼等を見てだ。星華は忌々しげに呟いた。

「何だつてのよ、全く」

「そうよね。星華ちゃんが折角誘ったのに」

「それ袖にしてあんな奴と一緒に踊って」

「どうかしてるわよ」

三人も口を尖らせてこうそれぞれ言う。

「それにあいつも」

「ああ、あの馬鹿よね」

「結局倉庫に行かなかったみたいよね」

「行く筈ないじゃない」

星華も軽く考えていた。

「どうせさ。あんな奴って」

「気まぐれだしね」

「自分勝手に動くし」

「忘れてたんでしょうね」

「そうよ。だからああして二人で楽しく踊ってるのよ」

星華はまた月美を見て言った。暗闇の中で赤い炎に照らされてだ。

二人はその中で幸せに満ちた顔で踊り続けているのである。

「役に立たない奴ね」

「あいつ、あそこで殴られてたらよかつたのに」

「そうよね、それで泣いて逃げてたらね」

「面白かったのに」

三人にとつてもそんな軽い調子だった。

「それで何もなかったって」

「どんだけ使えないのよ」

「所詮ゴロツキはゴロツキよね」

「まあいいわ」

星華は言い捨てた。

「それじゃあだけれどね」

「うん、星華ちゃん」

「これからどうするの？」

「それで」

「今日はもう早く寝ましょう」

そうするとううのだった。

「早いうちにね」

「寝るの」

「そうするの」

「そうよ、寝ましょう」

星華はまた言った。

「どうせすることないんだし」

「そうね、それじゃあね」

「早いうちにね」

「寝て忘れましょう」

「明日はお休みだし」

文化祭の後の休日になっているのだ。

「何処か行きましょうよ」

「じゃあ百貨店なんてどう？」

橋口がそこに行くことを提案した。

「そこ、どう？」

「ああ、いいわね」

「それじゃあね」

州脇と野上も彼女のその提案に頷いた。そうしてであった。

星華に対してはだ。三人で言うのだった。

「星華ちゃんもどう？」

「百貨店ね」

「どうかしら」

「そうね」

星華も幾分気を取り直した顔になってだ。そうして頷いたのだ
た。

「それじゃあね」

「それでいいわね」

「じゃあ明日は百貨店ね」

「そこね」

「ええ、わかつたわ」

こうしてだった。彼女達は百貨店に行くことになった。しかしだ
った。

星華はまた陽太郎と月美を見た。相変わらずキャンプファイアー
の炎に照らされてそうしてそのうえで踊っている。その二人を見て
だった。

第二十五話 キャンプファイアーその十

「見てなさいよ、絶対にね」

「そうよ、絶対にゲットしようね」

「もうこうなったらね」

「何があってもね」

こう話してだった。そうしてであった。

星華はまた意を決したのであった。

「斉宮は私のものだから」

「そうそう、頑張つてね」

「応援してるからね」

三人も星華に対して声をかける。彼女達はこう話をして今はキャンプファイアーの前から離れた。やがてダンスは終わりそうしてだった。

陽太郎は月美と共にダンスの輪から離れてだ。そのうえで楽しく話すのだった。

「何か緊張したよ」

「緊張しました？」

「うん、したよ」

こう月美に話すのだった。にこりと笑つてだ。

「何か普段以上にな」

「そうだったんですか」

「ああ、それつてやっぱりな」

「やっぱり？」

「月美が相手だったからな」

それでだというのである。

「それでだよ」

「私が相手だったからですか」

「そうだよ。フォークダンスって運動会とかでいつもやるじゃない」

「はい」

学校の出しものの定番の一つでもある。何かとよく踊るものだ。しかも種類が多いからバリエーションも豊富なものなのである。

それを話してだった。陽太郎は笑顔で月美を見ていた。そうしてだった。

「そういう時は何とも思わなかったんだよ」

「緊張もしなかったんですね」

「そうだよ。月美は？」

「私はちよっと」

陽太郎から顔を外して正面にしてだ。俯いての言葉だった。

「男の子と手を握りますよね」

「ああ」

「それが恥ずかしくて」

「それでだというのである。」

「ですから」

「ああ、それでだったんだ」

「はい」

恥ずかしそうな顔でこくりと頷いたのだった。

「それで」

「そうだったんだ」

「そうなんです。けれど今のフォークダンスは」

「今のは？」

「これまでよりずっと緊張しました」

「そうだったと話す月美だった。」

「本当に」

「そうだったんだ」

「はい、それはやっぱり」

また陽太郎に顔を向けてだ。彼に言った。

「陽太郎君が相手ですから」

「だからか。俺だから」

「はい、そうです」

こう彼に話す。

「陽太郎君と一緒にだと。本当に」

「ううん、そうだったんだ」

「それで」

さらに話す月美だった。

「フォークダンスで一番緊張しました」

「何か今の言葉聞いてさ」

「はい？」

「俺、凄く嬉しいけれど」

見ればだ。陽太郎はその顔を真っ赤にさせていた。そうして月美から顔を少し逸らしてだ。左手の人差し指でその顔をかきながらだ。言うのだった。

第二十五話 キャンプファイアーその十一

「けれどそれと同じ位」

「同じ位？」

「恥ずかしいんだよな」

「恥ずかしいですか」

「俺ってそこまでの人間かなって」

「こう言う陽太郎だった。」

「月美にそこまで言われるような」

「それは違う」

いきなりだった。椎名が出て来た。そのうえでの言葉だった。

「斉宮は充分それに値する」

「うわっ、いつもながら急に出来たな」

「神出鬼没が私の長所」

「長所だったのかよ」

「そう、長所」

まずはここからの話だった。そうしてだった。陽太郎にあらためて言う椎名だった。

「斉宮はつきぴーを救った」

「倉庫のあれかよ」

「それはその資格があるということ」

「月美にこんなこと言われる資格がか」

「そう、ある」

「こう話すのだった。」

「充分に」

「だといいいけれどな」

「それでだけれど」

「それで？」

「別に恥ずかしがることはない」

「それはいいのかよ」
「そう、いい」
こう話す椎名だった。
「とうか恥ずかしがる必要ないから」
「じゃあ喜ぶだけでいいのか」
「そういうこと。たっぷりと喜んで」
陽太郎に対して告げた。
「思う存分」
「何か妙な表現だな」
「気にしない気にしない」
さりげなく気にするように言うのがまさに椎名だった。
「何はともあれ」
「ああ」
「夜はまだ長いから」
椎名はこうも言った。
「充分楽しんで」
「楽しむって何を」
「キスでもすればいい」
椎名は大胆なことを言ってみせた。
「それでもすれば」
「おっ、おい椎名」
「愛ちゃん、それは」
陽太郎も月美も今の椎名の言葉には顔が真っ赤になった。
「幾ら何でもな」
「それはかなり」
「大丈夫」
「何で大丈夫なんだよ」
速攻で突っ込みを入れた陽太郎だった。
「そう言える根拠は何なんだよ」
「今回はちょっと」

月美もだ。今回ばかりは困惑していた。椎名の言葉にもだ。

「あんまりじゃないかしら」

「そうだよ。悪ふざけが過ぎるぞ」

「今回は悪ふざけじゃない」

「こつ言つ椎名だった。」

「安心していい」

「余計に安心できねえよ」

「私も」

陽太郎は声を少し怒らせていてだ。月美は困っていた。

「いきなり。キスなんてな」

「飛躍し過ぎじゃ」

「じゃあいい」

いいというのだった。椎名はだ。

第二十五話 キャンプファイアーその十二

「無理することはない」

「何だよ、引くのかよ」

「いいの？」

「無理する必要はないから」

「それでだというのである。」

「だから」

「じゃあ何でそんなこと言ったんだよ」

「キスなんて」

「二人にはそろそろと思ったから」

「それだけか？」

「それだけなの」

「そう、それだけ」

また言った椎名だった。

「二人がどうしてもっていうんならいい」

「つたくよ、心臓が止まるかと思ったよ」

「凄く驚いたけれど」

「二人の初々しさにかなり驚いてる」

椎名はそんな二人を見てまた話した。

「キスもまだなんて」

「それで今もっていうのかよ」

「そうなの」

「そう。かく言う私も」

「まだっていうのか？」

「まさか」

「そのうちする」

椎名の頬が少し赤らんだ。そのうえでの言葉だった。

「そう、そのうち」

「何だよ。結局一緒なんだな」

「そうなのね」

「そうなる。それを言ったら」

「同じだよな」

「そうですよね」

月美はここでは陽太郎に話していた。そうしてだった。

二人はだ。ここで息を合わせてこう椎名に話した。

「まあ俺達は」

「今日は夜空でも見ようかしらって」

「ロマンチストね」

「そういえば椎名って」

「うん」

「あれだったよな。天文部だったよな」

「その通り」

こう答えた椎名だった。

「覚えていてくれて有り難う」

「じゃあ星見るの一緒にどうだ？」

「よかつたら教えて」

陽太郎だけでなく月美も彼女に行ってきた。

「それじゃあ今から」

「どうかしら」

「わかった。じゃあ」

「ああ」

「一緒にね」

「赤瀬も呼んで」

彼もだというのだった。

「一緒に観よう」

「あれっ、何か楽しいこと話してるか？」

「何の話なの？」

ここで狭山と津島も来た。まさにいつもの面子だった。

「よかつたら俺も入れてくれよ」

「メンバーは多い方がいいわよね」

「ああ、それじゃあな」

「六人で」

陽太郎と月美が二人の申し入れを受けた。そうしてだった。

「じゃあ行くか」

「今から屋上に」

「ナイスポイント」

また椎名の言葉である。

「それじゃあ今から皆で屋上に」

「よし、何かよくわからないけれどな」

「屋上ね」

狭山と津島は細かいことはこだわらずにこう言ったのだった。

そしてだ。その二人が早速動きだした。

「行こうぜ」

「今からね」

「赤瀬も呼んで」

椎名は携帯を取り出していた。素早い指の動きでメールを入れた。それで終わりだった。

第二十五話 キャンプファイアーその十三

「これでよし」

「本当に速いな」

「ブラインドタッチしてなかった？愛ちゃん」

「ブラインドタッチは得意技」

こっぴど月美に答える。

「パソコンでも携帯でも」

「凄いな、それは」

「数やってればできる」

陽太郎にはこっぴど返す。

「そう、誰にでも」

「いや、それは無理だろ」

「ちょっと」

陽太郎と月美はその椎名に対していささか引きながら返した。

「そもそも御前ってさ」

「色々と特殊技能持ってるのね」

「天才美少女軍師ここにあり」

こっぴどでもこっぴど言うのであった。

「そういうことだから」

「説明になってない気もするがいいか」

「うっん、どうなのかしら」

月美は明らかに困っていた。陽太郎も釈然としない顔である。

しかした。二人はそれでもだった。屋上に行くことにはこっぴど
た。

「じゃあとにかくな」

「これから一緒に」

「そう、行こう」

椎名が言うようになった。その真後ろにだった。

いきなり赤瀬が来てだ。そうして言うのだった。

「呼んだ？」

「呼んだ」

実際にそうだと返す椎名だった。

「屋上に行こう」

「うん、それじゃあ」

赤瀬は椎名の言葉にあっさりと頷いたのだった。

「行こうか」

「これでよし」

椎名は小さく頷いた。

「行こう」

「うん、星を見にね」

こうして彼等は今は星を見るのだった。そうしてだ。

屋上でだ。彼等は星を見た。その中で陽太郎はまた言った。

「あのさ、月美」

「はい、何かありますか？」

「いや、月美の名前ってさ」

彼女のその名前からだった。月美というその名前からだ。

「月だけねどさ」

「この名前ですか」

「星も好き？やっぱり」

「はい、好きです」

その通りだと。こくりと頷いて答える月美だった。

「私確かに月好きですけれど」

「星もなんだな」

「大好きです」

こうまで言う彼女だった。

「お星様は昔から」

「そうだったんだな」

「こうして夜にお空を見るのは子供の時から好きで」

実際に月美は穏やかな笑顔でその夜空を見上げていた。無数の星達が瞬く夜空をだ。そうしてそのうえでこんなことを言うのだった。「ですから」

「俺もさ」

陽太郎は今度はこう言ってきた。

「あれなんだよ。星好きなんだよな」

「陽太郎君もですか」

「俺の名前は太陽だろ？」

その陽太郎という名前についても話すのだった。

「けれどそれでもさ」

「夜空もですか」

「好きだよ。星好きだよ」

実際にそうだというのである。

「俺も子供の頃からさ」

「そうなんですな」

「星座とか好きだし」

「あっ、そういえばあれは」

月美は夜空のある場所を指差した。そこには小さな七つ星があった。

第二十五話 キャンプファイアーその十四

「子熊座ですね」

「そうだよな。あれそうだよな」

「はい、そうですよね」

微笑んで言う月美だった。

「中心の星が北極星で」

「北の空の中心にな」

「そしてその周りに六つの星達があつて」

「北斗七星もいければあの小さなのもいいよな」

「はい、そう思います」

「小ぶりだけれど。それでも」

「お空を常に回っていて」

それがいいというのである。これが彼女達の考えだった。

「何時でも見られて」

「そうだよな。夜ならいつも」

「私達を見守ってくれているみたいで」

そしてだった。こう表現するのであった。

「凄くいいですよね」

「全くだよな。それでだけれど」

「それで？」

「俺が夜空で一番好きなのは」

このことをだ。今月美に話すのだった。

「やっぱりあれなんだよ」

「あれっていいいますと？」

「月なんだよ」

自分の隣にいる月美に顔を向けて。そのうえで言葉だった。

「月が一番好きだよ」

「月が、ですか」

「前から一番好きだったけれど今は特に
そうだといいのである。」
「好きだよ。月だから」
「だからですか」
「ついつい連想してさ」
「このことは隠さなかった。隠せなかったと言ってもいい。
ほら、月と」
「私と」
「名前ってそういう時凄いやな。ついつい連想してしまうから」
「私もです」
「月美もなんだ」
「お日様を見ていると」
「今度は彼女が陽太郎を見てだ。微笑みながら言ったのだった。」
「陽太郎君を思い出します」
「俺を」
「はい、陽太郎君をです」
「その彼をだというのである。」
「思い出します。自然に」
「俺の名前もそうだったんだ」
「名前って本当にあれですよ」
「今度はだ。月美が言うのだった。」
「凄いですよね。連想させてしまいますから」
「本当にな。けれど面白いよな」
「そうですね。本当に面白いですよ」
「連想できるってさ」
「そういうことができるのが」
「いや、本当に凄いや」
「陽太郎はさらに言う。」
「そういうことになるのって」
「ええ。それじゃあ」

「ああ、それじゃあな」

「お星様をもつと」

「見ような」

二人は完全に二人になっていた。そんな二人を見てだ。狭山と津島が苦笑いと共に言うのだった。

「もう完全に二人のものだよな」

「そうね。主役よね」

「俺達も楽しくやれたからいいけれど」

「あそこまでいくと。妬けるわよね」

「妬くよりも妬かれる」

「ここでも椎名が言った。

「そうするべき」

「正論だね。それじゃあ」

赤瀬が彼女のその言葉に頷いた。そうしてだった。

椎名にだ。こんなことを言うのだった。

「これから何しようかな」

「傍にいてくれたらそれでいい」

「それでいいんだ」

「そう、それでいい」

こう赤瀬に言うのだった。

第二十五話 キャンプファイアーその十五

「ただ」

「ただ？」

「肩車とかは駄目」

それはNGといたのであった。

「そういうのは」

「駄目だね」

「そう。下から見えるから」

その理由も話した。

「だからそれは」

「わかったよ。っていうか」

「っていうか？」

「最初からそういうことはしないから」

こう椎名に答える彼だった。

「椎名さんが嫌がりそうなことはね」

「有り難う」

「御礼はいいよ。じゃあこゝは」

「そう、妬かせる」

ここでもこう言った彼女だった。

「周りに」

「性格悪いな」

狭山がその椎名にここでも突っ込みを入れた。

「何気に」

「じゃあ言い換えるけれど」

「ああ。どう言っただよ」

「妬いてもらっつ」

こう言い換えたのだった。だがそれはだ。

狭山がだ。それを聞いてすぐにこう言ったことからわかることだ

った。その言ったことは。

「おい、それってよ」

「何？」

「一緒じゃねえのか？」

ここでの椎名の突っ込みはこれだった。

「それってよ」

「そうかな」

「ってそうだろ」

また言った彼だった。

「結局のところよ」

「そうかも知れない」

「って自覚してるのかよ」

「私は何時でも自覚してる」

「じゃあ確信犯じゃねえかよ」

「そうかも知れない」

またこう言う椎名だった。

「何はともあれ」

「ああ、妬かせるんだな」

「相手も妬かせればいい」

「それはわかつたけれど」

津島はそのこと自体はわかったというのだった。しかしであった。彼女も突っ込みを入れずにはいられないことがあった。それが何かというところだった。

「つまりこの場合は私達がお互いにそうすればいいってことよね」

「そういうこと」

「若し相手がいない場合だったらどうするのよ」

彼女が問題にするのはそこだった。

「その場合は」

「そういう相手には見せない」

「見せないの」

「そう、見せない」

「そうだというのだった。」

「そうした相手には見せない」

「気遣いつてやつね」

「私もそれは考えてるつもり」

椎名にしても人情はあるのだ。むしろそれはかなりはつきりしたものである。

「だから」

「それを聞いて安心したわ。じゃあ私もね」

津島はここまで聞いてにこりと笑ってだ。そのうえでだった。

狭山の方を見てだ。その笑顔で言うのだった。

「それじゃあね」

「俺かよ」

「そう、あなた」

まさしく彼であつた。

「いいわね。それじゃあね」

「ああ、俺じゃなきゃ駄目だよな」

「そういうこと。あなたもそうなんじゃないの？」

「ここに来てるだけでいいよな」

狭山は顔を赤くさせて返した。夜だがその赤さはわかるものだった。

「それで」

「いいわよ。それじゃあね」

「ああ、妬かせるか」

「お互い妬けばおあいこだからね」

「おあいこで済まない場合もあるけれど済む場合もある」

椎名がここでまた言った。

「それが今」

「そういうことね。じゃあ」

津島は狭山の手に自分の手を絡み合わせた。狭山もそれに応える。

三組のカップルは今は夜空を見上げていた。その星の瞬きの中にあるものを見てだ。

キャンプファイアー 完

2010・10・16

第二十六話 聴かれたことその一

第二十六話 聴かれたこと

文化祭の翌日。陽太郎は家に帰った。そうしてであった。

自分の部屋にこもってゲームをしていた。そこにであった。

「ねえ」

母の声だった。部屋の扉の向こうからだった。

「今日は何処も行かないの？」

「ああ、家にいるよ」

「こう返すのだった。」

「今日はさ」

「そうなの」

「やっぱり疲れたからさ」

「こう母に返すのだった。」

「だから今日はさ」

「そう。それじゃあね」

「それじゃあ？」

「お昼はカレーでいい？」

「これが母の言葉だった。」

「それでいいかしら」

「あつ、お昼カレーなんだ」

「レトルトだけれどね」

「ひょっとしてボンカレー？」

「そう、ボンカレー」

レトルトのカレーの定番である。昔からあるものだ。確かに定番であるがそれだけあって中々安定した味を持っているものである。

「それでいいわよね」

「辛口あるかな」

「あるわよ」

「じゃあそれで御願い」

陽太郎はすぐに答えた。ただしゲームを使う手は止まっではない。
い。

「ボンカレーの辛口でさ」

「ええ、そうするわね」

「何かカレー食べるのも暫くぶりかな」

「何言ってるのよ。この前作っただけじゃりじゃない」

「いや。ボンカレー」

ここで言うのはそれだった。

「それを食べるのがさ」

「そういえばそうかしら」

「そうだよ」

また応えた彼だった。ただし顔は相変わらず画面に向いている。

しかもそこから動こうともしない。それも全く、であった。とにかく今はゲームだった。

「最近なかったんじゃない？」

「お母さんお昼結構それが多いから」

「そうなんだ」

「ええ、だからね」

「カレーそんなに食べてるんだ」

「好きだし」

それが最初の理由だった。

「それにボンカレーって手軽じゃない」

「確かにね。お湯で温めるだけだしね」

「それに安くて美味しいし」

「最後の理由が一番重要じゃないの？」

「まあね。この二つは絶対よ」

扉の向こうから主婦に相応しい返答が来た。

「だからね」

「そういうことだよ。じゃあ」

「辛口ね」

「うん」

まさにそれだというのがあった。

「それで御願い」

「じゃあお母さんはね」

「他のカレーもあつたんだ」

「甘口にするわ」

彼女はそれにするというのがあった。

「それでね」

「甘口なんだ」

「別にいいでしょ」

「まあそれはね」

いいと返す陽太郎だった。実際彼にとっては母が何を食べようが別に構わなかった。それは彼には関係のないことだったからだ。

第二十六話 聴かれたことその二

「別にね」

「いいわよね。じゃあ時間が来れば温めるからね」

「うん、御願い」

「それで今日は外に出ないの？」

「部活も休みだしさ」

陽太郎が言う理由はそれだった。

「だから今日はずっとさ」

「ゲームなのね」

「もうかなりたまってるんだよ」

困ったような、それでいて実に楽しそうな声であった。それでも言ったのだった。

「やりかけのゲームがさ」

「そういえば高校に入ってからあまりゲームしてないわよね」
扉が開いた。そうして母が来たのだった。

そのうえで陽太郎が前に座っているその画面を見るとだ。今話題の格闘ゲームであった。母はそれを見たのであった。

「そのゲームなの」

「うん、今全キャラクター目指してるんだ」

「まあ好きにきなさい」

「本当に久し振りだよ」

陽太郎は母のいる後ろを振り向かずゲームを続けている。

「このゲームもさ」

「何もかもが久し振りなのね」

「そうだよ」

まさにその通りだった。

「だから思うように動かないんだよな」

「けれどやるでしょ」

「うん、やるよ」

それは絶対に変わらないことだった。

「そういうことだから」

「夜にはちゃんと寝なさいよ」

「わかってるよ。それはさ」

「じゃあ頑張りなさいよ」

「ゲームしてて頑張れっていつものもなあ」

「何でも頑張つてやることはいいことよ」

だからだという母だった。

「そういうことよ」

「それでなんだ」

「その通りよ。じゃあお母さんもね」

母もだ。楽しそうな声で言う。背中を向けたままの息子にだ。

「今からDVD観るから」

「DVD? 韓流ドラマ?」

「違うわよ。特撮よ」

「特撮ねえ」

「仮面ライダーのDVD買ったのよ」

まさに特撮の金字塔と言える名作である。それは最早日本の文化の一つと言つてもいい。ウルトラマンや戦隊と並ぶまでである。

「それ観るからね」

「長いね、そりゃまた」

「長いからいいのよ」

「だからいいんだよ」

「そうよ、だからなのよ」

母の言葉は笑っていた。

「観応えがあるじゃない」

「確かにね。九十八話もあるからね」

「映画版も買ったのよ」

これまた実に楽しそうに話す。

「じゃあ今から本郷さん観るから」

「俺は二号も好きだけれどな」

「勿論一文字さんも好きよ」

母は彼もだというのだった。

「どっちも大好きなのよ」

「そういうことなんだ」

「ダブルライダーが最高ね」

中々贅沢な趣味であると言えた。仮面ライダーの見せ場の一つでもあるのがダブルライダーの同時活躍だからである。

それをだ。母は好きだというのであった。

「そういうことだからね」

「うん」

そんなやり取りをしてだった。母は特撮に、息子はゲームに熱中するのだった。陽太郎は今はのどかな休日をおごすのだった。

そしてだ。月美はだ。白いふわりとした丈の長いワンピースにカーディガンという格好だった。その頭には白い幅の広い帽子がある。右手には白いバッグだ。その格好で駅前にいた。

するとだ。そこにだった。黒いタイトのミニに同じ色のジャケット、それと赤地のキャラクターがあるシャツを着た椎名が来た。スカートの下は黒タイツだった。

第二十六話 聴かれたことその三

その椎名を見てだ。月美は笑顔で彼女に言った。

「おはよう、愛ちゃん」

「うん、つきぴー」

椎名も彼女に言葉を返す。

そして月美の傍に来てた。ぼつりと言った。

「白と黒」

「白と黒？」

「そう、白と黒」

それだというのである。

「今の二人の色は」

「あつ、そうね」

月美もここでわかったのだった。

「そうよね」

「そう、白と黒」

椎名は二人の服をそれぞれ見てまた話す。

「そういうことだから」

「何か白と黒ってお揃いみたいよね」

「狙ってなかったけれどいい感じ」

椎名はここでもぼつりとした口調で話す。二人は今駅前の柱のところにいる。平日なので周りには殆ど誰もいない。静かなものである。

その静かな中だ。椎名はまた言うのだった。

「こういう感じが」

「そうよね。何かね」

「一緒にいて楽しい」

また言う椎名だった。

「こつ対象的だと」

「私も。色は全然違う筈なのにね」
「お揃いの感じがして」
「チエスかな。それともオセロなのかしら」
月美はにこりと笑って言ってみせた。
「これって」
「若しくは天使と悪魔」
椎名はこうも言った。
「つきぴーが天使で」
「私かなの？」
「そう、そして私が悪魔」
こう言うのであった。
「エンジェルアンドデビル」
「愛ちゃんは悪魔じゃないけれど」
「ブラックデビル」
「ブラックデビルって？」
「昔明石屋さんまがやっていたやつ」
「それだ。月美に話すのだった。」
「私はそれ」
「それなの？」
「そう、今の私はそれ」
「愛ちゃん悪魔だったんだ」
「そしてつきぴーが天使」
彼女はそれだというのだ。こう月美に述べるのだ。
「それだから」
「ううん、私が天使って」
「ホワイトエンジェル」
椎名はまた言ってみせた。
「つきぴーはそれ」
「白い天使って」
「白い天使と黒い悪魔」

「それって何か」

「そういう意味で御揃い。御揃いはいい」

こんなことも言ってた。椎名はそつと月美の手を握ってきた。椎名の左手と月美の右手がだ。ここで重なったのだった。

互いに温もりを感じてだ。月美の方から言ってきた。

「悪魔だけれど」

「うん」

「温かいね」

「そつ、悪魔でも温かいもの」

「そうなの」

「心があるから」

それでだというのだ。

「だから温かいの」

「心があるから温かい」

「その通り。心がないと冷たくなる」

言葉が逆説になっていた。しかし同じ意味だった。

「そういうものだから」

「心がないと」

「つぎぴーはとても温かい」

椎名は今度は月美の温かさを実際にその手に感じながら話した。それはもう秋だが夏の様にだ。熱いとまで感じるものだったのだ。

第二十六話 聴かれたことその四

「心がとても温かいから」

「それでなの」

「そう、だから」

心の温かさがそのまま出ているのだというのだ。

「つきぴーの手はとても温かい」

「愛ちゃんもよ」

「私もなの」

「うん、とても温かいから」

そうだというのである。

「やっぱりそれって」

「有り難う」

椎名は月美の手を握ったまま彼女に述べた。

「それじゃあ」

「うん、もうすぐ電話が来るわね」

「それに乗って行こう」

「八条百貨店よね」

「そう、そこ」

行き先はそこだった。既に決めていることだった。

そしてだ。そこに行っていた。

「そこに行くから」

「何か八条百貨店に行くのって」

「久し振り？」

「うん、考えてみたら」

月美は思い出してだ。そして話すのだった。彼女はこれまで何度かその百貨店に行っていた。だが考えてみれば最近は、なのだった。それでだ。そのことを思い出して話すのだった。

「そうよね」

「そういえば私も」

「愛ちゃんもなの」

「私もずっと行ってなかった」

「中学校の時以来？」

「うん、その時から」

月美もこのことを思い出していた。

「行ってなかった」

「私も。中学校を卒業する時に行ってから」

「それからはずっと」

「そうよね。本当に久し振りね」

「特に二人で行くのは」

「うん、そうね」

「かなり久し振り」

そうだと話してだ。電車に乗り百貨店に向かうのだった。その百貨店の中はだ。二人をして懐かしさに浸らせるかというところというものではなかった。

二人は人が行き交い様々な商品が並んでいる白い中を進んでだ。

こう言い合っただった。

「あまり変わらないね」

「というか全然ね」

「ええ」

その通りだというのだった。

「本当にね」

「うん、本当に同じ」

椎名も周りを見回しながら話す。

「何もかもが」

「百貨店の中ってそんなに変わらないものなのかしら」

「多分」

「多分？」

「色々変えてはいるんだと思う」

「そうなの」

「それも営業努力のうち」

このことはわかっているのだった。そこが椎名だった。
「ただ」

「私達がそれに気付かないのね」

「そう」

こつ月美に述べた。

「そういうことなの」

「そうなのね」

「そういうことだから。あっ」

椎名は不意に声をあげた。そうしてだった。

目の前にある小型のヒーターを指差してだ。そして言うのだった。

「ここには前」

「ここには？」

「電化製品じゃなくて家具があった」

「あっ、そういえば確か」

「それで今の家具のコーナーは」

椎名は左手を見る。その端にだった。

第二十六話 聴かれたことその五

家具が見えた。それを見ながらまた言った。

「あそこに」

「あそこは確か前は」

「電化製品のコーナーだった」

「そうだったわね、じゃあ」

「あえて場所を変えた。これは多分」

椎名の灰色の頭脳が動く。そのうえでの言葉だった。

「営業努力」

「これがなのね」

「考えて場所をコンバートさせて」

「どちらも売れるようにしたのかしら」

「商品は置かれる場所によっても売れ行きが違う」

その頭脳の働きのままだ。語る椎名だった。

「そういうことだから」

「それでなの」

「そう」

椎名はまた言った。

「それでだから」

「細かいところが大事なのね」

「細かいところこそが命」

月美にこう言い加える。

「わかってくれたら嬉しい」

「ええと、私そうしたことはまだ」

「よくわからない？」

「御免なさい」

月美は謝る言葉も口にしてきた。

「そういうものなのかなって思うけれど」

「じゃあ覚えておいて」

「覚えておくの？」

「覚えておいたら何時か同じようなことを見たら」

「その時になの？」

「そう、わかるから」

それでだというのである。

「だから覚えておいて」

「わかったわ」

まだよくわからない顔だがそれでも頷いた月美だった。

そのうえでだ。今度は本屋に向かった。二人はその本屋の純文学のコーナーの前に来た。そうしてそこでまた二人で話をするのだった。

「今日は何の本を買うの？」

「三島由紀夫のつもりだけれど」

「三島なの」

「そう、潮騒」

それだというのである。

「それを読もうかなって思うけれど」

「それなの」

「どうかしら」

読む本の題名を話したところで椎名に問うた。

「それで」

「いいと思う」

「いいのね」

「三島は文章がいい」

椎名は三島由紀夫のそこから話した。

「しかも作品が奇麗」

「そうよね。金閣寺もね」

「あれは私も読んだ」

「そう、愛ちゃんも」

「純文学にも最近凝ってる」

「こう言うのだった。」

「そう、つきぴーの影響で」

「私のなの」

「そう、つきぴーが読んでるから私も読んで」

「何か私が影響与えてるっていうと」

「友達だから」

「だからだというのだった。」

「だから影響受けてる」

「そうなの」

「つきぴーもその筈だし」

「私も？」

「そう、つきぴーも」

「彼女もだとだ。こう話すのだった。」

「例えばお昼は」

「お昼は？」

「何食べたい？」

椎名は三島由紀夫のその本を本棚から取り出しながら話すのだった。それは月美が読みたいと言っていたその潮騒であった。

それを月美に手渡ししながら。問うのだった。

「それで」

「ええと、スパゲティ」

「ソースは？」

「ネーロがいいかしら」

少し考えてから述べた月美だった。イカ墨のソースだ。パスタをそれで真っ黒にすることも有名なソースである。かなり美味い。

第二十六話 聴かれたことその六

「今日は」

「それ私の好物」

「あつ、そうだったわね」

「影響受けてるのわかった？」

「そういうことだったの」

「そう、そういうこと」

まさにそうだというのであった。

「友達はお互いに影響を受けるものだ」

「だから私もスバゲティをなのね」

「一方だけが影響を受ける訳じゃないから」

「私も愛ちゃんも」

「その通り。じゃあ私は」

「愛ちゃんは？」

「これ読む」

こう言つてであった。同じ三島由紀夫のコーナーからだ。一冊の本を問い出した。そのタイトルはサド侯爵夫人、我が友ヒトラーだった。

「これに」

「その作品は」

「戯曲だったね」

「うん、それ読むのね」

「こういう作品好きだから」

「戯曲がなの？」

「戯曲もだけれど作品の内容も好きだから」

そちらもだという椎名だった。

「倒錯とか政治とか。そういうのが」

「ええと、かなり危ない作品らしいけれど」

「そういうのが好き」

椎名の口の端に笑みが宿った。そのうえでの言葉だった。

「私は」

「そうだったの」

「私ドサドだし」

これは狭山がいつも言っていることだ。確かにその通りだった。

椎名は誰がどう見ても根っからのそちらだった。間違えようのないまでにだ。

「だから」

「それでサド侯爵夫人なの」

「何時かフランス語もマスターして」

椎名の言葉は続く。

「サド侯爵の本を原語で読みたい」

「あの、それは幾ら何でも」

「破っていいタブーと破っていけないタブーがある」

それがわかつているところもまた椎名だった。

「これは破っていいタブー」

「破っていいタブーなの」

「サド侯爵の本を読むことは」

「そっちはなのね」

「そういうこと」

「それじゃあ」

月美は椎名のその言葉を聞いてだ。もう一つの言葉について尋ねた。

「破ったらいけないタブーは」

「人に危害を加えるタブー」

それだというのである。

「傷つけることがそれ」

「そっなの」

「そう。だからそれは絶対にしない」

これが椎名の言う破つてはいけないことだった。

「何があつても。それに許さない」

「許さないの」

「そういうことだから」

そしてだ。月美の方を見てだ。こつ言つのだつた。

「つきぴー」

「ええ」

「行こう」

こつ言つのであつた。

「買いにね」

「本を」

「そう、カウンターに行こう」

具体的な言葉だつた。

「それで買おう」

「うん、それじゃあ」

「それで次は」

「スパゲティね」

「たっぷり食べよう」

「このパスタって」

月美はこんな話もしてきた。パスタ自体のことをだ。

第二十六話 聴かれたことその七

「本当に安くて美味しくて」

「しかも料理を作るのが早い」

椎名はこう言い加えた。

「そうした意味では猛虎堂に匹敵する」

「猛虎堂って？」

「とにかく安くて量が凄くあるお店」

そうだと。月美に対して話すのだった。

「かなりいい」

「そうしたお店もあるの」

「滅茶苦茶安くて飲み放題」

「お酒も出るの」

「つきぴーはお酒は？」

「ええと、それは」

実は飲んだことがない訳ではないがそれでもだ。いつも飲んでい
るといふ訳ではないのだ。だが椎名はこう言うのであった。

「お酒は飲むべし」

「飲むべきなの？」

「そう。飲んで飲んで飲みまくる」

こんなことも話すのだった。

「それもまた人生」

「そういえばこれから行くお店も」

「バイキングコースあるから」

「そこで食べ放題飲み放題なのね」

「安いけれどワイン飲めるから」

「一緒に飲むのね」

「そう、飲む」

実に率直に誘ってだった。本を買ったうえでそのパスタの店に入

る。そこは木の内装でプラスチックも使っている店だった。そこに
入ってだ。

二人で飲み放題食べ放題メニューを頼む。月美はその値段に少し
驚いた。

「千五百円でアルコールオーケーなの」

「そう、このお店は平日はそう」

「凄いね、ここって」

「食べ物を安く仕入れるにはコツがある」

「どんなコツなの？」

「ルート」

それだというのだ。椎名の言葉ではだ。

「それを使う」

「仕入れる道順なのね」

「そう、八条グループは独自のルートを持つてるから安い」

椎名は八条グループのそうした事情も知っているのだ。彼女の勉
強は学校に関する事だけでなくだ。こうしたことにも及んでいる
のだ。

それでだ。今パスタが来た。そのイカ墨だ。

黒くそこにイカとガーリックが見える。そしてオリーブをふんだ
んに使っている。二人の前にそのパスタが運ばれたのである。

それを二人で食べながらだった。月美は言った。

「これって」

「これって？」

「美味しいね」

にこりと笑って椎名に述べる彼女だった。

「本当にね」

「美味しいでしょ」

「うん。それに食べやすくって」

「パスタは気取って食べるものじゃないから」

「気軽なの？」

「そう、気軽に」

「こう言うのである。」

「そうして楽しく食べる」

「楽しくなのね」

「そういうこと。美味しく食べる」

言いながらその黒いパスタをどんどん食べていく。椎名は小柄だ。だが今はその小柄さを感じさせないまでに食べていっていた。

そうしてだ。頼んでいたワインも来た。赤ワインである。

デキャンタのそれを飲んでだ。彼女はさらに言った。

「それがイタリア」

「イタリアなの」

「イタリアは軽やかに美味しく食べる」

そうするとうのである。

「気取つたら駄目」

「そうなのね」

「だからここでは気軽にどんどん食べる」

「ええ、わかつたわ」

月美もそのパスタを食べている。そうしながら椎名の言葉に応える。

そうしてだった。彼女もワインを飲む。その味は。

「あつ、これって」

「美味しい？」

「ええ、とても」

実際にそうだと答える彼女だった。

「このワインも」

「このワインも飲み放題だけれど」

「それでも美味しいのね」

「飲み放題でも美味しいものは美味しい」

椎名はまたこう言った。

第二十六話 聴かれたことその八

「お金を出さなくても美味しいものは食べられる」

「それでもなの」

「安くて美味しいお店を見つける」

簡潔だが確実な言葉だった。

「それもまた頭の使いどころ」

「だから今もこうしてなのね」

「そういうこと。それじゃあ」

「それじゃあ？」

「スパゲティの次は」

見ればだった。椎名はもうそのイカ墨のスパゲティを食べ終えていた。実に早い。

そうしてだ。早速次を頼むというのだ。

「マカロニ」

「マカロニっていうとあれ？」

「そう、マカロニグラタン」

それだというのである。

「それどう？」

「マカロニよりもフェットチーネの方がよくないかしら」

月美ももうすぐそのイカ墨のスパゲティを食べ終えようとしていた。その最後の一卷きを口の中に入れながらだ。彼女は言うのだった。

「今は」

「そっちな」

「マカロニの他にラザニアも頼むわよね」

月美はメニューを開きながら椎名に問った。

「やっぱり」

「ラザニア大好き」

椎名はぼつりと言った。

「あれを最後に食べないと」

「パスタの最後はそれね」

「そう、それ」

「あつ、他にはこれどうかしら」

ここで月美はメニューを見ながらまた言うのだった。

「ペンネアラビアータ」

「それもいい」

「私も。これ好きなの」

月美はメニューを見ながら話す。

「じゃあこれもね」

「合わせて五皿」

「それとワインよね」

「そう、ワインも」

それも忘れなかった。ワインもだというのである。

そうしてだ。椎名はさらに話すのだった。

「そして最後は」

「デザートよね」

「ケーキがいい」

それだというのだった。ケーキだというのだ。

「デザートまで食べないと食べたとは言えないから」

「そういうことなのね」

「そういうこと。じゃあ」

「じゃあ？」

「まずはフェットチーネ」

二番目はそれに決めた椎名だった。月美の言葉を受けてだ。

「そして次にマカロニグラタン」

「それにするのね」

「四番目はペンネアラビアータ」

椎名は次々と決めていく。月美もそれを聞いていく。

「最後は」
「ラザニアね」
「それとワインとん」とん
「こちらは無制限であるといっているのである。」
「飲めるだけ飲むから」
「飲めるだけなのね」
「お酒の飲み方はとんとん飲むこと」
「それが飲み方なのね」
「そう、飲んでいくから」
「そうしていくとだ。椎名はいつもの抑揚のない言葉で述べていく。」
「そうしてだ。彼女は最後にこう言った。」
「締めは」
「何にするの？それで」
「ケーキは白」
「まずは色からだった。」
「白にするから」
「白になる」
「そう、生クリームを使った苺のケーキ」
「それだといっているのである。」

第二十六話 聴かれたことその九

「それにする」

「わかったわ。じゃあ私もそれでね」

「つきぴーはそれでいいのね」

「ええと。言われてみたら」

「こういうことは私に合わせなくていいから」

月美が自分に気を遣っているのを見抜いてだ。こつ話すのだった。

「だから」

「それでなのね」

「そう、パスタは全部つきぴーも好きよね」

「ええ、それはね」

食べて頼むことにしたその五つのパスタはだというのだ。

「私も好きだけれど、どれも」

「けれどケーキは」

「私専のケーキ好きよ」

「もっと好きなものがある筈」

「そうだといいのだった。椎名はだ。」

「だから。ここはいいの頼んで」

「そうなの」

「そう、つきぴーが食べたいものを頼む」

自分の前にいる月美を見ながらだ。話すのだった。

「何がいい、それで」

「ええと、それじゃあ」

「うん、それじゃあ」

「これにするわ」

メニューを見てだ。彼女は決めたのだった。

そうしてだ。こつ言ったのだった。

「これに」

「それね」

「ええ。チョコレートケーキ」

メニユーを開いてだ。椎名にそのチョコレートケーキを見せながら述べたのだった。その指差すところにはだ。実に美味そうなケーキがあるのだった。

「これにするわ」

「うん、じゃあそれで」

「やっぱり。私」

「チョコレートケーキ好きよね」

「苺よりもね」

まさにそうだというのだった。

「好きだし」

「そういうのは気を遣わなくていい」

「そうなのね」

「だから。じゃあ飲もう」

「うん」

椎名がワインが入ったグラスを持ったのを見て応えた。

「それじゃあね」

「楽しむ楽しむ」

ここではあえておどけて言葉を繰り返してみせた椎名だった。そうしてであった。

二人は昼食も楽しんだのだった。ワインもかなり飲んだ。しかしだった。

二人共表情はあっさりとしている。顔は全く赤くなっていない。

その顔でだ。まずは月美が言った。

「あの、ワインって」

「ワインは？」

「全然強くないお酒なのね」

そうだというのだった。

「私ボトルだとどれ位飲んだかしら」

「三本位」

椎名はこのことも頭の中で計っていたのだ。

「私は二本半程」

「それでも全然酔わないなんて」

「つきぴーお酒強い」

「強いかしら」

「私も強いけれどつきぴーはそれ以上」

そうだというのである。

「酒豪だったのね」

「私酒豪だったの」

「その証拠に全く酔ってない」

椎名はこのことを強く言った。

「それが何よりの証拠」

「そうなのね」

「それじゃあだけれど」

「次はね」

「服、見に行こう」

それだというのだった。

「これから」

「そうね、服もね」

「買わなくても見よう」

「買わなくても」

「そう、見よう」

こう言ってだ。椎名は月美のその右手を自分の左手で握ってきた。そのうえでの言葉だった。

第二十六話 聴かれたことその十

「それだけでも楽しくなるから」

「そうよね。服は見てるだけでもね」

「だから」

また言う椎名だった。

「行こう」

「うん、それでどの服を見に行くの？」

「ここは冬服」

それをだというのだ。

「それを見に行こう」

「冬服ね」

「秋はもう今だから」

「これからの服を見に行くのね」

「その通り。例えばコートとか」

「あっ、コートっていったら」

それを聞いてだ。月美の顔がふと気付いたものになった。そのう
えでの言葉だった。

「私今ね」

「今？」

「白いコート探してるの」

「そうだというのである。」

「前もちゃんと包める白いコート」

「生地は？」

「できたら羊毛で」

つまりウールでだというのだ。

「綿でもいいけれど」

「そう。じゃあコート見に行こう」

「ええ、じゃあ今からね」

「私もコートが欲しくなった」

「愛ちゃんもなの」

「つきぴーは丈の長いコートが似合うから」

彼女はそれだというのである。確かにだ。月美はそうした服が好きだし実際にだ。それがよく似合う容姿なのも間違いなかった。

それでだ。椎名も今言うのだった。

「私は」

「愛ちゃんはどんな感じにするの?」

「同じ」

「じゃあ丈の長いコートね」

「色が違うけれど」

それは変えるというのである。

「色は黒にする」

「冬も黒なの」

「白と黒」

椎名はここでもこれにこだわるのだった。とにかく月美が白ならば自分は黒だと。そう考えてそのうえで決めているのであった。

「だから」

「うっん、愛ちゃんも白とかは」

「私が白」

「それはどうかしら」

月美は彼女があまりにも黒にこだわるのでだ。少し考えてこう言っただのである。

「お揃いの色は」

「そうね」

「うん、どう?」

「少し考えさせて」

表情は変わらないが確かにこう返す彼女だった。

「少し」

「じゃあお店行ってからね」

「そこから考える」

そうするといふのだった。

「じゃあ今から」

「行こう」

こうしてだった。二人はコートを見に行くのだった。そうしてその店でそれぞれコートを見ていてだ。椎名は不意に月美に言ってきた。

「ちょっと」

「何かあったの？」

「つきぴーは暫くここにいて」

こう彼女に言つたのだった。

「トイレに行つて来るから」

「おトイレになのね」

「つきぴーも一緒に行く？」

椎名は誘いもした。女の子はトイレを一緒に行くものだからだ。

第二十六話 聴かれたことその十一

「よかつたら」

「ええと、私は」

「どうするの、それで」

「今はいいから」

「いいの」

「うん。悪いけれど愛ちゃんだけでね」

「わかった」

月美のその言葉に頷く彼女だった。そうしてだった。

そのうえでだ。一人でそのコート店の近くにあるトイレに入る。そのクリーム色のトイレの個室に入ってだ。そのすぐ後にだった。

トイレの中からだ。声が聞こえてきたのだった。

「やれやれよね」

「全く」

「何だつてのよ」

まずはだ。三人の声であった。

「あいつ結局何もしなかったみたいね」

「気付いたら学校からいなくなつてたよね」

「そうよね」

橋口に州脇、それと野上だった。その三人の声だった。椎名は個室の中から三人の声を聞くのだった。

「何時学校からいなくなつたのかしらね」

「面白くないわよね」

「全く」

「そうよ」

そしてだ。星華の声もだ。椎名は聞いたのだった。

トイレの中にしゃがんだままでだ。話を聞いている。その話は。

「あいつ平気な顔でキャンプファイアーに出てたしね」

「ぼこられたりした感じなかったわよね」

「じゃあ遭わなかったんだ」

「そうなるわよね」

三人はその星華に対して言っていた。個室の中からもそれがわかった。

「まああいつ居合やってるからね」

「所詮不良じゃ相手にならないかもだけど」

「ちよつと痛い目に遭ってればね」

「よかったのよ」

この話はだ。椎名は自然に携帯を取り出して録音した。そしてだ。四人の話をだ。さらに聞くのだった。

「折角星華ちゃんが誘ったのにね」

「斉宮も薄情じゃない？」

「あつさり断るなんてね」

三人がまた星華に話しているのを聞いた。

「女の子から誘ったのに」

「それで断るなんて」

「酷いじゃない」

「それは」

だが、だった。星華の声はここでは曇った。その曇った声で話すのだった。

「まあ。斉宮だって」

「どうなの？」

「どうかしたの？」

「ううん、やっぱりあれなのかしら」

暗い顔で言っていた。それは椎名にもわかった。

「あいつの方が」

「大丈夫だから」

「まだチャンスあるわよ」

「そうよ」 6

すぐにだ。三人がその彼女に言ってきた。椎名はクリーム色の扉の向こう側で聞き続けている。しかも録音もだ。自分の携帯で相変わらず続けている。

だが星華も三人もそのことに全く気付かずだ。話をしていくのだった。

「だから安心してよ」

「ほらね」

「また誘えばいいじゃない」

「また、なのね」

ここであった。星華の声が少しだけ気を取り直したのだった。

「次の時にね」

「その時に言えば」

「それでいいじゃない」

「そうしなさいって」

「ええ、じゃあ」

気をさらに取り直してだ。星華は言った。

「今度は。あいつから奪い取ってでもね」

「そのつもりでいきなさいよ」

「好きならそこまですないとね」

「駄目だからね。頑張ってるね」

「ええ、わかったわ」

星華は完全に気を取り直した。そしてであった。

第二十六話 聴かれたことその十二

強い言葉に戻ってだ。こう三人に言うのだった。

「じゃあ今度ね」

「うん、今度ね」

「どうするの？それで」

「何かするの？」

「もうこうなったらよ」

言葉にだ。今度は黒いものが混じっていた。だがこのことに星華と三人は気付いていない。そう、彼女達以外はである。

「徹底的にやってやるわよ」

「徹底的？」

「っていうと？」

「だからよ。何でもしてやるわよ」

「こう言うのである。」

「もう何でもね」

「何でもって」

「具体的には？」

「学校にいられなく位のことしてやればいいのよ」

この言葉が具体的に何を意味しているのか、話を聞いている椎名はすぐにわかった。トイレの中でその眉をぴくりと動かせる。

「それ位のことね」

「そうよね。あいつが学校にいられなくなったらね」

「その時はよね」

「そうなったらね」

三人もだ。星華の言葉に頷きながらそれぞれ述べる。

「星華ちゃんのものよね」

「勝利は我が手に、よね」

「その通りよ。やるわよ」

星華はその黒いものが混じっている言葉をまた口にした。

「とことんまでね」

「じゃあ私達も協力するわ」

「是非ね」

「星華ちゃんの為だしね」

三人もその彼女を止めなかった。そうしてだった。

こう口々に言っただ。彼女を励ますのだった。

「やろう、こうなったらね」

「とことんまでよね」

「やってやろう」

「本当にね」

「有り難うね」56

星華はその三人に対して例を述べた。そうしてだった。

決意をあらたにしてだ。こう言った。

「じゃあこれからね」

「うん、やろうね」

「あいつをいられなくしてね」

「そして星華ちゃんが斉宮をね」

四人で話をしていたのであった。彼女達はそのままトイレを出た。

そしてであった。

トイレの個室の中にいた椎名も出て来た。その手に携帯を持って。

その携帯を見ながらだ。彼女は一人呟くのだった。

「つきぴーに何かするのだったら」

表情はこの時も変わらない。しかしだった。

その目を怒らせてだ。そうして言うのだった。

「絶対に許さない」

こう呟いたうえで何気なくを装って月美のところに戻った。彼女は

トイレのことなぞ全く知らずにだ。相変わらず服を見続けた。

その彼女のところに来てだ。そっと声をかけた。

「つきぴー」

「あつ、愛ちゃん」

月美は彼女の言葉に伝えて顔を向けた。そうして尋ねるのだった。

「おトイレはもう」

「終わった」

「こつ答える椎名だった。」

「それでだけれど」

「それで？」

「服、いいのあつた？」

月美に尋ねる。

「それは」

「ええと、それは」

「あつたのならね」

「ええ」

「チエツクするか買つかして帰ろう」

「百貨店出るの？」

「もう充分楽しんだから」

「こつ言つて真実を隠すのだった。そのうえでの言葉だった。」

「だから」

「うづん、それだったら」

月美は椎名の言葉に少し考える顔になってだ。そのうえで白いフードのあるコートを見た。そうしてそのうえでこつ言つたのだった。

第二十六話 聴かれたことその十三

「このコートだったら」

「決まりね」

「いいかしら」

「じゃあそれに睡つけておいて」

「チェックして、なのね」

「そう。帰ろう」

「帰るのね」

月美がこう言つとだった。椎名はまた言った。

「うん」

「それじゃあね」

「今から。私はもうチェックしたから」

急かさないがそれでも強く言つてみせていた。

「早く。次は」

「次は？」

「映画館行こう」

そこにだといつのだった。

「そこでも」

「そうね。それじゃあ次はそこで」

「うん、そこでね」

次の行き先も決めた。そこでだった。

ふとした感じだ。椎名は月美に言ったのである。

「あのね、つきぴー」

「うん、どうしたの？」

「私いつも一緒にいるから」

「こう月美に話すのだった。」

「一緒にね」

「今もそうじゃないの？」

「今以上に」

そうだとするのである。

「一緒にいるから」

「そうしてくれるの？」

「そう、特に学校で」

そうするとだ。月美に言いながら自分にも言い聞かせていた。そうしてそのうえでだ。自分自身への決意をあらたにするのであった。そのうえでだ。月美の手をここでも握ってみせたのだった。

「愛ちゃん、一体」

「あつたかい？」

握ったうえでその月美に問う。

「こうしたら。つきぴーあつたかいよね」

「うん、温かいけれど」

「そう。一人だと温かくないけれど」

「二人だと」

「こうして温かくなるから」

今度話すのはこのことだった。

「覚えておいて」

「うん」

「何があっても絶対に守るから」

また言う椎名だった。

「行こう」

「う、うん」

月美は椎名の言葉に頷きながらだ。そのうえで二人で映画館に向かった。椎名にとってはこの日は運命の日になったのだった。だが彼女自身は決意しただけでまだそこまではわかっていなかった。

そして陽太郎はだ。今携帯から狭山と話していた。そのうえでだつた。

彼はだ。困った顔で狭山に言うのだった。

「そこでそれか」

「そつだよ」

狭山は電話の向こうでこう話すのだった。

「そこでそうするんだよ」

「ああ、そうなんだな」

「それでそいつ倒せるだろ」

「ああ」

狭山の言葉に頷きながらだ。ゲーム中であるアイテムを使った。するとだった。

急にその敵の色が変わった。青くなったのだ。

それを見てだ。また狭山に話した。

「色、変わったぜ」

「青くなっただろ。光の玉使ったら」

「これで後は倒すんだな」

「そつだよ。それでそいつ倒したらな」

まだあるというのだった。

「一回エンディングが出てな」

「隠しダンジョンあるんだよな」

「そのラスボスそいつよりもっと強いからな」

「えっ、こいつよりもかよ」

「それで倒しても時間かかったら駄目だからな」

「短いうちに倒すんだな」

「そつしろよ、絶対にな」

電話の向こうの狭山の言葉が強いものになった。

第二十六話 聴かれたことその十四

「そうしないと駄目だからな」

「わかったよ。しかしこのゲームってな」

「奥が深いだろ」

「コード入れていいアイテム入れてもそれでも何かな」

「しっかりと改造コードを使っている陽太郎だった。そうした遊び方もしているのであった。

「やりがいがあるよな」

「そだろ。ドラクエの中でもな」

「この3が一番だな」

「俺4も好きだけれどな」

「俺は6だな」

二人でこんなことも話す。そうしながらだ。

陽太郎は遂にその敵を倒した。それからだった。狭山にまた言った。

「倒したぜ」

「おお、おめでとうと言ってやるぜ」

「それで。後はエンディングから」

「隠しダンジョンだからな」

「隠しダンジョンが一番面白いな」

陽太郎のその声が笑っていた。

「クリアした後の御褒美もいいしな」

「4のあれがよかったな」

狭山の声が笑っていた。実に楽しげに。

「俺あれでマジで感動したぜ」

「そうだよな。あれは確かによかったな」

「ああ。それに移民の町だけけれどな」

その話もするのだった。

「あれでも結構楽しんだぜ」
「そうか。あれもか」
「そうだよ。じゃあそっちは頑張ってくれよ」
狭山はこう話してだ。自分のことも話してきた。
「俺もやってるからさ」
「そっちは何やってんだ？」
「ファイナルファンタジーな」
それだというのだった。
「そっちやってるんだよ」
「シナリオは何なんだ、それで」
「6な」
それだと答える狭山だった。
「そっちやってんだよ」
「へえ、そりゃいいな」
「ラスボス弱いけれどな」
「あはは、あれはちょっと拍子抜けしたよな」
「全くだよ」
二人は今度はそちらの話をするのだった。
「あれだけ大騒ぎしてどんなのかって思ったらな」
「あっさり倒せるからな」
「あれだよな」
狭山は笑いながら陽太郎に話す。
「恐竜の方がずっと強いよな」
「あれはないよな」
「恐竜がメテオとかアルテマ使うなんてな」
「ああ、最初見た時はびっくりしたよ」
陽太郎はその話でもしっぴかりと盛り上がっていた。
「何なんだよこいつってな」
「だよなあ。まあこっちは魔王使って強くしていくからな」
「ああ、しっぴかりやれよ」

「じっくりやってくからな」
「レベルあげに励んでるんだな」
「まあな」
その通りだという狭山だった。
「それじゃあな。俺もやってるからな」
「ああ、悪いな教えてもらって」
「いいさ。けれどそのかわりな」
「そのかわり？」
「後でメールで改造コードの番号送ってこないか？」
「それか」
「ああ、それ頼むわ」
こう陽太郎に言うのだった。
「それな」
「ファイナルファンタジーのかよ」
「いや、パワプロ」
そちらだというのだ。野球ゲームである。
「そのコード頼むな」
「ああ、わかった。それでどのパワプロなんだよ」
「15.それ頼むな」
「わかった、じゃあそっち送るな」
「頼むぜ。パソコンでいいからな」
「御前野球ゲームもやるんだな」
陽太郎はこのことにも考えを及ばせて述べた。
「そうだったんだな」
「ああ、チームは阪神な」
「やっぱりそこか」
「御前まさか巨人とか言わないよな」
「いや、俺も阪神だ」
陽太郎はこのことには即答で返した。
「巨人なんか絶対にするかよ」

「だよな。椎名とか赤瀬も阪神だしな」

「ここ関西だからまず阪神だろ」

「それを聞いて安心したぜ。巨人なんか応援したらな」

「その時はどうなんだよ」

「もう絶対ゲームのこと教えてやらないからな」

そうするというのだった。

「そんなことするものかよ」

「俺今つくづく巨人ファンでなくてよかったって思ったよ」

「そうか」

「そうさ。本当に思ったよ」

「ははは、野球は阪神だからな」

「だよな、それはな」

「そういうことだな。それじゃあな」

狭山は電話の向こうからでもわかる笑顔でだ。陽太郎に別れを告げてきた。

「また明日な」

「ああ、またな」

二人は笑顔で別れたのだった。そうしてそのままそれぞれのゲームに戻っていく。そうしてだ。その休日を幸せに終えるのだった。

第二十六話 完

2010・10・25

第二十七話 護るものその一

第二十七話 護るもの

「それでさ」

「はい、阪神のことですね」

「昨日思ったんだよ」

陽太郎は登校の電車の中で月美に話していた。野球のことをである。

「狭山にそのゲームのコード送ってからな」

「阪神がですか」

「ああして選手を簡単に強くできればな」

「優勝ですよね」

「しかも十連覇とかな」

「これまた途方もない話であった。」

「できるのにな」

「そうですね。そうしたものが現実でも使えたら」

「ゲームだけだと勿体ないよ」

陽太郎は電車の扉に背をもたれかけさせた姿勢で立ったまま「の前で吊り革に手をやって立っている月美に対して話をしている。

「現実でも使えたらな」

「うっん、確かにそうですね」

月美は陽太郎の話に少し考える顔になった。そのうえで言うのだった。

「私も阪神ファンですし」

「だよな、やっぱり」

「お母さんは中日ファンですけれど」

少しミソがつきはした。

「それでもお父さんも妹も全員阪神ファンで」

「俺の家は妹が燕だけれどそれ以外はな」

「皆さん虎なんですな」

「子供の頃巨人だけは応援するなって言われたよ」

「実に正しい教育である。子供に悪いものを応援させない、これが教育だ。」

「いや、本当に」62

「私の家はそこまではなかったですけど」

「それでも虎だよな」

「はい、自然に」

そう言ったというのである。

「子供の頃から阪神応援していました」

「やっぱり野球は阪神だよ」

陽太郎は強い言葉で断言した。

「いや、別に中日やヤクルトでもさ」

「悪くないですか」

「巨人以外のどのチーム応援してもいいさ」

巨人以外のチームには実に寛容なのが阪神ファンだ。言い換えれば巨人だけは許さない、そうしたイデオロギーなのである。

「妹だつてさ」

「それにしても妹さんは」

「変わってるよな、やっぱり」

「関西でヤクルトですか」

「少数派だよな。傘だつてな」

「緑のビニールですね」

「それ以外使おうとしないんだよ」

まさにヤクルトだった。ヤクルトファンは応援の時に緑の傘を使う。それが彼等の大きな特徴になっているのである。それは陽太郎の妹もなのだった。

「いや、本当にさ」

「面白い妹さんですね」

「ああ、まあヤクルトだしな」

妹に対するのと共にヤクルトにも寛容な陽太郎だった。優しい微笑みにそれが出ていた。

「いいかってな」

「そうなんですな」

「ああ、それでだけれど」

「はい、それで」

「そういうの現実でも使いたいよな」

陽太郎の言葉は冗談であっても切実なものがあった。

「そう思うんだけどな」

「それはそうですけれど」

しかしだった。ここで月美は考える顔になって言うのだった。

「確かにあれば凄くいいですけど」

「だよな、やっぱり」

「ただ」

「ただ？」

「そういうのがあれば」

その考える顔での月美の言葉だった。

「相手も使いませんか？」

「他のチームもか」

「はい、巨人も」

とりわけこのチームが問題であった。

第二十七話 護るものその二

「あのチームはそれこそ手段を選びませんから」

「だよな。あそこは本当に何でもするからな」

「ですから。そういうコードが現実にも使えたら」

「同じか」

「そう思いますけれど」

「言われてみればそうだよな」

陽太郎もここで気付いたのだった。

「こつちが使えたら向こうも使うよな」

「ですから本当に同じですから」

「意味ないな」

このことを再認識した陽太郎だった。

「じゃあいいか」

「はい、残念ですけど」

「全く。上手い話ってないよな」

「そうですね、野球も」

「阪神っていい話ないからな」

陽太郎はこんなことも言った。

「どうしてもな」

「ここぞっていう時には負けますしね」

「本当に絶対に負けてくれるよな」

「そうですね。見事なまでに」

「全く。そうしたことはよくできてるよ」

全く以てという陽太郎の今の言葉だった。

「阪神ってなあ。本当に」

「昔からみたいですな」

「らしいな。ここぞっていう時によりによって甲子園で巨人に負けるとか」

「それ私達が生まれる前ですよね」

「親父に聞いたんだよ」

つまりその年代の話だといつのである。

「それで目の前の巨人の九連覇を見たつてな」

「ちよつと。それは」

「最終戦でな。何でそこまで演出できるかな」

「阪神しかできませんよね」

「ああ、阪神だよな」

「本当にですよね」

「けれどなあ。それでもなんだよな」

陽太郎は腕を組んで述べだした。首も捻るがその動作が妙にだ。愛情さえ感じさせるものになっていた。それは月美にもわかった、

「阪神つてそれでもな」

「それでもなんですよ」

「絵になるんだよな」

そつだといつのであつた。

「どんな勝ち方でもどんな負け方でも絵になるよな」

「お家騒動でもですよ」

「あんなチームつて阪神だけだしな」

こつ言つて阪神への愛情を見せる彼だつた。

「色々なスポーツチームあるけれどな」

「そうですね。阪神だけですよ」

「そんなチームはな」

「だから皆阪神を応援するんですよ」

「一回応援したらもう病みつきになるよな」

「妹なんか凄いですよ」

月美はにこにこしながら話を続ける。

「もう部屋の中なんか全部」

「全部？」

「阪神グッズで一杯で」

そうしたファンが実に多いのも阪神である。それだけ熱狂的だといふのだ。

「それで毎日阪神のユニフォームを着てて」

「ユニフォームもなんだ」

「そうなんですよ。パジャマがそれなんです」

「いや、凄いな」

陽太郎の言葉には尊敬の念さえ宿っていた。

「そこまでか」

「私そこまではいけませんし」

「俺もだよ」

「本当に好きなんだなって思ってた」

実際にだ。月美の今の言葉には感心するものが宿っていた。

そしてそのうえでだ。彼女はまた言った。

「それで」

「それで？」

「私もこの前帽子買いました」

「ああ、阪神の」

「中々被る機会ないですけど」

「月美の服には似合わないよな」

彼女のいつもの私服を思い出して話す。想像してみれば実際にそうだった。楚々とした服には野球帽自体が似合わないのだった。

第二十七話 護るものその三

「どうしてもな」

「そうなんです。ですから」

「被る機会ないんだ」

「はい、それが残念で」

こう話す彼女だった。申し訳ない顔でだ。

「私、そういうラフな服持ってませんし」

「ええと、悪いけれど」

「はい」

「月美にはそういう服似合わないな」

そうだといいのだった。陽太郎もだ。

「どうしてもな」

「そうですか。やっぱり」

「だから野球帽もな」

「被れませんか」

「あれって案外服選ぶからな」

陽太郎はまた腕を組んだ。そのうえで難しい顔で話すのだった。

「どうしてもな」

「ううん、それじゃあ」

「まあさ」

「はい」

「そんなに気にすることないからさ」

笑顔になってだ。月美に対して話した。

「阪神帽位さ」

「そうですか」

「ああ。確かにあの帽子はいいさ」

これはどうしても言わずにいらなかった。何故なら陽太郎は阪神ファンだからだ。その彼が否定できるものではなかったのだ。

「けれどな」
「けれどですね」
「帽子がなくても応援できるしさ」
陽太郎が言うのはこのことだった。
「だから別にさ」
「気にしなくてもですね」
「いいと思うな」
微笑んでの言葉だった。
「そこまではさ」
「わかりました」
陽太郎の今の言葉に月美も笑顔になった。そうしてだった。
「じゃあ私帽子は持ったままで」
「ああ、それだけで」
「それでいます」
「それでもいいからさ。じゃあ」
「じゃあ？」
「そろそろ着くよな」
「駅にだというのである。」
「降りようか」
「そうですね。このまま乗ったら」
「学校に行けなくなるしな」
「それか遅刻ですよな」
「さぼるのって流儀じゃないしさ」
陽太郎は笑ってこども話した。
「じゃあ行こうか」
「はい、それじゃあ」
「学校にさ」
「そうですね。今日は」
「今日は？」
「阪神の試合ありませんよね」

まだ阪神の話をするのだった。

「そうですね」

「残念だけれどな」

それはだと返す陽太郎だった。

「それはな」

「そうですね。やっぱりないと」

「面白くないよな」

「はい、本当に」

こんな話をしてだ。二人は学校に行く。そして部活の朝練の後でそれぞれのクラスに入る。

月美が自分のクラスに入るとだ。そこにはもう、であった。

椎名がいてだ。彼女に言ってきたのだった。

「おはよう、つきぴー」

「愛ちゃん？」

「そう、おはよう」

また挨拶をする彼女だった。

「元気みたいね」

「ええと」

もういる彼女に戸惑ったがだ。彼女はまずはこれからだった。

第二十七話 護るものその四

「おはよう」

「うん、おはよう」

「それでだけれど」

椎名は自分から話してきた。そうしてだった。

「今ね」

「うん、今？」

「教科書とかノート持ってる？」

「持ってるけれど」

きよとんとしたまま答える月美だった。

「いつもね。持ち帰ってるから」

「それでその都度持って来てなのね」

「そうだけれど」

「学校には置いてないのね。よかった」

それを聞いてだ。少し頷いた月美だった。

そしてそのうえでだ。椎名は言うのだった。

「それなら安心ね」

「安心って？」

「何でもない」

ここから先はあえて言わない椎名だった。いる場所は月美の席の側である。指定席にいる。しかし言うことと来る時間が少し違っていたのだ。

特に月美はだ。その時間について話すのだった。

「あの、愛ちゃん」

「何？」

「今日来るの早いのね」

このことを言うのだった。

「本当に」

「そうかな」

「だって。いつもは今よりもう少し遅いのに」
「そうかな」

「そうだったと思うわ。今日は本当に早いわ」
月美はこのことをまた言う。

「何かあったの？」

「気にしないで」

「気にしないでって」

「大したことないから」

「こう言うだけの椎名だった。」

「本当にね」

「そうなの。それじゃあ」

「それじゃあ？」

「面白い本があつたけれど」

「こう話す椎名だった。話を変えてきたのだ。」

「どっつ？」

「どっつって？」

「そう。最近」

「特に何もないけれど」

「またここでもきよんとした顔になる椎名だった。」

「これといって」

「おかしいことはないのね」

「特に。本当に」

「だったらいい。それで」

「また言う椎名だった。」

「今度また本を買うつもりだけれど」

「あつ、そうなの」

「そうそう。それでまずは座って」

「気付けばだ。月美はまだ自分の席に着いてはいなかった。それで椎名は彼女に対してこう言ったのだ。自分の席に着くようにだ。」

「そうして」

「うん、じゃあ」

こうして月美に座ってもらった。あらためて隣同士になってからまた話す二人だった。

椎名はだ。その月美に話すのだった。

「今度は海外の文学考えてるの」

「海外っていうと？」

「ポー」

まずはこの言葉からだった。

「エドガー・アラン・ポー」

「その人なのね」

「黒猫って面白い？」

具体的な作品名も出してきた。ポーの代表作ほ一つだ。

「あの作品は」

「面白っていうか」

こう返す月美だった。椎名のその顔を見ながらだ。

「怖い」

「そう、怖い」

「それもかなり。一回見たら忘れられない位」

「そこまでのね」

「どんなお話かは言わないけれど」

椎名への気遣いである。話の内容を言えば面白くなくなると思っ
てである。

第二十七話 護るものその五

それでだ。月美はそれはあえて言わないのだった。

「それでもね」

「怖いよね」

「凄く怖いから」

月美はこのことは強調した。それは確かだというのだ。

「期待していいわ」

「わかった。じゃあ読んでみる」

「ポーだと他には」

月美はあらずじは言わないが作品はあえて出すのだった。これも椎名への気遣いである。それをそのままに話をするのだった。

「アツシャー家の崩壊なんか」

「それもいいのね」

「凄く怖い」

「それもだというのだ。」

「だから。読むとなればね」

「楽しみにしておいてってことね」

「怖いお話がいいのなら」

「わかった。それも読んでみる」

こんな話をする二人だった。そしてだ。

そんな二人を見てだ。三人はクラスの端で忌々しげな顔をしていた。そこには星華もいた。合わせて四人であった。

まずは野上が言った。

「何だつてのよ」

「そうよね」

「全く」

州脇と橋口が彼女に続く。

「来たらもういるし」

「折角私達が仕掛けようと思ったのにね」

「それているなんて」

「何もできないじゃない」

こう言って忌々しげな顔で彼女を見るのだった。

「教科書やノートがなくてもね」

「ロッカーとか机に悪戯してやったのに」

「それでもあいつがいたらね」

こう言っただけのことだった。

「全く。何だつてのよ」

「何でいるのよ」

「全くね」

「そうよね。これじゃあ」

ここでだ。星華も言ってきたのだった。顔は三人と同じものになっている。

「あいつに何もできなくて」

「音をあげさせて学校に来れなくして」

「それでその間に星華ちゃんが斉宮ゲットすることができないじゃない」

「そうよそうよ」

「忌々しいっいたらありやしないわ」

星華は眉を顰めさせて述べた。

「あいつがいるだけで何もできないから」

「ねえ星華ちゃん」

橋口もまた眉を顰めさせる。そのうえで星華に言ってきたのである。

「それでね」

「それで？」

「今は諦めるしかないけれど」

それは仕方ないというのだ。ここでは割り切っていた。

しかした。その言葉に嫌悪を籠らせてだ。橋口はさらに言っただ

った。

「それでもこれからよね」

「ええ、そうよ」

すぐにだった。星華は答えた。

「絶対にね。こうなったらね」

「あいつに何をしてでも」

「斉宮は私のものよ」

既にそうなっているというのである。強い言葉だった。だがそこには幾分か自分に言い聞かせているものがあった。それは確かだった。

その言葉でだ。星華はさらに言うのだった。

「それでね」

「ええ、それでね」

「出し抜くには本当に」

意を決した顔で言うのだった。

「どんなことでもするから」

「そうよ。あんな奴に負けないでよ」

「絶対によ」

州脇と野上も言ってきた。

「負けないでね」

「それで斉宮をよ」

「いいわよね」

「わかってるわ」

しっかりとした顔で答える星華だった。

第二十七話 護るものその六

「絶対にね」

「うん、だからよ」

「私達だって協力するから」

「一人じゃないからね」

「有り難う。斉宮ってね」

三人の言葉に礼を述べながらだ。星華はその顔を少し俯けさせてこんなことも言った。

「ずっと一緒だったのよ」

「中学校の時三年間一緒だったんだっけ」

「同じ中学校で。それで」

「同じクラスだったのよね」

「そうよ」

その通りだというのであった。これは事実だ。

「その通りよ」

「そうよね。それじゃあやっぱり」

「思い入れあるよね」

「色々と知ってるし」

「いい奴よ」

星華は陽太郎をまずこう評した。

「しっかりしてるしね。性格もね」

「そうらしいね」

「何か一本筋が通ってて」

「人間として確かなんだって？」

「そこがいいのよ」

まずは性格だというのだ。星華が見たものはだ。

「性格がね。いいから」

「それに成績もいいらしいし」

「何かそこは私達と違うね」
「全く」

進学校であるがそれでも成績がある。彼女達はこの学校では成績はあまりよくない方なのである。こうした意味でも星華と同じだ。

「そうしたところも好きになったのね」

「頭もいっていいのが」

「やっぱり」

「ま、まあそれもね」

星華はここでは顔を赤らめさせて答えた。その通りだといっているのである。

「その通りだけれどね」

「うっん、結局あれよね」

「星華ちゃんベタ惚れ？」

「そうよね」

三人は星華の言葉にのろけを見た。それでこう言うのだった。

「どう見たってね」

「完全にそうよね」

「ずっとそうよね」

「悪い？」

星華はここでは居直ってだ。こう返したのだった。

「それで」

「悪くはないけれどね」

「まあ何ていうかね」

「そうそう。おのろけが過ぎるっていつか」

「それだというのである。」

「本気で好きになってるのがわかるし」

「それが三年ってね」

「一途なのね」

「一途なの？」

星華は三人の言葉に弱い顔になってそのうえで眉間に皺を寄せた。

自分では今一つそうした自覚はないからだ。そうした顔になったのだ。

「私って」

「どっからどう見たってね」

「そうよね、一途よね」

「もうかなりね」

「だよね」

「本当にね」

これが三人の言葉だった。そしてである。

「けれどそれならよ」

「それならって？」

「どうしたの？」

野上と橋口は州脇の言葉に顔を向けた。

「何かあるの、それで」

「本当に何かあるの？」

「ううん、星華ちゃんもそこまで一途なら」

それならだというのである。州脇は星華に対して言うのだった。

第二十七話 護るものその七

「齊宮に言えばいいのに」

「あっ、そうよね」

「それはそうよね」

「何で言わないの？」

「それは」

「何でなの？」

「言えないのよ」

星華は困った顔になって三人に言い返した。

「どうしてもね」

「つまり内気ってことね」

「つまりは」

「そういうことね」

「悪い？」

困った顔でまた言う彼女だった。

「だって。どうしてもね」

「だからここで勇気を出してよ」

「そこまで好きなら最初に一気に言えばよかったのに」

「もうね。最初にね」

三人は自分達の視点から言う。そうしてだった。さらに言うのであった。

「そうしたらかえって楽なのに」

「当たって砕けるじゃなくてよ」

「もう意地でもゲットするんだって」

「そういう意気でいけば何でも成功するのに」

「そこで言わないのがね」

「駄目なのよ」

こう話す三人だった。しかしであった。

星華はどうしてもそれを言えないのだ。実際に今も困った顔をしている。それで俯いてだ。どうしても言えずにそこにいるだけになつていた。

そんな彼女を見てだ。橋口が彼女を気遣つて言う。

「まあそれはいいとして」

「そうね。これからゲットすればいいんだしね」

「そうよね」

三人はこれで頷く。そうして話を変えたのだった。橋口はこう言うてきた。

「それで宿題だけねど」

「ああ、数学の」

「それやった？」

野上と州脇もすぐに言う。

「学校の宿題だけねど」

「それやった？」

「どうなの？」

「一応やったけれど」

橋口は自信があまりなさそうな顔で言うてきた。

「それでもね。どうもね」

「難しいからね、あの宿題」

「できないわよね」

「ううん、どうすればいいのかしら」

「解ける？」

「こう言うだけだった。そしてだった。」

二人は実際にノートを出してきてそれを開く。何も書いてなかった。

それでだ。困った顔で言うのであった。

「どうしよう」

「写していいかな」

「こう橋口に言うのだった。やや上目遣いになっている。」

「全然わからないし」

「よかつたらただけれど」

「別にいいけれど」

橋口はこれといって断らなかつた。すぐに言葉を返す彼女だつた。

「どんどん写して。かなり間違えてると思っけれど」

「いいのよ、それはね」

「とりあえずやってることが大事だから」

二人も写してもらつた立場はわかつていた。それでの言葉だつた。

そしてだ。星華もだつた。

何時の間にかノートを持って来てだ。そうして言うのであつた。

「私も。いいかしら」

「ええ、いいわよ」

橋口は星華に対しても述べた。

「どうぞ」

「有り難う、それじゃあ」

「今からね」

州脇と野上も続く。そうしてだつた。

三人は橋口の宿題を写させてもらった。それで窮地を脱したのだつた。そしてその宿題はだ。月美はどうだつたかというのだ。

「次の数学の授業ね」

「うん」

そのことを椎名に話していた。彼女のノートを出してそれを見せながらだ。

第二十七話 護るものその八

「宿題があつてね」

「それはもうやったの？」

「ええ、やったわ」

こつ椎名に述べるのだった。

「どうかしら」

「ちよつと待って」

こつ言つて見せるとだ。椎名は横から覗いてすぐに言った。

「全問正解」

「合つてるの？」

「うん、全部ね」

そうだとするのである。

「合つてるから」

「そう、よかつた」

「つきぴーって数学苦手だったんじゃ」

「ぢよつと頑張つてみたの」

月美は少し気恥ずかしそうに笑つて述べたのだった。

「それで」

「努力したのね」

「それはその」

「人間努力が大事だから」

椎名は控えめな月美に告げた。

「つきぴーは偉い」

「そんな、私は」

「そして慢心しない。それもいい」

また言つたのだった。

「そついうことだから」

「ううん、そうなの」

「そう。とりあえず宿題は全部できてるから」

「これでいいのね」

「そういうこと。他の宿題は？」

「ええと、今日はこれだけ」

数学だけだというのがこののである。

「それだけだから」

「そうなの」

「そう。ただ」

「ただ？」

「予習と復習はしたけれど」

「毎日してるのね」

「うん、少しずつだけれど」

そうしているというのである。

「一応ね」

「一応だけれどちゃんとした」

椎名は月美のそういうところをしっかりと述べた。

「つきぴーらしい」

「有り難う、愛ちゃん」

二人はこうした調子だった。そうしてであった。

椎名は月美の傍を離れないのだった。片時もだ。

その他にもだ。放課後にだ。州脇達がそつと教室に戻って月美の席に向かおうとする。その手にはそれぞれマジックが握られている。

「それじゃあね」

「ええ」

「今からね」

顔を見合わせてそのうえで、だった。行こうとする。

しかしここでまただった。椎名がクラスに来たのだった。

「ここだから」

「ここね」

「ここなのね」

しかもだ。女の子達が何人か来たのだった。

「じゃあ早速ね」

「はじめましょう」

「うん」

こうしてずかずかと部屋の中に入って来る。それを見てだった。

州脇達三人は無然とした顔になってた。椎名に抗議した。

「ちよつと、あんた何でここに来るのよ」

「あんた三組でしょ」

「それでどうしてなのよ」

「天文部の一年のミーティング」

その三人にこう返す椎名だった。

「それ、今からここでするの」

「はあ！？何で天文部のミーティングここでするのよ」

「話全然通らないじゃない」

「そうよ」

三人は怒った顔になった。それだった。

第二十七話 護るものその九

椎名に対してさらに言う。しかしであった。

「ちゃんといるから」

「いるって何がよ」

「何がいるっていうのよ」

「それとも誰がっていうの？」

「そう、誰が」

野上の言葉への返答だった。

「ちゃんと四組の人いるから」

「私いるけれど」

ここで茶色のショートカットの女の子が出て来た。三人は彼女の顔を見てだ。それでバツの悪い顔になってそれぞれいうのだった。

「あんだ、いたの」

「そういえば天文部だったね」

「そうだったわね」

「うん、それでね」

その娘は何も知らないまま話すのだった。無論気付いてもいない。

「椎名さんがここがいいっていつから」

「ここであって」

「ミーティングの場所？」

「ここであって言ったの」

「そうなの」

それでだというのである。彼女はだ。

「それでここに皆で来て」

「ミーティングするの」

「そういうことなのね」

「そう。駄目かな」

彼女はまた三人に尋ねる。何も知らない顔のままだ。

「それは」
「いいわよ、それだったら」
「私達もそろそろ部活に行かないといけないし」
「だからね」
「うん、それじゃあね」
シヨートヘアの女の子はここでもわかっていなかった。それでのまま椎名に対しても明るい顔でこう言うのであった。
「じゃあ椎名さん」
「うん」
「これから毎日放課後のミーティングはここで、なのね」
「そう」
こう言うのだった。尚あえて三人に聞こえるように言っている。
「今先輩達は部屋の整理に忙しいから」
「わかったわ。けれど」
「けれど？」
「今部屋そんなに散らかってないのに」
その娘は視線を少し上にやって述べた。
「それでもなのね」
「椎名さんそれでも部長に言ってね」
「それでだったわよね」
ここで他の天文部の娘も話す。
「ううん、お掃除とか整理は徹底的にすること？」
「つまりは」
「そういうことよね」
「そう」
その通りだと言う椎名だった。
「それでなの」
「それじゃあね」
「今からミーティングね」
「はじめよう」

こう話してだった。椎名はここでも三人の邪魔をした。それはさりげなくではある。だが確かに月美を害させないものだった。

それは玄関でも同じだった。

三人は月美の下駄箱に向かう。その手にはやはりマジックがある。そして他にはハンマーもだ。そうしたもののを手にしてだった。

邪な笑顔でだ。三人で話すのだった。

「それじゃあね」

「ええ、今からね」

「下駄箱だけはね」

月美の下駄箱を見ながらの言葉だった。

「滅茶苦茶にしてやって」

「靴も隠してね」

「そうしてやるうね」

「それで」

野上がここで二人に言った。

「あいつ参らせて学校に来なくしてやって」

「星華ちゃんにね。斉宮をね」

「ゲットさせてやらないとね」

その一念だった。それで今月美に嫌がらせをしようというのであった。

今まさにその下駄箱に落書きをしようとする。だがここでまた、だった。

「んっ、ここか？」

「ここなの？」

狭山と津島がだ。急に出て来たのだ。

三人は彼等のことを殆ど知らない。しかし人が来ればだ。

おかしいことはできない。それで慌ててハンマーやらマジックやらを引っ込めた。そのうえで何食わぬ顔で月美の下駄箱から離れた。

第二十七話 護るものその十

狭山と津島はそこに来てだ。さらに話すのだった。

「で、椎名は？」

「ここで待ち合わせて言ったのにな」

「何でいないんだよ」

「まだなのかしら」

こつ話してそこに来た二人だった。二人共左右を見回してそれで椎名を探している。

「ひよつとしてたらもう来てるのかもな」

「ああ、それあるわね」

津島はここでは狭山の言葉に頷いた。

「椎名つて悪戯好きだからね」

「先に来ててそれであつとな」

「脅かすとかね」

「普通にやる奴だからな」

「ねえ、あんた達」

津島が三人に気付いて彼女達に声をかけた。

「三組の椎名さん。あの背の小さい」

「あいつ？」

「あいつがどうしたのよ」

三人はまた椎名の存在を受けてだ。不機嫌そのものの顔で返事をした。

「何だつてんのよ、今度は」

「そうよ、どうしたのよ」

「それで」

「何でこの人達不機嫌なんだ？」

「さあ」

狭山と津島は三人のことも知らない。それでどうして彼女達が怒

っているのかもわからない。彼女達と椎名の関係も知らないからだ。

「まあそれでな」

「そうよね」

「椎名知らねえ？」

「ここに来てくれて言われたんだけれど」

「だから知らないわよ」

「あいつのことなんて」

これが彼女達の返答だった。嫌そうな顔での返答だった。

「私達だってたまたまここに来たし」

「そうよ、たまたま」

「たまたまだけだね」

「それはいいけれど」

津島は三人のその刺々しい口調にきよとんとなっている。そうしてだった。

とりあえずはだ。狭山に問うた。

「ここで間違いないわよね」

「だよな、御前も言われたよな」

「私もね」

「ここだってな」

「そうよね」

このことを二人で確かめ合う。しかしそれでもだった。

椎名はここにはいない。何処にもだ。幾ら見回してもだ。

「あいつ時間は守る主義なのにな」

「もう時間なのに」

「いるのはこの三人か」

「何でトンカチとかマジック持ってるのかしら」

二人はここで彼女達のその手にあるものに気付いたのだった。そのことに妙なものを感じた。しかしここで三人がまたムキになって言い返す。

「だからよ」

「何でもないわよ」

「あなた達には関係ないわよ」

「まあそうだよな」

「それはね」

二人はまた三人に対して応え返す。

「全然な」

「あなた達と話したことあったっけ」

三組と四組は体育等は一緒の授業だ。男子と女子に別れてそのうえだ。しかしそれでもだ。津島と三人の関係はとうとうだった。

「なかつたわよね」

「そうね。確か」

「津島さん？」

「そうだったかしら」

「ええ、そうよ」

津島は自分の名字を言われてこくりと頷いてみせた。

「それはね。その通りよ」

「そういえば話したことないけれど」

「まあ。何よね」

「もういいわ」

三人はだ。彼等とやり取りをしているうちにやる気を失った。それでここで今日はもういいとさえ思ったのだ。

それでだ。今度はこう言うのだった。

「帰ろうか」

「そうね」

「それじゃあね」

「帰るから玄関にいるんじゃないのか？」

今度は狭山が目をしばたかせながら延べた。

「違うのかよ、それ」

「そうよ、その通りよ」

「今から帰るんだけど」

「悪い？」

「悪くないけれどな」

また言う狭山だった。目をまたしばたかせる。

第二十七話 護るものその十一

「けれど何でなんだよ」

「何がよ」

「どうしたつていうのよ」

「何でそんなに突っかかるんだよ」

これが彼にはわからなかった。三人の目的を知らないから当然である。

「俺もあんた等と何の関係もないんだけれどな」

「カルシウム足りないんじゃないの？」

これが津島の見立てだった。

「牛乳飲んだら？あと小魚とかいいわよ」

「鰯は好きよ」

「私はジャコね」

「秋刀魚だつて頭からだし」

三人共魚は好きだった。だからこう返す。

「カルシウムは充分よ」

「牛乳だつて毎日飲んでるし」

「大きなお世話よ」

「だつたらいいけれどね」

津島もこれといって関係のない相手にはあまり言わないのだった。

「まあね」

「とにかく椎名探すか？」

「そうよね、それじゃあ」

こう話す二人をよそにだ。三人はというた。

それぞれの下駄箱を開けて靴を履き替えてそれでだった。むっつりとした様子で学校を出るのだった。そしてその時にだった。

二人の携帯がだ。急に鳴った。

「おっ？」

「あれっ？」

それに出るとだった。椎名からのメールだった。

「えっ、場所変更!？」

「屋上!？」

メールにそう書いてあった。実に簡潔な言葉でだ。

「今急にかよ」

「何でかしら」

二人にはどうしてかという理由もわからない。しかしだった。とにかくメールではそう言っていた。それではだった。

「行くか」

「そうね」

二人で言い合う。それだった。

二人は屋上に向かう。そこには誰もいなくなった。そしてであった。

その下駄履き場がある場所をだ。椎名はその屋上から見ていたのだった。そのうえで一人でこう呟くのであった。

「これでよし」

彼女はまた月美を護ったのだった。この時もだった。

とにかく月美はいつも椎名が陰に陽に護っている。それで星華達は何もできなかった。

このことにだ。最初に切れたのは州脇だった。

「何だつてのよ」

「そうよね」

「何よ、あのチビ」

野上と橋口も州脇のその言葉に同意して頷く。

「いつもクラスとかあいつの傍にいたりして」

「私達何もできないじゃない」

「絶対に離れないしね。いるしね」

州脇も目を怒らせて言う。

「教室にもいつもいるし」

「何もできないじゃない」
「折角星華ちゃんにとって思ってるのに」
「それじゃあだけれどね」
「ここで言ったのはその星華だった。彼女も三人と同じ顔になって
いる。」
「そのうえでだ。こつ言つのがだった。」
「いい考えがあるけれど」
「うん、それで」
「何するの？」
「いい考えって」
「呼び出そう、あいつ」
「これが最初に言った言葉だった。」
「ここはね。あいつをね」
「あいつ？」
「あいつって？」
「あのチビ？」
「違うわよ。西堀よ」
「彼女の方だというのだ。」
「もうこつなつたらよ。よく将を射るには馬からつていじけねど」
「違うのね、今は」
「また別なのね」20
「そう、まだるっこしいことはもうしないでね」
「それでだというのだ。」
「西堀に直接よ」
「どうするの、それで」
「あいつに何をするの？」
「あいつ捕まえて直接言つものよ」
「きつい顔での言葉だった。」

第二十七話 護るものその十二

「それでいきましょう」

「あいつに直接ね」

「そうするのね」

「そう、それでどう?」

星華はここまで言ってから三人に尋ねた。

「それでいいのよ。どうかしら」

「そうね。嫌がらせよりも直接言う方がいいわね」

「それじゃあここはね」

「そうしよう」

「これで決まりね。それじゃあね」

こう話してだった。星華はこれから何をするのかを決めたのだ。彼女にしても必死だった。何とかしようとしていたのである。

その中でだ。椎名は赤瀬と話していた。

場所は喫茶店である。あのマジックのダークブラウンの木造の世の中にいる。店の中は相変わらずイギリス調だ。そこだった。

「それでだけれど」

「うん、何かあったの?」

「最近つきぴーが危なくて」

「文化祭のだけじゃないんだ」

「そう、それで今傍にいるようにしてるの」

「上手くいってる?それ」

「何とか」

決して楽観していなかった。彼女は真剣な顔で述べている。

「防いでるけれど」

「じゃあいいんじゃないかな」

「ううん、こつちも細心の注意を払ってしてる」

そうだというのである。彼女にしてもである。ただ策を講じてい

る訳ではないのだ。精密機械を作るようにして月美を護っているのだ。

それでだ。また言う彼女だった。

「それで何とか護ってるけれど」

「そろそろ限界とは？」

「限界じゃない」

それは違うというのだ。

「ただ」

「ただ？」

「問題は向こうがそろそろ切れてくること」

「それなんだ」

「その時に何をしてくるか」

今考えているのはこのことだった。

「それが問題」

「っていつと何をするかってこと？」

「そう、これまでは私だけでやっていたけれど」

「何かあったら協力させてもらうよ」

「有り難う。それと」

「それと？」

「そう、私だけでやってだ」

それがだというのだ。

「けれど斉宮も」

「彼に話すんだ」

「時を見て」

そうするというのである。

「そのつもり」

「彼が一番西堀さんのこと大事にしてるからね」

「恋人だから」

それでだというのは彼女もわかっている。

「だからだけれど」

「そうだね。それでだけれど」

「うん」

「どうするの、それで」

赤瀬は具体的に何をするのかを尋ねるのだった。

「斉宮君に言うにしても」

「その時が来れば言う」

今はそうするというのがこの時である。

「その時に」

「タイミングを見てなんだ」

「とりあえずはいい」

「そういうことだね」

「うん、それで向こうが何をしてくるか」

椎名は考える声で述べる。

「それが問題だけれど」

「そうだね。また誰かに襲わせるとか」

「その時に備えて」

「備えて？」

「つきぴーにはスタンガン渡しておいた」

このことにも抜かりのない椎名だった。

「改造した奴。それを使えば襲った奴は一発で半殺し」

「そこまで改造したんだ」

「下手すれば死ぬ」

話は物騒な方向にも流れる。

「そこまで改造しておいたから」

「随分過激だね」

「警棒も渡しておいた」

渡したのはその改造したスタンガンだけではなかったのだった。

「居合の要領で殴ればかなりの効果がある」

「じゃあ護身は大丈夫だね」

「私がいなくても」

「じゃあ安心なんじゃ」

「うっん、まだ」

「ここでも楽観はしていない椎名だった。何処までも慎重である。

「つきぴーは気が弱いから」

「戦えないんだね」

「そういうこと。だから心配」

椎名がここで言うのはこのことだった。

「それが」

「うっん、じゃあまだ」

「傍にいる」

そうするというのであった。具体的にはだ。

「そういうことだから」

「わかったよ。それじゃあね」

「頑張るから」

こう話してだった。椎名は月美をさらに護ろうと決意するのだった。彼女も必死だった。それは決して顔に出ることはないがそれでもだったのだ。

護るもの 完

第二十八話 見られたものその一

第二十八話 見られたもの

星華はだ。様子を窺っていた。

教室で椎名が寄り添っている月美を見ながらだ。三人に話す。

「とにかく今はね」

「うん、今は」

「どうするの？」

「慎重に窺わないとね」

鋭い目での言葉だった。

「そうしないとね。あのチビに気付かれたらね」

「どうしようもないからね」

「それにあのチビがいない時にね」

「西堀呼び出さないといけないから」

「そうしたことよ」

こう三人に話すのだった。

「だからここは本当に慎重にいかないよ」

「それでだけねどさ」

「星華ちゃん、あのチビ絶対に西堀のところ離れないみたいだけれど」

「どうしよう、それは」

三人はここで星華にこのことを話すのだった。

「その辺りは」

「何か考えある？」

「あのチビどうしたらいいかしら」

「うっん、どうしようかしら」

それについてはだった。眉を顰めさせて言う星華だった。

「実際のところね」

「あのチビ、本当に鬱陶しいわね」

「だからクラス違うのに」

「何でいつもうちのクラスにいるのよ」

「そもそも不平も言う三人だった。それを言わずにはいられなかった。そうしてそのうえでだ。また話をする三人なのだった。」

「それでだ。彼女達はさらに話すのだった。」

「それだけでけれど」

「どうする？」

「あのチビどうしよう」

「何とか引き離さないかね」

「星華はその顰めさせた眉をそのままに話した。」

「どうしようもないわよ」

「言って聞く奴じゃないし」

「そうよね」

「強情だし」

「これは三人の主観に基づく言葉だった。そして考えでもある。」

「それをどうするかだけれど」

「ううん、それが最大の問題ね」

「本当にどうしたらいいのかしら」

「仕掛けるしかないかしら」

「ここでこう言った星華だった。」

「やっぱりね」

「仕掛けるの、あのチビに」

「そうするのね」

「やっぱり引き離すのね」

「そう、そうするの」

「また話す星華だった。」

「問題はどうかやってするかだけれどね」

「そうだ」

「ふとだ。野上が言った。閃いた顔になっていた。」

「あいつを一人にするのはね」

「うん、それで」

「どうするの？」

「ほら、トイレとかに行かせるとかそれでどう？」

「ここの他の三人に話すのだった。」

「飲み物に入れるとかして」

「飲み物に何かね」

「それを入れてね」

「そうしてなのね」

星華達二人も野上の言葉に応えるのだった。そうしてだ。それぞれ考える顔になってた。それぞれ述べるのだった。

「じゃあここは」

「どうする？」

「飲み物に何か仕込むの」

「いい考えがあるわ」

ここで野上はさらに言うのだった。

第二十八話 見られたものその二

「あのチビの飲み物にだけ。そういうお薬を入れてね」

「あのチビがおトイレに入っている間に西堀を呼び出して」

「そうしてなのね」

「そう、これでどうかしら」

野上はまた他の三人に話した。

「そういうやり方でね」

「そうね。それじゃあ」

「それでいこう」

「それじゃあだけねど」

今度は州脇が言った。

「飲み物はね」

「ええ、それ何か考えあるの？」

「それで」

「ええ、あるわ」

その通りだと答える州脇だった。

「飲み物は私が用意できるわ」

「あつ、あんたのお家ってね」

「お酒屋さんだったよね」

「それでジュースとかすぐに手に入るのね」

「お茶だってそうだし」

「期限近いジュースとか一杯あるのよ」

また話す州脇だった。

「だからそれをね。皆に振舞って」

「それぞれ手渡ししてなのね」

「あのチビにも」

「そうするのね」

「それでどう？」

州脇はここでは笑顔で話す。

「これならいいでしょ」

「ええ、いいわね」

「それじゃあそうしよう」

「いい感じね」

他の三人も具体的に頷く。そしてだった。

今度は橋口である。彼女が言うのだった。

「お薬は私が都合できるから」

「あんたのお姉ちゃんって薬剤師だったわよね」

「じゃあそのお姉ちゃんに頼んだらいいわね」

「下剤とかは」

「そうね。それじゃあね」

「下剤も確保できたと」

「後は」

問題はまだあった。それはだ。

「これをおあいつに飲ませればいいけれど」

「具体的にはね」

「どうするかだけれど」

「ああ、それだったら」

最後に言うのは野上だった。

「私にいい考えがあるわ」

「いい考えって？」

「具体的にはどうするの？」

州脇と橋口がその野上に問う。

「あのチビに飲ませるのって」

「それは」

「皆にそれぞれ手渡しするのよ」

橋口はまずはこう言うのだった。

「勿論あのチビにもね」

「そうするのね」

「次は」

「そして。あいつが飲む缶のお口のところに」

橋口はその目が光った。そのうえでの言葉だった。

「その下剤を塗っておくのよ」

「あつ、そうしたらね」

「いいわね、それって」

橋口と州脇はすぐにこう応えた。

「他の人が飲むことはないしね」

「あのチビだけ飲むし」

「そうね」

星華も笑顔で応える。

「それであいつがおトイレに行ってる間にね」

「西堀呼び出してね」

「それで斉宮から離れるように言ってね」

「それでね」

こう口々に言って頷く三人だった。そうしてだった。

第二十八話 見られたものその三

策を決めた。すぐにジューズが用意されて下剤もだった。数日後にはもうそのジューズを学校に持って来た。それを昼にだった。

「この時間に配ってね」

「それでよね」

「仕掛けて」

「ああ、下剤だけれど」

橋口が笑いながら話す。

「効き目遅いのよ。大体放課後に効くから」

「ふうん、放課後になの」

「その時なの」

「そう。だからね」

橋口は州脇と野上にさらに話す。当然ながらその顔は何かどす黒い笑顔になっている。その決しているとは言えない笑顔で話すのだ。つた。

「西堀を呼び出してケリつけるにはいい時間よね」

「確かに。放課後だとね」

「丁度いいわね」

二人もその通りだと頷く。

「じゃあその時に？」

「仕掛けて」

「そうしたらいいと思うわ」

その笑顔のまま話す橋口だった。

「そういうことだね」

「そうね。じっくりとしないと駄目な場合もあるし」

星華も星華なりに必死だった。例えそれが邪なものであってもだ。彼女なりに必死でありそのうえで話をするのであった。

「それじゃあね」

「放課後ね」

「一人になった西堀を部活に行く前に捕まえて」

「それでケリつけよう」

「うん」

星華は三人のその言葉に頷いた。

「じゃあ」

「あんな奴に斉宮取られたくないよね」

「だからね。ここはね」

「何をしてもよ」

「皆、有り難う」

星華は思い詰めたような顔になってこう述べた。

「本当に」

「いいって。それは」

「だって友達じゃない」

「そうでしょ？」

三人は一転して優しい顔になって彼女に告げた。

「それじゃあね」

「うん、じゃあね」

「ここはね」

「絶対にね」

「決めるわ」

意を決した顔で頷いてだった。そうしてだった。

昼にだ。四人は何気なくを装ってクラスに出る。しかしそこには
だった。

「あのチビ、いないわね」

「何処かしら」

「食堂？一体何処？」

三人が教壇にジュースを置いてから不機嫌な顔で呟く。しかし椎
名も月美いないのをまた確かめてからだ。その何気なくの態度で皆
に話す。

「皆、私の家のジュース余ったから」

「皆で飲もう」

「一人一本ずつね」

三人のその言葉を聞いてだった。皆笑顔になって言う。

「おっ、いいな」

「じゃあ一人一本ね」

「そうなのね」

「それで御願いな」

「皆に一本ずつだからね」

「いない人には後で一本ずつ渡しておくから」

こう言っただけであった。いない人間を一人ずつチェックしてそれぞれの机に一本ずつ置いていく。ここまでは親切に見えるものだった。しかしだ。ここからが問題だった。

野上がだ。教室に他の面々と一緒に出てだ。こう言っただけだ。

無論その手にはジュースがある。それを手にしての言葉だった。

「これ、これあのチビと西堀のだけだね」

「問題はあの二人何処にいるかだけだね」

「わかるの？それ」

「ええ、わかるわ」

その通りだと野上と州脇に答える彼女だった。

第二十八話 見られたものその四

「そこはね」

「ええ、そこは？」

「何処なの？」

「多分校庭よ」

そこだというのだ。

「あの二人いつも斉宮達と一緒にいるじゃない」

「それでいつも校庭にいるから？」

「だからなの」

「そう、だからよ」

それでだというのである。

「そこにいるわ。多分ね」

「じゃあ今からそこに行って」

「あのチビにそれをね」

「ええ、そうしよう」

こうしてだった。彼女達は校庭に向かうことにした。しかしこゝで、であった。

星華にはだ。こう言つただった。

「星華ちゃんは今ね」

「来ない方がいいよ」

「その方がね」

「いいの？」

星華は三人の今の言葉に怪訝な顔になって返した。

「私は行かなくて」

「あのチビに怪しまれるからね」

「あのチビ勘いいみたいだし」

「だからね」

それでだというのである。

「だから今はね」

「じつとしてて」

「私達に任せておいて」

「わかったわ」

ここでだ。星華は三人の言葉を受けて頷いたのだった。

そうしてだ。彼女は三人に言う。

「じゃあ今はね。何処かぶらぶらしてるわ」

「うん、そうしてて」

「ここは私達がするから」

「安心してね」

「それじゃあね」

三人の言葉にまた頷いてだった。星華は彼女達と別れてそれで校内の散歩に出た。そしてである。三人は校庭に向かうのだった。

そこに来るとだった。すぐに椎名を見つけることができた。

椎名だけでなく月美もいる。それに陽太郎達もだった。

彼女達はその椎名のところに向かいだ。何気なくを装って声をかけた。

「あつ、西堀そこにいたんだ」

「探したよ」

「おすそ分けがあるのよ」

「おすそ分け？」

月美は三人の言葉を受けてすぐに顔を向けた。

怪訝な顔になっている。その顔で彼女達に問うのだった。

「あの、それは何ですか？」

「ジュースよ、ジュース」

「これあるからね」

「はい、どうぞ」

まずは月美に手渡す。そしてだ。

三人は目でそれぞれ合図をした。そうして。

椎名に対してもだ。そのジュースを出すのだった。

「あんたもね」

「一本余ったからね」

「はい、どうぞ」

「私にもなの」

椎名は表情を変えず三人に問うた。

「クラス違うけれど」

「だから一本余ったからよ」

「それでなのよ」

「あげるわ」

「そう」

ここで椎名は三人の目を見た。しかし今はそれ以上は言わなかった。

それでだ。そのジュースを受け取ってだ。

「有り難う」

「御礼はいいわよ」

「それはね」

「余りだからね」

「残りものには福がある」

椎名は三人の目を見ながら呟く。

第二十八話 見られたものその五

「そういうことね」

「そうそう。そういうことだから」

「遠慮しないで飲んでね」

「ぐいっとね」

「わかったわ。それじゃあ」

こうして椎名にそのジューズを渡すことができたのだった。三人はすぐに椎名達に別れを告げて校庭を後にした。そうしてだった。

三人でだ。笑顔で言い合っただった。

「これでよしね」

「そうね。これでね」

「準備万端」

「後は放課後にね」

「西堀を呼んでそれで」

「あいつに言えば終わりよ」

笑顔で話す。そうしてだった。

作戦は成功したと確信していた。ところがだった。

椎名はだ。そのジューズを見てまずはだ。ティッシュを取り出したのだった。

「ティッシュユ？」

「そう、それ」

それを出しながら月美に対しても答える。

「ここはね」

「ここは？」

「まず缶の表を拭く」

実際にそのティッシュユで缶を徹底的に拭くのだった。

そしてだ。一度立ち上がってそれだった。

傍の水道のところで水を出してさらに丹念に洗う。またティッシ

コで拭く。

そうしてだった。そのうえで月美の隣に戻ってようやく飲むのだ
った。

それは缶コーヒーだった。飲み終えてから言う。

「美味しい」

「そうね。この缶コーヒー美味しいよね」

「コーヒー自体はいい」

「こつも言う椎名だった。」

「ただ」

「ただ？」

「何か気になったから拭いた」

「そうしたというのである。」

「そうした」

「それでなのね」

「そう、これで大丈夫」

「おいおい、随分用心深いな」

「狭山が椎名のその言葉を聞いてこう言うのだった。」

「何か毒があったみたいだな」

「流石にそれはないけれど」

「椎名もそれはわかっていた。」

「けれど。妙なものを感じたから」

「それでか」

「そう。念入りに拭いて洗った」

「椎名はその理由まで話した。」

「そういうこと」

「やっぱり何か毒が塗られてるみたいだな」

「けれどこれで大丈夫」

「飲み終えてからの言葉だった。」

「問題ない」

「それにしても」

月美は少し怪訝な顔になって言うのだった。

「急にジューズなんて」

「それも気になる」

椎名はそこも指摘した。

「差し入れにしても何もしてないのに」

「おかしいって言うの?」

「そう、おかしい」

まさにそうだというのである。

「やっぱり」

「だからか」

「警戒してるのね」

「そう」

狭山と津島にも答える。

「用心には用心を」

「まあ幾ら何でもな」

「毒とかはないでしょ」

二人も流石にそれはないと言った。

「そんなサスペンスドラマみたいな話はな」

「流石にね」

「けれど下剤位はあるかも」

まさにその通りだった。しかし今はだった。

椎名は確信していなかった。そしてであった。今度はコーヒーについては話すのだった。彼女が今飲んだそのコーヒーについてだ。

第二十八話 見られたものその六

「コーヒーと御飯は」

「合わないか」

「そう、合わない」

「こつ陽太郎に答える。

「どうしても」

「そういえばそのコーヒーって甘いよな」

「かなり甘い」

「だから合わないか」

「コーヒーにはパン」

「椎名は言い切った。

「御飯の時は最後に飲む」

「まあそうだな」

「その通りだと頷く陽太郎だった。

「コーヒーはな」

「そういうこと。コーヒーの飲み方も案外難しい」

「そういえば愛ちゃんって」

「月美もここで言う。」

「あれよね。コーヒーは普段は」

「お砂糖もクリームも入れない」

「ブラックが好きよね」

「それかウインナー」

「それもだと言うのである。

「あれも好き」

「ああ、あの生クリームを乗せたコーヒーだよな」

「そう、それ」

「また陽太郎に対して答える。

「それも好き」

「椎名ってコーヒー好きだったんだな」

「紅茶も緑茶も好き」

お茶もだというのだ。

「どっちも」

「紅茶もか」

「そう、けれど一番好きなのは」

どれかというのだ。彼女は言った。

「緑茶」

「それか」

「お抹茶。ジャパネスク最高」

「何でそこで横文字が出るんだ？」

「気分で」

また陽太郎に対して告げる。

「言ってみたけれど」

「それでか」

「その通り。とにかくお抹茶はいい」

今度は抹茶のことを話す彼女だった。

「身体にもいいし眠気も醒める」

「いいこと尽くめか」

「しかも文化でもあるから」

「茶道か？」

「茶道は日本の文化の一つ」

これはその通りだった。千利休が確立させたものだ。彼は茶をただ飲むだけのものにせずさらにさらにだ。文化にまで昇華させたのである。

椎名はだ。それを話すのだった。

「是非飲むべし」

「茶道だね」

赤瀬が言ってきた。彼は今はペットボトルの麦茶を飲んでいる。

「それでだね」

「その通り。和菓子は欠かせない」

「それもなんだね」

「そう、お抹茶最高」

また言う彼女だった。

「日本だけじゃなく全世界に広めるべし」

「何か椎名が言うとな」

「そうだよな」

陽太郎と狭山が顔を見合わせて話す。

「野心の塊みたいにな」

「そう聞こえるよな」

「野心。それはある」

その通りだと返しもする椎名だった。

「日本のよさを全世界に伝える」

「いい野心だな」

「だよな」

陽太郎と狭山はそうした野心はいいとした。野心といっても色々である。何も世界征服や権力者になるとかそうしたものばかりではないのだ。

「お茶もそうか」

「そうなるんだな」

「その通り。コーヒーや紅茶にはないもの」

「だよな」

「それはな」

これは他の面子にもわかった。

第二十八話 見られたものその七

「コーヒー道ってないからな」

「凝ることはあってもな」

「コーヒーは確かに素晴らしい」

椎名はそれは認めた。

「けれどお抹茶は道。それは修羅の道」

「何で修羅なのよ」

津島は椎名の今の言葉に呆れた顔で返した。

「そこでどうしてそうなるのよ」

「事実激しい道だから」

「座ってるだけなのには？」

「わびさび、一期一会」

椎名は茶道の言葉を口にした。

「まさにそれ」

「そこに激しさがあるのね」

「その通り。緊張がある」

「人と人のやり取りだからなのね」

「そういうこと」

椎名が言いたいのはそこだった。

「だから」

「うつん、それ考えたら茶道って」

津島もここで考える顔になって述べた。

「厳しいのね」

「だから道」

「そういうことになるの」

「そういうこと。それじゃあ」

こう話してであった。椎名はその畏をかわしたのだった。三人の策は彼女には効果がなかった。そうしてであった。

放課後にだ。四組に向かおうとする。三組の六限目の終わりが少し遅れてしまったのだ。これは偶然だったがそれで良かった。

彼女はだ。見たのだ。出会ったのではなくだ。

教室でだ。星華達が月美を囲んでいた。そうしてだ。

何かを言っていた。ここでだった。

椎名はあえてクラスに入らずにだ。見ることにしたのだった。そして聞くことにした。

見て聞いているとだ。四人は月美にきつい目で言っていた。

「ちよつといいかしら」

「話あるけれど」

「来るわよね」

「あの、一体」

月美は戸惑いながら四人に応えている。おどおどとさえしている。気圧されているのが椎名から見てもはっきりとわかるものだった。

「何が」

「話は体育館裏でするわよ」

星華がそのきつい目で告げるのだった。

「そこでね」

「体育館裏ですか」

「そつよ、そつよ」

そしてだった。星華に続いて三人も言ってきた。やはり彼女達もきつい顔になっている。少なくとも普段の表情ではなくなってしまうっている。

その顔でだ。彼女達も月美に言うのだった。

「今から来なさいよ」

「選択肢ないからね」

「いいわね」

「は、はい」

月美は怯えながらも頷く。両手は縮こまり拳になっただけでも胸の前で引つ込められてしまっている。その姿で四人に応えていた。

椎名は月美がそうなってしまうことに怒りを覚えた。無論四人に対してだ。しかし今はあえて前に出ずそして見ていただけだった。

そして見ているとだ。今度はだった。

星華がだ。月美に言う。

「来るわよね」

「体育館裏ですよね」

「そうよ、今からね」

こつ告げるのだった。

「来なさいよ」

「ほら、こつちよ」

「いいわね」

「今からだからね」

「わかりました」

比較的小柄な月美は四人の誰よりも背が低い。それも災いしてか全く抵抗できなくなってしまっていた。そうしてそのうえでだった。教室の外に連れて行かれそこから廊下に出る。椎名はその有様をずっと見ていた。そしてだった。

すぐにだ。自分の携帯を取り出した。

まずは狭山と津島、赤瀬にメールを送る。次には。

陽太郎にはだ。じかに電話を入れた。するとすぐにだった。

「何だ、一体」

陽太郎の声がしてきた。それを確かめてからだ。

第二十八話 見られたものその八

椎名はすぐに彼に言った。

「部活は？」

「これからだけれどな」

「着替えてる？」

「今道場の前だけれどな」

「すぐに戻って」

こう彼に告げる椎名だった。

「すぐに」

「すぐにつてどうしたんだよ」

「部活は遅れるわよね」

「用事があればな」

「今その用事ができたから」

こう陽太郎に言うのである。

「だから」

「できたつて。一体何がだよ」

「すぐに体育館裏に向かつて」

陽太郎にこうも告げた。

「今すぐに」

「体育館裏か」

「私も今向かつてるから」

見ればだった。椎名は携帯で陽太郎に話をしながら廊下を歩いて
いる。既に星華達に囲まれた月美の姿は見えない。だが彼女を追
かけていた。

「だから」

「一体何があるんだよ」

「行けばわかる」

こう答える椎名だった。

「多分私の方が先に着くから」

「そうなのか」

「そう。そこで合流して」

「まずはそれからだった。」

「後は私の言うこと聞いて」

「御前の？」

「そう。絶対に軽はずみな行動はしない」

釘も刺した。だが陽太郎はその釘がわからずにだ。こう問い返した。

「軽はずみって何がなんだ？」

「来ればわかる」

今はこう言うだけの椎名だった。

「来れば」

「そうなのか」

「そう、来ればわかる」

椎名はまた陽太郎に告げた。

「だから。来て」

「何かわからないけれどわかったよ」

「こう返す陽太郎だった。」

「それじゃあな」

「うん、じゃあ」

「今から行くな」

陽太郎はこう言ってだった。そのうえで部活仲間が遅れると告げて体育館裏に向かった。その途中でこう呟くのだった。

「一体何なんだろうな」

彼はまだわからない。しかしだった。体育館裏に向かうのだった。そこに着くとだ。もう椎名が立っていた。その入り口にだ。

その彼女にだ。陽太郎はすぐに問うた。

「おい、それで何があったんだよ」

「静かに」

「静かに？」

「そう、静かに」

こう陽太郎に告げる椎名だった。

「今は」

「一体何があつたんだ？」

「だから見ればわかる」

ここでもこの言葉を告げる椎名だった。

「それと」

「それと？」

「赤瀬達も来るから」

彼等もだというのだ。

「三人も」

「つてことは狭山と津島もかよ」

「そう」

その通りだというのである。

「来るから」

「それでも静かにか」

「そういうこと」

また言う椎名だった。

「それは守って」

「わかったよ」

またこう言う陽太郎だった。

第二十八話 見られたものその九

「じゃあそうさせてもらうな」

「うん。それで」

「それで？」

「三人も来た」

椎名が言っただった。その赤瀬達も来たのだった。すぐにだ。狭山が椎名に尋ねる。

「おい、それでよ」

「何で呼んだかね」

「ああ、何でだよ」

具体的にその理由を尋ねるのだった。どうして自分達を呼んだのかだ。

「俺達が必要なのかよ」

「必要だから呼んだ」

まずは素っ気無くいつも通り答えるのだった。

「けれど」

「けれど？何だよ」

「いつもとやってもらうことは違うから」

それはだというのである。

「それは」

「違っつてどっという具合にだよ」

「見張ってて」

こっその狭山に対して話す。

「ここで」

「ここでかよ」

「そう、津島も」

彼女もだというのだ。

「そうしてて。赤瀬は反対側」

「向こう側だね」

「回り込んでね。向こう側に」

「体育館裏は通らないんだね」

「うん」

それはしないで欲しいというのだった。

「そうして」

「それじゃあ今すぐに向こうにね」

「それで誰も通さない」

椎名は注文を加えることも忘れなかった。それもだった。

「そつちもね」

「何か色々注文があるのね」

「見張つてくれて誰も通さないだけ」

ふとぼやいた津島への返答だった。

「それで御願い」

「そう言われると簡単ね」

「だよな」

津島と狭山は今の椎名の言葉に顔を見合わせて話した。

「よく考えたらこんな場所誰も滅多に来ないし」

「実質的にはいるだけよな」

「それだけでいいってね」

「楽つていったら楽だな」

「けれどいて欲しい」

それでもだというのである。

「御願いだから」

「わかつたわ」

「それじゃあな」

二人は椎名のその言葉に頷いてそこで見張りをすることになった。

赤瀬は赤瀬で向こう側に移った。そしてそのうえでだった。

一人残った陽太郎に対して告げた。

「それで斉宮は」

「俺はどうしたらいいんだ？それで」

「私と一緒に来て」

「一緒にか」

「こっそりと」

彼に対しても言い加える。

「そうしてね」

「こっそりとだな」

「そう、こっそりと」

陽太郎に伝えてまたこっそり言ってみせた。

「来て。今からね」

「中に誰かいるのかよ」

「いるからこっそり言っ」

「それでか」

「そう、それで」

それが理由だというのだ。それでだ。

陽太郎にだ。また告げた。

「それじゃあ今からね」

「中に入るんだな」

「そう、体育館裏の中に」

まさにそこにだというのである。

第二十八話 見られたものその十

「入ろう」

「こつそりとだよな」

「そう。物陰に隠れながら」

「わかったよ。忍者みたいにな」

「具体的にはそうなって」

つまりはそういうことだった。椎名は陽太郎に念を押ししてそれから体育館裏に入った。

するとだ。そこにいたのはだ。

星華だった。そして三人もいた。陽太郎は彼女達をまず見たのだった。

今は椎名と共に木陰に隠れてそこから見ている。それだった。

彼女達の姿を見てだ。椎名に対して囁いた。

「あれ何やってんだ？」

「すぐにわかるから」

「すぐにかよ」

「そう、すぐに」

椎名はこう陽太郎に囁き返した。顔は星華達に向いている。

「わかる」

「何なんだよ、そりゃ」

「だから見てて」

「とりあえずは見るんだな」

「何ごとも見ることから」

椎名はここでは正論を述べた。

「だから」

「何かわからないけれどそれでいいんだな」

「そういうこと」

こう陽太郎に話してだ。見るように諭す。

そしてだった。陽太郎も椎名のその言葉に頷き彼女達を見る。するとだった。

星華達が誰かと話しているのが見えた。ここであった。

椎名が横からまた囁いてきたのだ。

「それじゃあ」

「それじゃあ？」

「さらに進む」

「進むのかよ」

「木陰に隠れながら」

「あの連中には見えないように」

「そうして行ってだな」

陽太郎は椎名に問い返した。すると椎名はそれを見てからすっと動いた。左手に、木陰と木陰を伝えてであった。そうして進むのだった。

陽太郎もそれについて行く。そうして星華達に近付く。椎名が適当な場所で立ち止まると彼もそれに合わせて立ち止まる。そこでだった。

椎名がまた囁いてきたのだった。

「一つ言っておくけれど」

「今度は何だよ」

「絶対に騒がない」

ここで椎名が注意するのはこのことだった。

「何があっても」

「声は出すな」

「何を見てもね」

「おい、物騒な言葉だな」

陽太郎は椎名の今の言葉に思わず小声で突っ込み返した。

「本当に忍者みたいだな」

「だから忍者になって」

「それでか」

「そう、それでいくから」

「わかったよ。じゃあ約束するな」

「はい、これ」

椎名は一枚のタオルを渡してきた。それで口を塞がせようというのだ。とにかく彼女がかなり用心していることは陽太郎にもわかった。

それだ。陽太郎もそのタオルを無言で受け取ったのだった。

「これでお口をね」

「塞ぐんだな」

「その通り」

「わかったよ。それにしてもな」

陽太郎はそのタオルを差し出した椎名を見てまた言う。

「随分と慎重だな、今回」

「何時でもそうだけれど」

「いや、いつも以上にだよ」

「そうだというのである。」

「何かあるのかよ」

「あるから慎重になる」

「こつした口調はここでも変わらない。」

「そういうこと」

「何か緊張する言葉だな」

「そう、緊張してて」

「さもないと駄目な状況ってことか」

「そう、それに」

「絶対に驚くなっというんだな」

「何を見ても」

とにかく今回の椎名は注文が多かった。陽太郎はその彼女に宮沢賢治の童話を思い出したがそれはあえて言わなかった。そうしてその星華達を見るのだった。

第二十八話 見られたものその十一

彼女を見るとだった。

(んっ?)

誰かと話していたのだった。

「あんなねえ、だから何なのよ」

「何で斉宮と付き合ってるのよ」

「あれどういうことよ」

星華の周りの橋口達がその誰かに対して言っていた。

その誰かがだ。次に気になった。

(誰なんだ、一体)

(場所、移る)

椎名がここで囁いてきた。

(そうするから)

(ああ、わかった)

椎名のその囁きに頷いて場所を変える。星華達が困んでいるその

誰かが見える場所に移った。木陰だがそこから見える。それは。

(えっ!?)

(声はあげない)

また囁いてきた椎名だった。

(何があっても)

(け、けれどよ)

(今声をあげたら何もかもが駄目になるから)

椎名は強い声で囁いてきた。

(だから駄目)

(それでか)

(そう、絶対に駄目)

何度も陽太郎に強く言うのだった。そうしてだった。

狼狽しかけた陽太郎を静かにさせる。それで陽太郎も落ち着いた。

陽太郎はその月美を見てだ。狼狽は抑えたがそれでもだ。椎名に
対して問わずにはいられなかった。

(これどういふことなんだよ)

(黙って見る)

(まだかよ)

(そう、まだ)

こういふのであった。ここでもだ。

(その時になったら言っから)

(じゃあその時までだな)

(そういうこと)

とにかく今は陽太郎を抑えて見させる。陽太郎も何とか理性を保
つて見ていた。そうするとだった。三人は囲んでいる月美に対して
さらに言っていた。

「あんだじゃ彼に釣り合わないのよ」

「さつさと別れなさいよ」

「別れないとね」

「すぐんでさえいた。明らかにだ。」

「これからどうなっても知らないわよ」

「私達だって考えがあるんだからね」

「いい？学校だつてね」

「来れなくなるわよ」

「どっちにしる齊宮には会えなくなるわよ」

「さあ、どつするのよ」

「凄み続けてだ。言う言葉はだ。」

「別れるの？それとも痛い目見るの？」

「どっちにするのよ」

「どつしたいのよ」

「そんな、私……」

四人に囲まれてだ。月美は項垂れるばかりである。そうしてその
うで彼女達の言葉に応える。完全に押されてしまっていた。

その月美にだ。今度は星華が言つのだった。

「あのね、あんたね」

「私ですか」

「そうよ。調子に乗るんじゃないわよ」

月美を睨み据えての言葉だった。

「大体何よ。男たぶらかしてばかりで」

「私、そんなことは」

「言い訳なんていいのよ」

最初から聞くつもりはなかった。

「いい？ 斉宮の前に二度と出ない」

「それで声もかけない」

「絶対に別れるのよ」

「若し別れなかったらね」

「何だ、あいつ等」

陽太郎はここでは怒りを抑えていた。そうしてである。

ここでも椎名に対して囁いたのだった。

（なあ）

（うん）

（何であいつ等俺と月美を別れさせようとしてるんだ？）

（気付かない？）

（何がだ？）

（それでもすぐにわかる）

あえて言わない椎名だった。しかしこつも話すのだった。

第二十八話 見られたものその十二

(ただ)

(ただ。何だよ)

(今ので普通は気付くと思う)

こう陽太郎に囁くのであった。

(気付かないんだ)

(だから何がだよ)

やはりわからない陽太郎だった。怪訝な顔にさえなっている。

(俺が何に気付かないっていうんだよ)

(本当にわからないみたいだからいい)

(だからいいって言われてもよ)

(とにかく見る)

また見るように話す椎名だった。

(そして時期が来れば)

(その時だな)

(そう、その時に)

(今にも行きたいんだけどな)

(それでも我慢する)

ここでも椎名は陽太郎を止める。何度もだった。

そしてそのうえで二人で見る。するとであった。

「いい?」

「は、はい」

星華が月美にすごんだ。月美は明らかに戸惑っていた。

「あんたこのまま調子に乗ってたらね」

「そうよ。徹底的にやってやるから」

「学校来られなくしてやるわよ」

「それでもいいの?」

三人も言っただ。今にも掴みかからんばかりだった。

「それが嫌なら別れなさいよ」

「いいわね、斉宮とね」

「わかつたわね」

「そんな……」

「わからないっていうんならね」

星華もエンジンがかかってきた。

「あんた、承知しないからね」

「承知しない」

「あんたのノートでも教科書でも何でも滅茶苦茶にして」

実際にそうしようとして果たせなかったことである。椎名が邪魔をしてだ。椎名にとっては月美のものを護ったのだが彼女達にとってはそうなのだ。

「ロツカーでも何でもよ」

（やっぱり）

椎名はここで呟いたのだった。

（そういう魂胆だったのね）

（何かあったのかよ）

（あの連中つきぴーの教科書とかノートとか荒らそうとしてた）

（それっていじめだろ）

（そう、いじめ）

そのものだというのである。

（それをしようとしていた）

（佐藤がか！？）

これはだ。陽太郎には信じられない話だった。それは星華をよく知っているからである。少なくとも中学の時の彼女をである。

（あいつがそんなことするかよ）

（斉宮、人間はね）

（人間は？）

（色んな一面がある）

椎名が言うのはこのことだった。

(いい面もあれば悪い面も)

(悪いって。まさか)

(醜い面もある)

椎名はさらにこう言い加えた。

(そう、誰にも)

(誰にもかよ)

(その通り。だからあの娘も)

(嘘だろ、それ)

(嘘じゃない)

椎名は今度はこのことを否定したのだった。

(目の前で起こっていることが現実だから)

(くっ、じゃあここはよ)

(もう少し待つ)

ここでも飛び出ようとすると陽太郎をまたしても止めた。

(焦ったら成功するものも失敗する)

(あ、ああ。わかった)

(人が何度言っても焦る奴は馬鹿)

椎名の言葉はここではきついものだった。

(それで失敗する奴に限って自分では責任を取らない)

(まあそういう奴いるよな)

(斉宮もそういう人間になりたくなかったら)

(落ち着けていうんだな)

(そういうこと)

椎名がここで言うのはこのことだった。

(いい。しっかりする)

(わかったよ。それじゃあな)

陽太郎はまた踏み止まれた。そのうえで落ち着いて様子を見守るのだった。二人が囁き合っているその間にもだ。星華達は月美に言っていた。

「それでどうするのよ」

「別れるの？」

「それともどうするのよ」

三人は顔を前にやって月美を問い詰めていた。

「別れるんでしょ」

「そうするわよね」

「若しそうしなかつたら酷いわよ」

「いい？私だつてね」

星華の言葉はここでは一人称だった。

「何時までも言わないわよ」

「そうよ、どうしてもって言うんなら」

「今ここでね」

「思い知らせてやるわよ」

実際に橋口が手をあげようとした。ここで、であった。

椎名がだ。さつと陽太郎に囁いた。

(今よ)

(ああ、わかった)

(つきぴーを御願い)

こつ陽太郎に告げるとであった、

陽太郎は木陰から出た。そのうえでその橋口と月美の間に入つて
であった。振り下ろされる彼女の右手を自分の左手で受けてみせた
のだった。

「えっ!？」

「どういつこと!？」

「何で斉宮がなのよ」

まず驚きの声をあげたのは三人だった。顔にもそれが出ている。

「何で出て来たのよ」

「どうしてなのよ」

「何処から？」

「そんなことはどうでもいい」

椎名も出て来た。彼女もまた四人と月美の間に入る。そうして彼

女を護るのであった。

二人は星華達と対峙する。彼等にとって正念場のはじまりであった。

見られたもの 完

2010・11・9

第二十九話 壊れてしまったものその一

第二十九話 壊れてしまったもの

陽太郎は星華達を見据えていた。そうして言うのだった。

「見てたぞ」

「見てたって」

「まさか」

「ずっと」

「ああ、ずっとだ」

こう三人に言い返す。強い目になっている。

「ずっと見てたんだよ」

「嘘、そんな」

それを言われて最も驚いたのは星華だった。その顔に驚愕が走る。顔が割れそうになっている。まるで鏡を金属で叩いた時の様に。そしてその顔で言うのだった。声もまさに割れそうになってしまっていた。

「それじゃあ……」

「おい、佐藤」

陽太郎はその星華に対して言った。

「何なんだよ、一体」

「何なんだよって」

「何で月美のこといじめるんだよ」

実に具体的な問いだった。

「こいつが御前に何かしたのかよ」

「それは」

「どうなんだよ、それは」

強い言葉が険しいものになっていた。

「そんなのしてないだろ、全然な」

「それは……」

「じゃあ何でいじめるんだよ」

また言う陽太郎だった。

「こいつが何もしてないっていうのによ。いや、しててもだよ」

「いじめは最低」

椎名も言ってきた。

「絶対に許さない」

「いじめてるっていうの!？」

「私達がつていうの」

「何よそれ」

三人がムキになった顔で椎名に言い返す。

「何処がなのよ」

「そんなの全然してないじゃない」

「そうよ」

「嘘じゃなかったら自覚してない」

だがその三人に対してだ。椎名は冷たく言ったのだった。

「それだけ」

「ふん、そう言うのね」

「ああ言えばこう言うで」

「本当に口の減らないチビね」

「チビって言うな」

その単語には速攻で言い返す椎名だった。

「私はチビじゃない」

「じゃあ何だつてのよ」

「あんたがチビじゃなかったらよ」

「他の何だつてんのよ」

「私は私」

これが椎名の言葉だった。はっきりと言い切る。

「そうだから」

「ふん、ならいいわよ」

「あんたがそう言うのならね」

「勝手にそう思ってたら？」

三人は忌々しげに言い捨てる。諦めたのである。しかし椎名はまだ言うのだった。月美を後ろに護ったままそのうえでだった。

「とにかくつきぴーには何もさせない」

「何もって何がなのよ」

「いじめさせない」

具体的な言葉だった。またいじめという言葉を出したのであった。

「絶対に」

「あのね、私達はね」

星華がムキになった顔で言い返す。

「西堀にね。ただね」

「おい、聞いてたぞ」

だが、だった。陽太郎が言うのだった。

「全部な」

「全部って？」

「そつだよ、全部だよ」

また言う彼だった。

第二十九話 壊れてしまったものその二

「御前月美に俺と別れろって言ってたよな」

「それは、その……」

「言ってたな」

言い訳は許さなかった。強い言葉だった。

「そうだな」

「え、ええ」

陽太郎に強く言われてはだった。星華は弱かった。それで俯いてしまってた。その陽太郎に対して弱い声で頷くしかできなかった。

そしてだ。こう言うのだった。

「まあ。そうだけれど」

「そんなこと絶対にしないからな」

「絶対につて」

「何をなのよ」

「どうするっていうのよ」

「だから別れないからな」

陽太郎は三人にも強い声と目で返した。

「月美とはな。御前等が何を言ってもな」

「くっ……」

「言ってたわね」

「そうするっていうのね」

「そつだ、絶対に別れない」

月美を後ろに護ったまま言い切る。

「御前等が何を言ってもな」

「そういうことだから」

月美もまた言ってきた。

「若しそれで何かしたらその時は絶対に許さないから」

「うっ……」

「わ、わかったわよ」

「そこまで言うのならね」

三人も退くしかなかった。椎名の目は完全に座っていた。明らかに本気の目であった。無論言葉もそうなっていたのだった。それではなのだった。

三人も沈黙してしまった。しかしであった。

陽太郎はまだ言う。星華を見据えてだった。そして彼女に言うのだった。

「おい、佐藤」

「う、うん」

「御前こんなことする奴だったんだな」

完全に怒っている目だった。

「物陰でこそこそと。こんなことする奴だったんだな」

「ち、違う」

星華は必死にそれを否定しようとする。

「私は」

「じゃあ何なんだよ、今までの」

「私は、それはその」

戸惑いながら視線を陽太郎から逸らして右斜め下にやってだ。それで言うのだった。

「斉宮と」

「俺と？」

「あの、その」

「だから何なんだよ」

「ううん、何でもない」

言えなかった。普段もそうだったが今は特にだ。どうしても言えなかった。

「何でもないの」

「じゃあ何でこんなことしてんだよ」

陽太郎の怒りは収まらない。星華に対してさらに言う。

「御前月美のこと嫌いなんだな」

「それは……」

「嫌いじゃないとこんなことしないよな」

「う、うん……」

力なくだった。陽太郎の言葉に頷いて返す。

「そうだけれど」

「嫌いな相手だったら何をしてもいい」

陽太郎はそう断定した。口元にも怒りが見えている。冷静さは保っていた。しかしそれでも怒りが露わになっているのは隠せなかった。

「そういう奴だったのかよ」

「ちよ、ちよっとねえ」

「あんた幾ら何でも」

「そんなこと言ったら」

三人は星華の前に出て彼女を守ろうとする。そうしてそのうえで陽太郎に対して言い返すのだった。そうしてまた言うのだった。

「星華ちゃんだってね」

「確かに私達だってそうだけれど」

「よくないことしたけれど」

今更ながら気付いてだった。負い目を感じていたがそれでも言うのだった。

「それでもよ」

「どうしてもって思っ」

「それで」

「どうしてもって何だよ」

陽太郎はその三人に対して問い返す。

第二十九話 壊れてしまったものその三

「どんな理由であれこんなこと許される筈ないだろうが」

「その通り」

椎名もここでまた言う。

「絶対に許されない」

「もうな。俺はな」

陽太郎はあらためて星華に告げた。

「御前のこと友達とは思わないからな」

「えっ・・・・・・・・」

「絶交だ」

厳しい顔で告げるのだった。

「もう絶交だ。二度と話し掛けるな」

「嘘、そんな・・・・・・・・」

「嘘なんて言うかよ」

また言う陽太郎だった。

「こんな状況でな。言うかよ」

「じゃあ、もう・・・・・・・・」

「俺も声なんてかけないからな」

陽太郎の言葉は続く。

「絶対にな。声なんてかけるなよ」

「・・・・・・・・」

「じゃあな」

喋れなくなつた星華からだ。顔を背けた。そうしてだった。

月美にだ。声をかけたのだった。

「行こうか」

「えっ・・・・・・・・」

「だから行こうか」

月美には穏やかな調子だった。

「もうこんなところにいるも何にもならないだろ？」

「それは」

「だからもう行こう」

陽太郎はまた月美に告げた。

「部活。行こうか」

「あつ、そうですね」

月美は用意太郎に言われて思い出した。

「じゃあ今から」

「行こうか」

「はい」

微笑んでだ。陽太郎のその言葉に頷いた。

そうしてだった。歩きはじめた彼の後ろについて行くのだった。

椎名もだった。星華達を見ることなく月美に告げた。

「行こう、つきぴー」

「部活にね」

「そう、身体を動かすのもいいことだから」

あえて星華達のことには言わなかった。嫌な思いをさせない為だ。

「だから」

「うん。それじゃあ」

月美はちらりと星華達を見た。三人は苦い顔になっている。そして

星華は完全に我を失い呆然となっている。その彼女を見てだった。

月美はだ。ふと気付いたのだった。

「若しかして佐藤さんも」

「行こう」

しかしかった。ここでまた椎名が言うのだった。

「部活にね」

「え、ええ」

彼女の言葉で考えを中断させられてだった。

そうしてそのまま体育館裏を後にする。そして佐山達と合流する。

狭山がすぐに椎名に対してこう言ってきたのだった。

「ああ、長かったな」

「そう?」

「しかも西堀さんまで一緒なんだな」

「何があったの?」

「何もなかった」

津島にもこう返す椎名だった。

「別に」

「ひょっとしてここで待ち合わせしてたとか?」

「そういうことか?」

「大体そんなところ」

あえて多くを話さないのはここでもだった。

「そういうことだから」

「そうか。まあとにかくな」

「これで話は終わりね」

「うん」

椎名は二人の言葉にこくりと頷いてみせた。

「そういうこと」

「よし、じゃあな」

「今からアルバイトね」

津島はそれだった。今日も店の手伝いだというのだ。

第二十九話 壊れてしまったものその四

「頑張るわよ、今日もね」

「じゃあ赤瀬に連絡して」

椎名は携帯を出してだった。実際に連絡を入れた。

そうしてだった。落ち着いた声で言うのだった。

「これで何もかも終わり」

「終わったんだな」

「そう、終わった」

また狭山の言葉に対して応えたのだった。

「これにて一件落着」

「急に水戸黄門になったな」

「それ遠山の金さんよ」

ぼけた狭山に津島が速攻で突っ込みを入れた。顔を彼の方に前に突き出したうえでだ。そうして彼に突っ込みを入れたのであった。

「間違えてるでしょ」

「あれっ、そうだったか？」

「そうよ。金さんが桜吹雪見せてから言う言葉じゃない」

「悪人に打ち首とか獄門とか遠島とか言ってたな」

「そうよ。だから違うわよ」

「こっ狭山に話すのだった。」

「水戸黄門じゃね」

「そうか。違ったか」

「映研なのにそんな間違えたら駄目でしょ」

「誰にだって間違いはあるだろ」

「あんたは多過ぎるの」

「こっ返す津島だった。」

「何かとね」

「ちえっ、俺何かボロクソだな」

「じゃあ間違えないといいでしょ」

「それもそうか」

「そうよ。まあそれじゃあ」

「うん、部活」

また言う椎名だった。

「今から行くから」

「剣道もな。そろそろまたなんだよ」

陽太郎も椎名に合わせて言う。

「練習試合な」

「相手何処だよ」

「ああ、西宮の方の高校でさ」

そこだというのだ。

「結構強いところしくてさ」

「相手にとって不足なしか」

「っていつかうちより強そうなんだよな」

こう狭山に返すのだった。

「やばいかなって思ってたな」

「負けるかもってか」

「まあ練習試合だけれどな」

それでもだというのだ。

「けれど負けるとやっぱりな」

「そうか。まあ俺文科系だからそういうのあまりわからないんだ
れどな」

「そういうのわからないか」

「ちよつとな」

狭山は少し困った顔になって陽太郎に答えた。

「悪いな」

「いや、それはいいさ」

「そうか」

「ああ、それでな」

「それで？」

「今結構練習に気合入れてるんだよ」

陽太郎はこう狭山に話した。

「实际な」

「それっていいことだよな」

「ああ、そう思う」

自分でも言うのだった。

「本当にな」

「そう。部活に熱中できるのはいいこと」

これは椎名も言った。

「それができるに値する部活なら」

「そうじゃない部活もあるのね」

「その部活による」

椎名はこう津島に告げた。

第二十九話 壊れてしまったものその五

「それぞれ」

「うっん、先輩とか？」

「それもあるけれど特に顧問が問題」

椎名が指摘するのは顧問についてであった。それが一番問題だといふのである。

「それが」

「顧問ねえ」

「教師は問題のある人間も多いから」

「ああ、いるいる」

「そうよね、いるわよね」

椎名の今の言葉には狭山と津島が同時に言ってきた。顔を顰めさせてそのうえでだ。彼女に対して突っ込みを入れたのである。

「何処にもそういう教師ってな」

「いるわよね」

「この学校は殆どいないみたいだけれどな」

「いるのよね、とんでもない教師って」

「そう。教師に問題があるのは」

椎名は何故そうなっているのかも言う。何故教師という職業に問題のある人間が多いのかもだ。把握しているのであった。

「その組織のせい」

「組織？」

陽太郎が椎名のその言葉に顔を向ける。

「何だそれ」

「教職員組合」

椎名は陽太郎に伝える形でこの組織の名前を言ってみせた。

「それ」

「先生の労働組合みたいなものか」

「そういうもの」

「それが問題だったのか」

「大いに問題」

椎名は言い切った。

「その組織があるからおかしくなる」

「何かそれ聞くとどっかの国の出先機関みたいだよな」

「そうよね」

狭山と津島はここで常にニュースに出ているとあるテロ支援国家のことを連想した。その国は日本にも出先機関を置いているのである。

「あそこみたいなものか？それって」

「つまりは」

「殆ど同じ」

椎名は二人にこう述べた。

「つているかその国とも付き合いがある組織だから」

「げっ、先生がテロリストと付き合いあるのかよ」

「何それ」

二人もこれには引いた。

「それってまじいだろ」

「幾ら何でもね」

「そう、かなりまじい」

椎名も言う。

「つていうか最悪の状態」

「じゃあうちの学校の先生がまともなのは」

「そうした組織が入ってないから」

こう陽太郎にも述べたのだった。

「いいことに」

「それでか」

「そう。だから」

「じゃあ逆に言えばその組織が強い学校は大変だな」

「実際に悲惨なことになる」

椎名は何処か暗くなっている声で述べた。

「もう教師がやりたい放題」

「暴力振るってもか？」

「お咎めなし」

実際にそうだとしたのであった。

「恐ろしいことに。どんな暴力ふるっても」

「そりゃ本当に怖いな」

「そうよね」

狭山も津島も言葉を失ってしまっていた。

「そんな状況になったらな」

「学校にいられないわよ」

「だからおかしくなっている学校もある」

椎名はとにかくそうした教師やその組織を嫌っていた。それは実によくわかることだった。実際に彼女もそのことを隠してはいない。

「そういうこと」

「ううん、八条高校ってそういう意味でも」

「いい学校よね」

「俺の知ってる限りいじめもないしな」

「そうよね」

「いじめは」

椎名は二人の今の言葉には反応を見せた。無意識のうちのだ。

第二十九話 壊れてしまったものその六

陽太郎も月美もその顔を強張らせる。先程のことを思い出したからだ。椎名はその二人を横目で見てからだ。それで言ったのだった。

「今は話さない」

「あつ、そうか」

「そうするのね」

「うん。とにかく今は部活」

「だよな」

「それがバイトね」

「そういうこと。アフターも楽しく」

ここではあえて英語をその会話に入れてみせる。これは椎名の茶目っ気である。

「学園生活はかくあるべし」

「じゃあこれからは」

「つきぴーは居合を磨く」

月美に返した言葉だった。

「そうあるべし」

「そうよね。それじゃあ」

「剣は心をも映し出す」

椎名はこつも言った。

「だからこそ」

「部活で居合をなのね」

「心身共に磨く」

「うん、わかったわ」

「そうすればいいから」

「ええ、それじゃあ今から」

「頑張ってきて」

また月美に告げた。

「存分にね」

「ええ」

月美も笑顔で頷く。そうして彼等は部活に行くのだった。

しかしだ。星華達は。体育館裏で呆然となっていた。辺りは赤く染まりそれが闇の中に落ちようとしている。その中でだった。

月美は沈んだ顔でだ。動かない。三人がその彼女に声をかける。

「ね、ねえ」

「もう行かない？」

「部活に」

「部活……」

星華は三人のその言葉に声を出した。

「今から」

「うん、行ったら？」

「もうね」

「行こうよ」

「けれど」

星華は頂垂れたまま言葉を返す。

「私、もう」

「もうって？」

「あの、確かにさ」

「斉宮ああ言っただよ」

三人はおろおろとしている。それでも言うのだった、

「けれどよ。またチャンスあるから」

「諦めないでね」

「また次によ」

「言えばいいじゃない」

「そうそう」

「そうしようよ」

「けれど。絶交って」

三人が何を言っても無駄だった。今の彼女にはだ。

それで頂垂れたままだ。その目から。涙を流しだした。それは静かだが確実に溢れ出る。そしてそれはもう止まることがなかった。

そしてそのまま泣き崩れた。両手を肘から地面に置き伏せてだ。顔を隠して泣きだしたのだった。

その星華にだ。三人は言う言葉がなかった。

そうして彼女はこの日は何もできなかった。部活にも行かずそのまま家に帰りだ。夕食も食べずに部屋に閉じ籠もってしまった。

そんな彼女に気付いてだ。両親も言うのだった。

「どうしたんだ、あいつ」

「さあ」

母が父の言葉に応える。今二人はちゃぶ台に座ってそれで夕食を食べている。コロッケに味噌汁、それに野菜の惣菜という典型的なメニューだ、

父はコロッケにソースをかけながらだ。言うのだった。

「いつもは夕食になったら真っ先に降りて来るのにな」

「そうよね、本当にすぐになのにな」

「けれど今日に限ってどうしたんだ？」

父は首を傾げさせて言う。

第二十九話 壊れてしまったものその七

「本当に」

「うづん、どうしてかしら」

「御前わかるか？」

「わからないから今こうしてね」

「首を捻ってるか」

「そうよ」

まさにその通りであった。

「あの娘何があつたのかしら」

「まさかあいつも年頃だけれどな」

「ここでこんなことを言う父だった。」

「それか？」

「誰かと喧嘩したとか？」

「それじゃないのか？」

こう話す両親だった。母は味噌汁の中の揚げをその箸に挟んでい
る。白めの色の味噌汁の中に他に白菜やもやしも見える。

「部活の誰かとじゃないのか？」

「あの娘気が強いしね」

「有り得るだろ、それ」

「確かにね。じゃあやっぱりそえね」

「俺はそう思うぞ」

「私もね」

彼等はこう考えていた。しかしだった。

一緒にいて夕食を食べていた星子はだ。こう親に言った。

「そうかな」

「そうかなって」

「違つていうの？」

「ほら、お姉ってこれまでも何度も喧嘩してきたじゃない」

「クラスや部活の女の子とな」

「男の子だったこともあったわね」

一見すると気の強い彼女は男女問わず喧嘩の相手にしてきたのだ。それは両親もよく知っていた。だからこそ今こう思っているのだ。

「けれど殴り合いはしないからな」

「それはいいところね」

「だからそれだろ」

「どうせ負けたんでしょ。大したことないわよ」

「けれど負けた時も」

星子は右手に赤い箸、左手に白い茶碗を持ったまま言う。茶碗の中にはまだ食べかけの白く柔らかい御飯が山盛りになっている。

「お姉つて全然平気じゃなかった？」

「そういえばそうか？」

「そうよね」

両親も言われて気付く。

「いつも自分から負けたって笑いながら来たか」

「それで明日は勝つって御飯三杯だったわよね」

「女なのによく食う奴だよ」

「だから背はそこそこあるけれどね」

何気に娘の胸の小ささも言ったりする。尚星子は姉よりずっと胸が大きかったりする。その顔立ち是非常に似ていてもである。

「それがないな」

「どうしてかしら」

「ああ、そうか」

ここで父は察した明るい顔になって言うのだった。言いながら黒い箸でコロツケを奇麗に切る。ソースで黒と茶色の二色になったそのコロツケをだ。

「あいつも年頃だからな」

「年頃だから？」

「一人前に傷つくようになったんだよ」

こんなことをだ。星子に言うのだった。もう一人の娘にだ。

「それだよ、それ」

「それでだっていうの?」

「そうだろ」

また言う父だった。

「それでなんだよ」

「そうかな」

「御前だってそうなるよ」

「そうよ。あの年頃って難しいのよ」

母も父の考えを受け入れて言う。

「やっぱりそうなんでしょうね」

「やれやれ、仕方ない奴だな」

「全くね」

両親は今度は温かい笑顔になっていた。そうしての言葉だった。

第二十九話 壊れてしまったものその八

「そんなこと考えなくてもいいのにな」

「後で馬鹿馬鹿しいってなるのにね」

「まあ今はそつとしておいてやるか」

「それがいいわね」

親として妥当な言葉であり対応だった。だが二人は真実を知らなかったしわかつていなかった。それこそが問題であったのだが。

「それじゃあな」

「今はね」

「それがいいかな」

星子は首を傾げさせながら言った。

「今は」

「気遣いもしつかりしなさい」

母はここで次娘に話した。

「あんたはそれができてるからね」

「それはわかっているつもりだけれど」

「つもりだけれど？」

「今のお姉ってそうなのかな」

ここでまた首を傾げさせる彼女だった。

「本当に。喧嘩してなのかしら」

「違うのか」

「そんな気がするけれど」

「こつ父にも話す。」

「違うかな、やっぱり」

「どうだろうな。ただ」

「ただ？」

「あいつが早く元気になればいいな」

「そつよね」

母も父の言葉に頷く。二人共その顔は心配そうなものだ。

「早くね」

「ああ。見守るか」

「そうしましょう。今はね」

「それで何とかなればいいけれど」

また言う星子だった。彼女は姉が本当に心配だった。そしてそれからだ。

星華は部屋から出なくなった。それが三日続く。食べ物は部屋の扉の前に置くだけだった。置くのは星子が自分から志願した。

それで置く。この朝もだった。

「ねえお姉」

「・・・・・・・・・・」

返事はない。気配も弱い。

「御飯ここに置いておくからね」

「・・・・・・・・・・」

「晩御飯は。これね」

その横に置かれていた。しかしだった。

殆ど手をつけてはいなかった。全くと行ってよかった。

それを見て心配になる。だが今はだった。

彼女にもどうすることもできなかった。とてもであった。

「私学校に行くから」

こう言つて扉の前を去る。後ろ髪を引かれる思いだったが今はどうすることもできなかったのだ。ただ扉の前に来ることだけしかできなかつた。

そしてだ。学校ではだ。三人は星華がいないことに明らかに戸惑っていた。

それでだ。クラスの端で口々に話すのだった。

「ねえ」

「ええ」

「どうしてなのよ」

怪訝な顔で話をする彼女達だった。

「星華ちゃん来ないのよ」

「病気じゃないわよね」

「違うわよね、やっぱり」

何となくだ。それはわかっていた。

そしてだ。州脇が言うのだった。

「多分ね」

「あれよね。齊宮とのことで」

「それしかないわよね」

「うん、そう思うわ」

州脇は怪訝な顔で橋口と野上に述べた。

「やっぱり。あれしかね」

「シヨックだったのね」

「つまりは」

「どうしようかしら」

そしてだ。また言う州脇だった。

第二十九話 壊れてしまったものその九

「これから」

「星華ちゃん立ち直れない？」

「まさかと思うけれど」

「だから学校に来ないんじゃない？」

州脇は考えていた。星華がどうして今も学校に来ないのか。考えれば考える程だった。そうした答えしか思い浮かばなかった。それで言う。するとだった。

「ねえ」

「うん」

「どうしたの？」

「行ってみる？」

今度言ったのは橋口だ。二人は彼女の言葉に顔を向けた。

「星華ちゃんのお家」

「そうする？」

「やっぱり」

二人も彼女の言葉に頷く。そうしてだった。

「じゃあ今日にでも」

「あっ、今日はまだ」

野上がだ。それは止めたのだった。

「止めた方がいいわね」

「今日はなの」

「ええ、その方がいいわね」

彼女もまた他の二人に話した。

「ちよつとね」

「タイミングを見るのね」

「つまりは」

「ええ、その方がいいわ」

これが彼女の考えだった。

「その方がね」

「じゃあ少し時間を見て」

「そうしてなのね」

「時間を見て行こう」

具体的な言葉だった。

「一週間位ね」

「それだけ待てば星華ちゃんも少し落ち着くかしら」

「そうよね」

二人はまた野上の言葉に頷く。彼女達も星華のことを真剣に考えていた。

そしてであった。ちらりと月美を見る。今日も横には椎名がいて二人で楽しく話していた。

「若しかして私達って」

「そうよね」

「ひよっとしたら」

暗い顔での言葉だった。

「とんでもないことしたかも」

「軽い気持ちで星華ちゃんを」

「どうしようもない状況にしたのかも」

こう思いだしていたのである。

「それで星華ちゃんに何かあったら」

「どうしよう」

「大変なことになったら」

少しずつだが気付いてきたのだ。そしてだ。

椎名もその彼女達を見た。それで目を少しだけ光らせた。しかしそれは今は隠してだ。隣にいる月美に対してこんなことを言うのだ。つた。

「今日は」

「うん。今日は」

「放課後面白い場所に行ったら？」

「面白い場所？」

「そう、デートに」

「時間が」

月美が言おうとする。だがその前にだった。椎名は言い切ってみせた。

「時間はあるから」

「あるの？」

「時間は作るもの」

こつ月美に告げるのだった。

「だから」

「作るものなの」

「ジエームス＝ボンドは仕事中でも」

「007よね」

「そう、女の子と遊ぶ時間は作るから」

「それって凄くないかしら」

「凄いけれど誰でもできる」

言い切りはここでもであった。月美に言い聞かせるようにしても言葉だった。

「だからつきぴーも」

「時間を作ったなの」

「つきぴーも斉宮も奥手だから」

「そうかしら」

「そう、奥手だから」

こつ言っただけであった。そうしてなのだった。椎名は彼女にさらに話す。

第二十九話 壊れてしまったものその十

「うん、それでね」

「それでなのね」

「そう。絶対に時間を作るべき」

「そうして何処に行くの？」

「ワンステップ行ける場所」

そこだというのである。そこにだと話すのだった。

「そこに」

「そこになの」

「そう、そこに行くといいから」

「それで何処？そこって」

「夜景が見える場所」

ここではまだ具体的な言葉ではなかった。いささか抽象的な言葉だった。

そしてだった。それをさらに話すのだった。

「そこに行くといいから」

「夜景なの」

「夜の海」

今度はさらに踏み込んで具体的な場所を話した。

「港に行くといい」

「夜の港なの」

「神戸はそうしたいい場所が沢山あるから」

港町の特権であるが神戸は特にであった。伊達に太平洋有数の港を持っているわけではない。そうした夜景には恵まれているのである。

「そこに行くといい」

「時間を作ったの」

「そういうこと。お家に帰る理由が遅くなっても」

「その時は？」
「理由は幾らでも作られる」
「それも大丈夫だというのである。とにかく勧める椎名だった。」
「だからここはアタックあるべし」
「あるべしなのね」
「そう、あるべし」
椎名はまた言った。
「そしてワンステップあがる」
「そういうこと。それじゃあ」
「うん。それじゃあ」
「夜の港町」
「またそこだと話す。」
「二人で一緒に行くといいから」
「夜の港町って」
「一人で行くより二人で行くといいから」
「そんなにいいのね」
「行かないと怒る」
「今度は発破をかける。椎名の話術であった。」
「いいわね」
「うん、それじゃあ」
「あとは」
「あとは？」
「今日のことだけけれど」
「今度は自分と月美のことを話す。そうするのだった。」
「何処に行くの？」
「何処につて？」
「そう、私達は」
「ううんと、それじゃあだけれど」
「何処でもいいけれど二人で楽しい場所にしよう」
「それだったら」

椎名にそう言われてだ。月美はこう話してきたのだった。

「いい場所があるけれど」

「いい場所？」

「その港町。行かない？」

月美はここでにこりと笑った。そのうえでの椎名への言葉だった。

「今日にね。早速」

「私となの」

「陽太郎君とも見たいけれど」

「私とも」

「陽太郎君はかけがえのない相手よ」

それは否定できなかった。それも絶対にであった。

「けれどね。愛ちゃんもね」

「私も」

「そう。一番の親友でしょ」

「だからなの」

「陽太郎は。恋人としてかけがえのない相手で」

「私は親友として」

「かけがえのない相手だから」

だからだというのである。月美は静かに話すのだった。その椎名の顔を見ながらだ。

第二十九話 壊れてしまったものその十一

「それは駄目かしら」

「有り難う」

椎名の返答はこれだった。御礼であった。

「それじゃあお言葉に甘えて」

「うん、じゃあね。けれど」

「けれど？」

「別にいいわよね、これって」

ふとだ。戸惑いも見せる月美だった。その戸惑いを顔に浮かべたままだ。椎名に対して話した。

「かけがえのない相手が二人いても」

「恋人は一人でないと駄目だけれど」

「友達はいいのね」

「何人もいていい」

そうだと月美に話すのだった。

「何人でも」

「そうなのね」

「そう。多ければ多いだけ幸せになれるもの」

それが友達だということである。

「多くなくてもそれでも」

「それでも？」

「深ければいい」

これもいいというのであった。

「深い絆を築けるということは」

「いうことは？」

「幸せなこと」

「幸せなの」

「そう、それだけの元があるから」

それでだと話す椎名であった。

「幸せなの」

「そう。じゃあ私も」

「一緒に築こう」

また自分から月美に告げた。

「今から」

「二人で築くものなのね」

「だから絆」

「絆は一人じゃできない」

「そう。二人でお互いに」

話していく。月美の顔を見上げながら。月美も小柄な方だが椎名はその彼女よりさらに小柄だ。だからそうなってしまうのである。

それで見上げてだ。月美に言うのだった。

「そうしていいこう」

「うん、じゃあまずはね」

「港に二人でね」

「行こう」

こう話してだった。二人でその港に向かった。そこは。

夜の濃紫の空に赤や青、白の星達が瞬いている。そして前からは波音がする。二人は今は暗いコンクリートの上に立っている。

そこに立ってだ。まずは椎名が言うのだった。

「どう？ここ」

「お昼に来てもいいけれど」

彼女の横にいるその月美が答えた。

「夜に来るとそれで」

「全然違う」

「そうね。全然違うわ」

実際にそうだという月美だった。ここで風が吹いてだ。

月美のその長い髪を揺らした。椎名は今度はそれを見てだった。

「今の」

「今の？」

「そう、今の」

月美に今かけた言葉はこれだった。

「今みたいに風が吹けば余計にいい」

「髪の毛が揺れてなのね」

「そう、それで相手はぐつとくる」

表情は変わらないが楽しそうに話すのだった。

「髪の毛もまた刺激剤になるから」

「刺激剤だったの」

「そう、髪の毛は女の子の命」

「それは昔から言われてるけれど」

「余計にそうなる」

月美を横目で見ながらの言葉だった。

第二十九話 壊れてしまったものその十二

「実にいい感じに」

「いい感じになのね」

「その通り。それに」

「それに？」

「神戸だから風も多い」

「あつ、そうね」

椎名に言われてだった。月美はこのことも認識したのだった。神戸は六甲から吹き降ろす風が多くだ。そのことを思い出してだったのだ。

「それは」

「特に港には来るから」

「それも考えてだったの」

「ありとあらゆることを考えて手を打つ」

また軍師めいた言葉だった。

「恋愛は全て戦争だから」

「戦争だったの、恋愛って」

「相手もいれば複数の勢力も絡み合ったりする」

「複数の」

「同盟国もできれば丁々発止のやり取りもある」

「何かそう言くと戦国時代みたいね」

「実際にそうだから」

だからだというのであった。

「よくわかっておいて」

「ええ、それじゃあ」

「今日は私と来て」

「次は陽太郎君と」

「そう、ここなら」

その港町にいながらだ。椎名はさらに話したのだった。

「斉宮も陥ちるから」

「陥ちるの？」

「陥落する」

そうだとするのである。

「間違いなく」

「何かそれも戦争みたいね」

「みたいじゃなくてそのものだから」

「だからなの」

「そう、今回はいい偵察になったから」

下見と言わずにだ。月美をその気にさせる為にあえて出した言葉だった。

そしてだった。さらに話すのだった。

「次はね」

「ええ。陽太郎君と」

「ここで次のステップに向かうべき」

見事な至難だった。

「そういうことだから」

「うん。じゃあ今日はこれで」

「帰ろう」

椎名からの言葉だった。

「それじゃあ今から」

「そうね。寒いし」

「寒いのが問題ね」

「それはどうしようかしら」

「安心して。それも」

「寒さもなの？」

「寒さに対するには」

どうすればいいのか。椎名はこのことも指南するのだった。やはり軍師であった。

「服を着ればいいから」
「服を。ってことは」
「制服の下に着込めばいいから」
「そうね。それじゃあ」
「まずブラウスの上にセーター」
「ベストタイプのね」
「それとハイソックスの下にストッキング」
「それも言うのだった。」
「あと手袋も」
「ミトンでいいかしら」
「尚よし」
「いいというのであった。」
「それも毛皮の」
「ええ。じゃあそういうので」
「それとマフラーも」
「それは必要ないんじゃない」
「そろそろ出してもいいから」
「秋の終わりなのにな？」
「夜だといい」
「こづ月美に話すのだった。」

第二十九話 壊れてしまったものその十三

「だからそれも」

「何か冬みたいね」

「そう、冬は」

「冬は？」

「クリスマスがある」

椎名の目はもうそこに向かっていった。まさに先の先を見ていた。

「それも考えること」

「クリスマス。そうね」

「まさにカップルの為の時だから」

「じゃあ私もしっかりしないとイケないわね」

「そういうこと。後ろには私がいるから」

椎名がだた。いるというのであった。

「それは安心して」

「うん、有り難う」

「そういうことだから」

こう話してだった。二人は港町を見ていた。そしてこれからのことを考えていた。そしてさらにであった。見るものを見ていた。

夜の中にだ。星達がある。それを見て椎名が呟いた。

「ねえつきびー」

「星ね」

「そう、あれ」

椎名がその星を見上げながら月美に話してきた。月美も同じく夜空を見上げてそのうえでその星達を見ているのである。

「あの星は」

「オリオン座ね」

「そう、オリオンがあそこにいる」

「中学の時から見てるわよね」

月美はその星が三つ連なっている星座を見て話す。冷たい空に浮かび上がっているそれはまるで幻想の中にあるようであった。

「塾の帰りにいつも」

「見ていたね」

「そして今もね」

「私、子供の頃からだった」

「子供の頃からって？」

「星座見ていた」

そうだったというのである。

「それで天文部にも入った」

「そうだったの」

「とにかく星は好き」

椎名はまた言った。

「見ているだけで幸せ。けれど」

「けれど？」

「一人で見るより二人で見るともっといい」

そうだというのであった。

「するともっと幸せになれる」

「じゃあ今は」

「つきぴーと見られてもつる幸せ」

「そう。有り難う」

「オリオンはね」

「ギリシア神話の英雄よね」

今度はその折音の話になっていた。ギリシア神話に残る英雄の一人だ。海神ポセイドンの息子の一人であり美貌と巨大な身体で知られている。

「恋をしたけれどそれは適わなかった」

「アルテミスとだったわね」

「お互いに好きだけけれど結ばれなかった」

アルテミスの兄であるアポロンが二人の仲を邪魔したからだ。彼

は策謀によつてオリオンを死なせ妹神の愛を妨げたのである。

その策謀の種類は様々なことが言われている。だが彼が妹神とオリオンの仲を嫉妬しそうしたことは神話にある通りである。

「けれどつきぴーは」

「幸せになつていいのね」

「ならないと駄目」

「こつ言い切るのだった。」

「ほら、お月様」

「あつ、あるわね」

「あれがアルテミス」

椎名が指差した夜空のところに白い満月があつた。それは優しい光を放つてそこにあつた。白く穏やかな光を放っていたのだ。

アルテミスは月の女神だ。そこからも話すのだった。

「そしてつきぴーも」

「月ね」

自分の名前にある。だから言えることだった。

「つまりは」

「そう、月の女神は幸せになれなかった」

「想つていても」

「それでオリオンをそこに置いた」

オリオン座は月のすぐ傍にあつた。愛し合っていた二人は夜空の中で一緒になつていいる。そう椎名は話をしていいるのだった。

第二十九話 壊れてしまったものその十四

「けれどつきぴーと斉宮は」

「陽太郎君は」

「太陽」

それだというのであった。

「陽太郎だから」

「そうよね。けれどお日様とお月様は」

「夜と昼だから」

「一緒になれないんじゃない」

「けれどなれる」

「なれるの？」

月美は椎名の今の言葉には怪訝な顔になった。そのうえで彼女に問い返す。

「お日様とお月様が」

「お空を見るとわかる」

こつ返す椎名だった。

「お昼にお日様があつても一緒にお月様もあつたりするから」

「あつ、そうね」

「夜も同じ。見えないだけ」

「それでも一緒にいるのね」

「人の目には見えないだけ。わかりにくいだけで」

「一緒にいるから」

「だからそれはいい」

「いいのね」

「そう、いい」

また月美に言う。

「そういうものだから」

「それでなのね」

「一緒になれるから」

月美と陽太郎がというのであった。

「それに二人だけじゃないから」

「愛ちゃんがいてくれるのね」

「愛だから」

椎名はここでは自分の名前のことを話すのだった。

「愛がいるから」

「そうよね。愛がね」

「愛が味方していて成就しない愛なんてないから」

「うふふ、そうよね。愛の女神様ね」

「女神かどうかはわからないけれど私の名前がそれだから」

その愛という言葉をあえて強調して話すのであった。月美を励ましさらに向かわせる為にだ。陽太郎とのその愛にである。

「安心して」

「うん、そうさせてもらうわ」

「じゃあ。これからどうする？」

「もう少し見たいけれど」

月美は椎名に顔を向けて微笑んでこう話した。

「いいかしら」

「夜空をね」

「夜空だけじゃなくて他のもね」

「港や海も？」

「ええ、そうだったのも」

全てをだというのであった。

「見たいけれど」

「それはいいことね」

「いいのね」

「私も。そう思うから」

「そう、愛ちゃんも」

「言い訳は後で考える」

椎名は微かに笑って述べた。

「そう、後で」

「お父さんやお母さんへの言い訳は」

「これが中学生だったら駄目だけれど」

「そうよね、中学生だったらね」

「けれど中学生と高校生は違う」

このことが大事なのだった。

「だから何とでもなる」

「あまり遅れ過ぎてもあれだけれどね」

「そこは匙加減」

「そうということね」

「そう、じゃあ見よう」

「ええ。それじゃあ」

「二人でね」

今は幸せな二人だった。月美は椎名と夜の港の全てを見ながらその先のことを考えていた。他ならぬ陽太郎とのデートのことをだ。

時間は静かに、だが確実に進んでいた。二人の仲もまた。

第二十九話

完

2010・11・19

第三十話 光と影その一

第三十話 光と影

一週間が過ぎて十日になっても。まだだった。

「ねえ、本当に」

「ああ、ちよつとな」

両親もだ。いい加減不安になってきていた。

「あの娘、大丈夫なのかしら」

「ずっと家から出ないな」

「風邪、じゃないわよね」

「ここまで悪いってことはないだろ」

父親がそれを否定した。

「幾ら何でもな」

「そうよね。学校に行けるって聞いてもね」

「返事ないんだな」

「そうなの。ないの」

実際にそうだというのであった。母は暗い顔で夫に話す。

「もうね。全然ね」

「それじゃあ今は」

「俺が行こうか」

ここで父が言ってきた。

「俺が行ってそれでな」

「それ、止めた方がいいわよ」

「止めた方がか」

「ええ、いいわ」

そうだというのだった。

「お父さんあれよね。無理に出そうって考えてるわよね」

「ああ」

実際にそうだとだ。妻の言葉に頷く。

「そうだけれどな」
「それは止めておいた方がいいわ。強引なのはね」
「部屋に入るのは特にか」
「それは絶対に駄目ね」
「きっぱりとして言い切る母だった。」
「逆効果にしかならないから」
「そうか」
「そう、だから今はね」
「そっとしておいてか」
「それよりもよ」
「また言う母だった。」
「今はそっとしておいてね」
「立ち直るのを待つべきか」
「もう少しね」
「しかしだった。その時間は短く区切るのだった。」
「待ってましよう」
「そうか。じゃあここはな」
「あまり食べてもないけれど」
「それもか」
「ええ、いつも半分以上残してるわ」
「食事は扉の前に置いているのだ。しかしそれがなのだった。」
「食欲もないのよ」
「あいつがか」
「そう、ないの」
「また言う母だった。」
「だから心配だけれど」
「あいつがあそこまでなるなんてな」
「いつも元気だったのにな」
「それがあなるなんて」
「困り果てるしかない両親だった。そしてだ。」

星子もだ。そんな姉の部屋の扉を見てだ。心配する顔になっていた。

そしてそのうえでだ。何かを考えているのだった。

「ここは」

そしてだった。彼女も決めたのだった。

星華は学校に来なくなつた。それでだった。

三人はだ。その彼女の机を見て暗い顔で話すのだった。

「ねえ、どうしよう」

「星華ちゃん来なくなつたら、このまま」

「どうしよう」

「本当によ」

「どうしたらいいのよ」

「ここは」

こう話してだった。どうしていいかわかりかねていた。しかしだった。

ふとだ。ここで野上が言うのだった。

「ねえ」

「うん」

「何か考えがあるの？」

「お家行ってみる？」

怪訝な顔で二人に提案するのだった。

「星華ちゃんのお家にね」

「そつえば私達って」

「そつよね」

「お互いのお家行ったことって」

「なかつたわよね」

このことに気付いたのだった。話しをしてだ。

第三十話 光と影その二

「じゃあここで？」

「星華ちゃんのお家に行つて」

「それでお話ししてよね」

「学校にまた」

「来てもらおう」

野上は心から心配する顔になっていた。それは二人も同じだ。

「だつて。このままじゃ星華ちゃん」

「多分。沈み込んだままだろうし」

「大変なことにもなるわよね」

その心配する顔でそれぞれ話してであつた。

「下手したら」

「そうなつたら最悪だし」

「じゃあ」

「ここはやっぱり」

「こつ言つてだつた。そのうえであらためて野上に顔を向けて話した。

「行こう、星華ちゃんのお家に」

「ここはね」

「ええ、それしかないわよね」

野上もだつた。深刻な顔で二人に返した。

「やっぱり」

「うん、それじゃあね」

「行こうね」

「うん、今日にでもね」

三人も決めたのだつた。どうするべきかと。

そしてだつた。陽太郎達は。

また校庭で車座になつて昼食の弁当を食べていた。陽太郎のそれ

はまた月美が作ってくれたものだ。

いつもの三段重箱のそれを食べながらだ。彼は月美の話を聞いていた。

「今度の日曜？」

「部活ありますか？」

「朝にあつてそれからさ」

「ないんですね」

「ああ。そっちは？」

「はい、居合部もです」

彼女のいるその部活もだというのであった。

「ないです」

「じゃあその日は午後からか」

「どうでしょうか、それで」

「いいよ」

一言で答えた彼だった。

「じゃあそれでさ」

「はい、わかりました」

笑顔で応える月美だった。これで話は決まった。

そのうえでだ。月美は陽太郎にまた告げた。そしてであった。

「それじゃあですね」

「うん、場所は？」

「港はどうですか？」

「港？」

「はい、港です」

そこだというのであった。

「そこでいいですか？」

「港なんだ」

「夜の港。どうでしょうか」

椎名にアドバイスされたことをそのまま話す。しかし彼女にアドバイスされたということはあえて伏した。尚傍には当然その彼女も

いる。

「そこで」

「何か変わった場所だよな」

陽太郎は話を聞いてこう述べた。

「港なんて」

「そうですか？」

「いや、いつもプールとか本屋とか映画館だったじゃない」

「そうですね、そういえば」

「それで港なんだ」

お握りを食べながら言う陽太郎だった。丁寧に海苔で包まれている三角のお握りである。おかずは玉子焼きに野菜のお浸しにと様々である。

「何かさ」

「お嫌ですか？」

「いや、いいよ」

反対はしなかった。それも全くである。

「それはさ」

「ですか」

「夜かあ。夜のデートっていつも下校でしてるけれど」

「港は新鮮ですよね」

「だよな」

「ですから余計にと思ひまして」

そういうことにするのだった。実際に考えていることは秘密である。椎名に言われたことはあえて隠す、アドバイスはそうするものだということもわかってきているのだ。

月美は陽太郎と同じそのお握りを食べながらだ。また言うであつた。

「それじゃあ」

「一緒に行こうか、港に」

「はい」

今度はにこりと笑って応えた。応えることができた。

そしてそんな二人を見てだ。津島が狭山に言っのであった。

「ねえ」

「何だよ」

津島は食パンにマーガリンを塗って、そして狭山はアンパンを食べている。そうしながら話すのだった。

第三十話 光と影その三

「私達もね」

「夜の港か？」

「違うわよ。それじゃあ二番煎じじゃない」

「じゃあ何処だっていうんだよ」

「夜のビアホールなんてどう？」

これが津島の提案だった。

「どうせだったら。二人でね」

「おい、ビアホールってな」

狭山は津島のその言葉にすぐに突っ込みを入れた。本当にすぐであった。

「それは駄目だろ」

「八条町は高校生でもお酒菌いいじゃない」

ほぼ黙認である。

「だから。どうなのよ」

「今秋だぞ」

狭山は季節から話した。

「秋だぞ。それでビアホールなんてな」

「ないか」

「そうだよ、ねえよ」

口を尖らせて津島にこのことを告げたのだった。

「ある訳ねえだろ」

「もう終わってるのね」

「他の場所になるだと」

「じゃあ」

それを受けてだった。津島は少し考える顔になった後でだ。こつこつなのであった。

「それじゃあカラオケ行こう」

「夜のカラオケかよ」

「そう、スタープラチナ」

店の名前まで言うのであった。

「そこに行くの。どうかしら」

「あそこはなあ」

しかしであった。狭山はスタープラチナと聞いて浮かない顔を見せる。そのうえでこう言うのだった。アンパンを牛乳で流し込んでからだった。

「あそこのお店の娘横浜ファンだろ」

「何時も試合経過とかグッズとか置いてるわよね」

「試合負けたら荒れるからな、あの娘」

「けれどももうシーズンオフじゃない」

「オフでも阪神ファンが行ったらまずいんじゃないのか？」

「ああ、それは大丈夫だから」

津島はその左手を手刀の形にして左右にべらべらと振って述べた。

「阪神はいいのよ、あそこの娘さんは」

「そうなのかよ」

「巨人じゃないとね」

「いいのかよ」

「阪神には比較的寛大な人だから」

こうした人物は多い。どの球団も巨人以外には寛容であるのだ。そしてそれは人として非常に正しいことでもあるのだ。

「だから大丈夫よ」

「そうか。じゃあな」

「じゃあ夜のカラオケね」

「そんなの誰でもやってねえか？」

「気にしない気にしない」

また左手を振ってだった。

「そんなことはね」

「随分といい加減な話だな」

「いい加減でいいじゃない」

今度はこう返す津島だった。

「こういうことは余裕がある方がいいのよ」

「そういうものか？」

「私はそう思っけね」

「まあそれもそうか」

狭山も少し考えたうえで津島のその言葉に頷いた。

「余裕があるのがいいか」

「そういうこと。それでね」

「ああ、それで？」

「どうするの、それで」

「カラオケでいいかどうかか」

「それでどうするの？」

また狭山に問う津島だった。

「別の場所にする？それならまた探すけれど」

「いや、そこでいいさ」

狭山は結局それで賛成したのだった。いいというのである。

第三十話 光と影その四

「それじゃあさ」

「じゃあスタープラチナね」

「そこにしようか。ただしな」

「ただし？」

「お任せメニユーは止めた方がいいな」

狭山はここでこんなことを言うのだった。

「あれはな」

「ああ、スタープラチナ名物のあれね」

「飲んでると時々その飲んでるのに全然合わないのが出て来るんだよな」

狭山はアンパンを食べ終えた。そして今度はチョコパンを食べながら話すのだった。

「例えば日本酒飲んでるのにサンドイッチとかな」

「ああ、それ私もあつたわ」

「だろ？他にもな」

「ワインの時にカレーとか」

「ビールの時にポッキーとかな」

そういうものが出て来るというのである。

「そういうのだからな。ちよつとな」

「頼みたくないのね」

「ああ、あれ何でなんだ？」

怪訝な顔になってた。津島に問う彼だった。津島はハムサンドを食べている最中だ。見れば他には野菜サンドや卵サンドもある。

「何であそこまで合わない組み合わせが出るんだ？」

「その時のあの娘の機嫌次第なのよ、あれって」

「あのベイスターズ狂いのあの娘のかよ」

「そう。あの娘お店をやってる家の娘さんでね」

津島はこのことも知っていたのだった。

「あそこのお店にいるのよ」

「ああ、そうだったのかよ。バイトの娘じゃなかったのか」

「そうよ。お家の娘さんなの」

狭山にそれだと話すのだった。

「実はね」

「それであそこまでカウンターをベ이스ターズまみれにできたのか」

「そういうこと。あそここのビルってカラオケの他に居酒屋とゲーム

センターもやってるじゃない」

「あそここのビル自体がか」

「あそこのお家のものなの」

「そうだったのかよ」

「それでなのよね」

津島はその娘のことをさらに話していく。

「ああしてね。いつもカウOUNTERにいて」

「料理も作ってるのか」

「そうなの。それで」

「それで？」

「ベ이스ターズが負けたり何かがあったら」

どうなるか。そのことをさらに話すのだった。

「ああなるのよ」

「お任せメニューがおかしくなるのかよ」

「逆にベ이스ターズが勝ったり何かいいことがあったら」

「いいメニューが出て来るんだ」

「そういうのだけね」

「じゃあ止めておくか」

狭山は津島の話をおこまで聞いてだ。すぐにこう言ったのだった。

「それじゃあな」

「止めておくの」

「だってよ。ベ이스ターズだろ」

「ええ、そうよ」
「じゃあ止めておくよ」
また言う狭山だった。
「あそこって負けたり悪いことがある方がずっと多いからな」
「よくもまああそこまでって感じだね」
「親会社に問題があるんじゃないかねえのか？」
狭山が指摘するのはそこだった。
「あの親会社によ」
「巨人と同じだしね。マスコミだから」
「だから問題あるんじゃないのか？」
「そうかもね。巨人だってあれだしな」
「だよな。それだったらな」
「それだからな」
また話す狭山だった。
「ああやってな。トラブル続きなんだろうな」
「難儀な話よね」
「全くだぜ。だからあのメニューはな」
話が戻った。カラオケの方にだ。
「止めておいた方がいいだろ」
「二百円で安いしたまに凄いメニューが出るわよ」
「とんでもないのが出る方が可能性あるだろ」
「それはそうだけれどね」
これは否定できなかった。事実を知っていて嘔吐きでもない限りはだ。津島は少なくとも嘘を吐いたりするような人間ではなかった。
「確かにね」
「二百円で地雷買うこともないだろ」
また言う狭山だった。

第三十話 光と影その五

「だからオーソドックスに行こうぜ」

「そうする？じゃあ詳しいことはカラオケに行っただけからね」

「そこからか」

「歌って飲んで食べて」

津島はこの三つを同じものとしたのだった。

「それで楽しくね」

「さて、何歌おうかな」

「まあ歌は何でもいいけれどね」

「それはか」

「そう、それはね」

いいというのであった。

「私こだわらないし」

「それ昔からだな」

「いいものは何でもいいのよ」

カツサンドを食べながら断言するのだった。

「クラシックでもロックでもね」

「演歌もか」

「勿論」

こう断言する津島だった。

「いい音楽は何でもね」

「ジャンルはこだわらないか」

「そうよ。それでだけね」

「ああ、何だ？」

「シュークリーム食べたくない？」

津島はこんなことも言った。

「何かね」

「カラオケでか？」

「そう、スタープラチナってお菓子もいいじゃない」

「和菓子屋から仕入れてたんだな」

「山月堂ね」

その和菓子屋の名前のことも話されるのだった。

「あそこのお菓子っていいよね」

「そうだよな。ただ」

「あそこのお店の御主人よね」

「あの人ドラゴンズ好きだよなあ」

「それもかなりね」

話題はここでも野球だった。とにかくやきゅうから離れない二人だった。

「背番号二十あるし」

「あれって星野さんのか？」

狭山も星野の現役時代の背番号は知っていたのだった。星野はも

う中日だけの星野ではなく阪神ファンにも縁の深い存在だったのだ。

「あれってよ」

「違うみたいよ」

「じゃあ宣投手か？」

狭山は今度はこの名前も話した。

「それじゃあ」

「あのピッチャーでもないわ」

「じゃあ誰だよ」

「杉下さんらしいわ」

「ああ、あのフォークのか」

「そう、その人」

伝説のピッチャーである。中日に日本一をもたらした絶対のエースであった。そのフォークは二段落ちるとさえ言われていたのである。

「その人のらしいわ」

「確か昭和二十年代の人だよな」

「ええ、そうよ」

「滅茶苦茶古い人だよな」

「それだけに年代ものよ」

こう狭山に話すのだった。

「だからあのお店はね」

「どうにもならないか」

「そういうこと。まあ中日だからいいじゃない」

津島は笑って寛容さも見せた。

「巨人じゃないから」

「それもそうだな」

しかも狭山もそれで納得して頷く。

「あれが堀内とかの背番号だったらな」

「皆来ないけれどね」

「絶対にな」

それは断言であつた。

第三十話 光と影その六

「誰が行くかよ」

「だからいいじゃない」

また話す津島だった。

「中日だとまだね」

「最近結構以上に中日にやられてるけれどな」

「まあここんどこ数年はね」

それは否定できなかった。事實は否定できるものではない。

「けれど中日はまだね」

「ああ、巨人よりはずっと許せるな」

「確かに負けるのは悔しいけれど」

それでも巨人以外には極めて寛容である、これこそまさに阪神ファンだった。二人はそうした意味で正しい阪神ファンであった。

そしてだ。津島はこう結論付けた。

「巨人の服着て作ったシュークリームじゃないからいいじゃない」

「そうか。じゃあそれ食うか」

「シュークリームもね」

「あそこケーキもいいんだよな」

狭山はケーキについても話した。

「和菓子屋だけけれど洋菓子もいいんだよな」

「そうよね。確かにね」

「最近和菓子屋でも洋菓子作るんだな」

「パン屋がケーキ作るのによくあるけれど」

実際に彼女の家がそうしているから言えることだった。

「和菓子屋さんもね」

「あそこ八条百貨店にもお店出してるしな」

「実はね」

津島はここであることを話すのだった。

「うちも元々は」
「御前の家のお店かよ」
「あそこから暖簾分けしてもらったのよ」
「そうした経緯があったというのである。」
「最初は和菓子やってたけれど変わったのよ」
「パン屋にか」
「そうなのよ、実はね」
「和菓子からパンかよ」
「蒸しパンからはじめたのよ」
「こう話すのだった。」
「それで叔父さんは元に戻った形でケーキやってて」
「そうか。暖簾分けだったのかよ」
「その頃は戦前でね」
「おい、古いな」
「そうよ。私の家って戦前からパン屋なの」
「今話す衝撃の事実だった。中々老舗なのだ。」
「海軍さんにも入れてたのよ」
「歴史感じるな」
「今はその流れで海自さんにも入れてるし」
「そのまま続いている形であった。」
「そうしてるの」
「海軍なあ」
「叔父さんのケーキもよ」
「そちらもだった。」
「神戸にも海自さんの基地あるからね」
「あまり大きくない基地だよな」
「まあそれはね」
「一応神戸にも基地はあるのだ。やはり海上自衛隊の基地は横須賀に呉、舞鶴、佐世保、そして大湊の五つがメインなのだ。」
「でも入れさせてもらってるから」

「安定した収入はあるってことか」

「そういうこと」

こう狭山に話すのだった。

「それはしっかりしてるから」

「そうか」

「そうよ。それでね」

「ああ、それで？」

「まあとにかく。叔父さんの為の偵察と勉強も兼ねて」

「お師匠さんのお家の味を食いに行くか」

「そういうこと」

こうした理由をつけてだった。津島は狭山をそこに誘うのであった。そうしてなのだった。

椎名は椎名でだ。赤瀬に話す。

「じゃあ」

「僕達も？」

「バイキング行こう」

巨大な弁当を食べている彼への言葉だ。無論彼女の手作りだ。

「今度の休み」

「バイキングだね」

「そう、それ」

こう返す椎名だった。

第三十話 光と影その七

「それに行こう」

「何処のバイキングかな」

「八条百貨店の」

「そののだというのだ。」

「中華レストランのそれ」

「そののだね」

「安くて美味しいから」

バイキングだけでなく食べ物で人気が出るには不可欠の二つの事項であった。

「だからそこにしよう」

「うん、わかったよ」

赤瀬も椎名のその言葉に頷く。

「それじゃあそこでね」

「そうしよう。それでだけれど」

「それでだけれど？」

「そこで美味しいのは」

「ええと、あそこって何がよかったかな」

「海鮮麺」

それだというのである。

「麺類全体が美味しいけれど特にそれがいい」

「海鮮麺がなんだ」

「そう。バイキングでもあるから」

「バイキングに麺類があるんだ」

「頼んだら持って来てくれる」

椎名は淡々と話していく。しかしそれは確かだといつののである。

「だから何につけてもそれ」

「海鮮麺だね」

「その他にもあのお店は海鮮ものがいい」

「シーフードのお店なんだ」

「広東料理だから」

広東料理の特徴として海鮮ものがある。何故かというところから広東料理発祥の地である広東は海に面しておりそこでいい海の幸がよく採れるからである。だからである。

「炒飯も点心も」

「海のをだね」

「そう、赤瀬魚介類は」

「大好きだよ」

即答だった。今も浅蜷の煮付けを食べている。

「何でも食べるけれど海のがね」

「だから。それで」

「一緒になんだね」

「そう、行こう」

椎名はまた彼を誘ってきた。

「それで食べよう」

「うん、二人で楽しくね」

「食べることは人生の幸せ」

いつもの目で、いつもの口調での言葉だった。

「それなくして人生なし」

「そうそう」

「そういえば俺達もな」

「そうですよね」

陽太郎と月美は周りの二組のカップルの会話を聞いて自分達のことを考えて述べた。

「デートっていったら登下校の時以外は」

「食べてばかりですよね」

自分達のことには気付いたのである。そのうえで話だった。

「だから余計にだよな」

「はい、今度のデートの時は」

「港の夜の景色をだよな」

陽太郎は月美に対して微笑んだうえで述べた。

「そこ、楽しもうか」

「はい、二人で」

「港かあ。そういえば俺って」

「陽太郎は？」

「あれなんだよ。子供の頃船乗りになりたいって思ったことあるんだよ」

「そうだったんですか」

「海を見ていてさ。思ったんだよ」

子供に人気のある仕事の一つである。人は本能的に海に憧れる。

それは哺乳類の祖先が海にいたせいなのかも知れない。

「何時か船に乗って。船長さんになってさ」

「それで海を旅してですね」

「なりたいと思ってたんだ」

「今もですか？」

「ああ、今はさ」

少し苦笑いになってからまた月美に述べる。

「他の夢だけれどさ」

「他のですか」

「変わったんだ」

これもよくあることだ。子供の夢は変わりやすいのも確かだ。

第三十話 光と影その八

「今はまあ」

「どんな夢ですか？」

「あれかな。花屋とかそういうのかな」

少し曖昧な返答だったが言った。

「そういうのになりたいなって思ってるんだ」

「花屋さんですか」

「花を扱う仕事に就きたいんだよ」

これが陽太郎の今の夢なのだった。

「そういうのは駄目かな」

「いいと思いますよ」

月美はにこりと笑って陽太郎の言葉に返した。

「私も夢がありますし」

「月美の夢？」

「はい、具体的なものじゃないですけど」

「それでもなんだ」

「幸せな家庭です」

そのにこりとした笑みでだ。月美は陽太郎に話した。

「そうした家庭を築きたいです」

「家庭をなんだ」

「はい、陽太郎君と一緒に」

彼のその顔を見ての言葉だった。

「幸せな家庭を。築きたいです」

「俺と」

「駄目ですか、それは」

「いや、いいのかな」

それを聞いてだった。陽太郎は戸惑いながら言うのだった。

「俺なんかで」

「陽太郎君でない」と

「そう、俺なんだ」

「はい、陽太郎君です」

またその笑顔で話す月美だった。

「私でいいですか？」

「いや、だからそれはさ」

陽太郎は戸惑ったままだったがそれでも言った。

「俺の台詞だし」

「陽太郎君のつて」

「俺って凄くいい加減だよ」

「こつ己のことを話していく。」

「それでもいいんだ」

「齊宮」

ところがだった。月美が彼に言ってきた。

「つきぴーはね」

「あ、ああ。月美が？」

「見てるから」

「俺のことをか」

「そう、見てるから」

こつ彼に話すのだった。

「だからちゃんと安心していいから」

「そうか。それでいいんだな」

「うん。ただし」

椎名は言い加えはしてきた。

「つきぴーをちゃんと守ること」

「それが条件か」

「絶対十分条件」

それだというのである。公務員試験めいた言葉だった。

「それができないと」

「俺は駄目か」

「つきぴーが許しても私が許さない」

「これが椎名の言葉だった。」

「そうということ」

「椎名の蹴りが飛んで来るのかよ」

「蹴りだけじゃ済まないから」

「おい、そりやまた物騒だな」

「私はありとあらゆる手段を知ってるから」

その後ろにどす黒いものさえ背負っての言葉だった。

「その時は覚悟すること」

「わかってるさ。それはな」

「そう。知ってるから」

言外に文化祭のことを話している。これは椎名と陽太郎、それに月美だけがわかることだった。赤瀬もであるが深くは三人だけが知っていた。

「それは」

「そうか、それはなんだな」

「気合入れて頑張ればいいから」

「このままか」

「そう、このままで」

まさにそれだというのだった。

第三十話 光と影その九

「やっていくといいから」

「じゃあ今度のデートも」

「つきぴーに何かあれば騎士になって」

「騎士か」

「そう、騎士」

今度言う言葉はそれだった。椎名はその間ずっと陽太郎を見ている。

「騎士になること」

「俺剣道だけれどそれでもいいんだな」

「武士は主君を護るもの」

これはよく抱かれているイメージである。実際に武士はその一面が強い。武士にとって重要なのはまず忠義とされていたからだ。

「けれど騎士は」

「女の人の為だってか」

「そうだ。だから」

「わかったよ。じゃあ月美には騎士になるな」

「うん。私もそれになるから」

椎名もだというのだ。騎士になるというのだ。

「けれど。第一の騎士は」

「俺か」

「そういうこと。つきぴーを御願い」

「ああ、わかったよ」

「それじゃあ」

こう話してだった。彼等も誓い合うのだった。彼等はまさに光の世界にいた。

しかし彼女達は違っていた。橋口達は学校の帰り道にあのファミレスに入っていた。そしてそこで話をするのだった。

「今からね」

「うん、行こう」

「それじゃあね」

思い詰めた顔でそれぞれ顔を見合わせて話す。

「今からね」

「星華ちゃんのところ」

「それで何とかね」

「学校に来てもらおう」

「そうしよう」

「絶対にね」

言い合いながら誓い合うのだった。そうしてだった。

これから行こうとする。しかしその時になるとだった。

「大丈夫よね」

「そうよね」

州脇と野上が難しい顔で話すのだった。

「星華ちゃん学校に行ってくれようになるわよね」

「私達が行けば」

「それでいけるわよね」

「ちゃんと」

こう話すのだった。そしてだった。

中々行こうとしない。いや、できなくなっていたのだ。

いざ行くとなったところで怖気付いてしまった。どうしようも

なくなっていた。

「行かないといけないよね」

「じゃあ行こう」

「うん、けれど」

「大丈夫よね」

中々動けなくなっていた。そしてそれはだ。

橋口も同じだった。三人は足がどうしても動けなくなっていた。

それで戸惑ってだ。前に進めなくなっていた。しかしかった。

橋口がだ。ここで言った。

「仕方ないじゃない」

「仕方ない？」

「仕方ないって？」

「星華ちゃん友達よね」

意を決した顔でだ。二人に言うのだった。

「私達の。友達よね」

「うん、そうよ」

「そうだけれど」

「じゃあ行こう」

これが彼女の言葉だった。

「今からね。行こう」

「そうね。友達だったら」

「困ってる時はね」

二人もだった。橋口の今の言葉に考える顔になった。

「じゃあ今から」

「星華ちゃんのお家にね」

「ええ、行こう」

三人で意を決した顔で言い合ってた。そうして。

三人で星華の家に行く。するとであった。

家に近付いたところでだ。ふとだった。

「あれっ、あの色々な制服って」

丁度家に帰ろうとしていた星子がだ。三人に会ったのだ。

「八条学園の制服。それに」

今度は三人の胸ポケットの校章とクラス章を見た。それは。

「お姉のクラスのもの。まさか」

それで気になってだ。すぐに三人に声をかけた。

第三十話 光と影その十

「あの」

「んっ、どうしたの？」

「何かあったの？」

「八条学園高等部の人達ですか？」

「まずはこう尋ねたのだった。」

「一年四組の」

「えっ、うん」

「そうだけれど」

「どうしてわかるの？」

「校章とクラス章で」

「素直に答える星子だった。」

「わかりますから」

「校章はわかるけれど」

「クラス章までわかるってね」

「ちよつと凄いんじゃない、それって」

「三人は星子が誰だかわからないまま話す。」

「あんだ中学生みたいだけれど」

「一体誰？」

「うちの学校と関係あるの？」

「お姉がその生徒なんです」

「ここでも素直にありのまま話す星子だった。」

「一年四組で」

「えっ、ということとは」

「あんだまさか」

「星華ちゃんのこと？」

「三人がはっとした顔になって言うた。星子がまた言うてきた。」

「お姉がどうしました？」
「やっぱり」
「あんたそうだったの」
「星華ちゃんの妹さんだったの」
「はい、そうなんです」
また答えた星子だった。そうだとだ。
「それでわかったんですけれど」
「そうだったの、妹さんだったのね」
「星華ちゃんの」
「そうだったんだ」
「あの、それでなんですけれど」
話を聞いて納得した三人にだ。星子は問うのだった。
「お姉何があったんですか？」
「何かって」
「ううん、とそれは」
「何ていうか」
「お姉ここんとこずっと自分の部屋に籠もって出て来ないんです」
星子は困った顔になってこのことを話した。
「引き籠もって。本当に一体何があったんですか？」
「ここじゃなんだから」
「往來の真ん中だし」
「ちよつとね」
しかしここでだ。三人は周囲を見回してそのうえで星子に言うの
だった。
「場所変えない？」
「そこで話したいけれど」
「いいかしら」
「はい、わかりました」
星子も三人のその言葉に頷いた。
「それじゃあですね」

「あそこがいいわね」

「そうね」

「あのお店がね」

丁度いい具合に三人から見て左手、星子から見て右手にケンタッキーがあつた。その赤い看板と白いあのおじさんを見て三人は言うのだった。

「あそこでフライドチキンでも食べながらね」

「それでお話しない？」

「それでどうかしら」

「わかりました」

星子も三人のその言葉に頷いた。

「それじゃあ。今からあそこで」

「ええ、フライドチキン誇るからね」

「お話ししよう」

「それじゃあね」

「誇るなんていいですけど」

それは謙遜していいという星子だった。

「私、お金ありますし」

「だからいいのよ、それはね」

「先輩だし」

「気にしないでいいのよ」

三人は星子のその謙遜に余裕のある笑みで返す。

「まあとにかくね」

「あのお店に入つてね」

「お話しよう」

「わかりました。それじゃあ」

星子もその言葉に頷いた。そうしてだった。

四人でケンタッキーに入った。そしてそこでだ。星子は話の真相を知るのだった。

第三十話

完

2
0
1
0
・
1
1
・
2
5

第三十一話 夜の港でその一

夜の港で

星子は三人に連れられてケンタッキーに入った。商店街の中にあるその店はわりかし繁盛していて平日の夕方に学生達が集まっている。

その中の四人用の席に座ってだ。まずは星子が言うのだった。

「あの」

「ええ、星華ちゃんだけねど」

「お部屋に籠りつきりなのね」

「そうなってるの」

「殆ど食べなくなっちゃって」

星子は困った顔で話すのだった。

「それで。心配で」

「そうなの。やっぱり」

「相当シヨックだったのね」

「あのことが」

「あのこつて」

星子は三人の言葉にすぐに顔を向けた。そして問うのだった。

「何ですか、それって」

「あっ、しまった」

「ここだ。言ってしまった州脇が困った顔になった。

「それはね」

「何なんですか、本当に」

「何ていうかな」

「仕方ないじゃない。どっちにしる言うしかないし」

「そうだからね」

「ここで橋口と野上が州脇に言ってきた。

「それはね」

「言っしかないじゃない」

「そうね。結局はね」

州脇もだった。今度は観念した顔になって話すのだった。

「そうなるしかないわよね」

「ええ、だからね」

「ここはね」

「わかったわ。じゃあ」

州脇は大きく溜息を吐き出した。そうしてだった。

「あのね、いいかしら」

「はい」

星子は座りながらも身構えた

「御願います。お姉に何があったんですか？」

「ふられたのよ」

「ここから話す州脇だった。

「好きだった男の子にね」

「ってことは」

それを聞いてすぐにわかった星子だった。

「斉宮先輩にですか」

「えっ、まさか」

「あんたそのこと」

「知ってたの」

「はい、知ってました」

その通りだと。星子は三人に対して答えた。

「というか気付きました」

「星華ちゃんってわかりやすいからね」

「根が素直だし」

「嘘吐くの下手だしね」

「それでなのね」

「やっぱり」

「あんたもそれで」

三人もだった。ここで星子の言葉に応えて言う。

「気付くわよね、あれじゃあ」

「気付かないのって相当鈍感なのだけれど」

「それこそもう」

「先輩は気付いてませんから」

星子はその気付いていない相手を言った。彼だというのが。

「あの、先輩って」

「そうなのよ、あんまりにも鈍感で」

「あんなにわかりやすいのに全然気付かないから」

「だからね」

「ううん、それでお姉も困ってたんですけれど」

星子は困った顔で話す。そしてそのうえだった。

三人に顔を向けてだった。そうしてそのうえで彼女達に問うのだ。
った。

「あのですね」

「え。ええ」

「何？」

「どうしたの？」

「何でふられたんですか？」

そのことをだ。率直に尋ねたのだった。

第三十一話 夜の港でその二

「あの、その鈍感な先輩に」

「う、うん」

「だからそれは」

「その」

三人は彼女の問いに戸惑いを見せてそれぞれ顔を見合わせてだ。そしてだった。今度は三人で話すのだった。

「そのことも言う？」

「どうしよう」

「言わないといけないかな」

こう話をするのだった、星子を前にしてだ。

「どうしようかしら」

「ここはね」

「言わないとこの娘事情わからないわよね」

「じゃあやっぱり？」

「言う？」

「そうしないと駄目？」

話を暫くした。そしてだった。三人はそれぞれ顔を見合わせて決める顔になったのだった。そのうえだった。

「それじゃあね」

「仕方ないわよね」

「話そう」

こう話してだった。三人で頷き合っていた。

星子にあらためて顔を向けてだ。言うのだった。

「あのね、斉宮にはもう付き合ってる娘がいるのよ」

「けれどそれだと星華ちゃん斉宮と付き合えないじゃない」

「だから」

それでだと。話すのだった。

「それで。その娘を呼び出して別れるように言ったけれど」

「けれどそこに斉宮が来て」

「そこで言われて」

「それって」

そこまで聞いてだ。星子は繭を颯めさせ暗い顔になって述べた。

「お姉が悪いですよね」

「それで私達もね」

「それでも。あの時はそれしか頭の中になくて」

「それでね」

三人は自然に俯いている。そうして話すのだった。

「あんなことして」

「それが星華ちゃんをああいうことにしちゃったの」

「私達も止めなかったし」

「あの、どう聞いても」

星子はここでまた言う。

「お姉と先輩達が悪いと思います」

「他にも意地悪しようとしたり不良けしかけたりしたし」

「今気付いたけれど最低よね」

「やっぱり」

「そう思います」

咎める目になっていた。その目で三人に告げた。

「そんなことしたら。報いがあるものです」

「うん、それで星華ちゃんああって」

「ずっと閉じ籠ってるのよね」

「自分のお家で」

「そうなってます。ふられたのがショックだったんですね」

星子は自然に腕を組んでいた。今はフライドチキンは目に入っていない。そうしてそのうえでだった。彼女は三人に話した。

「それでだったんですね」

「何とかしようと思ってここまで来たの」

「星華ちゃん、あのままじゃ絶対によくないから」

「それで」

「お姉も先輩達も最低だったと思います」

「え、ええ」

「本当にね」

「それは」

三人も言葉がなかった。それでまた俯いてしまった。

星子はその三人を見てだ。今度はこう言ったのであった。

「けれど」

「けれど？」

「けれどって？」

「お姉のこと、大事に思ってくれてますよね」

星子が今言うのはこのことだった。

「そうですね、だからここまで来てくれたんですよ」

「どうにかしたいし」

「だって。星華ちゃん友達だから」

「私達にとって」

「ですよ。私も」

そしてだった。彼女も言った。

「お姉は私にとってかけがえの無い人です」

「お姐さんだから？」

「それだから？」

「はい、困ったところもあるけれどとても素直で優しいお姉ですか」

「ら」

彼女にとっては星華は。まさにそうした相手なのだ。

第三十一話 夜の港でその三

「それにいつも元気で面倒見がよくて。そんな有り難いお姉ですか」
「ら」

「だから大切なのね」

「それでなの」

「星華ちゃんが」

「私も考えてました。今のお姉は何とかしたいって
このことも話すのだった。

「ですからここは」

「私達もそう思ってるけれど」

「それでだけれど」

「どうしようかしら」

三人の言葉はだ。まだ戸惑いの中にあつた。

しかしその中でだ。三人は何かを見つけようとしていた。それは言葉にもなっていた。

「それでもよね」

「ええ」

「星華ちゃんの為に」

こう三人で言い合うのだった。

「ここは何とかしないとね」

「それじゃあだけれど」

「ここは」

そして星子に顔を向けてだった。そして。

「ねえ」

「よかつたらだけれど」

「いい？」

切実な顔になっていた。三人共だ。

「私達に協力して」

「星華ちゃんのこと」

「御願いだから」

「はい」

そして星子もだった。三人の言葉に真剣な顔で頷くのだった。

「それじゃあ御願いします」

「有り難う。それじゃあ」

「今からね」

「星華ちゃんの為にね」

こう話してだった。四人共自然にだった。

そつと手を出し合いだった。それをそれぞれ重ね合わせた。

そのうえでだ。また四人で話すのだった。

「じゃあ私達はこれから」

「何があってもね」

「星華ちゃんを今の状況から」

「引き出しましょう」

三人に続いて星子が言っていた。そのうえでだった。まず星子が言ってきた。

「まずはですね」

「ええ、まずはね」

「どうしようかしら」

「お姉のところに行きましょう」

「こつ三人に提案するのだった。」

「それでいいですか？」

「貴女のお家っていうと」

「つまりは星華ちゃんのお家よね」

「そつよね」

「はい、そつです」

その通りだと答える星子だった。

「お姉はそこにいますから」

「いきなり行っていいのかしら」

「急にするのってやっぱり」

「やばくない」

三人は星子のその提案に戸惑いを覚えていた。そうして言うのだ
った。

「何が起こるかわからないし」

「変なことになったらどうしよう」

「星華ちゃん、あれで繊細だし」

「はい、お姉はですね」

ずっと一緒にいる妹だからこそだ。今言う星子だった。

「確かに威勢はいいけれど気が小さくて引っ込み思案なんです」

「だから斉宮にもね」

「ああして何も言えなくて」

「それでもどうにかしたいかああいうことになって」

そのことをだ。三人も話した。

「私達もそれに気付いていてもね」

「星華ちゃんをかえって煽ることになって」

「それで」

「それですけれど」

星子は今は三人の自責について何も言わずに述べた。彼女の気遣い故にだ。

「気が弱いんですよ」

「だからよ。今すぐ行くのって」

「やっぱりまずいわよ」

「そう思っけれど」

「いえ、それでもです」

しかしだった。星子はまた言うのだった。

第三十一話 夜の港でその四

「それでもここはです」

「一気に行くの？」

「星華ちゃんのところ」

「そうするの」

「お姉は弱いですから」

だからだと話してだった。

「誰かが傍にいないと駄目なんです」

「誰かがいないとなの」

「傍に」

「それで行くの」

「はい、そして話を聞くんです」

星子は三人に確かな顔と声で話した。

「そうすればいいんです」

「そういえばそうよね」

「星華ちゃんって絶対に一人にならなかつたわよね」

「そうよね」

三人もだ。ここで星華のそのことに気付いたのだった。

「だからなの」

「それであえて行って」

「星華ちゃんと話すのね」

「そうするんです」

これが星子の考えだった。

「私、お姉に何かあるとずっとお姉の話を聞いてきましたから」

「それでわかつたのね」

「妹さんだからわかるの」

「それで知ってるのね」

「そうです。ですからすぐに行きましょう」

星子の言葉は実にはつきりとしたものだった。そうしてであった。四人は決めたのだった。全てをだった。

陽太郎と月美は港に向かっていた。電車の外はもう夜になっている。その暗く家々や電柱の灯りだけが見える外を見ながらだつた。ふとだ。陽太郎は言うのだった。

「なあ」

「はい？」

「あれだよな」

「あれとは？」

「いや、この時間ってさ」

陽太郎は外を見続けている。そのうえでの言葉なのだった。

「学校から帰ってさ」

「そうですね。もうそろそろ」

「家に帰ってるんだよん」

「けれどその時間にですな」

「デートってさ」

電車の外から見える灯りはすぐに見えなくなりすぐにまた別の灯りが見える。似たような灯りだがその一つ一つが違っている。

「夜でもいいんだよな」

「夜でもですか」

「朝でも昼でも夜でも」

「こう話すのだった。」

「何時でもさ」

「そうですね。デートは」

「二人でいればそれだけで」

「デートになるんですね」

「俺今までさ」

陽太郎は気恥ずかしそうな微笑みと共に話す。

「デートって特別なものに思ってたんだ」

「私もです」

「そうだったんだ、月美もだったんだ」

「何かの儀式みたいに特別に」

「そうだよな、何か本当に勝負みたいに」

「けれどそうじゃなかったんですね」

月美は純粹な微笑みだった。そのうえでの言葉だった。

「格式ばってもいなくて」

「厳しいものじゃなくて」

「ただ二人で何処かに行けば」

「それでデートだったんだ」

「本、随分読みました」

今度は月美が気恥ずかしい顔になった。

「デートの本も」

「実は俺も」

「デートの本って一杯ありますよね」

「ネットでも見ればさ」

「雑誌でもですよ」

「もうこれでもかって一杯あるけれどさ」

とにかく何を讀んで学べばいいのかわからないまであるのだった。

「けれどそれでも」

「はい、それでもですよ」

「そこまで難しく考える必要なかったんだ」

「そうですね。けれど」

「けれど？」

「楽しいですよ」

月美は不意にこうも言うのだった。

第三十一話 夜の港でその五

「ああいう本とか雑誌読むのって」

「あつ、そういえばそうだよな」

陽太郎もだった。言われて気付いたのだった。

「何かああいう本読むのってさ」

「はい、楽しいですよね」

「病み付きになるんだよな。ネットで調べていても」

「こうすればいいとか。ああすればいいとか」

「真剣に読んでいってな」

「のめりこんでしまつて」

「ああいうのかな」

陽太郎は首を傾げながら月美に述べた。

「ああいう本の楽しみ方ってさ」

「そうなのかも知れないですね。それを考えたら」

「必要なんだよな」

「ですね。デートの仕方についての本とかは」

「行く場所なんて凄いいよな」

「デートスポットですね」

そこまで細かく書いてあるのがそうした本や雑誌やサイトの常である、ただしここには資本主義というものの原理も加わっていたりする。

「遊ぶ場所に食べる場所」

「何か俺達って食べる場所多いけれど」

「うふふ、ですよね」

そのことにはにこりと笑って返す月美だった。

「何か」

「だよな。それでもいいよな」

「いいと思いますよ」

「自然で」

それでだと。二人はわかったのだった。そんな話をしてだった。やがて二人はその港がある駅に着いた。そうしてだった。

「ここだよな」

「はい、ここです」

月美が陽太郎に答えた。

「この駅です」

「じゃあここから降りて」

「港に」

「物騒な場所じゃなかったらいいけれど」

「大丈夫です。前に愛ちゃんと一緒に行きましたけれど」

椎名と一緒に行ったことをだ。ここでさりげなく話すのだった。

「物凄く落ち着いた静かな場所で」

「そういう場所じゃないんだ」

「はい。ただ」

「ただ？」

「刑事ドラマとかの舞台になりそうな場所ですけれど」

笑ってこう話すのだった。二人は話をしながら席を立ちそうして電車を出る。蛍光灯で白く照らされている駅に降りながら話しているのだ。

「最後の決着の場とかで」

「ああ、刑事が犯人を追い詰めて」

「はい、そうした感じの場所です」

「じゃああれじゃないか？」

陽太郎は冗談めかしてこんなことを言った。

「ヤクザ屋さんとかが密かに取引してたりとかさ」

「そういうのいたらどうします？」

「その時は逃げような」

月美を見ての言葉だった。

「二人で」

「二人で、ですね」

「っていつかそうなったら本当に漫画みたいだよな」

「ですよ。流石にそれはないですよ」

「ないよ。あつたらかえって怖いよ」

「まあそこからはですね」

「こう話すのだった。」

「船が見えます」

「船がなんだ」

「それと海が」

「夜の海から」

「星も見えますから」

月美は笑顔で話していく。そうした場所だというのである。

「ではそこに今から」

「行こうか」

「はい、行きましょう」

こうしてだった。月美は陽太郎をその場所に案内するのだった。そうしてだった。

そこはだ。陽太郎にとってははじめて見る場所だった。しかし月美にとっては二回目だった。そこはあの時と同じだった。

闇の中の海から波音が聞こえる。停泊する船や街の灯りが遠くに見える。夜空には星座が瞬いている。そうした場所だった。

船の汽笛を聞いてだ。陽太郎は言うのだった。

「あのさ」

「はい？」

「汽笛って今まで何度も聞いたけれど」

港町にいるからだ。聞いていない筈がなかった。

第三十一話 夜の港でその六

「夜の汽笛って」

「お昼のとはまた違いますよね」

「不思議だよな、汽笛なのは同じなのに」

「けれど夜ってだけで」

「全然別のものに聞こえるよ」

「こう言う陽太郎だった。」

「不思議にさ」

「そうですね。夜の汽笛って」

「何か遠くから聞こえる感じで」

「それでいて近くに感じるような」

「そう感じるよな」

「どうしてでしょうか」

「いや、そう言われると」

問われると口ごもってしまってそれで返す陽太郎だった。

「何ていうか。はっきりとは言えないけれどさ」

「そんなんですか」

「あれだよな。感覚でかな」

首を捻って考えながらの言葉だった。

「見えないだろ、夜だと」

「暗くてですね」

「それで距離感とかわからなくて」

このことが大きかった。それだった。

「それでかな、やっぱり」

「それでなんですな。そういえばそうですね」

「月美もそうかな」

「はい、そう思います」

月美はここでもまたにこりとしてそのうえで陽太郎に話した。

「そういうふうに」

「夜つて。何か不思議なんだよな」

「周りが見えなくなつて。それで」

「同じ場所でも全然違うものにするよな」

「ですよ。この港だつて」

「昼の港もいけれど」

陽太郎は昼の港も好きだった。船が並んでそこにあるのを見るこ
とがだ。とても好きだったのだ。無論青い海を見ることもである。

「それでも夜の港も」

「いいですよ」

「だよ。本当に不思議な感じだよ」

「それにですね」

「それに？」

「夜にはないものもありますから」

月美はこつも話してきた。

「ちゃんと」

「つていうと一体それつて」

「ほら、上」

月美はここでは上を見上げた。するとそこにはだ。

寒くなるうとしていいるその空には星達があつた。その星はそれぞ
れ形作つていいるものがあつた。月美はそれを見ながら陽太郎に話し
た。

「あれ、見て下さい」

「星座か」

「はい、秋の星座です」

それがなのだった。今二人の上にあるのだった。月美は陽太郎も
それを見ているのを横目で確かめてからだ。また彼に話した。

「特にあそこに」

「あつ、北斗七星か」

「大熊座ですね」

「あれ、皆知ってるよな」

「わかりやすいですしね」

「一年中見られるしな」

北斗七星はそうした星だった。常に夜空にある星座なのだ。

秋の星座とそれを見ながらだ。二人で話をするのだった。

「陽太郎君星座は」

「学校で習う位で」

「他にはですか」

「特に本とか読んだことなかったな」

「そうだったんですか」

「けれどさ」

しかしというのだった。陽太郎はその月美に返した。

「今、それも変わりそうだよ」

「そうですか、じゃあ星座にも」

「興味出て来たよ。それじゃあだけれど」

「はい、どうされますか」

「暫くここにいます？」

こつ月美に提案したのである。

「ここで。星座見ていようか」

「はい、それじゃあ」

そう言われてだった。笑顔で返す月美だった。その笑顔で自分から陽太郎に話した。

「暫くここで二人で」

「星座を見て」

「ただ」

「ただ？」

「終電までにはですね」

にこやかに笑っての言葉だった。

第三十一話 夜の港でその七

「それまでには帰らないと」

「あつ、そうか」

言われてだった。それに気付いた陽太郎だった。

「電車で来たんだったよな、俺達」

「はい、ですから」

「高校生だから。車とかないし」

「あつたらそれで、でしたね」

「それは仕方ないよな。免許は十八歳からだし」

二人共まだ十六歳だ。無理な話だった。

「それはだよな」

「ですよ。ですから終電まで」

「ここで見ようか」

「そうしましょう」

「食べるのはいいか」

陽太郎はこのことも思い出したのだった。

「それは」

「ううん、ちょっと辛いですけれどね」

「それよりも今は」

「はい、星座ですね」

「こういうのもいいか」

陽太郎は温かい笑みになっていた。その笑みで星座達を見上げそうして月美に言うのだった。そうしたうえでの言葉だった。

「本当に」

「デートですよ」

「そうだよな。デートだよな」

「はい、それを今二人で」

「そうなんだよな」

こうして二人はそのデートを終電の時間まで楽しむのだった。そうして終電で帰ってからだ。月美は椎名から携帯の電話を受けたのだった。

「夜分遅く」

「あつ、愛ちゃん」

「どうだった？」

家に帰る途中でだ。道で電話を取り話をはじめ。

「それで」

「うん、陽太郎君ね」

「喜んでだ？」

「とてもね」

そうだとだ。椎名に声だけでわかる満面の笑顔で話した。

「喜んでくれたわ」

「それは何より」

それを聞いて喜ぶ椎名だった。

「じゃあ成功ね」

「ええ、とても」

「今はそうしていくといいから」

「これでいいの」

「高校生には高校生の恋愛があつて」

「だからなの」

「そう、気張らなくていい」

椎名はこう言った。

「ゆっくり。少しずつ」

「そうして進んでいけばいいのね」

「そう、焦ったら駄目」

こう言っただった。月美自身のこと話すのだった。

「つきぴーみたいな娘は特に」

「確実なのね」

「そういうこと。つきぴーは焦ったら駄目」

それは強く言うのであった。

「かえってよくないから」

「何でもそうよね」

「勉強でも部活でもそう。つきぴーは焦ったら駄目」

「焦るのって何か合わないけれど」

「だからなの」

「そういうことなのね」

「その通り。それじゃあ」

ここまで話してであった。

「続きは」

「明日ね」

「学校で聞かせてもらうから」

「うん、じゃあね」

「お休みなさい」

「お休みなさい」

最後の挨拶をしてそうして携帯を切ってだった。月美は家に帰る。するとだった。

母がだ。声をかけてきたのだ。

「遅かったわね」

「起きてたの」

「ええ、待ってたわ」

こっ娘に言うのだった。

「心配していたし」

「御免なさい」

「まあ変なことはないと思ってたけれど」

「そうなの」

「だって。陽太郎君とのデートでしょ」

母はくすりと笑って娘に述べたのだった。

第三十一話 夜の港でその八

「そうでしょ？それに行ってたのよね」

「えっ、それは」

「わかるわよ。それはね」

笑顔のまま話す母だった。

「お母さんだってそうだったし」

「お母さんもだったの」

「お父さんとね。そうしたデートをしてきたから」

「そうだったの」

「誰だってやってきたことよ」

母は娘にこうも話した。

「だから。わかったのよ」

「ううん、そういうことだったの」

「それでね」

母はまた娘に言ってきた。

「デートするのはいいけれど」

「それはいいの」

「ただ。時間はもう少し早くね」

娘に釘を刺すのを忘れなかった。それはであった。

「門限には五月蠅くないつもりだけれど」

「御免なさい」

「それだけは守って。じゃあ」

「じゃあ？」

「晩御飯食べなさい」

「ここでも優しい言葉だった。

「お風呂もあるから」

「お風呂もなの」

「まさかと思うけれど入らないつもりだったの？」

「それは」

そこまで考えていなかったただけであった。デートのことで頭が一杯だったのだ。それでとてもそこまで考えられなかったのである。

「だから、どちらを先にするのかしら」

「じゃあ御飯を」

月美が選んだのはそちらだった。

「御願い」

「わかったわ。じゃあお風呂に入ったら寝なさい」

「ええ。それじゃあ」

月美はその日を幸せに終えた。陽太郎もそれは同じであり平和に終わったのだった。しかしだった。星子達は違っていた。

時間は少し遡る。夕方だった。

州脇達三人は星華の家に来た。無論星子の家でもある。そこに来たのだった。

その家に来てだ。まずは橋口が彼女の家を見て言うのだった。

「星華ちゃんの家ってね」

「そうよね。お店やってたんだ」

「それは知らなかったわ」

橋口の言葉に州脇と野上も頷く。今星子に連れられてその店の入り口から家に入ったのである。

「ええと、お家とか修理してるんだ」

「そういうお店なのね」

「はい、そうなんです」

その通りだと応える星子だった。三人を案内している。

「ただ、お姉も私も女の子ですから」

「ああ、お店を継ぐ人がいないのね」

「つまりは」

「そうなんです。それが悩みなんです」

星子は三人にこのことも話した。

「実は」

「星華ちゃんだったらいい相手見つかると思うけれどね」

「そうよね」

「誰かいい人が絶対にね」

「私もそう思います」

その言葉に頷く星子だった。

「お姉、とてもいいものを一杯持ってますから」

「私達もそう思うわ」

「星華ちゃんはね」

「本当にいい娘なのよ」

それは確かなのだった。店の入り口から家の中に入る。少し暗くなってきた。家の中に階段が見える。二階へと続く階段だった。

それを見てだった。三人はまた話した。

「二階にいるのね」

「星華ちゃんそこなのね」

「二階の自分の部屋なのね」

「はい、そこです」

まさにその通りだというのだった。そこだとだ。

「私の部屋と隣同士なんです」

「じゃあ今からね」

「そこに行こう」

「星華ちゃんのところだね」

こうしてだった。三人は星子と共にその星華の部屋に向かうのだった。

第三十一話 夜の港でその九

階段に足を踏み込ませる。そこでだった。

「何か。今になって」

「そうよね」

「ちよつとね」

三人はそれぞれ顔を暗くさせて見合わせ合った。

「行かないといけないけれど」

「わかつてるのに」

「今になって」

「そうですよね」

星子もだ。その三人に言うのだった。

「私も。ちよつと」

「足が。何か」

「自然と動きにくくなって」

「動いて欲しいのに」

「ええ、どうしても」

しかしそれでもだった。四人は階段を登っていく。己と戦いながら。

そうして着いたのだった。その部屋の前にだ。

「ここよね」

「そうよね、この部屋よね」

「この中にいるのね」

三人は褐色の木の扉を前に見ながらここでも言い合う。

「星華ちゃん、ずっと」

「この部屋に引き籠もって」

「そうしてるのね」

「お風呂は入ってますけれど」

ここで星子は三人にこのことも話した。

「それでも」

「えっ、お風呂って」

それを聞いてだった。野上があることに気付いたのだった。それでだ。すぐに怪訝な顔で星子に尋ねた。

「あの、それ本当？」

「はい、そうですけれど」

星子はここでは何でもないといった調子で野上に問い返した。

「それが何か」

「そう。身だしなみはしっかりしてるのね」

「お姉綺麗好きですから」

これも星華のいいところなのだった。女の子だから当然だが彼女は風呂だけでなく掃除や洗濯もよくしているのである。

そのことは星子も知っていた。だがあまりにも知り過ぎてなのだった。

「あの、それが何か」

「だから。そこまで我を失っていないのよ」

野上が言うのはこのことだった。

「最後の最後までね」

「そうなんですか」

「ええ、それだと」

野上の顔に希望が戻った。そうして話すのだった。

「望みがあるわ。説得できるわ」

「できますか」

「ええ、できるわ」

また言う野上だった。

「星華ちゃん立ち直るわ」

「そうですか。じゃあ」

「行こう」

野上は星子と残る二人に声をかけた。

「それじゃあね」

「ええ、望みはあるのね」

「だったら」

それを聞いてだった。州脇と橋口の顔に生気が戻った。そしてだった。星子もだった。

「お姉、じゃあ」

「行こう、本当にね」

また野上が来てだった。そうしてだった。

星子がなのだった。そのドアノブに手をかけたのだった。

そうしてその扉を開けた。そこにいたのは。

星華だった。紛れもなく彼女だった。しかしなのだった。

星華はベッドの横に蹲ってだ。そうして泣いていた。膝をその両手で抱えてそのうえでだ。しくしくと泣いていたのだった。ベッドの他には机と本棚、それとクローゼットの他は特に何も無い女の子の部屋にしてはいささか味気のない部屋の中にいてだ。一人そうなっていたのだ。星子はその姉を見て言ってしまった。

「お姉……」

「やっぱり落ち込んでたのね」

「何か見ているのが辛いね」

「そうよね」

こう言ってだった。四人もまた辛い顔になる。だが、だった。

第三十一話 夜の港でその十

星子がだ。星華に勇気を振り絞って声をかけた。

「お姉、いい？」

「えっ？」

「大丈夫？」

こう彼女に声をかけたのである。するとだった。

星華が顔をあげた。そうしてだった。

「星子？」

「うん、お姉大丈夫？」

「何であんたがここに？」

こう妹に問うのだった。涙で赤く晴れ上がったその目でだ。

「誰も入つたらいけないのに」

「そう言われたけれどね。それでもね」

「それでもって」

「お姉が心配だから」

「そんなのいいのに」

星華は弱々しい顔で妹に返した。

「そんなこと……」

「そういうわけにはいかないのよ」

「そうよ」

「私達も考えたけれど」

「えっ、あんた達も」

ここであった。星華は三人にも気付いたのだった。

「来たの」

「うん」

「色々考えたけれど」

「それでもね」

「いいのに」

これが星華の今の返事だった。一旦彼女達から顔を背けさせてだつた。

「そんなこと、別に」

「来ないでおこうかっても考えたけれど」

「それでもね」

「やっぱり」

しかしだつた。三人は俯きながらもその星華に話すのだった。四人はまだ部屋には入っていない。扉を開けたままでそこから星華と話しているのだ。

その状況でだ。三人は言うのだった。

「私達、やっぱり」

「友達じゃない」

「だから」

「友達……」

「この人達とお話したの」

今度は星子が姉に言ってきた。

「それでね。先輩のことも」

「斉宮のことね」

「確かにお姉酷かつたわ」

月美のこともだ。あえて言ったのだった。

「そんなことしたらいけない。けれど」

「けれど？」

「落ち込んだままでもよくないから」

妹が姉に言いたいことだった。まさにこのことだった。

「だからね。それでこうして」

「私は、もう……」

「そんなこと言わないで」

姉の言葉はここでは止めた。

「絶対に」

「絶対について」

「うじうじしてるのってらしくないよ」

そして姉にこつも告げたのだった。

「そんなの。お姉じゃないよ」

「私じゃないって」

「だからね。いい？」

「いいって？」

「話、しよう」

これが姉への提案だった。

「皆でね」

「お話ね」

「そう、話しよう」

また話す妹だった。

「それじゃあね」

「それとだけれど」

「いい？」

「ここだね」

三人もまた言ってきた。そうしてであった。

彼女達は部屋の中に入る。そうして五人で車座になって話す。そして。そして。まずは星子が言ってきた。

「それでだけれど」

「ええ」

「お姉、何したの？」

姉に顔を向けてそれで問うたのだった。

「先輩達から少し御聞きしたけれど」

「.....」

「言えない？」

難しい顔で姉にまた問うた。

「そのこと」

「ううん」

姉は妹のその声には首を横に振って答えた。

「それはね」

「言えるのね」

「言っわ」

そうするといふのだった。星華は今俯いている。そうしてそのうえでだった。意を決した顔になってそうして話をはじめたのだ。た。

「私、ずっと斉宮が好きだったわ」

「そうよね」

「ええ。それはね」

星子は姉のその言葉にここでは頷いた。

第三十一話 夜の港でその十一

「それで一緒の高校に入ったし」

「その通りだったわよね」

「そうよ。それでね」

そしてだった。星華はさらに言うのだった。

「高校に入ったら言おうとしてたけれど」

「できなかったのね」

「うん、できなかったわ」

そうだというのだった。

「とてもね」

「そうなのよ」

「星華ちゃん、気が弱くて」

「そうしたところは」

駄目だというのだった。それでだとだ。ここで三人が話してきた。

「だから。どうしても前に出られなくて」

「しかも入学した時からね」

「あいつがいて」

その三人のことをだ。話すのだった。だがここであった。

「どうしよう」

「言う?」

「そうする?」

三人は戸惑う顔になってだ。言い合っただった。

「あのこと」

「あいつのことだけねど」

「言う?」

「言わないと駄目よね」

決断を下したのは州脇だった。難しい顔で言うのだった。

「やっぱり」

「うん、そうよね」

「言わないといけないよね」

野上と橋口も頷いてだった。そうしてだった。

三人は決めた。物事を解決するにはそれしかないと思っていた。しかしそれでもなのだった。彼女達がそこに行き着くには一つのものが必要だったのだ。

それは何か。勇気だった。

三人は今その勇気を手に入れた。そしてであった。

「あのね」

「西堀月美って娘がいたのよ」

「同じクラスにね」

三人でだ。星子に話すのだった。

「私達、その娘がいけ好かなくて」

「それで色々と意地悪してたの」

「強引にクラス委員にしたりして」

「お姉が、ですか」

星子はそれを聞いて信じられないといった顔になっていた。

「そんなことを」

「ええ、そうなの」

「私達も一緒にね」

「そうしていたの」

このことをだ。三人は辛い顔で話したのだった。

「けれどその娘の友達が来て」

「それができなくなつて」

「余計にストレスが溜まつて」

このことも話した。覚悟していた顔でだ。

そのうえでだ。三人は遂に話の核心も話したのだった。

「その娘と斉宮が付き合ってるってね」

「文化祭あの娘に意地悪した時に助けに来た本人に言われて」

「それでわかつて」

「そうなんですな」
「ええ、それでわかって」
「それでだったの」
「学校に来ていた札付きの不良をけしかけるようなことをして」
「このことも話したのだった。何とかだ。」
「その時はあの娘助かったけれどね」
「何とか」
「その彼女の友達や斉宮が助けに来て」
「よかったですね」
それを聞いてだ。また言う星子だった。
「その人にとつても斉宮先輩にとつても。それで」
「それで？」
「それでっていうと？」
「先輩達にとつてもお姉にとつても」
彼女達にとつてもだというのだった。
「よかったですね」
「よかったって」
「何が？」
「それは」
「許されないことをしようと思いました」
それはだというのだ。そこにだった。
「けれど。それが最後までならなくて」
「それでなのね」
「許されないことがならなかったから」
「それでなの」
「うん」
「こつ答える星子だった。」
「そうなの」
「そうなのね」
「ねえ、お姉」

また言つ星子だった。それだった。

第三十一話 夜の港でその十二

「それでだけれど」

「それで？」

「そのこと、何とかしないと駄目よ」

切実な顔になってだ。姉に話してきた。

「お姉のしたことは。何とかね」

「何とかなの」

「そう、そのことは絶対に何とかしないといけない」
強い顔でだ。こう姉に話し続ける。

「そう思うけれど」

「私のしたことを」

「それでだけれど」

そしてだった。星子はその言葉をさらに続けるのだった。

「先輩達も」

「私達もよね」

「やっぱり。そうなるよね」

「一緒にしたから」

「そう思います」

言葉は強い。しかし顔は俯いてしまっている。それが今の星子だ
った。

だがそれでもだった。星子は言うのだった。

「先輩と。その」

「西堀ね」

「あの娘にもなのね」

「謝らないと」

「具体的にはそうしないといけないと思います」
まだ俯いているがだ。星子は言うのだった。

「どうされますか、それで」

「私達は。もう」

「そうよね」

「自分達がしたことだし」

それでいいというのだった。彼女達はそれでいいというのだった。そしてだった。星子は次は姉に対して問うのだった。

彼女に顔を向けてだ。そのうえで問うたのだ。

「お姉は？」

「私は」

「そう、お姉はどうするの？」

姉に対して問う。

「どうするの、何とかしに行く？」

「そうね」

星華もだった。彼女もまた。

小さくだが確かにだ。こくりと頷いたのだった。

「そうさせてもらうわ」

「わかったわ。それじゃあね」

「ええ。じゃあ」

「明日土曜だから」

好都合だった。彼女達にとってはだ。

「先輩のところに行こう」

「明日なのね」

「もうすぐになのね」

「行くのね」

「こうしたことは早い方がいいと思います」

これが星子の考えだった。

「ですから」

「わかったわ。それじゃあね」

「そうしよう」

「そうね」

三人も頷いた。そして星華もだった。

彼女もだ。俯きながらも。それでもだった。

「そうするわ」

「ええ、じゃあね」

こうしてだった。星華は何をするのかが決まったのだった。星子
がそれを導いてだった。そのうえのことだったのだ。

第三十一話 完

2010・12・3

第三十二話 誠意その一

誠意

土曜日の朝だ。椎名は月美の話を聞いていた。土曜なので学校は休みだがそれでもだ。二人は制服姿で電車の中で二人並んで座っていた。

そのうえでだ。月美は椎名に対して問うのだった。

「愛ちゃんも登校するのね」

「うん」

その通りだとだ。こくりと頷く椎名だった。

「そうなの」

「部活よね」

「そう。天文部」

彼女のいる部活だ。そのことであった。

「そこに行くの」

「夜だけじゃないのね」

「実は夜は各自の自由研究で」

それが椎名のいる天文部だというのだ。そうした活動をしているのだという。

「昼は各自がその研究を見せ合うの」

「それで今日もなのね」

「そう。私は私の研究を出すから」

「何かそれって面白そうね」

「そう、面白い」

実際にそうだと答える椎名だった。

「つきぴーにもお勧め」

「ううん、けれど私は」

椎名の勧めを受けてもだった。月美は弱った微笑みで述べたのだ。
った。

「居合部があるから」
「それに専念したいのね」
「御免なさい」
「謝るのはいいから」
「ここでもそれはいいという椎名だった。」
「謝罪は本当に必要な時だけでいい」
「そうなのね」
「そう。それでだけれど」
「ここであった。椎名は月美に対して少し強い声で言ってきた。」
「注意するのは」
「注意って？」
「そう、人に謝罪しろとか言い立てる奴」
「声にだ。明らかに嫌悪がこもっていた。」
「そうした奴は気をつけなといけない」
「そういう人もいるの」
「いる。そうした奴は大抵自分は絶対に謝らない」
「それで人にはそれを強いるのね」
「こつという奴は絶対に人間の屑だから」
「断言であった。」
「付き合ってもいけない。何があっても無視すべし」
「そうしないと駄目なの」
「害虫は駆除すべし」
「極論だがそれをあえて言うのだった。」
「駆除できないと無視すべし」
「うっん、そうした人がいるにしても」
「見分け方ね」
「そうそうすぐにはわからないわよね」
「月美の言葉と考えはそれであった。」
「そういう人かどうかって」
「そう。けれど」

「けれど？」

「付き合ってみてどういう人か見極めるのも大事」

「時間がかかりそうね」

「実際にかかる」

「やっぱり」

月美も椎名のその言葉を聞いて納得する。彼女にしても人を見極めるには相当の時間と努力が必要なのをわかっているからである。

そしてだ。椎名の言葉は続く。

「しかも見極めたと思っていても」

「不十分だったりね」

「するから」

こう話すのだった。

「こんな奴とはって思ったりするから」

「人間って難しいのね」

「一番わかるのはここぞっていう時」

「ここぞって？」

「その人にとってそこでどうするかで周りが評価する時」

そうした時にこそだというのである。

第三十二話 誠意その二

「その時にこそわかる」

「そしてその時に」

「碌でもない奴は碌でもないことをする」

「それでわかるのね」

「そう。有り得ない馬鹿なことをしても全く反省しない奴」

ここではあくまで辛口の椎名であった。

「そういう奴はもう駄目」

「駄目なの」

「そこで自己弁護とかして責任を取らなかつたり他人に責任転嫁とかしたら」

「絶対に駄目なのね」

「そういう奴とは付き合ったら駄目」

実は椎名も極論だとわかっている。しかしあえて極論を言っているのだ。何故ならそれこそが事実だからであるからだ。

「それとは逆に」

「ここぞっていう時にしっかりと対応をする人はなのね」

「その人はいい」

「やっぱりそうなのね」

「そう。そういう人と付き合うべし」

そしてであった。ここでもこの名前を出したのだった。

「斉宮とか」

「陽太郎君が」

「斉宮はそうした時絶対に前に出てつきぴーを護ってくれたから」

「だからね」

「だからこそ」

「うん、わかったわ」

月美は椎名の言葉に笑顔で頷いた。

「じゃあ私。そういう人の見極めとかもやっていった」

「大事なのは上から視線じゃなく」

「同じ視線で」

「上からだとかえって見えにくいから」

「そうなの」

「上からだとどうしても頭しか見えない」

その人の一部だけという意味だった。そういうことであるのだ。

「けれど。同じ高さだと」

「どうなの？」

「場所を少し変えれば横も後ろも見える」

それだけ違うというのである。それだけでだ。

「ジャンプすれば上も見える」

「ちよつとそうしただけで」

「しゃがめば足元も見える」

「かえって色々見られるのね」

「だからこそ同じ高さがいい」

ここでも自分のその考えを月美に伝える椎名だった。

「私もそうしてるつもり」

「何か愛ちゃんらしいわね」

「ところが周りにはそうは見ない」

「そうなの？」

「上から視線だって言われる」

これは椎名のあまりもの切れ者ぶりとその感情の見られないささか機械的な喋り方からくるものである。椎名も誤解されやすい人間なのだ。

「だから気をつけてる」

「そうだったの」

「私なりに」

「愛ちゃんは別に」

彼女をよく知っている月美から見ればだった。

「そんな上からとかは」

「上から見ても相手は見えない」

また言う椎名だった。

「相手の目が見えないから」

「目が」

「心は目に出る」

孟子にもあることだった。諺にも目は口程にというが椎名はこのことも念頭に入れて話すのだった。

「まさにそこに」

「目にこそ」

「それを見て考える」

「相手がどう思っているか」

「それを考えて動く」

椎名の行動の秘訣の一つであった。まさにそれだった。

「目は大事」

「目が、ね」

「誠実かそうでないかも目に出るから」

「そういうこともなのね」

「そう。だからこそ」

また月美を見て話す椎名だった。

第三十二話 誠意その三

「つきぴーもわかって」

「うん、それでなのね」

「そうしていつて。じゃあ」

「もうそろそろね」

月美は目の前の車窓の風景を見て言った。そこに見えるのは彼女がいつも見ている学校の傍の風景だった。それを見てであった。

「駅ね」

「うん」

「駅に降りたら」

「つきぴーは居合部で」

「愛ちゃんは天文部ね」

「斉宮もいる」

椎名はまた彼の名前を出した。

「そうね」

「ええ、絶対にね」

月美は微笑んで話した。

「剣道部も部活あるから」

「じゃあそれが終わったらまた」

「デートよね」

「それも楽しんで」

「有り難う」

「私はその時にはもう帰ってるだろうけれど」

しかしだった。椎名は何気にも言うのだった。

「二人で」

「二人でって？」

「私もデート」

椎名流の自己主張が為された。

「それ楽しむから」

「愛ちゃんも楽しんでるのね」

「恋は真剣に楽しむもの」

またしても椎名のポリシーだった。

「それも一途に」

「一途になのね」

「そうでない面白くない」

こつも言う彼女だった。

「歌に生き愛に生き」

「その言葉は確か」

「そう、オペラ」

そこからだというのだ。

「トスカってオペラから」

「そうよね。プッチーニよね」

「トスカみたいに一途に生きる」

その題名の歌があるオペラだ。トスカはそのオペラのタイトルにもなっている。プッチーニの代表作の一つでもある名作である。

「そうしたいから」

「何か愛ちゃんって」

「私？」

「うん。恋愛にも真面目だったのね」

「私は何に対しても真面目」

「そうなのね」

「そういうこと。じゃあ」

椎名が先に席を立った。駅に着いたのだ。

そして席に立ってからだ。月美に声をかけた。

「行こう」

「ええ。それじゃあ学校にね」

二人は一緒に学校に向かった。そうしてそれぞれの部活を楽しむのだった。

そしてだった。その二人の乗っていた電車の後にだ。別の駅から八条学園に向かう線に面している駅でだ。彼女達がい

た。
そのプラットホームでだ。顔を見合わせて話をするのだった。

「それじゃあね」

「ええ」

「今からよね」

橋口に州脇、椎名だった。三人が覚悟した顔でそこにいた。プラットホームは休日だが人が多い。大半は制服である。

中には八条学園の制服もある。その様々な制服がだ。その中でだった。

「学校に行つてそれでね」

「斉宮のところ行つてそうして」

「言わないとね」

「こつ話すのだった。」

第三十二話 誠意その四

「あのこと」

「それで謝って」

「四人で」

こう言っただった。一緒にいる星華を見た。

制服姿である。彼女自身の制服を着ている。その横には星子がいる。彼女は自分の通っている中学校の制服を着てそこにいる。

三人はだ。その星華に対して声をかけたのだった。

「じゃあ行こうね」

「今からね」

「学校に」

「うん……」

星華は暗い顔だがそれでも三人の言葉に頷いたのだった。

「そうしてよね」

「けじめつけないとね」

「やっぱり駄目よね」

「逃げたら」

「ええ」

星華は三人の言葉に頷く。そうしてだった。

自分の横にいる妹に顔を向けてだ。こう言うのだった。

「あんたは別にいいのに」

「いいえ」

しかしだった。妹は姉の今の言葉に首を横に振って答えた。

「そういう訳にはいかないから」

「そうなの？」

「今お姉辛いよね」

気遣う顔での言葉だった。

「そうよね」

「それは」
「わかるから」
姉を気遣い自分で言った彼女だった。
「だからいいから」
「そうなのね」
「うん。一緒にいるから」
「こう姉に話す。」
「いえ」
「いえ？」
「いさせて」
言葉を変えた。あえてである。
「いいかな、それで」
「いさせてって」
「お姉の傍にいさせて」
姉の顔を見上げての言葉だった。
「そうさせて」
「いさせてって」
「私、いたいから」
「だからだというのだ。そこだとだ。」
「だから。それでね」
「私の傍にいてくれるの」
「うん、そうさせてもらうわ」
「有り難う」
「じゃあ。行こう」
携帯の時間を見る。電車が来るのが近い。それを見てだった。
星子は姉だけでなくだ。三人にも話したのだった。
「この電車でいいんですよね」
「うん、そうよ」
「この電車で行けるから」
「それでね」

「八条高校に行くのって便利なんですね」

ここで星子はこんなことも言った。

「普通だけじゃなくて準急や急行も停まるなんて」

「区間快速も快速急行もね」

「特急も停まるから」

「八条電鉄の電車は全部ね」

日本中に路線のある日本最大の私鉄だ。当然八条グループの企業の一つである。

「停まるのよ」

「八条学園前はね」

「通学は便利なの」

「いいですね、本当に」

それを聞いてだ。また言う星子だった。

「行き来が便利で」

「ううん、実感したことないけれど」

「そうなの」

「便利なのかしら」

しかしだった。三人はそれを言われてもだ。難しい顔になり話すのだった。

第三十二話 誠意その五

「そんなこと考えたことないよね」

「別にね」

「そんなことは」

「そうなんですか」

そう言われてだ。星子は首を傾げさせる。お互いに齟齬があった。

「それって凄いなと思うんですけど」

「うん、そうかなあ」

「どの電車も停まることって」

「そこまで凄いかしら」

やはり実感のない三人だった。そしてだった。

話をしているうちにだ。電車が来たのだった。

「来た来た」

星子が言った。青がかった黒いアスファルトと灰色が混ざった白いコンクリートの対比的な色彩の駅の中でだ。赤い電車が来るのを見たのだった。

「それじゃあですな」

「うん、あれに乗ってね」

「八条高校に行こう」

「それで」

三人が話す。そしてだった。

三人はだ。星華にも声をかけた。

「乗ろうね」

「久し振りの学校だけれど」

「大丈夫よね」

「うん」

星華はその三人の言葉に頷いた。

「行けるから」

「じゃあ行こう」

星子も言った。そしてだった。

五人で乗りそのうえで八条高校に向かう。赤い電車の中は白い色彩だった。五人は今はその白の中に身を置き目的の場所に向かうのだった。

陽太郎は部活を続けている。その中でだった。

部活の練習の合間の休憩の時にだ。ふと周りが言ってきた。

「おい、斉宮」

「何かあったのか？それで」

「最近一層明るくなっただけだな」

「彼女と上手くいってるのかよ」

「やっぱりそれか？」

「ああ、そうなんだよ」

笑ってその周りに応える陽太郎だった。

「もう何かから何までな。上手くいってさ」

「いいねえ、絶対調ってやつか」

「波に乗ってるってことか」

「つまりは」

「そうなんだよ。何かここまで運がいいってな」

笑いながら話す彼だった。

「この後で何かがあるんだろって思う位にな」

「まあ幸福の後には不幸があるからな」

「それがやばいよな」

「だよな。後でどうなるか」

「ぶり返しか」

「いや、そうともばかり限らないぞ」

そんな話をする彼等のところにだ。顧問の先生が来て話すのだった。

「人間一見幸福ばかりに思えてもな」

「違っっていうんですか？」

「それって」

「つまりは」

「そうだ。本人がわからないところで不幸だったりもするんだ」
「これが先生の言葉だった。」

「気付かないだけでな」

「ってことは」

それを聞いてだ。陽太郎が話すのだった。

「俺も何処かで」

「斉宮、御前は今彼女とのことは上手くいつてるな」
「はい」

それはその通りだと答える陽太郎だった。

第三十二話 誠意その六

「それが上手くいき過ぎて怖いんですけれど」

「そっちは上手くいっていてもだ」

「他のことで」

「例えば友人関係だな」

先生は人間関係をその話に出した。

「それだな」

「友人関係ですか」

「何処かで悪くなってるないか。そっちはどうだ」

「別に……いや」

否定しようとした。しかしだった。

陽太郎はここでだ。星華のことを思い出した。あの絶好の時から意識して否定してきた彼女のことをだ。ここで思い出したのだった。

「ええと」

「あつたな」

「はい、ありました」

こう話す彼だった。

「けれどあれは」

「御前はそのことを何とかしたいと思っているな」

「そうなんですか」

「人には意識と無意識がある」

先生が今度出してきたのはこの二つだった。道場の中の剣道部が使っている部分においてだ。面と小手を外した道着姿で話すのだった。

「意識では否定していてもだ」

「無意識ではですか」

「そつだ、そちらではどうか」

こう話すのだった。

「それはとてもわかりにくい」
「わかりにくいですか」
「自分では気付いていないからな」
「それが無意識だというのである」
「気付くことすら厄介だ」
「そうですね」
「しかし気付けばだ」
「先生はそこからも話すのだった」
「それをどうするかできるな」
「じゃあ俺は」
「少し考えてみる。人間は常に幸福と不幸の中にいるものだ」
「先生の今の言葉を聞いてだ。また周りが話す」
「じゃあいつも幸福ばかりじゃないんですか」
「不幸ばかりでもない」
「その二つの中にいつもいるんですか」
「人間ってそんなものなんですね」
「そういうものだ」
「また話す先生だった」
「幸福だけ、不幸だけの人生なんてない。いや」
「いや？」
「いやっていいますと」
「幸福と不幸は常に五分五分で混ざり合っているものだ」
「そうだというのだった」
「それが人生だ」
「じゃあ俺も」
「彼女とのことが上手くいっていても」
「先生は陽太郎にあらためて話した」
「それでもだ。友人とはな」
「あいつとは」

あえてだった。星華の名前は周りには出さなかった。

「そういうことですか」

「それでだ」

「はい」

「何とかしたいか」

先生は陽太郎にそのことを直接尋ねた。

「そう思うか」

「それは」

「何かあったら何とかするといい」

これが先生の今度の言葉だった。

「是非な」

「何かあるとですか」

「一概には言えないが機会は来るものだ」

先生は陽太郎にこうも話した。

第三十二話 誠意その七

「その時が来るとな」

「そうした時がなのですか」

「そうだ。それは今日かも知れないし一年後かも知れない」

「時間はわからないんですね」

「しかし来る時は来る」

先生の言葉はここでははっきりとしたものだった。

「それはわかっておくんだな」

「わかりました。それじゃあ」

「そういうことだな。いいな」

「はい」

そんな話をした部活の休憩時間だった。彼は部活を楽しく過ごした。

そして部活の後でだった。また月美と待ち合わせるのだった。その時まで彼は普通の時間を過ごせると思っていた。恋愛の時間をだ。

だが、だった。その時だった。部活帰りの椎名がだった。

下校しようとするところで。彼女達を見つけたのだった。

「あれは」

「何処におられるんですか、それで」

「多分だけれど」

「こつちよ」

「こつちにいるわ」

三人が星子に話していた。椎名はそれを見たのだ。

「剣道部だからね」

「道場はここだから」

「そつちにいるわ」

「そうですね。先輩高校でも剣道部なんですね」

ここであった。星子はそれを聞いて頷いて言った。

「そうなんですね」

「斉宮って前から剣道部だったの」

「そうだったんだ」

「中学校の時から」

「小学校の時からなんです」

しかし星子によるとそれより前であった。

「その時からなんです」

「そうだったんだ」

「そういえば二段っていうし」

「それだけ年季があるんだ」

三人はここでも陽太郎のことをあらためて知ることになった。

「星華ちゃんそのことは話してくれなかったわよね」

「そうよね。斉宮の細かいことは」

「そうした話はね」

「お姉ってそういうことは話さないんです」

星子がまた三人に話す。

「ですから」

「そうだったのね」

「何か私達って星華ちゃんのこと知ってるようで」

「あまり知らなかったのね」

三人は今度は星華を見る。彼女は一言も発しない。ただ四人の後ろに俯いてそうしてついてきていただけである。それが今の彼女だった。

その彼女を見ながらだ。三人は話すのだった。

「その人を知っているようで知らないのね」

「そういうものなんだ」

「知っているように思っても」

「私もですね、それは」

星子は三人の話を聞いて自分もだと述べた。

「お姉のこと。わかっているようで」

「本当はわかっていなかった」

「知らなかった」

「肝心なところも」

「はい。それでお姉」

星子は暗い顔になっていたがそれでも姉に声をかけた。

「いい？今からね」

「ええ」

暗い顔で俯いているがそれでも頷く星華だった。

「わかってるわ」

「それじゃあね」

「斉宮のところだね」

「それで。終わらせよう」

姉の心のわだかまりを消す為の言葉である。

「もうね」

「うん、じゃあ」

五人で向かおうとする。しかしだった。

その彼女達の前にだ。椎名が来て言うのだった。

「な、何よあんだ」

「いきなり出て来て」

「どうしてここにいるのよ」

「部活」

それだだだ。急に出て来たことに狼狽する三人への言葉だった。

第三十二話 誠意その八

「それでいたの」

「何よ、そうだったの」

「それで今ここにいるの」

「そうだったの」

「そう。ところで」

椎名はだ。三人が狼狽しているのを見てだ。自分から言ってきた。これで会話の主導権は彼女が握ることになったのであった。

だがそれを相手に気付かせないようにしてまた話すのだった。

「どうしてここにいるの」

「そ、それは」

「あなたに関係ないでしょ」

「そうよ」

「道場に行くなら案内する」

三人のうるたえる言葉をよそに告げる。

「どう、それで」

「あんた何考えてるのよ」

「一体」

「案内するって」

「話は後」

あえて多くは言わないのだった。ここでは。

「とにかく道場に行きたいのね」

「はい、そうです」

星子が答えた。

「それで今から行くんですけれど」

「そう。じゃあこつち」

星子の手は掴んでいないがそれでも引つ張る言葉だった。

「こつちに来ればいいから」

「あつ、すいません」

「ちよつと、何であんたが案内するのよ」

「そうよ。道場の場所位私達で案内できるわよ」

「それでどうしてしゃしゃり出て来るのよ」

「それからのこと」

文句を言う三人にぴしゃりと返す椎名だった。

「それからのこともあるから」

「それからって」

「まさかあんた」

「気付いてるとか」

「行くう」

椎名はここでもあえて多くは言わない。そしてであった。

すぐに踵を返してだ。星華も含めて五人に背中から告げた。

「今から」

「道場によね」

「そこに」

「それで」

「したいことをすればいい」

椎名はこう五人に告げた。

「今したいことを」

「したいことってあんた」

「まさかと思うけれど」

「ひよつとして」

「行く」

また言う椎名だった。多くを言わない。

「そつちが行きたいのなら」

「お姉、いいよね」

星子は隣にいる姉に声をかけた。その顔は気遣うものだった。

「それで」

「う、うん」

星華は星子のその言葉に頷いた。そしてであった。

「行こう」

「それじゃあね」

星子はその星華の言葉に応えてだった。そうしてそのうえで彼女を護るようにして椎名の後についていく。三人も一緒である。

そしてだった。三人もだ。星華に声をかけるのだった。

「安心してね」

「一人じゃないからね」

「星華ちゃんだけじゃないから」

こつ声をかけるのだった。三人も星華を護るようにして進むのだった。

そして陽太郎はだ。月美と共にいた。部活が終わりもう制服に着替えている。

場所は道場の前だ。そこで楽しく話をしていた。

「それじゃあさ」

「はい、帰り道でまた」

「デートしようか」

「そうですね」

こつ話してそれで帰りのデートに向かおうとする。その時だった。

月美はだ。陽太郎にこんな提案をしてきた。

「それで帰り道ですけれど」

「帰り道に？」

「何処に行きます？本屋にしますか？」

「本屋。いいよな、それって」

「何の本にしますか？」

「川端康成にしようかな」

陽太郎は腕を組んで考える顔になって述べた。

「雪国でも読もうかな」

「雪国ですか」

「月美は川端読んだことあるかな」

「はい、あります」

月美は静かに微笑んで陽太郎に答えた。

第三十二話 誠意その九

「伊豆の踊り子を」

「ああ、あれね」

「けれど雪国はまだなんですよ」

「そうなんだ。じゃあどういふ作品かは知らないんだ」

「ちよつと」

首を傾げさせてそのうえで述べたのだった。

「大体のあらすじは知ってますけれど」

「それでどんな話なのかな」

「それはですね」

それについて話そうとする。しかしだった。

「ここぞだ。二人のところに椎名が来てだ。こう二人に声をかけてきた。」

「いい？」

「あれ、椎名」

「どうしたの？」

「二人に会いたいつて人がいる」

いつもの調子で二人に告げてくる。

「いいかな」

「んつ、誰なんだ？」

「誰なのそれって」

「会う？それで」

あらためて二人に問うのだった。

「どうするの、一体」

「誰かよくわからないけれど」

「どうしてもっていうの？その人」

「そう、どうしても」

「ここでは言葉を少し強くさせてであった。」

「どうしてもなの」
「そうなの。どうしてか」
「陽太郎君、それじゃあ」
「うん、そつだよな」
「そつしよう」
二人で話してだった。それで椎名に顔を戻して話すのだった。
「じゃあさ」
「その人と」
「うん。じゃあ」
こうしてだった。二人は椎名に顔を戻してそのうえで答えた。
「誰かわからないけれど」
「どうしてももっていろいろなら」
「私も立ち会うから」
椎名はこつも言い加えた。
「それで」
「それで？」
「どうしたの？一体」
「会つと決めたからには」
「どうかというのだった。椎名のその口調が念を押すものになった。」
「絶対に会つて」
「？何でなんだ？」
「それつて」
「絶対に会つて逃げないでね」
「誰なんだよ、それで」
「その人つて」
「二人が知つてる人」
それは確かだというのであつた。
「けれど絶対に逃げないで」
「何かよくわからないけれどな」
「愛ちゃんが一緒なら」

二人もそれで納得した。それだった。

そのうえでだ。陽太郎と月美は椎名に案内されてだ。ある場所に
来た。そこは道場の裏手だった。そこに案内されたのである。

そしてそこに来ると。彼女がいた。

「……………佐藤」

「どうしてここに」

「学校に来たの」

椎名の二人への説明はこれだけだった。

「それでなの」

「それに。何だよ、星子ちゃんまでいるじゃないか」

「州脇さん達も」

「そう、この人達が」

椎名の言葉はさらに続く。

「二人に会いたいの」

「おい、俺言つたよな」

陽太郎は顔を顰めさせて椎名に言った。

「確かに」

「絶交ね」

「あ、ああ」

陽太郎は椎名の今の言葉に頷いて返した。

「だから」

「本気？」

「本気つて？」

「だから。その言葉は本気？」

椎名はこう陽太郎に問う。

第三十二話 誠意その十

「齊宮の」

「それは」

「その時は本気だった」

椎名は言葉を続けてきた。

「そうね」

「ああ、あの時はさ」

陽太郎もそれを認める。それは間違いのない事実だった。しかしだった。椎名はその彼に言つのであった。さらに。

「今は」

「今は」

「もう雪解けの頃」

こつ話す椎名だった。

「そうね」

「それは」

「本気で嫌だったら」

どうしているか。椎名は話すのだった。

「どうしている」

「それはもう御前の言つことでも」

「ほら、言った」

椎名は陽太郎の今のそれを指摘したのだった。

「今さつき」

「言つたつて」

「そう、言った」

まさにそうだといふのである。

「だから。今は」

「……わかつたよ」

陽太郎は渋々といった顔で頷いたのだった。そしてだった。

そのうえでだ。椎名に対して告げた。

「じゃあ」

「そう。聞いて」

また言う椎名だった。

「この娘達の言葉」

「わかったよ」

陽太郎は椎名の言葉にはっきりと頷いた。

「それじゃあな」

「それで」

椎名は陽太郎の言葉を確かめてからだ。そのうえで今度は月美に顔を向けた。

そのうえでだ。彼女に対しても言うのだった。

「つきぴーも」

「私も」

「そう、つきぴーはどうするの？」

彼女の顔を見上げての問いだった。

「この娘達の話は」

「私は」

「考えて」

普段の月美に対する言葉とはだ。明らかに違っていた。

強かった。硬質の強さがそこにあった。そしてなのだった。

「つきぴー自身の考えで」

「私自身の」

「そう、斉宮のことも」

まずは陽太郎のことだった。

「私のことも抜きにして」

「二人のことを抜きにして」

「それで自分で考えて」

「そうしてなのね」

「それで考えて」

また言う椎名だった。

「聞くか。聞かないか」

「それを」

「そう、それを」

こう話してだった。月美に判断を促す。そして月美は。

思い詰める顔になっていた。しかしやがて意を決した顔になって

だ。椎名に対して静かな、だが確かな声でこう告げたのであった。

「わかったわ」

「どうするの？」

「聞く」

一言であった。

「私。っこの人達のお話を」

「聞くのね」

「聞かないといけない」

だからだというのであった。

「そう思うから」

「そう。わかったわ」

今回ばかりはだ。椎名も強い顔で頷いた。

第三十二話 誠意その十一

今回ばかりはだ。椎名も強い顔で頷いた。

そしてだった。星華達に顔を向けて話すのであった。

「じゃあそつちも」

「え、ええ」

「わかってるわ」

「それはね」

三人が答えたのだった。

そのうえでだ。三人は星華に顔を向けて声をかけた。

「じゃあ星華ちゃん」

「言おう」

「今からね」

三人が言うただった。星子もだった。

そつと姉の右手に自分の両手を添えてだ。彼女の顔を見上げて声をかけた。

「お姉……………」

「星子……………」

「大丈夫だから」

心配している顔だった。眉が顰められている。

「私がいるから」

「星子がいるから」

「絶対にいるから」

その姉への言葉である。

「何があってもね」

「何があっても」

「私達姉妹じゃない」

そこに理由をつけたのだった。

「だからね」

「姉妹だからね」

「うん、だから」

また言う星子だった。

「頑張って」

「うん……」

星華は妹のその言葉に小さく頷いた。そうしてだった。

陽太郎に顔を向けた。それでゆっくりと口を開いた。

「あの」

「ああ」

陽太郎も彼女を見据え真剣な顔で応える。

「話、あるんだよな」

「そうなの」

こくりと頷いて述べた星華だった。

「それで今こうして」

「わかったよ」

陽太郎は星華の今の言葉に頷いた。そのうえでだった。

あらためてだ。彼女に言うのだった。

「じゃあさ。話聞かせてくれるか？」

「うん」

星華はまた答えた。

「それじゃあ」

「ああ、じゃあ」

「私、実は」

こうしてだった。星華はゆっくりと口を開いてだった。

話をはじめた。自分の過去のしたことを。それを話すのだった。

2
0
1
0
·
1
2
·
9

第三十三話 告白その一

告白

星華はだ。陽太郎に言った。

「実は私」

「月美のことだよな」

「ええ、嫌いだった」

このことを正直に認めるのだった。

「入学した時から嫌いだった」

「そうだったんだな。それで」

「いじめようとした」

それを言った。今ここで。

「クラス委員にしたのも」

「それでか」

「うん、意地悪で」

このことも話してだった。

「最初見た時から。何となくむかついて」

「私も」

「それは」

「同じだったから」

ここであつた。三人も話すのだった。

「それで四人で無理矢理」

「クラス委員にしたの」

「それでだったの」

「それ、察したから」

ここであつた。椎名が話してきた。

「私いつもつきぴーの隣にいたの」

「ああ、それでか」

「それでだったの」

今の椎名の言葉にだ。陽太郎だけでなく月美も顔を向けた。そのうえでだ。あらためて椎名に言うのだった。

「月美の為だったのか」

「御免、全然気付かなかったわ」

「気付かないようにしてたから」

これはいつもの椎名だった。まさに彼女であった。

「だから」

「月美を気遣ってなんだな」

「うん」

陽太郎の言葉にすぐに頷く。

「つきぴーに気付かせたら。つきぴーが悲しむから」

「だからか」

「そう。だから」

それだだというのである。

「そうしたの」

「悪いな」

陽太郎はその椎名に対して礼を告げた。

「月美の為にそこまで」

「友達の為に何かするのは当然のこと」

これが椎名の返答だった。

「そういうこと」

「それでなの」

「そう、だから」

こつ言つのであった。

「気にしないでいいから」

「気にしないでいられるかよ。いや、本当にな」

陽太郎はここではだ。真剣な顔になって話すのだった。

それでだ。椎名にあらためて話した。

「お陰で助かったよ」

「だから気にしないでいい」

また言う椎名だった。そうしてだった。

陽太郎はあらためて星華に顔を向けてだ。そうして話すのであった。

「それで文化祭もだな」

「あれは」

星華は言葉を止めてしまった。しかしだった。

意を決した顔になってだ。そのうえで話したのだった。

「この娘と斉宮が付き合ってるの見たから」

「俺と月美が！？」

今それを聞いてだった。陽太郎の目が動いた。

「それってどういうことだよ」

「だからそれは」

星華は言おうとした。だが今度ばかりはだった。

どうしても言えなくなつた。身体が震え言葉が止まる。

けれどどうしても言おうとする。それが葛藤していた。

そのまま止まってだった。完全に沈黙してしまった。

その彼女にだ。星子が言った。

「お姉、駄目」

「言わないといけないけれど」

「無理？無理だったらね」

その姉にだ。賢明な顔になって話す妹だった。

第三十三話 告白その二

「私が言おうか？」

「星子が？」

「お姉、無理よね」

それは見てわかることだった。それでだった。

「だから今はね」

「言ってくれるの？」

「うん」

こう姉に答えるのだった。

「それじゃあ駄目かしら」

「それは」

「ねえ星華ちゃん」

「私達もいるから」

「だからね」

三人もだ。彼女に言ってきたのだった。

「それはね」

「ここは任せて」

「私達にね」

「ええと。それは」

星華は言葉を止めてしまっていた。それでもなのだった。

何とか言おうとする。だがやはり言えなかった。そして遂にだつた。

「御免……」

俯いてだ。星子達に話したのだった。

「私、やっぱり」

「うん、いいよ」

「無理しないでいいから」

「だから」

四人もこう星華に話す。

「任せてね」

「ええ」

星華は妹のその言葉にこくりと頷いた。これで決まりだった。

「御免なさい」

「それはいいから」

謝るのはいいというのである。

「それじゃあ」

「うん」

こうしたやり取りの後でだった。星子が陽太郎に対して話す。

「あのですね」

「ああ」

「先輩はお気付きじゃなかったんですね」

「んっ、何がなんだ？」

実際に気付いていない顔で応える陽太郎だった。

「俺が気付いていないって」

「お姉、好きなんです」

星子は姉の気持ちをだ。あえて現在形で話すのだった。

「先輩のことが」

「えっ、俺が」

「はい、先輩のことがです」

そうだとするのである。

「好きなんです」

「おい、そんなの初耳だぞ」

陽太郎は驚く顔になっている。そのうえでの今の言葉だった。

「佐藤が。俺をつて」

「気付いてなかったんだ」

「やっぱり」

「そうじゃないかって思ってたけれど」

三人もだ。陽太郎に対して言うのだった。

「星華ちゃんの気持ち」

「全く気付いてなかったの」

「本人は」

「だからそんなの初耳だよ」

またこのことを言う陽太郎だった。

「そんなのつてな」

「お姉、言えなかったんです」

星子は顔を俯けさせてその陽太郎に話す。

「どうしても」

「どうしてもって」

「お姉、これでも引っ込み思案なんです」

「それも初耳だぞ」

「ですが本当に」

そうだという星子だった。

「お姉は」

「そうだったのかよ」

ここまで言われてだ。陽太郎はようやく把握した。そのうえでの言葉だった。

第三十三話 告白その三

「佐藤は俺のこと」

「御免なさい」

「ここであった。星華本人も言うのだった。」

「私、斉宮にどうしてもそのことが」

「わかったよ」

陽太郎は穏やかな声で星華のその言葉に頷いた。

「そのことがな」

「わかつてくれた？」

「ああ、そうだよ」

「こっ星華に話すのだった。」

「だから。それはいいよ」

「そうなの」

星華は言った。自分から。それがだった。

かえって自分を動かしてだ。自分から話したのだった。

「あの。それでね」

「今度は？」

「文化祭のことだけれど」

「月美に言ってたあれか」

陽太郎はその時のことを思い出していた。その時月美は星華達に困まれそのうえで言われていたのだ。陽太郎はそこに来て月美を助けたのである。

そのことだと思った。しかしなのだった。

星華はだ。さらに言うのだった。

「その時のことも御免なさい」

「まずは頭を垂れたのだった。」

「本当に御免なさい。西堀………さん」

「いえ、それはもう」

月美はだ。優しい声で星華に応えたのだった。

「いいです。過ぎたことですから」

「俺ももういいよ」

陽太郎もだ。そのことはもういいというのだった。だが、だった。星華はだ。頭をあげてこう話したのだった。

「その後の」

「その後？」

「その後って」

「あの不良が西堀さんに襲い掛かったことだけれど」
話すのはこのことだった。あの時のことであった。

「あれ、実は」

「おい、まさか」

「それってよ」

「そう。私がかげしかけたの」

このことをだ。意を決して話したのだった。
顔をあげてそれでも眉を曇らせて。そのうえで必死の顔で話したのだった。

「あいつがつかつかつてきて。それでつい」

「おい、あれで」

それを聞いてだ。陽太郎は眉を顰めさせていた。そしてであった。星華に対して問う。問わずにはいられなかった。

「月美本当に危なかったんだぞ」

「.....」

椎名はここでは動かない。沈黙を守っている。そのうえで顔を青くさせてしまっている月美と声を震わせる陽太郎を見ていたのである。二人の動きを見守っていたのだ。

そしてだった。陽太郎がまた言った。

「それを御前が」

「御免なさい」

また頭を下げる星華だった。

「私、西堀さんが斉宮の彼女って言われて。それで」

「私達も」

「それで」

「つい」

三人もだった。言ってきた。

「とんでもないことして」

「西堀さんには」

「本当に」

そしてだった。三人もだった。

「御免なさい」

頭を下げるのだった。四人が頭を下げたのだった。

そうして謝罪したのだった。陽太郎はそれを見てだ。

最初は眉を震わせ唇を噛み締めていた。しかしだった。

第三十三話 告白その四

少しずつその強張りを解いてだ。まずは月美に問うのだった。

「なあ」

「はい」

「いいか？月美は」

彼女に顔を向けての言葉だった。

「それで」

「私は」

一言置いてからだ。月美は答えたのだった。

「別に。それは」

「いいんだな、それで」

「はい」

こうだ。こくりと頷いて答えるのだった。

「佐藤さん、反省しているのがわかりますし」

「それでなんだ」

「他の人達も」

反省しているからもう二度とそんなことはしない、それがわかるからだというのだ。月美はそうしたところまで見ているのだった。

「ですから」

「そうか。それじゃあ」

「私はそれで」

また言う月美だった。

「いいです」

「そうか。それじゃあな」

陽太郎はだ。月美のその言葉を聞いてまた述べた。

「俺も。月美が許すんならな」

「斉宮もそれでいい」

「ああ。被害を受けたのは月美だから」

だからだと。椎名にも話した。

「その月美がいつっていうんなら俺はそれでいいよ」

「そう、わかった」

「それでだけれどな」

また言う陽太郎だった。

「何でそこまでしたんだ？」

こう星華達に対して問うのだった。

「佐藤が俺のことを好きなのはわかったにしても」

「それは」

「ああ、もう顔をあげていいからさ」

星華達がまだ頭を下げているのを見ての言葉だった。

「それはさ」

「うん、じゃあ」

「何でそこまでしたんだよ」

陽太郎が尋ねるのはこのことだった。

「幾ら何でも極端だろ」

「それは」

「何であんなことしたんだ？」

穏やかな言葉になっていた。しかしそれでも彼女に問うのだった。

「御前がそんなことまでするなんて。やっぱり信じられないからな」

「妬ましかったから」

だからだとだ。月美は答えた。

「西堀さんが斉宮と付き合ってるそのことが」

「嫉妬か」

「そう」

その通りだとだ。こくりと頷いて答えたのだった。

「だからだったの」

「そうだったのかよ」

「ええ。本当に、それは」

俯いてだ。辛そうな言葉を出す彼女だった。

「私、大変なことを」

「だからそれはいいよ」

月美の謝罪はだ。もういいとした彼だった。

「だってな。月美が今許してくれただろ」

「だからなのね」

「ああ。だからもういいさ」

また言う陽太郎だった。そしてだった。

態度をあらためてだ。こうその星華に話してきた。

「けれどな」

「けれど？」

「俺、月美が好きだから」

今度の言葉はこうしたものだった。

第三十三話 告白その五

「月美とだけしか付き合えないから」

「そうなの」

「だから。佐藤とは付き合えないよ」

「こつ、だった。星華に対して話すのだった。」

「御免な、それは」

「うづん。もういいわ」

星華はだ。陽太郎のその言葉に首をゆっくりと横に振ったうえで述べた。

「それはもうね。いいわ」

「いいんだな、もつ」

「ええ、いいわ」

また言う星華だった。

「私も。もう斉宮のことは諦めるから」

「彼氏にはなれないよ」

「そうね。それじゃあね」

「またな」

穏やかな声はそのままだった。その声の色は。

「またあ明日な」

「ええ。明日ね」

「それじゃあ帰ろう」

椎名は二人の別れが終わってから陽太郎と月美に話した。

「二人は二人で帰って」

「椎名はどうするんだよ」

「私もデート」

彼女もだというのだった。

「そうするから」

「赤瀬とかよ」

「そう。今からデート」

感情の見られない言葉はそのままだった。

「楽しんでくるから」

「そうか。じゃあ頑張れよ」

「うん」

椎名は陽太郎の言葉に対してこくりと頷いてかえした。

「そうしてくる。もつとも」

「もつともって?」

「デートは頑張るものじゃないけれど」

それを言う椎名だった。

「けれどそれでも」

「楽しんでくるんだな」

「楽しむのは絶対にしてくるから」

「こう話すのだった。」

「それじゃあ」

「ああ、それじゃあな」

「また明日ね」

「ああ、明日な」

二人で話してだった。彼等はそのままそこから去った。

後に残ったのは星華達だった。星華はその場に立っていた。

だがその彼女にだ。星子が声をかけるのだった。

「ねえ。お姉」

「うん……」

「帰ろう」

「こう姉に声をかけたのである。」

「お家にね。帰ろう」

「うん、じゃあ」

「帰ったら何食べる?」

そしてだった。姉に「こう尋ねたのである。」

「それとも飲む?」

「飲む」

俯いた顔での返答だった。

「できれば」

「飲むの」

「そう、飲みたい」

また言う星華だった。

「何でもいいから」

「うん、それじゃあね」

それを聞いてだった。星子は姉に対して穏やかな声で話した。

「日本酒にする？」

「日本酒なの」

「お家に丁度いいのがあるから」

それでだというのだ。

「飲もう。お家に帰ったらね」

「ええ」

星華は妹の言葉にこくりと頷いた。そうしてだった。

第三十三話 告白その六

そのうえでだ。また妹に話した。

「お家に帰ったらね」

「そうしてね」

「うん」

「じゃあね」

「私達はね」

「これでね」

三人もだ。こう星華に言ってきた。そして。

三人は深く考える顔になってだ。こう言うのだった。

「これでいいのよね」

「私達のしたことって」

「ああして」

「よかったと思います」

星子がだった。三人の言葉、そしてその中にあるものに対して述べた。

「あれで」

「そうなのね。あれで」

「よかったのね」

「本当のことを言って謝って」

「そうしないと何の解決にもなりませんでした」

星子も俯いている。そのうえでの言葉だった。

「お姉も。前には」

「進めなかった」

「あのままずっと」

「引き籠もってなのね」

「そうです。ですから」

だからだとだ。星子は話していく。

「あれでよかったと。私も思います」

「私達、とんでもないことして」

「結局。何もかもを」

「駄目にしちゃったのね」

「そうかも知れませんが」

否定できなかった。星子にもだ。

「けれど。終わったことです」

「終わったこと」

「そうなの」

「もう」

「はい、終わったことです」

星子は三人に告げた。

「何もかもが」

「終わってそれで」

「どうなるのかな」

「進めるのかな」

「進むしかないです」

これが星子の言葉だった。それを話すのである。

「私達も。お姉も」

「そうなの。前に」

「進むしかないのね」

「絶対に」

「立ち止まっても」

どうかというのだった。彼女もだった。

そうしてだった。そこでだった。

星子は今度もだ。自分から話したのだった。

「お姉」

「うん」

「お家帰ろう」

こう姉に話すのだった。

「それで飲もう。最後の最後まで付き合っから」

「そうしてなのね」

「それで忘れよう」

微笑みを作って。姉に話した。

「そうしよう。おつまみはね」

「ええ」

「私が作るから」

彼女がだというのだ。

「作るっていうか。あるもの見つけるから」

「多分色々あるわよね」

「お父さんいつも飲んでるからね」

「だから」

「とにかくまずはお家に帰ろう」

何につけてもそれからなのだった。星子の話はだ。

「二人でね」

「うん。じゃあ」

こう話してだった。二人は静かにその場を後にしたのだった。

第三十三話 告白その七

三人もそれぞれ帰る。後には何もなかった。

星子は姉を連れてそうして家に帰ってだ。家に帰るとだった。

すぐに酒を出した。それで居間でだ。二人で杯を出して飲みはじめた。

「おつまみはね」

「何かあったの？」

「するめあるから」

それをだ。実際に出してきて話すのだった。

「これでね」

「ええ」

「とにかく今日は飲もう」

杯と杯を合わせてまた話す。

「心いくまでね」

「そうね。お父さんとお母さんには」

「大丈夫よ。帰ってきたらね」

「どうするの？」

「私の部屋で飲もう」

そうしようというのである。

「流石に居間で堂々と飲んでたらしい顔されないけれどね」

「それでもあんたの部屋で飲むとね」

「別に何も言われないからね」

「だからね。別にね」

「いいのね」

「そういうこと。だから飲んで」

姉に対して酒を勧める。

「飲んで飲んでそれで」

「そうしてなのね」

「前に進もう」

笑顔で姉に告げた。

「前にね」

「そうね」

星華もだ。こくりと頷いてだ。

杯を口に近付ける。まずは一口だった。

そのうえでだ。星華は言った。

「美味しいわね」

「美味しいと思うのね」

「ええ、思うわ」

実際そうだという彼女だった。

「本当にね」

「それじゃあもっと飲もう」

星子は笑顔でまた姉に話した。

「もっとね」

「もっとなのね」

「そう。もっと飲んで」

こう言っただ。姉の空になった杯にその一升瓶の入り口を寄せてだ。そのうえで酒を注ぐ。水に似ているが明らかに違うそれが中に入る。

それを見ながらだ。星華は言うのだった。

「ねえ」

「どうしたの？今度は」

「お酒って久し振りに飲むけれど」

「ええ。それでなのね」

「美味しいわね」

言葉を出すその顔に笑顔が少しだけ戻ってきていた。

「やっぱり。美味しいわね」

「そうよ。だからね」

「それで勧めてくれたのね」

「ええ」

それでだとだ。また話す星子だった。

「それでよ」

「いい味ね。本当に」

「それに飲んでいるとね」

星子の笑顔が優しいものになっていく。そのうえで酒を飲む星華を見ながらだ。その姉を見ながらまた話をするのだった。

「気持ちが変わるじゃない」

「心がなのね」

「そう。だから今こうして勧めてるの」

それでだと答えて。彼女も一杯飲んだ。

自分で次を入れようとすると。ここでだった。

「待って」

「どうしたの？」

「私に入れさせて」

こう話す星華だった。

「星子の分はね」

「いいの。それだったら」

「ええ。入れさせて」

星華はまた妹に話した。

「そうさせて」

「わかったわ。じゃあ」

妹は姉の言葉を受けた。そうしてだった。

その場に杯と瓶を置く。姉はその瓶を手にとって杯に酒を注ぎ込む。そのうえで妹に対して穏やかな声で告げるのだった。

第三十三話 告白その八

「はい、それじゃあね」

「有り難う」

星子は微笑んで星華に対して礼を述べた。

「それじゃあね」

「ええ。飲んで」

「うん」

星子は頷いてそのうえで酒を飲む。そうして一杯飲んでから言うのだった。

「本当に美味しいお酒よね」

「ええ、本当にね」

「実はあまりいいお酒じゃないらしいけれど」

「そうなの」

「それでも。何か今こうして飲むと」

「美味しいわよね」

こう二人で話すのだった。

「とてもね」

「そうよね。どうしてかしら」

星子はまた姉が入れる酒を見ながら話す。

「それって」

「二人だからかしら」

「二人だから？」

「だからかしら」

こう話す星華だった。

「二人で飲んでいるかしら」

「そうかもね」

姉の今の言葉をだ。否定する気にはなれなかった。とても。

「二人だからね」

「多分一人で飲んだら」

「こんなに美味しくはないわよね」

「多分ね」

「そうだとだ。二人は話していく。」

「やっぱり二人で飲んでいるから」

「だからなのね」

「こんな話をしてからだ。星子は星華に顔を向けて言った。」

「ねえ」

「どうしたの？」

「お姉、お酒も二人で飲むと美味しいわよね」

「こう姉に話すのだった。」

「そうよね。美味しいわよね」

「一人で飲むよりずっとね」

「美味しいわよね。だからね」

「だから？」

「これからも。何かあったら言っつて」

「これが姉への今の彼女の言葉だった。」

「そうしてね。こうして二人で飲んだりしてね」

「そうするっていうのね」

「そうしてお話しよう」

「これが姉への言葉だった。この世でたった一人の姉妹に対する。」

「それでいいわよね。これからも」

「そうしてくれるのね」

「姉妹じゃない」

「だからだというのだった。そしてだった。」

「今度は星子が星華の杯に酒を入れる。そしてまた言う。」

「もう一本あるから」

「まだ飲めるのね」

「何だったらそれから一本も」

「あるというのだった。」

「どれだけでも飲めるからね」

「そうなの。心ゆくまでね」

「ええ。飲みましょう」

また言う妹だった。

「これからもね」

「これからもね」

「そうよ、これからもね」

にこりとした笑顔になった。それでなのだった。星子は星華にさらに話してきた。

「それでいいわよね」

「有り難う」

自然とだ。この言葉が出たのだった。

「けれどね」

「けれど？」

「それは私だけじゃなくて」

自分だけではないというのである。

「星子もね」

「私もなの」

「うん。あんたも何かあったら」

その時はだと。相手の顔を見詰めながら話す。

「よかつたらね。こうしてね」

「お姉と話をして、なのね」

「駄目かな、それで」

妹に対して問う。

「それは嫌かしら。私だと」

「そんな筈ないじゃない」

星子はにこりと笑って星華に対して答えた。

「そんな。お姉が嫌って」

「私でいいのね」

「ええ、是非ね」

嫌どころかだ。こう言うのであった。

「その時は御願いな」

「有り難う。それじゃあ」

「うん。私達姉妹だからね」

「ここでだ。星子はまたこう言うのだった。

「お互いに何かあつたらその時は」

「こうして二人でね」

「そうよね。二人でね」

「助け合つて支え合つて」

二人で話していく。

「そうしていこう」

「そうね。何があつてもね」

「それじゃあ」

二人はだ。また杯を出し合う。そのうえでだった。

その酒を飲み合う。開けばお互いに注ぎ合つてだ。そうしてそのうえで酒を楽しんでだ。今はその深い悲しみを忘れるのだった。

第三十三話

完

2010・12・16

第三十四話 夜空にあるものその一

夜空にあるもの

陽太郎と月美はだ。食堂で狭山にこう言われた。

「最近何か変わったな、二人共な」

「えっ、変わったって」

「そうですか？」

二人は箸を止めて彼の言葉を聞いた。陽太郎は力うどんと天井、月美は山掛け蕎麦に御飯といった組み合わせだ。狭山は大盛りカレ―とラーメンである。無論他の面子もいる。

「俺達何か」

「変わりましたか」

「顔が晴れやかになつたな」

これが変わったことだといつのである。

「随分とな」

「顔がか」

「晴れやかに」

「何かあつたのかよ、それで」

狭山はラーメンをすすりながら二人に問う。

「あれか？キスでもしたか？」

「あんたそれ下品よ」

彼の今の言葉は横にいた津島に指摘された。彼女はきし麵を食べている。その脇にはさんまが一匹頭ごと皿の上に置かれている。

「キスしたかとか。人に聞くなんて」

「あっ、そうか」

「そうよ」

こう言つ津島だった。

「ちよつと気をつけなさいよ、それは」

「悪い悪い」

ラーメンを食べながら謝る狭山だった。

「別にそんなつもりなかったんだけれどな」

「いや、いいけど」

「私達は」

実際に特に気にしていない二人だった。彼等は下品だとも捉えてはいない。

「しかし。顔がか」

「晴れやかにですか」

「いいことあったのは間違いないわね」

何だかんだで津島も笑顔でこう言うのだった。

「それが何かは知らないけれどね」

「何処の誰かは知らないってやつだな」

ここでまた言う狭山だった。ラーメンを食べ終えカレーに入っている。麺類はのびないうちに食べ終える、その鉄則はわかっているようである。

「それってな」

「何か随分古いな」

「月光仮面ですよな」

二人も狭山の今の言葉の元はわかった。

「けれどまあ」

「別にいいことはなかったですよ」

「あれっ、そうなのか」

「そうだったの」

狭山と津島は二人の返事にいささか拍子抜けして述べた。

「何かそんな感じしたけれどな」

「別になのね」

「そうだよ。いいことはな」

「特になかったですけどね」

また答える二人だった。

「ただ。まあ」

「吹っ切れたことはありません」

二人はここでどうも言うのだった。

「何ていうかな」

「ちよつと」

「で、それって何なんだよ」

「それが気になるけれど」

二人がさらに尋ねようとする。しかしだった。

ここだけだ。椎名が出て来た。いつも通り彼女もいるのである。無論赤瀬もいる。津島はお好み焼き定食、赤瀬は巨大な、それこそ人の半分程度はある皿の上にある途方もない量のハヤシライスを食べている。

その椎名がだ。こう言うのだった。

「気にしない気にしない」

「げっ、椎名」

「出て来たわね」

「最初からいたから」

身も蓋もない突っ込みはここでも健在であった。

第三十四話 夜空にあるものその二

「とにかく」

「ああ、とにかく」

「聞くなつていうのね」

「そう。一つの話が終わっただけだから」

星華とのことをだ。これだけで終わらせるのだった。

「それだけだから」

「終わったのか」

「何かはわからないけれど」

「そう、終わった」

また言う椎名だった。

「それだけ」

「何かわからないけれど終わっていい話なんだな」

「それは間違いないみたいね」

「その通り」

二人は気付かないが話は椎名の望む方になっていた。

「そういうことだから」

「そうか。まあ何はともあれよかったな」

「そうよね」

二人はそれで納得したのだった。そしてだった。

赤瀬がだ。その膨大なハヤシライスを食べながら一同に言うので

あった。

「あの」

「何だ、ハヤシライスか？」

「そつちのこと？」

「ああ、違うよ」

そうではないとだ。赤瀬はそれからだった。

「ハヤシライスじゃなくてね」

「じゃあ何だよ」

「斉宮達のこと？」

「そうだよ。吹っ切れたんならね」

「どうかとだ。彼も言うのだった。」

「よかったね」

「まあ吹っ切れたっていうことにもなるかな」

「そうですね」

二人もその言葉を否定しなかった。

「やっぱりな。今はな」

「落ち着きました」

「そう。ただ」

「ここでだ。また椎名が言う。」

「謝る時に謝ること」

星華達のことだった。

「それができたから」

「ああ、そうだな」

「そうよね、それは」

二人がだった。彼女の言葉に頷くのだった。

「本当によかったよ」

「私もそう思います」

「そして謝るべき相手がいる」

椎名はこつも言った。

「謝ってはいけない時、相手もいるけれど」

「人に謝罪を強要したりする人ってね」

ここで赤瀬も言った。星華達のことには知らないがそれでもだ。

「自分は絶対に謝らないから」

「ああ、そういう奴いたよ」

「うちの中学に」

狭山と津島もそれはわかった。

「もうな。自分じゃ絶対に責任を取らなくてな」

「人に信頼を取り戻せとかお説教言つて」

「用事での絶対に秘密にしないと情報相手に平気で流してどうたら言つてな」

「背信行為と呼ぶなら呼べとか開き直つて」

「それ何でそんなことしたの？」

椎名はそもそもどうしてそうなったのかを尋ねた。

「無茶苦茶な理由みたいだけれど」

「何か向こう。おかしな連中にな」

「学校のお金が絡んだお話で」

そうだとだ。二人は話すのだった。

「美化委員会のな。お金の使い方と置いている場所」

「窃盗の常習犯にそれ教えたのよ。何でも秘密にするのよくないつて」

「いや、そういうのは秘密にしないと」

「それで教えて開き直つたんだよ」

「背信行為とでも呼ぶがいいってね」

「それでそいつどうなったの？」

椎名はその教えた人間がどうなったのか尋ねた。

第三十四話 夜空にあるものその三

「信頼全然なくなったと思うけれど」

「もうその窃盗の奴以外から相手にされなくなったよ」

「学校全体でね」

当然の結果であつた。

「けれど全然平気だつたな」

「信用なくしてるとも自覚してなかつたみたい」

「それやる前に何かあつたら他人のそう言つてたんだよ」

「すぐに謝罪しろつてね。その相手に非がなくても」

「けれど自分は絶対に謝らなかつたな」

「拳句に仕方なくやつたとか自分のことばかり言つてたわ」

「そいつ、もう放つておいていいから」

椎名の口調はまさにばつさりであつた。

「中学校で信頼完全に失つたのね」

「高校でも同じ中学の奴結構いてな」

「それで向こうでも全然反省していないみたい」

「じゃあそいつ絶対に破滅するから」

そうなるというのである。

「確実に」

「確実にだよ」

「破滅するの」

「うん、そうなる」

まさにそうだといふのであつた。

「反省しないで馬鹿なこと続ける奴は絶対に破滅するから」

「信用なくしても平気な奴もか」

「そうなるのね」

「ならない筈がないから。もう放つておいたらそのうち闇金に手を出すか現実に大変なこととしてそうして破滅していくから」

椎名は冷徹な口調で述べていく。

「放っておいていい」

「最初はそんな奴じゃないって思ったけれどな」

「誠実だと思っただけだね」

狭山と津島は首を傾げさせながら言う。

「いざって時に出たな」

「その本性がね」

「ありやもうどうしようもないな」

「最低最悪の馬鹿だったわね」

「人間の本性はここぞっていう時に出るものだから」

椎名は今ほまさに弓矢的を射抜く、そんな感じであった。

「その人にとって勝負の時に」

「あいつはそこで本性を見せちゃった」

「そういうことなのね」

「その通り。それでそうだった」

信用を完全になくしたというのである。

「人はここぞって時にこそなの」

「出るんだな」

「何かそれって今よくわかるわ」

狭山と津島は腕を組んで言う。だが陽太郎と月美はだ。

椎名のその言葉を聞いてだ。深く考える顔になった。そうしてそのうえでお互いに顔を見合わせてこうした話をするのであった。

「じゃああの時は」

「そうですね」

二人で小声で話す。

「あいつは」

「その本性を」

「悪い奴じゃないんだよ」

陽太郎の今の言葉は現在形だった。

「昔から。それはな」

「そうですね。私もそれは」
月美もだ。感じたのだった。
「そう思います」
「なあ。それで」
「それで？」
「ちよつと。またあいつと会っていいかな」
こつ月美に話すのだった。
「その。友達に」
「戻りたいんですね」
「駄目かな、それって」
これがだ。陽太郎の今の考えだった。
「ああしたことがあったし」
「いえ、それは」
月美もだ。考える顔で返した。
「よく考えて。それで」
「そうするか」
「はい、陽太郎君が思われるなら」
彼の決断だというのである。

第三十四話 夜空にあるものその四

「そうされるといいと思います」

「そうだよな。それじゃあ」

「はい」

「考えるよ」

今はというのだった。

「よくな」

「それがいいです。それじゃあ」

「ああ、それじゃあ」

そんな話をしてだった。二人は話を止めた。しかしここでだ。狭山と津島がだ。その話を聞いて言ってきたのだった。

「あれっ、何の話してたんだ？」

「そうよね。大事な話みたいだけれど」

こう言ってだった。陽太郎と月美に顔を向けてきたのである。

「何かあったのかよ」

「それで」

「あっ、いや別に」

「何もありません」

二人はだ。咄嗟にそれを誤魔化すのだった。

「まあ個人的な話だから」

「別に」

「何か言いたくないみたいだな」

「そうね」

二人にもそれはわかった。そうしてだった。

そのうえでだ。こう言ったのであった。

「じゃあいいか」

「そうね」

これで納得したのだった。それでだ。二人はもう陽太郎と月美に

対して言うのを止めた。そうしてそのうえで彼等の話に入るのだ
た。

「それでだけれどな」

「うん。それで？」

「今日の放課後あれか」

「そうよ、私の家に来て」

津島の家とはつまりであった。

「それで新しいケーキ試食してよ」

「へへへ、何か悪いな」

ケーキの試食と聞いてだ。狭山は無意識のうちに笑顔になるのだ
った。

「当然あれだよな。試食だから」

「そうよ。ただよ」

津島は天才的な誘惑を出してきた。

「ただ。いいでしょ」

「最高だよな。ただでケーキが食えるって」

「しかも何個もね」

「余計にいいな」

狭山はさらに楽しげな笑顔になる。

「何かそれ聞いたらな」

「それ聞いたら元気が出るでしょ」

「これ食うのにも力が入るぜ」

彼が今食べている昼食もだというのだ。

「いやあ、さらに美味くなってきたな」

「実際に元気出て来たみたいね」

「ああ、そうだよ」

まさにその通りだというのだ。そしてだ。今食べているのを食べ
終えた。次は。

「お茶、貰おうかな」

「はい、どうぞ」

津島が早速お茶を出してきた。熱いお茶だ。狭山はそれを満足した顔で言うのだった。

「さて、それじゃあ放課後な」

「勿論私も食べるから」

「二人で試食か。いいな」

「そうでしょ」

そんな話をするのだった。二人はそのまま彼等の幸せの中に入った。

六人は食堂で幸せに食べていた。だが彼女達は。

やっと学校に来た星華だったが。何処かぎくしゃくとしていた。

三人もその彼女に対してだ。心から心配する顔でこう言うのだった。場所は校舎の屋上だった。そこで四人車座になってだ。そのうえでパンを食べながらだ。星華を気遣いながら声をかけるのだった。

「ねえ、これ食べる？」

「これどう？」

「よかつたら」

三人はそれぞれだ。星華に自分達が持っているパンの一つを出す。

そうして彼女を元氣付けようというのだった。

「食べないとね、やっぱり」

「元氣でないから」

「だからね」

「うん……」

登校できたとしてもだった。星華はまだ元氣がなかった。かつての明るさもだ。そうしたものはまだ取り戻せずにいたのである。

第三十四話 夜空にあるものその五

だからこそだった。三人もその彼女に声をかけるのだった。しかしだった。その彼女は相変わらずだった。

「ねえ、部活どうするの？」

「バスケ。そっちはどうするの？」

「出るの？」

「さっき先輩に言われたの」

そのバスケ部の先輩であることは言うまでもない。

「体育から帰った時にね」

「ああ、あの時」

「三限目の後」

「あの時ね」

「そう。その時に言われたの」

何を言われたのか。彼女は話した。

「部活。来てって」

「じゃあ行く？」

「そうする？」

「部活も」

「うん、そうする」

こうだ。小さな声で答えたのだった。

しかしその間手は動いてはいない。口もだ。ただ喋るだけでだ。

パンもその横にある牛乳もだ。全く手をつけようとしないのである。

そうして喋るだけでだ。やはり元気がなかった。

その彼女にだ。三人はまた言うのだった。

「部活行くのならやっぱり」

「元気出そう」

「食べよう」

こう彼女に言うのだった。

「そうしよう。ねっ」

「今からね」

「そうしようね」

「そうね」

星華もだ。三人の言葉に頷いた。

そのうえでだ。自分のサンドイッチを手に取る。卵サンドである。ビニールから出してだ。白い三角のそれを自分の口に近付けていて。一口食べてそのうえで三人に対して小さな声で告げるのだった。

「美味しいね」

「うん、だからもっと食べて」

「本当に私のパン一個あげるから」

「私もね」

「有り難う……」

三人の心遣いになだ。礼を言う星華だった。その彼女のところに実際にパンが来る。彼女はそのパンを三つ共手に取るのであった。

そのうえで食べはじめる。そうしてであった。三人にあらためて言うのだった。

「私、このパン食べてね」

「うん、それで」

「どうするの？」

「食べてから」

「元気出すわ」

こう言うのだった。

「それからね。部活にも出て」

「久し振りだから身体がなまってるけれどね」

「怪我はしないで」

「それは気をつけてね」

「わかってるわ」

それはだというのだった。

「それはね」

「それだつたらいいわ」

「とにかくね。怪我はしないでね」

「絶対に」

「そうよね。怪我なんかしたらどうにもならないから」

それはわかつている星華だった。それもよくだ。

それだった。今はパンを食べてだ。気を取り直すのであった。

それが今の彼女だった。教室においてもよそよそしくぎこちない。

特に月美のところには向かわずにだ。意識的に避けていたのだった。

月美もそれに気付いてだ。曇った顔で傍にいる椎名に話した。

「やっぱり」

「気にしない」

「気にしたら駄目なの」

「うん、駄目」

そうだとするのである。

「終わった話だから」

「終わったから」

「そう、終わった話は蒸し返さない」

これが椎名の今の月美への言葉だった。

第三十四話 夜空にあるものその六

「絶対に」

「だからなのね」

「そう、それはしない」

また言う椎名だった。

「だからつきぴーは今は何も言わない」

「何も」

「そして動かない」

それもだというのだった。

「何があっても」

「わかったわ。それじゃあ」

「そういうこと。しっかりとしていて」

「無視はしないのね」

「無視するんじゃないかってあえてそっとする」

「そつするの」

「そつ、そつとする」

椎名は教室の端で静かにしている四人、とりわけ星華を見て話す。月美も彼女達をちらりと見ている。気付かれないように注意しながらだ。

「今お互い何かしてもよくないことになるだけだから」

「どうすればいいの、それじゃあ」

「時間」

出した言葉はこれだった。

「時間が解決してくれること」

「時間がなの」

「そう。時間は少しずつだけれどどんなものでも癒してくれる」

それが時間だというのである。

「だから。今は癒される」

「時間に」

「つきぴーだけじゃなくてあの娘も」

「佐藤さんも」

「そう。癒されるべき」

また月美に対して話した。

「そうするべき」

「うん、それじゃあ」

「つきぴーはつきぴーの道を見つけたから」

「陽太郎君と」

「それを二人でしつかりと歩く。そうして」

願いの言葉だった。他ならぬ月美に対して。

「そうして欲しいから」

「わかったわ。それじゃあ」

月美は椎名のその言葉に頷いた。そうしてであった。

今は彼女は動かなかった。そのうえで陽太郎のことを考えるだけであった。だが椎名はその星華を見続けていた。彼女に気付かれないうようにして。

星華はこの日久し振りに部活に出た。部活では彼女自身が思っていたよりもよく動けた。その部活の後でだ。誘ってくれた先輩にこう言われたのだ。

「久し振りだけれどね」

「はい、動き悪かったですよね」

「いえ、思ったよりよかったですわ」

にこやかに笑ってだ。こう彼女に言うのだった。

今は部活の帰り道だ。すっかり暗くなった駅までの道を二人で横に並んで歩きながらだ。そのうえで先輩のその話を聞いているのだ。つた。

先輩は背が高い。星華よりも五センチは高い。身体つきはすらりとしていてとりわけ足が長い。その長身の上にある顔は童顔でショートヘアである。

その先輩がだ。明るく彼女に話すのだった。

「ずっと休んでたから大丈夫かしらって思ったけれど」

「すいません、それは」

「身体悪かったらしいわね」

先輩はこう聞いているのだった。

「かなり酷い風邪だったそうね」

「それは」

「けれど治って何よりだったわ」

風邪と思ったままでだ。先輩は話すのだった。

「本当にね」

「治ってですか」

「ええ。この調子ならレギュラーにもなれるわ」

「レギュラー。私が」

「本調子に戻ったらね」

その前提があるにしてもだ。なれるというのであった。

第三十四話 夜空にあるものその七

「なれるわよ」

「私がレギュラーになんですね」

「だって。貴女いつも頑張ってるから」

努力から話すのであった。

「それでバスケの技術も。体力もね」

「よくなってますか」

「最初の頃とは大違いよ」

そうだというのだった。先輩はだ。

「もう。一年の最初の頃なんて」

「そんなに酷かったですか」

「酷いというか至っていなかっただわ」

こう星華に話すのだった。彼女自身にだ。

「そのレギュラーのレベルにね」

「そうなんですか」

「けれど。今度の風邪まで休んだことなかったじゃない」

「はい」

実はバスケを心から好きになっっていたのだ。それで部活を休むこととなくだ。ずっとやってこれたのである。好きこそというものであった。

「だからそれがね」

「いいんですか」

「継続は力なり」

今度の言葉はこれであった。

「毎日することがいいのよ」

「よく言われますけれど」

「そうよ。だからこれからも毎日練習したら」

「レギュラーに。私が」

「なれるわ。だからまた頑張つてね」

「はい」

先輩のその言葉に頷く。表情は少し明るくなった。そして先輩はだ。少しだけ明るくなった星華にだ。こんなことを言ってきた。

「俯いているけれど」

「あつ、すいません」

「謝らなくていいわ」

それはいいというのだった。

「けれどね」

「けれど？」

「顔。上げて」

そうしろというのだった。

「顔をね。それでお空見て」

「お空をですか」

「お昼のお空は青いけれど」

夜の今の空は。続けられる言葉は今は言葉として実際には出されていない。だが先輩は同時にそのことも星華に話すのであった。

「夜のお空もね」

「夜のお空も」

「綺麗よ。ほら見て」

こう言つて夜空を見上げるとであった。そこには。

星達があつた。無数の星達が煌いている。先輩は星華と共にその夜空を見ながらだ。そのうえで彼女にこんなことを言つたのだ。

「私。夜空が好きなのよ」

「星があるからですね」

「そうよ。それがあから」

まさにその通りだというのだ。

「だから好きなの。幾ら見ても飽きないわ」

「そこまでお好きなんですね」

「ええ。それでね」

先輩もまた夜空の、そこにある星達を見上げている。それを見ながらだ。星華に対してだ。今度はこんなことを言ってきたのである。

「今度の日曜ね」

「日曜ですか」

「百貨店行かない？」

星華をそこに誘うのだった。

「八条百貨店にね。行く？」

「あの百貨店にですか」

「そうよ。あそこの屋上にプラネタリウムがあるのよ」

「そうだったんですか」

それは星華の知らないことだった。星については学校の授業で勉強するだけだった。彼女にとってはそれだけの存在であったのだ。

だが、だった。今の先輩の言葉にはだ。こう返すのだった。

「それならそこに」

「一緒に来てくれるのね」

「御願いできますか？」

先輩の方に顔を向けてだ。そのうえで尋ねた。

第三十四話 夜空にあるものその八

「私も一緒に」

「一緒に行きましょう」

「こう返す先輩だった。」

「そうしましょう」

「はい、わかりました」

笑顔で頷く星華だった。

「それじゃあ今度の日曜に」

「あの百貨店つてプラネタリウムだけじゃないしね」

「他にも色々なお店がありますしね」

「スポーツ用品店も充実してるし」

先輩はバスケット部員らしいことも話した。

「だからね」

「そうですね。あそこのシューズってどれも安くてしかもいいのばかりで」

「八条スポーツのお店だから」

つまり系列会社の店を入れているのである。八条百貨店も八条スポーツも同じ八条グループの企業ということなのである。

「あそこはね」

「安くていいのが入るんですね」

「そうなの。そこも寄る？」

「はい」

笑顔で頷く星華だった。今は笑顔になっているのだ。

「それじゃあそこも願います」

「わかったわ。それじゃあね」

「帽子買いたいんで」

「帽子？」

「野球帽欲しいと思ってたんです」

それをだというのだ。

「あそこプロ野球の帽子もありますから」

「贋品のチームは何処なの？」

「阪神です」

そこだとだ。素直に述べた。

「阪神ファンなんです」

「同じね。関西だから当たり前だけれど」

「ずっと阪神応援してます」

「それでその阪神帽をなのね」

「あの黒い」

復刻したユニフォームのそれであった。大人気のユニフォームの

一つである。

「あの帽子欲しいんです」

「そうなの。じゃあそこにも寄ってね」

「すみません」

「私もそうするし」

彼女も寄りたいというのである。

「だからね」

「先輩は何を買われるんですか？」

「私はシューズよ」

バスケットボールのだ。それだというのである。

「それを買いたい」

「シューズですか」

「そろそろ。底が危うくなってきたのよ」

つまり磨り減ってきたというのである。靴の下は必ず磨り減る、

それは誰であろうともどうしようもないことであった。使えば減る

ものだからだ。

「だからね」

「それでなんです」

「靴にも気をつけてね」

先輩はこのことも話してきた。

「それもね」

「ですよ。靴があつてこそですから」

「そういうことだからね。いつも気をつけておいてね」

「わかりました」

星華の顔は今度は真面目なものになっていた。笑顔がこれまで通りにだ。その都度変わるようになっていた。戻ってきているのだ。た。

「それじゃあそれも」

「だから行きましょう」

「百貨店にですね」

「何かも食べて」

食べることも忘れなかった。それもだ。

「あそこ美味しいお店も多いし」

「一階のスナックランドなんかいいですよね」

星華はそこを話に出した。

「あそこなんかは」

「あつ、あそこね」

「はい、美味しいし安いし」

「色々なものがあるしね」

先輩も彼女のその話に乗ってきた。

第三十四話 夜空にあるものその九

「それじゃあ。そこにね」

「はい、そこで食べましょう」

「カレーもあればオムライスもあって」

「焼きそばも美味しいですよ」

「飲み物もね」

先輩はそれについても話した。食べるだけではないのだ。

「メロンソーダに冷やしあめに」

「身体によくないって言われますけれどね」

「そんなのいちいち気にする必要ないのよ」

そうしたことにはこだわらないというのだ。これは人によってはこだわることがある。先輩はそうした考えの人間ではないのであった。

そして星華もだ。先輩のその考えに傾いて言うのだった。

「安くて美味しいものをたっぷりとですね」

「それが高校生の食べ方じゃない」

「そうですね。あそこはだから」

「いいのよ。じゃあね」

「はい、今度の日曜に」

「行きましょう」

こう笑顔で話す二人だった。星華の顔に笑顔が戻ってきた。

そして椎名はだ。この時赤瀬と共に駅のプラットホームにいた。

暗くなり蛍光灯で白く照らされているそこにいてだ。二人で話すのだった。

「ねえ」

「何かな」

「今度の日曜だけれど」

椎名からの言葉だった。

「デートしない？」

「デート？」

「そう、デート」

「こつ赤瀬に提案するのだった。」

「デート。どうかな」

「いいね。それじゃあね」

「場所は」

「何処にするの？そこは」

「百貨店」

「そこだというのだ。」

「そのこの屋上のプラネタリウム」

「そこに行くんだ」

「それと本屋」

「告げた場所はその二つだった。」

「そこに行きたい」

「本屋もなんだね」

「今度は森鷗外」

明治から大正の文豪である。医者でもあり陸軍軍医総監として軍においても非常に強い影響力を持っていた。だが今では文豪としての彼の方が有名である。

「それを読みたい」

「鷗外なんだ」

「うたかたの恋」

「題名も言うのだった。」

「それを読みたい」

「それでなんだね」

「そう。だから本屋も」

「わかったよ。じゃあ僕は」

「何処に行きたいの？」

「一階のスナックランドだけれど」

「そこだというのだった。」

「そこでお昼どうかな」

「いいと思う」

「あそこ安くて量も多いしね」

「しかも美味しい」

「だからそこでどうかなって思ってたね」

それでだというのだ。確かに赤瀬に相応しい店であった。

「色々な食べ物もあるしね」

「確かに栄養は大切」

椎名はそれはよくわかっていた。

「健康第一。けれど」

「けれど？」

「そうした食べ物を食べるのもいい」

こう赤瀬に話すのだった。

第三十四話 夜空にあるものその十

「だから行こう」

「うん、それじゃあね」

デートの話は決まった。それが決まった時にだった。

電車が来た。ライトグリーンの中もまた白く照らされている。駅も電車の中もだ。暗がりの中に。白い光の世界があった。

二人はその白い世界からまた別の白い世界に入った。そのうえでだ。

電車の空いている席に二人で横に並んで座ってだった。話をするのだった。今度は赤瀬からだ。その独特の低い声で話すのだった。

「ねえ」

「何？」

「僕こうして二人でいるのって」

「信じられないの」

「うん、出会ってわからないよね」

「こう椎名に話すのだった。」

「それってね」

「そうね。それは確かにね」

「若しかしたら僕達こうして一緒にいなかったかも知れないだね」

「その通りね」

赤瀬の今の言葉にだ。言葉だけで頷くのだった。

「それはね」

「そうだよ。出会って本当に不思議だよ」

「そう思う」

「不思議で。偶然だけれど」

赤瀬はその言葉をさらに続けていく。

「だけれど必然だったように思えるね」

「多分出会って」

椎名はだ。赤瀬のその言葉に応えて述べた。

「人の力になつてゐるものじゃない」

「じゃあ神様かな」

「多分。はつきりと断言はできないけれど」

「それでもなんだね」

「そう。思わぬ人と思わぬ場所で会つてそれが大きなものになる」

そうしたことが実際にあるからこそ。そしてそのことを知っているからこそ。椎名は今こう言うのだった。

「だからそれは」

「人の力じゃなくて」

「多分」

またこう言つてからだつた。同じ言葉を繰り返した。

「神様の力」

「神様なんだ」

「そう、神様がそうさせている」

椎名はこの存在をだ。何度も話に出してみせるのだった。

「人と人をそうして」

「そうしてなんだね」

「巡り合わせて結び付けていく」

それは人の力ではできないとだ。話していつてであった。

赤瀬にも顔を向ける。それで彼にも話した。

「だから私も今こうして」

「僕とつて。言つてくれるかな」

「うん」

その通りだというのであつた。

「そういうこと。二人一緒にいられる」

「神様のお陰でなんだ」

「赤瀬だけでなくて」

「僕だけじゃなくて」

「赤瀬は第一」

まず彼があるということは確かなものにする。そうしてだった。さらにだった。椎名は話していくのだった。

「けれどそれと」

「それと？」

「つきぴーもそう」

次に名前を出したのは彼女だった。

「つきぴーも第一」

「第一が二つ？」

「そう、二二つ」

そのことを否定せずだ。話してみせるのだった。しかも自然にだ。話していったそれだ。そこに深いものも含ませていた。

第三十四話 夜空にあるものその十一

「恋人と友達」

「どちらも大事なんだね」

「恋人は一人」

赤瀬のことに他ならない。まさに他ならぬである。

「友達は何人もだけれど」

「狭山君や津島さん」

「それと斉宮も」

彼の名前は椎名の方から出した。

「あいつも。けれどつきぴーは最初の友達」

「最初で。しかも一番大切な」

「そう。第一の友達」

まさにそれだというのだ。月美はだ。

「それだから」

「そうなんだね。だからそこまでね」

「大事。何があっても大切にしたい」

椎名は話していく。その中でだった

また百貨店についてだ。彼女は話したのであった。

「百貨店も」

「西堀さんとよく一緒にいってるよね」

「中学校の頃から」

行っているというのだ。そうしているというのである。

「そう。それで屋上のプラネタリウムも行って」

「そこにもまた行くよね」

「行く。いいかな」

「うん、いいよ」

快く頷く赤瀬だった。これで話は決まりだった。

「それじゃあね」

「うん、そこで星を見たい」

「天文部だから」

「そう、だから」

それでだというのだ。二人でだった。

椎名は少なくとも二人で行くつもりだった。二人以外にないと思っていた。しかしだった。心の何処かふと思ってだ。赤瀬にこう述べた。

「ただ」

「ただ？」

「またそこで会う可能性もある」

そのことも言うのだった。

「他の誰かと」

「神様が巡り合わせてくれてだね」

「そう。それで」

それによつてであるというのだ。

「そうなるかも」

「それは僕達にはわからない」

「うん。けれどそうなくても」

「いいんだね」

「いい。導きはそのまま受け入れる」

椎名独特の考えだった。それを今赤瀬に話すのだった。

「そういうことだから」

「はじめて会う人かも知れないけれど」

「既に会っている人とも」

「また会ってそれで」

どうなるかを。椎名は赤瀬と話をしながら考えてだ。話を続けていくのだった。

「別の一面がわかったりするから」

「別のね」

「人間は色々な顔があるから」

今度出した言葉のキーワードはそれであった。顔であった。

「全部の顔は中々見えないから」

「中々なんだね」

「そう。顔は一つじゃない」

椎名はまたこう話した。

「中には卑しい顔しか持っていない人間もいるけれど」

「ああ、そうだね」

それを聞いてだ。赤瀬も頷く。頷きたくはないことだがそれでもだった。赤瀬は今ほ頷くしかなかった。そしてそれは椎名もだった。それでだ。椎名は言葉を曇らせて話すのだった。

「例えばあの長官」

「あの人だね」

「ああいう人間も中にはいる」

ある人物の名前が出るとだ。赤瀬も頷く。椎名は言葉をさらに出していく。

「最低最悪の人間が」

「最低最悪。確かにね」

「そうした人間もいるけれど」

「殆どの人は違うね」

「あれはもう餓鬼」

それだというのだ。人ではなくだ。

「生きながら餓鬼道に堕ちている」

「卑しい人間は本当に卑しいね」

「そう。けれどそうじゃない人が殆どだから」

「そういうことだね。だから」

「そう。そうした面も見ていきたい」

「じゃあ今度の日曜は」

赤瀬からだ。話すのだった。

「そうした一面が見られることがいいと願って」

「それも御願いしながらね」

「行こう」

赤瀬に顔を向けて見上げて。そうして告げた。

「二人で」

「うん、二人で」

こつ話してだった。そのうえでだった。

「御願いしながら」

「行こうか」

「そうしよう」

二人もまた百貨店に行くことにした。そうしてそこでだ。椎名はその出会いを経験するのだった。それこそ神の導きなのだろうか。

第三十四話

完

2010・12・23

第三十五話 プラネタリウムその一

第三十五話 プラネタリウム

星華はだ。駅前の噴水のところで待ち合わせた。着ている服は勿論私服だ。

ダークグリーンの上着に赤と黄色の横縞の丸首のシャツ、それと青いジーンズである。そのラフな格好で白い噴水のところにいた。暫くしてだった。

先輩も着た。見ればだった。

「あら、そつちもなの」

「先輩もなんですね」

二人でだ。お互いの格好を見て思わず話すのだった。

「青いジーンズね」

「二人共ですね」

先輩は上は黒の皮のジャケットに赤いシャツである。その格好だった。

そしてだった。ズボンは同じだったのである。その青いジーンズだ。

「私これ好きなのよ」

「私もです」

二人で言い合うのだった。

「ジーンズって動きやすいしね」

「そうですね。しかも」

「何時でも着られるし」

「ですよね」

星華はにこりと笑ってこう先輩に答えた。

「こうして外出の時でもいけますし」

「家でもね」

「だから楽ですよね」

「本当に何時でも着られるから」

それでだ。二人で話すのであった。

そんな話をしてからだ。二人は、先輩から言ってきた。

「じゃあ今はね」

「はい」

「電車。乗りましょう」

「今だったら急行に乗れますよね」

「そうね。今の時間ならね」

先輩はここで自分の左手の腕時計を見た。見れば男ものだ。

銀色の重厚な造りのその時計を見れた。星華はまた言った。

「先輩のその時計って」

「どうしたの？」

「うちのお父さんの時計と同じ型ですね」

「あつ、そうだったの」

「はい、そうなんです」

こう話す星華だった。

「実は」

「私はあれなの」

「あれっていいですよ」

「この時計買ってもらったものなの」

先輩はそこから話すのだった。

「高校の入学祝いの時にね」

「その時にですか」

「お父さんに買ってもらったの。そうしたら」

「その時計だったんですか」

「そうなの。男もののね」

先輩はここで苦笑いになる。そうだとするのである。

「お父さん女ものの時計ってわからなくて」

「あはは、そうなんですよね」

星華も先輩のその話を聞いてだ。笑顔で述べるのだった。

「男の人ってそうですよね」

「女の子の持ち物わからないのよね」

「うちのお父さんもですよ」

星華は今は非常に明るい顔である。その笑顔での言葉だった。

「私の時計はですね」

「お母さんが選んでくれたのね」

「そうなんです。お父さんだったら絶対に間違えるっていつから」

「うちもそう言ったのよ」

先輩は困った笑顔になっている。そんな話をして笑顔でだ。二人並んで液に向かう。定期を出して改札口を越えてだ。駅の中に入った。

駅の中はアスファルトとコンクリートの何処にもある駅だ。殺風景と言えば殺風景な場所である。だが二人は今はそれには構わずだった。

二人の話をしながらだ。プラットホームに向かうのであった。そうして歩きながらだ。二人の話を続けていた。そうしていたのである。

「けれどね」

「無理に言ってますね」

「そうなの」

こう話すのであった。

第三十五話 プラネタリウムその二

「酷い話でしょ」

「そう思います」

「全く。酷い話よ」

先輩はこう言ってもだった。やはり笑っていた。

「何考えてるんだか」

「ですよ。父親って」

「何処か抜けてるのよ」

困った笑顔だがだ。やはり笑っている先輩だった。

「そうしたところがね」

「うちもなんですよ」

星華も自分の父親のことを思い出しながら話す。

「けれどそれでも」

「そうよね。それでもね」

「ずっと見てくれてますからね」

それは確かだというのだった。

「私達のこと」

「そうね。それはね」

「子供は大事って言って」

「それはとてもわかるのよね」

「空回りはしてますけれどね」

それは否定できないことだった。どうしてもだ。

「けれど。だから余計に」

「感じるわよね」

「お母さんはそうでもないですけどね」

星華は今度は自分の母親を思い出しながら話した。

「空回りしませんよね」

「同じ女だからかしら」

「そうですね。だから」

「そうだと思うわ」

こう星華に話す。

「女同士だから」

「それ考えるとお母さんだけでいいってなりますけれど」

「そこが難しいわよね」

「ですよ。父親としてはなんです」

「黙ってられない」

二人は今は階段を昇っている。先輩はそうしながら笑顔で話すのだった。

「そういうことなんでしようね」

「親は一人じゃないから」

「二人いてだからね」

「だから両親なんです」

「そうよね。だから」

二人でだ。こう話していく。

「有り難いわよね」

「鬱陶しいって思う時もありますけれど」

「あはは、それはね」

先輩は星華の今の言葉にだ。思わず笑ってしまったのだった。

「どうしてもそういう時はあるわよね」⁶

「そうですね。仕方ないですかね、それは」

「そうですね。仕方ない一面はあるけれど」

「はい」

「それでも有り難いわよね」

それは間違いないというのであった。

「本当にね」

「いつもいてくれて見守ってくれて」

「私もそんな親になれたらいいなって」

「思われてるんですね」

「そうなるにはね」

どうするべきか。先輩は話す。二人は遂にホームに出た。黒いア
スファルトと黄色の警戒を示すラインの二色が印象的である。

「まずは相手をね」

「相手っていいますと」

「だから。一人じゃなれないじゃない」

先輩がここで言うのはこのことだった。

「親には」

「あつ、そうですね」

言われてだった。それで気付いた星華だった。そのことにだ。

「相手がいないと」

「まずは彼氏よ」

話はそこからだった。

「彼氏を見つけてね」

「そうして結婚して」

「子供ができてね」

「それからなんです」

「ええ、それからよ」

話は長かった。本当にそこからであった。

「彼氏ができたら」

「彼氏ですか」

「貴女もね」

星華に顔を向けてだ。そのうえで告げるのだった。

第三十五話 プラネタリウムその三

「彼氏をね」

「そうですね」

しかしだった。ここではだった。

星華は顔を曇らせる。どうしても俯くことを止められずにだ。そのうえでそうなってしまうてからだ。先輩の言葉に應えるのだった。

「何時か」

「できるわよ。絶対に」

「絶対にですか」

「貴女ならね」

星華ならというのである。

「絶対にできるわ」

「だといいですけれど」

「まず可愛いし」

これはだ。先輩の真面目な言葉だった。

「顔立ち整ってるじゃない」

「だといいですけれど」

実は星華は自分の顔に自信がない。不細工だと思っていたことすらある。しかし実際はそう言われたことはなかったりするのだ。

「私の顔。そんなにいいですか」

「いいわよ。だからまずは顔がいいし」

先輩が彼女について話すのはまずそこからだった。

「それに髪だって綺麗だし」

「髪もですか」

「スタイルもいいじゃない」

今度はこれだった。

「すらりとしててね」

「けれど胸は」

自分からだ。苦笑いで言ってしまった言葉だった。

「ないですけどね」

「胸は人それぞれよ」

「それぞれですか」

「大きいのが好きな子も小さいのが好きな子もいるわよ」

男の具体的な好みの話であった。

「胸はね」

「そうだったんですか」

「だって。女の子もそうじゃない」

「女の子もつていいますと」

「だからね。痩せている人が好きだったり太っている人が好きだったり」

「そういう好みですか」

「それぞれじゃない」

先輩はまた星華に話した。

「筋肉質な人が好きな娘だつていれば」

「ジャニーズみたいないな感じな人が好きな場合も」

「それは本当にそれぞれでしょ」

「そうですね。言われてみたら」

「そういうことなのよ」

これが先輩の言葉だった。

「それと同じなのよ」

「じゃあ胸は」

「気にしなくていいわ」

先輩のこのことに対する結論だった。

「そういうことだから」

「わかりました」

「一番大事なのは」

先輩の言葉が続いていく。

「何かっていうとね」

「それは何ですか？」

「性格よ」

そのものずばりだった。それであった。

「性格が一番大事じゃない」

「性格。そうですね」

これは星華もよくわかっていた。実によくだ。

「性格が悪いとそれだけで」

「もう駄目よ」

先輩はここではばっさり切り捨てた。二人は今駅のプラットホームに並んで立って電車を待っている。駅の電光掲示板にだ。矢印と漢字で電車が今何処にいるのかが示されていた。それを見れば来るのは間も無かった。

「それだけでね」

「そうですね。それは」

「そう。けれど貴女は性格も」

「いいですか？」

今は胸以上に自信のないことだった。月美とこのことがあるからだ。

「私は」

「いい部分がとても多いわ」

先輩の言葉はここではこうしたものだ。来た。

第三十五話 プラネタリウムその四

「とてもね」

「いい部分ですか」

「そうよ。明るいし」

「まずはそこであった。」

「それに面倒見もいいし」

「そうですか」

「自分が悪いと思ったなら素直に認められるわよね」

「これはだ。星華の気付いていないところだった。」

「そうよね」

「それは」

「気付かなかったかしら」

「今はじめて言われました」

「実際にだ。こう答えるのであった。」

「そんなこと。本当に」

「自分で気付かなかったのね」

「私。そんなにいい性格ですか？」

「部活の練習を見てたらね」

先輩はそこから話すのだった。彼女の部活での行動を見てだったのだ。

「そう思えるわ」

「そうなんですか」

「悪いところを指摘されたらすぐになおそつとするじゃない」

「それを言うのである。」

「それについて努力して」

「だからそれで」

「それはとてもいいことよ」

「けれど私そんな」

「そんな？」

「いい娘じゃないです」

俯いてだ。そのうえでの言葉だった。

「悪いことも。随分しましたし」

「悪いこともなのね」

「許さないようなことだった」

月美にしてきたことがだ。今も彼女の心を責めていた。良心の呵責はだ。今も彼女を苦しめていたのである。それは彼女にはまだどうしようもないものだった。

「してきましたし」

「それはね」

しかしだ。先輩はここでまた星華に言うのだった。こう。

「誰だってよ」

「誰だってですか」

「そうよ。誰だってよ」

そうだというのである。

「誰だって同じよ」

「そうなんですか？」

「悪いことをしない人なんていないわ」

先輩はだ。微笑んで話したのであった。

「生まれて一度も。そんなことしない人なんて」

「いませんか」

「絶対にいないわ」

今度は断言だった。

「お釈迦様でもない限りはね」

「お釈迦様でも」

「ほら、教科書であつたじゃない」

高校生らしい話だった。ここで電車が来た。

急行である。二人はそれに乗り込む。中央から左右に開く扉をくぐってだ。車両の中に入る。そうして空いている場所に二人並んで

座ってた。また話をするのだった。

席は薄い緑だった。そこに座ってまた話をはじめた。

「悪人正機って」

「確か親鸞ですよね」

「浄土真宗だったわね」

「そうでしたよね」

「それでその人の話であつたじゃない」

その教科書の話をだ。先輩はそのまま星華にするのだった。

「悪人って自分が悪いことをしたって自覚してる人だって」

「自分がですか」

「あなたがそれよね」

他ならぬ星華がだというのだ。

「そのままよね」

「私ですか」

「ええ。そのままね」

「そうなんですか」

「そうよ。悪いことをしてきたって自覚してるわね」

「今は」

どうしてもだつた。それは否定できなかつた。

「それで。自分でわかつてるから」

「だからそれで」

「そこからよ」

先輩の言葉がこれまで以上に優しいものになった。

第三十五話 プラネタリウムその五

「そこからのよ。大切なことは」

「これからなんですわね」

「悪いことをしたってわかっていたら」

「それをなおしていく」

「あなたならできるわ」

星華ならというのである。

「絶対にね」

「できます？私に」

「だって。素直になおせる娘だから」

「それでだというのである。」

「絶対にできるわ。私はわかっているから」

「先輩は」

「だから頑張つてね。これからね」

「わかりました」

小さい言葉だった。しかしだ。彼女は確かな声で応えたのであった。

そうしてだ。先輩に対して。あらためてこう言っただった。

「私、頑張ります」

「期待しているわよ。それじゃあね」

「はい、それじゃあ」

「今日は楽しみましょう」

話が変わった。遊びのことについてであった。

「百貨店でね。楽しみましょう」

「そうですね。それじゃあ」

「まずはシューズとかを買って」

最初はそれであった。

「何か食べてね。本当に何にしようかしらね」

「結構悩みますよね」

「あそこって美味しくて安いお店ばかりだから」

「そうしたお店ばかりだとかえって困りますよね」

星華は笑顔になっていた。とても自然で屈託のない。彼女の本来の笑顔になっていたのだった。

「何処に入ったらいいかって」

「ここはお料理のジャンルで選ぶうかしら」

「それで、ですか」

「おそばとかいいかしら」

先輩がここで言うのはそれだった。 104

「ざるそばね」

「そういえばわんこそばもありましたよね」

星華はここで百貨店にあるお店の一つと思い出した。

「盛岡の」

「あれね」

「あそこなんてどうでしょうか」

「そうね。わんこそばね」

「安くて物凄く食べられますから」

「しかも美味しい」

まさに三拍子であった。

「だからなのね」

「他にもいいお店は一杯ありますけれど」

「私おそば好きなの」

先輩は微笑んでこう星華に述べた。

「それもかなりね」

「じゃあ」

「ええ、そこにしましょう」

先輩はその微笑みのまま星華に話した。

「それじゃあね」

「わかりました。それじゃあ」

「百杯いけるかしら」

先輩は今度はこんなことを言った。わんこそばにおいて百杯とは一つの基準である。それを食べられるかどうかが重要なのだった。

「果たして」

「私前はいけました」

「あつ、いけたの」

「何とかって感じてましたけれど」

それでもいけたというのだ。それは事実だった。

「百杯でした」

「丁度だったのね」

「百杯のところまで限界でした」

星華はここでは苦笑いになっていた。

「もうそれ以上は」

「私は百八杯いったことがあるわ」

「百八ですか」

「けれどももうそれで限界」

その百八でだということだ。

「それで終わりだったわ」

「そうですね。じゃあ今度は」

「そうね。二人共百杯と百八杯をね」

「超えましょう、絶対に」

「食べるからにはね」

笑顔で言い合う二人だった。そうしてそのうえ百貨店に向かいだ。スポーツ用品店に行つてからわんこそばを楽しむのであった。

第三十五話 プラネタリウムその六

二人が来る少し前にであった。椎名が自分の前に座っている赤瀬に対して言っていた。

「今日も絶好調ね」

「うん、今日は特にだね」

赤瀬は次から次に食べていた。食べているのは。

「わんこそば大好きだけれどね」

「けれどももう二百杯」

「はい、どんどん」

「はい、もう一丁」

赤瀬は次から次に椀の中のそばを食べていく。店の女人、こういた店に相応しい黒に近い緑の和服の上に割烹着を着た妙齡のその人がそばを入れていく。彼はそれをどんどん食べているのだ。

その彼に対してだ。椎名は言うのだった。

「何杯いけそう？」

「この調子だと三百は確実に」

「そう、いけるの」

「ひよつとしたら四百はいけるかも」

そこまでだというのである。

「この調子だと」

「五百いける？」

椎名はいつも通り表情を変えずに彼に問うた。店の中には他にも何人も客がいる。彼等もまたわんこそばを食べていた。彼等だけではなかった。

「そのまま」

「それはどうかな」

「いったらいこう」

これが椎名の今の言葉だった。

「ここは」

「そうだね。いけたらね」

「おそばは身体にいい」

椎名はまた言った。

「そう、とても」

「カロリーも少ないしね」

「赤瀬の場合はカロリーは必要だけれど」

「その分食べるといいかな」

「そう、食べる」

何につけてもそれだった。

「食べて食べてそのうえで」

「身体をつくるんだね」

「赤瀬はそうやって身体をつくってそれで」

それからもあるのだった。

「その身体を鍛えていくべき」

「そうだね。それで強くなってね」

「そうなるべき。じゃあ」

「うん、食べるよ」

ここでまた一杯食べる彼だった。箸を動かすとまるでそばの、彼から見れば一口のそれが口の中に入ってだ。椀を空にした。

その空になった椀にまた一杯入れられる。女の人がさつとそばを入れていくのだ。赤瀬に迷惑をかけず動きも止めないものだった。

そうして食べてだ。遂にであった。

赤瀬が椀を置いた時。店の人が椀を数える。その数は。

「五百です」

「いったんですね」

「はい、全部で五百十二です」

それだけだというのだ。

「いってます」

「そうですね。いったんですね」

「いや、凄いですね」

お店の人は純粹に赤瀬の偉業を賞賛していた。

「ここまで食べられる人なんて滅多に」

「いませんか」

「力士の人でいましたけれど」

かなり特別な立場の人間の話が出て来た。

「その人は六百いきました」

「えっ、六百ですか」

「はい、六百丁度です」

そこまでだというのである。

「うちのお店百杯以上の人は手形を飾ってますけれど」

「そこにあるんですね」

「はい、あそこに」

見ればお店の白い壁のところに品書きと共に多くの手形が飾ってある。わんこそばは食べた数を手形に書くようになっていたのである。

「あります」

「六百杯が一番ですか」

「そうですね。今のところは」

「力士やレスラーはまた特別」

椎名が驚きを隠せない赤瀬に話した。

第三十五話 プラネタリウムその七

「あの人は食べるのも仕事だから」

「よくそう言われるね」

「気にはしても負けたと思ったら駄目」

「それはだというのである。」

「そもそもが違うから」

「仕事だからなんだね」

「プロだから」

つまり食べることのプロでもあるというのだ。

「だから負けたとかは思わないこと」

「そういうことだね」

「その通り。けれど赤瀬は」

「うん、僕は？」

「そうなる？」

こう彼に問うてきたのだった。

「そのプロに。なるの？」

「そうだね。柔道家になりたいね」

それにだというのだ。実に彼らしい言葉だった。

「やっぱり。柔道やってるしね」

「そう。だからなの」

「やっぱり柔道家も食べないと駄目だよね」

「階級によるかも」

「階級ね」

「そう、それによる」

つまりダイエットが必要な場合もあるというのである。これが現代柔道だ。

「階級がいいかどうかは別にして」

「柔道に階級だね」

「柔よく剛を制す」

椎名はこの言葉も知っていた。

「それを考えると。少し」

「問題があるよね」

「そう。柔道は武道」

言うまでもないことだがあえて言う椎名だった。そう言つべきだからだ。

「どんな相手とも戦う場合がある」

「そうだよ。僕も色々な相手とね」

「だから。柔道に階級は」

「実は僕もそう思うよ」

彼もまた同じ考えだった。そのことではだ。

「武道だから。どんな相手ともね」

「体格に関係なくね」

「そうしないと駄目だと思つよ。まあ競技として考えたら」

「仕方ない」

「その辺りは難しいね」

「だからこうなる」

椎名はここで合理的に述べてきたのだった。

「武道としての柔道と競技としての柔道」

「二つあるんだ」

「そう。二つの柔道がある」

「そうなっているんだね」

「どっちがいいかはわからないけれど」

「それでも二つあるんだね」

「赤瀬はどっち」

赤瀬自身にそれを問うのだった。

「どっちの柔道がいい」

「そう言われると」

「赤瀬の柔道は武道家の柔道だけねど」

「ああ、それだね」
赤瀬も椎名の今の言葉に応える。
「それだよね」
「当て身とかも使うし」
「柔道だけじゃなくて柔術も勉強してるよ」
「じゃあやつぱり」
「うん、武道家の柔道だね」
そちらだというのだ。自分でも分析したうえでの返事だった。
「僕の柔道はね」
「そうなる。だから」
「うん、武道としての柔道をやっていくんだね」
「それでいいと思う。ただし」
「ただし？」
「競技として、スポーツの柔道もやっていくべき」
「そちらもだ。椎名は話すのだった。」
「最初はそうは思ってたけれど」
「そっちもなんだ」
「そっちもまた柔道だから」
「それでだというのだ。」

第三十五話 プラネタリウムその八

「だからしていくべき」

「両方やってこそなんだ」

「本当の柔道家になっていくと思う。目指せ」

何かというのである。

「アントン＝ヘーシング」

「大きいね、それはまた」

「赤瀬は身体が大きいから」

「だからヘーシングなんだ」

「身体のタイプは柔道家じゃないけれど左門豊作だけれど」

ここでは漫画のキャラクターだった。最早伝説とさえなっている憎むべき球界の敵である球団を舞台にした野球漫画の登場人物である。

「それでも目指すべき」

「ヘーシング。凄いよ、あの人は」

「目標は大きく」

「それでヘーシングなんだ」

「そう。そうなるべき」

また言う。そんな話をしていた。そしてだ。

椎名も食べ終わった。彼女もしっかりと。

「百杯です」

「食べたね」

「おそば大好き」

こう赤瀬に返す。

「だから食べた」

「そうなんだ」

「そういうこと。それじゃあ」

「そうだね。次はね」

「本屋行こう」

「そこで本を買ってね」

「後は」

それからのこともだ。椎名は話すのだった。

「プラネタリウム行こう」

「次はそれだね」

「そう、そこ」

そこだというのである。

「そこに行こう。それじゃあ」

「星座か。いいね」

赤瀬の顔も微笑んでいる。そんな話をしてから店を出るのだった。その二人と入れ替わりにだ。今度は星華と先輩が入って来た。そうしてだった。

「それじゃあね」

「はい、わんこそばですね」

「二人で食べましょう」

「目指すは百杯ですね」

二人でだ。笑顔で話してだった。

そしてだ。そのうえで二人で向かい合って同じ席に座ってだ。わんこそばを注文する。そのうえでそのわんこそばを食べていくのだった。

「はい、どんどん」

「はい、もう一丁」

「はい、頑張って」

お店の人の言葉は二人にも同じだった。それに合わせるかのよう

に。

食べていった。そうして。

気付けば二人共だった。それぞれかなり食べていた。

「ええと、百杯いったわよね」

「そうですね」

二人はお互いの杯を見て話す。
「何か気付いたら」
「食べてましたね」
「こんなに食べられるなんてね」
先輩は少し苦笑いになって述べた。
「思わなかったわ」
「私もです」
「そうね。けれど」
「けれど？」
「食欲があるってことよね、これって」
先輩が今言うのはこのことだった。
「いいことね、やっぱり」
「そうですね。食べられるってことは」
「それ自体がいいことよ」
こう星華に話すのだった。
「健康な証拠だからな」
「健康な、ですね」
「身体だけじゃなくて心もね」
「そちらもだというのであった。」
「両方確かじゃないと。食べられないから」
「そう思うと食べられるって凄いことなんです」
「そうね。心身共によくないと食べられないから」
「ですよ」
「ええ。それでだけれど」
「はい、今度は」
「プラネタリウム行きましょう」
先輩はにこりと笑って星華に話した。

第三十五話 プラネタリウムその九

「いよいよね」

「お星様をです」

「見ましよう。最後はそれよ」

「はい、買うものを買って食べてから」

「綺麗なものを見る。いい流れよね」

「そうですね。本当に」

「まあ普通はデートで巡るものだけれど」

「ここだ。先輩はこんなことも話した。」

「それでもね。これもね」

「いいですよ」

「貴女はデートしたことあるのかしら」

星華はふとこんなことを尋ねられた。先輩に。

「どうなの、それは」

「デートですか」

「したことがある？どうなの」

「実は」

困った顔になってだ。答えた彼だった。

「そういうのは」

「ないのね」

「はい、ないです」

正直に先輩に答えた。好きだった相手はいてもだ。そうだったのだ。

「それは」

「そう。それじゃあ」

「それじゃあ」

「今度は誰かと一緒にこうするといいわ」

「デートで、ですか」

「女の子同士もいけれど」

「そういうことなんですね」

先輩の言葉の意味がよくわかった。言葉の中にあるものも。そうしたものを感じ取りながら。そのうえで話を聞いて頷くのだった。

「わかりました」

「そうよ。じゃあ」

「はい」

また先輩の言葉に頷く。そしてだった。

二人で席を立てて勘定を済ませてだった。行こうとしたところで。

「あつ、待って」

「はい？」

「大切なこと忘れてるわよ」

こう先輩に言われたのである。

「手形書いてないでしょ」

「あつ、そうですね」

「そうよ。書いてからね」

「それからですね」

「そう、それからね」

行こうというのである。

「そういうことはしっかりとしないと」

「すいません、つい」

「わんこそばを食べたらどうするか」

先輩はにこりとして星華に話した。

「最後はそれだからね」

「手型ですよね、やっぱり」

「そういうこと。それじゃあね」

「はい、それじゃあ」

それも書いてだった。そうしてだった。

それも終わってから屋上に向かいだ。プラネタリウムに入るのであつた。

その頃椎名と赤瀬もだった。二人もだった。

「本買ったしね」

「そうだね」

椎名は見ればだ。文庫本を持っていた。それは。

「この本。あつたからよかった」

「舞姫。そうだね」

「うん。赤瀬は何買ったの」

「僕はこれ」

彼もまた文庫本だった。それは。

「石川淳にしたよ」

「通ね」

「通かな、これって」

「そう、石川淳は中々いい」

こつ赤瀬の手の中にある本を見て話す。

「太宰と同じ流れの作家だけれどまた違うし」

「ああ、新戯作派だね」

無頼派とも呼ばれる。終戦直後の作家でそこに分類されるのは他に織田作之助や坂口安吾がいる。既存の観念を否定し自分達の道を進んでいた作家たちと言うべきか。

「破滅しなかつたし」

「人生をまっとうできたんだ」

「そう。そこが大きな違い」

「太宰は自殺してるしね」

「他の作家も終わりはよくなかつた」

その新戯作派の作家達はこのだ。織田作之助は結核を患いヒロポンを打ちながら必死に書いていき遂に倒れた。坂口安吾もまた麻薬に溺れながら書き急死している。

第三十五話 プラネタリウムその十

「その中で本当に数少なく」

「終わりまでまっとうできたから」

「違いがそういうところからも出ているんだね」

「そう」

その通りだというのである。

「作風もまた違ってる」

「確かにね。太宰は」

赤瀬も太宰は知っていた。何作も読んできているのだ。

「独特の作風だからね」

「わかりやすい」

「うん。それと比べたら石川は」

どうかというのである。

「やっぱりね。違うね」

「そう。同じ新戯作派といっても」

同じ派閥の作家と言ってもだというのだった。

「そこが違う」

「そうだね、全然違うね」

「そうしたところを読むのもまた楽しい」

それもまた文学の楽しみ方だというのである。

「だから」

「うん、これからそういうところも読んでいくよ」

赤瀬もまた椎名のその言葉に頷く。

「今からね」

「そうして。それで」

椎名はここまで話したところで話題を変えてきた。

「次は屋上」

「プラネタリウムだね」

「そこに行こう。そこは」

「お星様を見るところだね」

「そう。そして」

そこが彼女にとってどういふところなのかもだ。椎名は赤瀬に話した。

「そこに一緒に行くのは赤瀬で二人目」

「僕でなんだ」

「最初はつきぴー」

月美だった。彼女がそうだというのだ。

「それで二人目。私の大事な人と」

「一緒に行く場所なのかな」

「それがそこ」

こう赤瀬に話すのである。

「プラネタリウム」

「そんな場所だったんだね」

「そこに行こう」

その大切な場所にだ。赤瀬を誘うのだった。

「そうしよう」

「うん、それじゃあね」

こうしてであった。二人もまたそのプラネタリウムに向かうのだった。その時陽太郎と月美は。彼等もまた二人の時間を楽しんでいた。

二人は今月美の家にいた。そこでだった。

陽太郎は月美の作ったお菓子を食べていた。それは。

「いいなあ、このお菓子」

「美味しいですか？」

「うん、かなり美味しいよ」

実際にそうだと話す陽太郎だった。

「っていかさ」

「っていかさ？」

「月美って料理の才能あるよな」

そのお菓子は見事なオレンジのケーキである。オレンジと生クリーム双方の味わいを楽しみながらだ。陽太郎は月美に話すのであった。

「凄くさ」

「い、いえ私はそんな」

「だって美味いから」

「美味しいからですか」

「美味しいものを作られる人ってさ」

そのこと自体がどうかというのである。

「そのまま。料理の才能があるってことじゃないか」

「そうなりますか？」

「なるって。じゃあ聞くけれどさ」

「はい」

「まずいもの作る人って料理の才能あるって言える？」

かなり率直にだ。こう月美に問うた。

「そういう人って。月美はどう思うんだよ」

「やっぱりそれは」

そう問われると返答は僅かしかなかった。それでだ。

月美はその返答を選んだ。まさにそれしかなかった。

「やっぱり」

「だろ？そういうことだよ」

陽太郎はケーキを食べ続けながら話す。オレンジの甘酸っぱさと生クリームの優しい甘さがだ。絶妙のハーモニーを醸し出している。

第三十五話 プラネタリウムその十一

「だから月美は料理の才能あるって」

「それでなんですか」

「そうだよ。何度も言うけれどさ」

相変わらず食べながらだ。そのうえでの言葉だった。

「月美料理の才能あるって」

「そうですか。私が」

「うん、あるよ」

陽太郎はまた言った。

「滅茶苦茶美味しいから、このケーキ」

「そんなにですか」

「月美も食べてみなよ」

ケーキは陽太郎のところだけにだけあるのではなかった。ちゃんと月美のところにもある。ただ彼女はまだ手をつけていないのだ。それだけだ。

「自分のそのケーキか」

「そうですね。それじゃあ」

「絶対に美味しいから」

陽太郎は笑顔で月美に話す。

「もう絶対にさ。食べたらわかるよ」

「はい、それじゃあ」

陽太郎のその言葉に頷いてだった。実際に食べてみた。すると。一口食べてからだ。月美はこう言ったのだった。

「はい、確かに」

「美味しいだろ？自分の作ったこのケーキ」

「そうですね。とても」

食べてみればわかることだった。自分の舌に嘘はつけなかった。美味しいです」

「そうだよ、このケーキ美味しいよ」

陽太郎はとにかくこのことを言う。

「月美の作ったケーキってさ」

「自分でもこんなに上手くできるとは思いませんでした」

「だからあれだって」

その月美にまた話す。

「月美料理の才能あるんだって」

「だったらいいんですけれど」

「あるって。それでさ」

「はい。それで？」

「このケーキもいいけれど」

ケーキと一緒に置いてある白いカップの中のコーヒーを見ながらだ。また話すのだった。

「このコーヒーは何かな。これも凄く美味いけれど」

「あっ、そのコーヒーは」

「このコーヒーは？」

「キリマンジャロです」

それだというのである。

「お父さんが好きなんです。それで」

「家にあつたのをなんだ」

「自分で淹れてみました」

「コーヒーもだというのだ。」

「そうしました」

「凝ってるよなあ」

「そうですか？」

「いや、俺の家じゃさ」

陽太郎がここで話に出したのは自分の家のことだった。

「コーヒーなんてあれだよ」

「インスタントですか？」

「それで紅茶はティーパックで」

紅茶についても話すのだった。それだとだ。

「そんな簡単なだから」

「うちも紅茶は同じですよ」

ティーパックだというのだ。

「それは」

「けれどあれだよな。普通にスーパーとかで売ってるのじゃないよな」

「まあそれは」

そう言われるとだ。否定しない月美だった。

「輸入したのを買ってます」

「何処から？」

「イギリスのものを」

紅茶の本場である。やはり紅茶といえばイギリスであった。

「それをです」

「だろ？ やっぱりそこが違うんだよ」

「陽太郎君の家とですか」

「凄いやな、そういうところに違いって出るんだよな」

陽太郎は素直にだ。月美の家のそうした豊かさを賞賛していた。

「俺の家ってそういうのがないからなあ」

「あの、けれど」

「けれど？」

「陽太郎君今ひがんだり羨んだりしていますか？」

月美はその温和な顔に咎めるものを含めて言ってきた。

「それは」

「ああ、それはないよ」

「ないですか」

「俺あまりそうした感情はないから」

ひがみや嫉妬はというのだ。実際に彼はそうした感情はなかった。嫉妬深くないというのは。彼の美德の一つとも言ってもいい。

「だからただ凄いつて思うだけで」

「それだけですな」

「具体的には美味いって思うだけだよ」

「それだと何よりです」

月美は陽太郎のその言葉を受けてほっとした笑顔になるのだった。

「陽太郎君がそうした感情を持つていなくて」

「そういうことは安心しておいていいから」

「はい、それじゃあ」

「このケーキだけじゃなくてコーヒーもな」

「よかつたら紅茶もどうぞ」

「いや、それはいいよ」

紅茶の申し出は笑顔でやんわりと断った。

「両方はさ」

「それはいいですか」

「うん、どつちかだけでいいよ」

こうした欲を張ることもない彼だった。

「だからね」

「はい、それじゃあ」

「コーヒー。後でもう一杯貰えるかな」

彼が言うのはこのことだった。

「それいいかな」

「はい、どうぞ」

月美は陽太郎のその申し出を笑顔で受けた。

「その時は御願いますね」

「それじゃあ。飲み終えてから」

「私ももう一杯」

「コーヒー好きなんだ」

「どちらかという紅茶ですけれど」

それでもだというのである。月美はコーヒーも好きだったのである。

「やっぱり。紅茶も」

「そうか。それじゃあ後で二人で」

「もう一杯ですね」

にこりと笑って陽太郎に答える。そうしてなのだった。

二人は笑顔で二人の時間を過ごしていた。そうしてその仲をさらに進展させていた。二人の絆はもう誰にも邪魔できないものになっていた。

第三十五話

完

2010・12・31

第三十六話 思わぬ出会いその一

第三十六話 思わぬ出会い

狭山と津島はだ。適当な時間を過ごしていた。

もう誰もいなくなつた晩秋、いや冬に入った海辺を二人で歩いていた。

海も空も夏の爽やかさはない。何処か沈んでいて鉛色のものを見せていた。二人はそこをだ。冬服で歩きながら話をしていた。

「なあ」

「何よ」

「どっか別の場所行かないか？」

狭山はこう津島に提案するのだった。

「ここ何かな」

「いても面白くないのね」

「何も無いしな」

それでだというのである。

「だから。何処が行かないな？」

「行くのはいいけれど」

津島の返答は条件付賛成といったものだった。実際にそれが顔に出た。完全とは言えない晴れやかさをそこに見せていた。

「それでもね」

「行く場所が見当たらないか」

「そうなのよ。今一つね」

津島はそうだというのだった。

「それで何処行くのよ」

「ファミレスなんてどうだよ」

狭山が提案するのはそこだった。

「ほら、ここから近くなの」

「ああ、あそこね」

「あそこ今食べ放題やってんだよ」

狭山の顔がここで明るいものになった。食べ放題ということを目分の口で言うと自然とそうなったのである。

「だからそれでさ。どうだよ」

「そうね。それじゃあね」

津島もだ。その顔が明るくなっていた。

「行きましよう。それでだけれど」

「ああ、それで？」

「何の食べ放題なの？」

津島が問うのはこのことだった。

「ケーキ？それとも別の？」

「パスタらしいぜ」

狭山はそれだというのである。

「それだつてさ」

「パスタね」

「パスタ好きだろ」

「ええ、好きよ」

それはその通りだと答える津島だった。

「スパゲティもマカロニもね。ラザニアも」

「じゃあ丁度いいよな」

「ただし。味には五月蠅いわよ」

思わせぶりな笑みになってだ。狭山に告げた。

「それはね。かなりね」

「それは知ってるさ」

「ああ、やっぱり」

「御前昔から味には五月蠅いだからな」

その辺りは付き合いの長さで深さ故に知っていることだった。

「全くよお」

「何よ、じゃあまずいの？そのお店」

「まずい店を紹介する奴がいるかよ」

「意地悪でそういうことする奴はいるでしょ」

「そいつ相当性格悪いな」

狭山はその話を聞いてすぐにこう返した。

「っていうかそんな奴いるのかよ」

「いることはいらみたいよ」

「世の中つてのは色々な奴がいるんだな」

「下には下がいるのよ」

確かにその通りであった。人間にしても世の中のあるものにして上には上がある。だがそれと同時に下には下がいるものなのだ。

「だからよ」

「下には下がかよ」

「性格もね。人間の屑よりまだ酷いのがいるから」

「屑以下かよ」

「まあ生まれること自体が間違いだったような奴ね」

「ああ。あの前の官房長官か」

そう言われるとだった。狭山はすぐにこの単語を出したのだった。

第三十六話 思わぬ出会いその二

「ああいう奴か」

「そうね。あいつね」

まさにそれがその官房長官だというのだ。

「あいつはその域に達してるわね」

「屑以下かよ」

「そう、ああいう奴だっているし」

「じゃあそういう奴もかよ」

「いるわよ、中にはね」

「流石にそういうことする奴は知らないな」

「じゃあだけれど」

そんな狭山の話聞いてだ。津島はそのファミレスについて察したのだった。確かにだ。

「そのお店は美味しいのね、パスタ」

「俺も食うんだぞ」

狭山が今度言う根拠はこれだった。

「だから美味いに決まってるだろ」

「そうよね、そう言われるとね」

「納得できるだろ」

「よくね。そう、美味しいの」

「パスタもいいしソースもいい」

その両方がだというのだ。

「あとオリーブもな」

「いいのをたつぷりとなのね」

「ああ、ガーリックもな」

大蒜もだというのだ。

「勿論チーズも唐辛子もいいのだぜ」

「ううん、聞いているだけで涎出そう」

「じゃあそこ行くよな」

「ええ、わかったわ」

津島はここで遂に頷いた。そうしてであった。

二人でそのまま海辺を去ってだ。ファミレスで向かった。そこは海辺の近くにある洒落た店だった。テラスで食べられるように外にも席がある。

店は白と黄色の清潔かつ明るい色彩の店である。店の中には緑の木々も多い。しかもそれは本物の緑の小さな木々であった。

その木々を見てだ。津島は満足そうに言うのだった。

「いいわね、これ」

「店の内装気に入ったみたいだな」

「この木がいいわね」

実際にその木をだ。今も見ながら狭山に話すのだった。

「洒落ててね」

「海辺の店って感じですか？」

「そう、だからね」

それだけだというのだ。

「まあどれも夏の木だけけどね」

「その季節がシーズンの店だからな」

「それは仕方ないけれどね」

「けれどまあ、いいわ」

いいという津島だった。

「冬に夏のお店の入るのもね」

「それもいいんだな」

「ええ、じゃあそこ座りましょう」

「ああ、ここな」

「そう、そこね」

座ったのは傍にあつた四人用の席だ。ファミレスらしく席はそのまま壁と一緒になっている。その四人用の席に二人で座るのだった。そして座ってからだ。お店の人が来た。黒と白のメイド服であつ

た。

「いらつしやいませ、御主人様」

「これ、狙ってるでしょ」

狭山はそのお店の人を見てすぐにこう言った。

「メイドさんよね、絶対に」

「そんなの見ればわかるだろ」

「あんたこういう趣味があつたの」

津島の狭山への目が冷たいものになる。

「コスプレの」

「ああ、そういうのはないけれどな」

「嘘でしょ、それって」

「だから嘘じゃないよ。今日たまたまなんだよ」

「本当に？」

「入り口に書いてただろ。今日は Pasta 食べ放題でしかもメイドフ

エスタだつてな」

「色々やる店なのね」

津島は実はこのことには感心していた。商売人の娘らしくだ。

「努力してるわね」

「味も努力してるからな」

「そう。それじゃあその努力をね」

「たっぷり味わえ」

「ええ。じゃあ Pasta 食べ放題二人です」

津島はそのお店の人にはこう礼儀正しく述べた。

第三十六話 思わぬ出会いその三

「宜しく御願います」

「はい、お一人様消費税抜きで千円ですな」

「あつ、千円ですか」

「はい、消費税抜きで」

こう話すお店の人だった。見れば女子大生位の背の高いすらりとした美人だ。カチューシャから見える黒のロングヘアが眩しい。

「それだけです」

「わかりました」

「それと」

お店の人は津島にさらに言ってきた。

「プラス五百円で」

「五百円で？」

「フリードリンクになります」

そのサービスもつくというのである。

「どうされますか？」

「あんたはどうするの？」

津島はここではまず狭山の意見を問うた。

「それで」

「そうだな。ここはやっぱりな」

「フリードリンクもなのね」

「金はあるしな」

一番重要な問題はクリアーされた。まずは何につけてもこれだった。

「俺はいけるぜ」

「お金は私もあるわよ」

津島もだというのだった。

「そっちはね」

「じゃあいけるか」

「そうね。じゃあそっちも二人でね」

「ああ、決まりだな」

こうしてだった。二人は飲み放題も注文するのだった。そのうえでパスタを楽しむ。そしてパスタといえば一緒に飲むものとはという
とだ。

「ワインも美味しいわね」

「そうだろ？ここってドリンクもいいんだよ」

狭山はそのワインをグラスに入れながら飲んでいく。デキャンタに赤ワインが入っている。二人でそのデキャンタからそれぞれのグラスに注いでいるのだ。

そして狭山はペンネアラビータを、津島はミートソースを食べ
ている。まずはそれであった。

「ワインだつてな」

「いいわね。食べるだけじゃなくね」

「飲める店でもあるんだよ」

「合格ね」

津島は満足した顔で言い切った。

「このお店は」

「合格か」

「そう、合格」

ここでワインをぐびぐびと飲む津島だった。そうして言うのだ
た。

「これって甲州ワインでしょ」

「ああ、そっちのワインなんだ」

「あんたそういうのはわからないの」

「俺どつちかっていうとビール派だからな」

狭山はそちらの方がだというのだ。

「ワインはな」

「わからないのね」

「そんな産地が何処かまではわからねえよ」
「じゃあ私ができるってことは」
「御前その甲州ワイン随分飲んでるだろ」
「うちの家はワイン派なのよ」
「ここで自分の家の事情を話す津島だった。」
「お酒はそつちだから」
「それでか」
「そうよ。特に甲州ワインはよく飲むわね」
「成程な」
「これは甲州ワインね」
「また言う津島だった。」
「どんどん飲めるわ」
「じゃあもう一回持って来るか」
「そうしましょう。それとね」
「ああ、それと？」
「パスタもね」
見ればだ。二人共それまでパスタが入っていた皿を空にしてしまっていた。二人共食欲もまた健在だった。そちらもであった。
「お代わりしましょう」
「だよな。俺今度は」
「何にするの？」
「スパゲティにするな」
ペンネの次はそれだというのである。
「問題は何にするかだけだね」
「イカ墨なんてどう？」
「それか」
「そう、あれは美味しいわよ」
それでだというのだ。二人の皿は今はトマトの赤だけが残っている。

第三十六話 思わぬ出会いその四

「だからそれにしたら？」

「そうだな。それじゃあな」

「私は何にしようかしら」

津島は狭山にイカ墨を勧めてから自分のことを考えた。少し腕を組んでだ。そうして言うのだった。

「そうね。フエットチーネで」

「ああ、あの幅の広いやつだよな」

「そうそう、それぞれ」

まさにそれだというのである。

「それをそうね」

「ソースはどうするんだよ」

「あっさりとペペロンチーノにするわ」

今度はそれにすると。津島は決めた。

「それじゃあね」

「よし、じゃあそれで決まりだな」

「また食べましょう」

「ワインも持つて来てな」

そんな話をしてからだだった。二人で楽しんでいた。するとだ。少し離れたにだ。ある面々が来た。それは。

「あれっ、あの連中」

「そうよね、四組のね」

「あの賑やかな三人組だよな」

「間違いないわね」

二人はパスタを口に出したまま話し合う。無論食べながらだ。

「あの連中もこの店知ってたんだな」

「やっぱり食べ放題飲み放題かしら」

「そうじゃないのか？」

「こつ津島に返す狭山だった。

「だからここに来たんだろ」

「やっぱりそうなのかしら」

「多分そうだろ」

「また言う狭山だった。」

「今それで人気だしな」

「成程ね。そういうことね」

「まあ誰が来てもおかしくないだろ」

「こつ答える狭山だった。」

「それじゃあな」

「うん、私達は私達でね」

「飲んで食うか」

「どんどんね」

「こつ話して自分達のことに戻るのだった。とにかく飲み食いしていく。」

「その仲でだ。三人はだ。」

「狭山達と同じ飲み放題食べ放題を注文してからだ。そのパスタとワインを飲んで食べながら話をしていくのだった。そうしてであった。」

「座っている席は狭山達の席と全く同だ。だが話している内容は違っていた。」

「星華ちゃん立ち直れそうね」

「そうね」

「やっとな」

「彼女のことをだ。心配しながら話すのだった。」

「何とかね」

「それで今日はバスケット部の先輩と一緒にだったわね」

「そうよ」

「橋口がこつ二人に話した。」

「それで百貨店に言ってるの」

「いいんじゃない？それって」

「私もそう思うわ」

野上と州脇も彼女のその言葉にこう返した。

「そうして色々な場所に頼りになる人と行くのもね」

「いいことだしね」

「そうね、やっぱりね」

橋口も二人の言葉を受けて笑顔で言った。三人は赤ワインを飲みながらラザニアをスプーンで食べている。三人はまずはそこからだった。

そうしてであった。さらにであった。

「私達だけじゃね」

「何かお付き合いが限られてくるし」

「それなら」

こう話して行ってであった。

「星華ちゃんにとってもね」

「そうよね」

「先輩とそうして何処かに行くのも」

「私達以外といるのも」

「いいのね」

「そういうことね」

こうだ。三人で話していく。そして今度は州脇が言った。

「ねえ」

「何、今度は」

「何かあるの？」

「うん、私ふと思ったんだけどね」

こうだ。州脇は他の二人に対して話すのだった。

第三十六話 思わぬ出会いその五

「星華ちゃん私達といつも一緒にいたじゃない」

「ええ、クラスじゃずっとね」

「そうだったわよね」

「そうなの。それはね」

また話す州脇だった。

「星華ちゃんにとってよくなかったんじゃないかしら」

「よくなかったのかしら」

「やっぱり」

「そうじゃないかしら」

州脇はだ。眉を顰めさせてこう二人に話した。見ればだ。二人もまた彼女と同じ表情になっている。その顔で話をしているのだった。

「私達、星華ちゃんがああなるのに何かした？」

「それは」

「いい方には」

「そうよね」

州脇はだ。俯いた二人にまた話した。

「してこなかったわよね」

「ええ、むしろよくない方に煽って」

「そういうことばかりしてたわ」

「それでああなっちゃったのよ」

州脇は俯いてだ。こう言ったのだった。

「西堀に酷いことして」

「私達も極力してたし」

「それに」

「大事にならなかったのは」

州脇は。このことも反省していた。

「あのチビがいたからじゃない」

「そうね。その通りね」

「あのチビがいなかったら」

椎名のことばだ。野上が特に話した。

「私達とんでもないことしてたわね」

「いくところまでやってたわよね」

「実際にやろうとしてたし」

全て椎名が事前に、彼女達に気付かれないうちに止めていたからだ。そのことがだ。結果として彼女達を助けることにもなっていたのだった。

「それがあつたから」

「私達はね」

「そうよね」

「私達、酷いよね」

三人はそれぞれこの言葉を出した。

「友達だつていうのに煽つてばかりで」

「星華ちゃんを碌でもない方にやっちゃって」

「ああしたんだから」

「それで友達なのかしら」

今言つたのは橋口である。

「よくないことばかり勧めて悪いことには自分達も乗ってって」

「違つと思つ」

「私も」

橋口と州脇はすぐにこう返した。

「そんなのやつぱり」

「友達じゃない」

「そうよね」

二人の言葉を聞いてだ。橋口も頷くのだった。

「私達つてやつぱり」

「友達じゃなかったのよ」

「本当の意味での」

食べるのも飲むのも止めてだ。口々に言つのだった。

「それで星華ちゃんをああして」

「あんなことにまで追いやって」

「最低よね」

この言葉もだ。出されたのだった。そしてだ。野上が言った。

「これからどうしよう」

「これから？」

「これからのこと？」

「そう、どうする？」

こうだ。他の二人に問うのだった。

「これからね」

「どうしたらいいのかしら」

「それは」

二人はだ。返答できなかった。三人共完全に俯いてしまっていた。

「あんなこととしてきて」

「それでこれから」

「どうすれば」

「けれどよ」

州脇だった。今度は。

「私達星華ちゃん好きだし」

「いい娘よね」

「そうよね」

このことを確認し合った。

第三十六話 思わぬ出会いその六

「とても。離れるとかできないし」

「離れたくないし」

「一緒にいたい」

彼女達にそう思わせる。星華は人間として魅力があるのは確かだった。それは彼女達も否定できない、確かなものなのであった。

「けれど、こんな私達が一緒にいたら」

「星華ちゃんにやっぱり」

「迷惑がかかるんじゃない」

こうそれぞれ思うのだった。しかしであった。

ふとそこにだ。誰かが来た。それは。

「あの、いいですか？」

「えっ、星子ちゃん!？」

「どうしてここに?」

「何でいるの?」

星子だった。中学校の制服姿の彼女が三人の前に現れたのだ。そうしてそのうえで彼女達に声をかけてきたのである。

「このお店に」

「どうして」

「ちよっと。塾の前に」

「こう話す星子だった。」

「寄ったんです。お茶を飲み」

「ああ、そうだったの」

「それでだったの」

「はい、そうなんです」

こうだ。三人に笑顔で話すのだった。

「それで今入ったんですけれど」

「じゃあまだ席決まってないの」

「そうなんだ」

「それじゃあ」

それを受けてだった。三人はだ。

「同席どう？」

「よかつたらだけれど」

「あつ、いいんですか」

「お酒はまずいけれどね」

「塾に行くのよね」

それは駄目だというのであった。しかしだった。

「それでも。どう？」

「晩御飯は食べた？」

「そっちは」

「お家に帰ってから食べます」

それはだというのだった。

「塾はちよつと進路の紙を出しに行くだけですし」

「よく考えたら今日日曜だったわね」

「そうだったわね」

三人はここでこのことを思い出した。話にかかりつきりてついつい曜日を忘れてしまっていたのである。それでなのだった。

「じゃあそれだけだったら」

「お酒はいい？」

「いや、やっぱりそれはまずいでしょ」

八条町は未成年であつても結構おおつぴらに酒が飲める。しかしそれでもだ。橋口が他の二人を止めてこつ言つのであった。

「塾に行くのよ」

「そうよね。少しでも」

「それだったら」

「そうよ。それはまずいわ」

これで酒は結局駄目になった。そしてであった。

星子自身もだ。こつ言つのであった。

「私晩御飯はお家で食べますから」

「じゃあ一杯だけなのね」

「紅茶かコーヒーを」

「はい、そうさせてもらいます」

三人にもこう話すのだった。

「それじゃあ」

「まあ席は一緒にね」

「一緒に席に座りましょう」

「それじゃあね」

こうしてであった。星子は三人と一緒に座ってだ。コーヒーを頼んでからだ。こう彼女達に言うのであった。

「それにしてもですね」

「それにしても？」

「っていうと？」

「どうかしたの？」

「いえ、先輩達お姉といつも一緒にいてくれますよね」
三人に対しての言葉だった。

第三十六話 思わぬ出会いその七

「有り難うございます」

「えっ、有り難うって」

「って私達に言ってるのよね」

「その言葉って」

「はい、そうですね」

その通りだ。また三人に話すのだった。

「それが何か」

「私達別に有り難うって言われることは」

「そうよね、そんなこと」

「全然してないし」

先程の三人の話を自分達で思い出してだ。そのうえでの言葉だった。

「むしろ星華ちゃんにいいこと全然してないし」

「碌なことしてないし」

「そんな有り難うって言葉は」

「お姉いつも言ってるんですよ」

しかしだった。星子は笑顔でこうその三人に言うのだった。三人の顔は星子とは正反対に沈んだものになっていた。まさに対称であった。

「先輩達がいてくれてて」

「私達がいて」

「どうなの？」

「凄く助かってるって」

そう言っているというのである。

「明るくなれるって」

「明るくなって」

「私達そんな」

「迷惑ばかりかけてるのに」
「お姉あれで寂しがりなんです」
「しかしだった。またこんなことを話す星子だった。周りに誰かがいつもいてくれないと駄目なんです」
「そうだったの？」
「星華ちゃんしっかりしてるし」
「そんな風には見えないけれど」
三人はだ。星華をリーダー役と見ていた。それでこう星子に返すのだった。
「いつも私達を引つ張ってくれてるし」
「むしろ私達の方がね」
「そうよね」
「ですから。お姉はいつも傍に誰かいないと駄目なんです」
「そうだとだ。また話す星子だった。」
「どうしようもなくなるんです」
「じゃあ私達がいるから？」
「いつも明るくなれるの？」
「あの星華ちゃんです。それでなんです」
「そうですね。それでなんです」
「やはりであった。星子はこう話していく。コーヒーを飲みながら。お姉も。先輩達がいてくれて明るくなれるんですよ。それに」
「それに？」
「それについていうと？」
「先輩達とはずっと一緒にいたいって」
笑顔で三人に話すのは変わらなかった。三人とその表情が対象的なものだ。
「友達でいたいって」
「星華ちゃんがそう言ってるのね」
「そうなのね」
「けれど」

それでもだ。三人はまだ言うのだった。

「私達は」

「そんな、とても」

「いたらそれだけで」

「だからそうじゃないですから」

星子はまた三人のその言葉を否定することになった。

「本当ですよ？お姉先輩達頼りにしてるんですよ」

「私達支えになってるの？」

「つまりは」

「そうなの」

「そうなんです。ですからですね」

そしてだった。こう三人に言うのだった。

「よかつたらずっと。お姉と一緒にいて下さい」

「けれど。悪いことを勧めたり」

「そんなことしてきたし」

「だから」

「それはこれから気をつけなければいいじゃないですか」

これが星子の言葉だった。

「これからですよ」

「これから？」

「これからの」

「はい、これからです」

また言う星子であった。

「やっぱり。あのことは気になりますよね」

「ええ、やっぱり」

「それはね」

「どうしても」

その通りだとだ。認める三人だった。

「あんなことして」

「星華ちゃんを困らせて」

「やっぱり」

「それ、わかります」

星子はここでは真剣な顔になっていた。そのうえでの言葉だった。

第三十六話 思わぬ出会いその八

「けれど」

「それでもなのね」

「これからのね」

「これから。星華ちゃんを」

「本当に御願います」

星子の言葉には切実なものさえ宿っていた。

「お姉、先輩達のこと大好きですし」

「大好きって」

「私達を」

「そうしてくれてるの」

「そうです。頼りにもしてますし」

またこつも話すのだった。

「御願います」

「じゃあ」

「私達に何ができるかわからないけれど」

「それなら」

そこまで切実に言われるとであった。三人もであった。

真剣な顔になってだ。そのうえで言うのであった。

「一緒にいさせてもらおうわ」

「迷惑にならないようにするから」

「せめて。そんな風には」

ならないようにするとうのうだ。反省が三人をそう言わせていた。

それであった。三人も決めたのだった。

「わかったから」

「ずっとね。星華ちゃんね」

「そうさせてもらおうわ」

「有り難うございます」

三人のその言葉を受けてだった。星子も笑顔で応えた。そうしてだった。あらためて三人に言うのであった。

「じゃあ私は」

「あつ、もう行くのね」

「塾によね」

「今から」

「はい、そうです」

まさにその通りだった。塾に行く時間が来たのだ。丁度ここでコ
ーヒーも飲み終わっていた。本当に絶交のタイミングであった。

「それじゃあこれで」

「ええ、またね」

「またお家に行くから」

「その時はね」

「楽しくですね」

にこりと笑ってだ。そのうえで席を立ってだ。彼女は塾に向かうのだった。

残された三人はだ。何時の間にか晴れやかな顔になっていた。そうしてその晴れやかになった顔でだ。お互いに見合って話をした。

「それじゃあね」

「ええ」

「あらためて」

「こう言い合い。」

「食べよう」

「そして飲もう」

「そうしよう」

そう言い合いだった。実際に本格的に飲み食いをはじめのだった。た。

そしてそのうえでだ。こつも話すのだった。

「たっぷり飲んで食べてね」

「英気を養ってね」

「それでね」

「星華ちゃんと楽しくやろつね」

「四人になってそれで」

「ずつとね」

こうしてであった。これからのこと、星華とのことを誓い合つたのだ。今の三人のこれはそうした誓いの飲み食いであったのである。

そんな三人はだ。ちらりと狭山に見られていた。

彼は今はスパゲティミートソースを食べていた。食べながらだ。

津島に言うのだった。

「なあ」

「どうしたの？」

同じくミートソースを食べている津島が彼に返した。

「何かあつたの？」

「何かあの三人な」

彼女達を見ながらだ。話すのだった。

「急に飲み食いが凄くなつたな」

「そうなの」

「それまであまり進んでなかつたつばいにな」

何を話していたのかは彼は知らない。しかしそれはわかつたのだ。つた。

第三十六話 思わぬ出会いその九

「それでもな」

「飲んで食べはじめてるのね」

「どうしたんだらうな」

「さあ。ただ」

「ただ？」

「そうなることがあったんでしょ」

津島も三人をちらりと見た。そのうえでの言葉だった。

「やっぱり」

「何か吹っ切れた感じだな」

「だったらそれでいいじゃない」

「いいか」

「どうしようもない悪い奴でない限り」

津島は言った。少なくとも三人はだ。そこまで悪い人間ではないということだ。津島も実際に話したことはないが感じ取っていた。

「元気に飲み食いできるのはね」

「いいか」

「そうよ。だからいいじゃない」

こう狭山に話すのだった。

「やっぱりね」

「それもそうか」

「そうよ。だからね」

「だから？」

「お代わりしよう」

あっさりとした。そのミートソースを食べ終えたのだった。狭山もそれと同時にであった。

「次は何食べる？」

「ラザニアいくか」

「それね」

「ああ、それどうだよ」

ワインを一杯自分のグラスに注ぎ込んで一気に飲み干してから問うた。

「それでな」

「いいわね。じゃあ次はラザニアね」

「それ二つだよな」

「そう、何かどんどん食べられるわね」

「美味いだろ」

「やっぱりこのお店もあれよね」

「ここでこんなことを言う津島だった。」

「八条グループのお店よね」

「ああ、そうだよ」

その通りだと返す狭山だった。

「その系列のファミリーストランだよ」

「やっぱりね。そんな気がしたわ」

「味が安定してていいよな」

「素材もしっかりしてるしな」

「じゃその素材がしっかりしたラザニアな」

狭山はそちらに話を戻した。料理にだ。

「それ二つな。頼もうか」

「ワインも減ってきたわね。じゃあそつちもね」

「ああ、じゃんじゃんいこうぜ」

こう話してだった。二人は笑顔で話していくのだった。彼等は何も知らなかったがそれでも喜んでいた。三人の笑顔を見てだ。

星華は先輩と共にプラネタリウムに入った。そこは円形のドームであった。

中はまだ白い。証明で照らされた天井は幕になっている。

その幕を見上げながらだ。星華は先輩に話すのだった。

「あの」

「まだはじまっていけないわね」
「そうですね。けれど」
「けれど。どうしたの？」
「ここで出て来る星座ってどんなのでしょうか」
「彼女がここで言うのはこのことだった。」
「一体」
「色々よ」
「色々ですか」
「そうよ、色々よ」
「そっだというのである。」
「色々な星座が出て来るから」
「秋や冬だけじゃないんですね」
「そこが本当の夜空とは違うのよ」
「先輩は星華に笑顔を向けながらこう話すのだった。」
「そこがね」
「違うんですか」
「だって。本当の夜空と同じだったら意味がないじゃない」
「そうですね。プラネタリウムですから」
「春も夏もね」
「どちらもだというのである。四季の全てがだ。」
「出るから」
「そうなんですか。四季がですか」
「見られるから。楽しみにしておいて」
「わかりました」
星華は先輩のその言葉に素直に頷いた。そのうえでだ。

第三十六話 思わぬ出会いその十

先輩の横に座った。二人一緒にであった。そのまま開演を待つのだった。

そしてだ。ここにだ。この二人も来たのであった。

「そろそろね」

「そうだね。もうすぐだね」

赤瀬は携帯で時間を見ながら椎名に話した。この二人であったのだ。

「開演はね」

「うん、じゃあ」

「中に入ろう」

赤瀬からの言葉だった。

「それじゃあね」

「うん。ここは」

「ここは？」

「十二月全部の夜空が見られるから」

「つまり全部の星座がだね」

「そう。日本の空以外も見られるから」

「それは凄いね」

赤瀬はそれを聞いて素直に驚いた。二人の前にはそのドームがある。ドームは外観も白い。今は何から何まで白い場所であった。

「じゃあそこで」

「星を見よう」

今度は椎名からの言葉だった。

「今から」

「うん」

こうしてだった。二人も中に入った。そしてそこで。

「ちよっと御免」

「おトイレ？」

「急に行きたくなつたから」

赤瀬はここで椎名にこう言うのだった。

「ちよつと席を外すね」

「わかつた。じゃあ先に中に行つてる」

「そういうことだね」

こうしてだつた。赤瀬は一旦トイレに向かつた。椎名はまずは一人で中に入った。彼女はそこでだ。思わぬ相手と顔を合わせてしまった。

「えっ……」

「いたの」

星華だつた。星華は彼女の顔を見て驚きの顔になつた。

しかし椎名はだ。表情を変えずにこう返してきたのだった。

「ここに」

「え、ええ」

戸惑つた様子でだ。椎名に言葉を返すのだった。

「ちよつと。部活の先輩と」

「そうだつたの」

「そうなの」

「こうだ。気まずい声で答えるのだった。

「実は」

「わかつた」

椎名は星華の言葉を受けて静かに頷いた。

「そのことは」

「わかつたつて」

「宜しく」

椎名からだつた。

「ここでは宜しく」

「宜しくつて」

そう言われてだ。星華は呆然となつた。そのうえで彼女に問い返

した。

「あの、私その」

「もう二度としないから」

月美のことはだ。これで済ませるのだった。

「だからいい」

「それでいいの？けれど」

「過去は何度でもどれだけ言える」

「何度でも」

「そう、どれだけでも」

また星華に告げるのだった。

「けれど過去にこだわっていたら一步も前に進めない」

「前に」

「誰でも前に進まないといけない」

星華に告げる言葉はこれであった。

「だから。もういい」

「そう言ってくれるの」

「それでここに来た理由は」

「理由って？」

「理由があるから来る」

これが椎名の言葉だった。

「何でも」

「それはそうだけれど」

「私はデートで来た」

椎名は正直に述べた。

「そう、二人で」

「あんだ、彼氏いたの」

「いる」

過去形ではなく現在形だというのだ。

第三十六話 思わぬ出会いその十一

「そう、いる」

また言う彼女だった。

「ちゃんと一人」

「二人も三人もつてのじゃないのね」

「彼氏は一人いるから彼氏」

椎名は真面目にだ。星華に話すのだった。

「二人も三人もいたらそれは駄目よ」

「そりゃそうよ。そんなの絶対に駄目よ」

星華もそれは駄目だと目で言いながら言葉にも出す。

「浮気とかそんなの。許されることじゃないわ」

「そつちもそう考えてるのね」

「当たり前でしょ。私だってそんなのは嫌いだから」

「ならいい」

椎名ははじめて星華に微笑んでみせた。

「名前。確か」

「佐藤よ」

星華は名字から名乗った。

「佐藤星華。言ったことなかったかしら」

「忘れてたから」

それは忘れてしまったというのだ。実は知っていたがだ。あえて星華自身からその名前を聞いたかったのだ。そして実際にそうしたので。

「それでだから」

「そうなの。けれどこれでよね」

「うん、覚えた」

その通りだと返す。

「佐藤ね」

「まあ名字でも名前でもどっちでもいいけれど」

「とりあえず名字で呼ばせてもらおうから」

「そっちなよね」

「そう。じゃあ佐藤」

星華をこう呼んでみせてだった。

「今から」

「お星様見るのよね」

「そうしよう」

「こう彼女に話したのである。

「今から」

「うん、それじゃあね」

「あと。さっきの話だけれど」

「何？」

「ここに来た理由は何？」

椎名は星華にあらためてこのことを尋ねるのだった。

「どうしてなの、それは」

「ええと、私は」

「うん」

「先輩と一緒に来たの」

彼女もだ。素直に話した。自覚はないがそれでもだった。椎名に
対してはじめて素直に自分のことを話すことができたのである。

それに気付かなくともだ。彼女はそれを続けるのだった。

「シューズとか買って。それに」

「それに」

「楽しみに来たの」

「このことも素直に話すのだった。

「それでなの」

「そう、それだったの」

「そういうことなの。あんたとはまた理由が違うけれど」

「けれどそれもいい」

「いいの」

「うん、いい」

椎名もだった。星華にはじめて微笑むのだった。これもだった。彼女自身は気付いていなかった。だがそうしてしまっていたのだ。

「それで」

「そうなのね」

「そう、それで」

「それで？」

「ここでも楽しもう」

星華に対しての言葉だ。

「お星様を見ることを」

「そうね。それじゃあね」

「お星様好きよね」

「うん、名前がそれだし」

星華はだ。素直な微笑で椎名に答えた。いつも三人に向けるのと同じ微笑をだ。椎名に向けてそのうえで話をするのだった。

第三十六話 思わぬ出会いその十二

「実はね」

「お星様の名前ね」

「私、それだから」

「そういうことなのね」

「けれど今まではね」

少しだ。困ったような顔になっての言葉になっていた。

「お星様ってあまり見なかったわ」

「そうだったの」

「バスケばかりしてたから」

それでだというのだ。しかしここで星華は言った。

「けれど今はね」

「お星様見るのね」

「うん。そうする」

こう話すのだった。

「それじゃあ」

「ええ、じゃあね」

「ああ、そこにいたのね」

先輩がここで星華達のところに来た。

「クラスメイトかしら」

「あつ、隣のクラスの娘です」

「宜しく御願います」

椎名は先輩に対してぺこりと頭を下げた。

「少し縁がありました」

「それでこの娘と一緒にいてくれたの」

「はい」

その通りだと答えるのであった。

「そうです」

「そう。じゃあ宜しくね」

先輩は優しい笑みになって椎名に述べた。

「この娘。いい娘だからね」

「わかりました」

「じゃあ私ここじゃあそこにいるから」

少し離れた場所を指し示しての言葉だった。

「二人でいるといいわ」

「すみません、気を使ってもらって」

星華は先輩の今の心遣いを有り難く思わざるを得なかった。

「今は」

「お友達はね」

先輩はだ。申し訳なさそうな彼女に優しく言うのだった。

「大切にね」

「友達は、ですね」

「そうよ。その娘もよね」

「ええと」

「そうになりたいです」

星華が口ごもっているのだった。椎名がこう言うのだった。

「これから」

「そうなのね。これからのね」

「はい」

その通りだと。椎名はまた先輩に述べた。

「隣のクラスですけれど」

「じゃあ御願いね」

先輩は微笑んで椎名にも優しい声をかけた。

「私はあそこにいるから」

「はい、じゃあ」

こうしてだった。先輩は星華達に気を利かしてその場を後にした。

そして赤瀬もそこに来てすぐにだ。こう二人に言うのであった。

「僕はちよつとね」

「あの、別に」

「いいから」

星華に対して優しく言う彼だった。

「椎名さんがそう言っているし」

「言っていないじゃ」

「雰囲気でわかるんだ」

そうだというのだ。これが赤瀬の言葉だった。

「だからね」

「雰囲気？」

「そう、雰囲気」

また言う彼だった。

「椎名さんの雰囲気だね。わかるから」

「そうだよ、それじゃあね」

「有り難う」

椎名は離れた席に向かおうとする赤瀬にこう礼を述べた。

「そうしてくれて」

「いいよ。けれどね」

「うん。プラネタリウムから出たら」

「また二人」

そうだというのである。

「また二人でいよう」

「うん。けれどこの中だけはね」

「この二人でいたい」

星華をちらりと見てだ。そのうえでの言葉だった。

「だから」

「それじゃあね」

こうしてだった。赤瀬も彼女達を二人だけにした。そうして残った二人はだ。

お互いの顔を見た。星華の方が十センチ以上高いので彼女が見下ろす形になっている。その姿勢で星華の方から言ったのだった。

「じゃあ今からね」
「うん、お星様見よう」
「そうね。けれど」
「けれど？」
「わかってたけれど」
「こうだ。彼女を見下ろしながら言うのだった。」
「あんたって」
「チビって言うな」
椎名は言われる前に言った。
「それは禁句」
「言ったら駄目なのね」
「自分でもわかってるから」
「じゃあ言わないわ」
「そうして」
「別に。他人が困ることしたい訳じゃないし」
あまり強くない目で顔をやや俯けての言葉だった。
「もう。絶対にあんなことは」
「わかってる」
「うん、本当にね」
「わかってるから今ここにいるから」
またこうした話になった。自然とだ。
「それじゃあ」
「お星様ね」
「見よう」
こうしてであった。二人はその星を見るのだった。プラネタリウムは少しずつ暗闇の中に包まれていく。そうして星達が現れてきたのであった。

2
0
1
1
·
1
·
8

第三十七話 星座その一

第三十七話 星座

星達が姿を現していく。それを見上げながらだ。

椎名はだ。一緒にその星達を観ている星華に声をかけてきた。

「ねえ」

「どうしたの？」

「まずは春の星座だけれど」

その春の星達を見上げながら。星華に言つのだった。

「知ってる？」

「一応は」

星華もその星達を見上げたまま椎名に返した。

「知ってるけれど」

「そうなの」

「あまり深くはないわ」

それはないというのだ。星華は話した。

「あんた天文部だったわよね」

「うん」

これは星華も聞いて知っていることだった。ただしこれまでその知っていることは彼女の中では快いものではなかった。椎名が嫌いだったからだ。

それでもだ。今は違つのだった。

「そうだけれど」

「じゃあ私よりずっとね」

「知ってるってことね」

「そうよね」

星を見上げながらまた椎名に言つ。

「だから。色々教えてくれるかな」

「わかった」

椎名も星華のその言葉に頷く。ただし星を見上げたままなので声だけでだ。頷いたのである。

「それじゃあ」

「何でも言って」

「まずは」

最初はだ。

「牡羊座」

「ああ、あの十二の星座の」

「そう、それ」

まさにその星座だというのが。

「あの星座はね」

「あれよね。子供達を護った」

「その羊がああなつたの」

「ギリシア神話ね」

これは星華も知っていた。流星にだ。

「っていうかこのプラネタリウムって」

「そう、ギリシア神話」

そちらだというのである。

「それがメイン」

「あれっ、他の星座のお話も？」

「星座は一つじゃない」

椎名はこう星華に話す。

「中国にもあるしアラビアにもある」

「そうだったの」

「織姫と彦星」

椎名が今出す話はこれだった。

「それとか」

「ああ、あれね」

「北斗七星もそう」

「あの脇にある星がどうとかって」

「漫画にもあったあれ」

誰もが知っている古典的名作である。日本人に与えた精神的影響はかなり大きい。モヒカンがそのまま雑魚というイメージも与えている漫画だ。

「それ見てもわかる」

「あの漫画。そうね」

「神話は一つじゃない」

椎名がここで言う言葉はこれだった。

「そういうこと」

「成程、そうなのね」

「その通り。そして」

「そして?」

「今映っているのはそれでも」

「ギリシア神話なの」

「その通り」

椎名は星華にこのことも話した。

「他の神話のことも流れるけれど今はそれ」

「一番オーソドックスっていうのかしら」

「知名度ではそうなる」

椎名は星座についてできるだけ公平にかつわかりやすく話そうと努力していた。これは天文部員としての考えからしていることだ。

「だから」

「うつん、そうなの」

「そう。そして」

「そして?」

「見よう」

一通り話してからの誘いだった。

第三十七話 星座その二

「ここは見る場所だからよ」

「そうよね。今度は」

話をしているうちにだ。別の星座が出て来た。季節が変わったのである。

夏になりだ。そこにあつたのは。

乙女座だった。それを見ながら椎名はまた星華に話した。

「あの星座は乙女座。それは」

「それは？」

「正義の神様。今は神話とかよりも」

「それよりも？」

「乙女」

言うのはこのことだった。

「それを見よう」

「乙女をなの」

「そう。乙女は綺麗なものかっという」と

「違うのね」

「その心に色々なものを持つてるもの」

「こう星華に話すのだった。」

「いいものも嫌なものも」

「両方なの」

「人間誰でもそう」

「今話すことはだ。このことだった。」

「両方持つてるの」

「乙女でもなのね」

「ギリシア神話だと神様もそう」

「そういえばギリシア神話って色々あるわよね」

星華もギリシア神話についてはある程度知っていた。その知って

いる内容だけでもだ。彼女にしてもこれはと思つものも多いのだ
た。

「浮気とか。純愛とか」

「そう、色々あるもの」

「同じなのね、神様も」

「人間も同じ」

そうだとするのである。そしてそう話していった。

また空が変わった。今度は。

「あれは」

「蠍座？」

「あれはオリオン座と縁がある」

これもまた有名な話であった。

「オリオンは蠍を倒したから」

「刺されて死んだんじゃないかったかしら」

「そこは色々なお話があるから」

「そうだったの」

「ギリシア神話は登場人物の死に方も色々」

この辺りが複雑である。話によってその出生が違っている登場人
物もいたりする。もっと言えばその血縁は検証するとかかなり混乱し
ているものだ。

「倒した話もある」

「そんなお話もあったの」

「そう。それで」

「それで？」

「その中の一つ」

椎名は話していく。

「オリオンが何故お空にあるのか」

「そのお話なのね」

「愛故なの」

それだけというのである。椎名は星華に話していく。

「月の女神アルテミスと愛し合っていたけれど」

「一緒になれなかったの」

「アルテミスにはお兄さんがいた」

これも話によっては弟になっていたりする。やはり複雑であった。

「太陽の神アポロン」

「あつ、その神様は知ってるわ」

それはだ。星華もだった。それでつつい声をあげた。

「格好いい神様よね」

「そう。その神様が」

「どうしたの？」

「オリオンと妹の仲に嫉妬して」

「お話が何処かのドラマになってきたわね」

「実際にそんな感じ」

この人間的、悪く言えば人間臭さがギリシア神話である。神にしてみてもその行動が実に人間的、いや人間のそれそのものである。

「まさにそれ」

「それで嫉妬してなの」

「策略を使ってアルテミスに誤ってオリオンを殺させた」

「何よそれ」

その話を聞いてだ。星華はすぐに顔を顰めさせた。暗い中だがその顔が変わったことは椎名も横目で見た。

第三十七話 星座その三

「最低じゃない」

「それもギリシア神話」

「そんなとんでもない行動もなの」

「神様もすること」

「神様もなのね」

「そう、神様も」

椎名は話していく。

「同じだから」

「酷いことするのね」

「誰だって同じ」

「人間も」

「どんな人間も神様も同じ」

「悪いのね、誰も」

「悪い一面もあるし善い一面もある」

それだけではないというのである。

「二面性がある」

「善と悪が」

「誰だって同じ」

椎名はまた話した。

「だから。自分をそんなに悪く思ったりしても」

「仕方がないのね」

「何にもならないから」

星華にだ。切実に話すのだった。

「そういうこと考えたら駄目」

「ええ、わかったわ」

「それで」

「それで？」

「オリオンとアルテミスだけれど」
話を移すのだった。二人のことにだ。

「この二人はお互いに愛し合っていたの」

「それを邪魔されてなのね」

「そうしたこともある。けれど」

「けれど？」

「そうならない場合もある」

そうした場合もあるのだという。そしてだ。

椎名はだ。ここである星座のことも話した。その話は。

「さつきペルセウス座もあつたけれど」

「ああ、あの首を持っているあれね」

「メデューサの首。それを持っている星座だけれど」

「確かアンドロメダを助けるのよね」

「その通り。アンドロメダを助けて」

「二人は幸せになるのね」

「そういうこと。そんなこともある」

椎名が言うのだ。星華も呟いた。

「幸せにならなかつたりなつたり」

「縁でそうなつていくから」

「縁でなのね」

「そう、縁」

また言う椎名だった。

「縁でそうなつていくから」

「まさか。それって」

「多分同じだから」

「私、それで斉宮と」

「そうなることだった。それで」

「それで？」

「それだったら」

その恋が成就しなくてもだと。椎名は星華に話すのだった。

「新しいのを見つける」

「よく言われる話ね」

「けれどそれがいい」

それでもまだというのだった。

「そうするのが一番」

「一番なのね」

「そういうこと。諦めてはいる？」

「ええ」

それは確かだった。だからこくりと頷けるのだった。

「それは」

「だったらいい。それじゃあ」

「それじゃあ」

「見つけること」

こころ星華に話すのだった。

第三十七話 星座その四

「新しいのを」

「そうできたらいいけれど」

「前向きにいくといい」

椎名はアドバイスも忘れなかった。星華に対してもだ。

「そうすれば見つかっていくものだから」

「じゃあそうしていつて」

「幸せはそこにあるから」

「前向きに。新しいものを見つけることが」

「これもありきたりな言葉だけれど」

椎名はまた前置きしてから。話したのだった。

「星の数程いるから」

「男の子はなのね」

「そう、星の数だけいるから」

その星空を実際に見上げながらの話だった。見上げながらだ。彼

女はこうも言ってきた。

「それで」

「それで？」

「今どれだけのお星様がいるかわかる？」

「ええと」

咄嗟に言われてもだ。数えることすらだった。

「どれだけ？ 一体」

「そう。わからないね」

「わからないわよ、そんなの」

星華は困った顔で返す。

「どれだけあるか」

「そついうもの。恋もそつ」

「星の数だけね」

「あるから。見つける」

それが星華への言葉だった。椎名は今も夜空を見上げている。

「それじゃあ」

「そうしたいけれど」

「まずはそうすること」

また告げる椎名だった。前を向いて行ってというのだった。

そんな話をしたのだった。プラネタリウムの中で。

そして全てが終わってから。星華は椎名に話した。

「あの」

「あの？」

「よかつたらだけれど」

椎名の顔を見ながらだ。眉を少し顰めさせながらも意を決した顔でだ。彼女に話すのだった。

「今度ね」

「今度？」

「ここ。一緒に来てくれない？」

こう彼女に言うのだった。

「一緒にね。このプラネタリウムにね」

「一緒になの」

「そう、一緒にね」

また言う星華だった。

「来てくれるかな」

「うん」

椎名はそれを受けてだ。一言で返してきた。

「じゃあ今度」

「いいのね」

「天文部が断る筈がない」

「これが椎名の返答だった。

「そういうこと」

「天文部だから」

「そう、天文部だから」

また言う椎名だった。

「だから断る筈ない」

「そういうことなのね」

「そう、じゃあ今度ね」

「日は何時にしようかしら」

「そっちの空いた時間でいいから」

「私の方？」

「そう、合わせる」

意外なことを告げられ、まさか頷いてくれると思わなかったの
で少し驚いた顔になっている星華に対してだ。椎名は言っただった。

「合わせるから」

「そうしてくれるの」

「だから時間が決まったら言ってきて」

星華に対して述べるのだった。

第三十七話 星座その五

「部活はここに来るのなら休めるから」

「有り難う」

「御礼はいいから」

またそれはいいというのであった。

「それは」

「またそう言うのね」

「本当にいいから」

「だからなの」

「そう、それで」

こう星華に話していく。

「御礼とか言われるの好きじゃない」

「そうだったの!？」

「恥ずかしいから」

理由はそれであった。

「だから。いい」

「そうなの。じゃあね」

「御礼はなしで」

「わかったわ。じゃあ行ける日はね」

「連絡して」

言いながらだ。椎名は早速携帯を出してきた。彼女がそれを出してきたのを見て星華もだ。自分の携帯を出したのである。二人はそうした。

星華のその携帯を見てだ。椎名は言った。

「緑色なの」

「うん、緑好きだから」

それでだと答える星華だった。

「だからね」

「私も緑は好き」

椎名もその色はいいというのだった。

「けれど」

「けれど？」

「携帯はこの色」

見ればだ。一番オーソドックスなシルバーであった。

「これ」

「その色なの」

「特にこだわらなかつたらこの色になったの」

「携帯って大抵シルバーだからね」

「今思うと」

「どうなの？」

「派手にしたかった」

こつ星華に話すのだった。表情はなく言葉にも抑揚がないのはいつも通りである。

「マークつけたりして」

「マークねえ」

「番号だと十一」

それだというのだ。

「それか十」

「確かその数字って」

「阪神の永久欠番」

それは三つある。この二つの他には二十三である。この三つの背番号は阪神においては誰も着けることのできない神聖なものなのだ。

「村山、藤村」

「それで二十三は吉田よね」

「数字ならそれ」

「ってあんた阪神ファンだったの」

「関西人だから」

今度言う理由はこれだった。

「猛虎最高」

「私も阪神よ」

星華はここでは微笑んで述べた。

「お父さんもお母さんもね」

「阪神ファンなの」

「そうなの」

微笑んで告げた言葉だった。

「妹もそうよ」

「妹いたの」

「そうなの。一人ね」

何時の間にか打ち解けてだ。星華は椎名に次々に話していく。

「中学校三年で」

「じゃあ今年受験」

「うちの高校受けるって言ってるわ」

星華は打ち解けてだ。自分から話していくのだった。

「それで今必死に勉強してるわ」

「そうだったの」

「そうなの。私なんかよりずっと頭がよくてね」

星華は今も成績は今一つだ。かなり苦労しているがそれでもあった。

第三十七話 星座その六

「合格できるって言われてても。油断しなくてね」

「いいこと。それじゃあ」

「ええ、合格したらね」

「姉妹一緒に学校に行ける」

「それが楽しみで。あっ、完全に自分の話ね」

話をしているうちに気付いてた。その話を引っ込めたのだった。

「御免なさい、つい」

「いいから」

「いいの？」

「聞いてたから。とにかく」

「ええ、今度ね」

「メアド交換しよう」

椎名から言っただ。二人でアドレスと番号を交換してだった。

それが終わってからだ。また二人で話すのだった。

「じゃあまた」

「ええ、またね」

星華は最初から微笑んでいた。しかしだった。

椎名は最初は笑っていなかった。だがその顔が次第に。

微笑みになってた。星華に告げたのだった。

「私がメアドとか番号を教えるのは」

「何かあるの？」

「友達にだけ」

こう星華に告げるのだった。

「友達以外には教えない」

「じゃあ私も」

「そう、友達」

その微笑みでの言葉だった。

「友達になつていいかな、私」

「断る筈ないじゃない」

星華は。優しい微笑みになって話した。

「そんなこと。私はね」

「ええ。どうなの？」

「友達になりたいって人はね」

「誰でもね」

「友達は沢山欲しいし」

星華の考えだった。

「それに深く付き合いたいから」

「沢山。それに深く」

「そう、だから御願いな」

こう椎名に話すのだった。

「これからね」

「うん、じゃあ」

「また連絡するから」

やり取りの後で互いに手を振って別れた。二人は友達になった。

星華はそのことにだ。妙に暖かい感じを味わっていた。するとだ。

そこにだ。先輩が来て声をかけてきたのだ。

「いいかしら」

「あつ、はい」

「お友達よね」

「はい、そうです」

先程とだ。椎名についての言葉が変わっていた。無意識のうちにだ。

「それは」

「そうよね。今貴女笑顔だから」

「私笑ってますか」

「いい感じにね」

その星華の顔を見てだ。笑顔で話すのだった。

「笑ってるわよ」

「そうですか」

「その顔を見ればね」

それでわかると話すのであった。

「わかるわ。お友達ね」

「そうになりました」

素直にだ。先輩にこう話したのだった。

「今さっき」

「今お友達になったの」

「さっきまでは。ただ同じ学年で隣のクラス同士なだけでしたけれど」

「それが変わったのね」

「そうなんです。今」

友達になったとだ。星華はその笑顔で先輩に話した。

第三十七話 星座その七

「なりました」

「わかったわ。それは貴女にとってね」

「私にとつて？」

「いいことみたいね」

先輩は笑顔のまま星華に話す。

「その顔を見ればそう思うわ」

「笑顔をですね」

「明るくて。いい笑顔よ」

見ればだ。星華は曇りのないとても明るい笑顔になっている。少女、それも健康なそれに相応しい、その笑顔を見せているのだった。

「よかったわね」

「はい、有り難うございます」

「じゃあその笑顔で」

先輩はだ。星華にこうも言ってきた。

「ここから帰つてね」

「今度は何処に行きますか？」

「プリクラ行かない？」

先輩が次に誘うのはそこだった。

「スタープラチナね」

「あつ、あそこですね」

「そう、あそこ」

スタープラチナについては星華も知っていた。彼女も州脇立ちと一緒に何度か行っている。綺麗なゲームセンターである。

「あそこでプリクラ撮つて」

「カラオケもですね」

「そうそう。あそこカラオケもあるし」

ビルになっていてそこにその店もあるのだ。

「あそこって家でやってるのよ」

「あのカラオケの受付の女の子のお家でしたっけ」

「そう、あのいつもベイスターズの帽子被ってる娘」

その娘の家だというのだ。

「あの娘ね」

「あの娘って凄い横浜ファンみたいですね」

「そうね。何か凄い感じね」

「横浜ですか。嫌いじゃないですけど」

「そこから先は言わないでおきましょう」

笑ってそれは止めた先輩だった。

「あえてね」

「そうですね。それは」

横浜が負けに負けていることはだ。お互いあえて言わないことにした。そのあまりもの弱さはかつての阪神も同じでそれを思い出すからだ。

それだ。二人はその話を止めてだ。プラネタリウムを出てそのうえで百貨店からも出てプリクラを撮りに行くのだった。そんな楽しい日曜だった。

椎名もだ。笑顔でだ。今は言うのだった。

「ねえ」

「どうしたの？」

「これからだけれど」

笑顔で赤瀬に言う。

「どうする？」

「ううんと、どうしようかな」

そう言われてだ。赤瀬は考える顔になった。そのうえで椎名を見下ろして言ってきた。

「ここは」

「楽しい場所に行こう」

「楽しい場所って？」

「飲む場所」

そこだというのだ。

「お茶でも」

「お茶なんだ」

「美味しいお茶飲みたくなってきたから」

「それでなんだ」

「最高の気分は最高のお茶でしめたい」

椎名はまた言った。

「だから」

「ううん、だったらブルーライオンかマジックかな」

赤瀬は腕を組んでこう述べたのだった。

「どっちかな」

「そうね。明るい雰囲気ならブルーライオンで」

「そこだね」

「大人な雰囲気ならマジック」

それぞれ特徴があることが椎名の今の言葉からわかる。喫茶店も

店によって違うのだ。

「どっちかな」

「じゃあブルーライオン」

そこだと答える椎名だった。

「そこにしよう」

「明るい雰囲気がいいんだ」

「今私とても明るいから」

だからだというのである。

第三十七話 星座その八

「そこにしよう」

「うん、それじゃあね」

「明るい気持ちの時は明るい場所で」

椎名はまた話した。

「そうしたいから」

「だからなんだ」

「そう。それで」

「それで？」

「また一人友達ができた」

椎名はその明るい笑顔をさらに明るくさせて述べた。

「そうだった」

「ああ、そういえばさっき」

「そう、あの娘」

プラネタリウムでのことをだ。赤瀬にも話すのだった。

「あの娘と友達になれた」

「確か。隣のクラスの」

「そう、四組の」

「あの娘だったよね」

「名前は佐藤」

椎名はまず名字から話した。

「佐藤星華」

「そうだったね。佐藤さんだったね」

「本当はとてもいい娘だった」

星華のことをだ。こう赤瀬に話した。

「ずっとそうは思っていなかったけれど」

「けれどなんだね」

「そう。やっぱり人間はわかりにくい」

椎名は話していく。その星華のことをだ。

「一面だけを見ていたら」

「椎名さんでもなの」

「私も。人間だから」

「人間だから？」

「万能じゃない」

そうだというのだった。椎名はここでは謙虚だった。

「間違いや見落としがある」

「そうなんだね」

「そう。けれど気付いたから」

「そして気付いたからには」

「私、あの娘と友達になつたから」

言葉が続ける。微笑んだまま。

「何かあつたら力になりたい」

「そこが椎名さんのいいところだよ」

「いいの」

「こんなこと言つたら格好つけただけれど」

それでもだと。言葉にそのニュアンスを入れて語る赤瀬だった。

「人間つてまずは心だからね」

「それが第一」

「そう思うよ。幾ら頭がよかったり運動神経がよくても」

それでもだというのだ。まずはと。

「心がしっかりしていないとね」

「この場合は清らかなら」

「そつだよ。じゃあね」

「今度一緒に行つて来る」

椎名は微笑みをそのままにして語っていく。

「お星様のところに」

「頑張つてきてね」

「有り難う」

こうしてだった。椎名もまたそれに向かうのだった。新しい友達のところへ。

陽太郎と月美は。まだ二人で月美の家に行った。そこで今はだった。

「何か悪いよな」

「悪いですか？」

「いや、お菓子だけじゃなくてさ」

「晩御飯もですか」

「本当にいいんだよな」

申し訳なさそうにだ。月美に対して言うのだった。二人は今向かい合って応接間のソファーに座っている。そのうえでのやり取りだった。

「晩御飯まで」

「はい、母がです」

「お袋さんがいっついていうんだって？」

「ですから待っていて下さいね」

月美はにこりと笑って陽太郎に話す。

「今日の晩御飯は」

「晩御飯は？」

「御馳走ですよ」

そうしてだ。これだと話すのだった。

「お刺身に」

「あつ、和食か」

「はい、鮭とハマチのお刺身です」

「二つもかよ」

「それと湯葉に酢のものにはづれん草のお浸しに」
野菜もあった。

第三十七話 星座その九

「それと貝のお吸い物です」

「豪勢だな、それはまた」

「最後には母もありますから」

「何か凄いな、そこまであると」

「うちの母和食も得意ですから」

「こうだ。陽太郎に話すのだった。

「楽しみにしておいて下さいね」

「そうさせてもらうよ。そうか、お刺身かあ」

「お好きですか？」

「うん、大好きだよ」

満面の笑顔で月美に述べた。

「それと白い御飯なんてね」

「勿論白い御飯もありますから」

「最高だよ。そこまでいったら」

「では晩御飯を召し上がられてから」

「それから帰れば」

「駅まで送らせてもらいますから」

「それも言う星華だった。

「では。それで」

「うん、それじゃあ」

こうやり取りをする二人であった。二人は幸せの中でその絆を深めていっていた。そしてだ。月美は陽太郎に微笑みを向けて言ってきた。

「それですね」

「それで？」

「晩御飯の時に父と母がですね」

「親父さんとお袋さんが？」

「はい、陽太郎君にお話があるそうです」

こう陽太郎に話すのだった。

「それも楽しみにしておいて下さいね」

「二人でつて。一体何かな」

「私も詳しい内容はわからないですけどね」

これは本当のことだ。しかしなのだ。

「悪いお話じゃないのは」

「それは間違いないんだ」

「父も母もそう言っています」

両親の言葉をだ。頭の中で反芻しながら述べるのだった。

「ですから」

「一体何だろうな」

「そうですね。何でしょうね」

月美も首を傾げさせる。

「悪いお話じゃないのは間違いないそうですけれど」

「それでもだよな」

「気になるよな」

「ええ、本当に」

それでもだった。二人はこのことは察していた。

「悪い話じゃないんなら」

「安心していいですよ」

「だよな。それにしても晩御飯はお刺身か」

「はい、凄く新鮮なお刺身ですから」

月美もだ。刺身について笑顔で話す。

「美味しいですよ」

「だよなあ。今から」

「楽しみです」

「とても」

こんな話をする二人だった。二人は楽しい時間を過ごしていた。しかしそれはだ。二人が勝ち取った幸せに他ならなかった。

だがそれについてはだ。二人はこう言うのであった。

「それもこれおな」

「そうですね」

月美は陽太郎の今の言葉にも笑顔で返す。

「椎名のお陰だよな」

「狭山さんや津島さんもいてくれて」

「赤瀬もな」

「皆さんがいてくれたからこそ」

「こうしていられるんだよな」

「そうですね」

こう思っているのだった。

「皆さんがおられてこそですね」

「俺達がこうなれたのって」

「それならですね」

「ああ、それならな」

「皆さんに感謝して」

月美からの言葉である。

「今も」

「楽しくやるか」

「はい、そうしましょう」

こんな話をしてだ。二人は夕食に向かう。陽太郎はそこでだ。思わぬことを告げられるのだった。だが彼はまだそのことを知らなかった。

第三十七話 完

第三十八話 明るい運命その一

第三十八話 明るい運命

陽太郎は月美の家の夕食に席を共にすることになった。ここでだ。厳しい顔だが優しい目の中年の男性、月美の父がこう彼に話してきた。

「陽太郎君、お家には連絡しているね」
「はい、もう」

確かな顔で答え陽太郎だった。

「メールしておきました」

「晩御飯はこちらでということをだね」

「はい、しておきました」

実際にそうだという陽太郎だった。

「それはもう」

「そうか。ならいいな」

「そうね」

月美の母もそれに頷く。

「それならね」

「今夜はゆっくりできるな」

「いえ、ゆっくりなんて」

「いやいや、ゆっくりしてもらわないと」

「そうよ」

父だけでなく母も彼に言っただった。

「それはちゃんとね」

「食べてもらわないと」

「だからですか」

「そう。だからだよ」

「遠慮する必要はないから」

「そうだよ」

月美の妹の真奈美もいた。彼女も陽太郎に言うのだった。

「お兄ちゃんゆっくりしていつてね」

「真奈美ちゃんもそう言うんだ」

「だって。お兄ちゃんの姉ちゃんのお婿さんじゃない」

真奈美はここでとんでもないことを言った。

「だからね」

「ちよつと、真奈美」

月美は困った顔で妹の今の言葉を注意した。

「何言ってるのよ」

「えっ、けどそうじゃないの？」

「違うわよ、そんなことないわ」

彼女はこう言うのだった。

「そんな。私と陽太郎君は」

「まあ落ち着いてな」

「そう。静かにね」

両親が二人の間に入った。

「今は食事中だぞ」

「お喋りはいいけれど喧嘩は駄目よ」

「え、ええ」

「わかったよ。お父さんお母さん」

姉妹はそれぞれ両親の言葉に頷いた。そうしてだった。

一家は陽太郎を交えて食事をする。その和食をだ。その中で父はまた陽太郎に問うのであった。

「味はどうかな」

「はい、凄く美味しいです」

畏まって食べているがそれでも味わっている陽太郎だった。実際にこう答えることができた。

「お刺身もお野菜も」

「吸い物はどうか」

「それもいいですね」

飲んでみてだ。実際にその味に舌鼓を打っていた。

「こんなに美味しいなんて」

「ははは、気に入ってもらったみたいだな」

「このお料理はね」

母も言ってきたのだった。

「これからはね」

「これからは？」

「よかつたら何時でも食べに来ていいのよ」

こつ彼に言うのだった。

「何時でもね」

「今はまだはつきり言えないが」

父もだ。彼に言うのだった。

「君が大学を卒業したら。随分先の話だが」

「大学ですか」

「そして就職したらどうかな」

「月美とね」

二人で彼に話すのだった。

第三十八話 明るい運命その二

「君さえよかったら」

「どうかしら」

「えっ、それって」

それを聞いてだ。陽太郎は思わず箸を落としそうになった。そうしてそのうえでだ。狼狽しきった様子になって二人に返すのだった。つまりは

「そうだよ、言っただままだよ」

「どうかしら、それで」

「あの、ちよっと」

返答に困っていた。いきなり言われたからだ。

勿論こうしたことを言われるとは彼も予想していなかった。それで戸惑いながらだ。二人に対してこう答えるのだった。

「ええと、今は」

「ははは、今すぐ答えなくてもいいよ」

「後でいいわよ」

二人は穏やかな笑みで二人に話すのだった。

「けれど、考えておいてくれよ」

「月美もね」

「私もなの」

話を振られてだ。月美も戸惑いを見せた。

そのうえでだ。こう自分の両親に言うのであった。

「つまりそれって」

「そうだ、結婚だ」

「貴方達のね」

「結婚って」

「あの、お父さんお母さん」

陽太郎も月美も戸惑ったままである。

「そんな、俺達」

「まだとても」

「いやいや、昔は十六になれば立派に結婚していた」

「それによ」

生きている時間がより長いせいからだ。ここでは両親の方が上手であつた。二人のペースのままだ。話はそのまま続くのだった。

「そうだな。女の子は十六になればな」

「男の子も十八でね」

「結婚できるっていうんですね」

「高校生で」

「法律的にはそうだからな」

「だからね。今からね」

「その話を前提として、ですか」

「私達は」

自然とお互いを見てしまった。二人共同じ顔になつてしまつてい
る。

その鏡のようなものをそれぞれ見ながらだ。二人はまた言うのだ
つた。

「ええと、じゃあ」

「これからは」

「いやいや、堅苦しくなることもない」

「そういうのはいいのよ」

「けれど。結婚って」

「そんなこと言つたら」

どうしても戸惑いを消せない二人にだ。両親はまた言うのだった。

「だから結婚はお互いをよく知つて幸せになる為のものだからな」

「堅苦しくなつても仕方ないのよ」

「だからなんですか」

「それで、ですか」

「そういうことだ」

「交際はそのままでいいのよ」

両親は余裕を持った笑みで二人に話す。

「ただ。何時かはな」

「それは頭の片隅に入れておいてね」

「わかりました」

「じゃあそれは」

二人は月美の両親の言葉に頷いた。もう食事どころではなかった。だがそれでも食事を楽しみだ。それが終わってからであった。

陽太郎は月美の家を後にした。当然両親に挨拶をしながらだ。そしてそれが終わってから家を出る。だがその帰りにだった。

月美がだ。こう申し出てきたのだった。

「さっきお話した通り」

「帰り道一緒に。だよな」

「はい。いいですか？それで」

「断る筈ないじゃないか」

微笑んでだ。月美にこう話すのだった。

第三十八話 明るい運命その三

「そんなことは」

「有り難うございます」

「御礼はいいけれどさ」

月美の感謝の言葉はだ。それはいいとしたのだった。

「それでも」

「それでもですか」

「俺でいいんだよな」

陽太郎からだ。こつ月美に問うのであった。

「あの、本当に」

「私も」

するとだ。月美も陽太郎を見上げてだ。こつ言ってきた。

「私でいいんでしょうか」

「何かお互い言うね」

陽太郎はだ。月美の今の言葉を聞いて思わず苦笑いになった。

そうしてだ。そのうえでこつ言うのだった。

「今日は」

「そうですね。けれど」

「ああ。一緒に帰ろう」

微笑みになって月美に述べた。

「これからさ」

「はい、それじゃあ」

こつしてだった。二人はその帰り道についた。二人で横に並んで夜の道を歩く。暗がりか灯りに照らされている。その中を二人であった。

二人で並んで歩きながら。陽太郎は言うのだった。

「いつもこつして歩いてるけれど」

「今日は、ですね」

「何か違うよな」

戸惑った笑みでの言葉だった。

「普段とさ」

「そうですね。一緒にこうして歩いて決めてましたけれど」

「それでもだよな」

「はい、あんなことを話したから」

「親父さんとお袋さんが」

「普段はあんなこと言わないんですよ」

陽太郎に顔を向けて述べるのだった。

「あの、本当に」

「それでもああしてか」

「そうですね。本当に急に」

月美は顔を正面に戻した。そのうえで俯き加減になって話すのだった。

「あんなことを」

「驚いたよ」

「そうですね。私もです」

「ただ」

「ただ？」

「親父さんもおふくろさんも本気だったな」

それは間違いないというのだった。

「それは確かだよな」

「そうですね。それは本当に」

「じゃあやっぱり」

また言う陽太郎だった。

「俺達これからは真剣に」

「考えないといけないでしょうか」

「そんな話なんて夢だと思ってたよ」

二人はまだ高校一年生である。ならばそれも当然のことだった。
「結婚かあ」

「夢みたいなお話ですよね」

「けれどそれは夢じゃない」

「現実ですね」

「うん、現実なんだよ」

陽太郎はそのことをただ口にしただけではない。口に出してだ。

そのうえで己の中で反芻していた。そのうえでの言葉であった。

「これは」

「はい、確かに」

「だから余計にこつなってるし」

「戸惑って」

また二人で言っていく。

「それでも何か」

「何か？」

「嬉しくないかな」

陽太郎は月美に今度はこつ言ってきた。

第三十八話 明るい運命その四

「何かさ」

「確かに。そう言われたら」

「結婚かあ。月美と」

「陽太郎君と」

「何時か。そうなれたらいいな」

陽太郎は自然にこのことを口にした。

「俺、思うよ」

「私ものです」

そしてだ。月美も同じことを口にするのだった。

「陽太郎君と」

「今じゃなくても」

「何時かきつと」

「そしてそれからだよな」

陽太郎は先を見ていた。何時しかその顔は上を見上げていた。

そしてそこにあつたのは。

「何かさ」

「はい？」

「いや、よく言われることだけれど」

こう前置きしてからの言葉だった。

「星に願いをかけると」

「流れ星ですね」

「まあ今はそれはないけれどさ」

ここでそれを言っただけ笑いました。

「それでも。星に願いをかけたなら」

「その願いは適うんですね」

「そう言われてるけれど」

「じゃあ私」

月美はだ。自分からすぐに言った。彼女にしては珍しくだ。今は自分から言ったのである。自然とそう積極的になったのだった。

「今は」

「星に願いを？」

「はい、お願いします」

にこりと笑って陽太郎に話す。顔は上を向いていた。

「そうして本当に陽太郎君と」

「じゃあ俺も」

「陽太郎君もですか」

「ああ、お願いするよ」

彼も言うのだった。

「そうして二人で」

「そうですね。二人で」

「一緒になろうな」

こうしてだった。二人で夜空を見上げてだ。願いをかけたのだった。

それが終わってからだ。陽太郎は言うのだった。

「それじゃあ」

「はい、今からですね」

「駅まで一緒に」

「はい、行きましょう」

二人はその絆をより深いものにさせていっていた。それはもう誰にも離せられないものになってきていた。そしてそれが次第にであった。

自然と醸し出されていた。学校でも何処でもだった。

二人は一緒にいることが多くなりだ。お互いに見る目もだった。

さらに暖かくなっていた。そしてであった。

昼にもだ。椎名達と一緒に食べていてもだった。

「あの、今日はですね」

「あつ、これなんだ」

「はい、これです」

こうだ。月美は陽太郎にだ。その弁当を出した。それは。

三段なのは同じだった。しかしその弁当の中身はだ。材料も料理も同じであつてもだ。その中にあるものはだ。明らかに違つていた。

「おい、何かな」

「そうよね」

狭山と椎名がまず話した。

「西堀さんの今の弁当つて」

「最近そうだけけれど」

「何か違うよな」

「雰囲気かね」

それがだというのだ。

「もう丹精込めて作った感じがして」

「それがお弁当全体から」

「別にこれまでと変わらないですけど」

月美はだ。それをこう言つて否定するのだった。

「あの、材料もメニューも」

「違う」

「違うの？」

「そう、これまで以上に入ってるものがある」

椎名がだ。こう月美に言うのであつた。

第三十八話 明るい運命その五

「それがあるから」

「これまで以上につて」

「それは愛情」

そのものずばりといった口調の椎名だった。

「それがこれまで以上にあるから」

「あの、それは」

「そう、だからこれまでとは全然違つ」

そうだとするのである。

「そういうこと」

「何か暑いよなあ」

「全く」

狭山と津島は椎名の指摘からわざとおどけてこつ言ってみせた。

「おかげでこつちもなあ」

「影響受けちゃうじゃない」

「影響つて何だよ」

陽太郎はすぐに二人に突っ込みを入れた。

「それはよ」

「だからよ。俺達だつてな」

「そうよ」

こつだ。二人は返すのだった。

「愛情つてやつをな」

「今まで以上にね」

「というか嫉妬する」

椎名はぼつりとした口調で言ってきた。

「熱々過ぎて」

「あのな、俺達は別に」

「そうよ。今までと全然変わらないから」

「自覚がないけれどそうだから」
また指摘する椎名だった。
「そういうことだから」
「うっん、何か」
「そう言われたら」
「けれどいいこと」
しかしだった。椎名はそんな二人を肯定するのだった。
「とても」
「いいのか？」
「それで」
「幸せは他の人が見てもとてもいいものだから」
「だから俺達もなんだよ」
「そうなのよ」
狭山と津島はここでは暖かい笑顔になって話した。
「負けていられないってな」
「もっと幸せになってね」
「僕もそう思う」
そして赤瀬もであった。
「人の幸せを見ていたら自分も頑張っってそうなるっって思うもの」
「それがいいこと」
椎名はそしてだ。こうも言った。
「ただ。それが逆になれば」
「よくないんだな」
「そうなのね」
「そう。それは嫉妬」
それこそがだとだ。椎名は陽太郎と月美にも話した。
「それはよくない」
「じゃあ妬むのじゃなくてか」
「素直に自分もそうなりたいて頑張ることがいいのね」
「そういうこと。嫉妬に取り憑かれたら」

どうなるか。椎名はそれもわかっていた。だからこそその言葉だった。

「醜くなる」

「醜くなる」

「それじゃあ」

「そう、絶対に駄目」

また言ったのだった。

「それだけは」

「だよな。それだけは」

「絶対に」

「そう。あつてはならないこと」

「妬むより自分が、なんだな」

「幸せになればいいのね」

二人もそれがよくわかった。実にだ。

第三十八話 明るい運命その六

そしてそれを踏まえてだ。椎名は話したのだった。そして狭山と津島にも顔を向けてだ。そのうえであらためて話したのであった。

「そういうことだから」

「俺達もだな」

「そうすればいいのね」

「そういうこと」

これを話すのであった。

「嫉妬にかられたら何にもならない」

「そうだよな、絶対に」

「私も。嫉妬したことあるけれど」

津島は自然にだ。顔を俯けさせて言ったのだった。

「それって結局何にもならないから」

「そんなことがあったのかよ」

「うん。親戚が凄くいいおもちゃ持ってたのよ」

子供の、それも幼い頃のことを思い出しての話である。津島にとつてはいい思い出ではない。実際に彼女は今暗い顔になっている。

だがそれでもだった。彼女は今皆に話すのだった。

「それが羨ましくて欲しくて」

「けれどその親戚のおもちゃだったんだな」

「取るうと思つたの。それで自分のものにしてうって」

「それが御前の嫉妬なんだな」

「これって嫉妬よね」

俯きながら狭山達に問う。

「やっぱり」

「ううん、子供の頃って自然にそんな風に考えるけれどな」

狭山は腕を組んでこう返した。

「けれどそれって嫉妬だったのか」

「そうじゃないかな」
「羨ましいって思ってたのでそれが妬みになるとそう」
「妬み。そうよね」
津島はまた椎名の言葉を聞いて言った。
「それ、あつたわ」
「妬んでそれで取るうとしたのね」
「それで自分のものにしたって思って」
「取るうとした」
「そうだったの」
「こつ話すのだった。」
「けれど。その娘の部屋に入ろうとして」
「それでどうなったんだ？」
「急にお父さんに呼ばれて」
「そうだったというのである。」
「そつちに行ってそれで終わったけれど」
「じゃあ若しそこで親父さんに呼ばれなかったら」
「多分」
「取っていたと。そう言うのである。」
「若し取っていたらやっぱり」
「よくなかったね」
赤瀬が言った。
「そつだね」
「それをしなかったのってやっぱり」
「よかった」
椎名ははつきりと告げた。
「それでその後は」
「思いなおしてね。もうそんなことはしなかったわ」
「本当にすんでのところまで止まったというのである。」
「よかったわ、けれど私自分でしてないから」
「自分でしなかったけれど止まったのはいいことだよな」

「そうですね」

陽太郎と月美はそのこと自体をよしとした。

「取らなくて何よりだったよ」

「私もそう思います」

「そうなのね。よかったのね」

「だろ？取るよりはずっとさ」

「いいと思います」

「そうなのね」

二人のその言葉を聞いてだ。あらためて頷く津島だった。

それで納得した顔になってその顔をあげてだ。こつ言つのであった。

「じゃあ私は」

「それを忘れないで二度としなかつたらいい」

椎名は言った。

第三十八話 明るい運命その七

「そういうこと」

「わかったわ。それじゃあね」

「じゃあ後は」

「後は？」

「食べよう」

今度はこう言う椎名だった。

「お昼御飯」

「そうだよな。折角のお昼なんだし」

「だったら」

陽太郎と月美がここでまた言う。

「早く食べて何処に行くか」

「図書館なんてどうですか？」

月美は微笑んで陽太郎にこう提案した。

「そこは」

「あつ、いいな。それじゃあ」

「はい、そこに」

こんな話をしながら昼食を楽しむ彼等だった。それは星華達もだった。

四人で食堂で食べながらだ。和気藹々と話していた。

「やっぱりここの食堂の料理って美味しいよね」

「そうそう、味付けがいいのよ」

「そこが違うのよね」

三人は笑顔で食べながら話している。見れば三人共唐揚げ定食だ。星華もである。唐揚げにキャベツの千切り、それにトマトに野菜のお浸しに味噌汁といったメニューである。そこに当然白米もある。

その唐揚げ等を食べながらだ。三人は話すのであった。

「唐揚げだけじゃないしね」

「ハンバーグだっていいし」

「お魚もね」

「やっぱり学食が美味しいってね」

「いいことよね」

「本当にそうよね」

笑顔で話す三人だった。そしてだ。

星華もだ。その唐揚げ定食を食べながらこう言うのだった。

「そういえば何か」

「何か？」

「どうしたの、星華ちゃん」

「うん、ここで御飯食べるの久しぶりだなって」

これが星華の今の言葉だった。箸でその唐揚げを取りながら話す。

「そう思ってたね」

「そういえばそうだったっけ」

「星華ちゃんはね」

「そうよね」

「休んでたし」

このことを最初に言った。

「それにパンとかお弁当とかだったから、最近」

「そうよね。学食はね」

「ちよっとなかったわね」

「私達もね」

彼女と行動を常に共にする三人もだ。そうなのだった。

「久しぶりに食べてみればこれがまた」

「美味しいと再認識」

「そういうことなのね」

「ええ、そうね」

まさにその通りだとだ。星華は三人の言葉に頷いた。

そしてだ。あらためてこう言うのだった。

「じゃあこれからはね」

「この学食もよね」

「ちよこちよこ食べよう」

「皆でね」

「前はそうしていたけれどね」

ここで笑顔になる星華だった。

「けれどまたね」

「そうそう、こうして四人で一緒にね」

「学食でも食べようね」

「高校の間ずっとね」

「うん」

星華はその暖かい笑顔で三人の言葉に頷いた。

そして頷いた後でだ。こんなことを言うのだった。

「実は今度ね」

「うん、今度？」

「何かあったの？」

「ちよっと行く場所ができたの」

こう三人に話すのだった。

第三十八話 明るい運命その八

「夜にね」

「お酒？」

「それともカラオケ？」

「じゃあスタープラチナとか？」

「あっ、あそこじゃなくて」

八条町の学生達が遊びのスポットではないというのだ。

「ううんと、夜空を見にね」

「星華ちゃんが夜空ね」

「何か意外？」

「そうよね」

三人はそう聞いてだ。きよとんとした顔になって述べた。

「バスケットでイメージ強いから」

「それはちよっと」

「なかつたけれど」

「誘われてね」

星華はこのことも話した。そしてだ。彼女の名前も出した。

「ほら、三組の」

「三組ってあの」

「斉宮のクラスよね」

「その人なの」

「うん、ほらあの娘よ」

名前を出すのは少し戸惑った。三人と彼女のこと、自分自身と彼女のかつてのことが脳裏に浮かんでだ。そうなってしまったのだ。

だが意を決してだ。星華はその名前を出したのだった。

「椎名愛海」

「ああ、あいつ」

「あのチビね」

「あいつが？」
「そう、あの娘に誘われたの」
「こう三人に話すのだった。」
「夜空。一緒に見ないかって」
「あいつについて」
「何で？」
「何があったのよ」
「三人は驚きを隠せないといった様子で星華に尋ねた。」
「仲悪かったじゃない」
「私達もね」
「そうよね」
「それで誘われるって」
「友達になつたとか？」
「そうなの？」
「三人が尋ねるとだった。星華もこう言つのであった。」
「実はそうなの」
「あのチビと友達になつたって」
「何、それ」
「凄い展開」
「つていうか有り得ないし」
「三人はその驚きの言葉を続ける。」
「あんなに嫌い合つてたのに」
「それでもって」
「うっん、ちょっとねえ」
「縁があつてね」
「星華は多くは語らなかつた。ここではだ。」
「それでなの」
「何かよくわからないけれど」
「それでもね」
「一緒になのね」

「そうなの」

それは確かだというのだ。

「一緒に夜空をね」

「ううん、じゃあ」

「そうよね」

「星華ちゃんが決めたんならね」

そして三人はだ。顔を見合わせてだ。そのうえで星華に顔を戻してこう言うのであった。

「いいか」

「うん、いいよね」

「それじゃあね」

「いいのね」

そして三人の言葉を受けてだ。星華も言葉を返した。

「あの娘と一緒に行って」

「前なら何で？ってなったけれどね」

「私もね、それは」

「やっぱりね」

しかし今は違つとだ。三人は言うのだった。

「けれど。あのチビ、いえあの娘のこともね」

「少しずつわかってきたし」

「だからね」

それでだというのであった。

「行ってきたらいいわ」

「多分。星華ちゃんにとってもそれがいいし」

「だからね」

それでだと話す三人だった。そしてだ。

第三十八話 明るい運命その九

笑顔で星華を見てだ。そうして食べながら話をするのだった。

「楽しんできてね」

「そうしてね」

「是非共ね」

「うん、そうするわ」

星華も笑顔で頷いてだ。そうしてだ。

その唐揚げ定食を食べてだ。満足した顔で言った。

「何か最近御飯がね」

「御飯が？」

「どうなの？」

「物凄く美味しいわね」

こう三人に話すのだった。

「何でかよくわからないけれど」

「そういえば私も」

「私もね」

「そうよね」

そしてそれは三人共だった。最近食事がこれまで以上に美味しく感じられるのだった。星華だけでなく彼女達もそうなのだった。

「何でかな、これって」

「ううん、何でかな」

「本当にね」

それがわからない。しかしだ。星華はこう言うのだった。

「色々と吹っ切れて。嫌なもの取り払えたからかな」

「それでなのかしら」

「やっぱり」

「それでかしら」

三人もそれではないかというのだった。考えてみればそんな気が

するのだった。

それだ。三人共だ。

「これまで。何かね」

「うん、嫌なことばかり考えてて」

「そんなのだったから」

入学してからのことを思い出してだ。それぞれ話すのだった。

「それがなくなつて」

「今は何か」

「心が晴れやかになつてるし」

それではというのだった。三人もだった。そして星華もだ。

その晴れやかになつた顔でだ。こう言った。

「嫌なことを考えるより楽しいことを考える方がね」

「美味しく食べられるのね」

「そうなのね」

「そうじゃないかしら」

星華は考える顔で述べた。しかしそれは同時に晴れやかなものだった。

そしてその顔でだ。また言った。

「だから。このまま楽しいこと考えてね」

「そうね、じゃあね」

「それじゃあ嫌なことよりも楽しいことね」

「考えていこう」

こうしてだった。三人も頷いてだった。楽しく食事を楽しむのだった。

それはだ。家でも同じだった。星華は家で明るい笑顔で夕食を食べながら星子に言うのであった。

「今度ね」

「今度つて？」

「うん、ちよつと行くのよ」

話すのはここからだった。

「お星様見にね」

「お姉がお星様ねえ」

星子は姉の話聞いて意外な顔をした。箸と茶碗を手にしたまま
でだ。

「何かそれって」

「意外？」

「凄くね」

正直に姉に答える。

「何でそんなふうになったの？」

「ちよつと誘われてね」

それでだというのだ。妹に笑顔で話す。

「新しく友達になった娘にね」

「あの人達じゃなくてなのね」

「そう、別の娘よ」

言いながらだ。椎名のその顔を脳裏に浮かべるのだった。

そしてそのうえでだ。また彼女に話すのだった。

「別の娘と一緒にね」

「夜だから気をつけろよ」

「お星様を見るんならね」

ちやぶ台を囲んで一緒にいる両親がここで彼女に言った。

第三十八話 明るい運命その十

「自分の身は自分でだからな」

「そこは気をつけなさいね」

「うん、それはね」

星華もそのことには納得した顔で頷いて返した。

「わかってるわ」

「一応スタンガン持っていけ」

「警棒もね」

「何か物騒ね」

星子は両親のそうした言葉に突っ込みを入れた。突っ込みを入れながらおかずのコロッケにソースをかける。おかずは他には人参与こやしとピーマンの炒めものに椎茸とエリンギの味噌汁である。そんな献立である。

「スタンガンに警棒って」

「用心には用心だ」

「危ない奴が多いからよ」

「ううん、けれどそうしたのを持つって」

「馬鹿を言え」

父親は厳しい顔で星子に話してきた。

「何度も言うがな」

「自分の身はってことね」

「そういうことだ」

まさにそうだというのであった。

「御前もだぞ。そうした時はな」

「両方共持たせるからね」

「警棒なんかで殴ったら」

どうなるか。星子もよくわかっていた。

「頭とかだっいたら下手したら死なない？」

「そんなことする奴は死んで当然だ」

「そうよ。正当防衛になるからいいのよ」

「そうしたことはこれだけで済ませる両親だった。」

「だから気にするな」

「いいわね」

「そういうもののなの」

強気な星華もだ。今の両親の言葉には首を傾げさせた。

「そこまですてもいいのね」

「一向にな」

「警察も納得してくれるからね」

「そうかしら」

警察もいいと言われてもだ。星華はまだ信じられなかった。

「けれどまあ」

それでもだった。彼女はここで話を元に戻して言う。

「お星様はね」

「それは行くのね」

「うん、もう決まったから」

「こっ星子に答える。」

「行くわ」

「気をつけてね」

「有り難う。それに夜だし」

星華はその夜のことも考えてだ。また言った。

「だからあったかい格好をしてね」

「そうそう、それだ」

「それも気をつけてね」

両親もそのことを話す。

「風邪をひかんようにな」

「あったかい服着て行きなさいよ」

「わかってるわ。それじゃあね」

星華も頷く。そうしてであった。

彼女はその星を見に行くのだった。椎名と共に。そしてそこでだ。
これまで見たことのない、素晴らしいものを見ることになるのだった。

第三十八話 明るい運命その十一

だが彼女はまだそのことを知らない。星子に「ここでこんなことを言った。」

「ねえ、このコロッケって」

「どうしたの？」

「何か食べやすいわね」

「こつ言うのだった。」

「いつものよりよね」

「あれっ、そうかな」

「うん、美味しいし」

「そしてこつも言った。」

「いつものよりよね」

「いつものコロッケと変わらないと思うけれど」

「そうかしら」

「うん、お母さんそうよね」

星子は母に尋ねた。

「このコロッケいつも買ってるコロッケよね」

「ええ、そうよ」

母もその通りだと話す。

「いつものお肉屋さんのコロッケよ」

「そうよね。同じよ」

こつ姉に顔を向けて話す。

「味いつもと同じだと思っけれど？」

「そうかな。いつもより美味しいけれど」

星華の言葉は変わらない。

「気のせいかしら」

「お姉最近前よりも身体動かしてるからじゃないの？」

星子はその理由をそこに求めた。

「部活。これまでよりも頑張ってるでしょ」
「身体が自然に動くけれど」
「そのせいじゃないの？何か表情も明るいし」
「明るかったら食べ物も、なのね」
「病は気からっていうし」
星子は食べながらその話をした。
「暗い気持ちだと食べてもね」
「そういうことね」
「そうじゃないの？」
「言われてみればそうかも」
星華も妹のその言葉に納得した。
「明るいから食べても」
「そうそう。じゃあコロッケは一杯あるし」
「そうね。もつとね」
「食べよう、お姉」
星子は満面の笑顔でコロッケを一個箸に取りながら述べた。
「今日もね」
「うん、じゃあ」
こうしてだった。二人はコロッケを食べ続ける。そのコロッケは確かに美味かった。星華は今何を食べてもそう感じられるようになっていた。

第三十八話 完

2011・1・20

第三十九話 あの場合へその一

第三十九話 あの場合へ

星華はその日。一人で電車に乗った。

するとその車両にだ。もう彼女がいた。扉のところに立っていたのだ。

「えっ、もういたの!？」

「たまたま」

星華はその車両に乗りながら驚いた顔で椎名に問う。椎名は彼女にこう返す。

星華はジーンズとシャツ、セーターの上にオーバーを着ている。

椎名は白いロングスカートに黒タイツ、白いシャツと黒いセーター、それと黒い丈の長いコートだ。二人共重武装である。

しかも二人共マフラーをしている。どちらも赤だ。椎名はそのマフラーを見ながら星華に話した。

「ここにいたらそっちが来たの」

「うっん、偶然ね」

「偶然だけれどいいこと」

「そうね。どっちにしても向こうの駅で待ち合わせだったし」

「その手間が省けた」

「そうね。それはね」

「いいこと」

椎名はここで微笑みを見せた。

「それじゃあこうして二人で」

「行こうね」

星華もだ。その椎名に笑顔で述べた。

「今からね」

「うん。それと」

「それと？」

「マフラー」

その見ているマフラーのことをここで星華に告げた。

「御揃い」

「あつ、確かに」

星華も椎名に言われてこのことに気付いた。

「同じ赤のね」

「赤いマフラー好き？」

「結構ね」

そうだと答える。答えながら電車の扉の端に立つ。そうして椎名と向かい合ってそのうえで話をはじめ。扉が閉まり電車が出発した。

出発のアナウンスを聞きながらだ。二人は話をしていた。窓の向こうはもうすっかり暗くなっている。その中で話をするのであった。

「赤自体が好きだから」

「それでなの」

「あんたも赤好きなの？」

星華は椎名もそうではないかと尋ねた。

「やっぱり」

「好きなことは好き」

こう答える椎名だった。

「けれど赤いマフラーはこれだけしかない」

「一つしかないの」

「どっちかっていうと白のマフラーが好きだから」

「白？」

「そう、白」

その色だというのである。

「そっちの方が好きなの」

「赤も似合うのに」

「けれど好きだから」

この返答は変わらないのだった。

「それでなの」
「それで今は赤なの」
「何となく。これにしたかったから」
「ふうん。私はマフラーは赤しかないけれどね」
「好きだから」
「そう、赤いマフラー好きなの」
星華は笑顔で椎名にこう話した。
「ほら、昔から歌であるじゃない」
「赤いマフラーね」
「仮面ライダーとか。サイボーグ009とかがしてたし」
星華はここで特撮やアニメの話を出すのだった。
「子供の頃。そういうの観てきたから」
「成程、それでなの」
「おかしいかな、これって」
「別に」
「そうではないと。椎名はそれは否定した。」
「そういうことは誰にもあるから」
「それでなの」
「私も実は」
「白いマフラーが好きなのもやっぱり」
「私の場合はお母さんがしてたから」
「それでだというのである。」

第三十九話 あの場合へその二

「だから私もなの」

「あなたのお母さんが、なのね」

「そう。今でもそのマフラーはいつもしてる」

過去だけでなく現在もだと。話はそちらにも及んだ。

「それで自分で編んでお父さんにもプレゼントして」

「随分仲のいい夫婦ね、あなたのところのお父さんとお母さんって」

「だから好き」

椎名の顔が僅かだが微笑みになった。そのうえでの言葉だった。

「大好き」

「仲のいい親子かあ。いいわね、それって」

「そっちはどうなの？」

「うちもよ」

にこりと笑って答える星華だった。

「あなたのところと同じよ」

「そうなの」

「そういうこと。同じよ」

星華は椎名にそのことを繰り返して述べた。

「マフラーの色の理由は違うけれどね」

「確かに」

「けれど同じよ」

また言う星華だった。

「そうしたところはね」

「そうね。同じ」

「私達全然違っと思ってたけれど」

星華は椎名と話しているうちにだ。このことに気付いてきたのだ。そしてそのことをその椎名に対して直接話をするのだった。

「同じ部分もあるのね」

「人間は皆そう」
「そうなの？」
「同じ部分もあれば違う部分もある」
「そうだといいのである。」
「そういうものだから」
「ううん、そうなのね」
「そう。趣味が同じ場合もあるし」
星華にこのケースも話した。
「そういうことだから」
「これまで。そんなこと全然考えなかったけれど」
「変わった？」
「ええ、変わったわ」
その通りだと答える星華だった。素直な顔で。
「高校に入って。色々あつたし」
「そうね。私も色々あつた」
「こうして今。大嫌いだったあんたとも一緒にいて」
「だった、なのね」
「ええ、今は嫌いじゃないから」
自分でもそれが不思議で仕方ないといった顔でだ。椎名に話すの
だった。
「本当に人間って変わるものなのね」
「そう、色々と変わるもの」
「それもわかつたわ。お星様をこうして見に行くようにもなつたし」
「今度のお星様は」
「今の季節の星座を見るのよね」
「ううん、違う」
星座を見るかどうかについてはだ。椎名は首を横に振って答えた。
「見るのは星座じゃないから」
「あれっ、けれどお星様見るのよね」
「けれど星座は見ない」

椎名はまた星華に話した。

「それは見ないから」

「じゃあ何を見るのよ」

「それはそこに着いたら話す」

そうするといふのである。

「その場所に着いたら」

「そう、じゃあその時に御願いな」

「場所は寒いけれどもいい場所」

「寒い」

「けれど。安全な場所」

椎名はそのことは保障してきた。

「完全武装していなくてもいい」

「あれっ、気付いてたの」

「オーバーのポケットに」

椎名は星華のその黒いオーバーを見ながら話す。

第三十九話 あの場合へその三

「右に警棒、左にスタンガン」

「よくわかったわね」

「ポケットの膨らみでわかる」

殆ど目立たないがそれでもだというのだ。

「それで」

「ううん、鋭いわね」

「とにかく。そうした武装は必要ないから」

「悪い奴とか出て来たらどうするのよ」

「その時は私がやっつける」

このことも造作もなく言っただけのけた椎名だった。

「私の足で」

「そういえばあんた格闘技もしていたわね」

「そう。だから大丈夫」

その万が一の時もだというのだ。

「大抵の奴が来ても」

「大勢が来ても？」

「全然平気」

その場合でもだというのだ。平気だというのである。

「十人いても」

「私が足手まといになるかも知れないわよ」

「そうならないから」

「それより前にやっつけるの」

「男はある場所を蹴ればそれで一発で終わり」

椎名のその目が怖いものになった。

「完全に」

「つてことは。つまりは」

「急所攻撃」

やはり怖い目で言うのだった。

「それが一番」

「おっかないわねえ。そこ蹴るのね」

「そういう相手には容赦しない」

また言う椎名だった。

「だからいい」

「蹴り潰してもいいのね」

「むしろそれを狙う」

言葉も表情もさらに怖いものになる。

「悪いことを二度とできないように」

「まあそういうことする奴はね」

星華も何だかんだで椎名のその言葉に頷いた。

「報いを受けて当然だしね」

「だからいい」

椎名は言い切ってもみせた。

「そこまでしても」

「急所を一撃なのね」

「そう。これだったら一撃一撃で終わりだから」

つまり一人ずつそれで倒すというのである。やはり容赦がない。

「十人いても」

「相手が女だったらどうするの？」

「それはそれでやり方がある」

「急所攻撃しなくても？」

「急所は一つじゃない」

またこんなことを言うのだった。

「人間の身体の中にはそれが集まってるから」

「ああ、脳天とか喉とかお腹とかね」

「他にも一杯ある」

そしてだ。このポイントも指摘した。

「眉間とか」

「ああ、ここね」

星華は椎名の言葉を受けて自分のその眉間を右手の人差し指で指し示した。そうしてそのうえで彼女も椎名に対して言うのだった。

「ここ、攻撃したらいいのね」

「鼻と唇の間も」

「ここも？」

星華はそこも指差したのだった。

「ここも狙ったらいいの」

「そう。そこでもいい」

「ここも攻撃したらいいんだ」

「悪い奴は急所を攻撃して一撃で倒す」

一直線の言葉だった。

第三十九話 あの場合へその四

「そうする」

「一撃でなのね」

「だから安心したらいいから」

「じゃあ私もそうするから」

星華は自分もだというのだった。

「いざって時はね」

「そうするの」

「脳天とかならわかるから」

オーバーの右のポケットに手を入れて言う。そこに警棒があるのだ。

「これで殴ったら。一発よね」

「肩もいい」

「肩もなのね」

「肩を碎けば動けなくなる」

椎名は実に物騒な話をさらに続ける。

「それも手」

「あんた詳しいわね、そういうの」

「殺人拳でもあるから」

「人を殺す、ね」

「悪い奴にはそれ」

やはりこう言う椎名だった。

「ただし」

「ただし？」

「普段は活人拳」

そちらだというのだ。人を活かす方だというのだ。

「そっちだから」

「使い分けてるのね」

「そういうこと。まあとにかく」

「どんなのが来ても安心していいのね」

「その通り。夜でも」

「わかったわ。それじゃあね」

椎名のその言葉を受けて笑顔で応える星華だった。

「そこ、今からね」

「行こう」

こんな話をしながらだった。二人は電車でその場所に向かう。星華は椎名が言った駅を彼女と共に降りた。そのうえでそれから夜道を歩くのだった。

その中でだ。星華は自分の横にいる椎名に問うた。夜の住宅街を歩きながらだ。

「それでこれから行く場所って何処？」

「そのことね」

「ええ。もうすぐよね」

「そう。少し歩いたら着く」

こつ答える椎名だった。

「もう少し」

「こつからもう少し先に行ったら」

星華は前を見た。そこにあつたのは。

「海だけれど？」

「そう、海」

椎名はそこだと言った。

「海の方に行くから」

「そうだったの」

「行く場所は港」

具体的にそこが何処かも星華に話してきた。

「そこに行くから」

「そこでお星様見るのね」

「そう。私の一番のお勧めスポット」

「そうだったの」

「そこに行くから」

また星華に話す。

「嫌だったら他の場所に」

「嫌なんて言っていないから」

それはすぐに否定した星華だった。

「それはね」

「そう。それだったら」

「じゃあ港、行こう」

星華は明るく笑って椎名に述べた。

「そこにね」

「うん、いいのなら」

「嫌だったらはっきり嫌だって言うわ」

そこははっきりとしている星華だった。

第三十九話 あの場合へその五

「私そういうのはね」

「言っの」

「そう、言っから」

また椎名にこう言っのだった。

「ちゃんね」

「そこはつきぴーと違っのね」

「西堀とはなの」

「つきぴーは心の中で嫌だと思っていても中々そっだと言わない
それが月美だというのである。

「そっいう娘だから」

「はつきりしないっていうの？」

「優しいから」

そちらだというのだ。彼女の優しさ故だというのだ。

「だからなの」

「優しいのね、あの娘って」

「そう。とても優しい」

それが月美だというのだ。このことを星華に話すのだった。

「あんな優しい娘いない」

「はつきりしなくてうじうじしてっるって思ってたけれど」

「そっじゃなくて優しいの」

「そっだったのね」

「だから斉宮もああして」

「あの娘と一緒にいるのね」

「そっいうこと」

こっ話すのだった。

「それはわからなかつたの」

「ええ、ずっとな」

言葉はここでも過去のものだった。星華はやや俯き眉も目も暗くさせてだそうしてそのうえで自分の横にいる椎名に対して述べるのだった。

「鬱陶しくて嫌な奴だって思った」

「今は？」

「違うから」

やはりだ。過去のものだったというのである。

「そういう娘だったのね」

「誤解されやすい娘だから」

「そうね。私もそうだったし」

「けれど実は違う」

また月美に話した。

「そういう娘なの」

「本当は違っていたのね」

「そういうこと。けれど今は」

「わかったわ」

星華は自分に顔を向けてきた椎名に対して小さく頷いて答えた。

「私、馬鹿だった」

「馬鹿じゃないけれど」

「人の本当の姿。わからないのは馬鹿だと思う」

しかしだった。それがだとだ。星華は自省しながら言うのだった。

「だから。私は」

「それで」

「うん、だから馬鹿だった」

また言うのであった。

「本当に。酷いことをしてきたし」

「そう思うんなら」

椎名は顔を正面に戻していた。そのうえで今の言葉だった。

「それなら」

「それなら？」

「二度としなかつたらいい」

「二度とね」

「そう、それでいい」

過去は過去だとだ。それが椎名が星華に贈る言葉だった。

「それで」

「そうなのね」

「過去はその為にあるものだから」

「その為って？」

「いい思い出は思い出して楽しむもの」

まずはいいものから話した。

「悪い思い出は繰り返さない為にあるもの」

「それはなのね」

「そう、そういうもの」

こう話すのだった。

第三十九話 あの場合へその六

「だから。二度としなかつたらそれでいいから」

「あなたのお友達に酷いことしてきたこともなの」

「そう、それでいい」

椎名は星華に答え続ける。

「つきぴーもいっていうし私も」

「あなたもなのね」

「二度としなかつたら。それでいいから」

それで済ませるのだった。椎名は決して執念深い人間ではない。だからこそだ。今の、現在の星華にはこう話せるのだった。

そしてそのうえでだ。前を向きながらだ。

「着いたから」

そこは港だった。周囲の暗闇の中に立ち並ぶ倉庫が見える。そしてコンクリートの向こうから波音と。船の灯りが聞こえて見えていた。

それを耳と目にしてだ。星華も言った。

「ここね」

「そう、ここ」

まさにここだというのである。

「ここがその場所」

「本当に港ね」

「そう。ここがお星様が一番奇麗に見えるところ」

「静かね」

星華は周囲を見回した。誰もいない。あるのは倉庫とコンクリート、そして暗闇だけである。他にあるのは静寂だけだった。

そこに着いてだ。椎名はさらに言ってきた。

「ここだね」

「ここなの？」

「前に行こう」

今度はこう星華に言つのである。

「そこで」

「お星様見るのね」

「うん、そうする」

「わかったわ。それじゃあね」

「行こう」

こうしてだった。二人は前に出た。そこは港の端だった。コンクリートのすぐ下から波音が聞こえる。それを聞きながらだ。椎名が言ってきた。

「ここだから」

「確かに綺麗ね」

星華はもう上を見上げていた。そのうえでの言葉だ。

彼女の上には幾千幾万の星達が瞬いていた。白い星もあれば青い星もある。赤い星もだ。無数の星達が彼女の上で輝いていた。

椎名もその星達を見ていた。そうしてここでもだった。星華に問うてきたのだ。

「どうかな」

「ええ、こんな綺麗な夜空見たことないわ」

「こう答える星華だった。」

「今まで見た夜空の中で一番よ」

「気に入ってくれたのね」

「ええ」

笑顔で椎名の問いに答える。

「とてもね」

「そう。それはよかったわ」

「星座は。どれかしら」

星華がそれを見ようとするとだ。ここであった。

椎名はだ。穏やかな声で星華にこう言ってきた。

「それはいいから」

「いいつて？」

「今は星座はいいから」

「こう言うのである。」

「それよりもね」

「星座を見なくて何を見るのよ」

「お星様自体を」

それをだというのである。

「それを見ればいいから」

「星座とかそういうのは気にしないで」

「そう、全然気にしないでいいから」

椎名はこう言うのだった。

「全然ね」

「お星様だけを見れば」

「星座は確かに綺麗だけれど」

それでもだというのだ。椎名はその星達を見ながら同じ星を見て
いる星華に言うのだった。そうしてそのうえで話をするのだった。

「それでも。お星様自体も」

「そうね」

星華もだ。椎名のその言葉に頷いた。

「お星様自体もね」

「だからいいの」

それでだというのである。

第三十九話 あの場合へその七

「お星様は」

「それ自身が奇麗だから」

「しかも一つじゃない」

「いいところはさらにあるというのだ。奇麗なだけではなくだ。」

「一杯あるから」

「そうね。どれだけあるかわからない位に」

「まさに星の数だけある」

椎名は今度はこう言った。

「数え切れないだけ」

「奇麗なのが数え切れないだけあるのね」

「奇麗なものが一杯あって悪いことはない」

「それを考えたら」

「夜空程いいものはないから」

椎名は話す間もずっと夜空を見上げている。星華も話を聞きなが

ら同じことをしている。その無数の星達を見上げているのである。

それを見てだ。星華はまた言った。

「ねえ。見ると」

「見ると？」

「このまま夜空に吸い込まれそうよね」

微笑んだ。こう椎名に言うのである。

「何かこのまま」

「そう。あまりにも奇麗だから」

「そうよね、それはね」

「それと」

椎名の言葉がここで変わった。こうしたものだ。

「星の数だけって言ったけれど」

「それが何かあるの？」

「お星様は幸せでもあるから
そうだといいのである。」

「それは」

「幸せなの」

「そう、お星様は幸せ」

今度はこう星華に話すのである。

「そして恋でもあるから」

「言いたいことはわかったわ」

そこまで聞けばだった。星華は椎名に笑顔で返して述べた。

「恋も星の数だけっていいのよね」

「そう。数え切れないだけあるから」

「けれども言うわね」

星華はあえてである。意地悪い笑みを作って椎名にこう言ってみせたのだった。

「恋はダイヤモンドよりも見つけれないって」

「歌の歌詞ね」

「ええ、シングルベット」

「しゃ乱Qの曲だ。アニメのエンディングの曲にもなった。」

「それにあつたじゃない。見つけれないものじゃないの？」

「ダイヤなら」

しかしであった。椎名はここでもすぐに言ってみせたのだった。

「一杯ある」

「ないから高価なんじゃないの？」

「ほら、そこにある」

椎名は見上げているだけでなく上を指差してきた。そうしてであった。

その星達を指差しながら。こう星華に告げた。

「一杯。あり過ぎて困る」

「困るって？」

「ダイヤは夜空にもあるから」

「まさかそれって」

「白く光るお星様」

それだというのである。

「それが。ダイア」

「そう言われたら」

「そう。一杯あるもの」

こうだ。今も同じく夜空を見上げて星達を見ている星華に話すのだった。

「それも数え切れないだけ」

「ダイアは。あのダイアだけじゃなくて」

「夜空にもある。ダイアだけでなく」

それだけではないとだ。さらに言うのだった。

「サファイアもルビーも。一杯あるから」

「恋もそれだけあるのね」

「そう。お星様の数だけあるから」

「そうかもね。それじゃあ」

「佐藤さんって呼んでいい？」

椎名ははじめて彼女の名前を言ってきた。

「そう呼んでいいかな」

「えっ、ええ」

少し戸惑いを見せてからだ。星華は椎名のその問いに答えた。

「そういえばまだお互い名前で呼び合っていなかったわね」

「そう。だから」

「そうね。それじゃあ」

一呼吸置いてから。椎名のその問いに答えた。

第三十九話 あの場合へその八

「じゃあ。呼んでみて」

「佐藤さん」

椎名は実際に彼女の名前を呼んでみせた。

「どうかな」

「いいじゃない」

星華も椎名の今の呼び名に微笑んで返した。

「その呼び方」

「気に入ってくれた」

「ええ、そうよ」

その通りだとも答えた。そして今度は彼女から言った。

「じゃあ私もね」

「佐藤さんも」

「あんなのこと。呼んでいいわよね」

こう彼女に問うのだった。

「それでいいわよね」

「うん、じゃあ呼んでみて」

「椎名……さん？」

少し戸惑いながら。こう呼んでみせたのだった。

「どうかな。気に入ってくれた？」

「うん」

椎名もだ。微笑みを星華に向けてだ。そのうえで告げたのだった。

「いい」

「いいのね。じゃあ」

「こう呼ぶから」

笑顔で話す椎名だった。

「これから」

「そうしてね。それと」

「それと？」

「ねえ、これからどうしようかしら」

星華はこれからのことを椎名に尋ねた。

「ここから帰ったらね」

「そのままお家に帰ろう」

「これが椎名の言葉だった。」

「まっすぐに」

「まっすぐになの」

「そう、確かに誰が来てもやっつけられる」

その自信はあった。確かにだ。

「確実に」

「確実になの」

「そう、けれど」

それでもだとだ。椎名は慎重な口調で述べた。

「それでも」

「それでもなの」

「自分から危険なことをすることはない」

こう話すのだった。椎名は慎重論だった。それを言うのである。

「だから。真っ直ぐに帰ろう」

「そうね。それじゃあ」

「今日だけじゃないから」

「今日だけじゃないの」

「そう。またここに来よう」

最初に話に出した場所はこの港だった。

「他の場所にも」

「あのプラネタリウムも」

「そう、他の場所も何処も行けるから」

「こう話すのだった。」

「だから」

「それでなのね」

「今日は帰ろう」

「また。次ね」

「そう、次」

椎名はその言葉にだ。こうした意味も込めた。そしてそれを言うのだった。

「次があるから」

「次がなの」

「次はある。だから今は帰ろう」

「そうね。次があるわよね」

椎名の言葉にある意味がよくわかった。それだった。

星華は頷いてだ。あらためて彼女に言った。

「だから今はね」

「そういうことだから」

「わかったわ。じゃあ」

こうしてだった。二人はだった。

この日はそのまま帰った。だがそれからだった。

第三十九話 あの場合へその九

二人で話すことも多くなつた。二人は友達になつたのだ。月美もだ。そんな二人を見て言うのであつた。

「愛ちゃん、佐藤さんと最近」

「うん、そう」

その通りだ。椎名に対してこくりと頷いたうえで言うのだつた。

「友達になつた」

「そうなの。なつたのね」

「とてもいい娘だから」

「愛ちゃんが言うのなら本当にそうなのね」

椎名を完全に信頼しているからこそ。だからこそその言葉だつた。

「佐藤さんは」

「誰にもいいところがあつて悪いところがある」

椎名はまた言った。

「それはつきぴーもだし」

「佐藤さんもね」

「そういうこと。佐藤さんのいいところも一杯あるから」

「そうね。それはね」

「だから私達友達になつたから」

そんな話をしてだ。それからだつた。

椎名は。月美にあらためてこう話した。

「佐藤さんと一緒に色々な場所に行くから」

「そうするといいわ」

「うん、だからつきぴーも」

「私も？」

「斉宮とね。もっとね」

「有り難う。私、陽太郎君とずっと」

突き放しではなく月美が彼とより親密になることを願っていることがわかる。月美はそんな椎名の心を受けてそうして言うのだった。「一緒にね」

「いて。そうしてね」

「うん、そうするわ」

二人の絆をそのままに。椎名は星華との友情も深めていっていた。そうしてその中でだ。

学校の屋上のベンチに二人並んで座っていた。星華は青空を見上げながらこう椎名に言うてきた。

「あのね」

「どうしたの？」

「私最近ね」

青空を見上げ続けながら椎名に言うのだった。

「誰かに見られてるのかも」

「ストーリー？」

「多分違うわ」

それはないというのである。

「けれどそれでもね。誰かにね」

「そうなの」

「ひょっとしてだけれど」

微笑になつてだ。椎名に話す。

「私を好きな誰かな」

「だったらどうするの？」

「その誰かが私の前に出て来たら」

その時はだというのだ。

「そうね。その時は」

「相手によるわね」

「流石に明らかにおかしい相手は駄目だけれどね」

微笑のまま話すのだった。

「けれど。そうじゃなかったら」

「いいのね」

「うん、私の前に出てくれたらよ」

あくまでその場合はといつてもであった。

「そうしてくれたらね」

「わかった。それなら」

「それでいいのね」

「いいと思う」

椎名は星華の言葉に静かに応えた。

「それで」

「ええ、それじゃあね」

「あの時も言っただけね」

港で星を見たあの時のことである。

「恋はダイア」

「何処にでもあるのね」

「何処にでもある貴重なもの」

ここはだ。貴重だとも述べたのだ。

第三十九話 あの場合へその十

「そんなものは絶対に手に入れるべき」

「けれどよくない相手は」

「それは当然だけれど」

「そうでなかったらね」

「佐藤さん相手は選り好みする？」

椎名は正面を向いたまま星華に問うた。

「それはする？」

「選り好み？」

「そう。あれはいいとかこれは駄目だとか」

「そうした感じでだというのである。」

「そうした選り好みはするのかな」

「相当おかしな。犯罪者とかじゃなかったらだけれど」

星華はその駄目だという範囲はかなり狭めさせて述べた。実際の彼女の考えをだ。それを今椎名に対して述べたのである。そうしたのだ。

「けれどそうじゃなかったら」

「容姿よりもなのね」

「ええ、性格よ」

「そちらをより見るといふのだ。」

「性格が。やっぱり大事だから」

「その人の性格ね」

「性格を見るって難しいけれどね」

星華はこう言って苦笑いめいた笑みも浮かべた。

「それでも。性格悪い奴と付き合ってもよくないじゃない」

「そう。嫌な思いをする」

「意地悪だったり。エゴばかりとかね」

「そういう奴も実際にいるから」

「そういう奴は駄目よ」

星華もそこはしつかりと一線を引いていた。

「けれど。逆に言えばね」

「性格がよかつたら」

「顔とかはいいから」

「そうなのね」

「そう、あくまで性格だから」

このことは確かに言うのだった。

「それを見たいから」

「そういうことを意識していると」

「いいのね」

「その通り。佐藤さん絶対にいい恋愛できる」

椎名は太鼓判さえ出してきた。

「それももうすぐ」

「その言葉信じていいわね」

「是非」

そうしてくれというのである。

「そういうことで」

「有り難う。じゃあ今は待つわね」

その相手が自分の前に出て来るのをというのだ。

「じっくりとね」

「そうしておいて。それにしても」

「それにしても？」

「佐藤さんがどうして斉宮を好きだったか」

そのことをだ。ここで話に出してきたのである。

「それもわかった」

「どうしてかって？」

「斉宮はいい奴」

椎名もだ。とてもよくわかっていることである。それを言うのだ。
った。

「あんないい奴はいない」

「そうよね。それはね」

「だから佐藤さんも好きになった。それがわかった」

「昔の話よ」

今は違う。吹っ切ったからこそその言葉だ。

「もうね。それはね」

「けれどわかった。佐藤さんも」

「私も？」

「それだけの人。斉宮を好きになるだけの」

「それだけのものが私にもあるっていうのね」

「そうだ。だから」

それでだというjのだ。椎名は言葉を続けていく。

「幸せになれるから」

「今度の恋でね」

「そう、なれる」

間違いないといった口調でさえあった。

「安心しておいて」

「そうさせてもらうわね。楽しみよ」

星華も顔を正面に向けた。そうしてまた言った。

「本当にどんな相手かね」

「期待してるんだ」

「不安もあるけれど」

それは否定できなかった。今の彼女は期待と不安、その二つの感情が混ざり合っているのだ。それは自分でもよくわかってのことだった。

第三十九話 あの場合へその十一

「それでもね」

「どっちが大きいの？」

「期待か不安かどっちかよね」

「そう。それはどっち」

「そうね」

少し時間を置いて考えて。それからの返事は。

「期待かしら」

「そっちなのね」

「六分ね。期待が大きいわ」

その割合だというのである。

「そちらの方がね」

「多分。そうだと思った」

その割合まで聞いてだった。椎名はぽつりと述べた。

「それ位だと」

「予想してなの」

「おぼろにだけねど」

軍師としての才能をここでも出していたのである。

「それ位だって思った」

「とりあえず期待の方が大きいから」

このことをまた言う星華だった。

「そっちの方がね」

「そうなの」

「うん、正直今何かうきうきしてるし」

実際にだ。星華はそれを顔に出して述べた。

「その相手が誰かっていうのもね」

「それもなの」

「うん。それじゃあさ」

「それじゃあ？」

「吉報待ってて」

星華はその笑顔で椎名に述べた。

「宜しくね」

「うん。そうしてる」

こんな話をした。星華は期待していた。そしてだ。

ある日のことだ。橋口達がだ。放課後に部活に行こうとしていた彼女を呼び止めてだ。そうしてそのうえでこう言ってきたのだった。

「ねえ、星華ちゃん」

「ちよつと時間ある？」

「いい？」

「時間って？」

それを聞いてだ。星華は三人に顔を向けて問うた。

「何かあるの？」

「ちよつと会いたい人がいるのよ」

「男子ね。一年の」

「一組のね」

「一組の？」

それを聞いてだ。星華は少し考える顔になった。

そしとのうえでだ。こう三人に尋ねた。

「一組の誰？」

「ほら、天道っているじゃない」

「あのサッカー部のね」

「あの子よ」

「ああ、天道ね」

その名前を聞いてだ。星華はわかった。

サッカー部でDFをやっている。背が高くすらりとしている。彫のある顔で小さく厚い唇に黒く癖のある髪をしている。その生徒である。

そしてだ。その名前を聞いてまた言う星華だった。

「天道が私に？」

「そうなの。それでどうするの？」

「会うの？それで」

「今から」

「そうね」

星華はここで察した。彼女が感じていた視線の主が彼であることをだ。

そしてそれは隠したままでだ。三人に答えた。

「それじゃあね」

「うん、それじゃあ」

「会うのね」

「そうするのね」

「うん。それで何処にいるの？」

微笑になつて三人に尋ねた。

「天道、何処なの？」

「うん、そこにいるよ」

「あそこね」

三人は四組のクラスを指差した。他ならない彼女達のクラスだ。

「あそこにいるから」

「つていうか私達中に入れたの」

「丁度誰もいないしね」

それだけだというのである。

「だからね。それじゃあね」

「行こう、それじゃあ」

「今からね」

「ええ、それじゃあ」

そしてだった。星華はその微笑で頷いた。そのうえでだった。

クラスに向かう。三人はその彼女に言うのだった。

「どうする？私達もいようか？」

「星華ちゃんが会うのが不安だったら」

「それだったら」

「ううん、それはいいから」

笑顔でそれはいいという星華だった。

「私一人で大丈夫だから」

「大丈夫？」

「一人だけれど」

「それでも」

「うん、大丈夫よ」

星華はまたこう答えた。

「だから安心して」

「わかったわ。それじゃあね」

「星華ちゃん一人でね」

「頑張つてね」

三人も察していた。どうして彼が星華と会いたいというかだ。だからこそ彼女を気遣いもした。それで今こうして声をかけたのである。

そして星華はクラスに入った。彼女達のそのクラスにだ。

そしてだった。そこで、だった。彼女は新しい一歩を踏み出したのだった。

第四十話 それぞれの幸せその一

第四十話 それぞれの幸せ

星華はだ。この日も椎名と二人で屋上のベンチに並んで座っていた。た。

そうして青空を見上げながらだ。笑顔でこう話した。

「受けたわ」

「そうなの」

「ええ、それで今ね」

「付き合ってるのね」

「知ってるかな。一組の天道」

その相手の名前も話した。

「サッカー部のね」

「知ってる」

星華は前を見ていた。そのうえで星華に述べた。

「いい奴」

「そうなの。知ってたんだ、あんたも」

「一応学校の人間は大抵チェックしてるから」

「凄いね、それって」

「人間観察も趣味」

椎名はいつものぼつりとした口調で述べた。

「どういう人が見るのも」

「それだったのね」

「そう。それで知ってた」

何故知っていたか、椎名はこのことも話した。

「そう。天道だったの」

「付き合ってたまだちょっとだけねどね」

それでもだとだ。星華は上を見上げて青空を見ながら椎名に話していく。青空には白い雲がまばらにありだ。何処までも澄んだ青が

そこにあつた。

「それでもね」

「楽しい？」

「うん。天道優しいし気を利かせてくれるしだからだというのだ。」

「とてもいい奴だし」

「だからなの」

「うん、私達上手くやっていけそう」

そしてだ。椎名にこうも述べたのだった。

「これからね」

「よかつた」

椎名は星華のその言葉を聞いて微笑んだ。

「本当に」

「そう言ってくれるのね」

「うん。幸せになつて」

星華にこうも告げた。そしてだ。

「その天道がだけれど」

「どうしたの？それで」

「若し佐藤さんを泣かせたら」

その時はだというのだ。月美に対してのと同じ言葉だ。それを星華にも言うのだった。無論星華はそのことは全く知らないのであるが。

「その時は許さないから」

「そんなことある筈ないじゃない」

星華はその椎名に顔を向けて微笑んで述べた。

「あの子がさ。そんなこと」

「わかつてる。けれど」

「けれど？」

「それでも言う」

こう話すのだった。

「その時は容赦しないから」

「そうなの」

「友達だから」

だからだというのだ。これは椎名の決意だった。

「だから」

「有り難う」

星華は椎名のその言葉を受けてだ。真剣な顔で述べた。

「それじゃあね。その言葉ね」

「うん」

「受け取らせてもらうわ」

こう椎名に述べた。

「有り難くね」

「それじゃあ」

「それだけでねど」

星華は今度は自分から言った。

第四十話 それぞれの幸せその二

「今日はね。部活の後でね」

「一緒に帰るの、彼と」

「そう約束してるの」

笑顔に戻っていた。ただし先程のものより明るい笑顔である。

「今日からね」

「デートね」

「あっ、そうね」

椎名の言葉にだ。確かな顔で頷いた。

「そうなるわね。デートね」

「そう。二人で一緒に歩くとそれは」

「デートね」

「デートは。したことある?」

「実は」

その指摘にだ。星華は苦笑いになった。そのうえでの返事だった。

「ないの」

「そうなの」

「はじめてなの」

素直にこう話す星華だった。

「どうなるか心配だけれど」

「誰だって何でもはじめてだから」

「だから?」

「そんなに不安にならなくていいから」

椎名は前を向いて星華に述べる。これまでと同じだ。

「デートも」

「けれどね。それでも」

「不安になるのね」

「うん、どうしてもね」

そうだとだ。星華はここでも素直に述べた。

そしてその素直さでだ。己の中の不安もそのまま出していた。

椎名もそれを見ていた。前を向きながらも。そのうえでまた星華に告げた。

「不安なのはわかる」

「うん」

「けれど。落ち着いていけばいいから」

「わかってるけれど」

「不安で仕方ないなら」

椎名はどうしても不安を抑えられない星華を見てだ。こつも告げた。

「その場合はおまじない」

「おまじない？」

「ほら、あれ」

こつ言つてであつた。そのおまじないを話した。

「あの人という字を三回掌に書いて」

「それで飲む仕草をするのね」

「それをすればいいから」

それを話したのだった。

「結構効果あるから」

「じゃあ。それをね」

「して」

椎名は告げた。

「どうしても不安なら」

「ええ、そうさせてもらうわ」

星華も真剣な声で述べた。

「その時はね」

「そうして数をこなしていけば慣れるから」

「デートも？」

「そう、デートも」

そうした意味でだ。他のことと同じだというのである。

「同じだから」

「じゃあ。最初を何とかクリアしてね」

星華もだ。決心した顔になって述べた。

「これから。やっていくわ」

「そうして。じゃあね」

「うん、じゃあね」

二人で話してだ。実際に星華はデートをした。僅かの距離と時間だがそれでも椎名に言われたおまじないを実際にしてそれをした。

そしてだ。次の日だ。星華は朝に三人にこのことを話した。

「凄く緊張したけれど」

「上手くいったのね」

「そうなのね」

「はじめてのデート。成功だったのね」

「ええ、何とかね」

心から安堵してそして満ち足りた笑顔でだ。星華は言うのだった。

「いけたわ」

「おめでとう」

「よかったね、最初が肝心だったし」

「それならね」

「うん。それで今朝も」

今日もだというのだ。既にだ。

第四十話 それぞれの幸せその三

「駅から学校までね」

「あつ、したんだデート」

「朝からなんて」

「何か大胆」

「えっ、大胆かな」

星華は三人の言葉にきよとんとした顔になった。

「私、そんなに」

「だって朝からよ」

「朝からデートなんてね」

「誰かいるかも知れないのに」

三人はこう話すのだった。

「それで朝もって」

「やっぱりね。大胆よ」

「見つかったもいいのか？誰かに」

「うん、いいわ」

微笑んでだ。星華は素直に述べた。

「もうね。いいわ」

「本当にいいの」

「誰かに見つかったも」

「それでも」

「だって。付き合ってるのは事実だから」

それだけだというのだ。

「だからね。誰に見つかってもいいのよ」

「うっん、言い切ったわね」

「付き合ってるからって」

「星華ちゃん何か凄い」

「凄くないわよ」

星華はその微笑みのまま述べた。

「そんなの全然」

「そうかなあ。凄いよね」

「うん、凄い」

「本当にね」

三人はこう言って引かない。

「前の星華ちゃんだったからね」

「もう絶対に誰かの目を気にしてね」

「朝のデートなんて絶対にね」

「しなかったわよね」

「そうそう。確実に言えるわよね」

「これは」

「そうかもね」

そしてだ。星華本人の三人の今の言葉には納得する顔で答えた。

「前の私だったからね」

「怖かったでしょ、誰かに見つかるの」

「それで何か言われたらって思って」

「そうよね」

「そうね、絶対にね」

自分のことだからだ。それがよくわかった。

「なあってたわね」

「けれど今はね」

「そんな風に堂々と言えるし」

「変わったわよ」

変わったともいうのだった。

「それもよく」

「何か吹っ切れてそれで」

「新しいもの手に入れたって感じで」

「手に入れたことは手に入れたわ」

椎名と星のことをだ。自分の頭の中に浮かべながらの言葉だった。

「それはね」

「そうよね。やっぱり」

「だから変わったのね」

「そこも」

「そうなるわね。じゃあ」

そしてだ。星華は確かな微笑みになってここでこう述べた。

「朝のデートもね」

「うん、楽しんでね」

「そっちもね」

「よくね」

三人は微笑んでその彼女に告げた。そしてであった。

星華は朝も彼と共にいるようになった。このことは確かに見られて話題になった。だが彼女は微笑んでそれを聞き流すだけだった。

「事実だし」

まずはこう言ってだった。

第四十話 それぞれの幸せその四

「それにやましいところないし。平気よ」

「平気なんだ」

「そうよ。全然平気よ」

こう星子にも述べた。二人は今自宅でテレビを観ながら話している。テレビはクイズ番組だ。タレント達がおかしな解答を出している。

「何言われてもね」

「ううん、何かそれって」

「それって？」

「お姉の言葉じゃないみたい」

「こう姉を見ながら述べるのだった。」

「そんなに自信があるとね」

「自信っていうかね」

「違うの？」

「ううん、手に入れたから」

妹にもこう話すのだった。

「色々とね」

「色々って？」

「新しい友達に」

「まずは椎名のことだった。」

「それに。お星様見るようになったの」

「天体観測はじめたの」

「そうしたところね」

「道理で最近ちょこちょこどっかに行くと思ってたら」

「そうだったのよ」

「新しい趣味ね」

星子はただそう思ったただけだった。

「それで気分転換できた？」

「気分転換じゃなくてね」

「そうじゃないの？」

「ううんと。星座とかお星様自体を見てわかったのよ」

「そうだといいのである。」

「前向きにいくべきとかね」

「人生訓みたいね」

「そうかしらね。そう言ったらね」

「それでそういうのから勉強して」

「変わったんだと思うわ」

星華は自分の心を見て述べた。今見ているのはテレビではなかった。

「私もね」

「お姉、よかったね」

星子はそんな姉の言葉を受けて微笑みになった。

「そういうものが手に入って見えるようになって」

「自分でもそう思うわ」

「お姉綺麗になったし」

星子は姉の横顔を見て述べた。

「前よりね」

「そうかな」

「ええ、なっ たわ」

姉の横顔を見たまま再び述べた。

「前より。ずっとね」

「そんなことないわよ」

「ないって？」

「そうよ。変わらないわよ」

自分ではこう言うのだった。

「確かに。性格は変わったと思うけれど」

「性格はなのね」

「多分。前向きになったんだと思う」

陽太郎のことを振り切り椎名と友人になり星を知りだ。彼氏ができてのことである。

「けれど。別に顔は」

「うっん、変わったから」

「顔もなの」

「そう、だから綺麗になったのよ」

姉にまたこう話すのだった。

「とてもね」

「そう見えるの？」

「表情や雰囲気が変わったんだと思うわ」

それでだとだ。星子は予想を立ててきた。

「そのせいでよ」

「ああ、表情や雰囲気なの」

「ほら、暗い顔してたら」

そうした顔の時はだ。どうかというのだ。

「あまり綺麗に見えないし」

「そうね。不機嫌な顔したら本当にね」

「そうよ。逆に明るい顔だとね」

「表情もよく見えるわね」

「そうでしょ？そういうことなのよ」

姉に対して満面の笑顔で述べた。

第四十話 それぞれの幸せその五

「今のお姉にしてもね」

「うん、そうだったの」

「それでね」

星子は姉にさらに言ってきた。

「綺麗になったんだと思う」

「そういうことなの」

「そうよ。本当に今のお姉凄く綺麗だから」

「有り難う」

ここぞで。星華も遂に笑顔で頷いたのだった。

そのうえでだ。妹にこう言葉を返した。

「それじゃあだけれど」

「それじゃあ？」

「私もっと綺麗になるわね」

明るい笑顔で述べたのだった。

「そうなるわね」

「うん、そうしてね」

「絶対によ。そうなるから」

星華は確かな笑顔だった。

「私も。綺麗になる方がね」

「やっぱりいいわよね」

「自分からブスになりたい人っている？」

「あはは、それはないわね」

星子は姉の今の言葉は笑って否定した。

「絶対にね」

「だからよ。もっと明るくなって」

「綺麗にね」

「なるからね」

「うん、そうしてね」

「じゃあ今は」

テレビに目を戻した。そのうえでだった。

「テレビ観るから」

「そうするのね」

「勉強もするけれどね」

「どう？そっちの方は」

「大学。行けるかな」

微笑になつての言葉だった。

「このままね」

「そう。いけるの」

「八条大学は部内だからエスカレーターでいけるけれど」

「それでいけるのね」

「うん、それ何とかいけそうなの」

「そうだというのである。」

「本当に何とかだけれどね」

「よかったじゃない」

妹はその姉にまた言った。

「お姉も大学行きたいわよね」

「それはね。やっぱりね」

「だからよ。行きたいんだったらね」

「行けるにこしたことはないわね」

「だからね」

「そうね。じゃあ」

「いいことよ」

また姉に言った。

「頑張つてね。勉強の方もね」

「そうするわね」

姉妹の仲も明るいものに戻った。星華の明るさは完全に戻っていた。

そしてだ。佐山達もだ。相変わらずの明るさで楽しんでた。

この日はクラスでの休憩時間だ。二人で話していた。

「今度何処行く？」

「次の土曜？」

「ああ。何処行くんだ？」

「ううんと、そうね」

少し考えてからだ。津島は狭山に答えた。

「最近同じ場所ばかりよね」

「レストランとかな」

「だから違う場所行こう」

こう狭山に言うのだった。

「何処か他の場所にね」

「そうだな。じゃあ何処がいいだろうな」

「遊園地ならどう？」

そこならだというのだ。

「遊園地ね。そこでどう？」

「ああ、遊園地か」

「あそこのお化け屋敷凄いらしいし」

「そうらしいな。病院をモチーフにしてだよな」

「うん。そこにする？」

「ああ、じゃあそこにするか」

二人で話していた。そうしてそのうえで遊園地に決めたのだった。

第四十話 それぞれの幸せその六

その彼等のところにだ。陽太郎が来て声をかけてきた。

「二人で何話してるんだよ」

「ああ、ちよつとな」

「今度のデートのことだね」

二人は明るい顔でこつ陽太郎に返した。

「そのことだな」

「ちよつと話してたの」

「ああ、デートか」

陽太郎もそれを聞いて一旦目をしばたかせた。そのうえで言った。

「そういえば俺もな」

「ああ、どうなんだよそつちは」

「西堀さんと」

「今度どつかはじめて行く場所に行こつて話してるんだよ」

そつだというのである。

「どつかな」

「ふうん、それだつたら」

「遊園地行ったことある？」

二人は陽太郎にそこを勧めた。

「あそこはどうだ？」

「行ったことある？」

「あつ、そういえば」

そこを言われるとだ。陽太郎ははつとした顔になった。そのうえでの言葉だった。

「あそこはなかったかな」

「じゃあ行つて来たらどうだ？」

「遊園地にね」

「そつだな。それじゃあな」

陽太郎は二人の言葉に頷く。そうしてだった。二人に対してこう述べた。

「そこに行くな」

「ああ、じゃあな」

「そこにするのね」

「そうさせてもらうな。そういえばな」

陽太郎は考える顔になった。そうして言った。

「月美とそうした場所って」

「行ったことなかったのかよ」

「そうだったの」

「そうなんだよな。実は」

このことを正直に述べたのだった。

「映画館とかさ。シヨッピングは多かったけれどな」

「アーケード街も行ったよな」

「そうだったわよね」

「ああ。あそこもな」

そのことは覚えていた。それもよくだ。

「けれど。遊園地とかはな」

「なかったか」

「そうした場所は」

「だからちよつと楽しみなんだよな」

今度は微笑んでの言葉だった。

「一体どれだけ凄いんだろうな」

「それも楽しみにしてな」

「行ってきてね」

こんな話をした。そうしてだった。

陽太郎はだ。月美に実際に遊園地に行くことを提案した。するとだ。

月美もだ。微笑んでこう答えてきた。

「それじゃあそこに」

「いいんだ」

「陽太郎君と一緒にだったら
そうだというのである。」

「何処でも」

「ああ、それだったら」

「はい。それじゃあ」

こうしてだった。二人は遊園地に行くことになった。それが決ま
つてからだ。

月美はだ。陽太郎にこうも言ってきた。

「あの、それでなんですけれど」

「あれっ、何かあるんだ」

「はい。あの遊園地って確かお化け屋敷が有名でしたよね」

「ああ、それ知ってたんだ」

「実は私そういう場所が好きで」

期待する微笑でだ。陽太郎に言ってきたのである。

「それで遊園地に行ったら」

「まずはそこになんだな」

「はい。駄目ですか？」

陽太郎を見上げてだ。彼に問うてきた。

「そこに行くのは」

「あっ、実は俺もさ」

「陽太郎君も？」

「そこ行こうって考えてたんだ」

微笑んでこのことを話した。

第四十話 それぞれの幸せその七

「お化け屋敷にさ」

「あそこは本当に凄いつて聞いてます」

「そんなに凄いな」

「病院がモチーフになっていて」

既にだ。月美はこのことも知っていた。

「それでももう卒倒する位怖いらしいつて」

「怖いつていうのは聞いてたけれど」

「とにかく凄いらしいですよ」

また言う月美だった。

「そこには絶対にですね」

「他の場所もだけれどな」

「他もですね」

「遊園地って色々あるから」

それが遊園地の醍醐味である。色々な場所があつて楽しめる、そのうした場所なのだ。

「そこを巡つて」

「デートですね」

「俺達つてそうしたデートしたことなかったよな」

月美にもこのことを尋ねた。

「そうだよな」

「あつ、そうですね」

月美は言われてた。そのことに気付いた。それが顔にも出ていた。

「そういえばこれまでつて」

「アーケードとか映画館とかで」

「そうした場所はなかったですよな」

「だからいいかなつて思つてさ」

陽太郎はここでこのことも話した。

「狭山達とも話してさ」

「決められたんですね」

「そうなんだよ。それじゃあさ」

「はい。じゃあ何時にしますか？」

「今度の休みにしないか？」

陽太郎は日も述べた。

「それでどうかな」

「わかりました。それじゃあその時で」

「そうしような。剣道部も居合部も休みの時にさ」

「そうですね。そこで二人仲良く」

「デート。しような」

「はい、二人で」

にこりと、清らかな笑顔で応える月美だった。彼女は今幸せを噛み締めていた。そしてだ。そんな彼女達を見てだ。椎名も言うのだった。

マジックに入ってた。そこでコーヒーを片手にぱつりと呟いていた。

「いい流れね」

「そうだね。皆ね」

「難しいことだけれど誰もが幸せになれたら」

どうかとだ。椎名はテーブルを挟んで向かい側の席にいる赤瀬に對して述べた。二人もデートを楽しんでいるのだ。喫茶店での。

「それで言うことはなし」

「確かにそれって難しいね」

赤瀬も言った。

「誰もがってなるとね」

「人の望みはそれぞれ違っていて」

「重なることもあるから」

「だから誰もが適うことは難しい」

それでだというのである。

「それが世の中」

「そうだね。けれどね」

「そう。人はその中で生きるものだから」

「仕方ない部分もあるのね」

「何でも自分の思い通りにしようとする」

椎名の言葉はここでは批判めいたものになっていた。声の響きもだ。

「そして他人を平気で騙して利用する様な人間は」

「駄目だね」

「それは悪」

一言だった。

「悪だから」

「絶対的な善悪は関係なくても」

「そう。自分しなくて自分の思う通りにしたくて」

批判的な言葉を続けていく。

「それで手段をえらばないのは悪」

「そうだね。それは悪だね」

「そうした人間は実際にどんな嘘でもどんな悪事でも平気だから」

「自分しかないからだね」

「自分を絶対の存在と思う」

言うのはこの事実だった。世の中は広くそうした人間も実際にいる。究極のエゴイストと言っていい。そうした人間のすることはだ。

第四十話 それぞれの幸せその八

「そうした人間は法律もルールも関係ない」

「悪事が公になってもだね」

「平気。訴えられても裁判に負けないと平気」

「そして嘘を吹聴し続けるんだね」

「そんな人間には容赦しない」

言葉が鞭になっていった。怒りの鞭だ。

「けれど。そうした人間じゃなくて」

「その人に良心があつたら」

「その人は救われる」

そうなるというのである。

「そうでない人間は絶対に救われないけれど」

「それがこの世の摂理なんだね」

「その通り。幸せも色々」

幸せについても話すのだった。

「あるから」

「それを見つけていけばいいんだ」

「吹っ切るのが難しい場合でも吹っ切って新しい幸せを見つければ

いいから」

「一つの幸せにこだわらなくても」

「別の幸せがある。世の中はそう」

「うん。じゃあ」

赤瀬も椎名の話を聞いていく。じつとだった。

そしてそのうえでだ。椎名は赤瀬に顔を向けてだ。穏やかな顔で

述べた。

「私達も」

「僕達も？」

「赤瀬と出会えたことが私の幸せ」

こう彼自身に話すのだった。

「それはずっと大事にしたいから」
「有り難う」

「だから。今度のデートはね」

「デートは？」

「何処にする？」

二人もまただ。デートの話をするのだった。

「一体何処に」

「そう。面白い場所がいいかも」

「面白い場所？」

「例えば遊園地」

彼女もそこだというのである。

「そこで遊ぼう」

「あつ、いいね」

赤瀬も椎名のその提案に笑顔になる。

「それじゃあそこにね」

「行こう。それで最初は」

「何処に行くのかな、遊園地の中の」

「メリーゴーランド」

そこだというのである。

「メリーゴーランドに行こう」

「メリーゴーランド好きなんだ」

「メルヘン好きだから」

彼女の意外な趣味である。実はこれは赤瀬も知らなかった。誰にも明かすことのない、その趣味を今はじめて話したのである。

「それで」

「そうなんだ。じゃあ僕も」

「赤瀬もそれでいいの？」

「そう、いいから」

椎名を見てだ。笑顔で話す彼だった。

「椎名さんがそれで幸せなら」

「有り難う」

椎名は赤瀬の言葉にまた笑顔になった。

「それじゃあまずはメリーゴーランドに行つて」

「それから別の場所にだね」

「赤瀬は何処に行きたいの？」

「僕はジェットコースターかな」

彼はそこだった。

「体重制限に引つ掛かるかも知れないけれど」

「それでもなんだ」

「うん、できれば行きたいね」

照れ臭そうに笑つて椎名に述べる。

「そうしたいんだけどね」

「わかつた。それじゃあ」

二人もこんな話をした。そうしてなのだった。

それぞれのカップルは幸せに向かつていた。その幸せを感じてだ。

その中でだ。陽太郎はだ。家族と話すのだった。

「あかさ」

「月美ちゃんのこと？」

「それか？」

母と父はだ。すぐに息子に伝えてきた。今一家でリビングにいてソファ―に座りながらテレビを観ている。そのうえで話をするのだった。

第四十話 それぞれの幸せその九

「あの娘のことね」

「そうだな」

「えっ、まだ話してないけれど」

すぐに言葉を返してきた両親にだ。陽太郎は驚いた顔で述べた。

「何でわかるんだよ」

「だって。向こうのお家からもね」

「話があつたぞ」

「えっ、もう?」

そのことにだ。陽太郎は驚きを隠せなかった。先程まで以上にだ。

「きてたんだ」

「当たり前でしょ。結婚を前提のお付き合いなんて」

「父さん達も驚いたぞ」

「そういえば言ってたかな」

陽太郎は月美の家での彼女の両親との話を思い出した。それだつた。

「そんなことも」

「まだ高校一年だけれど」

「交際がこのまま順調に続けばと言ってきているからな」

「それさ。俺まだ」

陽太郎は難しい顔で両親に話した。

「高校一年だから。まだそんなことは」

「考えられなくてもね」

「それでもな」

しかし両親はその彼にまた話すのだった。

「考えておくのはね」

「それはいいことだからな」

「そうなんだ」

両親の話聞いてだ。とりあえずは考える顔になった。そうしてそのうえでだ。彼はまた言った。

「それじゃあ。やっぱり」

「じゃあ聞くけれど」

母がだ。にこりと笑って我が子に問うてきた。

「西堀さん嫌い？」

「月美が？」

「そうよ。嫌いなの？あの娘は」

「そんな訳ないじゃないか」

そのことはだ。すぐに反論した。

「何で嫌いなんだよ」

「好きよね」

「当たり前じゃないか。この世で一番好きだよ」

強い言葉で言い切るのだった。

「本当にさ。他の誰よりも」

「じゃあじっくりと考えてね」

「それから決めるべきだな」

「じっくりとなんだ」

両親のその言葉にだ。陽太郎は考える顔になった。言い切った強い顔がそうなつてだ。そのうえでまた両親に対して尋ねた。

「他の誰よりも好きだから」

「そうよ。だからこそね」

「幸せにしたいよな」

両親が言うのはこのことだった。

「だからこそよ」

「よく考えてだ」

「交際自体はいいんだよな」

陽太郎は両親が言う中でそのことを尋ねた。

「それは」

「ええ、そうしてね」

「そのうえで考えるといい」
「また言う両親だった。」
「大学卒業まで時間があるしね」
「その間な」
「何か月美のご両親と言うことが違うような」
「それはまあね」
「人それぞれの考えがあるからな」
「だからだというのである。彼の両親はだ。」
「それはそうなるわよ」
「やっぱりな」
「じつくりなんだ」
「ただ。決めたらだ」
「今度は父だった。強い声で言うのだった。」
「もう迷うなよ」
「あの娘を絶対に幸せにしなければ」
「ああ、それはわかってるさ」
「また強い顔になる陽太郎だった。そのうえでの返答だった。」

第四十話 それぞれの幸せその十

「絶対にな」

「その心は絶対に忘れるな」

「いいわね」

両親は同時に彼に告げた。

「いいな、それは」

「何があってもよ」

「つまりあれだよな」

陽太郎は両親の言葉を受けてだ。二人の言うことをこつまとめた。

「決めるまでにはじっくりと時間をかけて」

「そうよ」

「それでな」

「決めたらもう迷うなっていうんだよな」

「そういうことよ」

「絶対に迷うなよ」

また言う両親だった。まさにその通りだった。

そうしてそのうえでだ。再び我が子に述べた。

「幸せにしなさいね」

「いいな、あの娘はな」

「幸せになんだ」

「人を幸せにすれば自分も幸せになれるのよ」

「人間はそういうものだからな」

二人で話す。そうしてだった。

陽太郎はだ。また考える顔になった。その顔を見ている二人だった。

自然と微笑んでだ。また息子に言った。

「けれど。陽太郎もね」

「そうだな。成長したな」

「成長したんだ」

そう言われてだ。陽太郎は少しきよとんとした顔になった。表情がよく変わる。その中でまた話す彼だった。自然と言葉が出る。

「俺って」

「だって。相手のことも考えられるようになってきてるでしょ」

「こつした話をするこゝ自体がな」

「なってるかな」

首を傾げさせる。やはり実感はないのだった。

自分では実感できない。しかしそれでも両親は話した。

「幸せにしたいでしょ」

「あの娘のことは」

「ああ、絶対にな」

それは間違いないとだ。答えることができた。

「そうじゃなければ意味ないしさ」

「そう思えることがよ」

「成長した何よりの証なんだよ」

「そうかな」

「そう思うよ」

今度はだ。横から妹が言ってきた。楽しそうにお茶を飲みながらだ。

「お兄ちゃん大きくなったし」

「いや、背の話じゃないだろ」

「背もだけれど」

それだけではないというのだ。妹だから見えていることだった。

その見えているものをだ。兄自身に話した。

「心が凄く大きくなったよ」

「そうか？」

「あまり私のこと怒らなくなったし」

それを言うのだった。

「何時も笑ってるようになったし。大きくなったよ」

「それって大きくなったってことか？」

陽太郎は妹のその言葉に首を捻った。

「違うんじゃないか？ちよっと」

「いえ、違うないわよ」

「そうだぞ。その通りだぞ」

だが両親はその妹の言葉をよしとするのだった。

「陽子はよく見てるわ」

「御前のそうしたところまでな」

「えっ、そうなんだ」

両親の指摘にだ。陽太郎は目を丸くした。まさかと思ったのである。

「陽子の言う通りなんだ」

「ええ、そうよ」

「そうだぞ」

「そうなんだ」

またこの言葉を出した陽太郎だった。

「陽子の言う通りなんだ」

「大きくなったな」

「本当にね」

両親は笑顔で息子に話す。

第四十話 それぞれの幸せその十一

「けれどももつとな」

「今よりも大きくなれるわよ」

「もつとつて」

「人間の器の大きさには限りがないんだ」

「だからよ」

それだだというのである。我が子への話を続ける。

「どうやら御前は佐藤さんと付き合つてな」

「物凄くいいことになったわね」

「月美のことは確かに好きだけれど」

それでもだというのだ。陽太郎は実感が湧かないまま述べていく。

「けれど。付き合つてて人間つて大きくなるかな」

「そこから学ぶことがあればな」

「大きくなれるのよ」

「そうなんだ。学べればなんだ」

そう言われるとだ。陽太郎も少しだけわかった。

それでだ。二人はまた話すのだった。

「付き合うことでも大きくなれるんだ」

「人間の付き合いってそうだからな」

「色々勉強になるものでもあるのよ」

「あつ、そういえば」

それを言われるとだ。陽太郎はさらにわかった。

それでだ。それを言葉にも出して話した。

「椎名とか。狭山達と一緒にいて」

「勉強になるな」

「御友達と一緒にいたら」

「なるなあ。確かにそうなんだよな」

腕を組んでだ。考える顔で述べた。

「何か友達の行動とか言葉ってな」
「そうだろ。お父さんもそうだった」
「お母さんもよ」
二人もだというのだ。二人はここではその人生の経験から話した。
「人と付き合ってたってな」
「色々と勉強になったのよ」
「だからなんだ」
「お兄ちゃん、もっと大きくなって」
また横から言ってきた陽子だった。
「もっともつとね」
「ああ、わかったよ」
陽太郎はその陽子にだ。笑顔で返すのだった。
「俺、もっと大きくなるよ」
「私もそうなるから」
「陽子もか」
「うん、大きくなるよ」
満面の笑顔でだ。こうも言う彼女だった。
「お日様みたいだね。大きくね」
「お日様？ああ、そうだよな」
妹の今の言葉にだ。陽太郎は笑顔になってだ。それでこう言ったのだった。
「俺だつてそうだしな」
「私の名前つてお日様の名前よね」
「そうだよ。俺もな」
その陽という文字だ。まさにそれなのだった。
「お日様だからな」
「お日様つて大きいよね」
「ああ、凄く大きいよ」
「それで暖かくて。皆を照らして」
「陽子はそういう人になりたいんだな」

「うん、そうなの」

兄の顔を見てだ。満面の笑みで答えたのだった。

「私そうなの」

「じゃあ俺も」

自分の名前を思い出してだ。そうしての言葉だった。

「なるよ。絶対にな」

「うん、なるうね」

二人でだ。満面の笑みでこう話した。そんな話をしていた。

その二人を見てだ。両親は笑顔になっていた。このうえなく優しく暖かい笑顔で子供達を見ていた。両親も幸せを感じていたのだ。

第四十話 完

2011・2・3

最終話 空に星が輝く様にその一

最終話 空に星が輝く様に

星華はだ。三人と教室で話していた。

「遊園地に行つてね」

「あつ、お化け屋敷ね」

「あそこよね」

「あそこに行くのね」

「ええ、物凄く怖いらしいけれど」

それでもだとだ。三人に明るい笑顔で話す。

「だからこそね」

「そうそう、やっぱりお化け屋敷つてね」

「怖くないと意味ないからね」

「それもとびつきりじゃないと」

三人もだ。明るい笑顔になっている。そのうえでの言葉だった。

「それで星華ちゃん」

「他にも行くよね」

「他の場所にも」

「ええ、行くわ」

晴れ渡った顔だった。一点の曇りもない。

「二人でね。今からとても楽しみよ」

「じゃあ私達もね」

「その日何処に行く?」

「そうね。何処かね」

三人は女同士でだ。何処に行こうかという話をしだした。そしてだ。星華はその三人にだ。あの場所を勧めたのだった。そこはというつと。

「それだつたらね」

「それだつたら?」

「何処かい場所知ってるの？」

「百貨店なんかどう？」

そこをだ。三人に勧めたのである。

「八条百貨店ね。あそこどう？」

「あつ、あそこね」

「いいかもね、あそこも」

「そうよね」

三人はだ。星華のその言葉を聞いてそれぞれ納得した顔になった。そうしてそのうえでだ。明るい笑顔に戻ってこんなことを話すのだ。つた。

「わんこそば食べる？」

「それで手形取ってね」

「そうする？」

「それもいいけれど」

星華はだ。蕎麦の話をする三人にさらにこう話した。

「プラネタリウムはどうかな」

「屋上なあそこね」

「あそこもなの」

「そう、あそこはどう？」

「ううん、どうかしら」

「そうよね」

三人はだ。星華の言葉にまずは戸惑った。

しかしその戸惑いをすぐに消してだ。三人で話すのだった。

「言ったことないけれどね」

「何かあるって聞いてたけれど」

「一回言ってみる？」

「そうする？」

こう三人で話してだ。それからだった。

星華に顔を戻してだ。にこやかに答えた。

「ちょっと行ってみるね」

「折角勧めてくれたんだし」

「それじゃあね」

「うん、そうしてくれたら嬉しいわ」

星華もだ。明るい顔で彼女に応えた。

「それじゃあね」

「うん。そこで出合いがあればね」

「それに越したことはないし」

「そうよね」

こんな話もした。そうしてだった。

三人はプラネタリウムに行くことにした。三人も三人で明るい場所に出ていた。そしてそこで笑顔でいられるようになっていた。

星子もだった。彼女は学校から帰った姉に笑顔でこう言ってきた。

「今日模試の結果わかったのよ」

「あつ、今日だったの」

「そうだったのよ。今日だったのよ」

こう話すのだった。

「それでね。判定はね」

「八条高校、どうだったの？」

「Aだったわ」

満面の笑みでだ。こう姉に話したのだった。

最終話 空に星が輝く様にその二

「絶対いけるって」

「そう、じゃあこの調子でいったら」

「来年はお姉と同じ学校ね」

そのことがだ。嬉しくて仕方がないといった顔だった。そしてその顔でだ。姉に対してさらにこんなことまで話してきたのだった。

「ただ制服はね」

「どの制服にするの？」

「今考えてるの」

にこにことしての返事だった。

「受かってからでいいかな」

「そう思うわ。受かってからじっくりとね」

「考えればいいよね。じゃあ今は」

「勉強ね」

「うん、頑張るわ」

ことう姉に答えた。

「私もね」

「私もね。頑張るからね」

星華もだ。にこりとして妹に告げた。

「これからね」

「うん、明るく頑張ってるね」

「そうするからね」

その笑顔にはもう曇りはなかった。星華にはもうそれはなかった。そしてその明るい顔でだ。そのデートに赴くのだった。

デートの待ち合わせ場所はだ、相手の提案でだ。駅前の本屋だった。

そこで立ち並ぶ本、椎名の影響で純文学のコーナーを見回っていた。そうしながら相手を待っていた。

その中でだ。彼女は一冊の文庫本を手に取った。それは。

堀辰雄だった。音楽を思わせる独特な文体、実際に音楽からヒントを得たその文体で有名な作家だ。その作家の本を手に取った。

そこでだ。こう声がしてきた。

「風立ちぬなんだ」

「あつ、来たのね」

「うん、待った？」

相手だった。すらりとした長身が彼女の左にあった。

その彼がだ。爽やかに、春を思わせる笑顔で彼女に声をかけてきたのだ。

「ひよつとして」

「ううん、今来たところよ」

事実だが、だ。社交儀礼に聞こえる言葉であった。

「今ね」

「そうなんだ」

「そうよ。それでだけれど」

「その本？」

「最近。友達の影響受けてね」

椎名のことだ。言いながら彼女のその顔を思い出す。無表情だが微かに笑っている、その顔を思い出しながら話をするのだった。

「それで読むようになったの」

「堀辰雄をね」

「この作家って凄いの？」

「文章が凄いらしいね」

彼はこう星華に答えた。

「聞いた話だとね」

「あつ、読んだことないの」

「小説は。推理系ばかりなんだ」

そちらが趣味だというのである。

「コナン＝ドイルとかね」

「ホームズね」

「大好きだよ。子供の頃は少年探偵団のシリーズ読んでたし」

「あっ、二十面相の」

「そうなんだ。そういうのが好きなんだ」

「推理小説ね」

「最近のお勧めはあれかな」

「ここだ。彼は星華にこのシリーズを出してきた。」

「エルキュール」ポワロね」

「クリステイだったわよね」

「それ読んでるんだ」

「映画とかで観たけれど」

「小説もいいよ。読んでみたらどうかね」

「そうね。一度ね」

「微笑んでだ。それで答えた星華だった。」

「読んでみるわ」

「うん、それじゃあね」

そんな話をしてだ。その本を買ってから店を出て遊園地に向かった。その遊園地に向かう電車の中でだ。彼は今度はこう星華に言った。その遊園地に向かう電車の途中でだ。彼は今度はこう星華に言った。

「学校じゃやっぱり制服だけれど」

「制服だけれど？」

「私服っていいよね」

「こう彼女に話してきたのだった。」

最終話 空に星が輝く様にその三

「自由に着られるからね」

「うちの学校制服色々あるけれどね」

「それでもね。やっぱりこうした時はね」

「私服がいいわよね」

「佐藤さんはあれ？」

その星華の私服を見ての言葉だった。彼の服は黒いジーンズに黄色のジャケットである。ジーンズにその長い足がよく出ている。

「私服はいつもそんな感じ？」

「ええ、そうなの」

その通りだと答える星華だった。白いコートにだ。青いスラックスという格好だ。その首にはだ。白いマフラーが巻かれている。相手に比べていささか重装備である。

「こうした感じなの。ズボンで」

「ズボン好きなんだ」

「動きやすいからね」

こう彼に答えた。

「だからなの」

「ああ、そうだね」

彼もだ。星華のその言葉ににこりと笑って答えた。

「ズボンって女の子でもそう言うよね」

「本当は学校でもね」

「ズボンの方がいいんだ」

「そうなの。けれど制服は絶対にスカートじゃない」

「うちの学校でもそうだしね」

確かに多くのデザインの制服がある。だがそれでもなのだった。

女子の制服はどれもスカートである。そのことだけは変わらないのだった。

それがわかっているからだ。彼も言うのだった。

「そこがあれなんだ」

「スカートもいいけれどね」

星華はスカートも認めるのだった。

「女の子しか着られない服だし」

「だからいいんだ」

「スカートを穿くのは女の子の特権だし」

「それでなんだ」

「そうなの。個人的にスカートも好きなの」

ズボンも好きだがスカートもだというのだ。どちらも好きな星華だった。

「デザインは選ぶけれど」

「どんなデザインのスカートが好きなの？」

「実はロングが好きなの」

そちらが好きだというのであった。

「フレアースカートとかね」

「長いのがなんだ」

「冬暖かいから」

それが理由だった。星華がロングスカートを好む理由は。

「だからね。好きなの」

「暖かいから？」

「ミニだと冬寒いじゃない。だからロングなのよ」

「ひよつとしてズボンも」

「その理由もあるの」

ここでは星華の笑みは少し照れ臭そうなものだった。

「暖かいから」

「成程ね。暖かいからなんだ」

「そうよ。女の子って寒がりなのよ」

「よく言われるけれどそうだったんだ」

「覚えておいてね。じゃあ遊園地に着いたら」

「お化け屋敷だね、最初は」

「ううん、そこじゃなくて」

笑顔でだ。星華が言った場所は。

「食べよう。最初にね」

「あっ、食べるんだ」

「ハンバーガーかラーメンか」

そうしたものを食べるといつのだった。

「ううんと、一番いいのはおうどんかしら」

「うどんなんだ」

「あつたまるから。だからね」

それでだというのだった。ここでもその話をするのだった。

「それでどう？」

「うどんね。いいね」

「そうでしょ？あつたまるし美味しいし」

「あそこの遊園地って食べ物もいいしね」

「美味しいよね。軽食が多いけれど」

遊園地で食べるものといえば大抵軽食やお菓子である。そうしたもの食べて楽しむ場所なのだ。軽食もまた楽しむものというのが遊園地なのだ。

最終話 空に星が輝く様にその四

「クレープもあるしね」

「あつ、クレープ好きなの」

「うん、好きなんだ」

彼からの言葉だった。そうだといつのである。

「意外かな、それは」

「意外じゃないわ。けれど」

「けれど？」

「クレープもね。食べたくなってきたわ」

「じゃあおうどんの後でね」

「食べよう」

電車の中で笑顔で話をしていた。そうして遊園地に向かうのだった。二人は実際に遊園地に入るとまずはうどんとクレープを食べた。それで身体を温めたのだった。

そのうえでスナックを出てお化け屋敷に向かう。周りは家族連れやカップルばかりだ。誰もが明るい顔であちこちの施設を歩き来している。

その中でだ。星華が彼に言う。右隣にいる彼にだ。

「いよいよね」

「そのお化け屋敷にね」

「行こう」

一言での言葉だった。

「それじゃあね」

「うん、それじゃあね」

彼も笑顔で応えた。

「ただ。覚悟が必要だね」

「物凄く怖いんだっけ」

「もう子供が入って泣き叫ぶ位らしいよ」

子供が泣くというのならだ。それは本物だというのである。

「途中逃げ出す子もいるらしいし」

「そんなに凄いの」

「それでも行くよね」

「ええ、行くわ」

彼の話聞いて内心少し怖いものを感じた。しかし意を決してだ。答えたのだった。その決意が顔にも出てしまっていた。それでもだつた。

「是非ね」

「うん、二人でね」

こうしてだった。二人はお化け屋敷に入った。そこは噂通りだった。暗い病室の中に次から次に動く死体やら狂った医師やら不気味な看護婦やらが出て来る。時折光る青い照明がさらに不気味さを醸し出す。

その中でだ。星華は何とか己を保っていた。しかしだった。

お化け屋敷を出るとだ。彼女はもう泣きそうな顔になっていた。それでほっとなっていた。

その彼女を見てだ。彼が言ってきた。

「怖かった？」

「ちよつとね」

本音を隠しての言葉だった。

「怖かったわ」

「そうだったんだ」

「いや、凄かったわよね」

つついいた。本音を出してしまった。自分では気付かずに。

「あんなに怖いなんて」

「そうだね」

彼はだ。星華のそうしたことはわかっていた。しかしそれはあえて言わずにそつとしておいてだ。そのうえで彼女にこう話したのだつた。

「それでだけれど」

「今度は何処に行く？」

「ジェットコースターはどうかね」

「こつ星華に勧めるのだった。」

「そこはどうかね」

「そうね」

ジェットコースターと聞いてだ。星華は少し考える顔になった。それからあらためて彼に答えた。

「じゃあ次はね」

「そこにするんだね」

「いいかしら、ジェットコースターで」

「いいよ」

笑顔でだ。星華に答えた彼だった。

「じゃあ次はそこにね」

「行こう」

こつして次はジェットコースターに向かうことになった。しかしここでだった。

椎名に会った。赤瀬も一緒だ。星華は二人と鉢合わせしてだ。微笑んでこつ言ったのだった。

「あんた達も来てたのね」

「うん」

椎名はその星華に微笑んで答えた。そうしてこつ彼女に言うのだ。つた。

「ジェットコースターだけれど」

「行って来たのね」

「楽しかった」

こつ話すのだった。

「是非行くといい」

「わかったわ。それじゃあね」

「行って楽しむ」

ՀԱՆՐԱՊԵՏՈՒԹՅԱՆ ԳՐԱԴԱՐԱՆ

最終話 空に星が輝く様にその五

「それじゃあ私達は」

「そっちはこれから何処に行くの？」

「とりあえず食べる」

そうするとういふのだった。

「御弁当持って来たから」

「椎名さんの手作りなんだ」

赤瀬も話してきた。

「それをね。今からね」

「そう。あんたお料理も好きなのね」

「好きな相手には手料理」

椎名はこんなことも言った。そこには普通の響きがあった。

「だから」

「そうよね。じゃあ私も今度ね」

「作るのね」

「やってみるわ」

こう椎名に話すのだった。

「とはいっても作られるのって和食だけだけれどね、まだ」

「和食なの」

「うち和食が多いから」

それでだといふのだ。家の食べ物嗜好がそのまま出る形になっ

ていた。

「だからね」

「そうなの」

「それでいいかな」

星華はここで彼氏に顔を向けて尋ねた。

「和食で」

「うん、いいよ」

天道ににこりと笑って彼女に答える。

「それじゃあ。その時はね」

「楽しみにしておいてね」

「今も楽しんでね」

また星華に言う椎名だった。

「そっちもね」

「ええ、わかってるわ」

星華もその椎名に笑顔で答えた。

「それじゃあ。またね」

「うん、またね」

こうしてだった。星華は天道と共に椎名達と別れた。椎名はその彼女を見送ってだ。そのうえでこう赤瀬に言ったのだった。

「いい感じ」

「そうだね。仲いいよね」

「よかった」

そしてだった。こうも言うのだった。

「あのままだといける」

「幸せになれるね」

「うん、もうあの娘は大丈夫」

星華はというのだ。大丈夫だというのである。

「安心していける」

そしてだ。星華についてこうも言うのだった。

「友達が幸せになるのは」

「いいことだよね」

「そう、凄くいいこと」

こう話すのだった。

「ほっとした」

「友達。もう一人できたしね」

「大切にする」

星華のことをだ。そうするというのだった。

「絶対に」

「そうだね。友達だね」

「宝物。何にも換えられないもの」

「だからこそ。大切に」

「何があっても守るから」

こうだ。赤瀬に話すのだった。椎名はその幸せを楽しんでいる友達達の背中を見ていた。そのうえで今はこの上なく優しい顔になっていた。

狭山と津島はコーヒーカップの中にいた。回転するその中にいるがらだ。二人で賑やかに話をしていた。

周りのカップの多くにも彼等と同じカップルや家族がいる。そうした人達を見てだ。二人はこんなことを話すのだった。

「ねえ」

津島の方からだった。

「ここいいわね」

「だよな。ちよっと酔いそうだけれどな」

「あんた酔う体質だったっけ」

「そうじゃないけれど何かな」

明るい笑みを浮かべながらだ。彼は津島に話すのだった。

最終話 空に星が輝く様にその六

「こつも回転してるとな」

「そんな気になるのね」

「何かな。そうなるんだよな」

こつ話すのだった。

「ちよつとな。気のせいだけれどな」

「そうなの」

「ああ。それに」

「それに？」

「ちよつとこつはな」

「こつはつて？」

「何か妬げるな」

笑いながらの、明るいそのままの言葉だった。

「周りカップル多いしな」

「何言つてんのよ」

その言葉を聞いてだ。津島は笑ってこつ言つたのだった。

「それは私達もじゃない」

「ああ、俺達もか」

「そうよ、カップルじゃない」

自分達もだ。そうだといふのである。

「だったら妬くことないじゃない」

「妬かれる方が」

「それよ。だからそれはしなくていいから」

「じゃあ妬かれるか」

「そうしよう。周りもそう言ってるかもね」

「あはは、そうかもな」

そんな話をしてだった。そうしてだった。

二人で楽しんでいく。その中でだ。最初に気付いたのは津島だつ

た。

「あつ」

「あつ？何かあったのかよ」

「ほら、あそこ」

津島から見てだ。右手を指し示しての言葉だった。

「あそこのカップル」

「んっ？ありゃ」

津島が指差した先にいるカップルを見る。するとそこにいたのは。

「あの四組の」

「そう、佐藤さんと」

「一組のあれか。サッカー部の」

「天道君だったっけ」

「天道宗次だったか？」

彼の名前は狭山が言った。

「確かそうだったよな」

「そんな名前だったっけ」

「そうだったと思うけれどな」

「とにかくよ。二人よね」

津島は二人が共にいることについて言った。問題はそこだといふのだ。

あの二人一緒にいるわよね」

「ああ、間違いなくな」

「デートね、つまりは」

「いや、それは見ればわかるだろ」

「それはそうだけれど」

「あの二人も付き合ってたんだな」

狭山はコーヒーカップの中で冷静に述べた。

「成程な」

「あんた何か冷静ね」

「だってよ。騒ぐことでもないだろ」

だからだというのである。

「誰と誰が付き合ってもいいじゃねえか」

「うっん、かなり気楽に考えてるわね」

「深く考えても仕方ないだろ」

「言われてみればそうかしら」

津島も首を傾げながらもだ。狭山のその言葉に頷く。

そうしてだった。そのうえであらためて話すのだった。

「むしろ喜ぶべきことかしら」

「そうなるんじゃないか？」

「そうね。じゃあ二人を祝福してね」

津島は狭山の言葉を聞いてこの考えに至った。そうしてそのうえ
でだ。狭山に顔を向けてにこりと笑ってこう話すのだった。

「私達もね」

「俺達もかよ」

「楽しめばいいわよね」

その笑顔での言葉だった。

最終話 空に星が輝く様にその七

「そうしたらいいわよね」

「そうだよな。じゃあ次は何処に行くんだよ」

「ホテルとか？」

当然冗談である。しかしだった。

その言葉を聞いてだ。狭山は思わず吹き出してしまった。そのう
えでこつ津島に対して返すのだった。

「おい、いきなり何言ってるんだよ」

「冗談よ」

「冗談でもそれはないだろ」

顔を真っ赤にして津島に言うのだった。

「だからよ、それはよ」

「焦った？」

「焦らない方がおかしいだろ」

こつ言うのだった。

「全く。何を言うかと思えばよ」

「あんたそういうところは意外と奥手なのね」

「奥手ってよ」

「積極的にこつ。若さ故の情熱に任せてとかないの？」

「して欲しいのかよ」

狭山は顔を顰めさせて津島の今の言葉に問い返した。

「したらどうするんだよ」

「まずひっぱたくけれど」

「ひっぱたかれてそれでいいって奴はいないだろ」

狭山は己の考えを述べた。

「間違ってもな」

「まあそうなるわね」

「つたくよ。今のは効いたぜ」

「効いたの」

「それこそあれだよ。必殺ブローみたいなもんだったぜ」

懐かしのボクシング漫画の話だった。かつてある少年雑誌で連載され様々な必殺技が披露された。それで有名な漫画の話だった。

「銀河が見えたぜ」

「銀河って。極端ね」

「それだけ効いたってことなんだよ」

「全く。言い過ぎよ」

「言い過ぎじゃねえよ。けれど次だよな」

狭山はその話に戻した。

「次は何処に行くんだよ、それで」

「あまり考えてないけれどね」

実はそうなのだった。津島の返答は今一つ以上に要領を得ないものだった。

「何処に行こうかしら、本当に」

「そういえばメリーゴーランドとか言ってなかったか？」

「それじゃあそこに行く？」

「そうするか？それじゃあな」

こんな話をしながらだ。二人も楽しい時間を過ごすのだった。

それは星華と天道もだった。二人で仲良くお喋りをしながらジェットコースターに向かいそこでも楽しんだ。そしてそこから降りた時だった。

そこにだ。あの二人がいたのだった。

「えっ……」

「あれっ、御前もかよ」

星華も彼もだ。同時に声をあげた。

「来てたの、遊園地に」

「ああ、そうなんだよ」

こうだ。お互いにきよとんとした顔で言い合う。

「実はさ」

「そうだったのね」

「それでさ、佐藤」

陽太郎は表情を普通のものにしてから星華に尋ねた。

「ジェットコースターどうだった？」

「どうだったって？」

「いや、面白かったか？」

陽太郎がここで月美に尋ねたのはこのことだった。

「それな。どうなんだ？」

「いいわよ」

月美は微笑んでこう答えたのだった。

「スリルがあつてね」

「そうか。じゃあ月美」

「はい」

彼の隣にいた月美がだ。笑顔で応えたのだった。

「今度はジェットコースターな」

「それにしましょう」

「そっちは何処に行ったの？」

星華もまた陽太郎に尋ねたのだった。彼女は微笑になっている。

暖かい微笑だ。

「さつきは」

「ああ、電車に乗ってたんだよ」

「電車になの」

「この遊園地つて電車も走ってるだろ。それで池のところとかな」

「見てたのね」

「そうしてたんだ、二人で」

こう話す。時折月美を見ながら。

最終話 空に星が輝く様にその八

「さつきはさ」

「そうなの。電車ね」

「佐藤も行ってみたらどうかかな」

陽太郎は微笑んでだ。星華に話した。

「中々楽しいかったしさ」

「そうね。それじゃあね」

星華もだ。笑顔で陽太郎のその言葉に頷いた。

そうしてだ。そのうえでこう言ったのだった。

「今度は電車に乗るわ」

「ジェットコースターとはまた違って。ゆったりとしていてさ」

「風景見てね」

「そういうのもいいからさ」

「わかったわ。それじゃあね」

星華は決めた。次は電車に乗ることにしたのだった。

そうしてだ。横にいる天道にだ。笑顔で話した。

「じゃあ次はね」

「うん、電車に乗ろうね」

「この電車って子供向けで小さくてね」

街を走っている様な電車ではない。窓もなくただ覆いがあるだけだ。だが遊園地のあちこちを周リだ。その景色を見せるもので人気があるものの一つだ。

星華は今度はそこにだ。天道を誘ったのだった。

「それでもいいかな」

「いいよ」

天道も微笑んで答えた。

「じゃあ次はね」

「そこで。ゆつくりとね」

「そうしようね」

二人は決めた。そしてだ。

今度は星華からだ。陽太郎に顔を向けてだ。そのうえでこう話した。

「じゃあそつちに行くから」

「ああ、それじゃあな」

「それであんた達はどうするの？」

「ジェットコースターに乗るよ」

そうするというのだった。

「月美とな」

「うん、じゃあそつちはそれでね」

そしてだ。星華は曇りのない笑顔になってだ。二人に告げた。今度は二人に対してだった。

「仲良く。楽しんできてね」

「私もですか」

「そうよ。二人でいるからね」

それでだ。月美にも述べた。

「だからね」

「それでなんですか」

「私達も二人だし」

星華は自分達もだと話した。天道と二人だというのだ。

「二人で楽しんでくるわ」

「わかりました」

月美は穏やかな笑みで星華に答えた。

「それじゃあ」

「じゃあね。またね」

星華と月美は同じ笑顔になっていた。そうしてだった。

二人はそれで終わった。そしてだ。

今度はだ。星華は陽太郎に顔を向けてだ。最後に話した。

「じゃあね。またね」

「ああ、またな」

一言でのやり取りだった。そのうえで別れた。お互いに笑顔でだ。笑顔で別れてだ。そのうえで。

天道にだ。こう話した。

「じゃあ今からね」

「友達？」

天道はその星華にこう述べた。

「あの二人。確か」

「うん、三組の斉宮とね」

そしてもう一人は誰か。星華は述べた。

「四組。うちのクラスのね」

「ああ、四組の子なんだ」

「うん。西堀さんっていうの」

その名前を話した。

「いい娘よ」

「あの二人もだね」

「そうよ。付き合ってるのよ」

こう話したのだった。

「私達と同じね」

「そうだね。同じだね」

二人でだ。そのことを話す。そしてだった。

天道はだ。今度はこう言った。

「それだけね」

「それで？」

「三組の彼、斉宮だけれど」

「うん、剣道部よ」

「佐藤さんと同じ中学だったっけ」

こう話すのだった。そのことをだ。

「そうだったよね」

「そうよ。実を言えばね」

星華は一旦その言葉を置いた。それからだった。

最終話 空に星が輝く様にその九

一呼吸置いてだ。天道に顔を向けて言った。

「あのね」

「あのねって？」

「正直に言うけれどね」

「うん。何を？」

「私、あいつのこと好きだったのよ」

「このことをだ。話したのだった。」

「ずっとね。好きだったのよ」

「そうだったんだ」

「そうなの。けれど今はね」

「何ともないんだ」

「終わったから」

それだだというのだ。いいというのであった。

「もうね」

「終わったんだね」

「そうよ、終わったの」

陽太郎への恋はだ。そうだというのだ。

「だからいいの」

「そうなんだ。いいんだ」

「今は」

天道の顔を見続けていた。そうしての言葉だった。

「天道君がいるから」

「僕が」

「ええ。二人で行こう」

「電車にね」

「そうしよう」

こう話してだった。二人でだった。

星華はその電車に乗った。そしてそれからもだった。

二人で遊園地を巡った。そこを出た時には夜になっていた。その夜の中でだ。二人はまた話していた。

「今日は楽しかったね」

「そうね」

今日のことを振り返っての話だった。

「気付いたらこんな時間になってね」

「お家の方大丈夫？」

天道は星華を気遣って言うてきた。

「遅くなっただけれど」

「うん、大丈夫よ」

星華は微笑んでそれはいいと答えた。

「もう親には話してあるから」

「今日のこと？」

「ええ。それと」

「それと？」

「天道君のこともね。彼氏がいるっていうのはね」

「もうお話してるんだ」

「そうなの」

こう彼に話すのだった。

「そうしてるの。御免なさいね、先に話したわ」

「いいよ、それはね」

天道はにこりと笑ってだ。それはいいというのだった。

「けれどご両親はそれでいいっていうんだね」

「ええ、いいってね」

「そう。だったらいいよ」

「それどころかお父さんもお母さんも喜んでくれてね」

にこにこしてだ。星華は天道にこのことを話していく。

「それで私にもやっと彼氏ができたってね」

「喜んでくれてるんだ」

「ええ、そうなの」

「こう話すのだった。」

「特に妹がね」

「ああ、そういえば妹さんいたんだっけ」

既にこのことは少し聞いていてだ。彼も知っているのである。

「そうだったよね」

「そうなの。それでね」

「それで？」

「今日もね。楽しんでこいってね」

「妹さんが言ってくれたんだ」

「そうなの。いい妹よ」

星子のことをだ。こう話すのだった。

「来年うちの学校に行くんだって今から勉強してるし」

「ああ、受験生なんだ」

「頭いいしね。絶対に受かるわよ」

成績優秀な妹のことをだ。明るく、そして少しばかり誇らしげなものを入れて天道に話した。そうしてその話をさらに続けるのだった。

「それで部活もね。同じ女子バスケット部にね」

「ふうん、姉妹でね」

「中学でもそうだったしね。高校でもね」

「仲いいんだ」

「そう思うわ。私達仲いいと思うわ」

星華はにこにことして話していく。

最終話 空に星が輝く様にその十

「ずっと一緒にいたいって思ってるのよ」

「本当に仲いいんだね」

「ええ。それにしても」

ここだ。星華はふと上を見上げた。そこには澄み渡った、琥珀の夜空があった。そこには今日も無数の星達が瞬いていた。

その星達を見ながらだ。星華は彼に言った。

「今日もね」

「今日も？」

「お星様が奇麗ね」

こう彼に言うのだった。

「とてもね」

「あっ、そうだね」

彼は星華に言われて気付いた。その夜空のことを。

確かに。雲一つなくて

「私お星様好きなの」

星華はその夜空を見上げながらまた天道に話した。

「こうしてね。見ることがね」

「そうなんだ」

「そうなの。こうして見ているだけで幸せになれるから」

また話す。星達を見るその目もまただ。星の瞬きを見せていた。

そしてその瞬きをだ。天道に向けた。そのうえでの言葉だった。

「ねえ。よかったらね」

「一緒にだね」

「ええ。一緒に見ない？」

こう彼に言うのだった。

「お星様ね」

「うん、僕でよかったら」

天道もだ。優しい笑みで星華の言葉に答えた。

「一緒にね」

「こうしてお星様と一緒に見るとね」

「幸せになれるんだね」

「そうなの。それ、友達に教えてもらったの」

他ならぬ椎名だ。ここでも彼女のことを思い浮かべるのだった。

「そのことをね」

「そうだったんだ」

「じゃあ。一緒に見よう」

星華はまた彼に言った。

「今夜はね」

「今夜だけ？」

しかしだった。彼はここで星華にこう言ってきた。

「それって今夜だけかな」

「えっ、それってどういうこと？」

「だから。今夜だけじゃなくてさ」

彼からだった。星華に話すのだった。

「これからもだよね」

「これからも」

「ええ。一緒にいよう」

こう話すのだった。

「そうしよう」

「そう。それだったら」

「うん、今夜だけじゃなくてね」

「これからもね」

「二人でね」

話していく。そうしてだった。

星華はだ。夜空を見上げながらだ。前に踏み出した。天道も同じだ。

そしてその夜空の星の一つを見てだ。今度はこんなことを言った。

「ずっと。ずっとね」

「うん、ずっとね」

「私一緒に見たいから」

「ただ。天道に話すのだった。」

「お星様ね。幸せをね」

「見たいんだね」

「ええ、一緒にね」

「見ようね。じゃあ」

「沢山ある幸せ。皆が持っている幸せ」

「星華の心はその夜空の中にあつた。彼と共に。」

「そのうちの一つをね」

「二人で。一緒に」

「ずっと見ていこうね」

これまでの多くのことも思い出しながら。星華は今その星を天道と共に見ていた。二人のこれからのことを思いながら。そのうえで見ているのだった。

空の星達はそんな二人を照らしていた。太陽と比べて眩くはない。だが優しい光でだ。二人を照らしているのだった。

最終話 完

空に星が輝く様に 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5145n/>

空に星が輝く様に

2011年3月25日01時25分発行